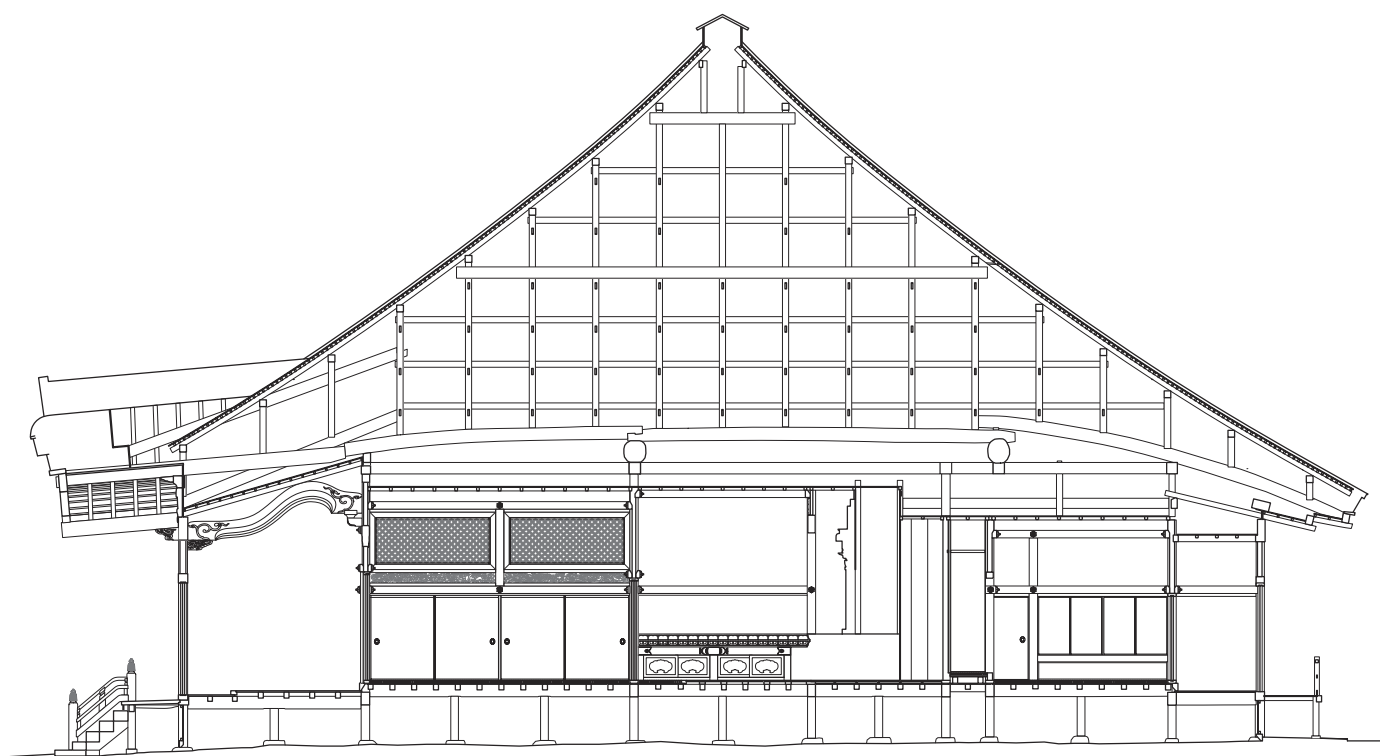


高野町の歴史的建造物



2023年3月
高野町教育委員会

高野町の歴史的建造物

2023年3月
高野町教育委員会

刊行にあたって

高野町は、和歌山県の北東部にあり、大自然に囲まれ、平安時代弘仁7年（816）より弘法大師空海が修行の場として開いた真言密教の聖地高野山を中心とする町であり、空海による開創以来の長い歴史の中で育まれた貴重な文化財が数多く存在しており、その一部は2004年には「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産に登録されています。

建造物についてみると、高野町にみられる文化財建造物は、国宝が金剛峯寺不動堂と金剛三昧院多宝塔の2件、重要文化財は、金剛峯寺大門をはじめとして11件、県指定文化財は、常喜院校倉をはじめとした5件、国登録有形文化財は高野山大学図書館をはじめとした13件となっておりますが、この他にも文化財としての高い価値を持つ堂宇等の歴史的建造物は数多く存在します。これらの歴史的建造物が今回の学術調査によって改めて評価されたことは誠に喜ばしいことです。

この調査による歴史的建造物の再評価を世界文化遺産の価値の向上、高野町のまちづくりに活かし、先人が残してくれた高野町の歴史的景観の保護と活用を一層進めていきたいと思っております。

最後になりましたが、本調査に深いご理解と御協力をいただきました関係各位、現地調査を引き受けてくださった奈良文化財研究所、和歌山県文化財センターの調査員の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和5年3月

高野町長 平野 嘉也

目 次

刊行にあたって

目 次

第1章 調査の概要	1
1 調査の目的	1
2 調査に至る経緯	1
3 調査の方法	2
4 調査の体制と経過	4
5 報告書の作成	4
第2章 高野町の歴史	6
1 古代・中世の高野山	6
2 近世の高野山	7
3 近代の高野山	9
第3章 各地区の概要	11
1 悉皆調査の概要	11
2 各地区解説	12
第4章 高野山地区の寺院	43
1 本中院谷	43
2 谷上院谷	47
3 西院谷	48
4 南谷	52
5 小田原谷	56
6 往生院谷	59
7 蓮花谷	62
8 千手院谷	66
9 五之室谷	69
10 一心院谷	72
11 奥之院	74
第5章 寺院建築個別解説	86
1 個別調査の概要	86
2 金剛峯寺	87
3 六時鐘楼	145
4 壇上伽藍	150
5 勸学院	205
6 徳川家霊台	214
7 金輪塔	220
8 女人堂	229
9 奥之院	240
10 円通寺	259
11 宝城院	259
12 西南院	269
13 常喜院	278
14 不動院	284
15 金剛三昧院	291
16 普賢院	295
17 普門院	302
18 観音堂	310
19 蓮華定院	314
第6章 高野山の寺院建築の特質	327
1 構造・意匠の特質	327
2 虹梁絵様の変遷	333
3 高野山における大工と諸職人の活動	339
4 壇上伽藍御影堂・山王院拝殿にみる旧規の継承と展開	345
5 高野山の棟札の特質	351
第7章 総 括	357
1 まとめ	357
2 歴史的建造物の保護について	360

図 版

高精細写真
史料
棟札・墨書等

第1章 調査の概要

1 調査の目的

所在地 高野町は和歌山県東北部に位置し、南西にかつらぎ町、北に九度山町・橋本市、南東に奈良県が接する山間の町で、東西24km、南北12km、総面積137.0km²の町域をもつ。町の中央に位置する高野山は、標高約800mに位置する盆地状平坦地で、東西6km、南北3kmの広がりをもち、中央に高野山真言宗の総本山金剛峯寺が所在する。高野山の周囲には、山の斜面や谷川に沿って19の集落が所在する。

町へは、南海高野線が極楽橋駅まで延び、極楽橋駅・高野山駅間は鋼索線（ケーブルカー）で結ばれている。また国道として、西北部を北東から南西に370号線、西から延び東進し、大門で折れ、南進する480号線、東北部から南へ通る371号線が通る。

文化財建造物 空海開創以来の歴史をもつ高野山は、度重なる火災の被害にあいながらも、国宝2棟、重要文化財15棟、県指定13棟、国登録13棟が文化財として指定・登録されている（表1）。

2 調査に至る経緯

高野町における歴史的建造物の調査のうち、県単位で実施されたものに、民家緊急調査、近世社寺建築緊急調査、近代化遺産（建造物）総合調査、近代和風建築総合調査がある。

民家緊急調査 民家緊急調査は昭和42年度（1967）におこなわれ、高野町からは5棟が1次調査物件となり、このうち1棟が3次調査物件となった（東富貴の中本主税家住宅）^{注1}。

近世社寺建築緊急調査 近世社寺建築緊急調査（以下、近世寺調査と略称する。）は、昭和63年度（1988）から平成2年度（1990）におこなわれ、報告書では建立が中世に遡る遺構として、女人堂と奥之院御廟の2棟が、近世の遺構として26棟が報告されている^{注2}。近世寺調査の調査対象は、すべて今回の調査でも対象とした。

なお、宝暦7年（1757）建立の光台院天神社と稲荷



図1 高野町の位置

社、東富貴の名迫明神社本殿2棟は、今回の調査をおこなった時点で既に失われていた。また、17世紀中期の建立とみていた花坂の鳴川大明神本殿は、大正期建立、18世紀後期建立とみていた西ヶ峰の丹生神社本殿2棟は昭和後期建立の擬古作とみた。

近代化遺産（建造物等）総合調査 近代化遺産（建造物等）総合調査は、平成16年度（2004）から平成18年度（2006）におこなわれ、高野町からは6件が1次調査対象となり、いずれも詳細調査の対象となった（高野山駅舎、紀伊神谷駅舎、紀伊細川駅舎、細川変電所、高野山図書館、高野森林鉄道）^{注3}。

近代和風建築総合調査 近代和風建築総合調査は、平成18年度（2006）から平成21年度（2009）におこなわれ、高野町からは12件が1次調査物件となり、このうち12件（うち1件は、高野山の塔頭寺院を一括で扱う。）が2次調査物件となった^{注4}。

その他の調査・研究 個別の建造物調査としては文化財建造物の修理に際した報告があり、重要文化財普賢院四脚門の修理工事報告では、旧行人方東照宮に関わる可能性がある遺構として、普賢院本堂、普門院本堂、普門院表門の3棟を取りあげている。この他にも、藤川昌樹と中野茂夫による都市史研究や、鳴海洋博による寺社建築に関する研究がある^{注5}。

今回の調査に至る経緯 平成16年（2004）に、史跡金剛峯寺境内が「紀伊山地の霊場と参詣道」の構成

資産として世界遺産に登録されたことを契機に、平成21年（2009）に伽藍地区・本山地区の環境整備に関する基本計画が取りまとめられた^{注6}。また、平成31年（2019）には、奥之院地区に所在する大名墓の調査報告がなされた^{注7}。

こうした状況を踏まえ、高野町では地域計画策定に向けて、町内に所在する歴史的建造物を総合的に把握するための調査を計画した。初年度となる2019年度の悉皆調査は奈良文化財研究所および和歌山県文化財センターに、翌2020年度から2022年度の個別建造物の調査は奈良文化財研究所に委託した。

3 調査の方法

悉皆調査 町内に所在する歴史的建造物の総合的把握のため、調査初年度となる2019年度は悉皆調査をおこなった。高野山地区の寺社建築については、奈良文化財研究所と和歌山県文化財センターが分担して調査した。高野山地区の寺社建築以外および高野山地区以外の歴史的建造物は、奈良文化財研究所が調査した。

寺社建築は、すべての建造物について、配置図および目録を作成した。それ以外の建造物は、昭和前

表1 高野町の文化財建造物

指定	建物名	建立年代	西暦	指定年	備考
国宝	金剛峯寺不動堂	鎌倉時代	13世紀	明治32年、昭和27年	明治41年（1908）、一心院谷より現地へ移築された。
国宝	金剛三昧院多宝塔	貞応2年（1223）		明治32年、昭和27年	
重文	金剛峯寺大門	宝永2年（1705）		昭和40年	
重文	金剛峯寺山王院本殿			昭和40年	
	丹生明神社	大永2年頃（1522）頃			
	高野明神社	大永2年（1522）			
	総社	大永2年（1522）			
重文	金剛峯寺奥院経蔵	慶長4年（1599）		大正11年、昭和38年	
重文	上杉謙信霊屋	江戸前期	17世紀	昭和40年	清浄心院所有。
重文	佐竹義重霊屋	慶長4年（1599）		昭和40年	清浄心院所有。
重文	松平秀康及び同母霊屋			昭和40年	蓮花院所有。
	秀康霊屋	慶長12年（1607）			
	秀康母霊屋	慶長9年（1604）			
重文	徳川家霊台			大正15年	旧聖方東照宮。
	家康霊屋	寛永18年（1641）			
	秀忠霊屋	寛永10年（1633）			
重文	普賢院四脚門	寛永頃（1624～1643）頃		昭和40年	旧行人方東照宮。
重文	金剛三昧院経蔵	鎌倉時代	13世紀	大正11年、昭和38年	
重文	金剛三昧院四所明神本殿	天文21年（1152）		昭和40年	
重文	金剛三昧院客殿及び台所	江戸前期	17世紀	昭和40年	
県指定	金剛峯寺			昭和40年	
	大主殿	文久2年（1862）			
	奥書院	文久2年（1862）			
	経蔵	延宝7年（1679）			
	鐘楼	元治元年（1864）			
	真然堂	寛永17年（1640）			
	護摩堂	文久3年（1863）			
	山門	延宝8年（1680）			これまで文久2年（1862）再建とみていた。
	会下門	19世紀中期			
	かご堀	文久3年（1863）			
県指定	常喜院校倉	寛永8年頃（1631）頃		昭和38年	
県指定	不動院書院	桃山時代	16世紀後期～17世紀前期	昭和38年	
県指定	（西南院）五輪塔	鎌倉時代	13世紀	昭和40年	
県指定	（遍照光院）五輪塔	鎌倉時代	13世紀	昭和40年	
国登録	高野山霊宝館	大正9年（1920）		平成10年	設計：大江新太郎・奥本吾市。
	玄関・北廊・中廊				
	祭雲殿				
	放光閣				
	宝蔵				
	南廊及西廊				
国登録	橋本警察署高野幹部交番	大正10年（1921）		平成17年	設計：松田茂樹。
国登録	和合庵			平成20年	大工：堀野久吉。
	主屋	大正15年（1926）			
	土蔵	大正15年頃（1926）頃			
	堀	大正15年頃（1926）頃			
	門	大正15年頃（1926）頃			
国登録	南海電気鉄道鋼索線高野山駅駅舎	昭和3年（1928）		平成17年	
国登録	高野山大学図書館	昭和4年（1929）		平成10年	設計：武田五一、施工：清水組。
国登録	珠数屋四郎兵衛店舗	昭和8年（1933）		平成17年	

期以前とみられる歴史的建造物について、配置図および目録を作成し、外観の写真を撮影した。目録は、通番号、建造物名称、構造形式、建立年代を示した。

調査は、通常望見できる範囲の外観におこなった。対象となった建物は2,574棟である。建物の集密度合いなどにより増減があるが、1～2名1組で、1日あたり約100棟を把握・記録した。簡易的な調査であるため、建立年代の判断は翌年度以降の調査や新たに把握した情報により適宜修正した。

個別調査 悉皆調査の成果を受けて、高野町の歴

史を考える上で重要な建造物について、2次調査をおこなった。2次調査では、平面実測、所見作成、写真撮影をおこなった。2020年に、壇上伽藍および金剛峯寺、2021年度に周辺寺院を主たる対象として調査をおこなった。2次調査を受けて、2022年度には、重要と考えられる建造物について、断面実測をおこなった(図2)。高精細写真撮影は、杉本和樹(西大寺フォト)がおこない、鎌倉が補佐した(図3)。

史料調査 個別調査に際しては、各寺院において適宜、史料調査を実施した。なかでも、金剛峯寺所

表2 調査の体制(特記なきは、2023年3月1日時)

氏名	所属	職名
奈良文化財研究所		
大林 潤	文化遺産部	建造物研究室長
島田敏男	文化遺産部建造物研究室	特任研究員
林 良彦	文化遺産部建造物研究室	客員研究員(～2020年3月)
鈴木智大	都城発掘調査部	主任研究員
前川 歩	都城発掘調査部	主任研究員(～2022年3月)、2022年4月～、畿央大学講師。
福嶋啓人	都城発掘調査部遺構研究室	研究員
目黒新悟	都城発掘調査部遺構研究室	研究員
山崎有生	都城発掘調査部遺構研究室	研究員
高野 麗	都城発掘調査部遺構研究室	研究員
鎌倉 綾	企画調整部写真室	技能補佐員
和歌山県文化財センター(所属・職名は2019年3月31日時)		
寺本就一		参与
多井忠嗣	文化財建造物課	課長
結城啓司	文化財建造物課	副主査
大給友樹	文化財建造物課	技師
和歌山県教育委員会(指導・助言)		
川戸章寛	生涯学習局文化遺産課	班長
御船達雄	生涯学習局文化遺産課	主任
仁科 薫	生涯学習局文化遺産課	技師
文化庁(指導・助言)		
田中禎彦	文化財第二課	主任調査官
高野町教育委員会(事務局)		
西岡 敬		教育長
田中宏人		教育次長
植田達夫		次長補佐
木本誠二	社会教育係	係長(事業担当)
飯野尚子		主査
西田麻衣	社会教育係	主査
川谷碧惟	社会教育係	会計年度任用職員



図2 実測調査風景



図3 高精細写真撮影風景

蔵史料は高野山霊宝館において管理されている。歴史的建造物に深く関わるものとして、棟札および建築指図が多く保管されていることを確認し、調査を実施した。棟札については、写真撮影をおこなった。建築指図については、限られた時間のなかで十分な調査には至っていないが、高野山霊宝館より撮影画像を提供いただき、分析をおこなった。高野山霊宝館保管の金剛峯寺所蔵指図のうち、今回の調査物件について考察する上で重要なものは本書巻末の史料編に収録した。なお大型の図面については、分割して撮影した画像を adobe 社 PhotoShop および Illustrator において簡易的に合成して掲載した。

4 調査の体制と経過

調査に際しては、事務局を高野町教育委員会に設置し、奈良文化財研究所および和歌山県文化財センターが分担して調査をおこなった。各機関の参加者を表に示す(表3)。また適宜、和歌山県教育委員会および文化庁に指導・助言を仰いだ。

5 報告書の作成

本報告書は、鈴木智大が編集した。図面の作成は、西尾尚子がおこなった。原稿の執筆は以下の通りに分担しておこなった。なお、各原稿の末尾にも執筆者名を示した。

第5章 大林 潤・鈴木智大・福嶋啓人・目黒新悟
・山崎有生・高野 麗により分担

第6章 4 山崎有生・鈴木智大、5 高野 麗

第7章 2 木本誠二

史料(棟札・墨書等) 翻刻 高野 麗

上記以外、鈴木智大。

本書の作成にあたっては、多くの文献を参照した。このうち主要な文献を以下に掲げる。

史料

- 『新校 高野春秋編年輯録』(名著出版、1981年)。
『紀伊国名所図会 三編 四之巻上・下・五之巻・六之巻 高野山』(1838年)。
『紀伊続風土記 高野山之部』(1839年)、『続真言宗全書第36～40』1978～1983年)。
『高野山名所図会』(1904年)。

『高野山古絵図集成』(清栄社、1983年)。

『高野町史別巻 高野町の昔と今』(高野町、2014年)。

金剛峯寺所蔵史料

『高野山寺院明細帳』(金剛峯寺所蔵、以下適宜、『寺院明細帳』と略称する)。

『高野山名刹誌』(金剛峯寺所蔵、以下適宜、『名刹誌』と略称する)。

金剛峯寺刊行の記録

『高野山開創壹千百年記念大法会記録』(高野山金剛峯寺、1916年)。

高野山千百年記念大法会事務局 編『高野山千百年史』(金剛峯寺、1942年)。

金剛峯寺御遠忌事務局 編『弘法大師老千年御遠忌紀要』(金剛峯寺、1943年)。

『弘法大師御入定千五百年御遠忌大法会紀要(記録編)』(高野山真言宗総本山金剛峯寺、1987年)。

『高野山開創千二百年記念大法会紀要』(高野山真言宗総本山金剛峯寺、2017年)。

高野山全般

松長有慶『高野山』(岩波書店、2014年)。

建造物調査報告

『和歌山県の地名』(平凡社、1983年)。

『和歌山県の中世未指定社寺建築』(奈良国立文化財研究所、1990年)。

『和歌山県の近世社寺建築』(和歌山県教育庁文化財課、1991年)。

『和歌山県の近代和風建築』(和歌山県教育委員会、2010年)。(鈴木智大)

謝辞

本調査においては、建造物の所有者の方々、地元住民の方々をはじめ多くの方々にお世話になった。また史料調査にあたっては、高野山大学・坂口太郎氏、高野山霊宝館・研谷昌志氏に、ここに記して、深く御礼申し上げる。

注

- 1 『和歌山県の民家』(和歌山県教育委員会、1969年)。
- 2 『和歌山県の中世未指定社寺建築』(奈良国立文化財研究所、1990年)、『和歌山県の近世社寺建築』(和歌山県教育庁文化財課、1991年)。
- 3 『和歌山県の近代化遺産』(和歌山県教育委員会、2007年)。
- 4 『和歌山県の近代和風建築』(和歌山県教育委員会、2010年)。

表3 調査の経過

調査日／参加者／主な調査対象等
2019年度（1次調査）
奈良文化財研究所
2019年9月11日 島田、12日 島田
10月2日 島田・鈴木、3日 島田、15日 島田、16日 島田・鈴木、28日 鈴木・目黒、30日 鈴木・山崎、31日 島田
11月5日 島田・鈴木、15日 鈴木・目黒、22日 島田
12月3日 林・鈴木・目黒・山崎、16日 島田・鈴木
2020年3月11日 鈴木、12日 鈴木、30日 島田・鈴木／現地協議（和歌山県 川戸）
和歌山県文化財センター
2019年9月11日 寺本
10月9日 寺本・多井・結城・大給、10日 結城、16日 多井、18日 結城
11月1日 寺本
12月6日 寺本、16日 寺本
2020年3月30日 寺本／現地協議（和歌山県 川戸）
2020年度（2次調査）
2020年11月25～27日 鈴木・福嶋・山崎・星野（25・26日 奈文研運営費交付金）／金剛峯寺
12月15～17日 大林・鈴木・目黒・山崎・星野（16・17日 奈文研運営費交付金）／壇上伽藍
21～23日 鈴木・前川・目黒／徳川家霊台・金輪塔・女人堂・勸学院
2021年3月16～18日 鈴木・福嶋・目黒／徳川家霊台・金輪塔・金剛峯寺・壇上伽藍・勸学院
29日 鈴木／現地協議（和歌山県 川戸）
2021年度（2次調査）
2021年7月27～29日 鈴木・前川・山崎／西南院・円通寺・普賢院・奥之院（護摩堂・井伊直政霊屋）
8月24～26日 大林・鈴木・山崎／宝城院・常喜院・金剛三昧院・普門院・西南院
10月5・6日 島田（5日）・鈴木・福嶋／不動院・観音堂・蓮華定院・奥之院（密厳堂）
11月24日 鈴木・目黒／普門院・観音堂・奥之院（密厳堂）
12月2・3日 鈴木／現地協議（文化庁 田中、和歌山県 川戸・御船）
2022年3月4日 鈴木・目黒／普門院・普賢院・円通寺
18日 鈴木・目黒／金剛峯寺・観音堂・奥之院（密厳堂）
24日 鈴木／現地協議
2022年度（3次調査・高精細写真撮影）
2022年4月25～27日 鈴木・目黒・山崎・鎌倉・杉本／壇上伽藍
6月29日～7月1日 鈴木・目黒・山崎・鎌倉・杉本／金剛峯寺・勸学院・壇上伽藍
8月29～31日 鈴木・山崎・高野・鎌倉・杉本／徳川家霊台・金輪塔・女人堂・奥之院・円通寺・金剛峯寺・壇上伽藍、現地協議（和歌山県 御船・仁科）
10月21・22日 鈴木・山崎・鎌倉・杉本／金剛峯寺・奥之院・高野山霊宝館（史料調査）
11月22・24日 鈴木・目黒（22日）・山崎（24日）・杉本／円通寺・金剛峯寺・高野山霊宝館（史料調査）

- 5 藤川昌樹・中野茂夫「近世末期高野山における谷の構成—高野山の都市史研究 その1—」（『日本建築学会学術講演梗概集』1999年、177～178頁）。
- 中野茂夫・藤川昌樹「近世末期高野山における子院の建築—高野山の都市史研究 その2—」（『日本建築学会学術講演梗概集』1999年、179～180頁）。
- 藤川昌樹「中近世高野山における「谷」の構成と変遷」『建築史の空間—関口欣也先生退官記念論文集』（中央公論美術出版、1999年、51～68頁）。

- 鳴海祥博「高野山の古建築」（『霊宝館だより』97～、2011年～。一部は、鳴海祥博『和歌山県の古建築をたずねて』ウイング出版部、2021年に収録）。鳴海祥博「丹生都生比売神社の建築と天野番匠」『和歌山県立博物館研究紀要』10（和歌山県立博物館、2003年）。
- 6 『史跡金剛峯寺境内伽藍地区・本山地区環境整備 基本計画書』（高野山真言宗総本山金剛峯寺、2009年）。
- 7 『史跡金剛峯寺境内（奥院地区）大名墓総合調査報告書I』（高野町教育委員会、2019年）。

第2章 高野町の歴史

本章では、高野山を中心に高野町の歴史を概観する。青巖寺・興山寺・大徳院の成立と、金剛峯寺の成立を画期として、中世以前、近世、近代以降の3時期に分けて述べる^{註1}。

1 中世以前の高野山

空海による開創と伝説 空海開創以前の高野山については、行基や役小角による開創説がある（「高野山通念集」）。いずれも高野山と修験者の関係を説くもので、中世以降に語られるようになる。延暦23年（804）から大同元年（806）にかけて入唐した空海は、帰国後、高雄山寺などに住み、弘仁元年（810）には東大寺、同2年（811）乙訓寺の別当を務めている。弘仁7年（816）に至って、高野山に修禅のための一院を営むことを上奏し（「性霊集補闕抄」）、嵯峨天皇から勅許をえる。この開創についても、空海が丹生都比命から高野山を譲渡されたとする説や（「御遺告」）、犬を連れた獵師となった狩場明神（高野明神）に案内された空海が丹生都比命から譲渡されたとする説がある（「金剛峯寺建立修行縁起」）。丹生明神及び高野明神は、高野山の創立に関わるものとして壇上伽藍に祀られる（山王院本殿丹生明神社・高野明神社）。また入唐の帰路、密教移植の適地を示せと、明州から三鈷杵を投げたといひ。空海が高野山に登ると狩人に、三鈷杵が枝に掛かった松に案内されとする説もあり、これが御影堂前の松であるという。

弘仁8年（817）には、弟子の実恵・泰範らを派遣し、翌9年（818）には空海自らが高野山に登った。しかし同11年（820）には京都に帰ることとなる。空海は中軸に中門と金堂を配し、その背後に大塔および西塔を胎蔵界・金剛界として配するという伽藍配置の構想を持っていたようである（承和元年（834）「造塔知識文」^{註2}）。造営に際しては山麓に政所を設けたが（現・慈尊院）、10年後になっても仁王会が政所で修しており、伽藍の建設は芳しくなかったことがうかがえる。

空海は、弘仁12年（821）には別当として讃岐・万

濃池を修築、同14年（823）には東寺を給預され、天長5年（828）東寺の傍に綜芸種智院を創設する。しかし、同9年（832）に至って東寺を実恵に、高雄山寺を真済に託し、空海自身は高野山で過ごすことが多くなり、万灯会を山上で修した。この万灯会願文に金剛峯寺の名があらわれる。同10年（833）金剛峯寺を真然に託し、実恵を後見と定めた。承和2年（835）正月、年分度者3名が真言宗に割り当てられ（『類聚三代格』）、同2月金剛峯寺が定額寺として定められるなか（『続日本後紀』）、同3月空海は入定した。

真然による伽藍造営 金剛峯寺の伽藍造営は真然に引き継がれたが、確固たる経済的な基盤がないなか、壇上伽藍に根本大塔、西塔、真言堂2宇を完成させた（「金剛峯寺建立修行縁起」）。そして、高雄山神護寺、東寺にならって、春の修学会と秋の鍊学会の伝法二会を開催するまで至った。

康保5年（968）の「金剛峯寺建立修行縁起」によれば、金剛峯寺の建物として、多宝塔（大塔）、講堂（金堂）、僧坊、真言堂2宇、多宝塔（西塔）、鐘堂、経蔵、食堂、御影堂、中門、陀羅尼幢2基、奥院塔があげられている。

観賢と弘法大師信仰 延喜21年（921）東寺長者・観賢からの申請により弘法大師の諡号を賜り、この頃から弘法大師信仰が高まりを見せる。10世紀中ごろ、座主・寛空によって初代検校に任ぜられた雅真は、天野の豪族に接近し、復興を推進した。奥院御廟に丹生社を勧請している。

天曆6年（952）雷火により奥院御廟を焼失したが、雅真により復興され、正暦5年（994）雷火により大塔・金堂・真言堂・僧坊などを焼失し、祈親上人・定誉らにより復興されている。なお、雑用を務める半僧半俗の役僧は行人とよばれていたが、祈親上人のころから、行人と後述する聖が分化しはじめ、行人は寺院の経済面にも関与し、聖は浄土信仰と念仏と納骨を司ることとなった。

浄土信仰と皇族・摂関家 9世紀中ごろの比叡山に端を発する浄土信仰は、高野山にも及び、聖がその

中心を担った。やがて、小野・曼荼羅寺の仁海が、高野山が弥勒菩薩の浄土であるとし、弥勒菩薩が下向するまで、弘法大師が奥院御廟で入定していると説くようになった。治安3年(1023)仁海による勧誘によって藤原道長が高野山に登ると、摂関家や上皇の参詣が増え^{注3}、これにともない荘園寺領も増え、経済的な基盤となり、伽藍の復興が進んだ。法親王では、康平2年(1059)性信(大御室)が高野山に登り、灌頂院を建立し、留まっている。康和5年(1103)白河上皇の荘園寄進により、大塔の落慶供養がおこなわれ、大治2年(1127)白河院御願として東塔が、鳥羽院御願として西塔が建立される。後述する通り、覚鑿が長承3年(1134)鳥羽上皇の後援により、大伝宝院と密厳院を建立している。美福門院は平治元年(1159)に六角経蔵を、また菩提心院(現・不動院)を建立する。

仁海の流れをくむ小野の成尊から小野流を伝授された明算大徳は、長久元年(1040)、高野山の中院(現・龍光院)を中興し、中院流とよばれる真言密教の法流の一派を形成し、現在に至るまで伝授されるようになった。

聖と別所 浄土信仰の高まりとともに、11世紀後半から12世紀中頃にはその他の谷に数か所の別所が建てられ、別所聖人とよばれる集団を形成し、全国を遊行することで、高野山の堂塔建立のための勧進活動、唱導活動を推進した。11世紀後半には南別所が、12世紀には中・小田原・五之室・千手院・東・往生院の各別所が成立している。高野山の寺院群の広がり、この頃すでに現在と同等に及んでいたものとみられる^{注4}。

覚鑿と大伝宝院 12世紀初め、覚鑿は真言教学の復興、修法の一元化、東寺支配からの脱却などの改革を推し進めた。大治5年(1130)鳥羽上皇の後援を得て、高野山に小伝法院を開き、36名の学侶(学問・儀式に専心する僧)を置くことを定める。長承元年(1132)には、大伝法院を真然の廟所に、念仏堂である密厳院を往生院谷に創設し、真言教学を討論する大伝法会を開いた。

長承3年(1134)には官符によって大伝法院と密厳院が御願所となり、座主が置かれ、それぞれ所司と

定額僧が補任された。大伝法院の初代座主には、覚鑿が就任し、第2世座主に同門の真誉が続いた。これによって高野山には、金剛峯寺と大伝法院の2人の座主が存在することになった。さらに醍醐寺の定海が東寺長者として金剛峯寺の座主を兼任していた際に、院宣によって定海の座主職が解かれ、大伝法院の座主が金剛峯寺の座主を兼ねることとなり、検校も覚鑿の弟の信恵にかわった。

これに反発した金剛峯寺・東寺側が、上皇に奏上した結果、保延2年(1136)覚鑿と信恵を罷免し、定海を座主に戻し、検校を真誉に変えることとなった。保延6年(1140)に至って、(大伝法)院方が源為義に伝法院守護を依頼したことを契機として、(金剛峯)寺方は伝宝院と密厳院を襲うこととなった。院方は敗れ、覚鑿は根来寺に脱出し、院方の僧700名余りがこれに従った。覚鑿は康治2年(1143)に根来の地で没した。

正応元年(1288)、大伝法院の学頭であった頼瑜が大伝宝院の寺籍を根来寺に移し、真義真言宗として展開することとなった。後に、根来寺は豊臣秀吉により討伐されたが、紀州徳川家から復興の許しを得て復興し、元禄3年(1690)に至って、覚鑿に興教大師と諡号を送られた。

平氏の盛衰 久安5年(1149)雷火により大塔を焼失した際には、保元元年(1156)平忠盛・清盛によって再建されており、有力な支援者が上皇から平氏へと移ったことが伺える。文治元年(1185)壇の浦の戦いで敗れると高野山に隠遁・出家し、庵を営み、念仏者となったものも多くあらわれた。

鎌倉時代の高野山—円通寺と金剛三昧院 鎌倉時代には、東大寺で三論宗を学んだ明遍が蓮華三昧院を開き、俊乗房重源が新別所として円通寺を中興した。

建暦元年(1211)には北条政子が、源頼朝・頼家・実朝の菩提を祈り、禅定院を営み、栄西を招いて落慶法要をおこない、金剛三昧院として退耕行勇を開山として多宝塔および経蔵を建立した。金剛三昧院は、密教・禅・念仏の三教兼学の道場として、高野山の寺院でも特殊な地位を保ち栄えた。弘安3年(1280)には、金剛三昧院内に勧学院と勧修院が創設され、僧侶の学問研鑽の道場とされた。勧学院は文

保2年(1318)に後宇多法皇の院宣によって勅願所となり、伽藍の中に再興された。

室町時代の真言教学—無量寿院と宝性院 室町時代には真言教学が深められ、無量寿院の長覚と宝性院の宥快が多く著書をなした。それぞれ寿門、宝門として、互いに論議を交わし、真言教学の樹立に務めた。「応永の大成」と呼ばれる。応永14年(1407)に寿門の長誉と宝門の快全が始めた堅精の論議は現在まで継承されている。

学侶と行人の争い 室町時代以降、行人が経済的な事務に携わるようになり、次第に学侶と対抗する力を得るようになった。両者の抗争に武家も加わり、戦火や放火で建物を焼失した。とくに永正18年(1521)の大火では、壇上伽藍や周辺の寺院を焼失し、その後は御影堂が急造されたのみであったという。

織田信長による包囲と豊臣秀吉への降伏 織田信長に謀反を企てた荒木村重の家臣が高野山に逃げ込み、その捜索に来た信長の家臣を行人が討ったに端を発して、信長は高野聖と高野山の僧を殺害し、高野山を取り囲むことになった。その後、天正10年(1582)、本能寺の変で信長が討たれたが、続いて豊臣秀吉にも帰順が求め、天正13年(1585)高野山を包囲した。これに対し、高野山は客僧の木食応其を仲介役として派遣し、無条件で降伏することとなった。

2 近世の高野山

木食応其と青巖寺・興山寺 秀吉は高野山の降伏後、金堂の再建を企図したが、高野山の所領に関して不正が発覚し、結果、寺領のすべてを奪うこととなった。その際にも応其が奔走し、二万一千石を回復したが、うち六千五百石は応其の働きを認め行人に与えられた。

天正18年(1590) 応其は秀吉の帰依を受けて、現在の金剛峯寺の西半にあたる地に興山寺を建立した。秀吉が奏請し、後陽成天皇の勅額が掲げられた。応其に続く2世には行人方の勢誉が就き、以降、江戸時代を通じて行人方の中心寺院となった。

つづく文禄2年(1593) 秀吉は、現在の金剛峯寺の東半、すなわち大伝法院の跡地に大政所の菩提を弔

い剃髪寺を建立した。後に青巖寺と改められ、学侶方の中心寺院となった。

徳川家と大徳院 天正8年(1580)、徳川家康は、松平家が代々、師檀関係を結んでいた五之室谷の光徳院(旧蓮華院)を再興した。家康は、文禄3年(1594)に秀吉に従い高野山に登った際に、光徳院に止宿し、大徳院に改号したという。慶長19年(1614)に聖方触頭として朱印200石が与えられ、寛永年間(1624~1644)には後山に東照宮および大徳院の御霊屋が建てられ、慶安2年(1649)には御宝前供料として新知200石が与えられ、徳川家の菩提所となった。

高野三派と高野聖断 こうして揃った青巖寺・興山寺・大徳院を中心とした学侶方・行人方・聖方の三派は、幕府から高野山に与えられる扶持米を巡り、江戸時代を通じて度々対立することとなった。各派がそれぞれ東照宮を建立するのも、対立のあらわれである。

特に学侶方と行人方の争いは、貞享3年(1686)から元禄5年(1692)にかけて高まり、その結果、行人方の多くの人々が流罪となり、多くの寺院が廃されることとなった。これを高野聖断という。これを契機とした寺院群の移転も生じることとなった。

寺檀と宿坊 平安後期にはじまる貴族による寺院建立は、やがて特定の寺院と檀越の関係として定まってゆく。建徳2年(1371)には、諸家と寺院との間に宿坊・寺檀関係が成立していたことが確認でき、室町時代以降は武家とその主体となる。特に徳川家が大徳院を菩提所として以来、諸大名は高野山に菩提所を設け、武家のみならず、その領民に至るまで寺檀関係が結ばれ、宿坊が形成される。

参詣道と女人堂 大師信仰の高まりを背景とした庶民による参詣には、江戸時代後期までは、慈尊院に発し、大門口に至る町石道が用いられたが、江戸時代末期以降は学文路から河根・作水・桜茶屋・神谷を経て不動坂口に通じる道の利用が増えるようになる。高野七口と呼ばれる登山口には、それぞれ女人堂が設けられた。女人禁制の高野山には立ち入らず、これを取り囲む尾根筋を女人道と名付け、女性はこれを巡って遥拝したという。

度重なる火災 高野山の開創以来、雷火・失火・戦

火など、様々な火災に見舞われた。江戸時代の規模の大きなものに限っても、寛永7年(1630)に壇上伽藍から青巖寺を、慶安3年(1650)に五之室谷から青巖寺を、安永3年(1774)に西院谷から壇上伽藍を、文化6年(1809)に南谷から壇上伽藍を、天保14年(1843)に壇上伽藍を焼失している。壇上伽藍や青巖寺は、徳川家などの支援を受けながら、都度、復興を遂げる。

なお、江戸期には高野山に関する体系的な著述も相次ぎ、天保9年(1838)には『紀伊国名所図会』、同10年(1839)には『紀伊続風土記』(以下、適宜『続風土記』と略す。)が刊行されている。

3 近代の高野山

三派の廃止と金剛峯寺の成立 明治元年(1868)明治政府により神仏分離が通達され、学侶方・行人方・聖方の三派が廃止された。翌2年(1869)に学侶方の青巖寺と行人方の興山寺を合併し、寺号を金剛峯寺とした。また、明治5年(1872)には、太政官布告により、女人禁制が解かれた。

行人方東照宮の解体と移築 三派の廃止をうけて、興山寺背後の山上に建っていた行人方の東照宮も廃絶した。明治25年(1892)に至って、玉垣内の建物が普門院に払い下げられたという記録がのこる(「日並記」金剛峯寺蔵)。普門院本堂・門がこれにあたりとみられる。この他にも、普賢院本堂・四脚門、常喜院校倉は、同時期に東照宮から移築されたものとみられる。普門院および普賢院は、明治12年(1879)と同21年(1888)の火災により境内を焼失していた。

火災と復興 上述のように、火災による被害は、近代に入ってもなお高野山の重大事である。金剛峯寺では明治5年(1872)に敷地の西半、すなわち旧興山寺の建物群を、壇上伽藍では昭和元年(1926)に金堂を焼失する。

周辺の寺院群の明治期に限っても、明治3年(1870)西院谷・南谷、同12年(1879)千手院谷、同15年(1882)谷上、同17年(1884)谷上・西院、同21年(1888)一心院谷・五之室谷・千手院谷・小田原谷・蓮花谷など、同36年(1903)長福院、同42年(1909)金剛峯寺前、徳善院など、同43年(1910)持

明院、同44年(1911)龍泉院、泰雲院、徳善院などと続く。

寺院の統廃合 神仏分離や度重なる火災を受けて、寺院の統廃合が進む^{注5}。金剛峯寺には明治21～23年(1888～1890)の作成とみられる「寺院統廃合敷地図」、明治23年(1890)以降作成とみられる「高野山図面」が所蔵され、すでに『高野町史別巻 高野町の昔と今』(高野町、2014年)において整理がなされている。

またこの頃、金剛峯寺では『高野山名刹誌』、『高野山寺院明細帳』と題する台帳がまとめられている。『名刹誌』には、各寺院から由緒・建物・敷地・墓碑・本尊・宝物・維持保存の方法・財産目録・最近3ヵ年の収支の各項目を報告したものを綴じてまとめている。明治27年(1894)までの収支を同28年(1895)に報告したものである。『寺院明細帳』は、住所・本尊・由緒・建物・境内・信徒・県庁までの距離・境外所有地をまとめたもので、昭和13年(1938)頃までにまとめられた後、しばらく加筆がなされている。古代以来の由緒などについては精査が必要であるものの、近代の状況を知る上で貴重な史料である。今回の調査においては、近世に遡る建物となるか、否かの判断材料の一つとした。

高野山開創記念・弘法大師御遠忌記念 大正期以降、高野山開創と弘法大師御遠忌を記念した法会と、これに関連した事業が、それぞれ50年周期で企画されている。

高野山開創1100年では、大正3年(1914)に記念法会を開催、大正10年(1921)に高野山霊宝館が、大正14年(1925)に高野山大師教会大講堂が建立される。1100年御遠忌では、昭和9年(1934)に記念法会を開催、興山寺から引き継いだ建物を焼失した金剛峯寺の西部に奥殿・別殿が建立され、壇上伽藍には武田五一の設計により昭和7年(1932)に金堂が、昭和12年(1937)に根本大塔が再建された。高野山開創1200年では、平成27年(2015)の記念法会にあわせ、平成26年(2016)に金剛峯寺中門が再建されている。

交通網の整備 明治17年(1884)高野山とその周辺13字が合併し、高野村が成立する。昭和3年(1928)

に町制を施行、同33年(1958)に富貴村が高野町に編入されたことで、現在の町域となった。

明治期以降、鉄道・道路など高野山に至る道路網が整備される。明治33年(1900)紀和鉄道(和歌山～五条)が全通し、明治34年(1901)名倉(高野口)駅完成した。同年には、新高野街道(椎出・神谷・不動坂・高野山)が、明治38年(1905)高野林道が開通する。明治45年(1912)には、物資運搬をおこなう高野山索道が整備される。

そして、大正4年(1915)南海電鉄高野線大阪汐見橋・橋本間が開通し、昭和4年(1929)同上、極楽橋まで延長、翌5年(1930)には、極楽橋駅と高野山駅を結ぶ高野山電気鉄道鋼索線が開通する。大正14年(1925)には高野山登山自動車会社により九度山～神谷間にバス運行される。昭和8年(1933)には高野山自動車により、高野山駅と不動坂口の女人堂を結ぶバス専用道が整備され、同9年(1934)には高野山駅と大門を繋ぐ道が整備される。

鉄道と道路の整備により、高野山は各段に一般社会に近い存在となった。近世における檀契関係を基盤に経営していた寺院も、次第に一般市民を対象とした宿坊経営へと移行する。

公共施設の整備 明治期における女人禁制の解除によって、高野山に女性・子どもが住まうようになる。各地区には小・中学校が整備された。また大正10年(1921)には橋本警察署高野分署(現・高野幹部交番)が建設されている。(鈴木智大)

注

- 1 高野山の歴史については、松永有慶『高野山』(岩波書店、2014年)、『和歌山県の地名』(平凡社、1983年)などで平易にまとめられている。
- 2 古代における金剛峯寺(現・壇上伽藍)の造営に関しては、福山敏男「初期天台真言寺院の建築」(『仏教考古学講座』3、1936年、1～74頁。後に『寺院建築の研究 下』(中央公論美術出版、1983年)に収録)において基礎的な情報が整理されている。
- 3 永承3年(1048)藤原頼道、永保元年(1081)・康和元年(1099)藤原師実、寛治2年(1088)白河上皇、嘉応元年(1169)後白河上皇など。
- 4 高野山における谷の構成と変遷については、藤川昌樹「中近世高野山における「谷」の構成と変遷」(『建築史

の空間—関口欣也先生退官記念論文集』中央公論美術出版、1999年、51～68頁)において整理されている。

- 5 明治大正期における寺院の統廃合については、松永有見「明治大正時代に於ける寺院仏堂の興廢」(『密教文化』60、1936年)、山口耕栄『高野山年表明治大正編』(高野山大学出版部、1977年)などに詳しい。また、都市史的な観点から、藤川昌樹・中野茂夫「近世末期高野山における谷の構成—高野山の都市史研究 その1—」(『日本建築学会学術講演梗概集』1999年、177～178頁)、中野茂夫・藤川昌樹「近世末期高野山における子院の建築—高野山の都市史研究 その2—」(『日本建築学会学術講演梗概集』1999年、179～180頁)において、文献資料および絵画資料に基づき分析がなされている。

第3章 各地区の概要

1 悉皆調査の概要

第1章でも述べた通り、寺社建築は全棟について、民家及び公共建築などは昭和前期以前とみられる建造物について目録作成及び写真撮影をおこなった。

高野山の寺院は、膨大な量となるため、第4章において詳述することとし、本章ではこれを除く1,208棟に基づき、高野町の歴史的建造物を概観する(表4)。以下では、小字の区分に従い、その概要を示す。一覧表は章末に納めた(表5、35～42頁)。

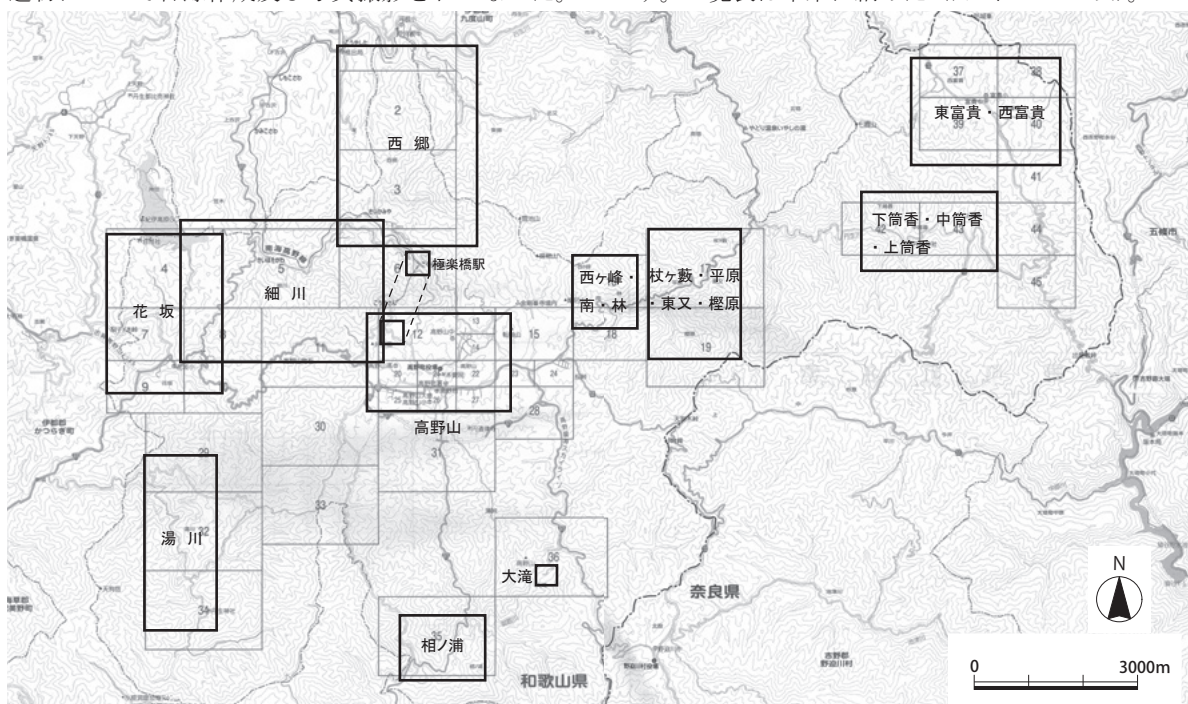


図4 各地区の位置(『ゼンリン住宅地図 和歌山県伊都郡九度山町・高野町』(ゼンリン、2017年)10・11頁所収図に加筆)

表4 各地区における悉皆調査

字名	棟数	民家			寺社建築					公共建築等			
		小計	主屋	付属屋	小計	寺院	小堂等	神社	小社等	小計	校舎	駅舎	その他
1 高野山	240	181	148	33	51	2 (新興)	7	29	13	8	0	5	3
2 細川	51	37	26	11	11	0	2	7	2	3	0	2	1
3 西郷	48	36	31	5	11	0	3	5	3	1	1	0	0
4 花坂	71	51	32	19	20	2	4	8	6	0	0	0	0
5 湯川	74	60	34	26	14	6	4	1	3	0	0	0	0
6 西ヶ峰	22	13	6	7	9	0	3	5	1	0	0	0	0
7 南	38	27	14	13	11	5	4	0	2	0	0	0	0
8 林	28	23	12	11	4	0	2	0	2	1	1	0	0
9 平原	5	2	1	1	1	0	1	0	0	2	2	0	0
10 檜原	33	24	8	16	9	0	6	0	3	0	0	0	0
11 東又	15	14	8	6	1	0	1	0	0	0	0	0	0
12 杖ヶ藪	51	40	14	26	11	1	2	7	1	0	0	0	0
13 相ノ浦	33	21	12	9	11	0	2	7	2	1	1	0	0
14 大滝	20	17	10	7	3	0	0	2	1	0	0	0	0
15 下筒香	49	42	24	18	7	1	1	5	0	0	0	0	0
16 中筒香	47	36	20	16	11	1	0	10	0	0	0	0	0
17 上筒香	55	48	27	21	7	1	1	5	0	0	0	0	0
18 東富貴	196	179	111	68	17	5	0	8	4	0	0	0	0
19 西富貴	132	119	82	37	13	3	0	10	0	0	0	0	0
合計	1208	970	620	350	222	27	42	109	44	16	5	7	4

2 各地区解説

(1) 高野山 (No. 293 ~ 296・974 ~ 1211, 987・1191 欠)

高野山地区は、高野町の中心に位置し、その中心は高野十谷とよばれる谷筋に沿って展開する寺院群が立ち並ぶ。主だった寺院や寺院関連施設の概要は、次章に記す。本項では、民家、神社・小社、公共建築などについて記す。

民家 高野山地区では、伝統的な民家として、主屋 148 棟、付属屋 33 棟の計 181 棟を確認した。主として大門通りに沿って、大正期以降に建設されたとみられる町家が残る。とくに小田原谷には 2 階建 (No. 1012、図 5) や 3 階建 (No. 1011、図 6) の、比較的古く、規模の大きな町家が集中している。民家のなかには、かつて寺院として使われていたものを転用したとみられるものもある。大門通りから南方へゆくと、近代以降の宅地化がすすんでいる。江戸時代には寺院が建ち並んでいたところに、近代になって民家が増えたものとみられる。また、高野山大学の東には、長屋があり、借家経営がされていたこと

を示す。

壇上伽藍中門前付近から西側、つまり西院谷西部には多くの民家が建つ (No. 1111 ~ 1156)。このあたりは、ほぼ鉄板葺の民家である。このほか、蓮花谷の北東方の五之室谷・千手院谷にも民家が多く集まる。千手院谷の和合庵 (No. 1196 ~ 1199、国登録有形文化財) は、高野山の大工である堀野久吉により大正 15 年 (1926) に建てられた 2 階建の住宅で、屋根や開口部が独特な形状をもつ。

今後、各寺院にのこる歴史的建造物を調査するとともに、周辺の町家などの民家をあわせて調査し、道路の拡張や寺院群の統廃合の歴史を読み解くことで、寺院から民家への変化など土地利用の在り方を捉えることができるだろう。

社殿 次章で述べる寺院群のほかにも、多くの小社が建つ。稲荷神社本殿 (No. 1176、図 7) は、比較的古く明治期の建立と思われる。また、清高稲荷大明神社本殿 (No. 1014) は、昭和後期建立とみられるが、中世の細部意匠を採用した擬古作であり、歴史的建造物の保存修理などに関わった職人が造営に携



図 5 高野山の 2 階建大型町家 (No. 1012)



図 6 高野山の 3 階建大型町家 (No. 1011)



図 7 高野山・稲荷神社本殿 (No. 1176)



図 8 高野山駅駅舎 (No. 1211)

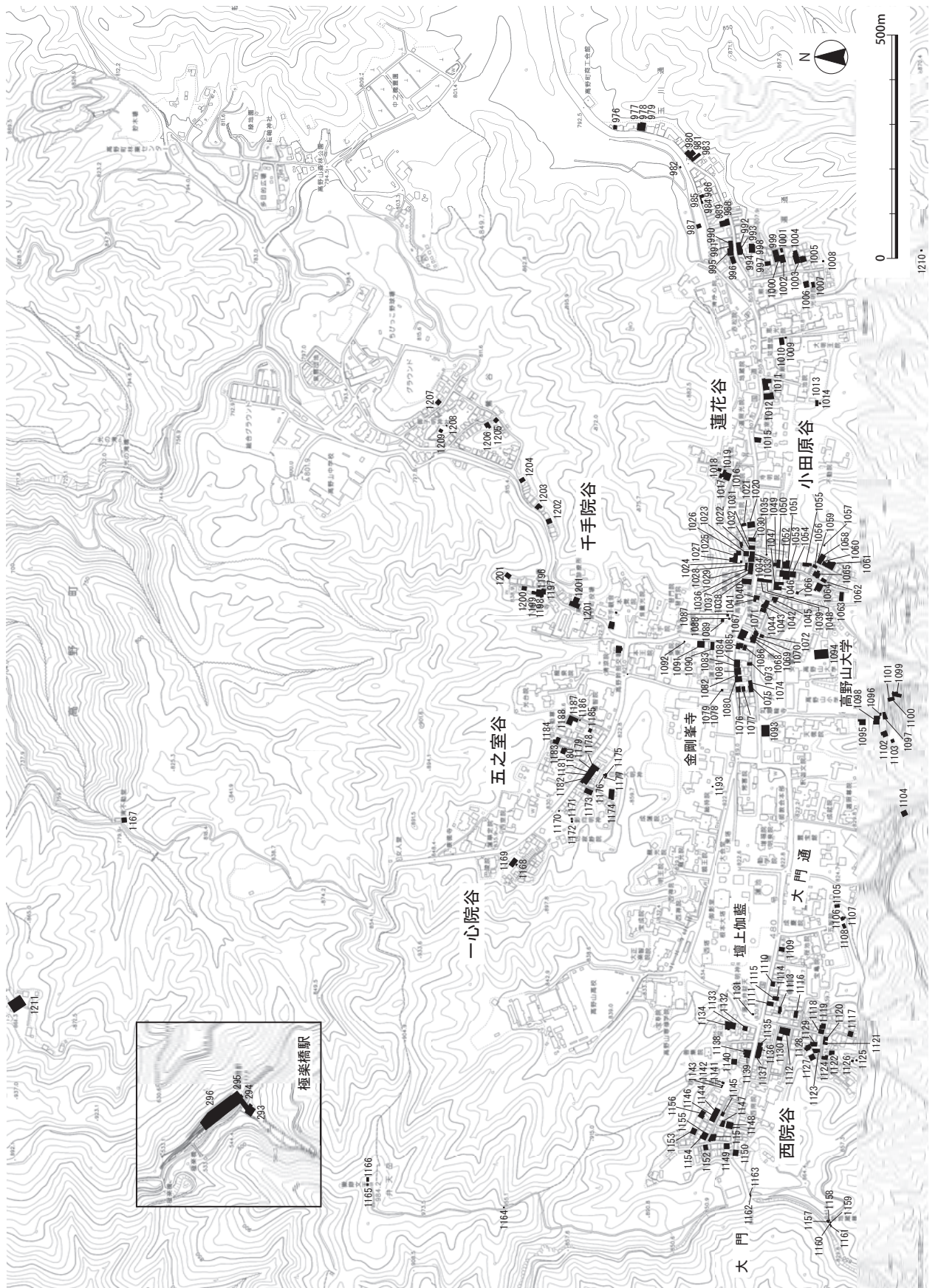


図9 高野山（国土地理院作成「国土基本図2500」に加筆）

わったものと推察される。

鉄道・公共施設 高野山地区の北部に位置する極楽橋駅駅舎 (No. 293～296)、高野山駅駅舎 (No. 1211、図8) は、それぞれ昭和4年(1929)、同5年(1930)の開業当初の駅舎が建つ。和洋折衷の意匠をもつ駅舎は、近代化を考える上で重要な建物である。

高野山大学には、昭和4年に武田五一の設計により建てられた高野山大学図書館 (No. 1094) が建つ。

(2) 細川 (No. 199～250。212欠)

細川は高野山地区の北西方、西郷の南西方、花坂の北東方に位置し、北流して紀ノ川に合流する不動谷川の最上流域の谷合に、東細川・西細川などの集落が散在する。

東細川 東細川では、伝統的な民家として、主屋7棟、付属屋6棟の計13棟を確認した。主屋はいずれも入母屋造、棧瓦葺で、多くが平屋である。屋根の勾配は比較的緩い。集落の西北部に、方3間、宝形造、銅板葺の小堂が、東方に一間社春日造、銅板葺の小社が建つ。

西細川 西細川では、伝統的な民家として、主屋

19棟、付属屋5棟の計24棟を確認した。川に沿って点在しており、集落としての構えは見えにくい。主屋の多くは平屋、入母屋造もしくは切妻造、棧瓦葺もしくは鉄板葺で、屋根の勾配は比較的緩やかである。1棟のみが、茅葺鉄板葺の屋根をもつ (No. 237、図10)。

集落の道沿いに小社1棟、小堂が各1棟建つが、いずれも新しい。集落の北部には、昭和7年建設の細川変電所 (No. 229、図11) が建つ。2階建て陸屋根をもつ鉄筋コンクリート造の建物である (『和歌山県の近代化遺産』250頁)。集落東部の南斜面には、八幡神社が位置し、大正期建立とみられる本殿をはじめ7棟が建つ (No. 219～225、図12)。また集落北方の北斜面には、南海高野線の紀伊細川駅の駅舎 (No. 217、図13) が建つ。昭和3年(1928)の開業時のものであり、紀伊神谷駅・極楽橋駅・高野山駅などとともに、近代化遺産として評価できる (『和歌山県の近代化遺産』78～82頁参照)。



図10 西細川の茅葺民家 (No. 237)



図11 細川変電所 (No. 229)



図12 西細川・八幡神社 (No. 219～225)



図13 西細川・紀伊細川駅舎 (No. 217)

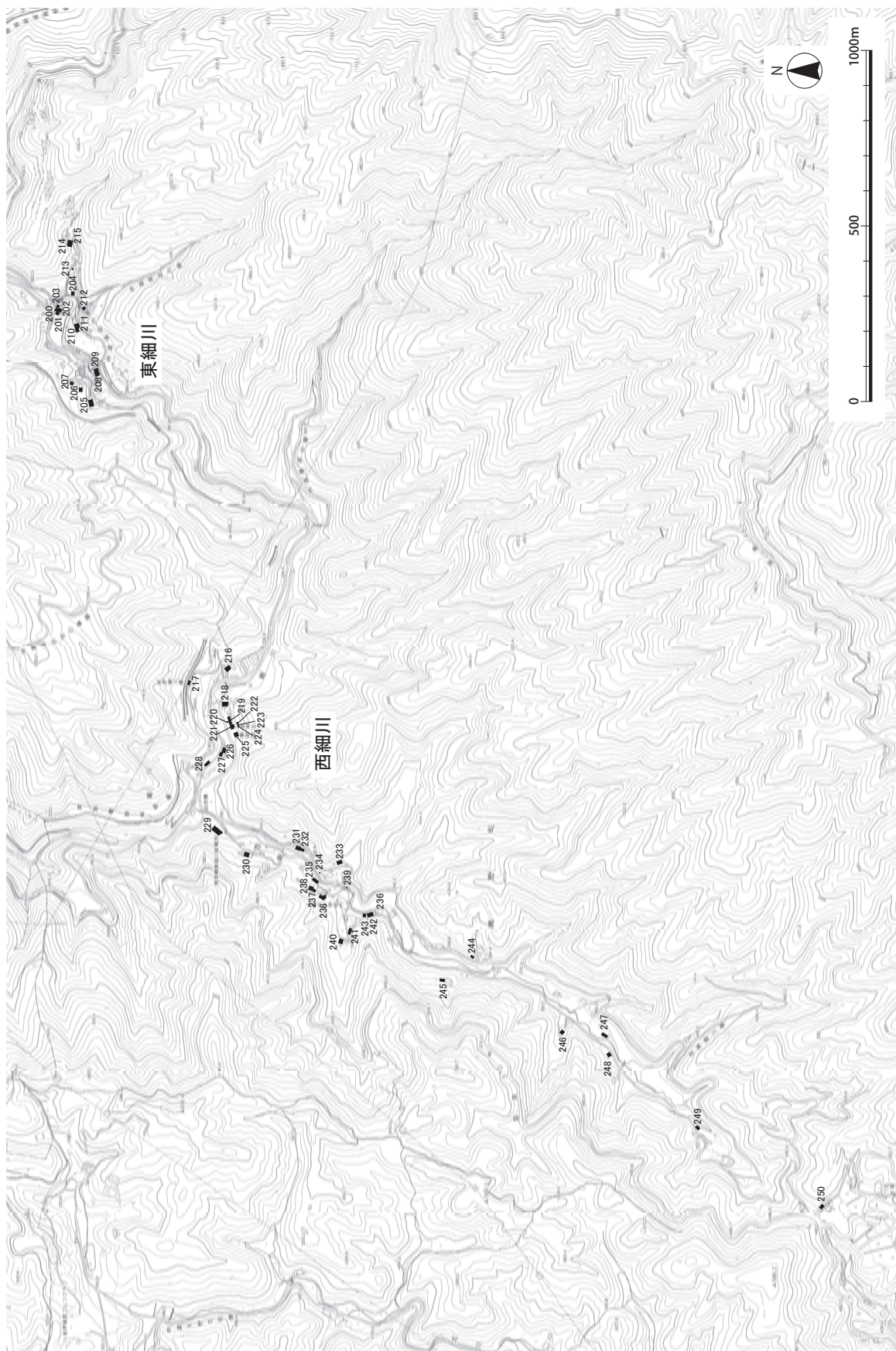


図 14 細川（「和歌山県森林基本図」（2014年）に加筆）

(3) 西郷 (No. 251 ~ 292・297 ~ 302)

高野山地区の北方、細川の北東方に位置し、高野山参詣道の一つである京大坂道に沿って、作水、尾細、桜茶屋、神谷など集落が散在する。北部は、北方、東方、西方とも九度山町に接する。東部、九度山との境界近くには、八幡宮 (No. 297 ~ 301) が建つが、昭和後期以降に建て替えられたものである。

作水 作水では伝統的な民家として、主屋5棟、付属屋1棟の計6棟を確認した。主屋は入母屋造または切妻造で、勾配は緩く、棧瓦葺が多い。平屋が多いが、つし2階をもち、2階外壁を塗り込めたものもあり、昭和2年 (1927) の建築という (No. 253、図15)。他の主屋も昭和前期頃の建築とみられる。集落中央には、小さな地藏堂 (No. 252) が建つ。

尾細 尾細では、伝統的な民家として、主屋5棟、付属屋1棟の計6棟を確認した。主屋はいずれも平屋で、入母屋造もしくは切妻造、勾配が緩い棧瓦葺が多く、住民によると明治期の建築もある (No. 259)。一方で、茅葺鉄板葺の民家も建つ (No. 261)。集落南端には小社が建つ (No. 264)。



図15 作水の民家 (No. 253)

桜茶屋 桜茶屋では、伝統的な民家として、主屋3棟、付属屋1棟の計4棟を確認した。主屋は、いずれも平屋で、切妻造、鉄板葺が2棟 (No. 266・267、図16)、入母屋造、茅葺鉄板葺が1棟 (No. 269) である。前者2棟は通りに面して建ち、正面に広い開口部をもつ。集落の中央には地藏堂が建つ (No. 268)。

神谷 神谷では、伝統的な民家として、主屋18棟、付属屋2棟の計20棟を確認した。比較的規模の大きな集落である。主屋は、2棟が入母屋造、茅葺鉄板葺で比較的規模が大きい (No. 269・279)。ほかはいずれも勾配が緩い屋根をもつが、棧瓦葺は少なく鉄板葺が主流である。急峻な地形にあるため、通りに面するのが2階部分とする、いわゆる吉野建もある (No. 277)。集落の北端には、成の高い2階をもつ、もと旅館が建ち、往時の盛況を伝える (No. 270、図17)。また集落の中部には、白髭大神・末高大神を祀る小社が (No. 282)、北部には小堂 (No. 302) が建つ。公共建築としては、集落の中部には昭和26年 (1951) 建築の旧白藤小学校校舎 (No. 276、図18) が建つ (『高野山の昔と今』318・319頁)。



図16 桜茶屋の民家 (No. 266)



図17 神谷・旧旅館の民家 (No. 270)



図18 神谷・旧白藤小学校校舎 (No. 276)

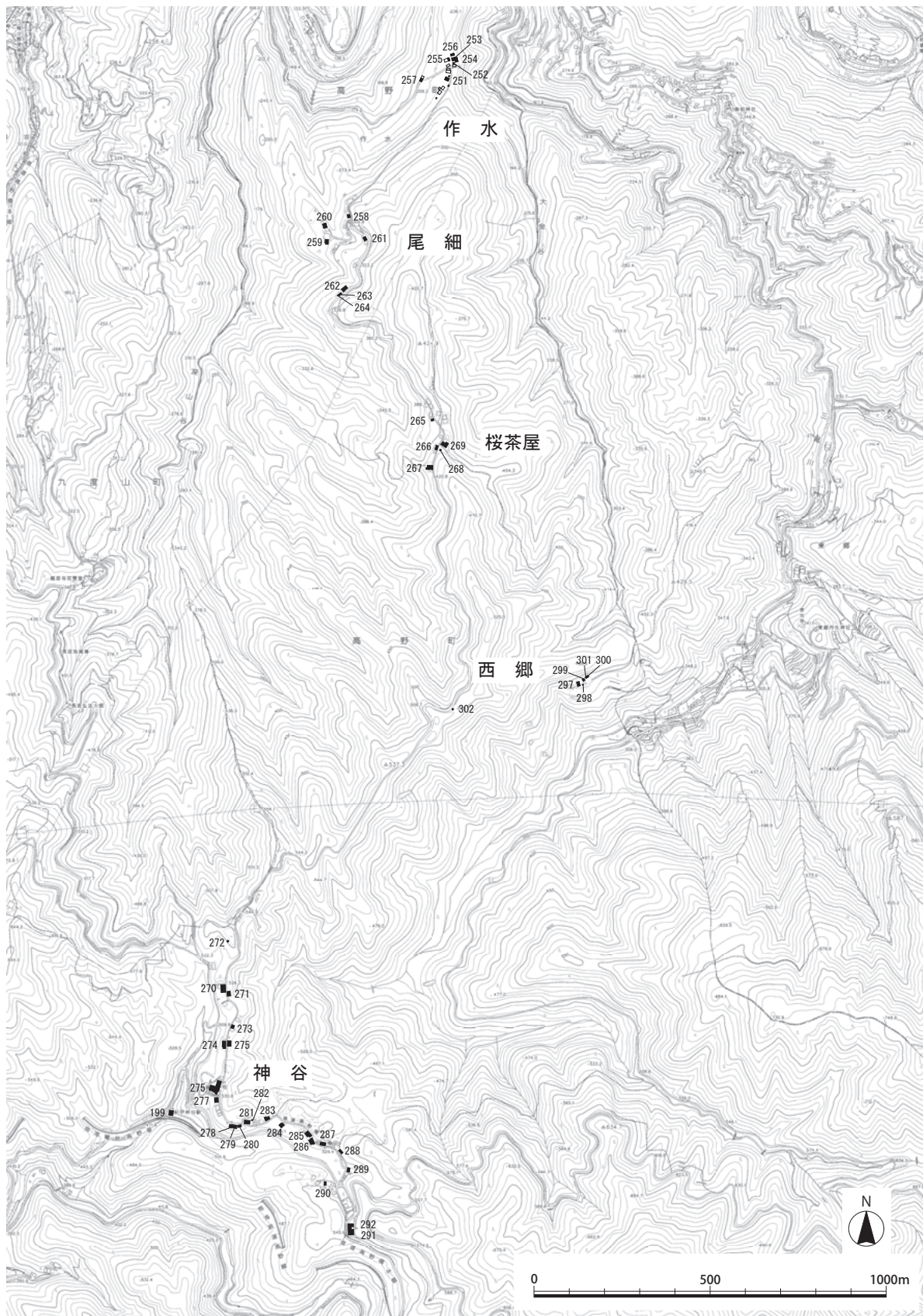


図 19 西郷（「和歌山県森林基本図」（2014 年）に加筆）

(4) 花坂 (No. 128 ~ 198)

花坂は、高野山地区の西方、細川の南西方に位置し、北方及び西方はかつらぎ町に接する。南南西へと流れる貴志川とその上流の北川に沿って、不動野、掛谷、上花坂などの集落が散在する。このうち上花坂は比較的規模が大きく、その東方には矢立が位置する。矢立は、北から延びる慈尊院に発する町石道と、西から延びる高野街道が合流する交通の要衝で、道はここから東へ延び、大門口へと通じる。昭和38年には不動野・掛谷の北方に、自然社本宮が建立された。また、別荘地として、1980年代には、北端部に高野山台と南陽台、南端部にヴィレッジ花坂が開かれた。高野町の伝統的な集落のなかでは比較的住民が多く、平成期以降の建て替えも多い。

不動野と近郊の集落 不動野では、伝統的な民家として、主屋4棟、付属屋2棟の計6棟を確認した。主屋は入母屋造が多く、茅葺鉄板葺の平屋のもの(No. 138)、瓦形鉄板葺の勾配が緩い2階建のものは(No. 140、図20)、比較的規模が大きい。後者は、納屋を兼ねる門をとまなう(No. 139)。集落の南東方の山

腹に不動堂(No. 142)と七福大明神社が建つ(No. 141)。不動野の北方にも、主屋3棟、付属屋3棟の計6棟が建つ。このうち、養蚕所(No. 133、図21)や2階建の付属屋(No. 129)を含む4棟が、入母屋造、茅葺鉄板葺で、他地域に比べて茅葺屋根が多い。

掛谷と近郊 掛谷とその南方では、伝統的な民家として主屋3棟、付属屋3棟の計6棟を確認した。主屋はいずれも入母屋造で、茅葺鉄板葺と勾配の緩い棧瓦葺あるいは鉄板葺のものがある。鉄板葺で、2階建で規模が大きく(No. 144)、土蔵や納屋をとまなうものもある。

上花坂 上花坂は川沿いに比較的広い平地に集落が形成されている。伝統的な民家として、主屋19棟、付属屋10棟の計29棟を確認した。主屋は、切妻造もしくは入母屋造の鉄板葺もしくは棧瓦葺が多いもの(No. 151など)、入母屋造、茅葺鉄板葺も3棟あり(No. 152・166・170、図22)、他地域よりも多い。上花坂の東南部の山腹には、鳴川神社(No. 177~184)、無量寺延命大師堂(No. 174)、観音堂(No. 176)が集まるが、現存するのはいずれも明治期以降の建築とみ



図20 不動野の瓦形鉄板葺民家 (No. 140)



図21 不動野の養蚕所 (No. 133)



図22 上花坂の茅葺民家 (No. 166)



図23 上花坂・鳴川神社本殿 (No. 180)

られる。鳴川神社本殿 (No. 180、図 23) は『和歌山県の近世社寺建築』では 17 世紀中期の建立とみていたが、今回の調査では大正期のいわゆる擬古作であるとみた。高度な伝統的な技能を有した職人の存在をうかがうことができる。

矢立 矢立では、伝統的な民家として、主屋 3

棟、付属屋 1 棟の計 4 棟を確認した。主屋は、いずれも入母屋造、鉄板葺もしくは変形瓦葺で、緩い勾配の屋根をもつ。町石道と高野街道が合流する辻の西方の山腹に矢立砂捏地蔵 (No. 156 ~ 158) が、東の登り口には花坂不動尊 (No. 163・164) が建つが、いずれも昭和後期以降の建築である。

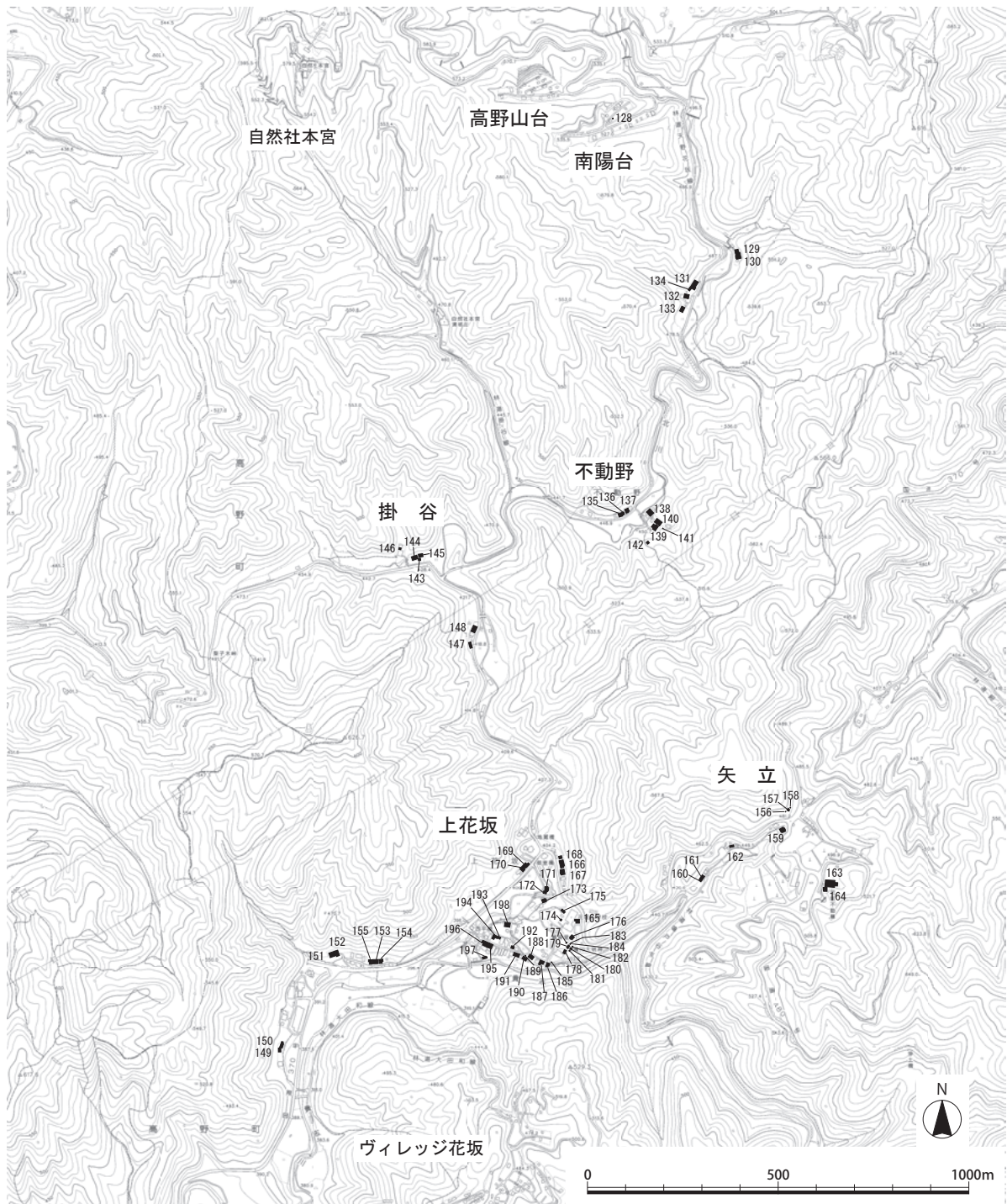


図 24 花坂 (「和歌山県森林基本図」(2014 年) に加筆)

(5) 湯川 (No. 54 ~ 127)

湯川は、高野山地区の南西方、花坂の南方に位置し、西方はかつらぎ町に接する。貴志川に注ぐ湯子川上流域に、宮垣内、上湯川、神森、下湯川などの集落が点在する。上湯川及び下湯川からは、高野山七口の一つ龍神口(湯川口)へと続く道が東へ延びる。民家は、茅葺民家の割合が比較的高く、19世紀中期以前に遡るとみられるものも多い。かつては林業を生業としていたようだが、現在の住民は少ない。

宮垣内 宮垣内では、伝統的な民家として、主屋8棟、離れ2棟、付属屋6棟の計16棟を確認した。このうち、5棟が入母屋造、茅葺鉄板葺で、茅葺の割合が比較的高い。建築年代は19世紀中期に遡る可能性があるものをはじめ(No. 62、図25)、比較的古く、離れや付属屋などの残りもよい。集落東方の山腹には、丹生神社が建つ。本殿(No. 66、図26)は、棟札により宝暦14年(1764)の建築であることが明らかで、中規模の間社春日造の社殿で、貴重である(『和歌山県の近世社寺建築』400頁)。

上湯川 伝統的な民家として、主屋5棟、付属屋

5棟の計10棟を確認した。主屋5棟はいずれも茅葺鉄板葺で、寄棟造のものは19世紀中期に遡る可能性がある(No. 76、図27)。また主屋に加え、付属屋も茅葺鉄板葺とするものもある(No. 79・80、図28)。集落の北端には湯川丹生神社が(No. 83 ~ 86)、中部には地藏堂(No. 78)が位置するが、いずれも昭和後期に建立されたものである。

神森 伝統的な民家として、主屋3棟、付属屋2棟の計5棟を確認した。このうち主屋2棟は、入母屋造、茅葺鉄板葺である(No. 87・92)。集落の北端には、八幡社(No. 89)と地藏堂(No. 90)が建つが、昭和後期以降の小社・小堂である。

下湯川 伝統的な民家として、主屋14棟、離れ2棟、付属屋13棟の計29棟を確認した。このうち1棟は入母屋造、茅葺鉄板葺で、19世紀前期に遡る可能性がある(No. 125、図30)。このほかは、切妻造もしくは入母屋造の鉄板葺で勾配の緩い屋根をもつ。3階建の離れ1棟(No. 103、図31)は崖地に建ち、2階に出入口を設けた、いわゆる吉野建である。



図25 宮垣内の茅葺民家 (No. 62)



図26 宮垣内・丹生神社本殿 (No. 66)



図27 上湯川の茅葺民家 (No. 76)



図28 上湯川の茅葺民家主屋と付属屋 (No. 79・80)



図 29 湯川（「和歌山県森林基本図」（2014 年）に加筆）



図 30 下湯川の茅葺民家 (No. 125)



図 31 下湯川の3階建の離れ (No. 103)

(6) 西ヶ峰 (No. 303 ~ 319, 386 ~ 390)

西ヶ峰は、高野山地区の北東方、摩尼山東方の谷筋に位置し、高野山七口の一つ大峯口へ至る大峯道から北へ入った道に面して集落を形成している。伝統的な民家として、主屋6棟、付属屋7棟の計13棟を確認した。主屋は、入母屋造、茅葺鉄板覆が2棟 (No. 309・314、図33)、切妻造もしくは入母屋造で勾配が緩い鉄板葺が4棟である。付属屋のうち、3棟

は2階立建の土蔵で (No. 308・313・316、図33)、かつての盛況を伝える。集落の南部には、昭和前期建築とみられる如意輪観音堂 (No. 306、図34) が建つ。また、地藏堂1棟、小社1棟も建つが、いずれも昭和後期以降の建築である。後述する林の北方に位置する丹生神社 (五社大明神) には、並立する2棟の本殿をはじめ5棟が建ち (No. 386 ~ 390)、近世社寺建築調査では2棟の本殿 (No. 388・389、図35) を18世紀

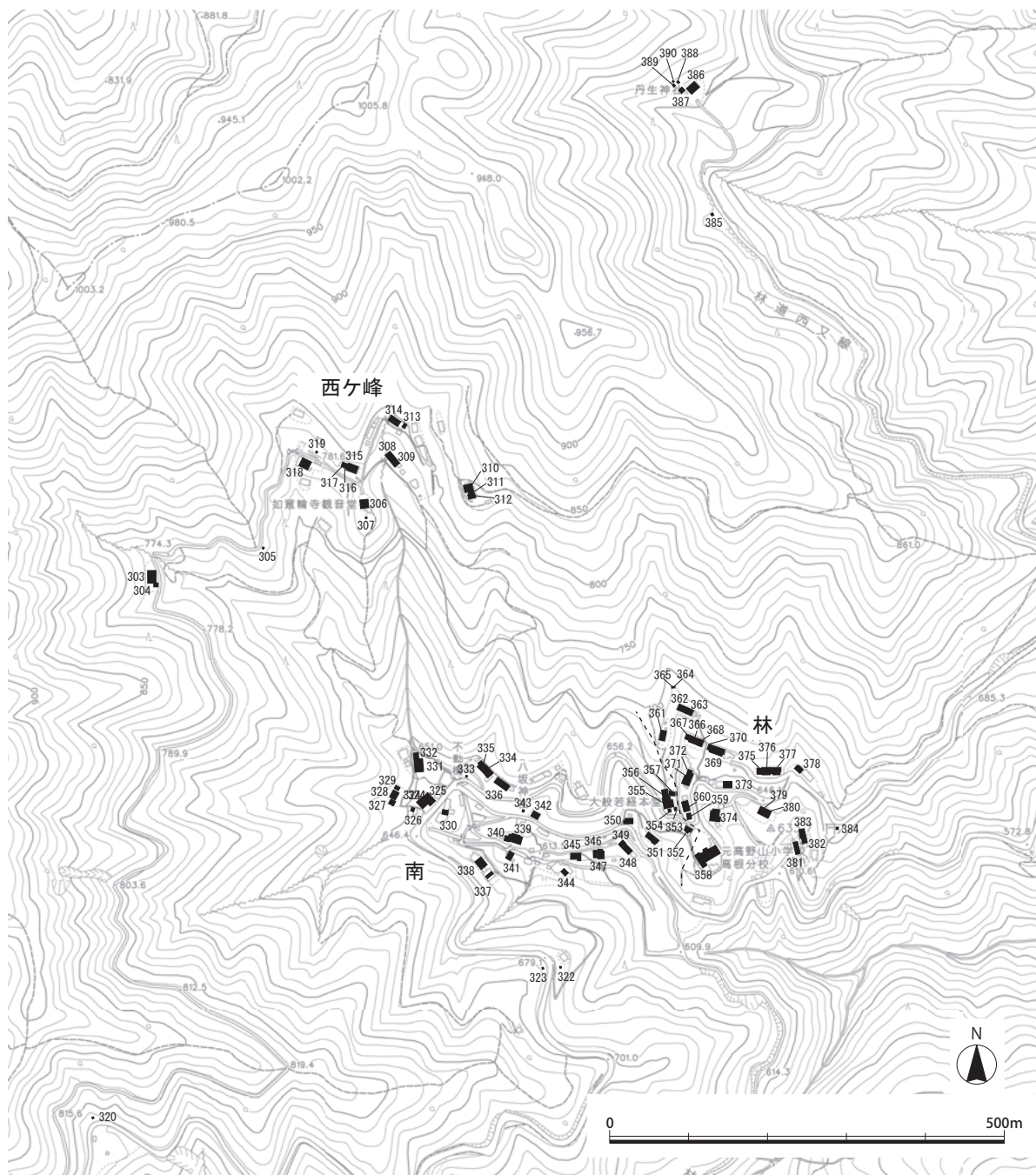


図32 西ヶ峰・南・林 (「和歌山県森林基本図」(2014年)に加筆)

前期の建築を昭和後期に移築したものとみていたが(『和歌山県の近世社寺建築』398頁)、今回の調査では昭和後期に建てられたいわゆる擬古作とみた。丹生神社手前の道沿いには地藏堂1棟が建つ。

(7) 南 (No. 320 ~ 357)

南は、高野山地区の北東方、摩尼山東方の谷筋に位置し、大峯道に沿って集落を形成している。東方には、林の集落が続く。伝統的な民家として、主屋14棟、付属屋13棟の計27棟を確認した。主屋は、入母屋造、茅葺鉄板覆が1棟で(No. 347、図36)、ほ

かは切妻造あるいは入母屋造で勾配の緩い屋根をもつ(No. 342など、図37)。付属屋のうち、5棟は2階建の土蔵で(No. 329など、図38)、いずれも置屋根をもつ。集落の東端には、大般若経本堂のほか5棟(No. 353 ~ 357)が建つ。昭和56年の修理碑があり、本堂(No. 355)、庫裏(No. 357)、宝蔵(No. 356)の建築はこれよりも遡るが、比較的古そうな本堂でも大正期頃の建築とみる。ほかに、道に沿って小堂4棟、小社1棟が建つ、中央部には八坂神社本殿(No. 343)が建つが、いずれも昭和後期以降の建築である。



図33 西ヶ峰の茅葺民家と土蔵 (No. 308・309)



図34 西ヶ峰・如意輪観音堂 (No. 306)



図35 西ヶ峰・丹生神社本殿 (右・左) (No. 388・389)



図36 南の茅葺民家 (No. 347)



図37 南の鉄板葺民家 (No. 342)



図38 南の土蔵 (No. 329)

(8) 林 (No. 358 ~ 385)

林は、摩尼山東方の谷筋に位置し、大峯道に沿って、南の東方に続いて集落を形成している。伝統的な民家として、主屋 12 棟、付属屋 11 棟の計 23 棟を確認した。比較的大きな集落であるが、現在の住民は少ない。主屋は、切妻造もしくは入母屋造で勾配の緩い鉄板葺の屋根をもつ (No. 374 など、図 39)。付属屋のうち 5 棟が 2 階建の土蔵で、切妻造もしくは入母屋造、鉄板葺の置屋根をもち、前室が付く (No. 375 など、図 40)。集落北の山腹に小社 2 棟が (No. 364・365)、西ヶ峰の丹生神社 (五社大明神) へと続く道の入り口に地藏堂 1 棟 (No. 385) が建つ。また集落の西端には、昭和 26 年 (1951) 建築の元高野山小学校高根分校校舎が建つ (No. 358、図 41)。2001 年 3 月に廃校となっている。

(9) 平原 (No. 391 ~ 395)

平原は、摩尼山東方の谷筋に位置し、大峯道に沿って民家が点在している。伝統的な民家として、主屋 1 棟 (No. 393)、付属屋 1 棟 (No. 392) の計 2 棟を確認した。主屋は、勾配の緩い、寄棟造、鉄板葺の屋



図 39 林の鉄板葺民家 (No. 374)

根をもつ。集落の西端に昭和後期建立の小さな大師堂が建つ (No. 391)。集落の東端には、昭和 27 年 (1952) 建築の元杖ヶ藪小学校・中学校校舎が建つ (No. 394・395、図 42)。

(10) 檜原 (No. 462 ~ 494)

檜原は、摩尼山東方に位置し、北流し、生川へと合流する檜原川の流れる谷筋の東斜面に檜原と小安の集落を形成している。

檜原 檜原では、伝統的な民家として、主屋 3 棟、付属屋 6 棟の計 9 棟を確認した。主屋はいずれも切妻造、鉄板葺の平屋である (No. 475 など)。集落の入口となる東部には、勝手大明神社 (No. 467・468)、地藏堂 (No. 464 ~ 466) が、集落近くの道沿いに小さな地藏堂 (No. 462・463) が建つ。

小安 小安では、伝統的な民家として、主屋 5 棟、付属屋 10 棟の計 15 棟を確認した。主屋はいずれも鉄板葺で、切妻造が多い (No. 481 など)。集落の中央部には、子安地藏堂が建つ (No. 479、図 44)。棟札より明治 27 年 (1894) に、伊都郡見村大字辻の檜山甚助を棟梁として建立されたことがわかる。桁



図 40 林の土蔵 (No. 375)



図 41 林・元高野山小学校高根分校校舎 (No. 358)



図 42 元杖ヶ藪小学校校舎 (No. 394)

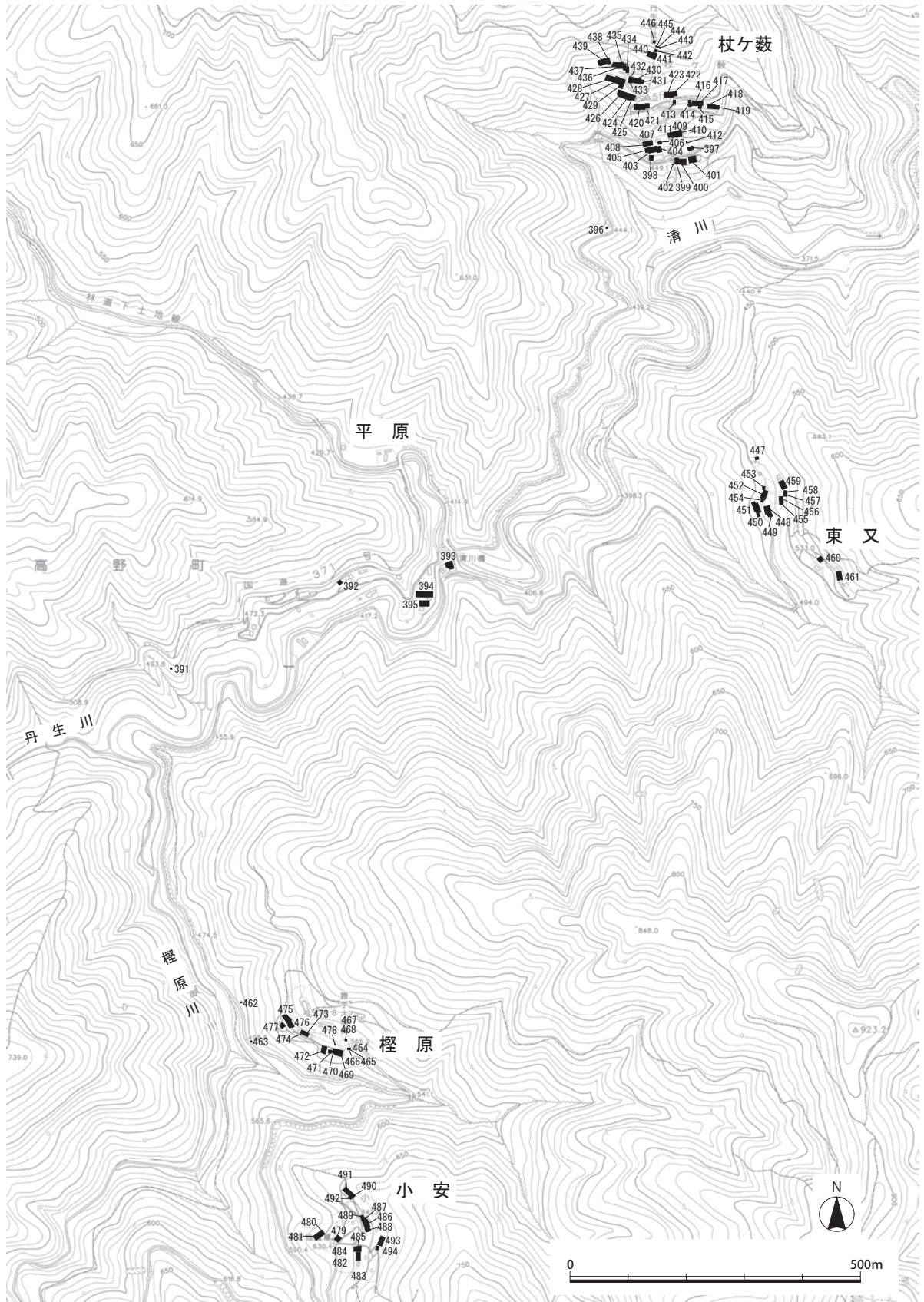


図 43 平原・榎原・東又・杖ヶ藪（「和歌山県森林基本図」（2014年）に加筆）

行3間、梁間3間、切妻造、鉄板葺の小堂で、内部に柱を建てない。背面中央間に仏壇を構え、正面中央を開放とし2級の木階を設けるほかは、各柱間に低い腰壁をいれるのみである。建立年代が明確な村堂として貴重である。このような構成は東又の小堂(No. 460、図46)とよく似ている。

(11) 東又 (No. 447 ~ 461)

東又は、摩尼山東方の谷筋、平原の東方に位置し、大峯道から分かれ東に延びる道の先の東斜面に集落を形成している。伝統的な民家として、主屋8棟、付属屋6棟の計14棟を確認した。主屋はいずれも平屋で、うち2棟が入母屋造、茅葺鉄板葺(No. 451・461、図45)、ほかはいずれも勾配の緩やかな鉄板葺で、多くは切妻造である。集落東南部には、桁行3間、梁間3間、寄棟造、鉄板葺の仏堂が建つ(No. 460)。内部に柱を建てず、背面中央間に仏壇を構え、正面中央間を開放とし、その他の各柱間に低い腰壁を入れる点は、小安の子安地藏堂(No. 479)とよく似ている。正面中央間を広くとる点、背面中央間両脇の柱を円柱とする点は異なる。



図44 小安・子安地藏堂 (No. 479)



図46 東又の仏堂 (No. 460)

(12) 杖ヶ藪 (No. 396 ~ 446)

杖ヶ藪は、摩尼山東方の谷筋、平原の北東方に位置し、急峻な斜面に石垣を積んだ宅地が密度高く形成されており、非常に見応えのある集落構造をみせている。かつては、林業に加えて、位牌の製造を生業としていたようで、その盛興ぶりがうかがえる。ただし現在の住民は少ない。

伝統的な民家として、主屋14棟、付属屋26棟、計40棟を確認した。主屋のうち2棟が入母屋造、茅葺鉄板葺で(No. 403・420、図47)、明治期の建築とみた。ほかは勾配の緩やかな鉄板葺もしくは棧瓦葺の屋根をもち、平屋が1棟(No. 439)あるほかは、いずれも2階建で入母屋造を主体とする(No. 436など、図48)。宅地内には主屋の他に付属屋が多く建つ。とくに土蔵が9棟と多く、いずれも2階建、切妻造、鉄板葺で、置屋根が多いが(No. 435など)、置屋根とせず、軒を塗り込めるものもある(No. 412)。

集落の最奥部には丹生神社(No. 440 ~ 446)が位置するほか、石仏堂(No. 396・402)、八幡宮(No. 413)など、小堂・小社が点在する。



図45 東又の茅葺民家 (No. 451)



図47 杖ヶ藪の茅葺民家 (No. 403)

(13) 相ノ浦 (No. 21 ~ 53)

相ノ浦は高野山地区の南方に位置し、有田川の源流にあたる御殿川が西南方に流れる谷合の集落の一つである。後述する大滝の南西方の下流にあたる。伝統的な民家として主屋12棟、付属屋9棟、計21棟を確認した。主屋の多くは切妻造、鉄板葺の平屋で、そのうちの1棟 (No. 32、図50) は、茅葺鉄板葺で規模も比較的大きい。その他の主屋の勾配は緩く杉皮葺あるいは板葺と考えられる (No. 41 など、図51)。山間部では、杉皮葺や板葺よりも茅葺が高級と考え

られていた可能性がある。集落の中央部には、丹生神社4棟 (No. 22 ~ 26)、観音堂1棟 (No. 27、図52)、小堂1棟 (No. 28)、小社1棟 (No. 29) が集まり、明治36年 (1903) 建築の元高野山小学校相ノ浦分校の校舎を転用した集会場 (No. 21、図53) が建つ (『高野町の昔と今』312頁)。この中では、観音堂 (No. 27) がやや古く明治期の建立とみられる。他には、集落の東方に小社1棟 (No. 36)、南西方に玉山弁財天2棟 (No. 52・53) が建つ。



図48 杖ヶ藪の鉄板葺民家 (No. 436)



図49 杖ヶ藪の土蔵 (No. 412)



図50 相ノ浦の茅葺民家 (No. 32)



図51 相ノ浦の民家 (No. 41)



図52 相ノ浦・観音堂 (No. 27)

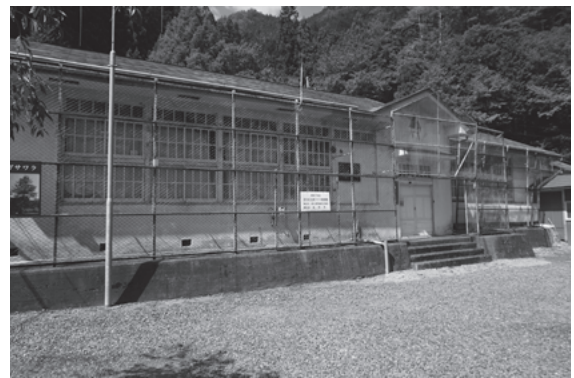


図53 相ノ浦・元高野山小学校相ノ浦分校校舎 (No. 21)

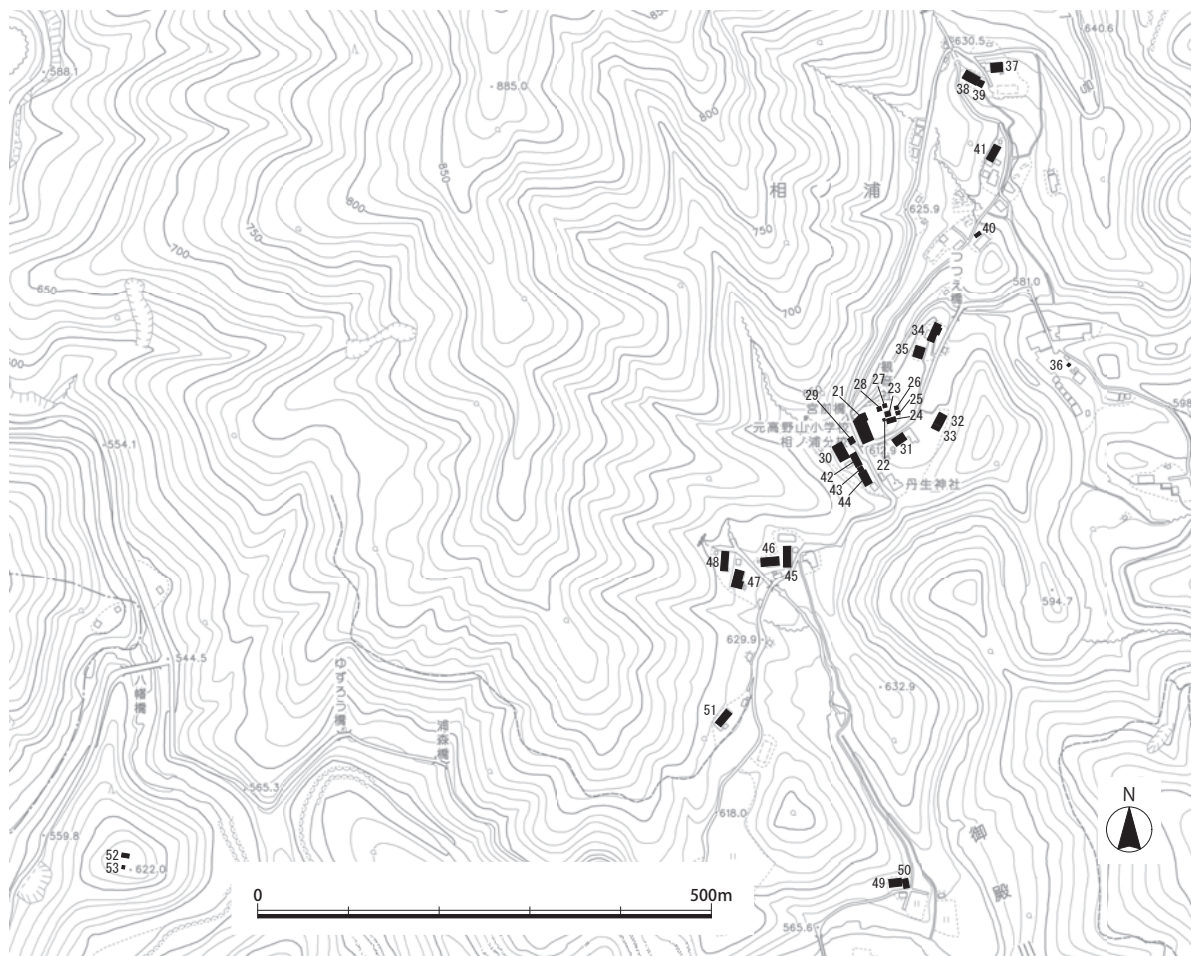


図54 相ノ浦（「和歌山県森林基本図」(2014年)に加筆）

(14) 大滝 (No. 1～20)

大滝は高野山地区の南方に位置し、有田川の源流にあたる御殿川が西南方に流れる谷谷の集落である。前述した相ノ浦の北東方の上流にあたる。集落の北方には地名の由来となる大滝がある。

伝統的な民家として主屋10棟、付属屋7棟の計17棟を確認した。主屋はいずれも平屋で、切妻造あるいは入母屋造鉄板葺の勾配の緩い屋根をもっており、もとは杉皮葺あるいは板葺だったと考えられる。大滝D家 (No. 10、図56) は成の高い挿鴨居を用いるなど、建築年代が江戸時代に遡る可能性がある。高度成長期以降の新築がほとんど見られない。集落の東の斜面には、大滝丹生神社 (No. 1・2、図57) があり、集落内には葵の井戸とよばれる井戸の傍らに小社があるが、前者は昭和後期、後者は平成期の建立とみられる。

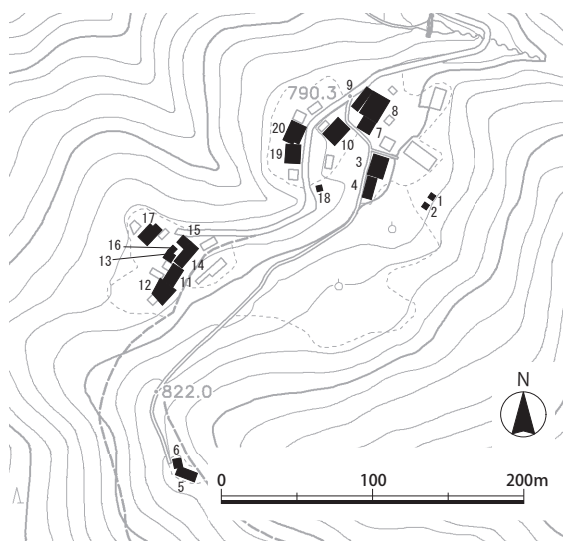


図55 大滝（「和歌山県森林基本図」(2014年)に加筆）

(15) 下筒香 (No. 495 ~ 543)

筒香は高野山地区の北東方、七霞山の南東方に位置し、蛇行しながら西流する丹生川の谷合に、下流(西方)から下筒香・中筒香・上筒香の各集落が形成されている。

下筒香は、丹生川の北岸に広がるすり鉢状の谷の斜面に民家が点在する。丹生川沿いの道から集落に向かって道がわかる。他集落のように集落内に樹木が繁茂しておらず手入れが行き届き、集落構造を見渡すことができるので見応えがある。比較的住民

が多く、現在も生業が成立しているようで、松茸の収穫もその一つという。

伝統的な民家として、主屋 24 棟、付属屋 18 棟の計 42 棟を確認した。主屋のうち 3 棟 (No. 514・523・537) が入母屋造、鉄板葺の平屋で、とくに下筒香 P 家 (No. 523、図 58) が最も規模が大きい。ほかには、入母屋造あるいは切妻造で、鉄板葺あるいは桧瓦葺の勾配が緩い屋根をもつ (No. 532 など)。付属屋のうち 6 棟が土蔵で、いずれも切妻造の置屋根である。杉皮葺鉄板葺の建物もある (No. 528、図 59)。



図 56 大滝の民家 (No. 10)



図 57 大滝丹生神社 (No. 1・2)



図 58 下筒香の茅葺民家 (No. 523)



図 59 下筒香の杉皮葺鉄板葺の土蔵 (No. 528)



図 60 下筒香・栄山寺本堂 (No. 495)



図 61 下筒香・栄山寺からみた集落景観

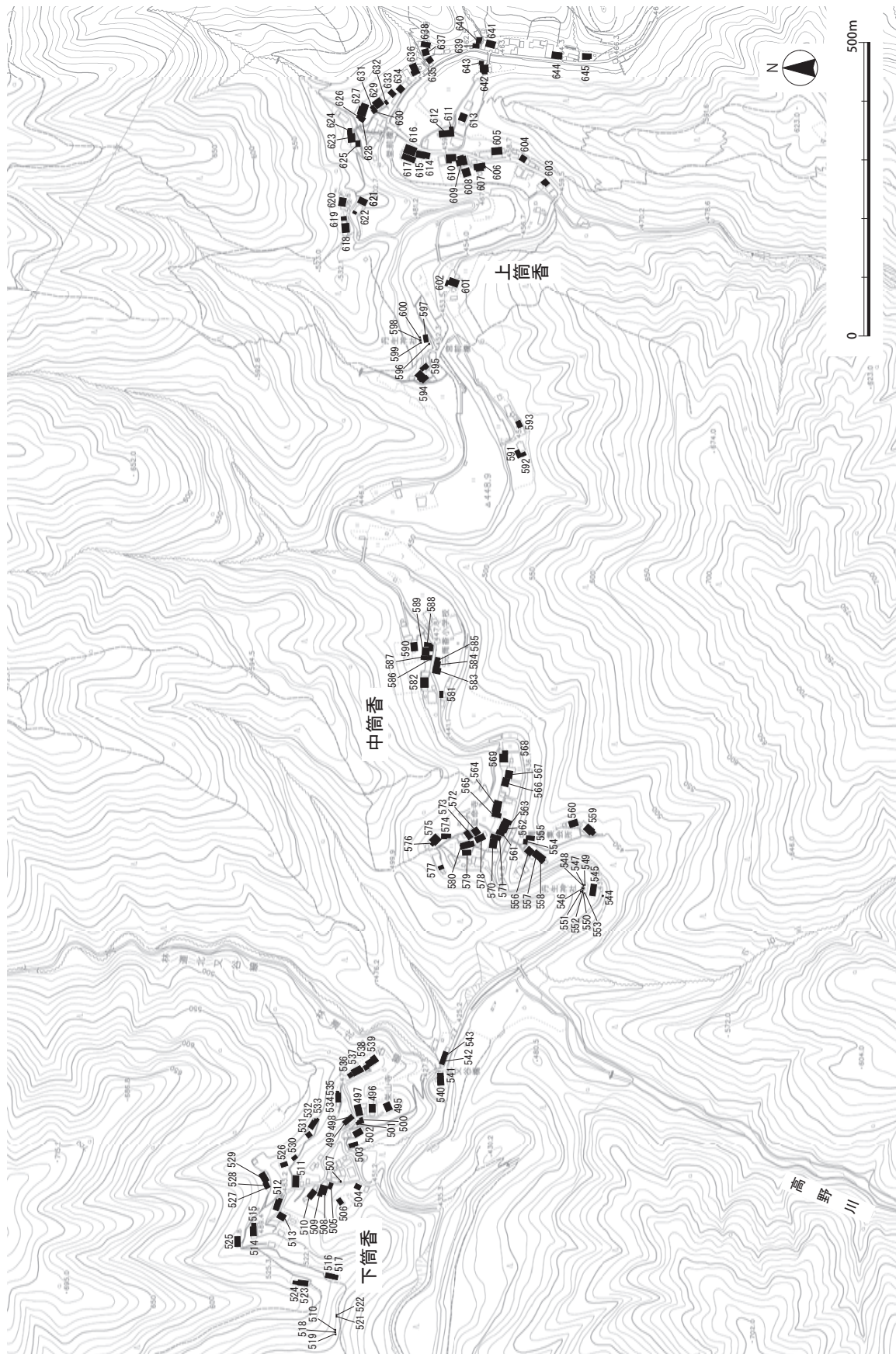


図 62 下筒香・中筒香・上筒香（「和歌山県森林基本図」（2014年）に加筆）

集落東南端の栄山寺本堂は (No. 495、図 60)、北西に面して建ち、集落景観を見渡す視点となる (図 61)。また集落西方奥には頭巾山弁財天社 (No. 518～522) が建つ。これらは『紀伊続風土記』にも記される。

(16) 中筒香 (No. 544～590)

中筒香は、下筒香の東方に位置し、丹生川の北岸に沿った道に面して民家が点在する。後述する丹生神社や延命寺が所在する西部と、旧筒香小学校が所在する東部に分かれる。

伝統的な民家として、主屋 20 棟、付属屋 16 棟の計 36 棟を確認した。主屋のうち、茅葺鉄板葺のものが 11 棟と、半数以上を占める。なかでも、中筒香 C 家 (No. 557、図 63) は墨書銘から明治 33 年 (1900) の建築とわかる。ほかは、鉄板葺 2 棟、棧瓦葺 6 棟、スレート葺 1 棟を数える。付属屋のうち 6 棟が土蔵で、置屋根として、軒まわりを塗り込めたものが多い (No. 569)。

西の集落の西端には、丹生神社 (No. 544～553) が位置する。明治期頃の建立とみられる一間社春日造、銅板葺の本殿 (No. 546、図 64) をはじめ 10 棟が建つ。



図 63 中筒香の茅葺民家 (No. 557)



図 65 中筒香・延命寺本堂 (No. 572)

また西の集落の中央部には延命寺 (No. 572、図 65) が建ち、隣に墓地をもつ。前者は『紀伊続風土記』にも記され、後者は同書に記される延寿寺を継ぐものであろうか。

下筒香と比較すると、集落の構造を一覧することが難しい一方で、大きな道に面しているためか、住民は多い。

(17) 上筒香 (No. 591～645)

上筒香は、中筒香の東方に位置し、蛇行する丹生川に沿った道に面して民家が点在する。伝統的な民家として、主屋 27 棟、付属屋 21 棟の計 48 棟を確認した。主屋のうち、茅葺鉄板葺のものが 12 棟 (No. 620 など、図 66)、棧瓦葺 13 棟と拮抗する。ほかは、スレート葺 2 棟で、勾配の緩やかな屋根で鉄板葺とする建物はない。付属屋は 5 棟が土蔵で、2 棟がたばこ乾燥小屋 (No. 595・622) である。たばこ乾燥小屋のうち 1 棟 (No. 622、図 67) は、腰屋根をもつ。

集落の西部には、丹生神社 (No. 595～600) が位置し、明治期頃の建立とみられる一間社春日造、銅板葺の本殿 (No. 598) をはじめて 5 棟が建つ。また集落



図 64 中筒香丹生神社本殿 (No. 546)



図 66 上筒香の茅葺民家 (No. 620)

の東部には西方寺本堂 (No. 637) が建つ。どちらも『紀伊続風土記』にも記される。

中筒香と同じく、集落の構造を一覧することが難しい一方で、大きな道に面しているためか、住民は多い。戦後にたばこ生産を生業の一つとしていた様子もうかがえる。

(18) 東富貴 (No. 775・779～973)

富貴は筒香の北方に位置し、南西方の七霞山と北方の防城峰の谷間に、県道 732 号線 (阪本五條線) が通る。集落はこの県道に沿って形成され、その周辺にも民家が点在する。高野山地区以外の集落のなかでは、比較的住民が多い。西方は橋本市に、北方と東方は奈良県五條市に接する。東西に大きく 2 地区にわかれ、東富貴・西富貴と呼ばれる。

東富貴では、県道は南流する丹生川に沿っており、県道に沿って主たる集落が形成されている。これとは別に、東方の谷合には桑原垣内の集落が形成されている。それぞれ、東富貴 (狭義)、桑原垣内と呼ばれる。

東富貴 (狭義) 東富貴では伝統的な民家として主

屋 105 棟、付属屋 61 棟、合計 166 棟を確認した。主屋のうち、入母屋造、茅葺鉄板葺が 13 棟 (No. 925)、杉皮葺鉄板葺が 2 棟 (No. 898・899、図 68)、鉄板葺 49 棟、棧瓦葺が 36 棟、スレート葺 1 棟、セメント瓦葺 1 棟、変形瓦葺 3 棟である。棧瓦葺のうち 1 棟 (No. 792) と鉄板葺 1 棟 (No. 862、図 69) は、かつて茅葺であったものを改修したものという。茅葺鉄板葺の民家は、勾配の緩やかな屋根をもつ鉄板葺や棧瓦葺などの建物よりも、比較的規模が大きなものが多い。このうち、東富貴 4H 家 (No. 925) は、『和歌山県の民家』(63～65 頁) で 18 世紀前期に遡るものと報告されている。一方、棧瓦葺は、つし 2 階とするものが多く、昭和前期頃以降に葺かれたようである。

県道に沿って建ち並ぶ民家は、切妻造の町家が建ち並ぶのではなく、茅葺鉄板葺、鉄板葺、棧瓦葺などが混在しており、特徴的な町並みを形成している。周辺の民家のうち、県道から北へとのびる谷筋の最も奥まった場所に建つ東富貴 1H 家 (No. 790、図 70) は明治期の建築と考えられ、大規模で、木太い良質な材を使用している。大正期から昭和前期頃改造され



図 67 上筒香のたばこ乾燥小屋 (No. 622)



図 68 東富貴の杉皮葺鉄板葺民家 (No. 898)



図 69 東富貴の鉄板葺民家 (No. 862)



図 70 東富貴の茅葺民家 (No. 790)

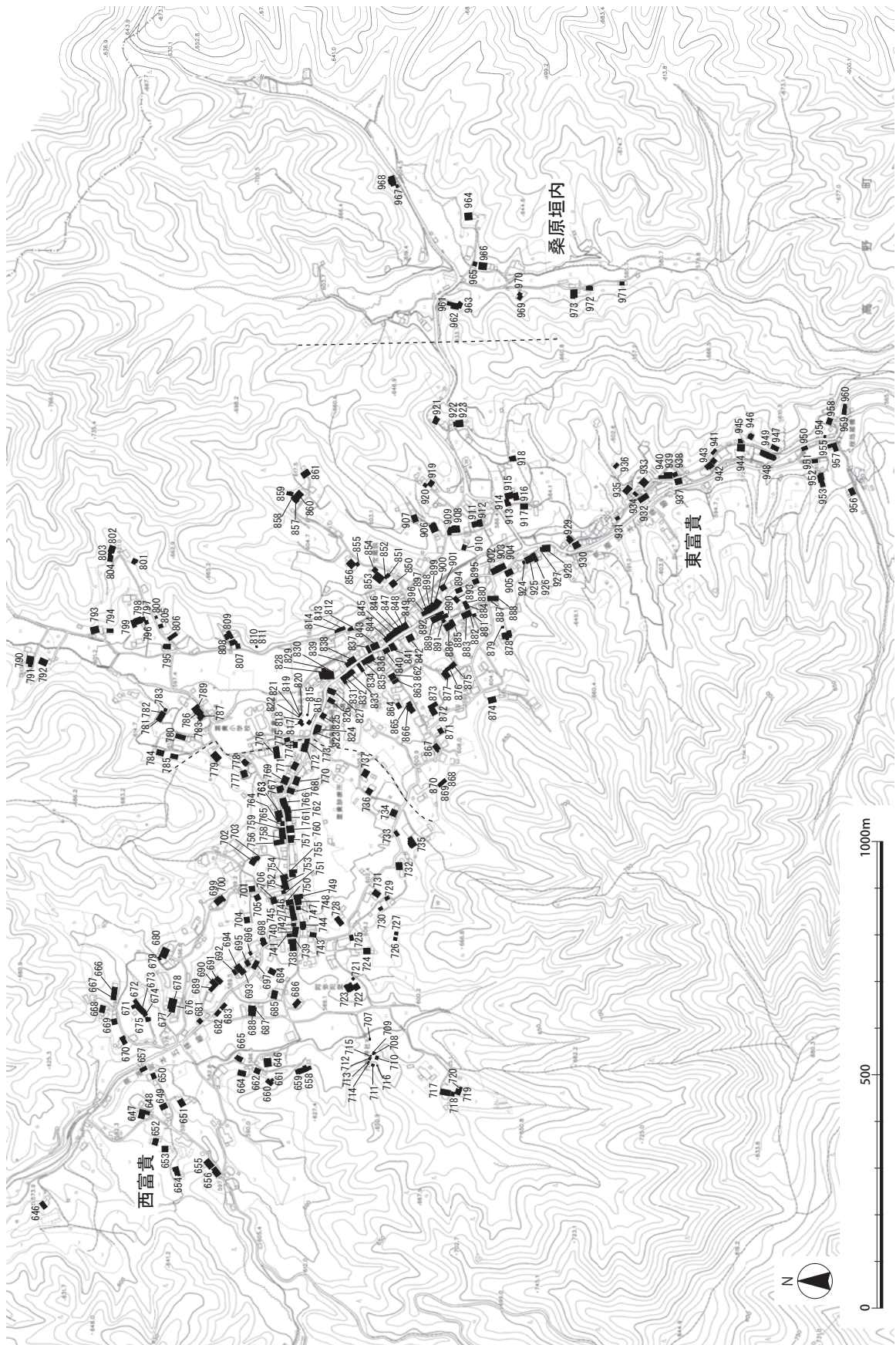


図 71 東富貴・西富貴（「和歌山県森林基本図」（2014年）に加筆）

た下屋も長い腕木を使用するなど特徴的な意匠をもつ。付属屋のうち、20棟が土蔵、7棟がたばこ乾燥小屋（No.936など、図72）である。たばこ乾燥小屋は、いずれも2階建、切妻造、鉄板葺で、昭和前期の建築とみられる。住民からの聞き取りによれば、昭和17年（1943）の大火により、県道に面した民家のうち東富貴2E家（No.839）以南、約60件を焼失したという。そのためか、この地域は茅葺民家は非常に少ない。

集落の西端には丹生神社（No.815～822）、中部には宝蔵院（No.850～854）が位置する。ともに『紀伊続風土記』にも記される。後者には大正期の建立とみられる入母屋造、鉄板葺で勾配の強い屋根をもつ本堂（No.853）、明治期の建立とみられる仏堂2棟（No.850・854）が建つ。

桑原垣内 桑原垣内は、東富貴の東方に位置する谷合の集落で、伝統的な民家として主屋6棟、付属屋7棟、計13棟を確認した。主屋は、茅葺鉄板葺が2棟、鉄板葺が1棟、棧瓦葺が3棟である。付属屋のうち、土蔵が3棟、たばこ乾燥小屋が1棟ある。



図72 東富貴のたばこ乾燥小屋（No.936）



図74 西富貴の棧瓦葺民家（No.693）

（19）西富貴（No.646～774・776～778）

西富貴は集落の西方に五ノ川が北流する。東富貴よりも平地が広く、民家が散在する。伝統的な民家として、主屋81棟、座敷棟1棟、付属屋37棟の計119棟を確認した。主屋は、茅葺鉄板葺17棟（No.685など、図73）、杉皮葺鉄板葺1棟（No.660）、鉄板葺34棟（No.681など）、棧瓦葺28棟（No.693など、図74）と、比較的茅葺民家の割合が高い。付属屋のうち、土蔵が13棟、たばこ乾燥小屋が2棟ある。

集落の南部には、丹生神社（No.707～716）、阿弥陀院（No.721～723）が位置する。ともに『紀伊続風土記』にも記される。丹生神社には大正期頃の建立とみられる一間社春日造、銅板葺の本殿（No.712）をはじめ10棟が建つ。また、阿弥陀院には昭和後期頃の建立とみられる宝形造、銅板葺の本堂（No.722、図75）が建つが虹梁形頭貫や組物・中備などに古材が用いられている。

（鈴木智大）



図73 西富貴の茅葺民家（No.685）



図75 西富貴・阿弥陀院本堂（No.722）

表5 高野町の歴史的建造物一覧（高野山地区寺院以外。No.1～1211。No.212・987・1191欠）

件名	棟名	階数	屋根形式	屋根葺材	年代
1 高野山 (No.293～296・974～1211。987・1191欠)					
293 極楽橋駅	駅舎	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
294 極楽橋駅	駅舎	1	切妻造	椀瓦葺	昭和前期
295 極楽橋駅	駅舎	1	切妻造	椀瓦葺	昭和前期
296 極楽橋駅	ホーム	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
974 大山の神	本殿		一間社流造、銅板葺		平成
975 地藏覆屋	地藏覆屋		桁行一間、梁間一間、切妻造、妻入、銅板葺		平成
976 高野山1A家	主屋	2	切妻造・入母屋造	瓦型銅板葺	昭和前期
977 高野山1B家	主屋	2	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
978 高野山1C家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
979 高野山1D家	主屋	2	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
980 高野山1E家	付属屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
981 高野山1E家	主屋	1	切妻造・入母屋造	鉄板葺	昭和前期
982 玉川地藏尊	地藏覆屋		桁行一間、梁間一間、切妻造、妻入、向拝一間、銅板葺		平成
983 高野山1F家	主屋	2	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
984 高野山1G家	門	1	切妻造	桧皮葺	昭和前期
985 高野山1G家	塀				昭和前期
986 高野山1H家	土蔵	2	切妻造	鉄板葺	大正
988 高野山1I家	主屋	2	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
989 高野山1I家	付属屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
990 高野山1J家	付属屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
991 高野山1J家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
992 高野山1K家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
993 高野山1L家	付属屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
994 高野山1M家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
995 高野山1N家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
996 高野山1O家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
997 高野山1P家	主屋	3	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
998 高野山1Q家	主屋	1	寄棟造	鉄板葺	昭和前期
999 高野山1R家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1000 高野山1S家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1001 高野山1T家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1002 高野山1U家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1003 高野山1V家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1004 高野山1W家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1005 高野山1X家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1006 高野山1Y家	主屋	1	切妻造	スレート葺	昭和前期
1007 高野山1Z家	主屋	2	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
1008 山之神大明神	本殿		一間社春日造、銅板葺		平成
1009 高野山2A家	門		一間薬師門、切妻造、鉄板葺		大正
1010 高野山2A家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1011 高野山2B家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1012 高野山2C家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1013 清高稲荷大明神	拝殿		桁行五間、梁間二間、切妻造、銅板葺		昭和後期
1014 清高稲荷大明神	本殿		一間社春日造、銅板葺		昭和後期
1015 高野山2D家	主屋	2	寄棟造	鉄板葺	昭和前期
1016 高野山2E家	主屋	2	寄棟造	鉄板葺	昭和前期
1017 高野山2F家	主屋	2	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
1018 高野山2G家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1019 高野山2H家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1020 高野山2I家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	大正
1021 高野山2J家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1022 高野山2K家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1023 高野山2L家	付属屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1024 高野山2M家	門				昭和前期
1025 高野山2M家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1026 高野山2M家	持仏堂		方三間、宝形造、鉄板葺	寺院の建物を転用か。	昭和前期
1027 高野山2M家	土蔵		二階建、桁行四間長、梁間二間長、切妻造、金属板葺		大正
1028 高野山2N家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1029 高野山2N家	土蔵	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1030 高野山2O家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1031 高野山2P家	主屋	1	切妻造	スレート葺	昭和前期
1032 高野山2Q家	主屋	1	切妻造	スレート葺	昭和前期
1033 高野山2R家	主屋	2	入母屋造	椀瓦葺	大正
1034 高野山2S家	主屋	2	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
1035 日吉九大明神	本殿		一間社春日造、見世棚造、銅板葺		昭和後期
1036 高野山2T家	主屋	2	切妻造	椀瓦葺	昭和前期
1037 高野山2T家	付属屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1038 高野山2U家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1039 高野山2V家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1040 高野山2W家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	大正
1041 高野山2W家	土蔵	2	切妻造	鉄板葺	大正
1042 高野山2X家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1043 高野山2Y家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1044 高野山2Z家	主屋	2	切妻造	椀瓦葺	昭和前期
1045 高野山3A家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1046 高野山3B家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1047 高野山3C家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1048 高野山3D家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1049 高野山3E家	主屋	2	切妻造・入母屋造	鉄板葺	昭和前期

件名	棟名	階数	屋根形式	屋根葺材	年代
1050 高野山3F家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1051 高野山3G家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1052 高野山3H家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1053 高野山3I家	主屋	2	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
1054 高野山3J家	主屋	1	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
1055 高野山3K家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1056 高野山3L家	付属屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1057 松波稲荷大明神	本殿		一間社春日造、見世棚造、銅板葺		平成
1058 高野山3M家	付属屋	1	寄棟造	鉄板葺	昭和前期
1059 高野山3M家	主屋	2	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
1060 高野山3M家	付属屋	1	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
1061 高野山3N家	主屋	2	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
1062 高野山3O家	主屋	2	切妻造・入母屋造	鉄板葺	昭和前期
1063 高野山3P家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1064 高野山3Q家	主屋	2	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
1065 高野山3R家	主屋	1	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
1066 圓山弁財天	本殿		一間社春日造、銅板葺		昭和後期
1067 珠数屋四郎兵衛	主屋	2	入母屋造	瓦型銅板葺	昭和8年(1933)
1068 高野山3S家	主屋	2	切妻造・入母屋造	鉄板葺	昭和前期
1069 高野山3T家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1070 高野山3U家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1071 高野山3V家	主屋	2	寄棟造	鉄板葺	昭和前期
1072 高野山3W家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1073 高野山3X家	倉庫	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1074 高野山3Y家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1075 高野山3Z家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1076 高野山4A家	主屋	2	切妻造	瓦型銅板葺	昭和前期
1077 高野山4A家	付属屋	2	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
1078 綱引弁財天	覆屋		桁行一間、梁間一間、切妻造、妻入、銅板葺		平成
1079 綱引弁財天	本殿		一間社流造、正面千鳥破風付、銅板葺		平成
1080 高野山4B家	主屋	2	切妻造	銅板葺	大正
1081 高野山4C家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	大正
1082 高野山4C家	土蔵	2	切妻造	鉄板葺	大正
1083 高野山4D家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1084 高野山4E家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1085 高野山4F家	主屋	2	入母屋造	銅板葺	昭和前期
1086 高野山4F家	付属屋	2	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
1087 小田原天満宮・庚申堂	本殿		一間社春日造、銅板葺		昭和前期
1088 小田原天満宮	小社		一間社、切妻造、妻入、金属板葺		平成
1089 庚申堂	庚申堂		正面一間、側面一間、宝形造、銅板葺		平成
1090 高野山4G家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1091 高野山4H家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1092 尾先弁財天	本殿		一間社春日造、銅板葺		平成
1093 高野山出版社	事務所	1	寄棟造	銅板葺	大正
1094 高野山大学	図書館	3			昭和4年
1095 高野山4I家	主屋	1	入母屋造	鉄板葺	大正
1096 高野山4J家	納屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1097 高野山4J家	納屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1098 高野山4J家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1099 高野山4K家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1100 高野山4K家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1101 高野山4L家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1102 高野山4M家	主屋	2	寄棟造	鉄板葺	昭和前期
1103 高野山4N家	土蔵	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1104 高野山4O家	主屋	2	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
1105 覚海大徳	拝殿		桁行一間、梁間二間、切妻造、銅板葺		平成
1106 覚海大徳	本殿		一間社春日造、銅板葺		昭和後期
1107 小社	摂社		一間社春日造、板葺、銅板葺、見世棚造		平成
1108 小社	倉庫		桁行三間、梁間三間、切妻造、銅板葺		平成
1109 高野山4P家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1110 高野山4Q家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1111 高野山4R家	主屋	2	切妻造	椀瓦葺	昭和前期
1112 高野山4S家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1113 高野山4T家	納屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1114 高野山4U家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1115 高野山4V家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1116 高野山4W家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1117 高野山4X家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1118 高野山4Y家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1119 高野山4Z家	主屋	2	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
1120 高野山5A家	主屋	2	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
1121 高野山5B家	倉庫	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1122 高野山5C家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1123 高野山5D家	主屋	2	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
1124 高野山5E家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
1125 愛宕大権現	本殿		一間社流造、銅板葺	擬古的作品	昭和後期
1126 愛宕大権現	倉庫		桁行一間長、梁間半間長、切妻造、スレート		昭和後期
1127 高野山5F家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期

第3章 各地区の概要

件名	棟名	階数	屋根形式	屋根葺材	年代
1128	高野山5G家	主屋	1	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
1129	高野山5H家	主屋	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1130	高野山5J家	主屋	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1131	湯谷弁天	弁天社	一間社春日造、椽皮葺銅板葺		昭和後期
1132	高野山5K家	主屋	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1133	高野山5L家	主屋	2	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
1134	高野山5M家	主屋	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1135	高野山5N家	主屋	1	切妻造 椽瓦葺	昭和前期
1136	高野山5O家	主屋	1	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1137	高野山5P家	主屋	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1138	高野山5Q家	主屋	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1139	高野山5R家	主屋	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1140	高野山5S家	主屋	2	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
1141	蔵川弁天	弁天社	一間社春日造、椽皮葺		平成
1142	蔵川弁天	稲荷社(東)	一間社流造、銅板葺		平成
1143	蔵川弁天	稲荷社(西)	一間社春日造、銅板葺		平成
1144	高野山5T家	主屋	1	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
1145	高野山5U家	付属屋	1	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
1146	高野山5V家	主屋	1	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1147	高野山5W家	主屋	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1148	高野山5X家	主屋	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1149	高野山5Y家	主屋	2	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
1150	高野山5Z家	主屋	1	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1151	高野山6A家	主屋	2	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
1152	高野山6B家	主屋	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1153	高野山6C家	主屋	1	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1154	高野山6D家	主屋	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1155	高野山6E家	主屋	1	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1156	高野山6F家	主屋	2	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
1157	助の地藏尊	拝殿	桁行三間半長、梁間一間町、入母屋造、銅板葺		平成
1158	助の地藏尊	地藏覆屋	桁行一間、梁間一間、宝形造、銅板葺		平成
1159	助の地藏尊	倉庫	桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺		平成
1160	助の地藏尊	地藏覆屋	桁行一間、梁間一間、切妻造、妻入、銅板葺		平成
1161	助の地藏尊	地藏覆屋	桁行一間、梁間一間、切妻造、妻入、銅板葺		平成
1162	交通安全地藏尊	地藏覆屋	桁行一間、梁間一間、切妻造、妻入、銅板葺		昭和後期
1163	交通安全地藏尊	地藏覆屋	桁行一間、梁間一間、切妻造、妻入、銅板葺		昭和後期
1164	地藏覆屋	地藏覆屋	桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺		平成
1165	嶽弁財天	本殿	一間社春日造、銅板葺	室町風	昭和後期
1166	嶽弁財天	休憩所	桁行二間半長、梁間一間半長、切妻造、銅板葺		昭和後期
1167	清不動尊	本堂	桁行三間、梁間三間、入母屋造、妻入、銅板葺		大正10年(額銘)
1168	高野山6G家	表門	1	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1169	高野山6H家	主屋	1	寄棟造 鉄板葺	昭和前期
1170	鬼子母神	本殿	一間社春日造、椽皮葺銅板葺		昭和後期
1171	影向神社	高野明神本殿	一間社春日造、銅板葺		昭和後期
1172	影向神社	丹生明神本殿	一間社春日造、銅板葺		昭和後期
1173	高野山6I家	主屋	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1174	高野山6J家	主屋	1	切妻造・入母屋造 鉄板葺	昭和前期
1175	稲荷神社	拝殿	桁行一間半長、梁間一間長、寄棟造、鉄板葺		平成
1176	稲荷神社	本殿	一間社春日造、鉄板葺		明治
1177	稲荷神社	地藏覆屋	桁行一間、梁間一間、切妻造、鉄板葺		昭和後期
1178	高野山6K家	主屋	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1179	高野山6L家	主屋	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1180	高野山6M家	主屋	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1181	高野山6N家	主屋	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1182	高野山6O家	主屋	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1183	高野山6P家	主屋	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1184	高野山6Q家	主屋	1	寄棟造 鉄板葺	昭和前期
1185	高野山6R家	土蔵	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1186	白玉稲荷	本殿	一間社流造、銅板葺		昭和後期
1187	金光教	表門	一間四脚門、切妻造、鉄板葺		大正
1188	金光教	本堂	桁行七間長、梁間四間半長、入母屋造、鉄板葺		大正
1189	地藏覆屋	地藏覆屋	桁行一間、梁間一間、切妻造、妻入、銅板葺		昭和後期
1190	橋本警察署高野幹部交番	交番	2	切妻造 銅板葺	大正10年
1192	熊野神社	本殿	一間社春日造、銅板葺		平成
1193	三宝荒神社	三宝荒神社	一間社春日造、銅板葺		平成26年(銘板)
1194	高野山6S家	附属屋	2	寄棟造 鉄板葺	昭和前期
1195	高野山6R家	主屋	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1196	和合庵	門	1	切妻造 銅板葺	大正15年
1197	和合庵	塀			大正15年
1198	和合庵	主屋	2	入母屋造 鉄板葺	大正15年
1199	和合庵	土蔵	2	切妻造 銅板葺	大正15年
1200	高野山6S家	主屋	1	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1201	高野山6T家	主屋	2	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
1202	高野山6U家	主屋	2	入母屋造 鉄板葺	昭和前期

件名	棟名	階数	屋根形式	屋根葺材	年代
1203	高野山6V家	主屋	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1204	高野山6W家	主屋	1	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
1205	高野山6X家	主屋	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1206	高野山6Y家	主屋	1	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1207	高野山6Z家	主屋	1	切妻造 鉄板葺	昭和前期
1208	鶯谷御子明神	本殿	三間社流造、銅板葺		平成
1209	鶯谷御子明神	社務所	三間社流造、銅板葺		昭和後期
1210	地藏堂	地藏堂	方一間、宝形造、銅板葺		昭和後期
1211	南海電気鉄道鋼索線高野山駅	駅舎	2	宝形造 銅板葺	昭和3年
2 細川 (No.199 ~ 250. 212 欠)					
東細川					
199	紀伊神谷駅	駅舎	1	切妻造 鉄板葺	昭和前期
200	東細川A家	土蔵	2	切妻造 椽瓦葺	昭和前期
201	東細川A家	主屋	1	入母屋造 椽瓦葺	昭和2年(聞き取り)
202	東細川A家	付属屋	1	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
203	東細川A家	付属屋	1	入母屋造 椽瓦葺	昭和前期
204	東細川B家	主屋	1	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
205	東細川C家	主屋	1	入母屋造 椽瓦葺	昭和前期
206	東細川D家	主屋	1	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
207	小堂	小堂	方三間、宝形造、銅板葺		昭和前期
208	東細川E家	主屋	1	入母屋造 椽瓦葺	昭和前期
209	東細川E家	付属屋	1	切妻造 鉄板葺	昭和前期
210	東細川F家	主屋	1	入母屋造 椽瓦葺	昭和前期
211	東細川F家	付属屋	2	入母屋造 椽瓦葺	昭和前期
213	祠	祠	一間社春日造、銅板葺		昭和前期
214	東細川H家	主屋	2	入母屋造 椽瓦葺	昭和前期
215	東細川H家	付属屋	2	入母屋造 椽瓦葺	昭和前期
西細川					
216	細川A家	主屋	1	入母屋造 椽瓦葺	昭和前期
217	紀伊細川駅	駅舎	1	切妻造 鉄板葺	昭和前期
218	細川B家	主屋	1	入母屋造 椽瓦葺	昭和前期
219	八幡神社	社務所	桁行十間長、梁間二間半長、切妻造、鉄板葺		昭和前期
220	八幡神社	手水舎	桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺		昭和後期
221	八幡神社	拝殿	桁行五間長、梁間三間長、入母屋造、銅板葺		昭和前期
222	八幡神社	本殿	一間社流造、銅板葺		大正
223	八幡神社	摂社	三間社切妻造、見世棚造、銅板葺		昭和後期
224	八幡神社	摂社	一間社春日造、銅板葺		大正
225	八幡神社	堂	方四間長、宝形造、銅板葺		大正
226	細川C家	主屋	1	入母屋造 椽瓦葺	昭和29年(聞き取り)
227	細川C家	付属屋	1	入母屋造 鉄板葺	大正
228	細川D家	主屋	1	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
229	細川変電所	変電所	2	陸屋根 ルーフイング	昭和前期
230	西細川A家	主屋	2	入母屋造 椽瓦葺	昭和前期
231	西細川B家	主屋	1	入母屋造 椽瓦葺	昭和前期
232	西細川B家	付属屋	1	切妻造 椽瓦葺	昭和前期
233	西細川C家	主屋	1	入母屋造 椽瓦葺	昭和前期
234	祠	祠	一間社春日造、見世棚造、椽皮葺銅板葺		昭和後期
235	西細川D家	主屋	1	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
236	西細川E家	主屋	1	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
237	西細川F家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	昭和前期
238	西細川F家	納屋	1	切妻造 鉄板葺	昭和前期
239	地藏覆屋	地藏覆屋	桁行一間、梁間一間、切妻造、妻入、銅板葺		平成
240	西細川G家	主屋	1	入母屋造 椽瓦葺	明治
241	西細川H家	主屋	1	切妻造 鉄板葺	昭和前期
242	西細川I家	主屋	1	入母屋造 椽瓦葺	昭和前期
243	西細川I家	付属屋	1	入母屋造 椽瓦葺	昭和前期
244	西細川J家	土蔵	2	切妻造 椽瓦葺	昭和前期
245	西細川K家	主屋	1	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
246	西細川L家	主屋	1	切妻造 鉄板葺	大正
247	西細川M家	主屋	1	切妻造 変形瓦	昭和前期
248	西細川N家	主屋	1	切妻造 鉄板葺	昭和前期
249	西細川O家	主屋	2	入母屋造 変形瓦	昭和前期
250	西細川P家	主屋	1	入母屋造 椽瓦葺	昭和前期
3 西郷 48棟 (No.251 ~ 292. 297 ~ 302)					
作水					
251	作水A家	主屋	1	切妻造・入母屋造 椽瓦葺	昭和前期
252	厄除地藏	地藏堂	桁行一間、梁間一間、切妻造、妻入、銅板葺		昭和後期
253	作水B家	主屋	2	入母屋造 椽瓦葺	昭和2年(聞き取り)
254	作水B家	付属屋	1	切妻造 椽瓦葺	昭和前期
255	作水C家	主屋	1	切妻造 椽瓦葺	昭和前期
256	作水D家	主屋	1	切妻造 スレート葺	昭和前期
257	作水E家	主屋	1	切妻造 椽瓦葺	昭和前期
尾細					
258	尾細A家	主屋	1	切妻造・入母屋造 椽瓦葺	昭和前期
259	尾細B家	主屋	1	切妻造・入母屋造 椽瓦葺	明治(聞き取り)
260	尾細C家	主屋	1	切妻造 椽瓦葺	大正(聞き取り)
261	尾細D家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	大正
262	尾細E家	主屋	1	切妻造 椽瓦葺	大正

件名	棟名	階数	屋根形式	屋根葺材	年代
263	尾細 E 家	納屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
264	祠	納屋	一間社春日造、銅板葺		昭和後期
桜茶屋					
265	桜茶屋 A 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
266	桜茶屋 B 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
267	桜茶屋 C 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
268	地藏堂	地藏堂	桁行一間、梁間一間、切妻造、向拝一間、銅板葺		明治
269	桜茶屋 D 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	大正
神谷					
270	神谷 A 家	主屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
271	神谷 A 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
272	むすび縁地藏	地藏堂	方一間、宝形造、鉄板葺		平成
273	神谷 B 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
274	神谷 C 家	主屋	2 切妻造	鉄板葺	大正
275	神谷 D 家	主屋	1 切妻造	棧瓦葺	昭和前期
276	旧白藤小学校	校舎	1 切妻造	鉄板葺	昭和26年(1951)
277	神谷 E 家	主屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
278	神谷 F 家	土蔵	1 切妻造	鉄板葺	大正
279	神谷 F 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	大正
280	神谷 F 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
281	神谷 G 家	主屋	1 入母屋造	棧瓦葺	昭和前期
282	白髭大神・末高大神	小社	桁行三間、梁間一間、切妻造、妻入、向拝一間、銅板葺		平成
283	神谷 H 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
284	神谷 I 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
285	神谷 J 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
286	神谷 K 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	大正
287	神谷 L 家	主屋	1 切妻造	棧瓦葺	昭和前期
288	神谷 M 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
289	神谷 N 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
290	神谷 O 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
291	神谷 P 家	主屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
292	神谷 Q 家	主屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
297	八幡宮	社務所	桁行五間半長、梁間二間長、切妻造、鉄板葺		昭和後期
298	八幡宮	手水舎	桁行一間、梁間一間、切妻造、スレート葺		昭和後期
299	八幡宮	神饌所	桁行三間長、梁間二間長、入母屋造、鉄板葺		平成
300	八幡宮	本殿	一間社春日造、銅板葺		昭和後期
301	八幡宮	摂社	一間社春日造、銅板葺		昭和後期
302	地藏覆屋	地藏覆屋	桁行一間、梁間一間、切妻造、妻入、板葺銅板葺		平成6年(棟札)
4 花坂 71 棟 (No.128 ~ 198)					
不動野 (北)					
128	丹生都比売社	本殿	一間社春日造、銅板葺		昭和後期
129	(不動野北) A 家	付属屋	2 入母屋造	茅葺鉄板葺	昭和前期
130	(不動野北) A 家	主屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
131	(不動野北) B 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	昭和前期
132	(不動野北) C 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	大正
133	(不動野北) D 家	養蚕所	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	大正
134	(不動野北) B 家	土蔵	2 切妻造	棧瓦葺	昭和前期
不動野					
135	不動野 A 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
136	不動野 A 家	付属屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
137	不動野 B 家	主屋	2 入母屋造	棧瓦葺	昭和前期
138	不動野 C 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	昭和前期
139	不動野 D 家	納屋・門	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
140	不動野 D 家	主屋	2 入母屋造	瓦形鉄板葺	昭和17年(開き取り)
141	七福大明神	本殿	一間社春日造、銅板葺		昭和後期30年程前(開き取り)
142	不動堂	不動堂	桁行二間長、梁間一間半長、寄棟造、向拝一間、鉄板葺		大正
掛谷					
143	掛谷 A 家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
144	掛谷 A 家	主屋	2 入母屋造	棧瓦葺	昭和前期
145	掛谷 A 家	納屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
146	掛谷 B 家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	大正
掛谷南					
147	掛谷南 A 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
148	掛谷南 B 家	主屋	1 切妻造・入母屋造	茅葺鉄板葺	昭和前期
上花坂					
149	上花坂 A 家	納屋	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
150	上花坂 A 家	主屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
151	上花坂 B 家	主屋	1 入母屋造	棧瓦葺	昭和前期
152	上花坂 B 家	納屋・門	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
153	上花坂 C 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	明治 日露戦争の頃(開き取り)
154	上花坂 C 家	付属屋	1 入母屋造	棧瓦葺	昭和29年(開き取り)
155	上花坂 C 家	納屋	1 入母屋造	鉄板葺	大正
156	上花坂 D 家	主屋	1 切妻造・入母屋造	変形瓦	昭和前期
166	上花坂 E 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	昭和前期
167	上花坂 E 家	付属屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
168	上花坂 E 家	付属屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
169	上花坂 F 家	付属屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
170	上花坂 F 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	昭和前期
171	上花坂 G 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期

件名	棟名	階数	屋根形式	屋根葺材	年代
172	上花坂 G 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
173	上花坂 H 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
174	無量寺	延命大師堂	方二間長、宝形造、向拝一間、銅板葺		昭和後期
175	上花坂 I 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
176	観音堂	観音堂	桁行三間、梁間三間、入母屋造、向拝一間、銅板葺		明治
177	鳴川神社	手水舎	桁行一間、梁間一間、切妻造、鉄板葺		昭和後期
178	鳴川神社	社務所	桁行五間長、梁間二間長、入母屋造、鉄板葺		平成4年(額銘)
179	鳴川神社	拝殿	桁行三間、梁間一間、切妻造、銅板葺		平成13年(寄進札)
180	鳴川神社	本殿	一間社春日造、銅板葺		大正
181	鳴川神社	摂社(右)天満神社・巖島神社	一間社春日造、銅板葺		平成
182	鳴川神社	摂社(左)地主神社・八百万神社	一間社春日造、銅板葺		平成
183	鳴川神社	境内社(前)	桁行一間、切妻造、板葺銅板葺		昭和後期
184	鳴川神社	境内社(左)	一間社春日造、板葺銅板葺		昭和後期
185	小社	小社	一間社春日造、板葺銅板葺		昭和後期
186	上花坂 J 家	主屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
187	上花坂 K 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
188	上花坂 L 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
189	茶屋坂恵比須神社	本殿	一間社流造、銅板葺		昭和後期
190	上花坂 M 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
191	上花坂 N 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
192	上花坂 O 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
193	上花坂 P 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
194	上花坂 P 家	主屋	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
195	上花坂 Q 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
196	上花坂 R 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	明治
197	上花坂 S 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
198	上花坂 T 家	主屋	1 切妻造	棧瓦葺	昭和前期
矢立					
156	地藏堂	地藏堂	桁行二間長、梁間一間長、入母屋造、向拝一間、鉄板葺		昭和後期
157	地藏堂	境内社(右)	一間社春日造、板葺銅板葺		昭和後期
158	地藏堂	境内社(左)	一間社春日造、板葺銅板葺		昭和後期
159	矢立 A 家	主屋	1 入母屋造	変形瓦	昭和前期
160	矢立 B 家	便所	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
161	矢立 B 家	主屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
162	矢立 C 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
163	花坂不動尊	本堂	桁行六間半長、梁間六間長、入母屋造、妻入、正面軒唐破風付、銅板葺		昭和後期
164	花坂不動尊	庫裏	桁行五間半長、梁間四間長、一部二階建、入母屋造、銅板葺		昭和後期
5 湯川 74 棟 (No.54 ~ 127)					
宮垣内					
54	宮垣内 A 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
55	宮垣内 B 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	大正
56	宮垣内 B 家	納屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
57	宮垣内 C 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	明治
58	宮垣内 C 家	付属屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	明治
59	宮垣内 D 家	座敷棟	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
60	宮垣内 D 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	大正
61	宮垣内 D 家	付属屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
62	宮垣内 E 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	19世紀中期
63	宮垣内 E 家	納屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
64	宮垣内 F 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	大正
65	宮垣内 F 家	離れ	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	明治
66	丹生神社	本殿	一間社春日造、銅板葺		宝暦14年(棟札)
67	丹生神社	境内社	一間社切妻造、板葺、覆屋付		昭和後期
68	宮垣内 G 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
69	宮垣内 G 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
70	宮垣内 G 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
71	宮垣内 H 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
上湯川					
72	上湯川 A 家	付属屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和32年
73	上湯川 A 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	明治
74	上湯川 B 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	昭和前期
75	上湯川 B 家	付属屋	2 入母屋造	棧瓦葺	昭和前期
76	上湯川 C 家	主屋	1 寄棟造	茅葺鉄板葺	19世紀中期
77	上湯川 C 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
78	地藏堂	地藏堂	桁行一間、梁間一間、切妻造、妻入、銅板葺		昭和後期
79	上湯川 D 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	明治
80	上湯川 D 家	付属屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	大正
81	上湯川 E 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	大正
82	上湯川 E 家	付属屋	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
83	湯川丹生神社	本殿(右)	一間社春日造、銅板葺		昭和56年(石碑)
84	湯川丹生神社	本殿(左)	一間社春日造、銅板葺		昭和56年(石碑)
85	湯川丹生神社	摂社	二間社流造、銅板葺		昭和後期
86	湯川丹生神社	境内社 耳神大明神	一間社春日造、板葺銅板葺		昭和後期
神森					
87	神森 A 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	大正
88	神森 A 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期

第3章 各地区の概要

件名	棟名	階数	屋根形式	屋根葺材	年代
89	八幡神社	本殿	一間社切妻造、銅板葺		平成
90	地藏堂	地藏堂	桁行一間、梁間一間、切妻造、妻入、銅板葺		昭和58年(寄進入、銅板葺)
91	神森B家	納屋	2 切妻造	波板鉄板葺	昭和前期
92	神森B家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	昭和前期
93	神森C家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	明治
下湯川					
94	下湯川A家	主屋	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
95	下湯川A家	納屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
96	下湯川A家	納屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
97	下湯川B家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	明治
98	下湯川B家	長屋門	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
99	小社	小社	一間社、切妻造妻入、板葺		昭和前期
100	薬師堂	薬師堂	方二間半長、宝形造、向拝一間、銅板葺		平成
101	下湯川C家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	明治
102	下湯川D家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
103	下湯川C家	座敷棟	3 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
104	下湯川E家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
105	下湯川E家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
106	下湯川F家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
107	弁財天社	小社	一間社春日造、銅板葺		平成
108	浄蓮寺	本堂	方一間長、宝形造、鉄板葺		昭和後期
109	下湯川G家	土蔵	1 切妻造	鉄板葺	明治
110	下湯川G家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
111	下湯川G家	付属屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
112	下湯川G家	離れ	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
113	下湯川H家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
114	下湯川H家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
115	下湯川H家	付属屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
116	下湯川I家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
117	下湯川I家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	明治
118	下湯川I家	納屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
119	下湯川I家	納屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
120	下湯川J家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
121	下湯川J家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
122	地藏堂	地藏堂	桁行一間、梁間一間、切妻造、妻入、銅板葺		平成
123	下湯川K家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
124	下湯川L家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
125	下湯川M家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	19世紀前期
126	下湯川M家	付属屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
127	下湯川M家	便所	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
6 西ヶ峰 22棟 (No.303 ~ 319, 386 ~ 390)					
303	西ヶ峰A家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	大正
304	西ヶ峰A家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
305	地藏堂	地藏堂	桁行二間長、梁間半間長、切妻造、銅板葺		昭和後期
306	如意輪観音堂	如意輪観音堂	方四間長、宝形造、波板葺		昭和前期
307	弁財天社	本殿	一間社春日造、銅板葺		昭和後期
308	西ヶ峰B家	土蔵	2 入母屋造	鉄板葺	大正
309	西ヶ峰B家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	明治
310	西ヶ峰C家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	大正
311	西ヶ峰C家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
312	西ヶ峰C家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
313	西ヶ峰D家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	大正
314	西ヶ峰D家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	明治
315	西ヶ峰E家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	大正
316	西ヶ峰E家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	大正
317	西ヶ峰E家	付属屋	1 入母屋造	鉄板葺	大正
318	西ヶ峰F家	主屋	1 切妻造	椋瓦葺	大正
319	地藏堂	地藏堂	桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺		昭和後期
386	丹生神社(五社大明神)	丹生神社(五社大明神)	桁行五間半長、梁間三間半長、入母屋造、鉄板葺		昭和後期
387	丹生神社(五社大明神)	丹生神社(五社大明神)	桁行二間長、梁間一間半長、向唐破風造、銅板葺		平成
388	丹生神社(五社大明神)	丹生神社(五社大明神)	本殿(右) 一間社流造、銅板葺 近世建築調査では18世紀前期とみるが、擬古作とみる		昭和後期
389	丹生神社(五社大明神)	丹生神社(五社大明神)	本殿(左) 一間社流造、銅板葺 近世建築調査では18世紀前期とみるが、擬古作とみる		昭和後期
390	丹生神社(五社大明神)	丹生神社(五社大明神)	摂社 一間社切妻造妻入、銅板葺		昭和後期
7 南 38棟 (No.320 ~ 357)					
320	石仏堂	石仏堂	方一間、宝形造、銅板葺		昭和後期
321	地藏堂	地藏堂	桁行一間、梁間一間、切妻造、妻入、板葺		平成
322	地藏堂	地藏堂	桁行一間、梁間一間、切妻造、妻入、鉄板葺		平成
323	小社	小社	一間社春日造、板葺		昭和後期
324	南A家	主屋	1 入母屋造	椋瓦葺	昭和前期
325	南A家	付属屋	2 入母屋造	椋瓦葺	昭和前期
326	南B家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
327	南C家	付属屋	1 切妻造	杉皮葺	昭和前期
328	南C家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
329	南C家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
330	南D家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
331	南E家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期

件名	棟名	階数	屋根形式	屋根葺材	年代
332	南E家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
333	地藏堂	地藏堂	桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺		平成
334	南F家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
335	南F家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
336	南G家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
337	南H家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
338	南H家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
339	南I家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
340	南I家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
341	南J家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
342	南K家	主屋	2 入母屋造	椋瓦葺	昭和前期
343	八坂神社	本殿	一間社春日造、銅板葺		平成
344	南L家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
345	南M家	主屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
346	南N家	付属屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
347	南N家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	大正
348	南O家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
349	南O家	納屋	2 入母屋造	椋瓦葺	昭和前期
350	南P家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
351	南Q家	主屋	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
352	南R家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
353	大般若経	土蔵	1 切妻造	鉄板葺	昭和後期
354	大般若経	鐘樓	桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺		平成
355	大般若経	本堂	桁行四間長、梁間五間長、入母屋造、妻入、銅板葺		大正
356	大般若経	宝蔵	方三間長、宝形造、銅板葺		昭和前期
357	大般若経	庫裏	桁行四間長、梁間二間半長、切妻造、鉄板葺		昭和前期
8 林 28棟 (No.358 ~ 385)					
358	旧高野山小学校	校舎	1 寄棟造	鉄板葺	昭和26年(1951)
359	林A家	付属屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
360	林A家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
361	林B家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
362	林C家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
363	林C家	付属屋	1 入母屋造	椋瓦葺	昭和前期
364	小社	小社(右)	一間社春日造、見世棚造、板葺銅板葺		昭和後期
365	小社	小社(左)	一間社春日造、見世棚造、板葺銅板葺		昭和後期
366	林D家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
367	林D家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
368	林D家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
369	林E家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
370	林E家	土蔵	2 入母屋造	鉄板葺	大正
371	林F家	主屋	1 切妻造	瓦形鉄板葺	大正
372	林F家	土蔵	2 切妻造	瓦形鉄板葺	昭和前期
373	林G家	主屋	1 切妻造	瓦形鉄板葺	大正
374	林H家	主屋	1 入母屋造	瓦形鉄板葺	大正
375	林I家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	大正
376	林I家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
377	林I家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
378	林J家	土蔵	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
379	林K家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
380	林K家	付属屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
381	林L家	主屋	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
382	林M家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
383	林M家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
384	地藏堂	地藏堂	桁行一間、梁間一間、切妻造、妻入、銅板葺		平成
385	地藏堂	地藏堂	桁行三間、梁間一間、切妻造、銅板葺		昭和後期
9 平原 5棟 (No.391 ~ 395)					
391	大師堂	大師堂	方一間、宝形造、向拝一間、銅板葺		昭和後期
392	平原A家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
393	平原B家	主屋	2 寄棟造	鉄板葺	昭和前期
394	アートビレッジ(元杖ヶ藪小学校)	校舎	1 切妻造	鉄板葺	昭和27年(1952)
395	アートビレッジ(元高野山中学校杖ヶ藪分校)	校舎	2 切妻造	鉄板葺	昭和27年(1952)
10 櫻原 33棟 (No.462 ~ 494)					
櫻原					
462	地藏堂	小堂	桁行一間、梁間一間、切妻造、妻入、銅板葺		昭和後期
463	地藏堂	小堂	方一間、宝形造、鉄板葺		昭和後期
464	地藏堂	覆屋	桁行一間、梁間一間、切妻造、鉄板葺		昭和後期
465	地藏堂	地藏堂(右)	方一間、宝形造、板葺		昭和後期
466	地藏堂	地藏堂(左)	方一間、宝形造、板葺		昭和後期
467	勝手大明神社	覆屋	方一間、宝形造、鉄板葺		昭和後期
468	勝手大明神社	本殿	一間社春日造、板葺		昭和前期
469	櫻原A家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
470	櫻原A家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
471	櫻原A家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
472	櫻原A家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
473	櫻原B家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
474	櫻原B家	納屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期

件名	棟名	階数	屋根形式	屋根葺材	年代
475	檜原 C 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	明治
476	檜原 C 家	付属屋	1 寄棟造	鉄板葺	昭和前期
477	檜原 C 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
478	小社	小社	一間社春日造、見世棚造、板葺銅板葺		昭和後期
小安					
479	子安地藏堂	地藏堂	桁行三間、梁間三間、寄棟造、鉄板葺		明治27年(棟札)
480	小安 A 家	付属屋	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
481	小安 A 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
482	小安 B 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
483	小安 B 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
484	小安 B 家	土蔵	2 切妻造	葺瓦葺	昭和前期
485	小安 B 家	付属屋	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
486	小安 C 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
487	小安 C 家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
488	小安 C 家	付属屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
489	小安 C 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
490	小安 D 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
491	小安 D 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
492	小安 D 家	便所	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
493	小安 E 家	主屋	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
494	小安 E 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
11 東又 15 棟 (No. 447 ~ 461)					
447	東又 A 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
448	東又 B 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
449	東又 B 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
450	東又 C 家	便所・風呂	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
451	東又 C 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	明治
452	東又 D 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
453	東又 E 家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
454	東又 D 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
455	東又 F 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
456	東又 F 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
457	東又 G 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
458	東又 G 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
459	東又 G 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
460	堂	堂	桁行三間、梁間三間、寄棟造、鉄板葺		大正
461	東又 H 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	昭和前期
12 杖ヶ藪 51 棟 (No. 396 ~ 446)					
396	石仏覆屋	石仏堂	方一間、宝形造、銅板葺		昭和後期
397	寺	本堂	桁行三間長、梁間二間半長、切妻造、鉄板葺		昭和前期
398	杖ヶ藪 A 家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	大正
399	杖ヶ藪 B 家	付属屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
400	杖ヶ藪 B 家	主屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
401	杖ヶ藪 C 家	主屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
402	石仏覆屋	石仏堂	方一間、宝形造、銅板葺		昭和後期
403	杖ヶ藪 D 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	明治
404	杖ヶ藪 D 家	付属屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
405	杖ヶ藪 D 家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	大正
406	杖ヶ藪 E 家	付属屋	1 切妻造	スレート	昭和前期
407	杖ヶ藪 E 家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
408	杖ヶ藪 E 家	主屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
409	杖ヶ藪 F 家	主屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
410	杖ヶ藪 F 家	付属屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
411	杖ヶ藪 F 家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
412	杖ヶ藪 G 家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	大正
413	八幡宮	本殿	一間社流造、銅板葺		平成
414	杖ヶ藪 G 家	付属屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
415	杖ヶ藪 H 家	付属屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
416	杖ヶ藪 H 家	主屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
417	杖ヶ藪 H 家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
418	杖ヶ藪 I 家	主屋	2 入母屋造	葺瓦葺	昭和前期
419	杖ヶ藪 I 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
420	杖ヶ藪 J 家	主屋	2 入母屋造	茅葺鉄板葺	明治
421	杖ヶ藪 J 家	付属屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
422	杖ヶ藪 K 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
423	杖ヶ藪 K 家	主屋	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
424	杖ヶ藪 L 家	主屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
425	杖ヶ藪 L 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
426	杖ヶ藪 L 家	付属屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
427	杖ヶ藪 M 家	主屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
428	杖ヶ藪 M 家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
429	杖ヶ藪 M 家	付属屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
430	杖ヶ藪 N 家	主屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
431	杖ヶ藪 N 家	納屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
432	杖ヶ藪 N 家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
433	杖ヶ藪 N 家	付属屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
434	杖ヶ藪 O 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
435	杖ヶ藪 O 家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
436	杖ヶ藪 O 家	主屋	2 入母屋造	葺瓦葺	昭和前期
437	杖ヶ藪 O 家	付属屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
438	杖ヶ藪 P 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
439	杖ヶ藪 P 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
440	丹生神社	舞台	桁行三間、梁間三間、寄棟造、スレート葺		大正

件名	棟名	階数	屋根形式	屋根葺材	年代
441	丹生神社	堂	桁行四間長、梁間二間半長、片入母屋造、片切妻造、入母屋造、鉄板葺		大正
442	丹生神社	鐘楼	桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺		平成
443	丹生神社	境内社(右)	一間社春日造、銅板葺		平成
444	丹生神社	境内社(中)	一間社切妻造、銅板葺		平成
445	丹生神社	境内社(左)	一間社春日造、板葺銅板葺		平成
446	丹生神社	本殿	一間社春日造、銅板葺		昭和前期
13 相ノ浦 33 棟 (No. 21 ~ 53)					
21	集会場(旧高野山小学校相ノ浦分校)	校舎	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
22	丹生神社	手水舎	桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺		平成
23	丹生神社	拝所	桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺		平成
24	丹生神社	社務所	桁行四間半長、梁間二間、入母屋造、鉄板葺		昭和後期
25	丹生神社	本殿(右)	一間社春日造、銅板葺		平成11年(石碑)
26	丹生神社	本殿(左)	一間社春日造、銅板葺		平成11年(石碑)
27	観音堂	観音堂	正面三間、側面二間、宝形造、銅板葺		明治
28	小堂	小堂	正面三間、側面二間、宝形造、鉄板葺		平成
29	小社	小社	一間社流造、見世棚造、銅板葺		平成
30	相ノ浦 A 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
31	相ノ浦 B 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
32	相ノ浦 C 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	大正
33	相ノ浦 C 家	納屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
34	相ノ浦 D 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
35	相ノ浦 E 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
36	祠	小社	一間社春日造、板葺、覆屋付		昭和後期
37	相ノ浦 F 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
38	相ノ浦 G 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
39	相ノ浦 G 家	納屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
40	相ノ浦 H 家	納屋	1 片流造	波板葺	昭和前期
41	相ノ浦 I 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	明治
42	相ノ浦 J 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	明治
43	相ノ浦 J 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
44	相ノ浦 J 家	納屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
45	相ノ浦 K 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
46	相ノ浦 L 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
47	相ノ浦 M 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
48	相ノ浦 N 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
49	相ノ浦 O 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
50	相ノ浦 O 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
51	相ノ浦 P 家	主屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
52	玉山弁財天	拝殿			昭和50年(説明板)
53	玉山弁財天	本殿			昭和50年(説明板)
14 大滝 20 棟 (No. 1 ~ 20)					
1	大滝丹生神社	本殿	一間社春日造、銅板葺		昭和後期
2	大滝丹生神社	善女龍王堂	方一間、宝形造、銅板葺		昭和後期
3	大滝 A 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
4	大滝 A 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
5	大滝 B 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
6	大滝 B 家	納屋	1 切妻造	波板葺	昭和前期
7	大滝 C 家	納屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
8	大滝 C 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	明治
9	大滝 C 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	明治
10	大滝 D 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	19世紀前期
11	大滝 E 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
12	大滝 F 家	主屋	1 切妻造	波板葺	明治
13	大滝 G 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
14	大滝 G 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
15	大滝 G 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
16	大滝 G 家	便所	1 切妻造	鉄板葺	大正
17	大滝 H 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期(聞き取り)
18	墓の井戸	小社	一間社流造、見世棚造、銅板葺		平成
19	大滝 I 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
20	大滝 J 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	明治
15 下筒香 49 棟 (No. 495 ~ 543)					
495	栄山寺	本堂	桁行五間長、梁間四間長、寄棟造、鉄板葺		明治
496	下筒香 A 家	主屋	1 入母屋造	葺瓦葺	昭和前期
497	下筒香 B 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
498	下筒香 C 家	主屋	1 入母屋造	葺瓦葺	昭和前期
499	下筒香 C 家	付属屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
500	下筒香 D 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	大正
501	下筒香 D 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
502	下筒香 E 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
503	下筒香 F 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
504	下筒香 G 家	主屋	1 切妻造・入母屋造	鉄板葺	大正
505	下筒香 H 家	付属屋	2 入母屋造	葺瓦葺	昭和前期
506	下筒香 I 家	納屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
507	地藏堂	地藏堂	方一間、宝形造、銅板葺		平成
508	下筒香 H 家	土蔵	2 切妻造	葺瓦葺	昭和前期

第3章 各地区の概要

件名	棟名	階数	屋根形式	屋根葺材	年代
509	下筒香H家	主屋	1	入母屋造 椀葺	昭和前期
510	下筒香J家	主屋	2	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
511	下筒香K家	主屋	2	入母屋造 椀葺	昭和前期
512	下筒香L家	主屋	1	入母屋造 椀葺	大正
513	下筒香M家	主屋	1	入母屋造 椀葺	昭和前期
514	下筒香N家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	昭和前期
515	下筒香N家	土蔵	2	切妻造 椀葺	昭和前期
516	下筒香O家	主屋	1	入母屋造 鉄板葺	大正
517	下筒香O家	付属屋	1	切妻造 鉄板葺	昭和前期
518	頭巾山弁財天社	本殿	一間社春日造、見世棚造、板葺銅板葺	昭和後期	
519	頭巾山弁財天社	摂社(左)	一間社春日造、見世棚造、板葺銅板葺	昭和後期	
520	頭巾山弁財天社	摂社(右)	一間社春日造、見世棚造、板葺銅板葺	昭和後期	
521	頭巾山弁財天社	境内社(左)	一間社春日造、見世棚造、板葺銅板葺	平成	
522	頭巾山弁財天社	境内社(右)	一間社春日造、見世棚造、板葺銅板葺	平成	
523	下筒香P家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	明治
524	下筒香P家	土蔵	2	切妻造 鉄板葺	大正
525	下筒香Q家	主屋	1	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
526	下筒香R家	主屋	1	切妻造 鉄板葺	大正
527	下筒香S家	主屋	1	入母屋造 椀葺	昭和前期
528	下筒香S家	土蔵	2	切妻造 杉皮鉄板葺	昭和前期
529	下筒香S家	納屋	1	切妻造 杉皮鉄板葺	昭和前期
530	下筒香T家	納屋	1	切妻造 鉄板葺	昭和前期
531	下筒香U家	納屋	1	切妻造 鉄板葺	昭和前期
532	下筒香U家	主屋	1	入母屋造 鉄板葺	明治
533	下筒香U家	土蔵	1	切妻造 椀葺	明治
534	下筒香V家	主屋	1	入母屋造 椀葺	昭和前期
535	下筒香V家	付属屋	1	切妻造 鉄板葺	昭和前期
536	下筒香W家	付属屋	1	切妻造 鉄板葺	昭和前期
537	下筒香W家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	大正
538	下筒香X家	土蔵	1	切妻造 椀葺	昭和前期
539	下筒香X家	主屋	2	切妻造 椀葺	昭和前期
540	下筒香Y家	主屋	1	入母屋造 椀葺	昭和前期
541	下筒香Y家	付属屋	1	入母屋造 椀葺	昭和前期
542	下筒香Z家	主屋	1	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
543	下筒香Z家	付属屋	2	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
16 中筒香 47棟 (No.544～590)					
544	丹生神社	手水舎	桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺	平成	
545	丹生神社	拜殿	RC造、切妻造、正面千鳥破風付、銅板葺	昭和後期	
546	丹生神社	本殿	一間社春日造、銅板葺	明治	
547	丹生神社	摂社	一間社春日造、見世棚造、板葺銅板葺	昭和後期	
548	丹生神社	摂社	一間社切妻造、妻入、銅板葺	昭和後期	
549	丹生神社	摂社	一間社切妻造、妻入、銅板葺	昭和後期	
550	丹生神社	摂社	一間社春日造、見世棚造、板葺銅板葺	昭和後期	
551	丹生神社	摂社	一間社切妻造、妻入、板葺銅板葺	昭和後期	
552	丹生神社	摂社	一間社春日造、見世棚造、板葺銅板葺	昭和後期	
553	丹生神社	摂社	一間社切妻造、妻入、板葺銅板葺	昭和後期	
554	中筒香A家	土蔵	2	切妻造 鉄板葺	大正
555	中筒香A家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	大正
556	中筒香B家	主屋	2	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
557	中筒香C家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	明治33年(墨書銘)
558	中筒香C家	納屋	1	切妻造 鉄板葺	大正
559	中筒香D家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	大正
560	中筒香E家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	大正
561	中筒香F家	土蔵	1	切妻造 椀葺	昭和前期
562	中筒香F家	主屋	1	入母屋造 椀葺	昭和前期
563	中筒香F家	付属屋	1	入母屋造 椀葺	昭和前期
564	中筒香G家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	大正
565	中筒香G家	付属屋	1	切妻造 椀葺	昭和前期
566	中筒香H家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	昭和前期
567	中筒香I家	主屋	1	入母屋造 椀葺	昭和前期
568	中筒香J家	土蔵	2	切妻造 椀葺	大正
569	中筒香J家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	明治
570	中筒香K家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	大正
571	中筒香K家	付属屋	1	切妻造 椀葺	昭和前期
572	延命寺	本堂	桁行四間半長、梁間三間長、入母屋造、鉄板葺	昭和前期	
573	中筒香L家	主屋	1	入母屋造 椀葺	昭和前期
574	中筒香M家	土蔵	2	切妻造 スレート	昭和前期
575	中筒香M家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	明治
576	中筒香M家	土蔵	2	切妻造 椀葺	昭和前期
577	中筒香N家	土蔵	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
578	中筒香O家	主屋	1	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
579	中筒香P家	付属屋	2	入母屋造 椀葺	昭和前期
580	中筒香P家	主屋	1	切妻造 椀葺	昭和前期
581	中筒香Q家	主屋	2	入母屋造 椀葺	昭和前期
582	中筒香R家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	大正
583	中筒香S家	付属屋	1	入母屋造 椀葺	昭和前期
584	中筒香S家	主屋	1	切妻造 椀葺	昭和前期

件名	棟名	階数	屋根形式	屋根葺材	年代
585	中筒香S家	付属屋	1	切妻造 椀葺	昭和前期
586	中筒香T家	付属屋	2	入母屋造 椀葺	昭和前期
587	中筒香T家	土蔵	2	切妻造 椀葺	昭和前期
588	中筒香T家	付属屋	2	入母屋造 椀葺	昭和前期
589	中筒香T家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	明治
590	中筒香U家	主屋	1	入母屋造 スレート	昭和前期
17 上筒香 55棟 (No.591～645)					
591	上筒香1A家	付属屋	2	入母屋造 椀葺	昭和前期
592	上筒香1A家	土蔵	2	切妻造 椀葺	昭和前期
593	上筒香1B家	主屋	1	切妻造 茅葺鉄板葺	昭和前期
594	上筒香1C家	主屋	2	入母屋造 椀葺	昭和前期
595	上筒香1C家	たばこ乾燥小屋	2	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
596	丹生神社	手水舎	桁行一間、梁間一間、切妻造、鉄板葺	昭和後期	
597	丹生神社	拜殿	桁行四間半長、梁間二間長、入母屋造、銅板葺	平成	
598	丹生神社	本殿	一間社春日造、銅板葺	明治	
599	丹生神社	摂社(左)	一間社春日造、見世棚造、板葺銅板葺	昭和後期	
600	丹生神社	摂社(右)	一間社春日造、見世棚造、板葺銅板葺	昭和後期	
601	上筒香1D家	主屋	2	入母屋造 椀葺	昭和前期
602	上筒香1D家	土蔵	2	切妻造 椀葺	昭和前期
603	上筒香1E家	付属屋	2	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
604	上筒香1F家	主屋	2	入母屋造 椀葺	昭和前期
605	上筒香1G家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	昭和前期
606	上筒香1H家	付属屋	2	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
607	上筒香1H家	主屋	1	切妻造 椀葺	昭和前期
608	上筒香1I家	主屋	2	入母屋造 椀葺	昭和前期
609	上筒香1J家	主屋	1	入母屋造 椀葺	昭和前期
610	上筒香1K家	主屋	2	入母屋造 椀葺	昭和前期
611	上筒香1L家	付属屋	1	入母屋造 椀葺	昭和前期
612	上筒香1L家	主屋	1	切妻造 椀葺	昭和前期
613	上筒香1L家	主屋	1	切妻造 スレート	大正
614	上筒香1M家	付属屋	1	切妻造 椀葺	昭和前期
615	上筒香1M家	主屋	2	入母屋造 椀葺	昭和前期
616	上筒香1N家	主屋	2	入母屋造 椀葺	昭和前期
617	上筒香1N家	付属屋	2	入母屋造 椀葺	大正
618	上筒香1O家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	昭和前期
619	上筒香1O家	土蔵	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
620	上筒香1P家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	明治
621	上筒香1Q家	門・付属屋	1	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
622	上筒香1Q家	たばこ乾燥小屋	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
623	上筒香1R家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	昭和前期
624	上筒香1R家	付属屋	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
625	上筒香1R家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	昭和前期
626	上筒香1S家	土蔵	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
627	上筒香1S家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	昭和前期
628	上筒香1S家	付属屋	2	入母屋造 椀葺	昭和前期
629	上筒香1T家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	昭和前期
630	上筒香1T家	付属屋	2	入母屋造 椀葺	昭和前期
631	上筒香1T家	土蔵	2	切妻造 椀葺	昭和前期
632	上筒香1U家	納屋	1	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
633	上筒香1U家	納屋	1	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
634	薬師堂	薬師堂	方三間、宝形造、向拝一間、鉄板葺	19世紀中期	
635	上筒香1V家	納屋	2	切妻造 椀葺	昭和前期
636	上筒香1W家	主屋	2	入母屋造 椀葺	大正
637	西方寺	本堂	桁行四間長、梁間三間半長、入母屋造、鉄板葺	大正	
638	上筒香1X家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	大正
639	上筒香1Y家	主屋	2	入母屋造 スレート	昭和前期
640	上筒香1Z家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	昭和前期
641	上筒香2A家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	昭和前期
642	上筒香2B家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	大正
643	上筒香2C家	付属屋	1	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
644	上筒香2C家	主屋	2	入母屋造 椀葺	昭和前期
645	上筒香2D家	主屋	1	入母屋造 椀葺	昭和前期
18 東富貴 196棟 (No.775～779～973)					
東富貴					
775	東富貴1A家	土蔵	2	切妻造 鉄板葺	昭和前期
779	東富貴1B家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	明治(聞き取り)
780	東富貴1C家	主屋	1	入母屋造 鉄板葺	昭和前期
781	東富貴1D家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	昭和前期
782	東富貴1D家	付属屋	1	切妻造 鉄板葺	昭和前期
783	天満宮	本殿	一間社春日造、板葺	昭和後期	
784	東富貴1E家	主屋	1	入母屋造 鉄板葺	大正
785	東富貴1F家	主屋	1	入母屋造 鉄板葺	昭和後期
786	東富貴1G家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	大正
787	東富貴1G家	付属屋	1	入母屋造 椀葺	昭和後期
788	東富貴1G家	土蔵	2	切妻造 椀葺	大正
789	東富貴1G家	付属屋	2	入母屋造 椀葺	昭和後期
790	東富貴1H家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	明治
791	東富貴1H家	土蔵	2	切妻造 鉄板葺	大正
792	東富貴1I家	主屋	1	入母屋造 椀葺	昭和前期
793	東富貴1J家	主屋	1	入母屋造 茅葺鉄板葺	大正

件名	棟名	階数	屋根形式	屋根葺材	年代
794	東富貴 1J 家	たばこ乾燥小 2 層	切妻造	鉄板葺	昭和前期
795	東富貴 1K 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
796	東富貴 1L 家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
797	東富貴 1L 家	付属屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
798	東富貴 1L 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	昭和前期
799	東富貴 1L 家	付属屋	1 切妻造	スレート葺	昭和前期
800	東富貴 1M 家	納屋	1 切妻造	椀瓦葺	昭和前期
801	東富貴 1N 家	たばこ乾燥小 2 層	切妻造	鉄板葺	昭和前期
802	東富貴 1N 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	大正
803	東富貴 1N 家	土蔵	2 切妻造	鉄板葺	大正
804	東富貴 1N 家	付属屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
805	東富貴 1O 家	土蔵	2 切妻造	椀瓦葺	大正
806	東富貴 1O 家	長屋門	1 入母屋造	椀瓦葺	大正
807	東富貴 1P 家	付属屋	2 切妻造	椀瓦葺	昭和前期
808	東富貴 1P 家	主屋	1 切妻造	椀瓦葺	昭和前期
809	東富貴 1Q 家	主屋	1 入母屋造	椀瓦葺	昭和前期
810	名追権現	覆屋	桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺	平成	
811	名追権現	本殿	一間社春日造、板葺		昭和前期
812	東富貴 1R 家	付属屋	2 切妻造	波板葺	昭和前期
813	東富貴 1R 家	主屋	2 入母屋造	椀瓦葺	昭和前期
814	東富貴 1R 家	納屋	1 切妻造	椀瓦葺	昭和前期
815	丹生神社	手水舎	桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺	平成	
816	丹生神社	舞台	桁行三間、梁間二間、切妻造、銅板葺	平成 11 年 (寄進板)	
817	丹生神社	社務所	桁行六間長、梁間二間長、入母屋造、銅板葺	平成	
818	丹生神社	神饌所	桁行三間長、梁間一間半長、入母屋造、銅板葺	平成	
819	丹生神社	本殿	一間社春日造、銅板葺		昭和後期
820	丹生神社	摂社 (右)	一間社流造、銅板葺		昭和後期
821	丹生神社	摂社 (左・右)	一間社流造、見世棚造、銅板葺		昭和後期
822	丹生神社	摂社 (左・左)	一間社流造、見世棚造、銅板葺		昭和後期
823	東富貴 1S 家	納屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
824	東富貴 1T 家	主屋	1 寄棟造	椀瓦葺	昭和前期
825	東富貴 1U 家	主屋	2 切妻造	椀瓦葺	昭和前期
826	東富貴 1U 家	主屋	1 寄棟造	鉄板葺	昭和前期
827	東富貴 1V 家	主屋	1 切妻造	椀瓦葺	昭和前期
828	東富貴 1W 家	納屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
829	東富貴 1W 家	主屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
830	東富貴 1X 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
831	東富貴 1Y 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
832	東富貴 1Z 家	土蔵	2 切妻造	椀瓦葺	昭和前期
833	東富貴 1Z 家	主屋	2 切妻造	椀瓦葺	昭和前期
834	東富貴 2A 家	主屋	2 切妻造	スレート葺	昭和前期
835	東富貴 2B 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
836	東富貴 2C 家	主屋	1 切妻造	椀瓦葺	昭和前期
837	東富貴 2D 家	主屋	2 入母屋造	椀瓦葺	昭和前期
838	東富貴 2E 家	主屋	2 入母屋造	椀瓦葺	昭和前期
839	東富貴 2E 家	土蔵	2 切妻造	椀瓦葺	昭和前期
840	東富貴 2F 家	主屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
841	東富貴 2G 家	主屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
842	東富貴 2H 家	主屋	2 入母屋造	椀瓦葺	昭和前期
843	東富貴 2I 家	主屋	2 入母屋造	椀瓦葺	昭和前期
844	東富貴 2J 家	主屋	2 切妻造	椀瓦葺	昭和前期
845	東富貴 2K 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
846	東富貴 2L 家	主屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
847	東富貴 2M 家	主屋	2 切妻造	椀瓦葺	昭和前期
848	東富貴 2N 家	主屋	2 切妻造	変形瓦	昭和前期
849	東富貴 2O 家	納屋	2 切妻造	椀瓦葺	昭和前期
850	宝蔵院	堂	桁行三間、梁間三間、寄棟造、銅板葺	明治	
851	宝蔵院	土蔵	桁行二間長、梁間一間半長、切妻造、椀瓦葺		昭和前期
852	宝蔵院	鐘楼	桁行一間、梁間一間、切妻造、椀瓦葺		昭和後期
853	宝蔵院	本堂	桁行八間長、梁間五間長、寄棟造、鉄板葺	大正	
854	宝蔵院	堂	桁行二間長、梁間二間長、寄棟造、銅板葺	明治	
855	東富貴 2P 家	土蔵	2 切妻造	椀瓦葺	大正
856	東富貴 2P 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	大正
857	東富貴 2Q 家	付属屋	1 入母屋造	椀瓦葺	昭和前期
858	東富貴 2Q 家	土蔵	2 切妻造	椀瓦葺	昭和前期
859	東富貴 2Q 家	たばこ乾燥小 2 層	切妻造	鉄板葺	昭和前期
860	東富貴 2Q 家	主屋	2 入母屋造	椀瓦葺	昭和前期
861	東富貴 2R 家	主屋	1 切妻造	椀瓦葺	昭和前期
862	東富貴 2S 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
863	東富貴 2T 家	納屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
864	東富貴 2U 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
865	東富貴 2V 家	納屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
866	東富貴 2V 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
867	東富貴 2W 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
868	東富貴 2X 家	納屋	1 切妻造	椀瓦葺	昭和前期
869	東富貴 2X 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期

件名	棟名	階数	屋根形式	屋根葺材	年代
870	東富貴 2X 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
871	東富貴 2Y 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
872	東富貴 2Z 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
873	東富貴 3Z 家	納屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
874	東富貴 3A 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	大正
875	東富貴 3B 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
876	東富貴 3B 家	納屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
877	東富貴 3C 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
878	東富貴 3D 家	主屋	2 入母屋造	椀瓦葺	昭和前期
879	東富貴 3D 家	土蔵	1 切妻造	椀瓦葺	昭和前期
880	東富貴 3E 家	納屋	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
881	東富貴 3F 家	土蔵	2 切妻造	椀瓦葺	昭和前期
882	東富貴 3G 家	付属屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
883	東富貴 3G 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
884	東富貴 3E 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
885	東富貴 3H 家	付属屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
886	東富貴 3H 家	主屋	2 入母屋造	椀瓦葺	昭和前期
887	東富貴 3I 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
888	東富貴 3I 家	納屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
889	東富貴 3J 家	付属屋	1 入母屋造	椀瓦葺	昭和前期
890	東富貴 3J 家	付属屋	2 入母屋造	椀瓦葺	昭和前期
891	東富貴 3J 家	土蔵	2 切妻造	椀瓦葺	昭和前期
892	東富貴 3J 家	主屋	2 入母屋造	椀瓦葺	昭和前期
893	東富貴 3K 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
894	東富貴 3L 家	主屋	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
895	東富貴 3M 家	主屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
896	東富貴 3N 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
897	東富貴 3O 家	主屋	2 切妻造	変形瓦	昭和前期
898	東富貴 3P 家	主屋	1 切妻造	杉皮鉄板葺	昭和前期
899	東富貴 3Q 家	主屋	1 切妻造	杉皮鉄板葺	昭和前期
900	東富貴 3R 家	主屋	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
901	東富貴 3S 家	主屋	2 入母屋造	セメント瓦	昭和前期
902	東富貴 3T 家	主屋	2 入母屋造	椀瓦葺	昭和前期
903	東富貴 3T 家	付属屋	2 入母屋造	椀瓦葺	昭和前期
904	東富貴 3U 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
905	東富貴 3V 家	主屋	2 入母屋造	椀瓦葺	昭和前期
906	東富貴 3W 家	主屋	1 入母屋造	椀瓦葺	昭和前期
907	東富貴 3X 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
908	東富貴 3Y 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	昭和前期
909	東富貴 3Y 家	納屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
910	東富貴 3Z 家	納屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
911	東富貴 4A 家	主屋	2 入母屋造	椀瓦葺	昭和前期
912	東富貴 4A 家	付属屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
913	東富貴 4B 家	土蔵	2 切妻造	椀瓦葺	昭和前期
914	東富貴 4B 家	付属屋	1 入母屋造	椀瓦葺	昭和前期
915	東富貴 4B 家	主屋	2 入母屋造	椀瓦葺	大正
916	東富貴 4B 家	付属屋	2 切妻造	鉄板葺	大正
917	東富貴 4C 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	明治
918	東富貴 4D 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
919	東富貴 4E 家	主屋	1 入母屋造	椀瓦葺	昭和前期
920	東富貴 4E 家	土蔵	2 切妻造	椀瓦葺	昭和前期
921	東富貴 4F 家	主屋	1 入母屋造	椀瓦葺	昭和前期
922	東富貴 4G 家	納屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
923	東富貴 4G 家	主屋	2 入母屋造	椀瓦葺	昭和前期
924	東富貴 4H 家	土蔵	2 切妻造	椀瓦葺	大正
925	東富貴 4H 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	18 世紀前期
	『和歌山県の民家』63～65 頁掲載。				
926	東富貴 4H 家	付属屋	2 入母屋造	椀瓦葺	昭和前期
927	東富貴 4I 家	土蔵	2 切妻造	椀瓦葺	昭和前期
928	東富貴 4I 家	主屋	2 入母屋造	椀瓦葺	昭和前期
929	東富貴 4J 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
930	東富貴 4K 家	主屋	1 入母屋造	茅葺鉄板葺	大正
931	東富貴 4L 家	主屋	2 切妻造	椀瓦葺	昭和前期
932	東富貴 4M 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
933	東富貴 4N 家	主屋	2 切妻造	椀瓦葺	昭和前期
934	東富貴 4O 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
935	東富貴 4P 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
936	東富貴 4Q 家	たばこ乾燥小 2 層	切妻造	鉄板葺	昭和前期
937	東富貴 4R 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
938	東富貴 4S 家	主屋	1 入母屋造	変形瓦	昭和前期
939	東富貴 4T 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
940	東富貴 4T 家	主屋	2 入母屋造	椀瓦葺	昭和前期
941	東富貴 4U 家	主屋	2 入母屋造	鉄板葺	昭和前期
942	東富貴 4V 家	主屋	1 切妻造	椀瓦葺	昭和前期
943	東富貴 4W 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
944	東富貴 4X 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
945	東富貴 4Y 家	納屋	2 切妻造	鉄板葺	昭和前期
946	東富貴 4Z 家	たばこ乾燥小 2 層	切妻造	鉄板葺	昭和前期
947	東富貴 5A 家	主屋	1 入母屋造	鉄板葺	大正
948	東富貴 5B 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
949	東富貴 5C 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
950	東富貴 5D 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	大正
951	東富貴 5E 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期
952	東富貴 5F 家	主屋	1 切妻造	鉄板葺	昭和前期

第3章 各地区の概要

件名	棟名	階数	屋根形式	屋根葺材	年代	
953	東富貴4F家	たばこ乾燥小2	切妻造	鉄板葺	昭和前期	
954	祠	祠	一間社春日造、見世棚造、板葺銅板葺		昭和後期	
955	東富貴4G家	付風屋	2	入母屋造	スレート	昭和前期
956	東富貴4H家	主屋	1	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
957	東富貴4I家	主屋	1	入母屋造	椀葺	昭和前期
958	東富貴4J家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
959	東富貴4K家	付風屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
960	東富貴4K家	主屋	2	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
桑原垣内						
961	桑原垣内A家	付風屋	1	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
962	桑原垣内A家	主屋	1	入母屋造	椀葺	昭和前期
963	桑原垣内A家	付風屋	1	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
964	桑原垣内B家	主屋	1	入母屋造	茅葺鉄板葺	昭和前期
965	桑原垣内C家	土蔵	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
966	桑原垣内C家	主屋	1	入母屋造	茅葺鉄板葺	昭和前期
967	桑原垣内D家	土蔵	1	切妻造	鉄板葺	大正
968	桑原垣内D家	主屋	1	切妻造	椀葺	昭和前期
969	桑原垣内E家	主屋	1	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
970	桑原垣内E家	納屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
971	たばこ乾燥場	たばこ乾燥小2	切妻造	鉄板葺	昭和前期	
972	桑原垣内F家	土蔵	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
973	桑原垣内F家	主屋	2	入母屋造	椀葺	昭和前期
19 西富貴 132棟 (No. 646 ~ 774・776 ~ 778)						
646	西富貴1A家	主屋	1	入母屋造	椀葺	昭和前期
647	西富貴1B家	主屋	1	切妻造	椀葺	昭和前期
648	西富貴1B家	付風屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
649	西富貴1D家	主屋	1	入母屋造	鉄板葺	大正
650	西富貴1D家	主屋	1	入母屋造	鉄板葺	大正
651	西富貴1E家	主屋	1	入母屋造	茅葺鉄板葺	昭和前期
652	西富貴1F家	主屋	1	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
653	西富貴1G家	主屋	1	切妻造	椀葺	大正
654	西富貴1H家	主屋	1	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
655	西富貴1I家	主屋	1	切妻造	波板葺	昭和前期
656	西富貴1J家	主屋	1	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
657	西富貴1H家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
658	西富貴1I家	付風屋	1	入母屋造	椀葺	昭和前期
659	西富貴1I家	主屋	1	切妻造	椀葺	昭和前期
660	西富貴1J家	主屋	1	切妻造	杉皮鉄板葺	大正
661	西富貴1J家	付風屋(便所)	1	切妻造	杉皮鉄板葺	昭和前期
662	西富貴1K家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
663	西富貴1L家	主屋	1	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
664	西富貴1M家	主屋	1	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
665	西富貴1M家	主屋	1	入母屋造	茅葺鉄板葺	大正
666	西富貴1N家	主屋	1	入母屋造	茅葺鉄板葺	昭和前期
667	西富貴1N家	付風屋	1	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
668	西富貴1O家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
669	西富貴1P家	主屋	1	寄棟造	鉄板葺	昭和前期
670	西富貴1Q家	主屋	1	入母屋造	椀葺	昭和前期
671	西富貴1R家	たばこ乾燥小2	切妻造	鉄板葺	昭和前期	
672	西富貴1R家	付風屋	1	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
673	西富貴1R家	主屋	1	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
674	西富貴1R家	土蔵	2	切妻造	椀葺	昭和前期
675	西富貴1R家	付風屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
676	西富貴1S家	主屋	1	入母屋造	茅葺鉄板葺	昭和前期
677	西富貴1S家	土蔵	2	切妻造	本瓦葺	昭和前期
678	西富貴1S家	付風屋	1	入母屋造	椀葺	昭和前期
679	西富貴1T家	土蔵	2	切妻造	椀葺	昭和前期
680	西富貴1T家	主屋	2	入母屋造	椀葺	昭和前期
681	西富貴1U家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	大正
682	西富貴1V家	主屋	1	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
683	西富貴1W家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
684	西富貴1X家	主屋	1	入母屋造	鉄板葺	明治
685	西富貴1Y家	主屋	1	入母屋造	茅葺鉄板葺	明治
686	西富貴1Z家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
687	西富貴2A家	主屋	2	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
688	西富貴2A家	座敷棟	1	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
689	西富貴2B家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	大正
690	西富貴2C家	主屋	1	入母屋造	茅葺鉄板葺	大正
691	西富貴2D家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	大正
692	西富貴2E家	土蔵	2	切妻造	椀葺	昭和前期
693	西富貴2E家	主屋	2	入母屋造	椀葺	大正
694	西富貴2E家	付風屋	1	入母屋造	椀葺	大正
695	西富貴2F家	付風屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
696	西富貴2G家	土蔵	1	切妻造	椀葺	昭和前期
697	西富貴2H家	主屋	2	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
698	西富貴2I家	付風屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
699	西富貴2J家	主屋	1	入母屋造	茅葺鉄板葺	大正
700	西富貴2J家	付風屋	1	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
701	西富貴2K家	主屋	2	入母屋造	椀葺	昭和前期
702	西富貴2L家	主屋	1	切妻造	茅葺鉄板葺	昭和前期
703	西富貴2L家	付風屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
704	西富貴2M家	主屋	1	入母屋造	茅葺鉄板葺	昭和前期
705	西富貴2N家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期

件名	棟名	階数	屋根形式	屋根葺材	年代	
706	西富貴2O家	主屋	1	切妻造	椀葺	昭和前期
707	丹生神社	手水舎		桁行一間、梁間一間、切妻造、鉄板葺	平成	
708	丹生神社	社務所		桁行四間長、梁間二間長、入母屋造、鉄板葺	昭和後期	
709	丹生神社	神饌所		桁行二間長、梁間二間長、入母屋造、鉄板葺	平成	
710	丹生神社	舞殿		桁行二間半長、梁間二間半長、切妻造、妻入、銅板葺	平成	
711	丹生神社	神庫		桁行二間半長、梁間二間長、正面入母屋造、背面切妻造、椀葺	昭和前期	
712	丹生神社	本殿		一間社春日造、銅板葺	大正	
713	丹生神社	左摂社(右)		一間社春日造、見世棚造、板葺銅板葺	昭和後期	
714	丹生神社	左摂社(左)		一間社春日造、見世棚造、板葺銅板葺	昭和後期	
715	丹生神社	右摂社		一間社春日造、見世棚造、板葺銅板葺	昭和後期	
716	丹生神社	境内社		一間社春日造、見世棚造、板葺銅板葺	昭和後期	
717	西富貴2P家	主屋	2	切妻造	椀葺	昭和前期
718	西富貴2P家	土蔵	2	切妻造	椀葺	昭和前期
719	西富貴2P家	付風屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
720	西富貴2P家	たばこ乾燥小2	切妻造	波板葺	昭和前期	
721	阿弥陀院	鐘楼		桁行一間、梁間一間、切妻造、椀葺	明治	
722	阿弥陀院	本堂		正面三間長、側面三間長、宝形造、銅板葺(一部古材利用)	昭和後期	
723	阿弥陀院	庫裏		桁行六間長、梁間五間長、入母屋造、椀葺	大正	
724	西富貴2Q家	主屋	1	切妻造	椀葺	昭和前期
725	西富貴2R家	主屋	2	切妻造	椀葺	昭和前期
726	西富貴2S家	土蔵	1	切妻造	椀葺	大正
727	西富貴2S家	主屋	2	入母屋造	椀葺	昭和前期
728	西富貴2T家	主屋	1	入母屋造	椀葺	昭和前期
729	西富貴2U家	付風屋	1	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
730	西富貴2U家	土蔵	1	切妻造	椀葺	昭和前期
731	西富貴2V家	主屋	1	入母屋造	椀葺	昭和前期
732	西富貴2W家	主屋	1	入母屋造	茅葺鉄板葺	昭和前期
733	西富貴2X家	主屋	1	切妻造	椀葺	昭和前期
734	西富貴2Y家	主屋	1	切妻造	椀葺	昭和前期
735	西富貴2Z家	主屋	1	切妻造	椀葺	大正
736	西富貴3A家	主屋	1	入母屋造	茅葺鉄板葺	昭和前期
737	西富貴3B家	主屋	1	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
738	西富貴3C家	主屋	1	入母屋造	茅葺鉄板葺	大正
739	西富貴3C家	付風屋	1	入母屋造	茅葺鉄板葺	大正
740	西富貴3D家	主屋	2	入母屋造	椀葺	大正
741	西富貴3D家	土蔵	2	切妻造	椀葺	大正
742	西富貴3D家	付風屋	1	切妻造	鉄板葺	大正
743	西富貴3E家	主屋	1	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
744	西富貴3F家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
745	西富貴3G家	主屋	2	切妻造	椀葺	昭和前期
746	西富貴3H家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
747	西富貴3I家	土蔵	2	切妻造	椀葺	昭和前期
748	西富貴3I家	主屋	2	入母屋造	椀葺	昭和前期
749	西富貴3I家	付風屋	1	入母屋造	椀葺	昭和前期
750	西富貴3J家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
751	西富貴3K家	土蔵	2	切妻造	椀葺	昭和前期
752	西富貴3K家	主屋	2	入母屋造	椀葺	昭和前期
753	西富貴3L家	付風屋	1	切妻造	椀葺	昭和前期
754	西富貴3L家	主屋	2	切妻造	椀葺	昭和前期
755	西富貴3M家	主屋	2	入母屋造	椀葺	昭和前期
756	西富貴3N家	主屋	1	入母屋造	茅葺鉄板葺	大正
757	西富貴3O家	主屋	1	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
758	西富貴3P家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
759	西富貴3Q家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
760	西富貴3R家	主屋	2	入母屋造	椀葺	昭和前期
761	西富貴3S家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
762	西富貴3T家	主屋	2	切妻造	鉄板葺	昭和前期
763	西富貴3U家	主屋	1	入母屋造	茅葺鉄板葺	大正
764	西富貴3U家	付風屋	1	入母屋造	鉄板葺	昭和前期
765	西富貴3V家	土蔵	2	切妻造	鉄板葺	大正
766	西富貴3W家	土蔵	1	入母屋造	椀葺	昭和前期
767	西富貴3X家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
768	西富貴3Y家	主屋	1	入母屋造	茅葺鉄板葺	大正
769	西富貴3Z家	主屋	2	入母屋造	椀葺	昭和前期
770	西富貴4A家	主屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
771	西富貴4B家	主屋	2	入母屋造	椀葺	昭和前期
772	西富貴4C家	主屋	2	入母屋造	椀葺	昭和前期
773	西富貴4C家	付風屋	1	切妻造	椀葺	昭和前期
774	西富貴4D家	付風屋	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
776	西富貴4E家	作業場	1	切妻造	鉄板葺	昭和前期
777	西富貴4F家	主屋	1	入母屋造	茅葺鉄板葺	大正
778	西富貴4G家	主屋	1	入母屋造	茅葺鉄板葺	大正

第4章 高野山地区の寺院

本章では、高野山地区の寺院について、悉皆調査の成果を報告する。以下では、10地区に分かれる谷と奥之院について、各寺院の構成を概観したうえで、歴史的建造物の概要をまとめる。調査対象物件の一覧表は章末に収録した。(表6、76～85頁)

1 本中院谷

本中院谷は、壇上伽藍の北面に接する東西道路の根本大塔より東方の一帯で、金剛峯寺、総持院、成蓮院、親王院、東室院、龍光院、明王院が並ぶ。なお便宜的に壇上伽藍は本節で取り上げる。

(1) 金剛峯寺

金剛峯寺は壇上伽藍の北西方に位置する。明治維新の太政官達により、高野山全体を統括する寺院が必要とされたため、明治2年(1869)に学侶方の青巖寺と行人方の興山寺が合併して成立した総本山寺院である。

興山寺は、豊臣秀吉の帰依を受けた木食応其によ

り、天正18年(1590)に創建された。応其に続く2世には行人方の勢眷が就き、以降、江戸時代を通じて行人方の中心寺院となった。寛永5年(1626)には幕府の命によって、裏山に東照宮が造営された。『続風土記』によれば、本堂・祖師堂・護摩堂・天堂・庫裏などが建ち並んでいたようで、また各種の絵図にも後述する青巖寺と同等の規模・構成をもつ建物群が描かれている。これらの建物は、金剛峯寺成立後、明治5年(1872)の火災により焼失した。

青巖寺は、真然の廟所が建ち、かつては覚鑿が創建した大伝法院の跡地に、豊臣秀吉が母・大政所の菩提を弔って、文禄2年(1593)に建立した剃髮寺にはじまり、後に青巖寺と改められた。慶長6年(1601)徳川家康により高野山の寺領の配分が定められた際に、検校永代の精舎とされ、以降、学侶方の支配寺院となった。元和3年(1617)には、主殿に徳川家康像が安置され、本尊となった。寛永7年(1630)壇上伽藍根本大塔への落雷に端を発した火災で類焼し、

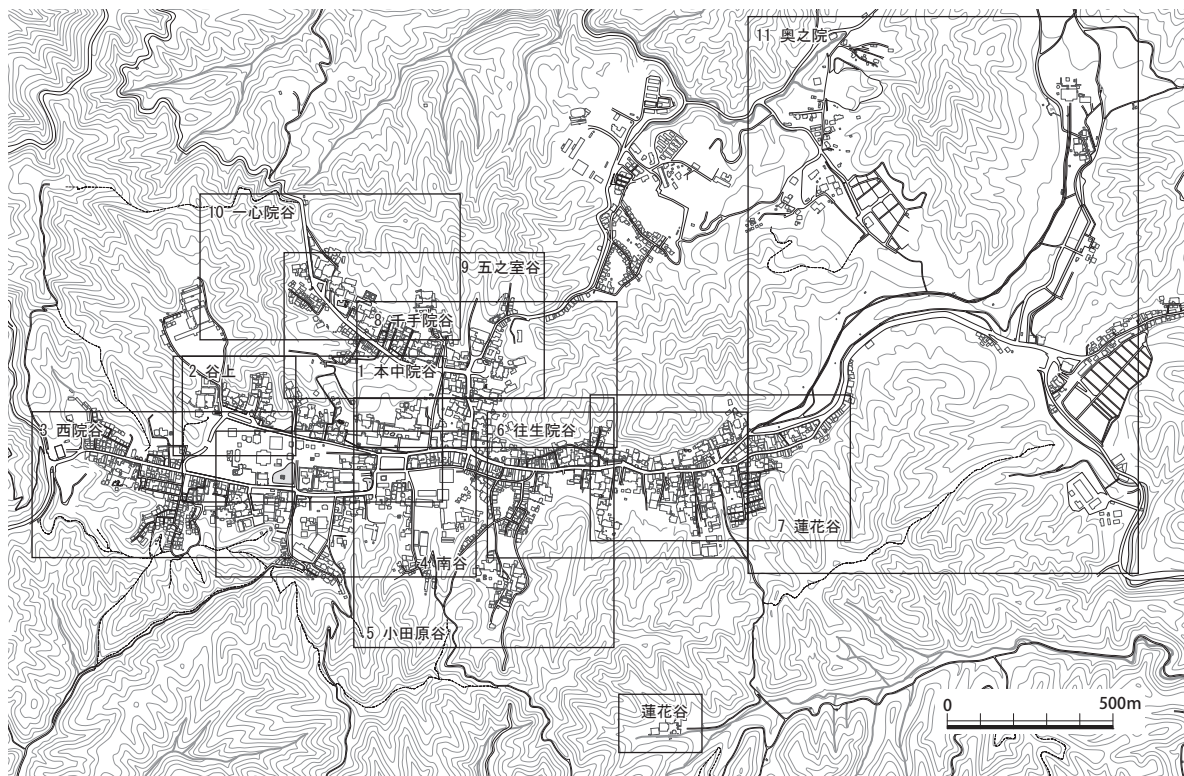


図76 高野山地区の谷構成(国土地理院作成「国土基本図2500」に加筆)

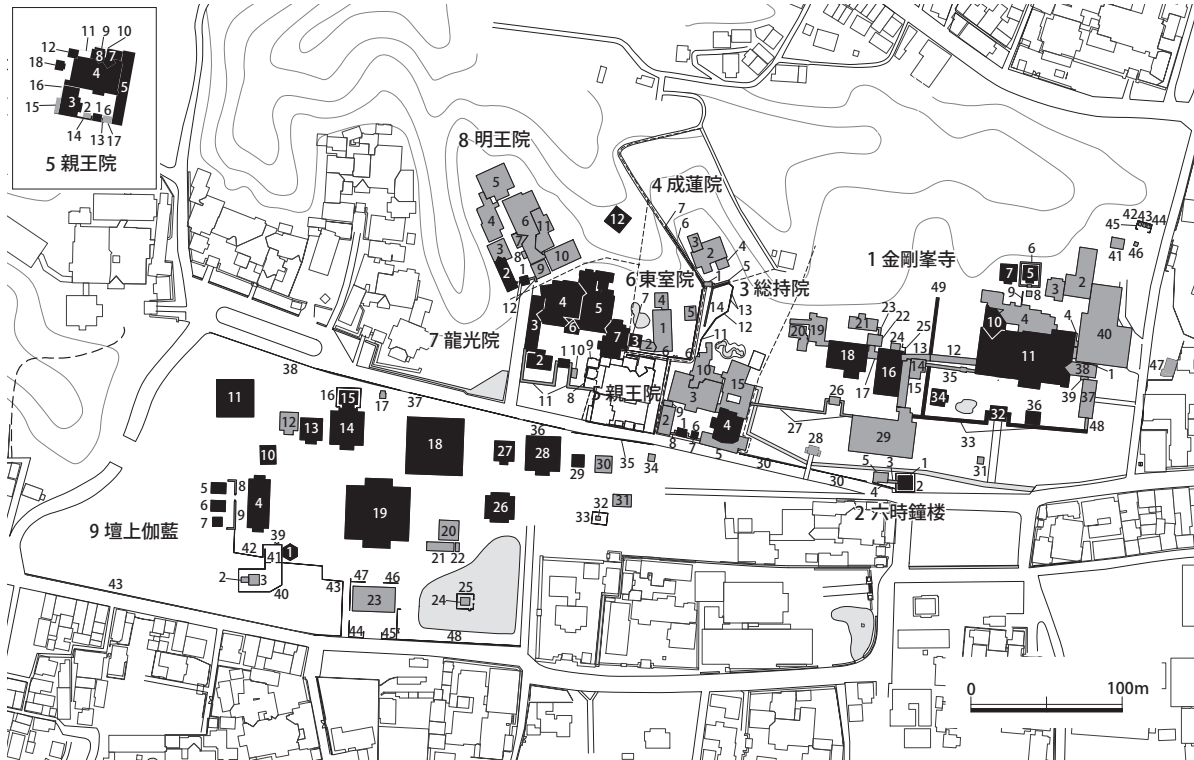


図 77 本中院谷 1:5000 (国土地理院作成「国土基本図 2500」に加筆)

同 11 年 (1634) に再建された。しかし、慶安 3 年 (1650) 五之室谷からの火災で類焼し、延宝 5 年 (1677) に再建された。そして、万延元年 (1860) にも火災により再び多くの建物を焼失し、再建がなされた。

明治維新により、金剛峯寺が成立し、興山寺裏山に建つ行人方の東照宮が廃された。そして、前述の通り、明治 5 年の火災により、旧興山寺の建物を焼失したが、青巖寺の建物が多く現存する。興山寺の敷地には、弘法大師 1100 年御遠忌記念として、昭和 8 年 (1933) に奥殿・別殿が、弘法大師 1150 年御遠忌記念として、昭和 59 年 (1984) に新別殿が建てられた。

(2) 六時鐘楼

六時鐘楼は、福島正則が父母の追福菩提を祈り、元和 4 年 (1618) に創建されたという (『高野春秋』・『続風土記』)。寛永 7 年 (1630) の壇上伽藍根本大塔への大火により焼失するも、寛永 12 年 (1635) に福島正則の息子正利によって再建され、このとき梵鐘も再鑄造されたといい、これが現存する。その後、文化 6 年 (1809) にも類焼し、20 年余り仮堂であったが、天保 6 年 (1835) に旧制に復して再建したという。しかし、元治元年 (1864) に再度焼失した。現在の建物は、慶応元年 (1865) に再建されたものであ

る。なお『続風土記』によれば、六時鐘楼に要する月々の夜燈料等費用は学侶方と行人方とで月替えて工面していたという。

(3) 総持院

総持院は、金剛峯寺の西に隣接する。『寺院明細帳』によれば、久安 5 年 (1149) に行恵総持坊 (高野山第 28 世座主) により開かれた。『続風土記』によれば、現在地には永中年間 (1504 ~ 1521) までは大湯屋が建っており、その後、親王院が再興され、慶安年間から承応年間 (1648 ~ 1655) 頃に、現在の親王院の地に立地していた総持院と、替地がなされたという。正塔院・龍城院・理性院の名跡をもつ。

『寺院明細帳』によれば、本堂は元治元年 (1864) に焼亡し、元治 2 年 (1865) には再建されたというが、現存する本堂は、これよりさらに新しく、昭和前期に建立されたものとみられる (No.3-4、図 78)。ほかには、大正期建立とみられる表門 (No.3-1、図 79) などが建つ。

(4) 成蓮院

成蓮院は、総持院と親王院の間の小道を北に入ったところに位置する。『名刹誌』によれば、兼意成蓮坊 (1072 ~ ?) により創立された。大正 5 年 (1916) に南谷より現在地に移転した。現在は、平成期建立

とみられる建物群が建つ。

(5) 親王院

親王院は、総持院の西に位置する。『続風土記』によれば、貞観年間(859～877)に真如法親王(799～865。平城天皇の第3子で、空海の十大弟子の一人)を開基として創立されたというが、遍明院主・空鏝(高野山第213世座主。?～1806)が再興するまで、どこに位置していたのかも明らかでない。慶安年間から承応年間(1648～1655)頃に、総持院と替地がなされたという。

現在は、明治4年(1871)の蔵(No.5-12)、明治12年(1879)の客殿(No.5-4、図80)・表門(No.5-1)などが建つ。

(6) 東室院

東室院は、親王院の北、龍光院の東に位置する。『続風土記』によれば、空海を開基とし、定養(958～1047)の住坊か、再興されたものと伝える。古くは、壇上伽藍の東方に位置していたようだが、文明5年(1473)の『諸院家帳』には南谷道南の項目に記され、『続風土記』によれば、慶長19年(1614)に壇



図 78 総持院本堂 (No. 3-4)

上伽藍御社山の南東に移り、元禄年間(1688～1704)に五之室谷阿弥陀峰北麓に移ったという。『寺院明細帳』によれば、明治21年(1888)に境内を類焼した後、南谷に移転し、昭和10年(1935)に現地に移転したという。昭和前期の離れ(No.6-3)などが建つ。

(7) 龍光院

龍光院は親王院の西方に建つ。学侶方に属した。『続風土記』によれば空海居住の地といい、承保元年(1074)には中院と称していたが、安元3年(1177)頃までには龍光院と改称した。江戸時代には寿門の常法談所として、法会・問講がおこなわれた。12月晦日には、壇上伽藍山王院に御幣をおさめる奉幣の儀を執りおこなう。『寺院明細帳』によれば、元治2年(1865)に本堂を焼失しており、明治14年(1881)に再建された(No.7-7、図81)。客殿・庫裏・玄関(No.7-4～6、図82)や表門(No.6-1、図83)なども、この頃に建立されたものとみられる。表門の架構は、後述する明王院表門(No.8-1)と極めてよく似ている。

背面の山上には、昭和6年(1931)再建の瑜祇塔(No.6-12)が建つ。『続風土記』によれば、貞観12年



図 79 総持院表門 (No. 3-1)



図 80 親王院客殿 (No. 5-4)



図 81 龍光院本堂及び護摩堂 (No. 7-7)

(870) 真然により、壇上伽藍根本大塔の北方に位置する獅子嶽上に建立され、永正年間(1504～1521)に焼失し、龍光院の西方に再建されたという。寛政5年(1793)の「高野山壇上并地中総絵図」では多宝塔として描かれる。昭和6年の再建にあたり、現在地に移転し、宝塔形式に改められた。

(8) 明王院

明王院は龍光院の西に接する小道を北へ入った丘の上に位置する。懷譽(?～1145)を開基とするが、創建年代は明らかでない。『寺院明細帳』によれば、



図 82 龍光院客殿・庫裏・玄関 (No. 7-4～6)



図 83 龍光院表門 (No. 7-1)



図 85 壇上伽藍中門 (No. 9-23)

本堂及び護摩堂は、明治31年(1898)に落成したというが、その後、昭和後期頃に再建されたようである(No. 8-5)。明治29年(1897)建立とみられる表門(No. 8-1、図84)などが建つ。

(9) 壇上伽藍

壇上伽藍は、大門通り北側の一段高い土地に営まれている。弘仁7年(816)に嵯峨天皇から高野山を賜った空海が建立に着手した。中軸に中門と金堂を配し、その背後に大塔および西塔を胎蔵界・金剛界として配するという伽藍配置の構想を持っていたようである(承和元年(834)「造塔知識文」)。伽藍造営は真然に引き継がれ、根本大塔、西塔、真言堂2宇が建立された(「金剛峯寺建立修行縁起」)。康保5年(968)の「金剛峯寺建立修行縁起」によれば、金剛峯寺の建物として、多宝塔(大塔)、講堂(金堂)、僧坊、真言堂2宇、多宝塔(西塔)、鐘堂、経蔵、食堂、御影堂、中門、陀羅尼幢2基、奥院塔があげられている。ただし、正暦5年(994)には大塔に落雷があり、御影堂を除く諸堂が炎上したという(『高野春秋』)。その後も、永正18年(1521)には中門と六角経蔵を



図 84 明王院表門 (No. 8-1)



図 86 壇上伽藍孔雀堂 (No. 9-12)

除く諸堂を焼失（「高野山焼失記」）、寛永7年（1630）には大塔に落雷し、御社拝殿・六角経蔵・中門を除き焼失（『高野春秋』）、天保14年（1843）に御影堂・灌頂院・大塔・金堂ほかを焼失し、昭和元年（1926）に金堂・孔雀堂・六角経蔵などが焼失するなど、幾度となく、火災に見舞われながらも、都度、再建を繰り返してきた。

壇上加藍の地形は、概ね北西方にゆくほど高い。金堂と中門（No. 9-23、図 85）が南北に並び建ち中軸を形成し、その西方に山王院本殿・拝殿・鐘楼が東面して建つ。山王院の北方には西塔が南面し、東北方には、西から、孔雀堂（No. 9-12、図 86）・准胝堂・御影堂が南面し、東南方には六角経蔵が東面して建つ。金堂の北東方には根本大塔が南面して建つ。根本大塔の東には、あめりか屋設計による鐘楼（No. 9-20、図 87）が建つ。鐘楼は、白色塗装が施されている。その東は一段低くなり、西から愛染堂・大会堂・三昧堂・東塔（No. 9-30、図 88）が南面して建つ。愛染堂の南方には、明治41年（1908）に一心院谷から移築された不動堂（No. 9-26、図 89）が東面して建ち、



図 87 壇上加藍鐘楼（No. 9-20）



図 89 壇上加藍不動堂（No. 9-26）

東塔の東南方には前述の鐘楼と同じく白色塗装を施した浄水所（No. 9-31、図 90）が建つ。中世末期から近現代に至るまでの復興の歴史を今日に伝える。

2 谷上

谷上は、壇上加藍の北面に接する東西道路の北に東西道路の根本大塔より西方の一帯で、西禅院、宝城院、正智院、宝寿院が建ち並ぶ。

（9）西禅院

西禅院は壇上加藍根本大塔の北方に位置する。学侶方に属した。『諸院家析負輯』に収録される過去帳では開基を阿闍梨泉勝とするが、『名刹誌』では明寂とする。永久年間（1113～1118）頃に、親鸞が阿弥陀院と称する草庵をなして、前述の過去帳によると阿闍梨長秀が尊勝院・阿弥陀院・西禅院を合併したという。文明5年（1473）の『諸院家帳』には谷上院道北に西禅院があがっており、現在地にあったことが確かめられる。過去帳には、文政2年（1819）および文政10年（1827）に、敷地内の2度火災によって建物を類焼、再建を繰り返し、天保3年（1833）に修



図 88 壇上加藍東塔（No. 9-30）



図 90 壇上加藍浄水所（No. 9-31）

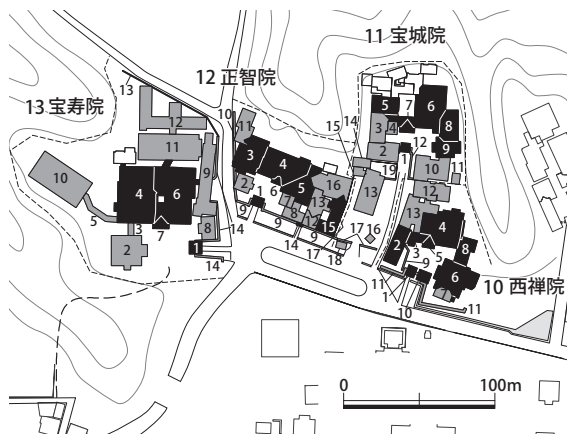


図91 谷上 1:5000 (国土地理院作成「国土基本図 2500」に加筆)

造されたという。

客殿・庫裏・玄関 (No. 10-3 ~ 5、図92) および表門 (No. 10-1、図93) は、天保3年頃の再建によるものと思われる。この他に大正2年(1913)建立の本堂 (No. 10-6) などが建つ。

(11) 宝城院

宝城院は西禅院北方の高台に位置する。学侶方に属した。『諸院家析負輯』所収の過去帳では、寺伝により琳賢大徳を開基とするが、忍信成仏房(? ~ 1232)



図92 西禅院客殿 (No. 10-4)

が後白河院の御幸に際して、勅して建立した六坊の一つに始まるとする。さらに『続風土記』では後鳥羽上皇の御幸に際したものとみている。当初は成仏院と称していたが、寛永9年(1632)に宝城院に改められた。丹波篠山藩松平家の帰依を受け、後に閑院宮家の菩提寺となった。

正面中央に表門 (No. 11-1) が開き、表門を入った正面に玄関付の客殿及び庫裏 (No. 11-5 ~ 7) が接続する。客殿東方には、本堂 (No. 11-9) が西面して建ち、表門の東西には、昭和後期頃に建てられた座敷 (No. 11-8) や会下 (No. 11-2) などが建ち並ぶ。『名刹誌』には享保年間の再建と記されるが、現存するもののうち、赤穂城から移築されたと伝わる表門は18世紀前期建立とみられ、本堂及び護摩堂は18世紀後期、客殿及び庫裏は19世紀前期の様相を示す。

(12) 正智院

正智院は、壇上伽藍西塔の北方に位置する。学侶方に属した。龍光院とともに、無量寿院および宝性院に次ぐ寺格をもつ。江戸時代には宝門の常法談所であった。開基は、『続風土記』では教覚正智房(? ~ 1232)



図93 西禅院表門 (No. 10-1)



図94 正智院本堂 (No. 12-3)



図95 宝寿院客殿 (No. 13-4)

～1117) とし、『諸院家帳』では、教覚以前の懐賢阿闍梨とする。明治期末頃から大楽院の名跡も持つ。

『寺院明細帳』によれば、大正12年(1923)の火災により経蔵・上蔵を除き全焼したという。現在の境内には、その際に再建されたとみられる本堂(No.12-3、図94)と、玄関付の客殿及び庫裏(No.12-4・5・6)などが建ち、『和歌山県の近代和風建築』(141頁)で報告されている。

(13) 宝寿院

宝寿院は、正智院西南方の台地上に位置する。学侶方に属した。大正2年(1913)に当地にあった無量寿院と、南谷にあった宝性院が合併・改称し、成立した。院内に僧侶養成機関である高野山専修学院を設けている。

無量寿院は、『続風土記』では、大僧正深覚を開基として、長元4～6年(1031～1033)頃に開かれたとされる。応永10年(1403)に本智房長覚(1340～1416)が入寺した後、学徒が集まり、この学派は寿門と呼ばれた。江戸時代には寿門主の院室と定められた。正月11日の吉初論議、月例の法会法談、春・冬2季の勸学会の下稽古にあたる内打集などが行われる。『寺院明細帳』によれば、元治元年(1864)に本堂・庫裏などを焼失した後は、清浄心院に復し、その後、明治22年(1889)再建がなされたという。

玄関付の客殿及び庫裏(No.13-4・5・7、図95)はこの再建によるもの、表門(No.13-1)は大正2年(1913)に宝寿院となった際の建立とみられる。

宝性院は法性坊学円房(?～1245)を開基とし、宥快(1345～1416)のもとに学徒が集まり、この学派は宝門と呼ばれた。江戸時代には宝門主の院室と定められ、正月7日の論議初めなど論議が行われる。『続風土記』によれば、元治元年(1864)の火災で、門・宝庫を除く建物群を焼失し、明治22年(1889)に仮の庫裏が再建されたものの、前述の通り大正2年には無量寿院と合併した。

3 西院谷

西院谷は、高野山地区の西端に位置し、大門から東に延びる東西道路を挟んだ一帯のうち、壇上伽藍中門よりも西方を指す。東西道路は『諸院家帳』では壘道と呼ばれているが、のちに大門通と呼ばれるようになった。大門寄りとなる西半は、大門通りの北に善集院が、南に西南院があるほかは、町家が多く建ち、東半には、大門通りの南に、報恩院、自性院、蓮金院、櫻池院、成慶院、宝亀院、五智院が建ち並ぶ。

明治3年(1870)の火災により、西南院、報恩院は境内の一部を焼失している。その後、明治24年(1891)

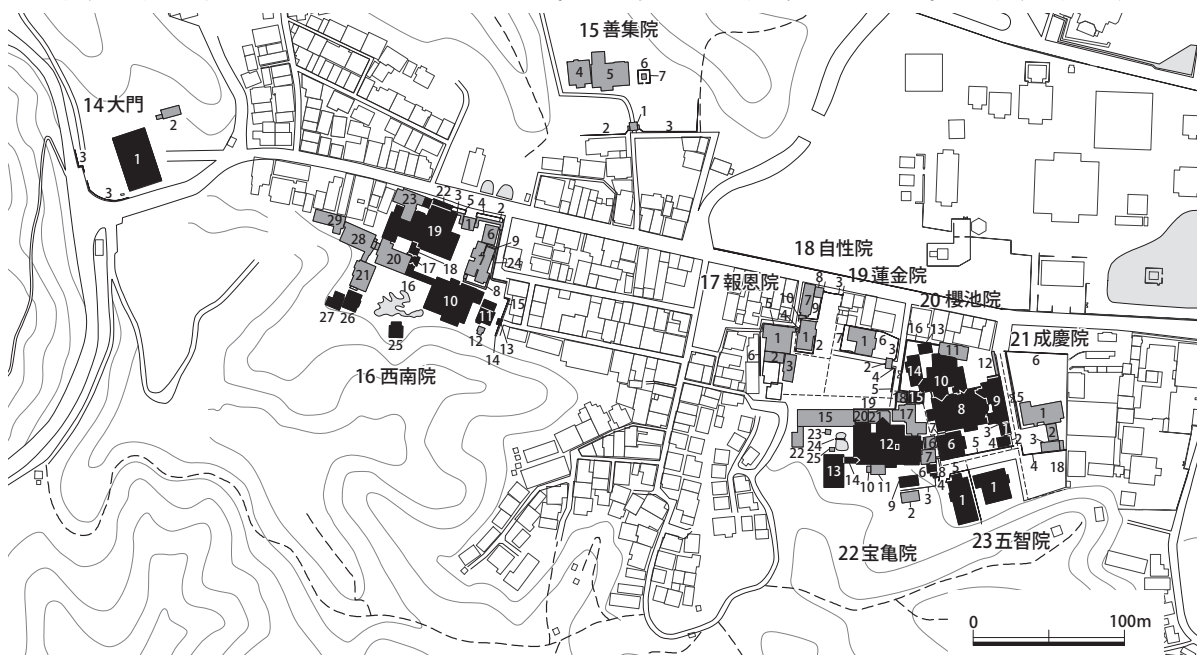


図96 西院谷 1:5000 (国土地理院作成「国土基本図2500」に加筆)

に自性院が蓮花谷より転入、成慶院が小田原谷より転入、明治44年(1911)に成慶院が移動、昭和5年(1930)に蓮金院が谷上より転入するなど、明治期から昭和前期にかけて西院谷では各院の境内地が大きく整理されている。小田原谷から転入した成慶院が行人方に属したことを除けば、各寺院はいずれも学侶方に属した。

(14) 大門

高野山の総門にあたる入母屋造、銅板葺の五間三戸楼門である(No. 13-1)。創建年や正確な場所は明らかでないが、『高野春秋編年輯録』では保延6年(1140)に現在地に移されたのち、嘉禎3年(1237)に改築、天正5年(1577)火災により焼失、慶長9年(1604)木食応其により再建、元禄元年(1688)に再度焼失したという。現在の建物(No. 14-1、図97)は、この後、元禄14年(1701)に上棟、宝永2年(1705)に落慶供養されたもので、昭和40年(1965)に重要文化財の指定を受けている。

(15) 善集院

善集院は、壇上伽藍の西方、大門通りから北へ入った高台に位置する。学侶方に属した。『続風土記』『金剛峯寺諸院析負輯』、開基は救世善集房(?~973)で、延喜21年(921)の草創という。宥快が応永13年(1406)に隠退し、中興し、同23年(1416)に没し、境内の廟所に祀られた。

現在は、平成期に再建されたとみられる建物群が建つ。

(16) 西南院

西南院は大門通りの南側西端付近に位置する。学侶方に属した。開基は真然大徳とされる。保延4年



図97 金剛峯寺大門 (No. 14-1)

(1138)に平等房永厳が私堂を構えたことを草創とする平等心院と、文治5年(1189)に統合された。

『名刹誌』によれば、明治3年(1870)に本堂や鐘楼など多くの建物を火災で焼失しており、その後再建された。本堂は明治34年(1901)に再建された。

現在の境内は、表門(No. 16-1、図98)が通りに北面して開き、表門をくぐった正面に本堂(No. 16-10)が北面する。本堂の西方には、渡廊下で坊舎群が繋がる。本堂および坊舎で囲まれた中庭は重森三玲により作庭されたもので、その南の高台には経蔵(No. 16-25)が北面して建つ。経蔵は享和3年(1803)に古材を用いて建立されたものとみられる。また本堂の裏手、南東方に建つ洋館(No. 16-11)は1970年代に神戸から移築されたものといい、大正期頃の建築とみられる。その他、境内に建つ多くの建物群は、昭和期以降に建てられたものである。

(17) 報恩院

報恩院は、大門通の南側、西南院の東方に位置する。学侶方に属した。開基は、宗禅光法房(高野山第38世検校)あるいは、真禅房懐誉とされる。文明5年(1473)の「諸院家帳」では南谷にあったことが確かめられ、『諸院家析負輯』によると、永禄8年(1565)に西院谷愛染院の地に移転したという。

『寺院明細帳』によれば、明治3年(1870)に本堂を焼失し、その後再建されたといい、また明治24年(1891)に移転再建願が出されたとする。現在境内に建つ建物群は、いずれも昭和後期以降のものである。

(18) 自性院

自性院は報恩院の北方に隣接し、後述する蓮金院と入口を共有する。『寺院明細帳』によれば、明治



図98 西南院表門 (No. 16-1)

24年(1891)に蓮花谷から現在地へ移転したという。現在境内に建つ建物群は、いずれも平成期のものとみられる。

(19) 蓮金院

蓮金院は宝亀院の北方に隣接し、前述の自性院と入口を共有する。学侶方に属した。「諸院家帳」によれば、検校をつとめた理賢(?~1190)を開基とする。室町時代に一時荒廃したが、慶長13年(1608)に、薩摩の島津氏が宝性院の政遍に託して再興したという。『寺院明細帳』によれば、谷上の現・高野山高校の入口付近に位置していたが、明治17年(1884)に境内を焼失し、昭和5年(1930)に至って現在地に移転したという。現在境内に建つ建物群は、昭和後期以降のものである。

(20) 櫻池院

櫻池院は、壇上伽藍中門の大門通りを挟んだ南方に位置する。学侶方に属した。開基は白河天皇第四皇子覚法親王と伝わり、62代検校・惠深日心房が中興したという。陽智院・養智院などとも書かれていたが、正嘉3年(1259)後嵯峨天皇が参詣した際に池辺の桜を詠んだことから改称したという。

『名刹誌』によれば、坊舎・庫裏・大玄関・小玄関などが弘化2年(1845)に、本堂は明治16年(1883)に再建されたという。現在の境内に建つ玄関付の坊舎(No.20-8、図99)が前者にあるとみられる。本堂は表門などととも昭和前期に再建されたものとみられる。

(21) 成慶院

成慶院は、壇上伽藍中門の大門通を挟んだ南方に位置する。行人方に属した。開基は行意律師で、正



図100 宝亀院本堂 (No. 22-13)

治2年(1200)土御門天皇に奏して成慶院の勅額を得たという。周防・大内氏、甲斐・武田氏らを壇越とした。もとは小田原谷南側の西門院の北方に位置していたが、明治27年(1894)に西院谷に移り、さらに明治44年(1911)に現在地に移転した。現在の境内の建物群は、昭和後期以降のものである。

(22) 宝亀院

宝亀院は、櫻池院の南に隣接しており、大門通りから南方に入ったところに位置する。学侶方に属した。延喜21年(921)に空海に弘法大師の諡号が宣下された際に、観賢(854~925)が奥之院御廟の大師に檜皮色の御衣を着せたという。その後、観賢は、毎年、御衣新調にあたる院として当院を開いたという。現在も、毎年3月17日に御衣加持がおこなわれ、衣の新調・奉納が続く。ただし、鎌倉時代の「信堅院号帳」、文明5年(1473)の「諸院家帳」には記載がない。

『名刹誌』によれば、文化6年(1809)春に経蔵を除く建物が類焼し、同年秋に本堂・坊舎が再建されたという。現在境内に建つ本堂(No.22-13、図100)・



図99 櫻池院坊舎 (No. 20-8)



図101 宝亀院客殿 (No. 22-12)



図102 宝亀院表門 (No. 22-6)

玄関付の客殿 (No. 21-12、図101)・表門 (No. 22-6、図102) は、その再建によるものとみられる。なかでも表門の絵様は18世紀中期頃の様相を示しており、古材を利用した可能性などが考えられる。文化6年に焼失を免れた経蔵は、すでに失われている。

(23) 五智院

五智院は、櫻池院の道を隔てた南方に位置する。学侶方に属した。『諸院家析負輯』『続風土記』によれば、開基は五智房融源で覚鑿の親族という。『続風土記』は、文永年間(1264～1275)に覚胤が中興したという。江戸時代には西南院の東に位置していたが、『寺院明細帳』によれば明治3年(1870)の火災

で境内を焼失し、その後、現在地に移転したという。現在の境内には、昭和前期の坊舎1棟のみが建つ。

4 南谷

南谷は、壇上伽藍の南方から東方の一帯を指す。西は壇上伽藍の中門、東は高野山大学西の南北の通り、北は蛇腹道を限りとし、西から遍照尊院、勸学院、増福院、高野山大師教会堂、高野山霊宝館、大聖院、成就院、釈迦文院、常喜院、天徳院、浄菩提院が建ち並ぶ。

(24) 遍照尊院

遍照尊院は、壇上伽藍蓮池の道を隔てた南方に位置する。学侶方に属した。開基は明らかでないが、『和歌山県の地名』によれば、三宝院 (No. 49) 蔵の「血脈中院」に、賢誓観信房が弘安7年(1284)に当院で快空要脱房に灌頂を授けた記録があるという。青森・津軽家を壇越とした。

『寺院明細帳』によれば、明治25年(1892)に本堂・坊舎・寮舎・下蔵を焼失しており、同30年(1897)に再建許可が出されている。現在境内に建つ玄関付の坊舎 (No. 24-3、図104) は、その頃再建されたもの、表門 (No. 24-1、図105) は大正期に建てられたものと

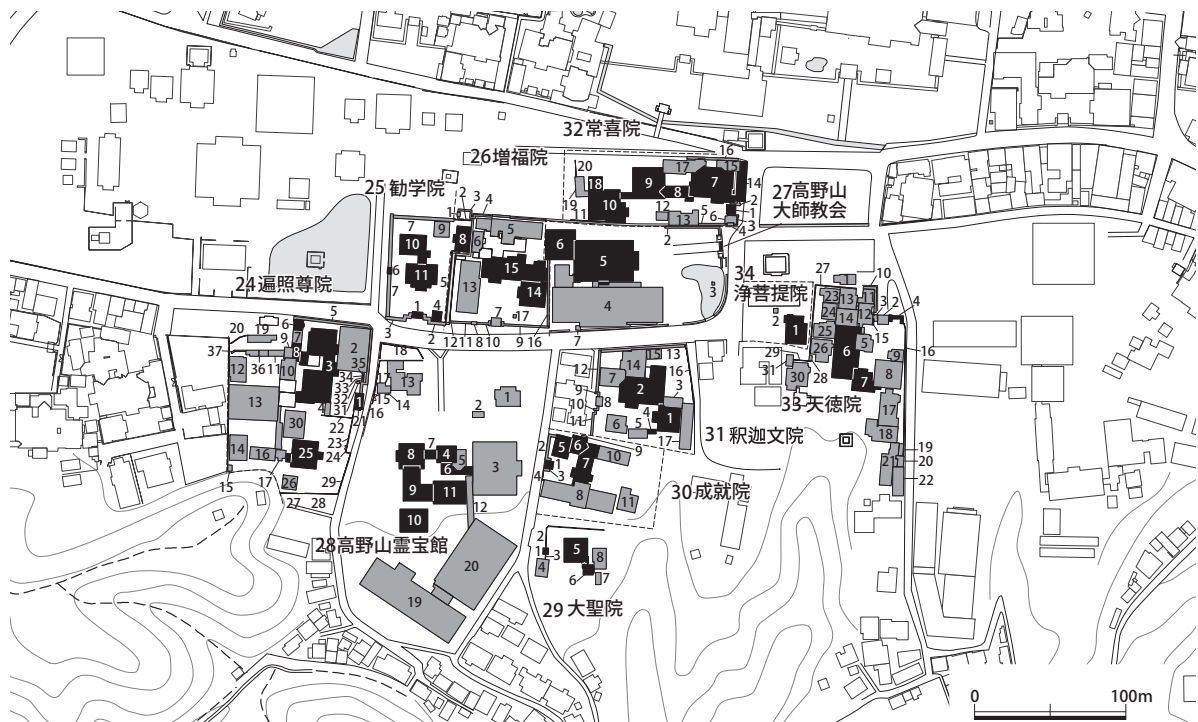


図103 南谷 1:5000 (国土地理院作成「国土基本図2500」に加筆)

みられる。この他、本堂 (No. 24-2) をはじめとする昭和後期以降の建物が建つ。

(25) 勸学院

勸学院は、壇上加藍南部の東隣に位置する。『続風土記』によれば、弘安4年(1281)に北条時宗が、安達泰盛を奉行として創建し、学修勸学練行の道場としたという。当初は、金剛三昧院にあったようである。文保2年(1318)に後宇多法皇の院宣によって、金剛三昧院から独立し、現在地に移転したという。永正18年(1521)、寛永7年(1630)、慶安3年(1650)、安永3年(1774)、文化6年(1809)にそれぞれ火災にあっており、都度再建された。

境内の南面中央に表門 (No. 25-1) が開き、表門を潜った正面に本堂 (No. 25-4) が南面して建つ。敷地の南東隅部には袴腰付の鐘楼 (No. 25-4) が建つ。本堂の裏手には、明治期以降に立てられた土蔵や寮舎が建つ。『高野山名所図会』によれば、表門、本堂、鐘楼は、文化10年(1813)に建てられたという。

毎年8～9月に、勸学会が執りおこなわれる。宝性院を中心とする宝門流と、無量寿院を中心とする

寿門流の学衆が勸学院に集まり、講讃論議をおこなう。その後、金剛峯寺の奥書院において、同様の論議をおこない、再び、勸学院において本会に入り、論議がおこなわれるという。

(26) 増福院

増福院は勸学院の東方に隣接する。学侶方に属した。開基は明らかでなく、鎌倉時代の「信堅院号帳」や文明5年(1473)の「諸院家帳」では確認できない。『続風土記』『諸院家析負輯』では、室町時代末期には存在したことが確かめられる。『続風土記』によれば、万治年間(1658～1661)頃までは谷上正智院 (No. 11) の傍に位置しており、その後、御社山の南に移り、元禄6年(1693)南谷西室院 (No. 83) の南に移った。『寺院明細帳』によれば、明治24年(1891)に現在地に移転し、本堂ほか8箇所が落成したという。旧花王院の敷地にあたり、昭和初期には北隣の心南院の敷地も合併した。現在境内に建つ本堂 (No. 26-14、図106)、玄関付の坊舎 (No. 26-15、図107) は明治24年転入当初の建物とみられる。この他にも、昭和前期とみられる表門 (No. 26-7) などの建物



図104 遍照尊院坊舎 (No. 24-3)



図105 遍照尊院表門 (No. 24-1)



図106 増福院本堂 (No. 26-14)



図107 増福院坊舎 (No. 26-15)

群が建つ。

(27) 高野山大師教会

高野山大師教会は南谷の中央部、増福院の東方、常喜院の南方に位置する。真言宗における布教の統括、信仰の確立などを目的に、明治36年(1903)に金剛峯寺に設置された。高野山開創1100年記念大法会の一環として、旧宝性院の敷地に大講堂(No. 27-5、図108)が建設された。宝性院は大正2年(1913)に無量寿院と合併し、敷地と建物は無量寿院のものが用いられた。

建設の経緯については『高野山開創老千百年記念大法会記録』(金剛峯寺、1916年)に詳しく、また『和歌山県の近代和風建築』に概要がまとめられている。設計は京都府技師であった亀岡末吉があたり、大工棟梁は地元の辻本彦兵衛が務めた。大正2年に起工、同3年(1914)上棟、同4年(1915)に竣工した。入母屋造、銅板葺、妻入、正面に1間向拝が付いた大きな建物で、内部はほぼ一室の空間で、背面寄りに須弥壇を設け、その奥に空海像を祀る。主体部は柱上に舟肘木を据えた簡素な意匠とするが、唐破風造



図108 高野山大師教会講堂 (No. 27-5)



図110 大聖院坊舎 (No. 29-5)

の向拝は彫刻で飾る。伝統的な技法を用いながらも大空間を実現した近代和風建築として重要である。

(28) 高野山霊宝館

高野山霊宝館は南谷の南部、遍照尊院の道を挟んだ東方に位置する。明治21年(1888)の大火により、山内の多くの文化財を焼失したことを契機として、高野山開創1100年記念法会の記念事業の一環として計画された。経緯は『高野山霊宝館建設報告書』(高野山霊宝館、1921年)にまとめられている。建物群については『和歌山県の近代和風建築』に報告されている。

大正7年(1918)に開設された霊宝館建設工務所の顧問を務めた黒板勝実・萩野伸三郎の推薦によって、明治神宮造営局の技師であった大江新太郎が設計にあたった。奥本吾市らが建設にあたり、同8年(1919)に上棟、同10年(1920)に開館した。

建物群は、寺院建築風の意匠を採用した木造で、内外を漆喰で塗り込める(No. 28-4、図109)。博物館機能と高野山にふさわしい意匠とを兼ね備えた近代和風建築として高く評価できる建築群である。



図109 高野山霊宝館玄関 (No. 28-4)



図111 成就院本堂 (No. 30-5)

(29) 大聖院

大聖院は霊宝館の南東方、成就院の南方に位置する。『続風土記』によれば、大聖房阿闍梨を開基とするが、どのような人物が明らかにではなく、もとは小田原谷・聖無動院にあったが、寛政末年（13年、1801）に替地をしたという。『寺院明細帳』によれば、元治元年（1864）に境内を焼失、その後再建がなされたが、大正10年（1921）に現在地に移転した。現在の境内は比較的小規模で、転入時とみられる本堂（No. 29-6）・坊舎（No. 29-5、図110）・表門（No. 29-1）などが建つ。

(30) 成就院

霊宝館の東方、大聖院の北方、釈迦文院の南方に位置する。古くは行人方に属した。『続風土記』では、院譜が開基を正和年間（1312～1317）日円房覚和とすることを記す。文明5年（1473）の『諸院家帳』に院名が確認できる。文化10年（1813）の「高野山細見絵図」では蓮花谷に描かれるが、『寺院明細帳』によれば、明治21年（1888）に伽藍を焼失、同26年（1893）蓮花谷内で移転、昭和2年（1927）旧修禅院の跡地である南谷の現在地に移転許可が出されたという。現在境内に建つ本堂（No. 30-5、図111）、坊舎（No. 30-7）、表門（No. 30-1）などは、移転当初の建物とみられる。

(31) 釈迦文院

釈迦文院は大師教会の道を挟んだ南方に位置する。学侶方に属した。開基は、鎌倉時代の「信堅院号帳」では教助、「諸院祈負輯」では祈親定誉（958～1047）とする。『名刹誌』によれば、元治元年（1864）に境内を焼失し、慶應元年に坊舎などの仮立てがな



図113 釈迦文院坊舎（No. 31-2）

されている。現在は、昭和前期の建立とみられる本堂（No. 31-1、図112）・坊舎（No. 30-2、図113）などが建つ。

(32) 常喜院

常喜院は、大師教会の北東方に隣接し、北面は蛇腹道に面する。古くは往生院谷に位置する聖の寺であったが、江戸時代には行人方に属した。『信堅院号帳』では仏種房心覚（1117～1180）を開基とする。寺伝では、道光大師実慧（786?～847）を開基とし、心覚を中興とする。元禄年間（1688～1704）小田原谷の枝谷である浄土院谷に移転した。元治元年（1864）の火災で境内を類焼し、明治3年（1870）に来迎院・三室院をあわせて往生院谷の最勝院の跡地に移転した。境内には、移転当初の建立とみられる客殿（No. 32-7）、大正11年（1922）建立の本堂（No. 32-10、図114）、いわゆる亀岡様式の絵様を備える昭和後期建築の表門（No. 32-1）、18世紀初頭に建立された行人方東照宮の経蔵を移築した校倉（No. 32-18、県指定）などが建つ。



図112 釈迦文院本堂（No. 31-1）



図114 常喜院本堂（No. 32-10）

(33) 天徳院

天徳院は金剛峯寺の南方、高野山大学の西方に位置する。学侶方に属した。『諸院析負輯』の当院の過去帳によれば、古くは西光院といい、鎮西京邇上人が草創とする。開基は、検校を務めた覚雄(?～1628)とし、前田利常正室の珠姫(天徳院)が元和8年(1622)に亡くなり、遺骸が本院に祀られたことから、改称したようである。庭園は小堀遠州の作で、国指定名勝である。『寺院明細帳』によれば、元治元年(1864)に本堂等を焼失し、明治2年(1869)に再建がなされたといひ、さらに昭和9年(1934)に前田侯爵家および藩士賛助で庫裏を改築したという。

現在境内に建つ、坊舎(No. 33-6、図115)がこれにあたり、本堂及び仏堂(No. 33-8・9)も同時期に再建されたものとみられる。

(34) 浄菩提院

浄菩提院は大師教会の道を挟んだ東方に位置する。学侶方に属した。文明5年(1473)の『諸院家帳』には、大如房阿闍梨聖菌建立とある。『和歌山県の地名』は、「血脈中院」(三宝院蔵)から承元・建保年間(1207～1219)頃に灌頂を受けた人物とする。『続風土記』によれば、はじめ西院谷にあり、寛文10年(1670)に遍照尊院南方の十輪院の地に移り、明治期以降に現在地に移ったという。境内には現在、昭和前期建立とみられる土蔵造の本堂(No. 34-1、図116)と平成期に建てられた小社(No. 34-2)が建つのみである。

5 小田原谷

小田原谷は、壇上伽藍及び金剛峯寺の東方に続く



図115 天徳院坊舎(No. 33-6)

一帯で、商店を中心とした市街地が形成されており、寺院は点在している。奥之院へとつづく東西道路の南に、如意輪寺、西門院が、北に、蓮花院、高室院が位置し、東西道路に平行する南の東西道路に安養院が面する。さらに南に延びる枝谷の奥に金剛三昧院が位置する。

(35) 如意輪寺

如意輪寺は金剛峯寺の道を挟んだ南方に位置する。学侶方に属した。文明5年(1473)の「諸院家帳」によれば、開基は俊蓮房阿闍梨頼暹で、『続風土記』によれば中興は宥信(?～1432)である。もとは西院谷にあったが、『寺院明細帳』によれば明治期には小田原谷に移っており、明治21年(1888)に本堂を焼失し、同25年(1892)に本堂、同28年(1895)に坊舎が再建されている。また1983年刊行の『和歌山県の地名』には、新本堂が建設中とある。現在の境内に建つ坊舎(No. 35-6)は明治28年再建のもの、本堂(No. 35-7)は昭和後期再建のものとみられる。

(36) 安養院

安養院は小田原谷の南に平行する実相院谷の東部、高野山大学の東方に位置する。行人方に属した。鎌倉時代に金剛三昧院の別院として建立されたと伝えるが、開基は明らかでない。『続風土記』は中興を頼賢意教(1196～1274)とする。弘治年間(1555～1558)に毛利元就が勢尊阿闍梨と師檀の契りを結んで以来、毛利家の菩提所とされる。『寺院明細帳』によれば、明治21年に境内を焼失し、同23年(1890)に再建された。現在境内に建つ、本堂(No. 36-12)・坊舎(No. 36-10、図118)・表門(No. 35-1)などは、この再建によるものとみられる。



図116 浄土菩提院本堂(No. 34-1)

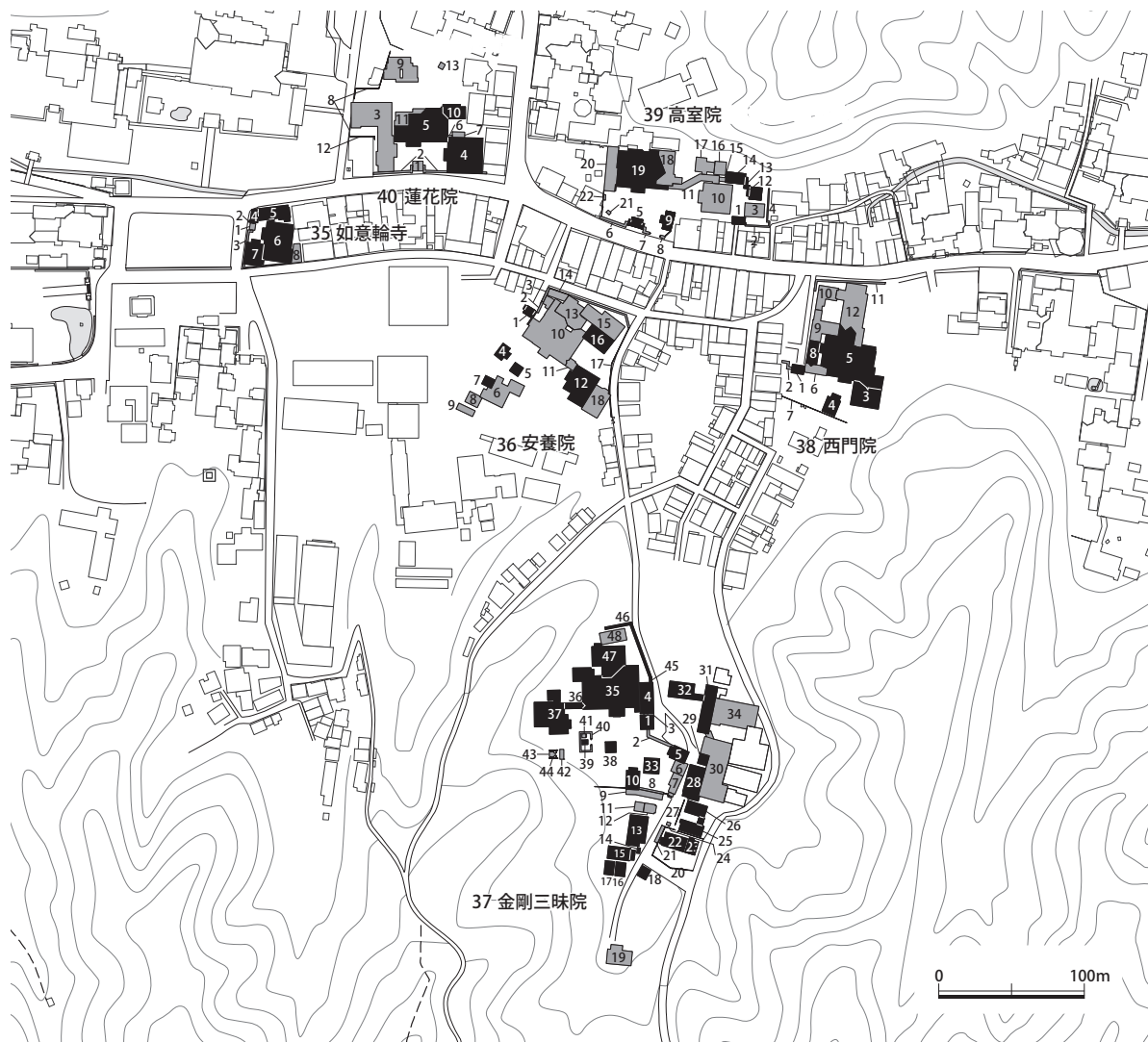


図 117 小田原谷 1:5000 (国土地理院作成「国土基本図 2500」に加筆)

(37) 金剛三昧院

金剛三昧院は安養院から南方に延びる道を上った高台に位置する。江戸時代には学侶方に属した。北条政子が源頼朝の菩提のために、建暦元年(1211)に禅定院を建立し、さらに承久元年(1219)に改建し、金剛三昧院と改称し、貞応2年(1223)頃に堂舎が完

成したという。開山は退耕行勇(1163～1241)で、密禅律の三宗兼学の寺院として、代々の長老は鎌倉幕府により山外の僧が任命された。

境内には、鎌倉時代建立の多宝塔(No. 37-33)・経蔵(No. 37-38)、天文21年(1552)の四所明神社本殿(No. 37-39)、寛永元年(1624)の客殿及び台所(No. 37-



図 118 安養院坊舎 (No. 36-10)



図 119 金剛三昧院客殿及び台所 (No. 37-35)

35、図119)、同時期とみられる本堂及び位牌堂 (No. 37-37)、文政8年(1825)建立の表門 (No. 37-1) など、昭和前期以前の建物が多く建つ。

(38) 西門院

西門院は小田原谷の東端南部に位置する。行人方に属した。『名刹誌』によれば、開基は教懐で、延久年間(1069～1074)の創建で、永久年間(1113～1118)に醍醐寺理性院二世の上野阿闍梨宝心が隠遁した院という。当初は釈迦院と号し、寛喜年間(1229～1232)後白河天皇の中宮藻壁門院(西御門院)の崇信を受け、堂舎を再営し、西門院と改めた。『寺院明細帳』によれば、敷地の北半は大正5年(1916)に編入されている。

『名刹誌』によれば、元治元年(1864)の火災で護摩堂、上門などを焼失したが、嘉永4年(1851)再建の本堂、文化年中建設の上蔵は焼失を免れた。その後、庫裏を元治元年、会下を明治17年(1884)、方丈を明治27年(1894)に再建したとする。現在境内に建つ本堂 (No. 38-3、図120) は嘉永4年再建、坊舎 (No. 38-5) は明治27年再建のものにあたとみられ



図120 西門院本堂 (No. 38-3)



図122 高室院仏堂 (No. 39-12)

る。表門 (No. 38-1、図121) は、大正期の境内拡張に際して建立されたものとみられる。円通寺山門と同じく、竜宮門の形式をもつ。

(39) 高室院

高室院は小田原谷の北東部に位置する。学侶方に属した。『続風土記』によれば、開基は房海阿闍梨で、古くは智慧門院と号したが、後に高室院と改めた。『寺院明細帳』によれば、明治21年(1888)に本堂や坊舎などを焼失し、同24年(1891)には坊舎や表門などを再建している。

『和歌山県の近代和風建築』(142頁)では、庫裏 (No. 39-14) をこの頃再建されたものとみる。このほか、境内には昭和前期建立とみられる表門 (No. 39-1)、土蔵造の仏堂 (No. 39-12、図122)、昭和後期建立とみられる鉄筋コンクリート造の本堂 (No. 38-10) などが建つ。大乘院・発光院などの名跡をもつ。

(40) 蓮花院

蓮花院は金剛峯寺の東方に位置する。聖方の代表的な寺院であった。もとは五之室谷の現・南院の地に位置した。寺伝では弘法大師の開基とするが、『高



図121 西門院表門 (No. 38-1)



図123 蓮花院本堂 (No. 40-4)

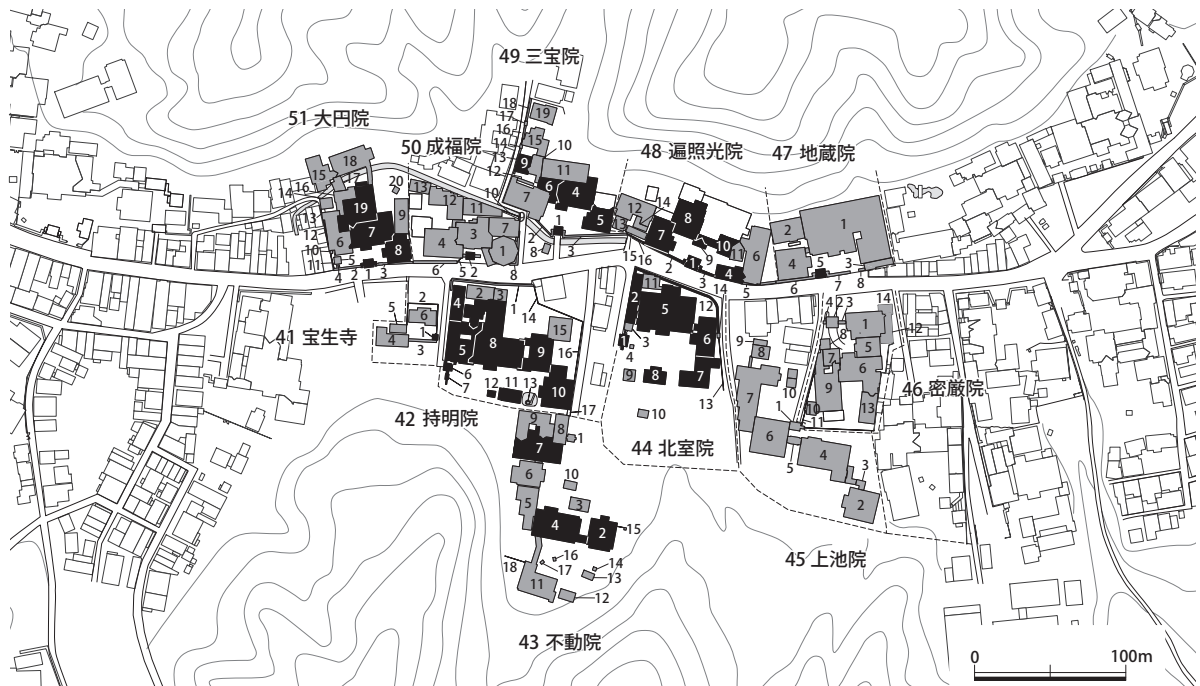


図 124 往生院谷（国土地理院作成「国土基本図 2500」に加筆）

野伽藍院跡考』などは寿永2年(1183)快仙僧都の開基とする。大伝法院学頭・俊晴上座の住房であったが、大伝法院が根来へ下山した後は、時宗聖の庵となっていた。江戸時代には、徳川家の帰依を受け、大徳院と改号し、背面の山腹には東照宮および台徳院の霊屋(現・徳川家霊台)が建てられた。『寺院明細帳』によれば、明治4年(1871)の移転に際し、大徳院の号を廃し、同年に蓮花院の号に復した。『名刹誌』によれば、明治12年(1879)の大火で類焼し、同21年から22年に落成したという。現在の境内には、その頃もしくはその後まもなく再建されたとみられる本堂(No.40-4、図123)、客殿及び庫裏(No.40-5)が建つ。本堂は正面の柱間装置を土扉とし、耐火を意識したものと思われる。

6 往生院谷

往生院谷は、小田原谷の東につづく一帯を指し、東は苺萱堂東方の南北道を限りとする。東西道の南側に西から、宝生寺、持明院、不動院、北室院、上池院、密蔵院が、北側に西から大円院、成福院、三宝院、遍照光院、地藏院が建ち並ぶ。

(41) 宝生寺

宝生寺は往生院谷の南側西端に位置する。『寺院明細帳』によれば、創立、開基は不詳で、もとは蓮花谷の東部に位置していたが、明治21年(1888)に火

災によって本堂・坊舎を焼失し、同31年(1898)に往生院谷に移転し、昭和9年(1934)現在地に移転した。境内には、移転当初に建てられたとみられる表門(No.41-1、図125)などが建つ。

(42) 持明院

持明院は往生院谷の南側西部、宝生寺の東方に位置する。東には往生院谷の支谷である西谷の通りが接する。学侶方に属した。鎌倉時代の『信堅院号帳』には真誉が建立し、覚鑿が最初に住房したとする。文明5年(1473)の『諸院家帳』では南谷道南に記される。『続風土記』によれば、元禄年間(1688～1704)に高野聖断で改易された往生院谷・十輪院の地に移転したという。『寺院明細帳』によれば、明治43年(1910)に堂宇を全焼し、その後、大正11年(1922)に方丈、居間、湯殿、西寮舎、北寮舎を再建、昭和



図 125 宝生寺表門 (No. 41-1)

3年(1928)に庫裏、玄関、台所を改築、昭和6年(1931)に本堂を改築したという。

『和歌山県の近代和風建築』(140・141頁)では、寺蔵史料から、現存する土蔵造の本堂(No.42-10)は昭和2年(1927)の上棟、庫裏(No.42-8、図126)は大正14年(1925)の上棟とする。また、鐘楼(No.42-12、図127)は絵様が18世紀中期の様相を示しており、別の場所から移築されたものの可能性がある。

(43) 不動院

不動院は、往生院谷の支谷である西谷の西方、持明院の南方に位置する。古くは聖方に属した。『続風土記』は嵯峨天皇の皇子が十二坊を建て、菩提心院と号したのに始まるとし、済高が居住して、月上院とも呼ばれたとする。また不動院・明王院・松雲院・吉祥院を菩提心院というとし、西谷の総称とする。鎌倉時代の『信堅院号帳』は菩提心院を鳥羽上皇妃美福門院の建立とし、月上院を大乘房上人の建立とする。『寺院明細帳』によれば、昭和9年(1934)に敷地を拡張し、境内の様様替えをおこなったという。

現在の境内には、江戸時代前期建立とみられる書



図 126 持明院庫裏 (No. 42-8)

院(県指定。No.43-7)、昭和前期の本堂(No.43-2)、坊舎(No.43-4)などが建つ。

(44) 北室院

北室院は往生院谷の南側、持明院の西谷を挟んだ東方に位置する。学侶方に属した。鎌倉時代の『信堅院号帳』の「北室 解脱房」にあたる。『続風土記』によれば、弘法大師の開基で、もとは谷上・正智院の南方にあったが、元禄年間(1688～1704)に高野聖断で改易された往生院谷・観音院の地に移転したという。文明5年(1473)の『諸院家帳』には長久5年(1044)に山籠職に補された行明の名が記される。行明は北室と号した。

現在の境内には、昭和前期の建立とみられる本堂(No.44-5、図128)・坊舎(No.44-6)・表門(No.44-1)などが建つ。

(45) 上池院

上池院は往生院谷の南部東端、密厳院の南方に位置する。江戸時代には萱堂聖の本寺であった安養寺成仏院の子院の一つで、観音院とも呼ばれた。『続風土記』によれば、開基は不明で、円慶による中興と



図 127 持明院鐘楼 (No. 42-12)



図 128 北室院本堂 (No. 44-5)



図 129 密厳院苜萱堂 (No. 46-1)

する。『寺院明細帳』によれば、大正8年(1919)に境内を焼失し、その後再建されたという。

現在の境内には、昭和後期以降とみられる建物群が建つほかに、院名の由来となった覚鑿池がある。

(46) 密厳院

密厳院は往生院谷の南部東端に位置し、東西道路に北面して菴堂(No.46-1、図129)が建つ。『続風土記』によれば、覚鑿の私房として、大治5年(1130)に建立された。大伝法院とともに鳥羽上皇の勅願寺となった。保延6年(1140)に覚鑿が根来に退いた後、正応元年(1288)に密厳院も大伝法院とともに根来に移った。その後、跡地に再建され、鎌倉時代の『信堅院号帳』、文明5年(1473)の『諸院家帳』にも記される。

菴堂は、江戸時代には安養寺成仏院と総称される聖方の寺であった。中世には、心地覚心を祖とする菴堂聖の本拠地となり、菴堂も唱導の舞台として有名となった。

『寺院明細帳』によれば、菴堂は万延元年(1860)に類焼し、その後再建され、現在の建物は昭和6年

(1931)に建立されたものとみられる。この他の建物は、昭和後期以降のものともみられる。

(47) 地藏院

地藏院は往生院谷の北側東端、密厳院の道を挟んだ北方に位置する。鎌倉時代の『信堅院号帳』には尊海阿闍梨(地藏坊仁濟)の持仏堂とあり、『続風土記』でも開基とされる。もとは東に位置していた万福院の地にあったが、元禄年間に替地をしたという。

明治後期の建立とみられる表門(No.47-5、図130)が建ち、その他は昭和後期以降のものともみられる。

(48) 遍照光院

遍照光院は往生院谷の北側東部、地藏院の西方に位置する。学侶方に属した。『続風土記』によれば、弘法大師を開基とし、白河上皇の熊野御幸に際して、熊野別当湛増(1130～1198)が行在所として造営し、その後、仏種房心覚が湛増から譲りうけ、三世となったという。『名利誌』によれば、文久元年(1861)に庫裏・二階建寮舎が、同2年(1862)に本堂・護摩堂が、同15年(1882)に坊舎が、同27年(1894)に書院・居間などが再建されている。現在境内に建つ



図130 地藏院表門(No.47-5)



図131 遍照光院坊舎(No.48-8～10)



図132 遍照光院本堂及び護摩堂(No.48-7)



図133 遍照光院表門(No.48-1)

玄関付の坊舎 (No. 48-8 ~ 10、図 131) は文久元年建立、同 15 年増築、本堂及び護摩堂 (No. 48-7、図 132) は文久 2 年建立、表門 (No. 48-1、図 133) は明治前期の建立とみられる。

(49) 三宝院

三宝院は往生院谷の北側、遍照光院の西方に位置する。学侶方に属した。寺伝によれば、空海の母・阿刀氏の居所として、山下の慈尊院境内にあったものを、死後、山上に移したという。鎌倉時代の『信堅院号帳』、文明 5 年 (1473) の『諸院家帳』は、和泉阿闍梨源空の建立とする。

『名刹誌』では、寛永 7 年 (1630) の坊舎、享保 13 年 (1728) の本堂、護摩堂、方丈・寮舎、庫裏、寛延元年 (1748) の上蔵などを挙げるが、現存するものはない。現在の境内には、明治後期建立の本堂及び護摩堂 (No. 49-5、図 134)・坊舎 (No. 49-4・6)・表門 (No. 49-1) が建ち、他にも昭和後期以降の建物が多数建つ。



図 134 三宝院本堂 (No. 49-5)



図 135 成福院摩尼宝塔 (No. 50-1)

(50) 成福院

成福院は往生院谷の北側西部、三宝院の西方に位置し、東は往生院谷の支谷である北谷に接する。『続風土記』によれば、藤之坊とも称し、大永 3 年 (1523) に火災で全焼した後、天文年間 (1532 ~ 1555) に 192 代検校の堯栄により再興されたという。『寺院明細帳』によれば、万延元年 (1860) に本堂を焼失し、明治 16 年 (1883) に再建されたというが、その後建て替えられたようである。現在の境内には、昭和前期の建立とみられる表門 (No. 49-2) が建つ。その他は、昭和 59 年 (1984) 建立の高野山摩尼宝塔 (No. 50-1、図 135) をはじめ昭和後期以降の建物が建つ。

(51) 大円院

大円院は往生院谷の北側西端に位置する。行人方に属した。『続風土記』によれば、もとは多聞院と号し、延喜年間 (901 ~ 923) 理源大師聖宝の開創と伝える。筑後の立花家と檀縁を結び、寛永年間 (1624 ~ 1644)、立花宗茂の法号、大円院殿によって改号したという。『寺院明細帳』によれば、もとは蓮花谷の東端北側に位置していたが、大正 12 年 (1923) に上門を除く建物を焼失し、大正 13 年 (1933) に徳善院の跡地に移転した。現在の境内にはこの際に建立されたとみられる本堂及び護摩堂 (No. 51-8、図 136)・坊舎 (No. 51-7)・表門 (No. 51-1) などが建つ。

7 蓮花谷

蓮花谷は小田原谷東方の一带を指し、南側に西から大明王院、光明院、恵光院、熊谷寺、東根院、正覚寺が、北側に西から赤松院、清浄心院が建ち並び、光明院と熊谷寺の間を南方に行くと円通寺が、赤松



図 136 大円院本堂及び護摩堂 (No. 51-8)

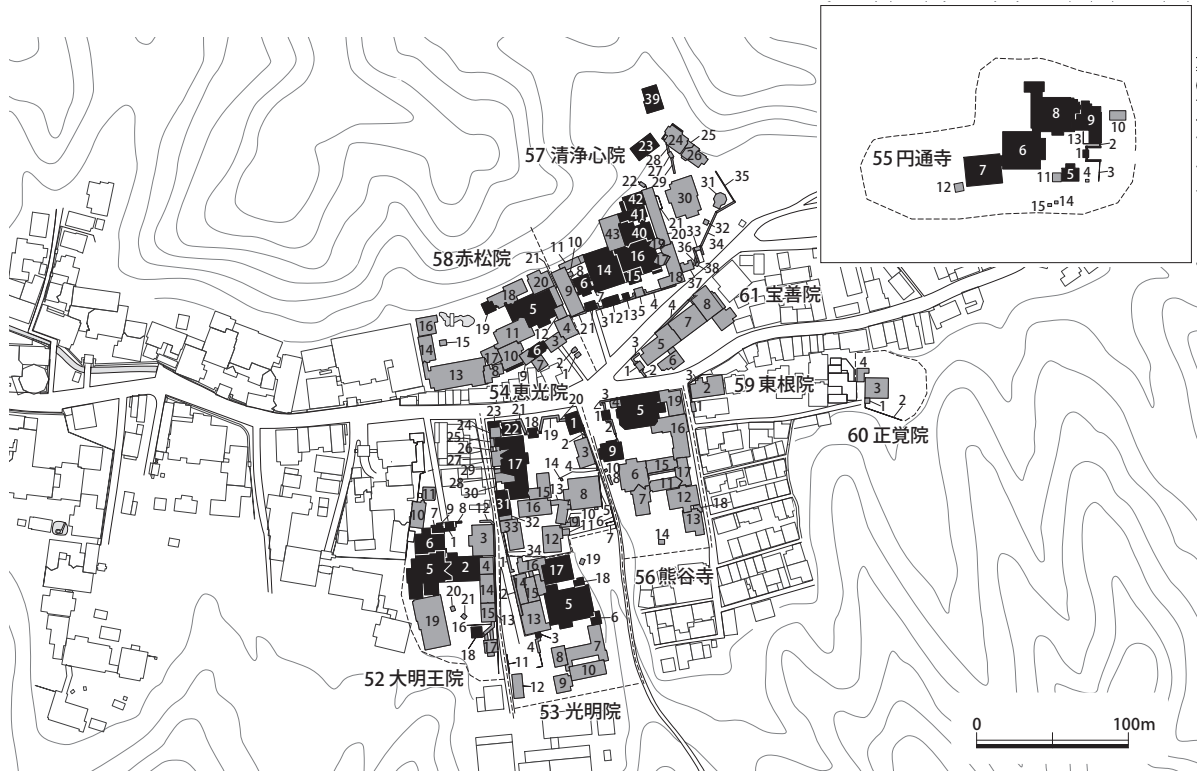


図 137 蓮花谷 1:5000 (国土地理院作成「国土基本図 2500」に加筆)

院の南で二手にわかれる中州状となった西端に宝善寺がある。万延元年（1860）に大明王院・恵光院・赤松院・清浄心院・東根院が、明治 21 年（1888）に大明王院・光明院・東根院が、火災により境内の建物を焼失している。

(52) 大明王院

大明王院は蓮花谷南側の西端に位置する。行人方に属した。『名刹誌』によれば、実応を開基とし、かつては明王院と号したが、明治 12 年（1879）に大明王院と改めた。万延元年（1860）に境内の建物を焼失し、元治元年（1864）に再建されたものの、明治 21 年（1888）に再び焼失しており、同 24 年（1891）に本堂・護摩堂を、同 25 年（1892）に坊舎・庫裏・上



図 138 大明王院坊舎 (No. 52-2)

門が再建された。現在の境内には、明治 25 年再建とみられる玄関付の坊舎 (No. 52-2、図 138)、表門 (No. 52-1) などが建つ。

(53) 光明院

光明院は蓮花谷の南側、恵光院の南方に位置する。聖方に属した。『名刹誌』によれば、橘行清が営んだ庵を、文和元年（1352）に尽日法如が改修し、光明院と号したという。阿波・蜂須賀家が帰依した。『寺院明細帳』によれば、明治 21 年（1888）に火災で建物を焼失したが、同 24 年（1891）に残った本堂・護摩堂・上下土蔵を修復、その他を再建し、落成した。現在境内に建つ土蔵造の本堂 (No. 53-17、図 17) は 19 世紀中期の建立、明治 24 年に修復されたものとみら



図 139 光明院本堂 (No. 53-17)

れ、方丈 (No. 53-5)・表門 (No. 53-3)・宝庫 (No. 53-6) は明治24年再建とみられる。

(54) 恵光院

恵光院は蓮花谷の南側、大明王院の道を挟んだ東方に位置する。行人方に属した。『名刹誌』によれば、空海が五丈の宝塔を建て、大経王を講じたのにはじまるとされ、その弟子の道昌の開基とする。永久年間(1113～1118)に聖仁が中興、延慶年間(1308～1311)に量調が復興した。その後、再び衰退したが、島津義虎が再建して以来、島津家が帰依した。もとは回向院と書かれていたが、享保7年(1722)に徳川吉宗の命によって、現在の字を用いるようになった。

『寺院明細帳』によれば、万延元年(1860)に類焼、明治21年(1888)に本堂・坊舎を焼失、そして大正9年(1920)に土蔵を除く建物をすべて焼失した。現在の境内には、その頃に再建されたとみられる毘沙門天堂 (No. 54-1、図140)、坊舎 (No. 54-17)、表門 (No. 54-18) が建つほか、昭和後期以降の2階建の坊舎が多く建ち並ぶ。



図140 恵光院毘沙門天堂 (No. 54-1)



図141 円通寺瑜伽道場 (No. 55-7)

(55) 円通寺

円通寺は蓮花谷の熊谷寺から南方へ約600m山道を進んだ谷間に位置する。『紀伊続風土記』によれば、古くは専修往生院と称し、小田原別所・中別所・東別所などに対して新別所(真別所)と呼ばれた。開基は智泉とされ、その後荒廃していたのを俊乗房重源が再興し、専修念仏の道場としたという。再興の時期は明確ではないものの、『高野春秋』文治3年(1187)4月24日条に「重源法師(字俊乗房)絶新別所蓮社之交」とあり、この頃までに再興されたものとみられる。重源が著した『南無阿弥陀仏作善集』「高野新別所」の項には、「一面(ママ)四面小堂一字」「湯屋一字」「食堂一字」「三重塔一基」が挙げられている(『南無阿弥陀仏作善集』奈良国立文化財研究所史料1、1955年)。

『高野春秋』によれば、嘉禎年間(1235～1238)以降には訪れる人もおらず、廃墟となっていたところ、慶長17年(1612)9月に、山口重政が玄俊律師と再興を図り、元和5年(1619)9月に大成し、俊賢房良永を住職にしたという。

『紀伊国名所図会』(1838年)の「別所円通寺」の項に収録される鳥瞰図には、宝形造、正面1間向拝付の本堂、入母屋造の坊舎、両者を連結する廊下、初重を塗り籠めた、むくりをもつ寄棟造の楼門が描かれ、本堂の背面に宝形造の小堂が、坊舎の背面には寄棟造もしくは切妻造の小堂が描かれている。『続風土記』(1839年)の「円通寺」の項は、本堂・坊舎・鐘楼門・宝庫・鎮守社・所化寮が建つとする。

現在の境内には、19世紀前期の建立とみられる本堂・庫裏、山門、求聞持堂、土蔵などが建つ。本堂



図142 熊谷寺円光大師真影堂 (No. 56-9)

の北西方には瑜伽道場が建つ (No. 55-7、図 141)。長く壇上伽藍の蓮華乗院 (大会堂) が寺務を兼ねていたが、現在は金剛峯寺に移管されている。

(56) 熊谷寺

熊谷寺は蓮花谷の南側東部、恵光院の東方に位置する。行人方に属した。『寺院明細帳』によれば、開基は真隆で、葛原親王の御願寺という。建久 2 年 (1191) に熊谷直実が高野山に登り、持宝院に住し、平敦盛を弔ったという故事により建保 2 年 (1214) 源頼朝が熊谷寺の号を授けた。もとは持宝院とも号したが、大正 7 年 (1918) に熊谷寺に改められた。

『寺院明細帳』によれば、明治 21 年 (1888) に本堂・坊舎焼失、その後再建されたという。大正 9 年 (1920) の表門 (No. 56-1)、同時期の建立とみられる円光大師真影堂 (No. 56-9、図 142)、昭和後期以降の 2・3 階建の坊舎が多く建ち並ぶ。

(57) 清浄心院

清浄心院は蓮花谷の北側東部、赤松院の東方に位置する。『続風土記』によれば、空海による開基で、喜多坊と称していたが、勅により清浄心院と号し、その後、平宗盛が再建したという。戦国時代以降、上杉家、佐竹家、太田家などが帰依した。『寺院明細帳』によれば、万延元年 (1860) に境内を焼失し、『名刹』によれば、文久 2 年 (1862) に庫裏、明治 3 年 (1870) に坊舎、同 15 年 (1882) に本堂、位牌堂、上門が再建された。現在の境内に建つ玄関付の坊舎 (No. 57-14・15、図 143) が明治 3 年、廿日大師堂 (本堂、No. 57-6)、大師門 (表門、No. 57-1) が明治 15 年再建のものとみられ、ほかにも昭和前期以降の建物が多く建ち並ぶ。



図 144 赤松院本堂 (No. 58-10)

(58) 赤松院

赤松院は蓮花谷の北側西端に位置する。『名刹誌』によれば、延長元年 (923) 聖快が草創し、寛治年間 (1087～1094) 頃に興昭が中興し、山本坊と号したという。元弘 3 年 (1333) に赤松則祐が修造し菩提所として、赤松院と改号した。

『寺院明細帳』によれば、万延元年 (1860) に境内を焼失し、文久 4 年 (1864) に本堂が、慶應元年 (1865) に坊舎・寮舎・宝蔵・経蔵・下蔵などが再建されたという。現在の境内に建つ、本堂 (No. 58-10、図 144)、玄関付の坊舎 (No. 58-5、図 145) は、その再建によるものとみられる。ほかにも昭和後期以降の建物が多く建ち並ぶ。

(59) 東根院

東根院は熊谷寺の道を挟んだ東方に位置する。『名刹誌』によれば、開基は明遍 (1142～1224) で、高野山に登った際に結んだ草庵にはじまるという。もとは宝寿院と号したが、元和年間 (1615～1624) に出羽国最上郡東根城主の里見景佐が再営したことで東根院と改称した。万延元年 (1860) および明治 21



図 143 清浄心院坊舎 (No. 57-14)



図 145 赤松院坊舎 (No. 58-5)

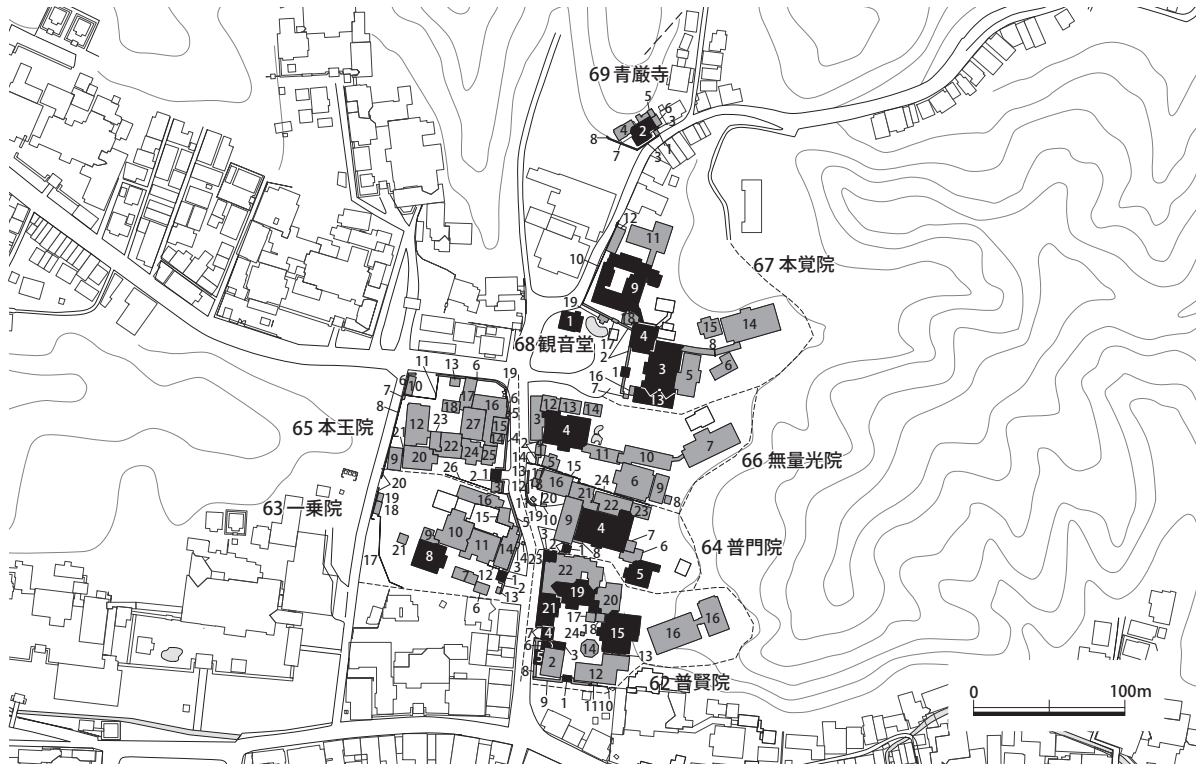


図 146 千手院谷 1:5000 (国土地理院作成「国土基本図 2500」に加筆)

年(1888)の火災で焼失した。現在の境内には、昭和後期以降の建物が建つ。

(60) 正覚院

正覚院は、東根院の東方に位置する。行人方に属した。『名刹誌』によれば、開基は増一律師で、永保3年(1083)創建という。当初は明王院と号したが、正覚房覚鑊が住したことで、正覚院に改めたという。江戸時代には西院谷にあり、文化10年(1813)の「高野山細見絵図」では報恩院の東方にある湯屋谷筋に記される。『名刹誌』によれば、明治3年(1870)に類焼し、千住院谷に移り、『寺院明細帳』によれば、同21年(1888)本堂・坊舎を焼失し、昭和3年(1928)に蓮花谷に移転した。現在境内に建つのは、昭和後

期以降建立の建物である。

(61) 宝善院

宝善院は、赤松院の南で二股にわかれる通りの中州状となった西端に位置する。学侶方に属した。『続風土記』によれば、開基は不詳で、天正年間(1573～1592)頃の宥賢による中興という。江戸時代には往生院谷の北西端付近にあったが、明治期に現在の丹生院の地に移転し、さらに昭和38年(1963)に現在地に移った。現在、境内に建つのは昭和後期以降の建物である。

8 千手院谷

千手院谷は小田原谷から北へと延びる谷で、北部では五之室谷の東端が接する。東側に南から普賢院、普門院、無量光院、本覚院、観音堂が、西側に南から一乗院、本王院が建ち並び、本覚院の北方に青巖寺が位置する。

(62) 普賢院

普賢院は千手院谷の東側南端に位置する。学侶方に属した。『続風土記』によれば、康治2年(1143)覚鑊門下の力乗房が創建し、久安5年(1149)に同じく覚鑊の弟子の五智房融源が再建したという。当初は普賢王院と称したが、後に普賢院と改められた。



図 147 普賢院表門 (No. 62-4)

『名刹誌』によれば、明治12年(1879)に隣寺に発した火災により上蔵を除く境内の建物を焼失したが、明治25年(1892)までに本堂・護摩堂・坊舎・寮舎・土蔵(文化年間以前)・上門(仮立)の再建がなされている。一連の再建に際し、慶安3年(1650)建立の旧行人方東照宮の表門を南面の門(四脚門、No.58-1)として、17世紀後期建立の東照宮拝殿を本堂(No.58-15)として、移築したものとみられる(『重要文化財普賢院四脚門ほか二棟修理工事報告書』)。

現在の境内は、西面に表門(No.62-4、図147)となる鐘楼門が建ち、門をくぐった正面に前述の本堂が西面して建ち、北部に玄関付の庫裏(No.62-19)が南面して、西南部に宝蔵(No.62-3)が建つ。また南面には前述の四脚門が開く。表門、庫裏、宝蔵は、明治25年には未完成だったが、明治期には再建されたものとみられる。境内には、このほかにも昭和後期以降の建物が多数建ち並ぶ。

(63) 一乗院

一乗院は千手院谷の西側南端、普賢院の道を挟んだ東方に位置する。学侶方に属した。開基は諸説あり、文明5年(1473)の『諸院家帳』は善花、『高野伽藍院跡考』は鎌倉時代初期の人物とみられる化千、『高野春秋』・『本朝高僧伝』は定昭大僧正とする。

『名刹誌』では本堂・護摩堂・大師堂を明治28年(1895)の再建、『寺院明細帳』ではこれらを同29年(1896)に再建許可、同32年(1899)に落成とする。

『和歌山県の近代和風建築』(142頁)によれば、現存する本堂(No.63-8)は昭和10年(1935)に大彦組により再建されたものという。境内にはこのほか、大正期建立とみられる表門(No.63-1、図148)、昭和



図148 一乗院表門(No.63-1)

後期以降の2階建の宿坊などが多数建ち並ぶ。

(64) 普門院

普門院は千手院谷の東側南部、普賢院の北方に位置する。学侶方に属した。『続風土記』では、開基を勤操(754~827)とし、当初、谷上にあったが、元禄年間(1688~1704)の高野聖断で改易された見樹院跡の当地に移転した。明治21年(1888)の大火により境内を焼失した。

現在の境内には、西面に表門(No.64-1)が開き、表門をくぐった正面に本堂(No.64-5)が西面し、左手に玄関付の客殿及び台所(No.64-4)が南面して建つ。本堂は慶安3年(1650)建立の行人方の東照宮本殿を明治27年(1894)に、表門は18世紀前期建立の東照宮の門を明治25年(1892)に移築したもので、客殿及び台所は明治23年(1890)に建立したものである。このほかにも、昭和後期以降建立の2・3階建の建物などが多く建ち並ぶ。

(65) 本大院

本大院は千手院谷の西側、普門院の道を挟んだ西方に位置する。『和歌山県の地名』によれば、古くは蓮花谷聖の寺院で、近世は行人方に属した。安政年間(1854~1860)に現在地に移転した。開基は上野阿闍梨宝心僧都で、醍醐寺理性院の二代を務めたのち、保元3年(1158)に蓮花谷の明遍谷に菩提心院を開いた。得蔵院・徳蔵院などとも称したが、のちに本大院に改号した。

明治21年(1888)の大火で境内を焼失したものとみられ、『寺院明細帳』によれば、明治25年(1892)に再建許可をうけ、同31年(1898)には本堂が落成している。現在の本堂(No.65-20、図149)は、昭和



図149 本大院本堂(No.65-20)

後期以降に再建されたものとみられ、表門 (No. 61-1) は大正期の建立とみられるほか、昭和後期以降に建てられた2階建の宿坊などが多数建ち並ぶ。

(66) 無量光院

無量光院は千手院谷の東側、普門院の北方に位置する。学侶方に属した。もとは西院谷にあり、文化10年(1813)の「高野山細見絵図」では宝亀院の南に描かれる。開基は諸説あり、「諸院家帳」は良琳阿闍梨の開基、「高野伽藍院跡考」は久安元年(1145)行恵総持房による創建、「諸院家析負輯」は高野御室



図 150 無量光院坊舎 (No. 66-4)

覚法親王の開基とする。中興は印融法印(1435～1519)と伝える。越後・上杉、周防・毛利、駿河・今川など多くの大名と師檀契約がなされていた。

明治21年(1888)の火災で境内の建物を焼失しており、『名利誌』によれば、同22年(1889)に坊舎・土蔵が、同23年(1890)に仮立の本堂・仮立の上門が、同24年(1891)に寮舎が再建されている。現在、境内に建つ坊舎 (No. 66-4、図 150) は明治22年再建のものに、その後、玄関を増築したものとみられる。そのほかにも、昭和後期以降の建物が多数建ち並ぶ。

(67) 本覚院

本覚院は五之室谷の東側、無量光院の北方に位置する。古くは聖方に属し、講坊とよばれた。開基は平安時代末期の一宿上人(革上人)で、承安年間(1171～1175)の創建と伝える。当初は千手院谷・光明院の一道場で革坊とも称した。天正年間(1573～1592)美濃国・稲葉貞通らによって再興され、元禄年間(1688～1704)に本覚院と改称した。

明治期の火災を免れたようで、18世紀後期建立とみられる表門 (No. 67-1、図 151)・玄関付の客殿及び



図 151 本覚院表門 (No. 67-1)



図 152 本覚院客殿及び台所 (No. 67-3)



図 153 本覚院本堂 (No. 67-4)



図 154 青巖寺坊舎 (No. 69-2)

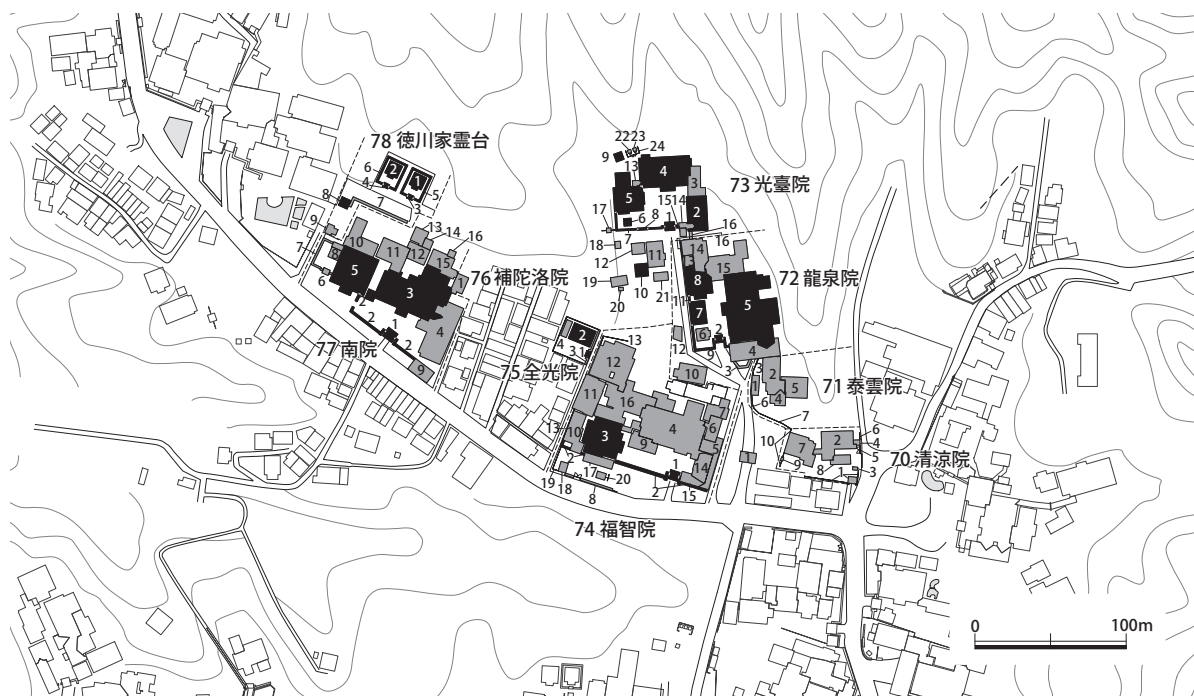


図 155 五之室谷 1:5000 (国土地理院作成「国土基本図 2500」に加筆)

台所 (No. 67-3、図 152)、19 世紀中期建立とみられる本堂 (No. 67-4、図 153) などが建つ。

(68) 観音堂

観音堂は本覚院の西に隣接する仏堂である。千手観音を本尊としており、千手堂・千手院とも呼ばれた。開基は諸説あり、『高野伽藍院跡考』は弘法大師による草創、『信堅院号帳』は紀千手上人、『諸院家帳』は千手上人などとする。『続風土記』によれば、たびたび罹災し、堂内の諸仏は元禄 12 年 (1699) に入仏供養がおこなわれている。現存する観音堂 (No. 68-1) もこの頃に建立されたものとみられる。

(69) 青巖寺

本覚院の道を挟んだ北方に位置する。青巖寺は、現・金剛峯寺境内の東部にあった寺で、学侶方の寺務をつとめた中心寺院であったが、明治 2 年 (1689) に興山寺と合併して金剛峯寺となった。真然の廟所で、覚鑿建立の大伝法院の跡地に、豊臣秀吉が大政所の追善のため、木食応其に命じて造営した剃髮寺にはじまる。文禄 2 年 (1593) に落慶供養がおこなわれ、まもなく青巖寺に改号された。

明治期に一度は廃されたが、その後、復された。昭和前期建立とみられる坊舎 (No. 69-2、図 154) などが建つ。

9 五之室谷

五之室谷は、千手院谷の北部から、北西へと延びる谷筋の東部一帯を指す。東端は北方に、南北方向の光臺院谷が通り、南から、清涼院、泰雲院、龍泉院、光臺院が並ぶ。東西の通りは北側に東から、福智院、金光院、補陀洛院、南院、徳川家霊台が並ぶ。

古くは五之室聖の本拠とされ、中世高野聖の祖とされる明遍もこの谷にいたと伝わる。明治 4 年 (1871) まで高野聖の本寺である大徳院 (No. 40 蓮花院参照) が位置した。福智院から南院の一帯は、明治 21 年 (1888) の大火により多くの建物を焼失した。

(70) 清涼院

清涼院は光明院谷の東側南端に位置する。『名刹誌』によれば、頼賢意教 (1196～1274) が開基したという。明治 21 年 (1888) の火災で境内を類焼し、同 24 年 (1891) に再建されたとする。現在境内に建つのは、いずれも昭和後期以降の建物である。奥之院に井伊直政霊屋を有する。

(71) 泰雲院

泰雲院は清涼院の北方に位置する。聖方に属した。『名刹誌』によれば、延喜年間 (901～923)、延徹僧都による開基で、頼賢意教 (1196～1274) が中興し

たという。もとは小田原谷にあり、元治元年（1864）に境内を焼失、明治25年（1892）千手院谷へ移転、その後、同41年（1908）五之室谷へ移転したものの、昭和2年（1927）千手院谷へ戻ったという。長屋門形式の表門（No. 71-1、図156）はその頃の建物、その他は昭和後期以降に建てられたものとみられる。

（72）龍泉院

龍泉院は泰雲院の北方に位置する。聖方に属した。『名利誌』によれば、延長・承平年間（923～938）頃、真慶律師による開基で、安和年間（968～970）に仲算が再興、寛喜年間（1229～1232）に頼賢によって交流したという。『寺院明細帳』によれば、もとは小田原谷の枝谷である実相院谷にあり、大正15年（1926）に現在地に移転したという。現在の境内には、18世紀後期の様相を示す上門（No. 72-2、図157）、大正期の本堂（No. 72-8）・降魔殿（No. 72-7）などが建つ。上門は龍泉院が現地に移転するより前の年代を示しており、当初より現地にあったものを利用した可能性、移築した可能性なども想定される。



図156 泰雲院表門（No. 71-1）

（73）光臺院

光臺院は龍泉院の北方、光臺院谷の最奥に位置する。開基は諸説あるが、『信堅号帳』は光臺院御室道助親王による開基で、『高野伽藍院考』などは御室覚法親王の草創、光臺院御室道助親王の再興とする。当初、金剛院あるいは金剛乗院と号し、後に光臺院に改められたという。親王家により草創され、仁和寺の支配下にあったことから高野御室と称され、親王が院内に5つの庵室を造ったとされることから、五之室の由来となった。『名利誌』によれば、本堂及び護摩堂が天保15年（1845）に、玄閑および坊舎が文政12年（1829）に、また『寺院明細帳』によれば本堂及び位牌堂が大正6年（1917）、多宝塔が同7年（1918）に再建されている。多宝塔の前身建物は元禄年間（1680～1709）に建立されたもので、大正5年（1916）に大阪・藤田伝三郎邸（現・藤田美術館）に移築され、2022年に大阪市により指定された。

現在境内に建つ客殿（No. 73-4、図158）は文政12年再建のもの、正門（No. 73-1、図159）は同じ頃のもの、本堂（No. 73-5）と多宝塔（No. 73-9、図160）は大正再



図157 龍泉院上門（No. 72-2）

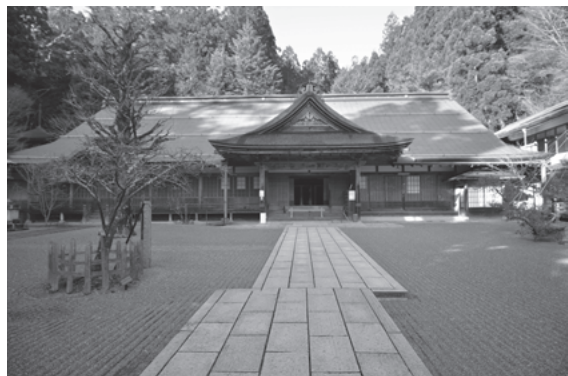


図158 光臺院客殿（No. 73-4）



図159 光臺院正門（No. 73-1）

建のものともみられる。なお近世社寺建築緊急調査では、宝暦7年(1757)建立の天神社と稲荷社を報告していたが、既に失われていることを確認した。境内には重森三玲作の庭園を有する。

(74) 福智院

福智院は五之室谷の北側、光臺院谷の南端西側に位置する。行人方に属した。『名刹誌』によれば、開基は覚印で、父は平師季、兄は東寺長者を務めた永厳という。もとは五之室谷南側に位置しており、文化10年(1813)の「高野山細見絵図」でも南側に描かれる。その後、聖方の覚證院および一心院谷の行人方との合併に際し、覚證院のあった現在地に移転した。

明治21年(1888)の大火で類焼し、同22年(1889)に再建したという。現在の境内には、大正期建立とみられる表門(No.70-1)、本堂(No.74-3、図161)などが建つ。また重森三玲が作庭した庭園を有する。

(75) 全光院

全光院は五之室谷から小道を北へ入った、福智院の北西方に位置する。『名刹誌』によれば、もとは正



図 160 光臺院多宝塔 (No. 73-9)

法院と号したが、備後山内家の仙昌院殿が再建したことで、仙昌院と改め、さらに寛永年間(1624～1644)に周防岩国藩の吉川廣正が父・廣家(全光院)の菩提のために再建したことで、全光院と改めたという。現在は大正期の建立とみられる表門(No.75-1、図162)、昭和前期建立とみられる坊舎(No.75-2)など数棟が建つのみの小規模な寺院である。

(76) 補陀洛院

補陀洛院は五之室谷の北側、南院の東北に位置する。学侶方に属した。『諸院家析負輯』は、浜ノ宮補陀落山寺(那智勝浦町)を開いた勝忍房教算による開基とする。『続風土記』によれば、もとは南谷にあり、明治22年(1889)の「高野山略図」では大門通北側の宝性院の北東方に描かれる。

現在の境内には、昭和後期に建てられたとみられる2階建て住宅(No.76-1)が建つのみである。

(77) 南院

南院は五之室谷の北側、旧大徳院の跡地に位置する。学侶方に属した。『続風土記』によれば、興福寺学僧の真興(935～1004)を開基とする。もとは南谷



図 161 福智院本堂 (No. 74-3)



図 162 全光院表門 (No. 75-1)



図 163 南院本堂 (No. 77-5)

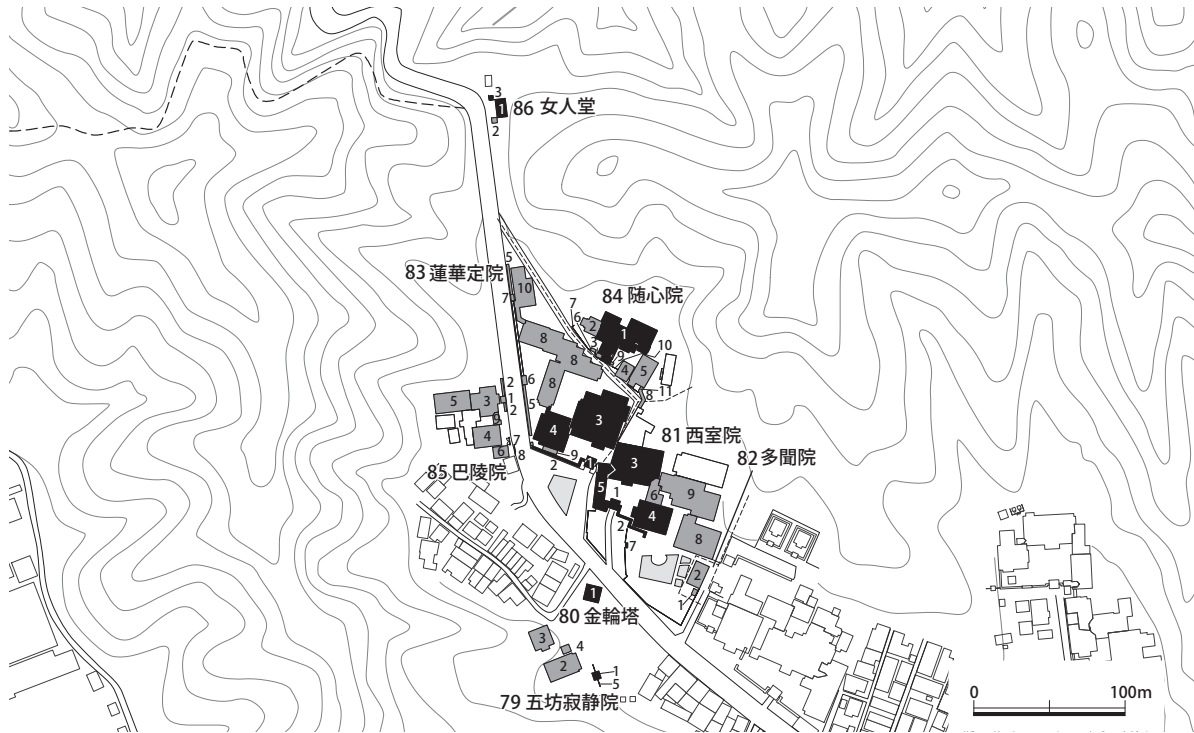


図 164 一心院谷 1:5000 (国土地理院作成「国土基本図 2500」に加筆)

にあり、勸学院の大門通を挟んだ南向いに位置していた。『寺院明細帳』によれば、明治維新後、境内の建物を全焼したことで、明治4年(1871)に転出した大徳院の跡地に移転したという。その後、同21年(1888)に境内を焼失し、同22年(1889)に再建されたという。現在の境内には、大正期の建立とみられる本堂(No. 77-5、図163)・本坊(No. 73-3)・表門(No. 73-1)、その他に昭和後期以降の建物が多く建ち並ぶ。

(78) 徳川家霊台

徳川家霊台は、南院背後の山に位置する徳川家康・秀忠の霊屋である。『続風土記』によれば、寛永9年(1632)に秀忠が没したのち、家光の命により造営が始められ、同20年(1643)に落成したという。聖方の東照宮として、南隣に位置した大徳院が管理して



図 165 五坊寂静院表門 (No. 79-1)

いた。大徳院が明治4年(1871)に転出した後は、徳川家霊台として、金剛峯寺が管理している。

南院の西方の小道を北へ進むと、石垣の上に表門(No. 74-8)が建つ。表門を潜った突き当たり正面から東方にかけてさらに石垣を積み、その上に、同形同大の2棟の霊屋が建つ。西に家康霊屋(No. 74-1)、東に秀忠霊屋(No. 74-2)が南面して建ち、それぞれ透塀で囲まれ、正面に門を開く。

10 一心院谷

一心院谷は、五之室谷の北西方に続く一帯で、高野七口の一つである不動坂口が西端となる。この地には、明寂を中心に初期高野聖が集まったといわれ、谷名は行勝建立の一心院(現・五坊寂静坊)に由来する。西南側に南西から、五坊寂静院、金輪塔があり、西方に住宅などを挟んで、巴陵院が位置し、東北側に南東から、多聞院、西室院、蓮華定院が並び、蓮華定院の北方に随心院が位置する。不動坂口には女人堂が建つ。

(79) 五坊寂静院

五坊寂静院は一心院谷の西南側の南端に位置する。『信堅院号帳』によると、行勝(1130～1217)による建立で、もとは一心院と号した。行勝は高野穀断聖人行勝房と呼ばれた初期高野聖である。『続風土

記』によれば、院内に妙法蓮花經の五字をかたどった妙智房・法智房・蓮智房・花智房・經智房を建立し、別所を再興したが、經智房以外は廃絶し、經智房が五坊と称されるようになった。『続風土記』によれば、江戸時代は学侶方に属した。『名刹誌』によれば、維新後は衰退し、当時の建物は隣地に再建されたものという。

現在の境内には、大正期建立とみられる表門 (No. 79-1、図 165) などが建つ。

(80) 金輪塔

金輪塔は五坊寂靜院の北東方に位置する。文明5年(1473)の「諸院家帳」は、検校をつとめた明算(1021～1106)が自らの廟所として建立とする。『続風土記』によれば、一心院の火災に際して類焼し、天保5年(1843)に再建されたとする。現在の多宝塔形式の金輪塔 (No. 80-1) がこれにあたる。壇上伽藍に移築された不動堂は、金輪塔の隣に建っていた。

(81) 西室院

西室院は一心院谷の東北側、多聞院の北に位置する。学侶方に属した。『続風土記』によれば、弘法大師造立の四坊の一つといい、高野山検校の雅真(?～999)らが住した。もとは谷上の無量寿院の東にあったが、元禄5年(1692)の高野聖断により、南谷の成蓮院の南に移り、明治14年(1881)に現在地に移ったという。

現在の境内には、大正期建立とみられる本堂 (No. 81-4、図 166)・本坊 (No. 81-3)・表門 (No. 81-1) などが建つ。

(82) 多聞院

多聞院は一心院谷の東北側南端、西室院の南方に



図 166 西室院本堂 (No. 81-4)

位置する。学侶方に属した。『諸院家析負輯』は開基を觀覺多聞房とする。「血脈中院」(三寶院藏)によれば、嘉承元年(1106)に没している。『寺院明細帳』によれば、もとは谷上にあり、明治29年(1896)に移転したという。現在の境内には、昭和後期以降の建物が建つ。

(83) 蓮華定院

蓮華定院は一心院谷の東北側、西室院の北西方に位置する。『名刹誌』によれば、行勝(1130～1217)が念仏三昧に入った奥坊念仏院が始まりで、建久年間(1190～1199)の建立と伝える。関ヶ原の戦いに敗れた真田昌幸・幸村が、大坂冬の陣までの間、住したとされる。信濃の諸地域の人々の宿坊として使われた。『名刹誌』によれば、万延元年(1860)に本堂が再建された。

現在の境内は、南面に表門 (No. 83-1) が開き、表門をくぐった正面に客殿及び庫裏 (No. 83-3) が南面して、左手となる西部に本堂及び護摩堂 (No. 83-3) が東面して建つ。敷地奥には昭和後期建立の2階建の宿坊施設が建ち並ぶ。本堂及び護摩堂は万延元年再建のものともみられ、表門も棟札から同年の建立とわかり、客殿及び庫裏も同時期の建立とみられる。

蓮華定院は康徳院の名跡を有する。『寺院明細帳』によれば、永保年間(1081～1084)経俊による創立という。経俊は義範(1023～1088)の法嗣であるという。もとは五之室谷にあったが、大正15年(1926)に現在地に移ったという。康徳院の建物として、蓮華定院の境内北部に、昭和後期建立の建物が建つ。

(84) 随心院

随心院は一心院谷の東北側、蓮華定院の北方に位



図 167 随心院坊舎 (No. 84-1)

置する。学侶方に属した。『信堅院号帳』によれば、石清水八幡宮別当を務めた成清（1122～1199）による建立とされる。『諸院家析負輯』は、文治5年（1189）高野山に登り、創建された。『寺院明細帳』によれば、もとは蓮花谷にあったが、万延元年（1860）の火災で焼失し、明治39年（1906）に現在地に移転したという。現在の境内には、昭和44年（1969）に移築された大正6年（1917）建立の坊舎（No. 84-1、図167）、同時期に建立・移築されたとみられる洋館（No. 84-2）などが建つ。

（85）巴陵院

巴陵院は一心院谷の西南側、蓮華定院の道を挟んだ西方に位置する。行人方に属した。『寺院明細帳』によれば、開基は不詳で、もとは福蔵院と号したが、相馬義胤の法号により改号した。昭和2年（1927）に小田原谷から現在地に移転した。境内に現存するのはいずれも昭和後期建立の建物である。

（86）女人堂

女人堂は、高野七口の一つである不動坂口の東に、北西に面して建つ。諸国より参詣した女性が宿泊した施設で、高野七口には、それぞれ女人堂があったとされるが、現存するのはこの建物のみである。現在の建物は（No. 86-1）は江戸時代前期の建立とみられる。

11 奥之院

（87）奥之院

奥之院は高野山地区の東部にあり、空海の廟を中心とした一帯である。空海は承和元年（834）に自ら廟所を定めたといわれ、同2年（835）入定の後に当



図 168 奥之院関東震災霊牌堂（No. 87-82）

廟に移されたという。造営には真然があたったという。一之橋から空海の廟までの一帯に、多数の廟墓が建つ。橋によって大きく3つの地域に分けることができる。すなわち、一之橋から中之橋までの約1kmの区間、中之橋から玉川にかかる御廟橋、御廟橋から御廟までである。

一之橋～中之橋 一之橋を渡った右手に武田五一設計により昭和5年（1930）建築の関東震災霊牌堂（No. 87-82、図168）が建つ。大名墓として、慶長4年（1599）建立の佐竹義重霊屋（国指定、No. 87-81）、江戸時代初期建立の上杉謙信霊屋（国指定、No. 87-77）、17世紀後期建立とみられる井伊直政霊屋（No. 87-76）、万治2年（1659）建築の丸亀京極家円堂（石造、No. 87-80）が建つ。

中之橋～御廟橋 中之橋を渡った右手に寛文11年（1671）建立の密厳堂（No. 87-71）が建ち、中ほどを過ぎたあたりに結城秀康及び同母霊屋（No. 87-67～69）が建つ。御廟橋の手前には、文化9年（1812）建立の護摩堂（No. 87-23）や頌徳殿（No. 87-10、図169）などが東面して建つ。

御廟橋より奥 御廟橋を渡り石段を登ると、燈籠堂（No. 87-43）が建ち、右奥に経蔵（国指定、No. 87-4）、左奥に納骨堂（No. 87-50）が建つ。燈籠堂の背面は石垣を築き、壇上奥に天正13年（1585）建立の御廟（No. 87-58）が南面して建ち、その東には同時期の建立とみられる丹生明神社（No. 87-61）と高野明神社（No. 87-60）が西面して建つ。御廟と燈籠堂との間には、区画され、中央に門（No. 87-52）が開く。御廟は創建後、天徳元年（957）、天曆6年（952）に雷火のために焼失している。（鈴木智大）



図 169 奥之院頌徳殿（No. 87-10）

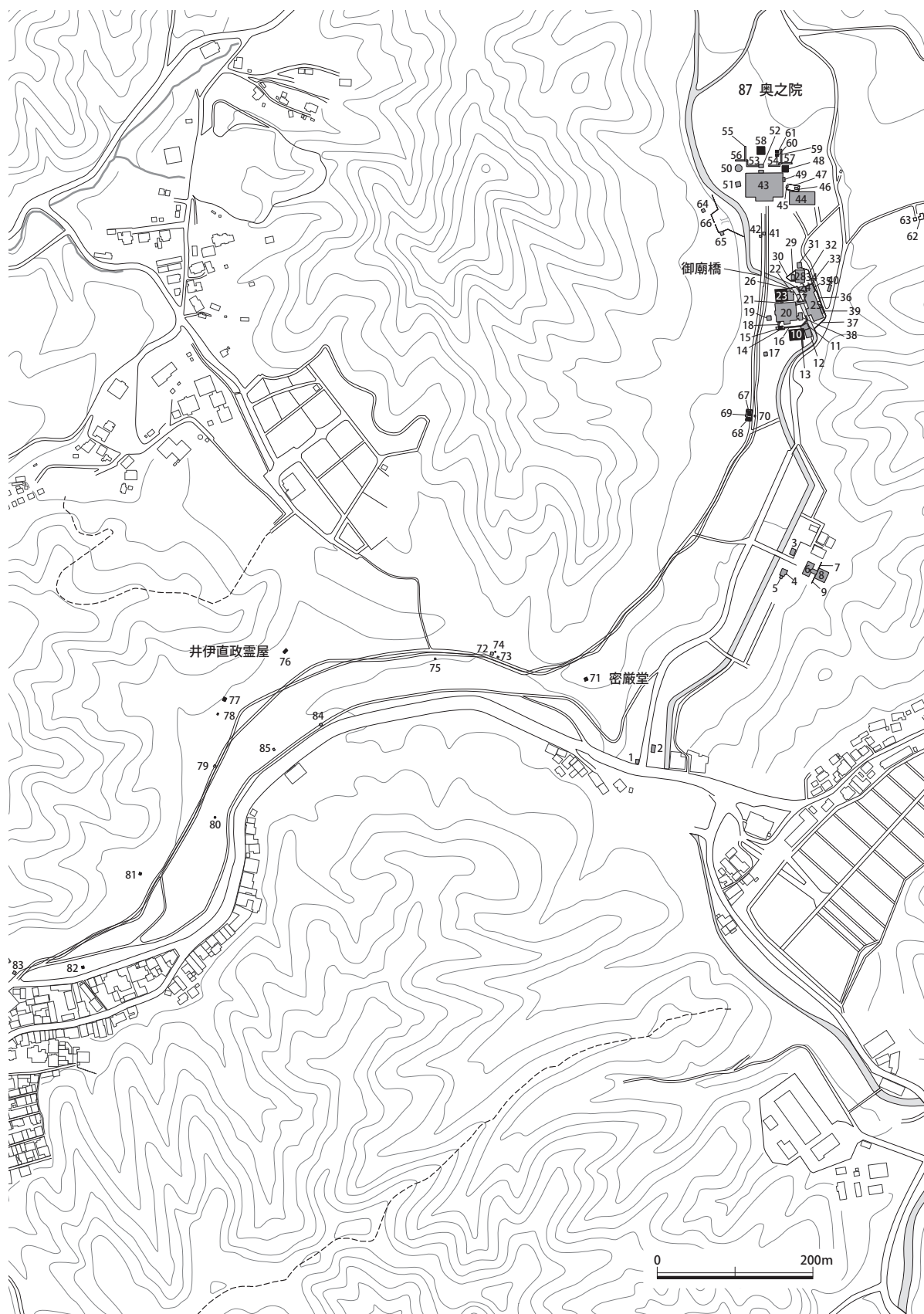


图 170 奥之院 1:7500 (国土地理院作成「国土基本図 2500」に加筆)

第4章 高野山地区の寺院

表6 高野山地区の寺院建築一覧 注 構造形式は簡便な表記に留まり、記述の統一は十分ではない。2次調査物件については、第5章に依りたい。

建物名	年代	根拠	構造形式など
1 本中院谷 9件 173棟			
1 金剛峯寺 49棟			
1 つけもの小屋	昭和後期		木造、切妻造、鉄板葺
2 倉庫	昭和60年(1985)	定礎	RC造、切妻造、鉄板葺
3 官舎	昭和後期		二階建、入母屋造、銅板葺
4 大主殿 側・背面増築部	昭和後期		銅板葺
5 真然堂	寛永17年(1640)	棟札、『高野春秋』	正面三間、側面三間、宝形造、檜皮葺
6 真然堂門・垣	昭和後期		棟門、木造、銅板葺
7 講堂	文久3年(1863)	棟札	正面三間、側面三間、宝形造、檜皮葺
8 真然堂表門	昭和後期		向唐門 銅板葺
9 塀	平成		
10 奥書院	文久2年(1862)	棟札	入母屋造、檜皮葺
11 大主殿	文久2年(1862)	棟札	入母屋造、軒唐破風付、檜皮葺
12 渡廊下	昭和後期		檜皮葺
13 渡廊下	昭和後期		銅板葺
14 配膳所	昭和後期		銅板葺
15 渡廊下	昭和後期		銅板葺
16 別殿	昭和8年(1933)	『弘法大師老千年御遠忌紀要』	入母屋造、銅板葺
17 渡廊下	昭和後期		銅板葺
18 奥殿	昭和8年(1933)	『弘法大師老千年御遠忌紀要』	入母屋造、銅板葺
19 新書院	昭和32年(1957)		入母屋造、銅板葺
20 真松庵	昭和40年(1965)		寄棟造、銅板葺
21 阿字觀道場	昭和40年(1965)		桁行七間、梁間三間、切妻造、銅板葺
22 阿字觀道場倉庫	昭和後期		切妻造、銅板葺
23 渡廊下	昭和後期		銅板葺
24 湯殿	昭和後期		木切妻造、棧瓦葺
25 塀	平成		
26 勅使門(別殿門)	昭和後期		平唐門、檜皮葺
27 勅使門脇塀	昭和後期		銅板葺
28 門・塀	昭和後期		薬医門、銅板葺
29 新別殿	昭和59年(1984)		RC造、入母屋造、銅板葺
30 木櫓	昭和59年(1984)		木櫓
31 手水舎	昭和後期		切妻造、檜皮葺
32 山門	延宝8年(1680)	『高野春秋』	一間一戸四脚門、切妻造、檜皮葺
33 かご塀	文久3年(1863)	技法・意匠	かご塀、檜皮葺
34 経蔵	延宝7年(1679)	扁額、『高野春秋』	土蔵造、附覆屋、入母屋造、檜皮葺、正面玄関付、向唐破風造、檜皮葺
35 塀・門	昭和後期		門：棟門、切妻造、檜皮葺、塀：檜皮葺
36 鐘樓	元治元年(1864)	棟札	袴腰付鐘樓、上層桁行三間、梁間二間、入母屋造、檜皮葺
37 会下門	19世紀中期	技法・意匠	長屋門、入母屋造、檜皮葺
38 会下	昭和後期		二階建、入母屋造、檜皮葺
39 便所	昭和後期		切妻造、檜皮葺
40 宗務所	昭和56年(1981)		RC造、三階建、銅板葺
41 作業場	昭和後期		木造片流れ、庇付、鉄板及び塩ビ板張り、鉄板葺
42 秋葉宮	昭和後期		一間社流造 流し板葺(銅板張り)
43 金比羅宮	昭和後期		一間社流造 流し板葺(銅板張り)
44 愛宕宮	昭和後期		一間社流造 流し板葺(銅板張り)
45 三社木櫓	昭和後期		木櫓
46 祠	平成		一間社春日造 板葺(銅板貼)
47 倉庫	昭和後期		切妻造、鉄板葺
48 塀	昭和後期		檜皮葺
49 築地塀	江戸時代前期		築地塀、檜皮葺
2 六時鐘樓 5棟			
1 六時鐘樓	慶応元年(1865)	『寺院細帳』	方一間、入母屋造、檜皮葺
2 透塀	大正		銅板葺
3 登廊	昭和後期		銅板葺
4 門・塀	昭和後期		門：棟門、板葺、塀：木造
5 堂	昭和後期		切妻造、銅板葺、玄関入母屋造銅板葺付属
3 総持院 15棟			
1 表門	大正		四脚門、切妻造、檜皮葺
2 会下	昭和後期		総二階、入母屋造、金属板葺
3 客殿	平成		二階建、入母屋造、初層四周屋根、金属板葺、唐破風付表玄関
4 本堂	昭和前期		大壁、入母屋造、金属板葺、正面向拜付
5 位牌堂	昭和後期		入母屋造、金属板葺
6 大師堂	昭和前期		宝形造、金属板葺
7 塀	昭和後期		門脇、矩折れ、檜皮葺、腰下鍮張り、上漆喰(内側洗い出し)
8 塀	昭和後期		門脇、台下取合い矩折れ、檜皮葺、腰下鍮張り、上漆喰(内側洗い出し)くぐり戸付
9 下門	昭和後期		二階付、金属板葺
10 施設棟	平成		コンクリート建物、陸屋根
11 塀	平成		コンクリートブロック造、鉄扉付
12 塀	平成		細竹編み
13 門	平成		
14 塀	平成		波形状鉄板張り
15 庫裡	昭和後期		二階建、切妻造、金属板葺
4 成運院 7棟			
1 表門	平成		薬医門(左脇くぐり戸付)、本瓦葺
2 庫裏	平成		入母屋造、正面敷台玄関(入母屋)、棧瓦葺
3 会下	平成		切妻造、二階建、金属板葺
4 本堂(収納庫)	平成		切妻造、コンクリート造、金属板葺
5 塀	平成		矩折れ部のみ木造腰下鍮張り、上漆喰、金属板葺、外側コンクリートブロック
6 塀	平成		木造、腰下鍮張り、上漆喰

建物名	年代	根拠	構造形式など
7 塀	平成		木造波形状鉄板張り
5 親王院 18棟			
1 表門	明治12年(1879)	『名利誌』	四脚門、切妻造、檜皮葺
2 鐘樓	昭和後期		切妻造、檜皮葺
3 本堂および講堂	大正		宝形造+南(寄棟造)北(入母屋造) 金属板葺
4 客殿	明治12年(1879)	『名利誌』	式台玄関付、入母屋造、金属板葺、正面向母屋造
5 会下	明治12年(1879)	『名利誌』	入母屋造、銅板葺、二階建、門付き
6 上蔵	平成		切妻造、正面向母屋造下屋付、二階建、銅板葺
7 中蔵	昭和前期		切妻造、置屋根、銅板葺、二階建
8 客殿背面増築部	昭和前期		切妻造、銅板葺
9 増築部 下屋	昭和前期		片流れ、波形状鉄板葺
10 塀	昭和後期		板塀
11 塀	昭和後期		板塀
12 蔵	明治4年(1871)	『名利誌』	置屋根切妻造、銅板葺
13 塀	昭和前期		矩折部、腰下鍮張り上漆喰、檜皮葺
14 塀	昭和前期		腰下鍮張り上漆喰、檜皮葺
15 車庫	平成		正面向母屋造、背面切妻造、金属板葺
16 塀	平成		板塀
17 塀	平成		板塀
18 土蔵	19世紀中期		土蔵造、桁行三間、梁間二間、切妻造、銅板葺
6 東室院 7棟			
1 会下	昭和後期		入母屋造、金属板葺
2 会下付風櫓	昭和後期		切妻造、波形状鉄板葺
3 離れ	昭和前期		寄棟造、金属板葺
4 座敷	昭和後期		寄棟造 金属板葺
5 住宅	平成		切妻造、スレート葺、二階建
6 塀・山門	平成		波形状鉄板
7 塀	昭和後期		板塀
7 龍光院 12棟			
1 表門	明治14年(1881)		四脚門、切妻造、銅板葺
2 宝蔵	19世紀中期		入母屋造、銅板葺、漆喰大壁+しぶき板、入母屋造別棟入口付
3 会下	明治3年(1870)		入母屋造、銅板葺
4 庫裡	明治17年(1884)		入母屋造、妻入、銅板葺
5 客殿	明治元年(1868)		入母屋造、平入、銅板葺
6 玄関	明治17年(1884)		入母屋造、銅板葺
7 本堂及び講堂	明治14年(1881)		宝形造+入母屋造、銅板葺
8 塀・櫓	平成		板塀、木櫓
9 法具蔵	19世紀中期		切妻造、二階建、正面片流れ、格子戸付下屋、金属板葺
10 車庫	平成		切妻造、金属板葺、波形状鉄板張り
11 塀	昭和後期		木造、真壁造(表：築地塀風、内：漆喰)、切妻造、銅板葺
12 輪蔵塔	昭和6年(1931)		一重宝塔、銅板葺
8 明王院 12棟			
1 表門	明治29年(1896)		四脚門、切妻造、銅板葺
2 会下	昭和前期		入母屋造、金属板葺、二階建
3 会下座敷棟	昭和後期		入母屋造、金属板葺、二階建
4 会下新棟	平成		入母屋造、金属板葺、二階建
5 本堂	昭和後期		コンクリート入母屋造、入母屋造向拜付、銅板葺
6 客殿	昭和後期		入母屋造、金属板葺
7 玄関	平成		入母屋造、銅板葺
8 納経所玄関	昭和後期		唐破風、銅板葺造
9 堂	昭和後期		宝形造、銅板葺、コンクリート造
10 台所	平成		入母屋造、金属板葺
11 施設棟	平成		切妻造 金属板葺
12 塀	平成		外：大壁造、築地壁風、内：真壁造、銅板葺
9 壇上伽藍 48棟			
1 六角経蔵	昭和4年(1929)	『弘法大師老千年御遠忌紀要』	二重、六角円堂、銅板葺
2 小社	平成		桁行一間、梁間一間、妻入、切妻造、銅板葺
3 拜所	平成		桁行二間、梁間一間、妻入、切妻造、板葺
4 山王院祥殿	弘化2年(1845)	『高野山名所図会』	桁行九件、梁間三間、入母屋造、檜皮葺、両側面向拜一間
5 山王院本殿丹生明神社	大永2年(1522)	近社寺	一間社春日造、檜皮葺
6 山王院本殿高野明神社	大永2年(1522)	近社寺	一間社春日造、檜皮葺
7 山王院本殿總社	大永2年(1522)	近社寺	三間社流造、檜皮葺、見世棚造
8 透塀(北)	昭和後期		八間長、切妻造、銅板葺
9 透塀(南)	昭和後期		八間長、切妻造、銅板葺
10 山王院鐘樓	弘化5年(1848)	『高野山名所図会』	桁行三間、梁間二間、入母屋造、檜皮葺、袴腰付
11 西塔	天保5年(1834)	棟札	方五間多宝塔、二重
12 孔雀堂	昭和59年(1984)	案内板	桁行三間、梁間三間、入母屋造、檜皮葺、向拜一間
13 准祇堂	明治16年(1883)	『高野山名所図会』	桁行三間、梁間三間、入母屋造、檜皮葺、向拜一間
14 御影堂	弘化3年(1846)	琵琶板墨書	桁行五間、梁間五間、宝形造、檜皮葺、向拜一間、背面突出
15 宝庫	弘化5年(1848)	『高野山名所図会』	土蔵造、桁行五間、梁間三間、入母屋造、銅板葺、正面向拜付、桁行一間、梁間二間、妻入、入母屋造、銅板葺
16 木櫓	昭和後期		二十一間長
17 井戸覆屋	平成		桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺、背面突出、桁行二間、梁間一間、切妻造、銅板葺
18 根本大塔	昭和11年(1936)	棟札	RC造、方五間多宝塔、銅板葺
19 金堂	昭和9年(1934)	『弘法大師老千年御遠忌紀要』	RC造、桁行九間、梁間七間、入母屋造、銅板葺、正面向拜三間
20 鐘樓	昭和33年(1958)	基礎銘板	RC造、桁行三間、梁間三間、入母屋造、銅瓦葺

建物名	年代	根拠	構造形式など
21 御供所	平成		桁行九間長、桁行三間長、切妻造、銅板葺、正面唐破風付
22 間伽棚	平成		桁行一間長、梁間半間長、片流造、板葺
23 中門	平成 27 年 (2015)		五間三戸棟門、入母屋造、檜皮葺
24 青龍大権現社	平成		一間社春日造、銅板葺
25 木柵	平成		九間長、正面中央に鳥居
26 不動堂	鎌倉後期		桁行五間、梁間三間、入母屋造、檜皮葺、向拝一間
27 愛染堂	嘉永元年 (1848)	棟札	桁行三間、梁間三間、入母屋造、檜皮葺、向拝一間
28 大会堂	嘉永元年 (1848)	棟札	桁行五間、梁間五間、入母屋造、檜皮葺、向拝一間
29 三昧堂	嘉永元年 (1848)	棟札	桁行三間、梁間三間、宝形造、檜皮葺
30 東塔	昭和 58 年 (1983)	案内板	方三間多宝塔、檜皮葺
31 浄水所	昭和 33 年 (1958)	石碑銘	RC 造、桁行三間、梁間一間、切妻造、銅板葺
32 清瀧大権現龍王社	昭和 47 年 (1972)	石碑銘	一間社流造、銅板葺
33 木柵	平成 17 年 (2005)	鳥居銘	九間長、正面中央に鳥居
34 智泉大徳廟	昭和 54 年 (1979)	奉納額銘	方一間、宝形造、銅板葺
35 木柵	平成		三十間長
36 木柵	平成		十五間長
37 木柵	平成		三十間長
38 木柵	平成		六十間長
39 間伽井門	平成		一間一戸冠木門、両脇板塀、九間長
40 木柵	平成		二十五間長
41 間伽井中門	平成		一間冠木門、両脇木柵付、二間長
42 木柵	平成		二十間長
43 木柵	平成		百間以上長
44 木柵	平成		十二間長
45 木柵	平成		三十間長
46 木柵	平成		五間長
47 木柵	平成		三間長
48 木柵	平成		三十間長

2 谷上 4 件 63 棟

10 西禅院 13 棟

1 表門	天保 3 年 (1833)	「過去帳」『金剛峯寺諸院家折負輯』	四脚門、檜皮葺
2 会下	昭和前期		南面入母屋造、北面切妻造、二階建、瓦形銅板葺
3 庫裡	天保 3 年 (1833)	「過去帳」『金剛峯寺諸院家折負輯』	入母屋造、銅板葺、入母屋造、旧小玄関付、妻入
4 客殿	天保 3 年 (1833)	「過去帳」『金剛峯寺諸院家折負輯』	入母屋造、銅板葺、平入
5 玄関	天保 3 年 (1833)	「過去帳」『金剛峯寺諸院家折負輯』	入母屋造、銅板葺
6 本堂	大正 2 年 (1913)		入母屋造、銅板葺
7 護摩堂	昭和後期		入母屋造、銅板葺
8 庫裡	昭和前期		入母屋造、銅板葺、二階建
9 塀	昭和後期		木造、細竹編み、棧瓦型銅板葺
10 蔵	昭和前期		切妻造、銅板葺、正面片流れ庇付、置屋根
11 塀	昭和後期		真壁造、漆喰塗、腰下鉋張り (内側モルタル壁)、檜皮葺、切妻造
12 居住棟	平成		切妻造、金属板葺
13 会下新造	昭和後期		切妻造、銅板葺

11 宝城院 19 棟

1 表門	18 世紀前期	技法・意匠	切妻造、銅板葺、四脚門
2 会下	昭和後期		入母屋造、銅板葺、二階建
3 会下 2	昭和後期		切妻造、銅板葺、二階建
4 旧小玄関	昭和後期		片流れ、棧瓦型銅板葺
5 庫裡	18 世紀後期	技法・意匠	入母屋造、妻入、銅板葺
6 客殿	18 世紀後期	技法・意匠	入母屋造、平入、銅板葺
7 玄関	18 世紀後期	技法・意匠	入母屋造、銅板葺
8 護摩堂	18 世紀後期	技法・意匠	入母屋造、棧瓦型銅板葺
9 本堂	18 世紀後期	技法・意匠	入母屋造、棧瓦型銅板葺
10 庫裡	昭和後期		切妻造、2 棟、銅板葺
11 蔵	昭和後期		切妻造、銅板葺、二階建
12 塀	昭和後期		真壁塀、外、築地塀塀、内：漆喰、下：洗い出し、銅板葺、切妻造
13 宿坊施設	昭和後期		RC 造、切妻造、金属板葺
14 宿坊施設	昭和後期		RC 造、入母屋造、金属板葺
15 宿坊施設	昭和後期		RC 造、入母屋造、金属板葺
16 手水舎	平成		切妻造、銅板葺
17 塀	昭和後期		切妻造、銅板葺、コンクリート造
18 倉庫	昭和後期		切妻造、銅板葺、モルタル塗
19 塀	昭和後期		コンクリート塀

12 正智院 17 棟

1 表門	昭和前期		切妻造、檜皮葺、四脚門
2 座敷	昭和後期		入母屋造、銅板葺、入母屋造玄関付
3 本堂	大正期頃	『寺院明細帳』	宝形造、銅板葺
4 客殿	大正期頃	『寺院明細帳』	入母屋造、平入、銅板葺、二重軒付
5 庫裡	大正期頃	『寺院明細帳』	入母屋造、銅板葺、二重軒付
6 玄関	大正期頃	『寺院明細帳』	向唐破風造、檜皮葺
7 車庫	平成		入母屋造、二階建、銅板葺
8 蔵	昭和後期		入母屋造、銅板葺、二階建
9 塀	昭和後期		切妻造、銅板葺、門脇折れ部のみ築地塀、他真壁、内側・漆喰塗り、腰鉋張り、外側：黄土、腰下、鉋張り、築地部は下洗い出し
10 塀	昭和後期		ブロック塀
11 会下	昭和後期		入母屋造、銅板葺、二階建
12 会下	昭和前期		入母屋造、銅板葺、二階建
13 会下	昭和後期		切妻造、銅板葺、二階建

建物名	年代	根拠	構造形式など
14 門	大正		棟門、切妻造、銅板葺、塀付属
15 宿坊	昭和前期		切妻造、銅板葺、二階建、火灯窓
16 宿坊	昭和後期		切妻造、銅板葺、二階建
17 塀	平成		板塀

13 宝寿院 14 棟

1 表門	大正 2 年 (1913)	『寺院明細帳』	四脚門、入母屋造、檜皮葺
2 本堂	昭和 45 年 (1970)	『和歌山県の地名』	入母屋造、銅板葺
3 渡廊下	昭和後期		木造、銅板葺
4 客殿	明治 22 年 (1889)	『寺院明細帳』	入母屋造、銅板葺
5 渡廊下	昭和後期		木造、銅板葺
6 庫裡	明治 22 年 (1889)	『寺院明細帳』	入母屋造、銅板葺
7 玄関	明治 22 年 (1889)	『寺院明細帳』	入母屋造、銅板葺
8 蔵	昭和後期		入母屋造、銅板葺、大壁造、二階建
9 会下	昭和 62 年 (1987)		入母屋造、銅板葺、二階建、門付
10 道場	昭和後期		入母屋造、銅板葺、二階建
11 教室棟	昭和 62 年 (1987)		RC 造、二階建、切妻造、銅板葺
12 寮	昭和 62 年 (1987)		RC 造、三階建、切妻造、銅板葺、3 棟
13 塀	昭和後期		コンクリート造
14 塀	昭和後期		切妻造、銅板葺、大壁 (隅のみ柱) 漆喰、腰下鉋張り

西院谷 10 件 108 棟

14 大門 3 棟

1 大門	宝永 2 年 (1705)	棟札	五間三戸二重門、入母屋造、銅板葺
2 大門公衆トイレ	平成		桁行四間長、梁間二間長、入母屋造、銅板葺、西面休憩所突出
3 木柵	平成		三十間長

15 善集院 7 棟

1 表門	平成	—	三間一戸四脚門、切妻造、銅板葺、両脇袖塀付、各二間長、土塀、銅板葺
2 柵	平成	—	木柵、八間長
3 柵	平成	—	木柵、二十五間長
4 坊舎	平成	—	桁行七間長、梁間四間長、入母屋造、銅板葺、正面玄関付、妻入、入母屋造、銅板葺
5 坊舎	平成	—	桁行九間長、梁間五間長、入母屋造、銅板葺、正面玄関付、妻入、入母屋造、銅板葺
6 小社	平成	—	一間社流造、銅板葺
7 柵	平成	—	木柵、九間長、中央に鳥居

16 西南院 29 棟

1 表門	昭和 50 年代	聞き取り	一間一戸四脚門、切妻造、銅板葺、両脇袖塀付
2 土塀	昭和 50 年代	聞き取り	十四間長、銅板葺
3 土塀	昭和 50 年代	聞き取り	七間長、切妻造、檜皮葺銅板葺、穴門開く
4 木柵	平成	—	九間長
5 木柵	平成	—	九間長
6 車庫	昭和後期	—	S 造、桁行四間長、梁間二間長、切妻造、ポリカーボネート葺板葺
7 坊舎	昭和後期	—	複合屋根、銅板葺
8 土塀	昭和後期	—	十五間長、銅板葺、一間一戸棟門開く
9 土塀	昭和後期	—	六間長、銅板葺、一間一戸棟門開く
10 本堂	明治 34 年 (1901)	聞き取り	桁行七間、梁間七間、入母屋造、檜皮葺、正面東寄向拝一間付、向唐破風
11 洋館	大正期か	技法・意匠	二階建、切妻造、金属板葺、正面突出部付、妻入、切妻造、金属板葺
12 機械室	昭和後期	—	CB 造、桁行二間長、梁間一間長、片流造、銅板葺板葺
13 裏門	昭和前期	—	一間一戸棟門、切妻造、銅板葺、シャッター
14 コンクリートブロック塀	昭和後期	—	二間長
15 コンクリートブロック塀	昭和後期	—	七間長
16 廊下	昭和前期	—	桁行九間、切妻造、銅板葺
17 小堂	昭和前期	—	桁行二間、梁間一間、切妻造、銅板葺
18 廊下	昭和前期	—	桁行三間、切妻造、銅板葺
19 坊舎	昭和前期	—	二階建、複合屋根、銅板葺
20 坊舎	昭和後期	—	二階建、切妻造、銅板葺
21 坊舎	昭和後期	—	三階建、切妻造、銅板葺
22 長屋門	昭和前期	—	桁行七間、梁間二間、切妻造、銅板葺
23 坊舎	昭和後期	—	三階建、複合屋根、銅板葺
24 土塀	昭和後期	—	二十一間長、銅板葺
25 経蔵	享和 3 年 (1803)、17 世紀前期古材利用	『高野山名所図会』	桁行三間長、梁間二間長、入母屋造、銅板葺、正面前室、桁行一間、梁間二間、妻入、唐破風造、銅板葺
26 離れ	昭和前期	—	桁行四間長、梁間三間長、切妻造、金属板葺
27 離れ	昭和前期	—	入母屋造、金属板葺
28 坊舎	昭和後期	—	切妻造、銅板葺
29 坊舎	昭和後期	—	二階建、入母屋造、銅板葺

17 報恩院 10 棟

1 坊舎	昭和後期	—	二階建、入母屋造、金属板葺、背面突出部付
2 坊舎	昭和後期	—	二階建、複合屋根、金属板葺
3 坊舎	昭和後期	—	二階建、入母屋造、金属板葺
4 表門	昭和後期	—	一間一戸薬医門、切妻造、銅板葺、両脇袖塀付、土塀、各二間、銅板葺
5 塀	平成	—	十二間長、アルミ
6 コンクリートブロック塀	昭和後期	—	十間以上長
7 坊舎	平成	—	S 造、三階建、複合屋根、銅板葺
8 倉庫	昭和後期	—	桁行二間長、梁間二間長、切妻造、金属板葺
9 コンクリートブロック塀	昭和後期	—	十五間長
10 物置	平成	—	片流造、銅板葺

第4章 高野山地区の寺院

建物名	年代	根拠	構造形式など
18 自性院 3棟			
1 坊舎	平成		二階建、寄棟造、銅板葺
2 塀	平成		十五間長、縦板塀
3 門及び塀	平成		三間長引入扉、塀、東二間長、西一間長
19 蓮金院 7棟			
1 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、金属板葺
2 表門	昭和後期		一間一戸薬医門、切妻造、銅板葺
3 塀	昭和後期		板塀、八間長
4 塀	昭和後期		二間長、板塀
5 塀	昭和後期		CB塀、十間長
6 塀	昭和後期		板塀、二十間長
7 塀	平成		板塀、十間長、一間一戸棟門開く
20 櫻池院 16棟			
1 表門	昭和前期		一間一戸四脚門、切妻造、檜皮葺
2 土塀	昭和前期		六間長、切妻造、檜皮葺
3 土塀	昭和前期		四間長、切妻造、檜皮葺
4 土蔵	昭和前期		桁行三間長、梁間二間長、入母屋造、銅板葺
5 塀	昭和後期		CB塀、三十五間長
6 本堂	昭和前期		桁行七間、梁間七件、宝形造、檜皮葺、正面向拝一間
7 廊下	昭和前期		桁行三間、梁間一間、妻入、切妻造、銅板葺
8 坊舎	弘化2年(1845)『名利誌』		複合屋根、檜皮葺、正面玄関付、入母屋造、妻入、軒唐破風付
9 坊舎	昭和前期		二階建、入母屋造、金属板葺、背面突出部付
10 坊舎	昭和前期		複合屋根、金属板葺
11 坊舎	昭和後期		二階建、入母屋造、金属板葺
12 土塀	昭和後期		十間長、銅板葺、一間一戸穴門開く
13 土蔵	昭和前期		二階建、入母屋造、金属板葺
14 坊舎	昭和前期		桁行六間長、梁間三間長、入母屋造、金属板葺
15 土蔵	昭和前期		桁行四間長、梁間三間長、切妻造、金属板葺
16 コンクリートブロック塀(駐車場)	昭和後期		CB塀、曲折総長五十間長、西面一間両開扉開く
21 成慶院 6棟			
1 坊舎	昭和後期		RC造、二階建、桁行五間、梁間二間、寄棟造、銅板葺、正面西寄玄関付、切妻造、妻入、向唐破風、背面二箇所突出
2 車庫	昭和後期		S造、桁行四間、梁間二間、片流造、波板鉄板葺、CB壁
3 物置	昭和後期		桁行六間長、梁間二間長、切妻造、波板鉄板葺、下屋付、波板鉄板葺
4 コンクリートブロック塀(駐車場)	平成		曲折総長十五間長、道路境八段積、駐車場境七段積
5 門	平成		一間半長、アルミ製、蛇腹折
6 コンクリートブロック塀(前庭)	昭和後期		三十間長
22 宝亀院 26棟			
1 坊舎	昭和前期		二階建、切妻造、金属板葺、正面玄関付、入母屋造、妻入、金属板葺
2 倉庫	平成		S造、プレハブ、切妻造、金属板葺
3 柵	平成		鉄柵、十五間長
4 門	平成		アルミ両開扉
5 柵	平成		鉄柵、三十間長
6 表門	19世紀前期		一間一戸四脚門、切妻造、檜皮葺、銅板葺、両脇袖塀付、土塀、銅板葺
7 坊舎	昭和後期		二階建、入母屋造、金属板葺
8 門	昭和後期		一間一戸棟門、切妻造、銅板葺
9 土蔵	19世紀前期		土蔵造、桁行三間、梁間二間、入母屋造、銅板葺、前室付
10 大師堂	昭和後期		桁行一間、梁間一間、妻入、切妻造、銅板葺
11 拝所	昭和後期		桁行四間、梁間三間、妻入、切妻造、銅板葺
12 坊舎	19世紀前期		複合屋根、銅板葺、正面玄関付、切妻造、妻入、向唐破風、銅板葺
13 本堂	19世紀前期		桁行八間長、入母屋造、銅板葺
14 廊下	19世紀前期		桁行五間長、梁間一間長、切妻造、銅板葺
15 坊舎	昭和後期		二階建、切妻造、銅板葺
16 坊舎	昭和後期		S造、プレハブ、切妻造、金属板葺
17 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、金属板葺
18 倉庫	昭和後期		S造、プレハブ、桁行三間、梁間三間、金属板葺
19 塀	昭和後期		二十五間長、アルミ製
20 坊舎	昭和後期		二階建、切妻造、金属板葺
21 坊舎	平成		入母屋造、金属板葺
23 坊舎	昭和後期		二階建、入母屋造、渡廊下付
24 小社	昭和後期		一間社春日造、板葺
25 小社覆屋	平成		桁行一間、梁間一間、妻入、切妻造、銅板葺
26 小社	平成		一間社春日造、銅板葺
23 五智院 1棟			
1 坊舎	昭和前期		桁行七間、梁間五間、入母屋造、金属板葺
4 南谷 11件 181棟			
24 遍照尊院 37棟			
1 表門	大正		二階建、三間一戸八脚門、入母屋造、銅板葺
2 本堂	昭和後期		桁行八間、梁間五間、妻入、入母屋造、銅板葺
3 坊舎	明治後期		複合屋根、銅板葺、正面玄関付
4 塀(庭)	昭和後期		五間、銅板葺
5 塀	平成		三十六間長、銅板葺
6 土蔵	昭和前期		土蔵造、二階建、桁行二間長、梁間二間長、切妻造、銅板葺
7 坊舎	昭和後期		二階建、桁行三間半長、梁間二間長、切妻造、金属板葺
8 土蔵	昭和前期		土蔵造、二階建、切妻造、金属板葺

建物名	年代	根拠	構造形式など
9 坊舎	昭和後期		二階建、桁行四間、梁間三間、切妻造、金属板葺
10 坊舎	昭和後期		二階建、片流造、金属板葺
11 坊舎	昭和後期		二階建、桁行四間長、片流造、鉄板葺
12 坊舎	昭和後期		二階建、桁行八間、梁間四間、入母屋造、銅板葺
13 坊舎	昭和後期		RC造、二階建、入母屋造、金属板葺、廊下付
14 坊舎	昭和後期		二階建、桁行五間長、梁間二間長、切妻造、波板鉄板葺
15 坊舎	昭和後期		桁行三間長、梁間二間半長、片流造、波板鉄板葺
16 坊舎	昭和後期		二階建、切妻造、金属板葺
17 坊舎	昭和後期		二階建、切妻造、金属板葺
18 コンクリートブロック塀(駐車場)	昭和後期		十間長、五段積
19 小屋	昭和後期		陸屋根、波板鉄板葺
20 コンクリートブロック塀	昭和後期		九間半長、十三段積
21 門	昭和後期		一間半長、引戸
22 坊舎	昭和後期		桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺
23 コンクリートブロック塀	昭和後期		十六間長
24 門	平成		一間長、内開扉
25 坊舎	明治後期		二階建、梁間六間、妻入、切妻造、瓦葺
26 倉庫	昭和後期		桁行三間長、梁間二間長、片流造、金属板葺
27 門	平成		一間長、波板鉄板
28 コンクリートブロック塀	昭和後期		十五間長、十段積
29 塀	昭和後期		二十間長、波板鉄板
30 坊舎	平成		二階建、入母屋造、金属板葺
31 地藏堂	昭和後期		一間社、切妻造、妻入、銅板葺
32 三宝荒神	昭和後期		一間社流造、銅板葺、庇を室化
33 秋葉大権現	昭和後期		一間社流造、銅板葺、庇を室化
34 白鷹大明神	昭和後期		一間社流造、銅板葺、庇を室化
35 白髪大明神	昭和後期		一間社流造、銅板葺、庇を室化
36 小屋	昭和後期		CB造、片流造、波板鉄板葺
37 コンクリートブロック塀	昭和後期		五間長
25 勸学院 11棟			
1 表門	文化10年(1813)『高野山名所図会』		一間一戸四脚門、切妻造、檜皮葺
2 土塀	昭和後期		九間長、切妻造、檜皮葺
3 土塀	昭和後期		二十五間長、切妻造、檜皮葺
4 鐘楼	文化10年(1813)『高野山名所図会』		腰付鐘楼、上層桁行三間、梁間二間、入母屋造、檜皮葺、袴腰付
5 板塀	平成		二十間長、波板トタン葺
6 門	昭和前期		一間一戸棟門、切妻造、檜皮葺
7 土塀	昭和後期		南北二十一間長、檜皮葺、一間穴門付、東西二十二間長、檜皮葺、一間穴門付
8 土蔵	明治期	技法・意匠	桁行五間、梁間二間、寄棟造、銅板葺
9 坊舎	昭和後期		入母屋造、銅板葺
10 坊舎	昭和55年(1980)開き取り		寄棟造、銅板葺
11 本堂	文化10年(1813)『高野山名所図会』		入母屋造、檜皮葺
26 増福院 17棟			
1 裏門	平成		一間一戸棟門、切妻造、金属板葺
2 板塀	平成		縦板塀、一間半長、切妻造、縦板塀
3 板塀	平成		縦板塀、七間長、切妻造、縦板塀
4 コンクリートブロック塀	平成		三十間長、切妻造、金属板葺
5 坊舎	昭和後期		二階建、切妻造、銅板葺
6 土蔵	昭和前期		土蔵造、二階建、切妻造、銅板葺
7 表門	昭和前期		一間一戸四脚門、切妻造、檜皮葺
8 脇門	昭和前期		一間一戸薬医門、切妻造、檜皮葺
9 土塀	昭和後期		十五間長、切妻造、檜皮葺
10 土塀	昭和後期		七間長、切妻造、檜皮葺
11 土塀	昭和後期		六間長、切妻造、檜皮葺
12 板塀	平成		十間以上長、波板トタン葺
13 坊舎	平成		二階建、切妻造、金属板葺
14 本堂	明治24年(1891)『寺院明細帳』		桁行六間長、梁間六間長、宝形造、銅板葺、向拝一間
15 坊舎	明治24年(1891)『寺院明細帳』		一部二階建、複合屋根、銅板葺、正面西寄玄関付、入母屋造、妻入、銅板葺
16 塀	平成		切妻造、檜皮葺
17 地藏堂	平成		桁行一間、梁間一間、妻入、切妻造、銅板葺
27 高野山大師教会 7棟			
1 石塀	昭和63年(1988)		四間長、中央に門柱
2 石塀	昭和後期		十三間長
3 弁財天社	平成		一間社流造、銅板葺
4 高野山教化研修道場	昭和後期		RC造、二階建、入母屋造
5 大講堂	大正4年(1915)案内板		桁行七間、梁間五間、妻入、入母屋造、檜皮葺、銅板葺、正面向拝一間、軒唐破風、廊下付、桁行二間長、梁間一間長
6 授戒堂	大正		正面五間、側面六間、宝形造、檜皮葺、銅板葺
7 小屋	昭和後期		RC造、桁行一間半長、梁間一間長、片流造、波板スレート葺
28 高野山堂宝館 20棟			
1 管理事務所	昭和後期		二階建、桁行六間長、梁間三間長、切妻造、銅板葺、正面突出部付、入母屋造、妻入、銅板葺
2 休憩所	平成		桁行三間長、梁間一間半長、切妻造、銅板葺

建物名	年代	根拠	構造形式など
3 展示施設	昭和後期		RC造、桁行五間、梁間四間、寄棟造、銅板葺
4 玄関	大正9年(1920)		桁行三間、梁間二間、入母屋造、銅瓦葺
5 事務所	昭和後期		桁行五間、梁間四間、入母屋造、銅板葺
6 中廊	大正9年(1920)		曲折総長九間長、一部S造、切妻造、銅板葺
7 北廊	大正9年(1920)		桁行五間、梁間一間、切妻造、銅瓦葺
8 放光閣	大正9年(1920)		二重、桁行五間、梁間五間、宝形造、銅瓦葺
9 南廊及西廊	大正9年(1920)		曲折総長八間、切妻造、銅板葺、隅部樓閣、方三間、宝形造、銅瓦葺
10 宝蔵	大正9年(1920)		RC造、桁行三間、梁間一間、寄棟造、銅板葺、杖倉造風
11 紫雲殿	大正9年(1920)		二階建、切妻造、銅瓦葺
12 廊下	昭和後期		一部S造、切妻造、銅板葺
13 迎賓館	大正10年(1921)		複合屋根、銅板葺
14 倉庫	昭和後期		桁行三間、梁間二間、切妻造、金属板葺
15 門	昭和後期		両開扉
16 櫓	昭和後期		一間長
17 櫓	昭和後期		四十間長
18 櫓	昭和後期		二十間長
19 宝蔵	昭和後期		RC造、桁行五間以上、梁間二間、切妻造、金属板葺
20 大宝蔵	昭和後期		RC造、入母屋造、金属板葺
29 大聖院 8棟			
1 表門	大正		一間一戸棟門、銅板葺
2 板塀	平成		板塀、八間長
3 板塀	平成		板塀、八間長
4 坊舎	平成		桁行五間、梁間三間、切妻造、金属板葺
5 坊舎	大正		桁行七間、梁間五間、入母屋造、銅板葺
6 本堂	大正		桁行三間、梁間三間、宝形造、金属板葺、廊下付、切妻造、金属板葺
7 物置	平成		S造、プレハブ、桁行三間、梁間一間、陸屋根、金属板葺
8 坊舎	昭和後期		複合屋根、棧瓦葺
30 成就院 11棟			
1 表門	昭和2年(1927)『寺院明細帳』頃		一間一戸薬医門、切妻造、銅板葺
2 土塀	昭和後期		十間長、切妻造、銅板葺
3 土塀	昭和後期		二間長、板塀切妻造、銅板葺
4 板塀	昭和後期		板塀、四間長
5 本堂	昭和2年(1927)『寺院明細帳』頃		桁行五間、梁間三間、妻入、正面寄棟造、背面入母屋造、銅板葺
6 坊舎	昭和2年(1927)『寺院明細帳』頃		桁行五間、梁間三間、入母屋造、銅板葺
7 坊舎	昭和2年(1927)『寺院明細帳』頃		桁行九間、梁間三間、切妻造、銅板葺、正面玄関付、入母屋造、妻入、銅板葺
8 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、金属板葺
9 物置	昭和後期		桁行三間、梁間二間、片流造、金属板葺
10 坊舎	昭和後期		二階建、切妻造、金属板葺
11 坊舎	昭和後期		二階建、入母屋造、銅板葺、正面玄関付、妻入、入母屋造、銅板葺
31 釈迦文院 17棟			
1 本堂	昭和前期		土蔵造、桁行六間長、入母屋造、銅板葺、正面向拝一間
2 坊舎	昭和前期		桁行十間長、梁間五間長、入母屋造、銅板葺、正面玄関付、入母屋造、妻入、銅板葺
3 坊舎	昭和後期		二階建、入母屋造、金属板葺
4 倉庫	昭和前期		桁行四間、梁間一間半、切妻造、金属板葺
5 土蔵	昭和後期		土蔵造、桁行六間、梁間三間、切妻造、金属板葺、前室付
6 坊舎	昭和後期		桁行八間、梁間四間、入母屋造、金属板葺
7 坊舎	昭和後期		桁行七間、梁間四間、入母屋造、金属板葺
8 表門	昭和後期		一間一戸薬医門、切妻造、銅板葺
9 塀	昭和後期		RC造、二間長、銅板葺
10 塀	昭和後期		RC造、二間長、銅板葺
11 塀	昭和後期		RC造、十一間長、銅板葺
12 塀	昭和後期		RC造、十五間長、銅板葺
13 塀	昭和後期		RC造、三十間長、銅板葺
14 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、銅板葺
15 坊舎	昭和後期		二階建、切妻造、銅板葺
16 塀	昭和後期		CB塀、二十間長
17 坊舎	昭和後期		二階建、入母屋造、銅板葺
32 常喜院 20棟			
1 表門	昭和前期	聞き取り	一間一戸四脚門、切妻造、銅板葺
2 土塀	昭和後期		五間長、切妻造、銅板葺
3 土塀	昭和後期		十間長、切妻造、銅板葺
4 門	昭和後期		一間棟門、切妻造、銅板葺
5 土塀	昭和後期		十間長、切妻造、銅板葺
6 地藏堂	昭和後期		桁行三間、梁間二間、切妻造、銅板葺
7 客殿	19世紀後期	技法・意匠	入母屋造、銅板葺、正面玄関付、入母屋造、妻入、銅板葺
8 坊舎	昭和前期		入母屋造、銅板葺、正面東寄玄関付、入母屋造、妻入、銅板葺
9 坊舎	昭和前期		入母屋造、銅板葺、檜皮葺、銅板葺、正面軒唐破風
10 本堂	大正11年(1922)	露盤刻銘	土蔵造、桁行三間、梁間三間、宝形造、銅板葺、正面向拝一間、北面突出、入母屋造、銅板葺
11 板塀	平成		二十間長
12 車庫	平成		桁行五間、梁間三間、切妻造、ポリカーボネート葺
13 坊舎	平成		桁行六間、梁間三間、入母屋造、銅板葺
14 長屋門	昭和前期		二階建、桁行九間長、梁間一間半長、寄棟造、銅板葺
15 坊舎	昭和後期		二階建、桁行八間長、入母屋造、銅板葺

建物名	年代	根拠	構造形式など
16 土塀	平成		十六間長、切妻造、銅板葺
17 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、銅板葺
18 杖倉	17世紀後期	技法・様式	桁行三間、梁間三間、宝形造、銅板葺
19 坊舎	平成		二階建、切妻造、銅板葺、本堂接続部に屋根を架ける。
20 板塀	平成		五間長、アルミ板葺
33 天徳院 31棟			
1 坊舎	平成		二階建、桁行九間長、梁間三間長、切妻造、金属板葺
2 表門	昭和後期		一間一戸薬医門、切妻造、銅板葺
3 土塀	昭和後期		二間長、銅板葺
4 土塀	昭和後期		六間長、銅板葺
5 坊舎玄関	昭和後期		二階建、複合屋根、銅板葺
6 坊舎	昭和前期		入母屋造、銅板葺
7 坊舎	昭和後期		二階建、入母屋造、銅板葺
8 本堂	昭和前期		桁行五間、梁間五間、宝形造、銅板葺
9 仏堂	昭和前期		桁行三間、梁間三間、宝形造、銅板葺
10 塀	昭和後期		板塀、十二間長、切妻造、板葺
11 坊舎	平成		金属板葺
12 坊舎	昭和後期		切妻造、金属板葺
13 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、金属板葺
14 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、金属板葺
15 土塀	昭和後期		四間長、金属板葺
16 板塀	昭和後期		長四十五間、大和板塀、両開扉間、二間長
17 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、金属板葺
18 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、金属板葺
19 坊舎	平成		桁行四間長、梁間一間半、片流造、金属板葺
20 坊舎	昭和後期		桁行三間長、梁間二間、片流造、金属板葺
21 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、金属板葺
22 倉庫	昭和後期		桁行六間長、梁間四間長、切妻造、金属板葺
23 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、金属板葺
24 坊舎	平成		桁行五間、梁間四間、切妻造、金属板葺
25 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、金属板葺
26 坊舎	昭和後期		複合屋根、金属板葺
27 板塀	平成		板塀、三十六間長
28 門	昭和後期		一間棟門、切妻造、銅板葺
29 塀	平成		板塀、九間長
30 坊舎	平成		複合屋根、銅板葺
31 坊舎	平成		切妻造、銅板葺
34 浄善院 2棟			
1 本堂	昭和前期		土蔵造、桁行四間、梁間四間、宝形造、銅板葺、正面玄関付、複合屋根、金属板葺
2 小社	平成		一間社流造、銅板葺
5 小田原谷 6件 121棟			
35 如意輪寺 8棟			
1 表門	昭和後期		一間一戸薬医門、切妻造、銅板葺
2 塀	昭和後期		土塀、三間長、銅板葺
3 塀	昭和後期		土塀、十六間長、銅板葺
4 土蔵	明治中期		桁行三間、梁間三間、切妻造、銅板葺
5 土蔵	明治中期		桁行九間、梁間三間、切妻造、銅板葺
6 坊舎	明治28年(1895)	寺院明細帳	入母屋造、銅板葺、正面玄関付、入母屋造、妻入、銅板葺、土蔵間廊下付
7 本堂	昭和後期	『和歌山県の地名』	桁行五間、梁間三間、入母屋造、妻入、銅板葺、正面向拝一間
8 物置	平成		桁行三間長、梁間一間半長、片流造、トタン板葺
36 安養院 18棟			
1 表門	明治23年(1890)	『寺院明細帳』頃	一間一戸四脚門、切妻造、檜皮葺、銅板葺、両脇袖塀付、土塀、各二間長、切妻造、銅板葺
2 脇門	昭和後期		三間長、引分扉、切妻造、銅板葺
3 土塀	昭和後期		四十間長、銅板葺
4 土蔵	明治23年(1890)	『寺院明細帳』頃	桁行五間長、梁間二間長、切妻造、銅板葺、正面前室付、切妻造、妻入、銅板葺、起りあり
5 小堂	明治23年(1890)	『寺院明細帳』頃	正面三間、梁間二間、側面二間、宝形造、銅板葺
6 坊舎	昭和後期		複合屋根、銅板葺
7 土蔵	昭和前期		二階建、切妻造、銅板葺
8 坊舎	昭和後期		入母屋造、金属板葺、一部二階建、切妻造、金属板葺
9 倉庫	昭和後期		桁行五間、梁間二間、切妻造、波形トタン葺
10 坊舎	明治23年(1890)	『寺院明細帳』頃	入母屋造、銅板葺、正面玄関付、軒唐破風、銅板葺
11 廊下	平成		桁行三間長、梁間二間長、切妻造、銅板葺
12 本堂	明治23年(1890)	『寺院明細帳』頃	正面六間長、複合屋根、銅板葺、正面向拝一間、南面突出、切妻造銅板葺
13 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、金属板葺
14 坊舎	昭和後期		二階建、入母屋造、金属板葺
15 坊舎	昭和後期		二階建、入母屋造、金属板葺
16 坊舎	昭和前期		入母屋造、銅板葺、正面玄関付、軒唐破風、銅板葺
17 板塀	平成		三十七間長、南端近くは両開扉
18 坊舎	平成		RC造、二階建、入母屋造、銅板葺
37 金剛三昧院 48棟			
1 表門	文政8年(1825)	棟札	一間一戸棟門、入母屋造、銅板葺
2 土塀	昭和後期		桁行九間半長、切妻造、銅板葺
3 土塀	昭和後期		桁行二間長、切妻造、銅板葺、穴門付
4 坊舎	昭和前期		二階建、桁行六間半長、梁間二間長、入母屋造、銅板葺
5 土蔵	19世紀前期		桁行三間長、梁間二間半長、切妻造、銅板葺
6 車庫	昭和後期		桁行二間半長、梁間二間半長、切妻造、金属板葺

第4章 高野山地区の寺院

建物名	年代	根拠	構造形式など
7 車庫	昭和後期		桁行二間半長、梁間二間半長、切妻造、金属板葺
8 コンクリートブロック塀	昭和後期		コンクリートブロック造、桁行三十間長、切妻造、銅板葺
9 小屋	昭和後期		プレハブ、桁行九間長、梁間一間半長、陸屋根、金属板葺
10 土蔵	19世紀前期		桁行四間長、梁間二間半長、入母屋造、銅板葺
11 坊舎	昭和後期		二階建、桁行二間長、梁間二間長、切妻造、銅板葺
12 坊舎	昭和後期		二階建、桁行二間長、梁間二間長、切妻造、金属板葺、東面に半間幅の下屋付
13 坊舎	昭和前期		二階建、桁行四間半長、梁間四間長、切妻造、金属板葺
14 倉庫	昭和前期		桁行一間半長、梁間半間長、切妻造、金属板葺
15 倉庫	昭和前期		桁行四間長、梁間二間半長、切妻造、金属波板葺
16 倉庫	昭和前期		桁行四間長、梁間二間半長、切妻造、金属波板葺
17 倉庫	昭和前期		桁行四間長、梁間二間半長、切妻造、金属板葺
18 倉庫	昭和前期		桁行二間長、梁間一間半長、切妻造、金属板葺、煙突付
19 池覆屋	昭和後期		桁行二間長、梁間一間半長、切妻造、金属波板葺、北面西寄突出、桁行一間、梁間長一間、切妻造、金属波板葺
20 コンクリートブロック塀	昭和後期		コンクリートブロック造、二十七間長、両開扉付
21 車庫	昭和後期		桁行三間長、梁間一間長、片流造、金属波板葺
22 坊舎	昭和前期		桁行三間長、梁間二間長、寄棟造、金属板葺、西面突出部、桁行一間半長、梁間半間長、片流造、金属板葺
23 坊舎	昭和前期		桁行二間長、梁間二間長、切妻造、金属板葺
24 小屋	昭和後期		桁行一間長、梁間半間長、切妻造、金属板葺
25 坊舎	昭和前期		二階建、桁行四間長、梁間二間長、入母屋造、銅板葺、北面東寄突出部付
26 坊舎	昭和前期		桁行四間半、梁間二間半、複合屋根、金属板葺、南面廊下付
27 コンクリートブロック塀	昭和後期		コンクリートブロック造、五間長、門柱・門扉付
28 坊舎	昭和前期		桁行五間半長、梁間二間長、入母屋造、金属板葺、南面東寄突出部付、桁行一間長、梁間一間長、片流造、金属板葺
29 坊舎	昭和前期		二階建、切妻造、金属板葺
30 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、金属板葺
31 坊舎	昭和前期		二階建、桁行七間長、梁間二間長、入母屋造、銅板葺
32 坊舎	昭和前期	技法・意匠	桁行三間長、梁間二間長、入母屋造、板葺、東面南寄廊下付、切妻造、金属板葺
33 多宝塔	鎌倉時代		三間多宝塔、檜皮葺
34 坊舎	昭和後期		二階建、入母屋造、金属板葺
35 客殿及び台所	寛永元年(1624) 棟札 玄閣、宝暦8年(1758)	棟札	桁行十五間長、入母屋造、檜皮葺、南面東寄玄閣付、桁行一間、梁間一間、妻入、入母屋造、檜皮葺、正面軒唐破風付
36 廊下	19世紀前期		桁行七間長、梁間一間長、切妻造、檜皮葺
37 本堂及び位牌堂	17世紀中期	技法・意匠	本堂、桁行三間、入母屋造、檜皮葺、正面向拝一間付、位牌堂、正面三間、入母屋造、檜皮葺、北面および西面突出部付
38 経蔵	鎌倉時代		校倉造、桁行二間長、梁間一間半長、寄棟造、檜皮葺
39 四所明神社本殿	天文21年(1552)		一間社春日造、檜皮葺
40 板塀	昭和後期		桁行八間長、門柱付、切妻造、銅板葺
41 天満宮	昭和後期		一間社春日造、銅板葺
42 拝殿	昭和後期		桁行二間半長、梁間一間半長、切妻造、銅板葺
43 本殿	昭和後期		方一間、宝形造、銅板葺、正面向拝一間付
44 木櫃	昭和後期		三間半長、門柱付
45 門	昭和前期		一間一戸棟門、切妻造、金属板葺
46 土塀	昭和前期		桁行十五間半長、切妻造、金属板葺、二間長木櫃付
47 坊舎	19世紀前期		切妻造、銅板葺
48 坊舎	昭和後期		二階建、入母屋造、銅板葺
38 西門院 12棟			
1 表門	大正		三間一戸棟門、寄棟造、銅板葺、両脇袖塀付、土塀、各桁行一間、切妻造、銅板葺
2 土塀	昭和後期		桁行長四間長、切妻造、銅板葺
3 本堂	嘉永4年(1851)『名利誌』		正面六間長、宝形造、銅板葺、正面軒唐破風、正面向下屋付、銅板葺
4 土蔵	文化年間(1804-1818) 『名利誌』		二階建、切妻造、金属板葺、前室付
5 坊舎	明治27年(1894) 『名利誌』		複合屋根、銅板葺(一部、檜皮葺に金属板葺)
6 坊舎	昭和後期		二階建、切妻造、金属板葺、前室付金属板葺
7 板塀	昭和後期		九間長、建板塀、一間一戸冠木門付
8 長屋門	明治中期		桁行五間半、梁間二間、切妻造、金属板葺
9 坊舎	昭和後期		二階建、切妻造、金属板葺
10 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、金属板葺
11 土塀	昭和後期		二十八間長、切妻造、銅板葺
12 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、金属板葺
39 高室院 22棟			
1 門	昭和前期		一間一戸薬師門、切妻造、銅板葺
2 塀	昭和後期		CB塀、二十間長
3 坊舎	平成		二階建、桁行六間、梁間三間、切妻造、スレート葺
4 塀	昭和後期		CB塀、二十間長、一間棟門開く、切妻造、銅板葺
5 表門	昭和前期		一間一戸四脚門、入母屋造、銅板葺、両脇袖塀付、銅板葺

建物名	年代	根拠	構造形式など
6 土塀	昭和後期		十二間長、銅板葺
7 土塀	昭和後期		六間長、銅板葺
8 土塀	昭和後期		一間長、銅板葺
9 物置	昭和前期		桁行六間、梁間三間、切妻造、金属板葺、正面向室付、切妻造、妻入、銅板葺
10 本堂	昭和後期		RC造、正面五間、側面六間、宝形造、銅板葺、正面向拝一間
11 廊下	平成		桁行七間長、切妻造、銅板葺
12 仏堂	昭和前期		土蔵造、正面三間長、側面三間長、宝形造、金属板葺、正面向拝一間
13 廊下	昭和前期		四間長、切妻造、金属板葺
14 庫裏	明治後期		桁行六間長、梁間四間長、寄棟造、金属板葺
15 廊下	昭和後期		二階建、桁行四間、梁間三間、切妻造、金属板葺
16 坊舎	昭和後期		二階建、桁行四間、梁間三間、切妻造、金属板葺
17 坊舎	昭和後期		複合屋根、金属板葺
18 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、金属板葺
19 坊舎	昭和前期		入母屋造、檜皮葺、銅板葺、正面玄閣付、入母屋造、妻入、檜皮葺、銅板葺
20 坊舎	昭和後期		二階建、梁間三間、正面入母屋造、背面切妻造、銅板葺
21 小社	昭和後期		一間社春日造、銅板葺
22 塀	昭和後期		CB塀、十間長、物置付、桁行三間長、梁間半間長、片流造、金属板葺
40 蓮花院 13棟			
1 表門	昭和後期		四脚門、銅板葺
2 塀	昭和後期		(土塀風) RC塀、銅板葺
3 客殿	平成27年(2015)		寄棟造(L字型)、二階建、銅板葺、S造
4 本堂	明治後期		五間、宝形造、銅板葺、正面土扉
5 客殿・庫裏	明治後期		入母屋造、鉄板葺、玄閣銅板葺
6 渡廊下	昭和後期		切妻造、銅板葺
7 物置	昭和後期		片流れ、金属板葺(本堂軒下)
8 塀・門扉	平成		塀:アルミパイプ製(角)、門扉:アルミ製引戸
9 住居	平成		プレファブ造
10 方丈	明治後期		切妻造、鉄板葺(入口左)
11 庫裏増築部	平成		切妻造、金属板葺、S造
12 ブロック塀	昭和後期		コンクリートブロック塀
13 本殿	昭和61年(1986) 遷宮石碑		一間社流造、銅板葺
6 往生院谷 11件 156棟			
41 宝生寺 6棟			
1 表門	昭和9年頃(1934)頃	『寺院明細帳』	一間一戸棟門、切妻造、銅板葺
2 コンクリートブロック塀	昭和後期		桁行十四間長、切妻造、銅板葺、板扉付
3 コンクリートブロック塀	昭和後期		桁行九間長、切妻造、銅板葺
4 吾来堂	平成		桁行五間半長、梁間二間長、妻入、切妻造、銅板葺、正面向下屋付
5 坊舎	平成		二階建、切妻造、スレート葺
6 坊舎	平成		二階建、切妻造、スレート葺
42 持明院 17棟			
1 土塀	平成		桁行二十七間長、切妻造、銅板葺
2 坊舎	平成		二階建、切妻造、金属板葺
3 坊舎	昭和後期		二階建、切妻造、金属板葺
4 土蔵	昭和前期		二階建、桁行五間半長、梁間一間長、南面切妻造、北面寄棟造、金属板葺
5 長屋門	昭和前期		二階建、桁行十二間半長、梁間二間長、切妻造、金属板葺
6 表門	大正期		一間一戸四脚門、切妻造、銅板葺、両脇袖塀付、各二間長、切妻造、銅板葺
7 脇門	昭和前期		一間一戸棟門、切妻造、銅板葺
8 庫裏	大正11年(1922) 『寺院明細帳』、『和歌山県の近代和風建築』		入母屋造、銅板葺、正面玄閣付、桁行一間、梁間一間、妻入、入母屋造、銅板葺
9 坊舎	昭和前期		二階建、入母屋造、銅板葺
10 本堂	昭和6年(1931) 『寺院明細帳』、『和歌山県の近代和風建築』		宝形造、銅板葺、正面向拝一間、北面突出部付、入母屋造、銅板葺
11 土蔵	昭和前期		二階建、入母屋造、銅板葺、前室付、妻入、入母屋造、銅板葺
12 鐘楼	18世紀中期		桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺
13 小社	昭和後期		一間社春日造、銅板葺
14 板塀	平成		五間長、縦板塀
15 坊舎	昭和後期		二階建、入母屋造、金属板葺
16 コンクリートブロック塀	昭和後期		三十五間長
17 裏門	昭和後期		三間一戸棟門、切妻造、銅板葺、両脇袖塀付、両脇間に潜戸
43 不動院 18棟			
1 表門	昭和後期		一間棟門、切妻造、銅板葺
2 本堂	昭和前期		桁行五間、梁間五間、宝形造、銅板葺
3 校倉	昭和後期		桁行五間長、梁間二間長、校倉造、入母屋造、銅板葺
4 坊舎	昭和前期		桁行十三間、梁間七間(内、東面一間葺降庇)、入母屋造、銅板葺、北面西寄玄閣付、入母屋造、銅板葺、妻入、本堂間渡廊下、桁行四間、中間に庭門、RC造
5 坊舎	平成		二階建、桁行八間長、梁間四間半長、入母屋造、銅板葺、西面二階建角屋
6 坊舎	平成		二階建、RC造、桁行七間長、梁間五間半長、入母屋造、銅板葺、正面三間向拝付、背面角屋突出、切妻造、銅板葺
7 書院	江戸時代前期	技法・意匠	桁行十間、梁間四間、入母屋造、銅板葺
8 坊舎	平成		二階建、複合屋根、金属板葺

建物名	年代	根拠	構造形式など
9 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、金属板葺
10 坊舎	平成		桁行二間長、梁間一間長、切妻造、椋瓦葺
11 坊舎	昭和後期		切妻造、銅板葺、渡廊下付
12 小屋	平成		片流造、ポリカーボネート板葺
13 小屋	平成		片流造、ポリカーボネート板葺
14 ポンプ室	平成		片流造、金属板葺
15 小屋	平成		片流造、金属板葺、門扉付
16 小社	平成		一間社春日造、金属板葺
17 小社	平成		一間社春日造、金属板葺
18 木柵	平成		四間長
44 北室院 14棟			
1 表門	昭和前期		一間一戸四脚門、入母屋造、銅板葺、両脇築地塀付、北一間長、南二間長、切妻造、銅板葺
2 長屋門	昭和前期		桁行十四間半長、梁間二間長、入母屋造、銅板葺
3 車庫	平成		S造、桁行二間半長、梁間二間半長、招造、瓦葺鉄板葺
4 小堂(ポンプ室)	昭和後期		桁行一間、梁間一間、四方転び、切妻造、銅板葺
5 本堂	昭和前期		桁行十四間長、梁間七間長、入母屋造、シングル葺、南面中央部玄関付、入母屋造、妻入、銅板葺、長屋門間渡廊付、二棟、南下造、北方角屋突出、入母屋造
6 坊舎	昭和前期		桁行十二間長、桁行五間長、入母屋造、銅板葺、西面中央玄関付、入母屋造、銅板葺
7 坊舎	昭和前期		桁行曲折八、七五間長、梁間四間、入母屋造、銅板葺、本堂間、坊舎(6)間渡廊付、桁行二間長
8 土蔵	昭和前期		桁行六間、梁間二間、入母屋造、銅板葺、北面中央蔵前突出、入母屋造
9 倉庫	昭和後期		桁行四間、梁間三間、切妻造、波板トタン葺
10 倉庫	—		桁行二間半、片流造、崩壊
11 坊舎(住居)	平成		二階建、桁行五間、梁間三間、切妻造、鉄板葺
12 築地塀	昭和前期		真壁塀(昭和前期)、築地塀(昭和前期)、コンクリート塀(平成)
13 塀	平成		波板鉄板葺
14 裏門	昭和後期		一間一戸棟門、切妻造、銅板葺、掘立柱に鉄輪継
45 上池院 10棟			
1 表門	平成		一間一戸薬医門、切妻造、銅板葺、総丸柱、袖塀付、腕木塀、銅板葺、東二間、西一間
2 本堂	昭和後期		RC造、桁行五間、梁間五間、宝形造、銅板葺、向拝二間、正面から二間目の気負下を開いた堂内に取り込む。
3 渡廊	昭和後期		桁行三間長、梁間一間長
4 坊舎	平成		RC造、二階建、桁行十四間長、梁間六間長、入母屋造、銅板葺、東南隅角屋付、二階建、廊下付、北面西寄、玄関付属、入母屋造
5 渡廊	平成		S造、桁行五間長、梁間一間長、南下造、中央角破風付
6 坊舎	昭和後期		S造、二階建、桁行十間長、梁間十間長
7 坊舎	平成		二階建、複合屋根、鉄板葺、桁行十間長、梁間六間長、桁行七間長、梁間四間長、角屋桁行六間長
8 住宅	平成		二階建、寄棟造、瓦葺鉄板葺、桁行四間半長、梁間三間長
9 物干場	平成		切妻造、波板トタン葺、桁行二間長、梁間三間長
10 カーポート	平成		二棟並、桁行二間長、梁間二間長、切妻造、透明ポリカーボネート葺
46 密蔵院 15棟			
1 苜蓿堂	昭和6年(1931)		権現造、拜堂、桁行五間、梁間二間、入母屋造、椋皮葺、祀堂、桁行三間、梁間六間、入母屋造、銅板葺、相の間、南下造、銅板葺
2 表門	昭和後期		一間一戸薬医門、切妻造、本瓦形銅板葺
3 表門東塀	昭和後期		腕木塀四間、内東端潜門付、腰下コンクリート
4 表門西塀	昭和後期		腕木塀二間、腰下コンクリート
5 本堂	昭和後期		桁行五間、梁間五間、入母屋造、銅板葺、向拝一間半長
6 坊舎	昭和後期		桁行十一間長、西寄玄関突出、桁行二間、梁間一間半、入母屋造、背面南方角屋突出、二階建
7 坊舎	昭和後期		二重、下層、桁行五間、梁間五間、上層、桁行三間、梁間三間、宝形造、銅板葺
8 坊舎	昭和後期		桁行四間長、梁間二間半長、片入母屋造、銅板葺
9 坊舎	昭和後期		桁行十間、梁間四間、梁間六間、桁行三間弱、梁間二間、桁行四間、梁間一〜二間、複合屋根、銅板葺
10 坊舎	昭和後期		桁行三間、梁間三間、切妻造、鉄板葺
11 コンクリートブロック塀	昭和後期		コンクリートブロック塀、段造塀、二十五メートル以上
12 坊舎	昭和後期		苜蓿堂東妻増築、本堂東接線、桁行九間長、梁間三間長
13 坊舎	昭和後期		総二階建、桁行九間半長、梁間五間、入母屋造、鉄板葺
14 トイレ	平成		桁行二間、梁間二間、妻入、切妻造、銅板葺
15 コンクリートブロック塀	昭和後期		(12)南〜(6)東〜(13)東
47 地藏院 8棟			
1 坊舎	平成		三階建、複合屋根、銅板葺、正面玄関付、入母屋造、妻入、銅板葺
2 坊舎	平成		三階建、切妻造、銅板葺
3 坊舎	平成		入母屋造、銅板葺
4 本堂	平成		正面五間、奥行六間、宝形造、銅板葺、向拝一間
5 表門	明治後期		一間一戸四脚門、切妻造、銅板葺

建物名	年代	根拠	構造形式など
6 土塀	昭和後期		十七間長、銅板葺
7 土塀	昭和後期		十三間長、銅板葺
8 土塀	昭和後期		三間長、銅板葺
48 遍照光院 16棟			
1 表門	明治前期		一間一戸四脚門、切妻造、椋皮葺、軒唐破風、両脇袖塀付、椋皮葺
2 土塀	昭和前期		十六間長、銅板葺
3 土塀	昭和前期		七間長、銅板葺
4 坊舎	昭和前期		桁行八間、梁間四間、入母屋造、銅板葺
5 土塀	昭和後期		十三間長、金属板葺
6 坊舎	昭和後期		二階建、南端入母屋造、北端切妻造、金属板葺
7 本堂及び護摩堂	文久2年(1862)『名利誌』		本堂、桁行三間、梁間四間、入母屋造、銅板葺、向拝一間、護摩堂、桁行四間、梁間四間、切妻造、銅板葺
8 坊舎	明治15年(1882)『名利誌』		桁行八間、入母屋造、銅板葺
9 玄関	明治15年(1882)『名利誌』		桁行一間長、梁間二間長、妻入、入母屋造、椋皮葺
10 庫裏	文久元年(1861)『名利誌』		複合屋根、銅板葺
11 坊舎	昭和後期		二階建、入母屋造、銅板葺
12 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、金属板葺
13 土蔵	昭和後期		土蔵造、入母屋造、金属板葺
14 坊舎	昭和後期		寄棟造、金属板葺
15 坊舎	昭和後期		切妻造、金属板葺
16 板塀	昭和後期		縦板塀、十二間長、金属板葺
49 三宝院 19棟			
1 表門	明治後期		一間一戸四脚門、切妻造、椋皮葺
2 土塀	昭和後期		十二間長、椋皮葺
3 土塀	昭和後期		十九間長、椋皮葺
4 坊舎	明治後期		桁行十間長、入母屋造、銅板葺、正面玄関付、切妻造、妻入、椋皮葺
5 本堂及び護摩堂	明治後期		本堂、桁行三間、入母屋造、椋皮葺、護摩堂、入母屋造、椋皮葺
6 庫裏	明治後期		複合屋根、銅板葺
7 坊舎	昭和後期		RC造、三階建
8 物置	昭和後期		桁行三間、梁間一間、切妻造、銅板葺
9 土蔵	明治後期		桁行六間長、梁間三間長、入母屋造、銅板葺
10 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、金属板葺
11 坊舎	昭和後期		二階建、入母屋造、金属板葺
12 板塀	昭和後期		縦板塀、五間長、金属板葺
13 コンクリートブロック塀	昭和後期		CB塀、十間長、金属板葺
14 門	昭和後期		一間一戸棟門、切妻造、金属板葺、引違戸
15 坊舎	昭和後期		桁行六間、梁間二間、切妻造、金属板葺、一部突出
16 塀	昭和後期		CB塀、金属板葺
17 門	昭和後期		一間一戸棟門、切妻造、金属板葺
18 塀	昭和後期		八間長、金属板葺
19 坊舎	昭和後期		桁行十間長、梁間三間長、切妻造、金属板葺
50 成福院 13棟			
1 高野山摩尼宝塔	昭和59年(1984)パンフレット		八角三重塔、金属板葺、正面突出部、桁行三間、梁間二間、切妻造、金属板葺
2 表門	昭和前期		一間一戸四脚門、切妻造、椋皮葺、軒唐破風、両脇袖塀付、土塀、銅板葺
3 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、銅板葺
4 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、銅板葺
5 門	昭和後期		両開扉
6 塀	昭和後期		十五間長、銅板葺
7 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、銅板葺
8 土塀	昭和後期		十二間長、銅板葺、一間穴門開く
9 板塀	昭和後期		縦板塀、一間長、半間扉開く
10 コンクリートブロック塀	昭和後期		CB塀、六間長
11 坊舎	平成		三階建、複合屋根、金属板葺
12 坊舎	平成		三階建、複合屋根、金属板葺
13 土蔵	昭和後期		土蔵造、三階建、切妻造、金属板葺
51 大内院 20棟			
1 表門	大正13年(1924)『寺院明細帳』頃		一間一戸四脚門、切妻造、椋皮葺、両脇袖塀付、土塀、椋皮葺
2 土塀	昭和後期		八間長、椋皮葺
3 土塀	昭和後期		十一間長、一間棟門開く
4 地藏小堂	昭和36年(1961)		方一間、宝形造、銅板葺
5 鐘楼	平成		桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺
6 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、銅板葺
7 坊舎	大正13年(1924)『寺院明細帳』頃		桁行十間長、入母屋造、椋皮葺、正面玄関付、桁行一間長、梁間二間長、妻入、切妻造、向唐破風
8 本堂及び護摩堂	大正13年(1924)『寺院明細帳』頃		本堂、桁行三間、梁間三間、宝形造、銅板葺、向拝一間、護摩堂、桁行二間長、切妻造、銅板葺
9 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、銅板葺入母屋造、銅板葺
10 門	昭和後期		一間一戸棟門、切妻造、金属板葺
11 塀	昭和後期		CB塀、七間長、銅板葺
12 塀	昭和後期		CB塀、十五間長、銅板葺
13 門	昭和後期		S造、両開扉
14 坊舎	昭和後期		入母屋造、銅板葺
15 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、銅板葺
16 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、金属板葺
17 廊下	昭和後期		切妻造、金属板葺
18 坊舎	昭和後期		二階建、寄棟造、金属板葺
19 坊舎	昭和前期		二階建、入母屋造、金属板葺
20 稲荷社	平成		一間社隅木入春日造、銅板葺

第4章 高野山地区の寺院

建物名	年代	根拠	構造形式など
7 蓮花谷 7件 191棟			
52 大明王院 21棟			
1 表門	明治25年(1892)『名利誌』		一間一戸薬師門、切妻造、銅板葺
2 坊舎	明治25年(1892)『名利誌』		入母屋造、鉄板葺、正面玄関付、唐破風造、妻入、鉄板葺
3 本堂	昭和後期		入母屋造、向拝付、檜皮葺
4 付風屋	昭和後期		二階建、切妻造、銅板葺
5 庫裏	昭和前期		二階建、切妻造、鉄板葺
6 庫裏	昭和前期		切妻造、鉄板葺
7 土蔵	明治25年(1892)『名利誌』		土蔵造、二階建、切妻造、鉄板葺
8 塀	明治25年(1892)『名利誌』		土塀、銅板葺
9 塀	明治25年(1892)『名利誌』		土塀、銅板葺
10 倉庫	昭和後期		二階建、切妻造、鉄板葺
11 車庫	昭和後期		切妻造、鉄板葺
12 土塀	昭和後期		土塀、銅板葺
13 板塀	昭和後期		縦板塀
14 坊舎	昭和後期		二階建、入母屋造、銅板葺
15 座敷	昭和後期		切妻造、銅板葺
16 渡廊	昭和後期		切妻造、鉄板葺
17 座敷	昭和後期		正面入母屋造、背面切妻造、妻入、鉄板葺
18 堂	明治後期		宝形造、銅板葺
19 坊舎	昭和後期		北端入母屋造、南端切妻造、切妻造、銅板葺
20 ボンブ小屋	平成		切妻造、板葺
21 ボンブ小屋	平成		切妻造、板葺
53 光明院 19棟			
1 土塀	昭和後期		土塀、銅板葺
2 土塀	昭和後期		土塀、銅板葺、棟門開く、一間一戸棟門、切妻造、銅板葺
3 表門	明治24年(1891)『寺院明細帳』		一間一戸棟門、切妻造、銅板葺
4 土塀	昭和後期		土塀、銅板葺
5 方丈	明治24年(1891)『寺院明細帳』		入母屋造、鉄板葺、正面玄関付、入母屋造、妻入、銅板葺
6 宝庫	明治24年(1891)『寺院明細帳』		土蔵造、二階建、切妻造、銅板葺
7 坊舎	昭和後期		二階建、入母屋造、鉄板葺
8 土蔵	昭和後期		土蔵造、切妻造、鉄板葺
9 坊舎	昭和後期		切妻造、銅板葺
10 坊舎	昭和後期		入母屋造、銅板葺
11 板塀	昭和後期		縦板塀
12 付風屋	昭和後期		二階建、入母屋造、金属板葺
13 寺務所	昭和後期		二階建、入母屋造、銅板葺
14 坊舎	昭和後期		二階建、入母屋造、銅板葺
15 坊舎	昭和後期		二階建、入母屋造、鉄板葺
16 坊舎	昭和後期		二階建、入母屋造、鉄板葺
17 本堂	19世紀中期		土蔵造、宝形造、銅板葺
18 茶室	昭和前期		切妻造、銅板葺
19 小社	昭和後期		一間社春日造、銅板葺
54 惠光院 34棟			
1 毘沙門天堂	大正9年(1920)『寺院明細帳』		前堂、桁行三間、梁間二間、入母屋造、銅板葺、後堂、桁行三間、梁間三間、宝形造、銅板葺
2 通用門及び塀	平成		両開扉、板塀付、二間長
3 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、銅板葺
4 板塀	平成		縦板塀、四間半長
5 板塀	昭和後期		縦板塀、九間長
6 板塀	昭和後期		縦板塀、十二間長
7 板塀	昭和後期		縦板塀、七間長
8 仏堂	平成		正面五間、側面六間、宝形造、銅板葺、向拝一間、南側面鰐加幡付、桁行一間、梁間一間、片流造、銅板葺
9 仏堂	平成		桁行三間、梁間三間、入母屋造、銅板葺、南側面鰐加幡付、桁行一間、梁間一間、片流造、銅板葺
10 廊下	平成		切妻造、銅板葺、桁行二間半長、梁間一間長
11 車庫	平成		桁行二間、梁間二間、片流造、金属板葺
12 仏堂	平成		入母屋造、銅板葺
13 坊舎	平成		複合屋根、銅板葺
14 不動堂	平成		一間社春日造、板葺
15 坊舎	昭和後期		複合屋根、銅板葺
16 坊舎	昭和後期		二階建、入母屋造、銅板葺
17 坊舎	大正9年(1920)『寺院明細帳』		複合屋根、銅板葺、正面玄関付、妻入、檜皮葺、銅板葺、軒唐破風
18 表門	大正9年(1920)『寺院明細帳』		一間一戸四脚門、切妻造、檜皮葺、両脇袖塀、土塀、切妻造、檜皮葺
19 土塀	平成		十一間半長
20 板塀	平成		一間半長
21 土塀	平成		四間長
22 坊舎	昭和前期		二階建、桁行五間長、梁間二間半長、切妻造、銅板葺
23 坊舎	昭和前期		二階建、桁行四間長、梁間二間長、切妻造、銅板葺
24 坊舎	昭和後期		二階建、桁行三間半長、梁間二間長、切妻造、銅板葺
25 坊舎	昭和後期		コンクリートブロック造、桁行五間長、梁間一間長、片流造、金属板葺、煙突付
26 門	昭和後期		一間一戸棟門、銅板葺
27 坊舎	昭和後期		二階建、切妻造、銅板葺
28 坊舎	昭和後期		二階建、寄棟造、銅板葺
29 板塀	昭和後期		一間長
30 コンクリートブロック塀	昭和後期		三間長、門扉付

建物名	年代	根拠	構造形式など
31 坊舎	昭和前期		二階建、桁行八間、切妻造、銅板葺
32 坊舎	昭和後期		二階建、桁行二間、切妻造、銅板葺
33 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、銅板葺
34 コンクリートブロック塀	昭和後期		桁行七間長、門扉付
55 円通寺 18棟			
1 山門	天保4年(1833)棟札		三間一戸棟門、寄棟造、銅板葺、両脇袖米付、土塀、各四間長
2 板塀	平成		三間長
3 板塀	平成		四間長
4 機械室	昭和後期		桁行一間長、梁間半間長、金属板葺
5 土蔵	弘化4年(1847)棟札		二階建、桁行三間、梁間二間、寄棟造、金属板葺、玄関付
6 本堂	19世紀前期	技法・意匠	正面五間、側面五間、宝形造、銅板葺、向拝三間、正面軒唐破風付
7 瑜伽道場	明治36年(1903)か	聞き取り	桁行六間、梁間八間、入母屋造、銅板葺、廊下付、桁行二間、梁間一間
8 庫裏	19世紀前期	技法・意匠	桁行八間長、梁間六間長、入母屋造、銅板葺、正面玄関付、桁行一間、梁間二間、妻入、入母屋造
9 坊舎	明治中期	技法・意匠	二階建、複合屋根、金属板葺
10 倉庫	昭和後期		桁行七間長、梁間二間長、切妻造、金属板葺
11 倉庫	昭和後期		桁行一間半長、梁間一間半長、切妻造、銅板葺
12 井戸屋形	昭和後期		桁行一間長、梁間一間長、切妻造、金属板葺
13 板塀	昭和後期		六間長
14 本殿	平成		一間社春日造、銅板葺
15 脇殿	平成		五間社流造、銅板葺
16 求聞持堂	19世紀前期	技法・意匠	正面三間、側面・背面二間、宝形造、銅板葺、向拝一間
17 小社	平成		七間社流造、金属板葺
18 小社	平成		一間社流造、板葺
56 熊谷寺 19棟			
1 表門	大正9年(1920)石碑		一間一戸四脚門、切妻造、銅板葺
2 塀	平成		十四間長、椋瓦形銅板葺、土塀、門付
3 塀	平成		十間長、椋瓦形銅板葺、土塀
4 坊舎	昭和後期		二階建、桁行四間、梁間三間、入母屋造、椋瓦形銅板葺
5 坊舎	昭和前期		桁行十間長、梁間八間長、入母屋造、椋瓦形銅板葺、正面玄関付、妻入、起破風付
6 本堂	昭和後期		桁行三間、梁間三間、入母屋造、銅板葺、向拝一間
7 坊舎	昭和後期		桁行六間、梁間四間、切妻造、銅板葺
8 物置	昭和後期		桁行三間、梁間一間、招造、波板鉄板葺
9 円光大師真影堂	大正		桁行三間、梁間四間、入母屋造、銅板葺、向拝一間
10 小社	平成		一間社流造、銅板葺、見世欄造
11 坊舎	昭和後期		二階建、桁行十間長、梁間四間長、切妻造、鉄板葺
12 坊舎	平成		RC造、二階建、桁行九間長、梁間五間半長、入母屋造、銅板葺、南角屋付、二階建、切妻造
13 坊舎	昭和後期		桁行五間半長、梁間三間長、入母屋造、銅板葺
14 稲荷社	昭和後期		一間社流造、銅板葺、見世欄造
15 坊舎	昭和後期		桁行十間長、梁間二間半長、西端入母屋造、東端接統、銅板葺
16 坊舎	昭和後期		東側三階建、西側二階建、南北十三間長、梁間八間半長、複合屋根、銅板葺
17 坊舎	昭和後期		二階建、桁行五間半長、梁間四間長、切妻造、鉄板葺
18 坊舎	平成		(13)の角屋、桁行二間半長、梁間二間長、切妻造、鉄板葺
19 坊舎	平成		S造、東側三階建、西側二階建、桁行十四メートル、梁間十メートル、切妻造、西北角屋
57 清淨心院 43棟			
1 大師門	明治15年(1882)『名利誌』		一間一戸四脚門、檜皮葺
2 土塀	昭和後期		八間長、檜皮葺
3 土塀	昭和後期		十六間長、檜皮葺
4 土塀	昭和後期		十二間長、檜皮葺
5 四脚門	明治前期	『名利誌』	一間一戸四脚門、檜皮葺
6 廿日大師堂	明治15年(1882)『名利誌』		正面三間、奥行四間、宝形造、檜皮葺、向拝一間
7 渡廊	明治15年(1882)『名利誌』		桁行二間、梁間一間、唐破風造、檜皮葺
8 渡廊	明治15年(1882)『名利誌』		桁行一間、梁間半間、唐破風造、檜皮葺、鰐加幡付
9 位牌堂	明治15年(1882)『名利誌』		桁行十二間、梁間四間、入母屋造、檜皮葺
10 井戸屋形	平成		桁行一間、梁間一間、切妻造、板葺
11 坊舎	平成		切妻造、銅板葺
12 土蔵	明治前期		土蔵造、桁行三間、梁間二間、入母屋造、銅板葺、正面前室付、桁行一間、梁間二間、妻入、銅板葺
13 鐘楼	昭和46年(1971)鐘楼銘		桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺
14 客殿	明治3年(1870)『名利誌』		桁行十間、入母屋造、檜皮葺
15 玄関	明治3年(1870)『名利誌』		桁行四間、切妻造、檜皮葺、正面突出部、桁行二間、梁間一間、妻入、入母屋造、檜皮葺
16 方丈	昭和前期		梁間八間、入母屋造、檜皮葺
17 渡廊	昭和後期		二階建、桁行三間長、梁間二間長、切妻造、銅板葺
18 坊舎	昭和後期		二階建、南北棟、桁行十間、梁間二間、東西棟、桁行四間、梁間二間、切妻造、銅板葺
19 渡廊	昭和後期		二階建、桁行三間、梁間二間、切妻造、銅板葺

建物名	年代	根拠	構造形式など
20 坊舎	昭和後期		二階建、桁行十八間、梁間二間、切妻造、銅板葺
21 板塀	平成		縦板塀、八間長
22 門	平成		一間棟門、銅板葺、引造戸、両脇板塀付
23 物置	昭和前期		桁行九間、梁間四間、切妻造、金属板葺
24 離れ	昭和後期		二階建、複合屋根、銅板葺
25 渡廊	昭和後期		桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺
26 離れ	昭和後期		桁行五間、梁間四間、入母屋造、銅板葺
27 門	昭和後期		一間一戸棟門、寄棟造、銅板葺
28 土塀	昭和後期		四間長、銅板葺
29 土塀	昭和後期		五間長、銅板葺
30 鳳凰殿	令和		方一間裳階付、背面突出
31 永山婦堂	令和		八角円堂、銅板葺、正面向拝一間、唐破風造、妻入、銅板葺
32 浄心閣	令和		宝塔、銅板葺、上重方一間
33 門	令和		三間一戸薬医門
34 土塀	昭和後期		十八間長、檜皮葺
35 板塀	令和		十四間長、銅板葺
36 板塀	令和		七間長、銅板葺
37 門	昭和後期		一間一戸高麗門、銅板葺、両脇土塀付
38 小屋	平成後期		桁行一間長、梁間半間長、片流造、板葺
39 作業所	昭和前期		桁行八間長、梁間四間長、切妻造、金属板葺
40 坊舎	昭和前期		切妻造、金属板葺
41 土蔵	昭和前期		切妻造、銅板葺
42 土蔵	昭和前期		切妻造、銅板葺
43 坊舎	昭和後期		三階建、切妻造、金属板葺
58 赤松院 21棟			
1 小社	平成後期		一間社春日造、銅板葺、見世棚造
2 小社	昭和後期		一間社春日造、銅板葺
3 門	昭和後期		三間一戸八脚門、切妻造、銅板葺
4 仏堂	昭和後期		桁行三間、梁間三間、宝形造、銅板葺
5 坊舎	慶応元年 (1865) 『名利誌』		桁行八間、入母屋造、銅板葺、正面玄関、入母屋造、妻入、銅板葺、背面突出部付
6 土蔵	大正		桁行四間、梁間二間、切妻造、銅板葺、正面前室付
7 門廊	平成		S造、桁行五間、梁間三間、切妻造、金属板葺
8 坊舎	平成		RC造、三階建、複合屋根、銅板葺
9 坊舎	昭和後期		桁行四間、梁間四間、切妻造、銅板葺
10 本堂	文久4年 (1864) 『名利誌』		桁行三間、梁間三間、宝形造、銅板葺、背面付属屋、桁行十間長、梁行四間長、切妻造、銅板葺
11 坊舎	昭和後期		二階建、入母屋造、銅板葺
12 坊舎	昭和後期		二階建、桁行四間、梁間二間、切妻造、銅板葺
13 坊舎	昭和後期		RC造、三階建、入母屋造、銅板葺
14 坊舎	平成		二階建
15 待合	昭和後期		桁行二間、梁間一間、切妻造、檜皮葺
16 離れ	昭和後期		複合屋根、金属板葺
17 離れ	昭和後期		二階宛、複合屋根、金属板葺
18 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、金属板葺
19 仏堂	昭和前期		土蔵造、桁行二間、梁間二間、宝形造、檜皮葺、金属板葺
20 坊舎	昭和後期		二階建、切妻造、スレート葺
21 坊舎	昭和後期		二階建、片流造、金属板葺
59 東根院 3棟			
1 表門	昭和後期		三間一戸棟門、切妻造、銅板葺
2 坊舎	平成		入母屋造、銅板葺
3 塀	昭和後期		CB塀
60 正覚院 4棟			
1 表門	昭和後期		一間一戸棟門、銅板葺
2 塀	昭和後期		縦板塀、一部トタン板
3 作業場	昭和後期		S造、切妻造、鉄板葺
4 仮事務所	昭和後期		プレハブ、陸屋根、金属板葺
61 宝善院 9棟			
1 表門	昭和後期		一間一戸薬医門、切妻造、銅板葺
2 塀	昭和後期		土塀、銅板葺
3 塀	昭和後期		土塀、銅板葺
4 塀	昭和後期		土塀、銅板葺
5 寺務所	昭和後期		二階建、入母屋造、銅板葺、正面玄関付、入母屋造、妻入、銅板葺
6 坊舎	昭和後期		二階建、入母屋造、銅板葺
7 坊舎	昭和後期		二階建、切妻造、銅板葺
8 坊舎	昭和後期		二階建、切妻造、銅板葺
9 仏堂	昭和後期		RC造、二階建、入母屋造、銅板葺
8 千手院谷 8件24棟			
62 普賢院 24棟			
1 四脚門	慶安3年 (1650) 『高野春秋』		四脚平唐門、檜皮葺
2 客殿	昭和後期		入母屋造、玄関付、銅板葺
3 宝蔵	明治後期		入母屋造、銅板葺
4 表門	明治後期		一間一戸棟門、入母屋造、正・背面唐破風付、本瓦型銅板葺
5 土蔵	昭和前期		切妻造、銅板葺
6 客殿 角屋	昭和前期		入母屋造、銅板葺
7 かご塀	昭和後期		かご塀、真壁造、銅板葺
8 かご塀	昭和後期		かご塀、大壁造、下部なまこ壁、銅板葺
9 土塀	平成		RC造、築地塀、銅板葺
10 木塀 (門扉付)	平成		木造板塀、金属板葺
11 プロパン庫	平成		木造片流、西側RC造、塩ビ板葺
12 宿坊	平成		入母屋造 (2棟を雁行させる)、銅板葺
13 渡廊下	平成		切妻造、金属板葺

建物名	年代	根拠	構造形式など
14 摩尼殿	平成		八角円堂、宝形造、本瓦型金属板葺
15 本堂	17世紀後期、明治25年 (1892) 頃移築	技法・意匠	桁行三間、梁間三間、入母屋造、檜皮葺、両脇に桁行四間、梁間二間、入母屋造、檜皮葺の護摩堂と位牌堂がつく
16 客室 (山上)	平成		RC造、三階建、上層：切妻造、下層：入母屋造
17 芭蕉堂	昭和後期		宝形造、檜皮葺、東南隅張出し付
18 座敷	平成		切妻造、銅板葺
19 庫裏	明治後期		入母屋造、銅板葺、正面玄関付
20 宿坊	昭和後期		寄棟造、二階建、銅板葺
21 会下	昭和前期		入母屋造、銅板葺
22 会下増築部	平成		入母屋造、二階建、銅板葺
23 裏門	昭和後期		切妻造、銅板葺
24 大黒天覆屋	平成		宝形造、銅板葺
63 一乗院 21棟			
1 表門	大正		四脚門、入母屋造、本瓦形銅板葺
2 かご塀	昭和後期		かご塀、銅板葺
3 通用門	昭和後期		棟門、切妻造、銅板葺
4 燃料庫・ゴミ置	昭和後期		CB造、金属板葺
5 塀 潜門付	昭和後期		木造、銅板葺、下部なまこ壁
6 車庫	平成		木造、片流れ、金属板葺
7 土蔵	昭和後期		RC造、木製置屋根、切妻造、銅板葺
8 本堂	昭和10年	『和歌山県の近代和風建築』	五間堂、宝形造、銅板葺
9 本堂増築部	昭和後期		切妻造、金属板葺
10 庫裏	昭和38年 (1963)	『和歌山県の近代和風建築』	木造二階建、入母屋造、銅板葺
11 台所・玄関	昭和後期		入母屋造、銅板葺、玄関、切妻造、銅板葺
12 塀	昭和後期		下部RC造、上部よろい板張り、銅板葺
13 自転車置き	平成		アルミ製、片流れ、塩ビ板葺
14 会下	昭和後期		木造二階建、入母屋造、銅板葺
15 宿坊	昭和後期		一部二階建、一階寄棟造、二階切妻造、銅板葺
16 宿坊	昭和後期		二階建、寄棟造、銅板葺
17 木櫓	平成		木櫓
18 小屋	昭和後期		RC造、塩ビ板葺
19 小屋	平成		木造、トタン葺
20 塀	昭和後期		コンクリート造、鉄製門扉付
21 堂	平成		宝形造、銅板葺
64 普門院 24棟			
1 表門	18世紀前期、明治25年 (1892) 頃移築	技法・意匠、『名利誌』	四脚門、切妻造、檜皮葺
2 塀	昭和後期		木造真壁造、銅板葺
3 板塀	昭和後期		板塀
4 客殿及び台所	明治23年 (1890) 『名利誌』		西側入母屋造、東側切妻造、銅板葺、正面唐破風玄関、銅板葺付属
5 本堂	慶安3年 (1650)、『高野春秋』、『名明治27年 (1894) 利誌』		宝形造、正面唐破風向拝付、銅板葺、側面護摩堂他付属、北側入母屋造
6 書院	昭和後期		入母屋造、銅板葺
7 住坊	昭和後期		二階建、切妻造、銅板葺
8 客殿増築部	昭和後期		片流造、銅板葺、客殿に付属
9 会下	昭和後期		RC造、三階建、入母屋造
10 門	昭和後期		棟門、檜皮葺、両脇、板塀付
11 塀	昭和後期		RC造、木造置屋根、銅板葺
12 門 (車庫入口)	平成		切妻造、銅板葺
13 塀	平成		木造真壁塀、銅板葺、上部漆喰、下部よろい板張り
14 トタン塀	平成		木造、トタン板張り
15 ブロック塀	昭和後期		CB造
16 大広間・心南院	昭和後期		RC造、二階建、銅板葺、南面1階玄関付本堂
17 大広間 張出し	昭和後期		片流造、銅板葺、大広間に付属
18 茶室	昭和後期		入母屋造、銅板葺、大広間に付属
19 外腰掛	昭和後期		片流造、杉皮葺、竹おさえ
20 板塀	昭和後期		板塀
21 宿坊	昭和後期		RC造、二階建、銅板葺
22 宿坊2	昭和後期		RC造、二階建、切妻造、銅板葺
23 宿坊3	昭和後期		木造、二階建、切妻造、銅板葺
24 板塀	平成		板塀
65 本玉院 27棟			
1 表門	大正		四脚門、切妻造、銅板葺
2 塀	昭和後期		真壁造、切妻造、銅板葺、矩折、上部：漆喰、下部：よろい板張り
3 隅蔵	昭和後期		RC造 入母屋造 銅板葺 一階は車庫
4 塀	昭和後期		木造切妻造、銅板葺、下部RC造
5 通用門	昭和後期		棟門、切妻造、銅板葺、柱、RC造、洗出し
6 塀	昭和後期		RC造、上部木造、切妻造、銅板葺
7 裏門	昭和後期		棟門、切妻造、銅板葺、両脇木塀付
8 塀	昭和後期		CB造
9 書院	昭和後期		寄棟造、銅板葺、四周庇付
10 物置	平成		木造、トタン板張り、片流、トタン葺
11 ネットフェンス	平成		鉄製 (フェンス)
12 旧宿坊	昭和後期		木造二階建、切妻造
13 離れ	平成		木造平屋建、片流れ、金属板葺
14 宿坊1	昭和後期		木造二階建、入母屋造、銅板葺
15 宿坊2	昭和後期		木造二階建、切妻造、銅板葺
16 宿坊3	昭和後期		木造二階建、切妻造、銅板葺
17 宿坊4	昭和後期		木造二階建、入母屋造、銅板葺
18 宿坊5	昭和後期		二階建、寄棟造、銅板葺

第4章 高野山地区の寺院

建物名	年代	根拠	構造形式など
19 外門	昭和後期		木扉(平成) 柱: RC造、洗い出し(昭和後期)
20 本堂	昭和後期		正面寄棟造、背面切妻造、銅板葺
21 渡廊下	昭和後期		木造切妻造、銅板葺
22 客殿	昭和後期		西側入母屋造、東側切妻造、銅板葺
23 客殿・増築部	昭和後期		切妻造、銅板葺
24 台所・玄関	昭和後期		切妻造、銅板葺、千鳥破風付、玄関、向唐破風造
25 便益棟	昭和後期		入母屋造、本瓦型金属板葺
26 ブロック塀	昭和後期		CB造
27 宿坊	昭和後期		RC造 金属板葺
66 無量光院 14棟			
1 表門	昭和後期		四脚門、入母屋造、銅板葺
2 かご塀	昭和後期		切妻造、銅板葺
3 会下	昭和後期		二階建、入母屋造、銅板葺
4 客殿・台所・玄関	明治22年(1889)『寺院明細帳』		西側入母屋造、東側切妻造、正面入母屋造、玄関付、檜皮葺
5 蔵	昭和後期		寄棟造、銅板葺、正面入母屋造、玄関付
6 本堂	平成		RC造、宝形造、銅板葺
7 宿坊	昭和後期		RC造二階建、入母屋造、銅板葺
8 プロバン庫	平成		CB造、鉄板葺
9 宿所	平成		軽量鉄骨造、寄棟造、鉄板葺
10 宿所2	平成		切妻造、銅板葺
11 座敷・渡廊下	平成		座敷: 入母屋造、金属板葺、渡廊下: 切妻造、金属板葺
12 住坊1	平成		S造三階建、切妻造、金属板葺
13 住坊2	平成		二階建、切妻造、金属板葺
14 住坊3	平成		二階建、切妻造、金属板葺
67 本覚院 19棟			
1 表門	18世紀後期		四脚門、切妻造、檜皮葺
2 塀	昭和後期		正面、南九間×北十間、檜皮葺
3 客殿及び台所	18世紀後期		唐破風付玄関、入母屋造、檜皮葺
4 本堂	19世紀中期		宝形造、檜皮葺
5 住宅1	平成		RC造、二階建、金属板葺
6 住宅2	昭和後期		二階建、入母屋造、金属板葺
7 車庫	平成		切妻造、銅板葺
8 渡廊下	平成		切妻造、金属板葺
9 宿坊	大正		二階建、入母屋造、銅板葺
10 ブロック塀	昭和後期		CB造、木造棟門、銅板葺付
11 宿坊	平成		RC造、二階建、切妻造、銅板葺
12 宿坊	昭和後期		二階建、入母屋造、銅板葺
13 会下門	明治中期		二階建、入母屋造、銅板葺
14 宿坊	平成		二階建、金属板葺
15 住坊	平成		二階建、金属板葺
16 物置	昭和後期		片流造、金属板葺
17 門	昭和後期		棟門、銅板葺
18 雑舎	昭和後期		二階建、金属板葺
19 物置・燃料庫	昭和後期		切妻造、木造片流造、CB造、片流造
68 観音堂 1棟			
1 観音堂	18世紀中期	技法・意匠	桁行三間、梁間二間、切妻造、鉄板葺
69 青巖寺 8棟			
1 表門	昭和後期		棟門、切妻造、銅板葺
2 坊舎	昭和前期		入母屋造複合、金属板葺
3 塀	昭和後期		板塀
4 本堂	昭和後期		寄棟造、金属板葺
5 住居	昭和後期		二階建、金属板葺
6 ガレージ	昭和後期		片流造
7 フェンス	平成		竹垣風ネットフェンス
8 板塀	平成		板塀
9 五之室谷 9件 107棟			
70 清涼院 10棟			
1 表門	昭和後期		薬医門、切妻造、金属板葺、両脇木塀付属
2 坊舎兼住宅	昭和後期		二階建、入母屋造切妻造複合、金属板葺
3 覆屋	昭和後期		切妻造、金属板葺
4 車庫	昭和後期		片流れ、金属板葺
5 塀	昭和後期		鉄製、門扉付
6 ブロック塀	昭和後期		CB造、9段積
7 住坊	平成		切妻造、二階建、金属板葺
8 坊舎	昭和後期		入母屋造、金属板葺
9 裏門	平成		棟門、銅板葺
10 フェンス	平成		竹垣風ネットフェンス
71 泰雲院 7棟			
1 表門	昭和前期		長屋門: 入母屋造、銅板葺、腰上: 土壁、腰下: 下見板葺
2 坊舎	昭和後期		RC造二階建、入母屋造、金属板葺
3 塀	昭和後期		板塀、下見板張り
4 茶室	平成		入母屋造、銅板葺
5 宿坊	昭和後期		平屋、寄棟造、金属板葺
6 垣根	平成		板、大和張り
7 ブロック塀	昭和後期		コンクリートブロック造
72 龍泉院 16棟			
1 表門	昭和後期		高麗門、切妻造、本瓦棒銅板葺
2 上門	18世紀後期		四脚門、切妻造、檜皮葺
3 塀	昭和後期		腰上: 土壁、腰下: 下見板張り、銅板葺
4 会下門	昭和後期		長屋門、一階庇付、入母屋、銅板葺、花頭窓
5 客殿・台所	明治後期		入母屋造、銅板葺、玄関檜皮葺
6 大師堂	昭和後期		柱木型板壁、寄棟造、銅板葺
7 降魔殿	大正		横羽目板壁 入母屋造 銅板葺
8 本堂	大正		入母屋造複合、檜皮葺、銅板葺

建物名	年代	根拠	構造形式など
9 塀	大正		腰上: 土壁、腰下: 下見板葺、檜皮葺
10 事務所兼倉庫	昭和後期		金属板葺
11 高塀	大正		腰上: 土壁、腰下: 下見板葺、檜皮葺
12 ガレージ	昭和後期		鉄骨造、CB壁
13 蔵	昭和後期		土蔵造、切妻造、銅板葺
14 宿坊	昭和後期		二階建、入母屋造、銅板葺
15 位牌堂	昭和後期		入母屋造、銅板葺、本堂に接続
16 塀	平成		
73 光臺院 24棟			
1 正門 上門	19世紀前期		棟門、切妻造、檜皮葺
2 宿坊 庫裡	大正		入母屋造、金属板葺
3 宿坊	昭和後期		二階建、入母屋造、金属板葺
4 客殿	文政12年(1829)『名利誌』		入母屋造、玄関(千鳥破風)・唐破風付
5 本堂	大正	『名利誌』	入母屋造、唐破風付、檜皮葺
6 鐘楼	大正	『名利誌』	入母屋造、金属板葺
7 土塀	大正		切妻造、銅板葺
8 御成門	大正		冠木門
9 多宝塔	大正6年(1917) 棟札		方三間、多宝塔、檜皮葺
10 校倉造	大正		校倉造、宝形造、本瓦棒銅板葺
11 住宅①	昭和後期		平屋建、切妻造、金属板葺
12 住宅②	昭和後期		二階建、切妻造、金属板葺
13 渡廊下	昭和後期		金属板葺
14 住坊	昭和後期		二階建、入母屋造、金属板葺
15 土蔵	昭和前期		土蔵造、切妻造、金属板葺
16 渡廊下	昭和後期		金属板葺
17 門	平成		棟門、金属板葺
18 倉庫	昭和後期		切妻造、金属板葺
19 カーポート	平成		アルミ製
20 車庫	平成		
21 カーポート	平成		アルミ製
22 稲荷神社	平成30年(2018) 聞き取り		一間社春日見世棚造、板葺
23 天神社	平成30年(2018) 聞き取り		一間社春日見世棚造、板葺
24 木柵	平成30年(2018) 聞き取り		四間長、正面扉付
74 福智院 20棟			
1 表門	大正		四脚門、切妻、本瓦葺
2 土塀	大正		土塀、本瓦葺
3 本堂	大正		入母屋造、銅板葺
4 客殿・台所	昭和後期		入母屋複合、銅板葺、玄関付
5 会下①	昭和後期		木造二階建、入母屋複合、銅板葺、1階: 下見板張り
6 調理棟	昭和後期		二階建、金属板葺
7 住宅棟	昭和後期		二階建
8 塀	平成		板塀、下見板張り、金属板葺
9 校倉風書院	昭和後期		校倉造、寄棟造、銅板葺
10 宿舎①	昭和後期		二階建、切妻造、金属板葺
11 会下②	大正		二階建、切妻造、銅板葺
12 宿舎②	昭和後期		二階建、切妻造複合、銅板葺
13 フェンス	平成		銅板
14 巽倉	昭和後期		大壁造、二階建、瓦型銅板葺
15 土蔵	昭和後期		土蔵造、入母屋造、銅板葺
16 宿坊	昭和後期		二階建、金属板葺
17 宿所	昭和後期		入母屋造、椋瓦葺
18 ガレージ	昭和後期		片流れ、金属板葺
19 木柵	昭和後期		木柵
20 社殿・瑞垣	昭和後期		一間社流造、銅板葺
75 全光院 4棟			
1 表門	大正		棟門、切妻造、鉄板葺
2 坊舎	昭和前期		入母屋造、金属板葺
3 塀	平成		トタン板塀
4 倉庫	昭和後期		鉄骨造、二階建
76 補陀落院 1棟			
1 住居	昭和後期		木造二階建、入母屋造、金属板葺
77 南院 16棟			
1 表門	大正		四脚門、檜皮葺
2 塀	大正		一部檜皮、その他金属板、五本線、かご塀風
3 本坊	大正		左: 客殿、右: 台所、中央玄関、一重入母屋造、金属板葺
4 会下	昭和後期		RC造、二階建、寄棟造り、金属板葺
5 本堂	大正		桁行五間、梁間九間、一重入母屋造、金属板葺、正面一間、唐破風向拝付、両脇に一間の脇間
6 門	昭和後期		薬医門、金属板葺
7 塀	昭和後期		透塀、金属板葺
8 宝塔	昭和後期		RC造、宝塔
9 車庫	平成		鉄骨造
10 宿坊	昭和後期		入母屋造
11 宿坊	昭和後期		木造二階建、入母屋造、銅板葺
12 宿坊	昭和後期		木造平屋建、入母屋造、銅板葺
13 茶室	昭和後期		入母屋造、切妻造、銅板葺
14 蔵	昭和後期		土蔵造、二階建、切妻造、銅板葺
15 住居	平成		二階建、入母屋造、銅板葺
16 堂	昭和後期		宝形造、銅板葺
78 徳川家堂台 9棟			
1 家康霊屋	寛永18年(1641)		桁行三間、梁間三間、一重、宝形造、向拝一間、軒唐破風付、銅板葺
2 秀忠霊屋	寛永10年(1633)		桁行三間、梁間三間、一重、宝形造、向拝一間、軒唐破風付、銅板葺
3 家康霊屋唐門	17世紀中期	修理工事報告書	一間一戸平唐門、銅板葺
4 秀忠霊屋唐門	17世紀中期	修理工事報告書	一間一戸平唐門、銅板葺

建物名	年代	根拠	構造形式など
5 家康霊屋透塀	17世紀中期	修理工事報告書	切妻造、銅板葺
6 秀忠霊屋透塀	17世紀中期	修理工事報告書	切妻造、銅板葺
7 土塀	昭和後期		かご塀、銅板葺
8 四脚門	17世紀中期	様式	一間一戸四脚門、切妻造、銅板葺
9 受付所	昭和後期		切妻造、銅板葺
10 一心院谷 8件 43棟			
79 五坊寂靜院 5棟			
1 表門	大正		棟門、後方控え柱付、金属板葺
2 本坊	昭和後期		桁行九間、梁間五間、一重、入母屋造、金属板葺
3 本堂	昭和後期		桁行五間、梁間五間、一重、入母屋造、金属板葺、正面一間向拝付、正面一間を開放とする
4 土蔵	昭和後期		土蔵造、金属板葺、ベタ基礎
5 板塀	昭和後期		木塀
80 金輪塔 1棟			
1 金輪塔	天保5年(1834)	紀伊統風土記	方三間多宝塔、檜皮葺
81 西室院 9棟			
1 表門	大正		四脚門、銅瓦葺
2 塀	大正		カゴ塀門 下部なまこ塀 腰板張り
3 本坊	大正		左：台所、右：客殿、中央玄関(唐破風)
4 本堂	大正		軸部、土蔵造、一重、入母屋造、妻入、金属板葺
5 会下	大正		長屋、二階建、金属板葺、南側に土蔵とする
6 宿坊	昭和後期		総二階建、金属板葺
7 門	大正		棟門、控え柱付、杉皮葺
8 宿泊棟	昭和後期		RC造、三階建
9 宿泊棟	昭和後期		RC造
82 多聞院 2棟			
1 門	昭和後期		棟門、金属板葺
2 本坊	平成		土蔵造、入母屋造、銅板葺
83 蓮華定院 10棟			
1 表門	万延元年(1860)	棟札	四脚門、檜皮葺
2 塀	昭和後期	技法・意匠	下半分なまこ塀、檜皮葺
3 客殿及び庫裏	19世紀中期	技法・意匠	左：客殿、右：台所、中央玄関(一体型)、檜皮葺
4 本堂及び講堂	万延元年(1860)	『名刺誌』	軸部土蔵造、正面三間、一重入母屋造、正面一間向拝付、北側に位牌堂接続
5 塀	昭和後期		下：RC造、下半分なまこ塀、上：木造、金属板葺
6 門	昭和後期		棟門、銅板葺
7 門	昭和後期		棟門、銅板葺
8 宿坊	昭和後期		木造二階建、入母屋造、銅板葺、渡廊下付
9 本堂側面下層	昭和後期		片流、銅板葺
10 本坊	昭和後期		桁行十一間半、二階建、入母屋造、金属板葺
84 随心院 11棟			
1 坊舎	大正6年(1917)	棟札	複合屋根、銅板葺
2 洋館	平成	聞き取り	二階建、切妻造、金属板葺
3 小屋	昭和後期		切妻造、金属板葺
4 土蔵	昭和後期	聞き取り	切妻造、金属板葺
5 坊舎	平成		二階建、入母屋造、金属板葺
6 門	昭和後期	聞き取り	一間棟門、銅板葺
7 竹垣	平成		十五間長
8 渡廊下	昭和後期		桁行五間長、梁間一間長、切妻造、金属板葺
9 門	昭和後期		一間棟門、板葺
10 門	昭和後期		鉄製引戸
11 櫓	昭和後期		七間長、切妻造、銅板葺
85 巴陵院 2棟			
1 門	昭和後期		薬医門、脇門付、金属板葺
2 塀	昭和後期		すじ塀(5本)
86 女人堂 3棟			
1 女人堂	江戸時代前期	技法・意匠	桁行六間、梁間三間半、一重、入母屋造、金属板葺
2 交通安全地藏尊	昭和後期		桁行一間、梁間一間、一重、宝形造、金属板葺、側面柱間に卒塔婆
3 小杉明神社	昭和前期		春日見世棚造風、桁行二間、梁間一間、一重、宝形造、正面側一間を開放し、向拝状に造る
11 奥之院 1件 85棟			
87 奥之院 85棟			
1 手水舎	昭和48年頃	手水鉢銘	桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺
2 売店	昭和後期		桁行四間、梁間三間、切妻造、銅板葺、正面下層付
3 手水舎	昭和後期	手水鉢銘	桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺銅板葺
4 御礼授與所	昭和後期		桁行四間、梁間三間、入母屋造、銅板葺、北・西面に下層付
5 物置	昭和後期		RC造、桁行二間長、梁間一間半長、陸屋根
6 英霊殿拝殿	昭和52年(1977)	石碑	桁行五間、梁間二間、切妻造、銅板葺
7 幣殿	昭和52年(1977)	石碑	桁行四間、梁間一間、妻入、切妻造、銅板葺
8 本殿	昭和52年(1977)	石碑	二重、桁行四間、梁間五間、宝形造、上重檜皮葺、下重銅板葺
9 石櫓	昭和52年(1977)	石碑	十間長、中央および両端に扉付
10 頌徳殿	大正4年(1915)		桁行五間、梁間二間、妻入、入母屋造、銅板葺、正面軒唐破風
11 トイレ	平成		桁行五間、梁間四間、妻入、入母屋造、銅板葺
12 後堂	昭和後期		桁行四間、梁間二間、切妻造、銅板葺
13 塀	平成		土塀、三間、銅板葺
14 御供所表門	明治中期		一間一戸四脚門、入母屋造、檜皮葺、両脇袖塀付、鮑木塀、銅板葺
15 小屋	平成		桁行一間半、梁間一間、妻入、片流造、板葺
16 塀	平成		二十一間、銅板葺

建物名	年代	根拠	構造形式など
17 奥山心其上人廟	昭和後期		桁行二間、梁間一間、切妻造、銅板葺
18 塀	平成		土塀、七間、銅板葺
19 手水舎	昭和40年(1965)		桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺
20 御供所	昭和後期		桁行七間、梁間七間、入母屋造、銅板葺、正面中央玄関付、妻入、切妻造、銅板葺、向唐破風
21 嘗試地藏堂	平成		桁行一間、梁間一間、宝形造、銅板葺
22 坊舎	昭和後期		桁行四間、梁間五間、入母屋造、銅板葺
23 護摩堂	文化9年(1812)	棟札	桁行五間、梁間五間、入母屋造、銅板葺、背面梁間一間内部に取りこむ
24 トイレ	平成		桁行四間、梁間六間、妻入、切妻造、銅板葺
25 坊舎	昭和後期		二階建、複合屋根、金属板葺
26 塀	平成		八間、縦板塀
27 渡廊下	昭和後期		桁行六間、切妻造、銅板葺、小屋組S造
28 倉庫	昭和後期		S造、二階建、桁行二間、梁間四間、切妻造、銅板葺
29 トイレ	平成		桁行三間長、梁間二間長、妻入、切妻造、金属板葺
30 塀	平成		六間、縦板塀、焼杉板
31 控室	昭和後期		RC造、桁行二間長、梁間三間長、陸屋根
32 塀	平成		十一間、縦板塀、焼杉板
33 門	昭和後期		一間一戸棟門、切妻造、銅板葺
34 塀	平成		十間、縦板塀、焼杉板
35 塀	平成		七間、縦板塀、焼杉板
36 塀	平成		七間、縦板塀、焼杉板
37 塀	平成		十九間、縦板塀、焼杉板
38 坊舎	昭和後期		桁行五間、梁間一間、切妻造、銅板葺
39 機械室	昭和後期		桁行二間長、梁間一間長、妻入、招造、銅板葺
40 ゴミ捨て場	平成		桁行三間、梁間二間、片流造、銅板葺
41 弥勒石覆屋	平成9年(1997)	銘板	桁行一間、梁間一間、宝形造、銅板葺
42 墓覆屋	平成		桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺
43 燈籠堂	昭和後期		RC造、桁行九間、梁間五間、入母屋造、銅板葺
44 記念燈籠堂	平成		RC造、二階建、桁行七間、梁間四間、寄棟造、銅板葺
45 小堂門	昭和後期		一間一戸棟門、切妻造、板葺、両脇板塀付
46 小堂	昭和後期		桁行二間、梁間一間、妻入、銅板葺
47 小堂櫓	昭和後期		十間長
48 一切経蔵	慶長4年(1599)		方三間、宝形造、檜皮葺
49 閻魔堂	平成		桁行二間、梁間一間、片流造、銅板葺
50 納骨堂	大正6年(1916)	『弘法大師老千年御遠忌紀要』	八角円堂、銅板葺
51 常照上人之墓覆屋	昭和後期		桁行一間、梁間一間、宝形造、銅板葺
52 門	昭和後期		一間一戸四脚門、切妻造、檜皮葺
53 塀	昭和後期		十一間、檜皮葺、連子塀
54 塀	昭和後期		十一間、檜皮葺、連子塀
55 塀	昭和後期		土塀、檜皮葺
56 塀	昭和後期		六間、土塀、檜皮葺
57 塀	昭和後期		六間、土塀、檜皮葺
58 御廟	天正13年(1585)	擬宝珠刻銘	方三間、宝形造、檜皮葺
59 塀	昭和後期		土塀、檜皮葺
60 高野明神社	16世紀後期	『和歌山県の中世未指定社寺建築』	一間社春日造、見世棚造、銅板葺
61 丹生明神社	16世紀後期	『和歌山県の中世未指定社寺建築』	一間社春日造、見世棚造、檜皮葺
62 小屋	平成		桁行二間長、梁間一間長、片流造、波板鉄板葺
63 プレハブ小屋	平成		桁行一間半長、梁間一間長、陸屋根
64 小堂	昭和後期		桁行一間、梁間一間、宝形造、銅板葺
65 小屋	平成		桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺
66 櫓	昭和後期		コンクリート造、中央に冠木門開く
67 松平秀康霊屋	慶長12年(1607)		石造、桁行三間、梁間二間、入母屋造、本瓦葺、正面軒唐破風
68 松平秀康母公室	慶長9年(1604)		石造、桁行二間、梁間三間、切妻造、本瓦葺
69 櫓	慶長12年(1607)	頃	石造
70 地藏堂	昭和後期		桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺
71 密厳堂	寛文11年(1671)	棟札	正面三間、背面二間、宝形造、銅板葺
72 汗かき地藏堂	昭和後期		正面三間、背面二間、宝形造、銅板葺、背面一間下層付
73 貝島家累代碑地藏堂	昭和後期		桁行三間、梁間一間、切妻造、銅板葺
74 地藏堂	昭和後期		桁行一間、梁間一間、妻入、切妻造、鉄板葺
75 子授け地藏堂	昭和後期		桁行一間、梁間一間、妻入、切妻造、銅板葺
76 井伊直政霊屋	17世紀後期	技法・意匠	桁行三間、梁間一間、切妻造、銅板葺、正面軒唐破風付
77 上杉謙信霊屋	江戸時代初期		桁行三間、梁間二間、入母屋造、檜皮葺、正面一間向拝付
78 小堂	19世紀前期		石造、寄棟造
79 蔵取地藏堂	昭和53年(1978)	案内板	桁行一間、梁間一間、妻入、切妻造、銅板葺
80 丸亀京極家円堂	万治2年(1659)	刻銘	石造、六角円堂
81 佐竹義重霊屋	慶長4年(1599)		桁行三間、梁間一間、切妻造、檜皮葺
82 關東震災霊神堂	昭和5年(1930)	案内板	RC造、方三間、宝形造、銅板葺
83 手水舎	昭和後期		桁行一間、梁間一間、切妻造、銅板葺
84 小堂	昭和後期		方一間、宝形造、銅板葺
85 小社	平成		一間社春日造、銅板葺

第5章 寺院建築個別解説

1 個別調査の概要

本章では、2・3次調査を実施した歴史的建造物について報告する。各寺院の概要は、すでに第4章で述べたところであるが、現存する建物との関係に重きを置きながら再述する。

2次調査対象の選定 1次調査をうけて、高い価値を有する建物群として、高野山の寺院建築に改めて注目することとなった。同時に、近世以前の建物に限っても、多くの建物が現存することを確認した。よって、今回の一連の調査では、高野山の寺院建築のなかでも、古代以来の中核である壇上伽藍、本坊としての機能を有する金剛峯寺、弘法大師信仰の中心を担った奥之院を中心に物件を選定した。また、金剛峯寺が管轄するものの、行人方の東照宮から移築されたもの、建立が17世紀以前に遡るとみられるものは選定した。塔頭とも呼ばれる周辺の寺院群については、地域、建立年代にばらつきを持たせながら抽出しており、課題も多いことをあらかじめ断っておく。2次調査対象とした建造物は右表の通りである。(鈴木智大)

表7 2次調査対象一覧

件名	棟名	建築年	根拠	1次調査番号
金剛峯寺	大主殿及び奥書院	文久2年(1862)	棟札	1-11
金剛峯寺	真然堂	寛永17年(1640)	棟札	1-5
金剛峯寺	護摩堂	文久3年(1863)	棟札	1-7
金剛峯寺	山門	延宝8年(1680)	『高野春秋編年輯録』	1-32
金剛峯寺	かご堀	慶応元年(1865)頃	寺蔵指図	1-33
金剛峯寺	築地堀	江戸時代初期	技法・意匠	1-49
金剛峯寺	経蔵	延宝7年(1679)	扁額銘・『高野春秋編年輯録』	1-34
金剛峯寺	鐘楼	元治元年(1864)	棟札	1-36
金剛峯寺	会下門	慶応元年(1865)頃	寺蔵指図	1-3
金剛峯寺	奥殿	昭和8年(1933)	『弘法大師老千年御遠忌紀要』	1-18
金剛峯寺	別殿	昭和8年(1933)	『弘法大師老千年御遠忌紀要』	1-16
壇上伽藍	一	慶應元年(1865)	高野山寺院明細帳	2-1
壇上伽藍	金堂	昭和9年(1934)	『弘法大師老千年御遠忌紀要』	7-49
壇上伽藍	根本大塔	昭和11年(1936)	棟札	7-18
壇上伽藍	西塔	天保5年(1834)	棟札	7-11
壇上伽藍	御影堂	弘化5年(1848)	寺蔵指図	7-14
壇上伽藍	宝庫	弘化5年(1848)	『高野山名所図会』	7-15
壇上伽藍	准胝堂	明治16年(1883)	『高野山名所図会』	7-13
壇上伽藍	山王院拜殿	弘化2年(1845)	『高野山名所図会』・寺蔵指図	7-4
壇上伽藍	山王院鐘楼	弘化5年(1848)	『高野山名所図会』	7-11
壇上伽藍	六角経蔵	昭和4年(1929)	『弘法大師老千年御遠忌紀要』	7-1
壇上伽藍	三昧堂	嘉永元年(1848)	棟札	7-29
壇上伽藍	大会堂	嘉永元年(1848)	棟札	7-28
壇上伽藍	愛染堂	嘉永元年(1848)	棟札	7-27
勸学院	本堂	文化10年(1813)	『高野山名所図会』	25-11
勸学院	鐘楼	文化10年(1813)	『高野山名所図会』	25-4
勸学院	表門	文化10年(1813)	『高野山名所図会』	25-1
徳川家霊台	家康霊屋唐門及び透塀	17世紀中期	技法・意匠	78-3・5
徳川家霊台	秀忠霊屋唐門及び透塀	17世紀中期	技法・意匠	78-4・6
徳川家霊台	表門	17世紀中期	技法・意匠	78-8
金輪塔	一	天保5年(1834)	『紀伊統風土記』	80-1
女人堂	一	江戸時代前期	技法・意匠	86-1
奥之院	護摩堂	文化9年(1812)	棟札	87-23
奥之院	密厳堂	寛文11年(1671)	棟札	87-71
奥之院	井伊直政霊屋	17世紀後期	技法・意匠	87-76
円通寺	本堂	19世紀前期	技法・意匠	55-6
円通寺	庫裏	19世紀前期	技法・意匠	55-8
円通寺	求聞持堂	19世紀前期	技法・意匠	55-16
円通寺	土蔵	弘化4年(1847)	棟札	55-5
円通寺	山門	天保4年(1833)	棟札	55-1
宝城院	本堂及び護摩堂	18世紀後期	技法・意匠	11-8・9
宝城院	客殿及び庫裏	18世紀後期	技法・意匠	11-5・6・7
宝城院	表門	18世紀前期	技法・意匠	11-1
西南院	本堂	明治34年(1901)	聞き取り	16-10
西南院	経蔵	享和3年(1803)	『高野山名刹誌』	16-25
西南院	洋館	大正期	技法・意匠	16-11
常喜院	客殿	19世紀後期	技法・意匠	32-7
常喜院	校倉	17世紀後期	技法・意匠	32-18
金剛三昧院	本堂及び位牌堂	17世紀中期	技法・意匠	37-37
金剛三昧院	表門	文政8年(1825)	棟札	37-1
不動院	書院	江戸時代前期	技法・意匠	43-7
普賢院	本堂	17世紀後期	技法・意匠	62-1
普門院	本堂	慶安3年(1650)	技法・意匠	64-1
普門院	表門	18世紀前期	技法・意匠	64-5
観音堂	一	18世紀中期	技法・意匠	68-1
蓮華定院	本堂及び護摩堂	万延元年(1860)	『高野山名刹誌』	80-4
蓮華定院	庫裏	19世紀中期	技法・意匠	80-3
蓮華定院	山門	万延元年(1860)	棟札	80-1

2 金剛峯寺

(1) 沿革

金剛峯寺は、明治2年(1869)に学侶方の青巖寺と行人方の興山寺が合併して成立した総本山寺院で、境内の東半が旧青巖寺、西半が旧興山寺の境内にあたる。概要は第4章に述べたが、ここでは建物を中心に沿革を詳述する。

境内の配置 現在の境内は、南面を川が西流し、東半中央部に橋が架かり、参道が北へと延びる。橋を渡った左手には、手水舎が建つ。参道を北進すると正面に表門が南面して建つ。表門の東西両脇にはかご塀が取り付け、境内中心部の南面を画している。表門をくぐった正面に、客殿・庫裏・大玄関などからなる大主殿が南面して建ち、背面西部には奥書院が矩手に取り付く。東面は、南北道路から西へと参道が延び、正面に会下門が西面して建つ。会下門の南北には土塀が取り付け、西面を画する。東半の西面は、築地塀で画される。表門をくぐった右手には鐘樓が建つ。左手には池が位置し、その西方には、

経蔵が東面して建つ。経蔵の背面には、前述の築地塀が位置している。大主殿などの建物群の背面には、山が迫り、崖地の南際には、真然堂と護摩堂がともに南面して、東西に並び立つ。大主殿の東方には、高野山真言宗の宗務所が接続する。大主殿の西南隅から旧興山寺境内に向かう廊下が接続する。

旧興山寺の境内にあたる西半には、別殿と奥殿が建ち、これらの周囲には蟠龍庭と呼ばれる石庭が広がる。奥殿の背面には、新書院・真松庵や阿字観道場などが建つ。別殿から南方へは廊下が延び、鉄筋コンクリート2階建ての新別殿が接続する。旧興山寺の境内は、蟠龍庭で囲まれた別殿・奥殿が建ち並ぶ北の区画と、新別殿が建つ南の区画に分かれ、間は塀で区画され、中央に門が開く。門の南には三宝荒神社が西面して建つ。南の区画の南面中央には勅使門が開き、西流する川には橋が架かる。旧興山寺境内背面の山上には、かつて行人方東照宮が建っていた敷地があり、現在は空地となっている。

創建時の青巖寺 豊臣秀吉が建立した剃髮寺の建物として、文禄2年(1593)の落慶供養に際して奉読

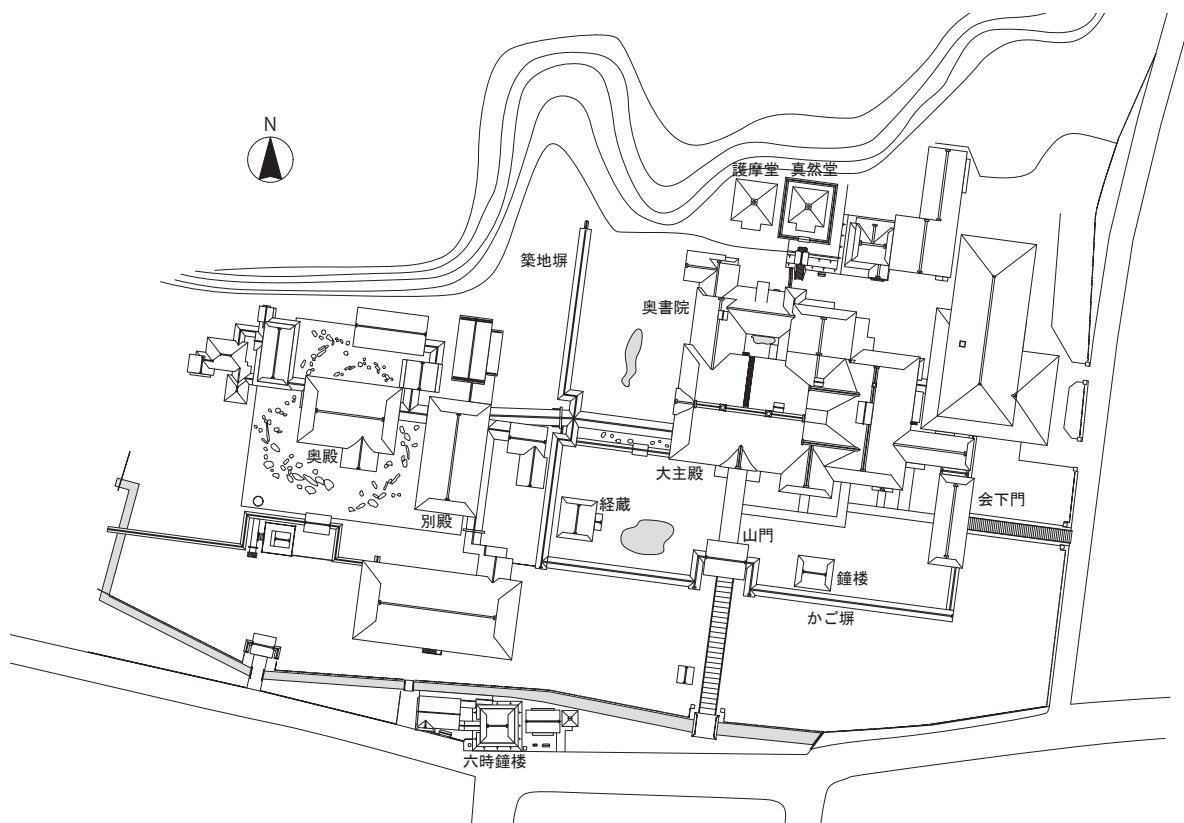


図 171 金剛峯寺配置図 1:2000

された「青巖寺願文」(『続風土記』)には、多宝塔一基・三間四面本堂一字・護摩堂一字・持仏堂一字・廿間四面精舎一字・鐘楼一字・二間四面経蔵一字の7棟があがる。

寛永17年(1640)には、真然堂が建立される(『高野春秋』、棟札)。寛永17年は、弘法大師御遠忌800年にあたる。真然堂については、平成元年に竣工した修理工事にともなう発掘調査によって、現在の建物位置に寛平3年(891)に入寂した真然を祀る墳墓があり、寛永元年(1131)の大伝法院創建に際して、これを聖霊堂と呼ばれる多宝塔として整備したことが明らかになっている。この多宝塔は、大永元年(1521)の火災で、失われていた可能性がある。**度重なる火災と復興** 寛永7年(1630)壇上伽藍根本大塔への落雷に端を発した火災で類焼し、同11年(1634)に再建された。しかし、慶安3年(1650)五之室谷からの火災で類焼し、延宝5年(1677)に伏原村(現・橋本市)の平右衛門を棟梁として主殿・雑舎が、同7年(1679)に摂州・天満の伊川都光浄栄により経蔵が、同8年(1680)に上門が落成している(『高野春秋編年輯録』)。上門は現存する山門にあたると思われる。

その後、万延元年(1860)にも火災により再び多くの建物が罹災したが、上述の経蔵と表門は焼失を免れたようである。棟札からは、文久2年(1862)に大主殿が、同3年(1863)に護摩堂が、元治元年(1864)に鐘楼が再建されたことが確認できる。大主殿は天野邑の久保勘兵衛源基義が正大工を、護摩堂は伊都郡大野邑の岡田元次郎光高が正大工を、若山住吉町の小田政右衛門重考が権大工を、鐘楼は能登国鹿嶋郡杵森邑住の藤田長五郎平直光が大工を務めており、ほぼ同時期に様々な工匠集団が造営に携わっている点は興味深い。大主殿と鐘楼は、徳川家茂を大願主とするのに対して、護摩堂は検校を務めた増応が再建寄付主となっている。いずれの造営でも、学侶方と行人方の双方から奉行を立てている。表門の両脇に接続するかご扉、東面に開く会下門は、建立年代が明確にならないものの、この頃に再建されたものとみられる。

近代の造営 明治維新により、金剛峯寺が成立し、

興山寺裏山に建つ行人方の東照宮が廃された。そして、前述の通り、明治5年(1872)の火災により、旧興山寺の建物を焼失した。その後、興山寺の敷地には、弘法大師1100年御遠忌記念として昭和8年(1933)に奥殿・別殿が、高野山開創1150年記念として昭和40年(1965)に新書院・真松庵が、また昭和42年(1967)に阿字観道場が、弘法大師1150年御遠忌記念として昭和59年(1984)に新別殿が建てられた。(鈴木智大)

(2) 絵図に描かれた青巖寺と興山寺

創建以降、寛永7年、慶安3年、万延元年に罹災した金剛峯寺は、高野山を描いた絵図の多くに描かれている。『高野山古絵図集成』に収録された9点を取り上げて、その特徴を確認する。

①御公儀上一山図(正保3年(1646)製作、金剛峯寺蔵)

正保3年3月に御公儀に学侶方が差し出したものの控えと考えられ、慶安3年(1650)の火災以前の境内を描く。「青巖寺」には中心建物として、入母屋造の東西棟建物と南北棟建物が描かれ、前者が客殿、後者が庫裏に相当すると想定される。両棟の中間付近には南面に向けて大玄関のような唐破風屋根をもつ張り出し部が描かれる。各建物の具体的な柱間数や規模は判然としないが、現在の大主殿と同様の建物構成といえるだろう。北西方には、「東照大権現様御殿」「台徳院様御位牌堂」と注記される入母屋造、向拝付で、東面に突出部をもつ建物が、背面の山裾には「真然堂」と注記される宝形造、向拝付の建物が、正面には切妻造の表門が描かれる。「興山寺」は中心に青巖寺の中心建物を東西反転させた構成の建物が、南東方に入母屋造で北面に突出部をもつ朱塗りの南北棟建物、正面中央に切妻造の表門が、その西方に小社が描かれる。

②高野山絵図(承応2年(1653)製作、金剛峯寺蔵)

裏書に「惣分興山寺」と記され、行人方のものとわかる。大主殿は『御公卿上一山図』とほぼ同様の建物が描かれており、屋根の反りがより強調されている。具体的な柱間数や建物の規模は不明であるが、大玄関に相当する唐破風屋根の張り出し部が、『御公卿上一山図』と同様に確認できる。周辺の建物も同様の構成だが、「東照大権現・・・」「台徳院・・・」

の注記はない。興山寺も『御公卿上一山図』と同様の構成で描かれる。製作時期は、慶安3年の火災以降であるが、火災以前の姿を描いた可能性が考えられる。

③高野山総図 (万治元年(1658)製作、金剛峯寺蔵)

学侶方と行人方の抗争を背景に製作されたものとみられている。大主殿は、『御公卿上一山図』と同様だが、大玄開らしき南面の突出部の唐破風屋根妻面の意匠がやや異なる。興山寺の建物構成も『御公卿上一山図』と同様だが、南西部の建物に「台徳院様御位牌」と注記されている。基本的には『御公卿上一山図』をもとに慶安3年の火災前の姿を描いたものとみられる。

④高野山壇上并寺中絵図 (元禄6年(1693)、金剛峯寺蔵)

幕府の指示のもと、学侶方と行人方が共同で作製したものの控えである。

中心建物は現在と同様に、西に東西棟建物を、東に南北棟建物を、南北棟建物の南面には大玄開らしき切妻破風の屋根をもつ突出部を描く。東西棟建物の南面に軒唐破風を、両建物南正面に縁を描く。大



図 172 「御公卿上一山図」(正保3年=1646、『高野山古絵図集成』67頁)

玄開部分の屋根形状が異なるものの、書院南面の軒唐破風の意匠は現在と非常に酷似する。北西部には、入母屋造の東西棟建物の「仮堂」を、背面には宝形造の「真然堂」を、正面には切妻造の表門を描く。慶安3年(1650)の火災の後、主殿・雑舎、経蔵、上門などが再建されているはずだが、経蔵に該当する建物は描かれていない。興山寺は、東西棟建物の西寄り背面に南北棟建物が接続し、正面に向唐破風の玄開が取り付く。

⑤高野山壇上寺家絵図 (宝永3年(1706)、金剛峯寺蔵)

幕府の命令により、学侶方、行人方立ち合いで製作し、寺社奉行に提出したものの控えである。

青巖寺は中心の西に東西棟建物を東に南北棟建物を描き、両者の中間付近に唐破風屋根の突出部を描く。両建物の南面には障子戸らしき建具を描く。庫裏東面は柱間4間で、両端間を壁とし、中央2間を障子戸らしき建具で仕切る。建物の南面及び東面に一連の縁が描かれ、さらに西面や北面にも縁が続く。東西棟建物の背面西寄りには入母屋造の南北棟建物を描いており、現在の主殿背面の奥書院の構成と

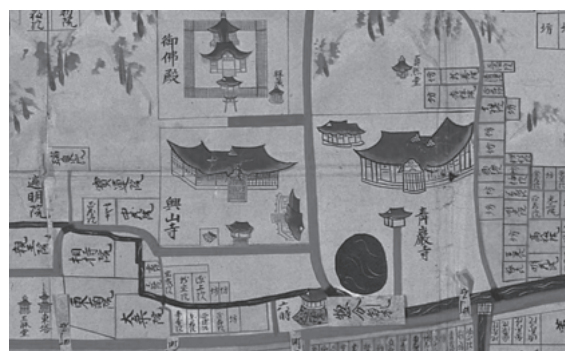


図 173 「高野山絵図」(承応2年=1653、『高野山古絵図集成』93頁)



図 174 「高野山総図」(万治元年=1658、『高野山古絵図集成』109頁)



図 175 「高野山壇上并寺中絵図」(元禄6年=1693、『高野山古絵図集成』126頁)

似る。中心建物の大屋根は、中央付近の一部に屋根を描いておらず、明かり取りとみられる。西南部には入母屋造の南北棟建物で正面に向唐破風の向拝をもつ「一切経蔵」を描き、その南に切妻造とみられる鐘楼を描く。鐘楼は袴腰をもたない。背面の山上には宝形造で正面に向拝をもつ「真然堂」を描く。北西部には石垣を築いた高台に入母屋造東西棟の「本堂仮堂」を描く。南面及び東西面には塀が巡り、南正面に入母屋造の屋根をもつ表門を、東面にも屋根を切り上げた門を描く。西面は屋根を切り上げない門を描く。慶安3年(1650)の火災の後の姿を描いたものとみられるが、経蔵や表門は現存するものと大きく形状が異なる。興山寺は、青巖寺を東西反転させた中心建物を描く。

⑥高野山古図(寛政8年(1796)、西室院蔵) 青巖寺の中心に東西棟建物と南北棟建物が描かれ、その中間に入母屋屋根の大玄関の突出部が建つ。書院南面には軒唐破風屋根が描かれ、柱で支えるような描写とする。書院及び庫裏の南面には縁が描かれ、加えて書院の西南隅には縁上に設けた下屋が描かれる。庫裏の東南隅には東に塀と穴門を描く。現在の大本殿と同様の構成だが、小玄関は描かれていない。

⑦高野全山及び周辺の絵図(江戸後期製作、海照寺蔵)

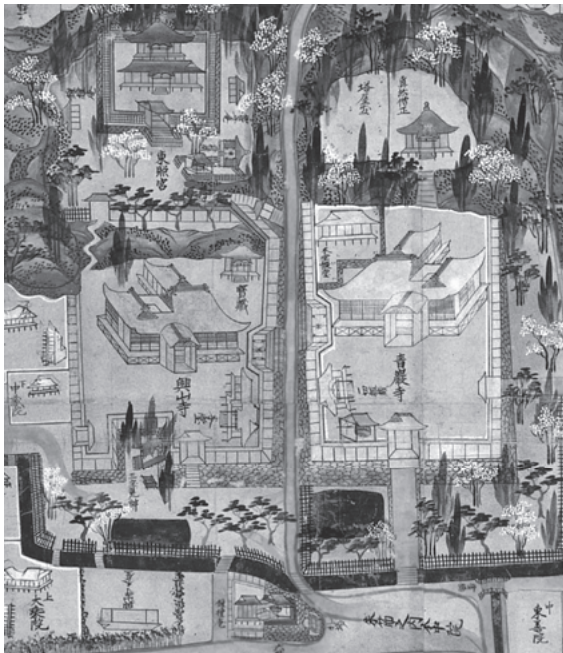


図 176 「高野山壇上寺家絵図」(宝永3年=1706、『高野山古絵図集成』131頁)

青巖寺の中心に、入母屋造の東西棟建物と南北棟建物を描き、中間付近の南面に大玄関が突出する。大玄関の屋根形状は不詳である。興山寺は、青巖寺を東西反転させた中心建物を描く。

⑧高野全山及び周辺の絵図(江戸後期製作、持明院蔵)

青巖寺の中心に入母屋造、東西棟建物と南北棟建物を描く。大屋根の妻面は狐格子である。両建物の中間付近には唐破風屋根の大玄関を描き、その正面には庇を設けている。中心建物の南面には縁を設け、明かり取りにあたる屋根のない部分も確認できる。興山寺は、青巖寺を東西反転させた中心建物を描く。

⑨高野山細見絵図(高野全山絵図)(文化10年(1813)製)

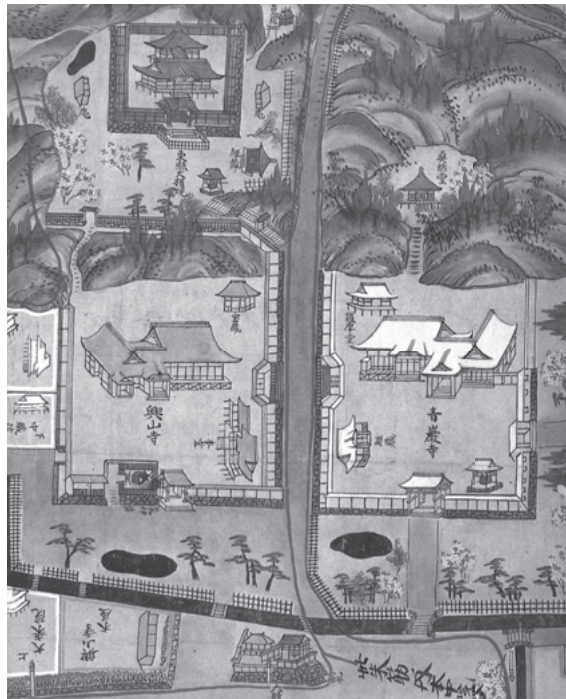


図 177 「高野山古図」(寛政8年=1796、『高野山古絵図集成』189頁)



図 178 「高野全山及び周辺の絵図」(江戸後期、『高野山古絵図集成』232頁)

作、個人蔵) 高野山絵図の木版画としては、最大幅をもち、建物も精密に描く。青巖寺の中央に、これまでと同様に入母屋造の東西棟建物と南北棟建物を描き、両棟の中間に突出部が建つ。両建物とも南面に縁が描かれ、それぞれ縁には木階が設けられる。

以上、江戸時代の絵図から大主殿の描写を確認した。一貫して共通することとして、入母屋造の東西棟建物と南北棟建物が東西に配され、一連の建物として接続する。また南面には大玄関とみられる突出部が付属する。万治元年以前の絵図では、この突出部は唐破風屋根であり、南面に1カ所だけ描かれており、大玄関が書院南面に別の玄関があったのか判然とはしない。しかしながら、元禄6年『高野山壇上并寺中絵図』では書院南面の軒唐破風と大玄関の突出部が明瞭に確認でき、現在の大主殿の南面の建物構成はここまで遡ることができる。加えて、元禄6年の絵図からは書院及び庫裏の南面に縁が描かれており、慶安3年の大火以前の建物とその後の再建の建物との違いかもしれない。興山寺は、青巖寺を東西反転させた中心建物を描く。



図 179 「高野全山及び周辺の絵図」(江戸後期、『高野山古絵図集成』238頁)



図 180 「高野山細見絵図」(文化10年=1813、『高野山古絵図集成』271頁)

(3) 大主殿及び奥書院 (PL.1～6)

構造形式 大主殿: 桁行 54.0m、梁間 23.7m、入母屋造、檜皮葺、
奥書院: 桁行 15.8m、梁間 9.9m、入母屋造、檜皮葺、大玄関:
桁行 5.1m、梁間 7.8m、妻入、入母屋造、檜皮葺

建立年代 文久2年(1862)(棟札)

i 大主殿

大主殿の概要 大主殿は金剛峯寺の中央に南面して建つ。東には会下門、南には鐘楼と表門及びかご堀、南西には経蔵が建ち、北には護摩堂と真然堂、北東には宗務所が建つ。経蔵の西背面にある南北につづく築地塀を挟んで、西隣は奥殿や別殿が位置する敷地である。金剛峯寺は9棟が和歌山県指定文化財に指定されており、大主殿もその一つである。

大主殿は客殿と庫裏の大きく2区画にわかれ、各棟の屋根が複雑に連なっている。西南隅の東西棟建物は、大広間や持仏堂を有する客殿で、その東に庫裏(台所)が建つ。庫裏はかつての水飲み場である「明り取り」を囲むようにコノ字形に屋根を連ねる。庫裏の北には戦後の増築部分があり、客殿の北には小さな中庭を設け、その中庭を囲むようにL字形の平面をもつ奥書院が建つ。客殿の西南隅には大主殿の西方にある別殿へとつながる渡り廊下が接続する。客殿の南正面の屋根には軒唐破風をつけ、客殿と庫裏の間には大玄関、庫裏の東南隅には小玄関を突出させる。これらの入口へは正門や会下門から石畳がつづいている。本項では大主殿のうち、客殿、大玄関、小玄関、庫裏を分けて詳述し、客殿北の奥書院は別項で述べることにする。

大主殿の沿革と建立年代 大主殿は豊臣秀吉が母の菩提を弔うために、文禄2年(1593)に造営した青巖寺の主殿として創建した。その後、寛永7年(1630)に類焼と寛永11年(1634)の再建、慶安3年(1650)に焼失と延宝5年(1677)の再建、万延元年(1860)に焼失と文久2年(1862)の再建と、度重なる火災とその後の再建を繰り返している。金剛峯寺の西隣の敷地は近世以前の行人方の本山である興山寺の境内であったが、明治維新後の機構改革により金剛峯寺の敷地に統括されている。

大主殿の建築年代は、後述のように、客殿小屋組に棟札が安置されており、万延元年の大火後の文久

2年(1862)に天野邑(現・伊都郡かつらぎ町)の久保勘兵衛基義を正大工、九度山村(現・伊都郡九度山町)前田喜兵衛藤原信光を権大工として再建されたことがわかる。大主殿を構成する客殿及び庫裏、奥書院は部材からも時期差は確認できないため、各建物は一連の造営によるものと考えられる。

客殿の平面・室名称 客殿は、桁行27.9m、梁間24.3m、入母屋造、檜皮葺とする。間取りは正面東からオオヒロマ(以下、大広間とする。54畳)、ウメノマ(以下、梅の間とする。18畳)、ヤナギノマ(以下、柳の間とする。12畳)と並び、その背面に東からツチムロ(以下、土室とする、40畳)、ジブツドウ(以下、持仏堂とする。29畳大)、ジョウダンノマ(以下、上段の間とする。27畳)、広縁(約21畳)と並ぶ。最背面は東から12畳、8畳、8畳の3室が並び、現在は3室を併せてチャノマ(以下、茶の間とする)と呼称される。茶の間の西には、チゴノマ(以下、稚児の間とする。10畳)が位置し、前述の上段の間の上段(9畳)、上々段(装束の間、3畳)と続く。客殿南面には間口いっばいに広縁と落縁を設け、あわせてオモテカイロウ(以下、表回廊とする。)さらに南に濡縁を設け、桁行中央に木階を設ける。西面には奥書院までつづく濡縁を設け、客殿の梁間中央付近に木階を設ける。北の奥書院との境はウラカイロウ(以下、裏回廊とする。)と呼ばれる中廊下を設ける。ゲンカン(以下、大玄関とする。)からつづくチュウモン(以下、チュウモンとする。24畳)は客殿と庫裏の間に位置するが、ここでは客殿の一部として記述する。

柱割は柱心揃えで、正側面とも1間を4枝分として等間で割る。一丈寸法は約490mm(1.6尺)前後で、



図181 金剛峯寺大主殿中門・広縁境

後述の柱径分を差し引いて畳長辺は6.3尺の京間であり、平面計画も畳割と考えられる。枝割については後述の庫裏も同様で、客殿と一体的な平面計画といえる。

客殿の軸部 周囲よりもやや高くした土間に自然石礎石を据える。南面の側柱では角柱(約210mm四方)の足元に地覆を入れ、床上は敷居に切目長押を設け、差鴨居で軸部を固め、柱上には軒桁をのせる。西面の側柱では、柳の間の部分で中敷居と差鴨居を渡して建具を入れる。柳の間より北では一段上げた位置で差鴨居を渡している。

南面及び西面の入側柱は面取角柱(約185mm四方、面内162mm)とし、切目長押、敷居、鴨居、内法長押、飛貫、飛長押で軸部を固め、柱上には舟肘木において化粧桁を受ける。入側柱と側柱はおよそ部屋境の筋で渦絵様を施した海老虹梁でつなぐ。この海老虹梁は、入側柱では飛長押上端から肘木を一手出して巻斗で受け、側柱筋では柱頭部から出した木鼻で受ける。持仏間の前方に位置する大広間最西端の柱間は、楣と内法長押を一段切り上げて棧唐戸を設け、飛貫と飛長押の位置に絵様虹梁をかけて荘厳する。中門の正面側は約7.8m幅の大スパンの柱間とし、敷鴨居や長押も一本の長材を用いる。内法長押の上部には、飛長押の下端の位置に上端を揃えるように絵様虹梁を渡す。大玄関からつづく中門入口を荘厳する圧巻の意匠である。

中門の造作 中門は先述の通り、広縁側を間口1間として大虹梁をかける。内部は内法長押を四周にまわし、南面及び北面には柱上部に天井長押を設ける。天井は切妻造の化粧屋根とし、東西妻面は天井



図182 金剛峯寺大主殿梅の間

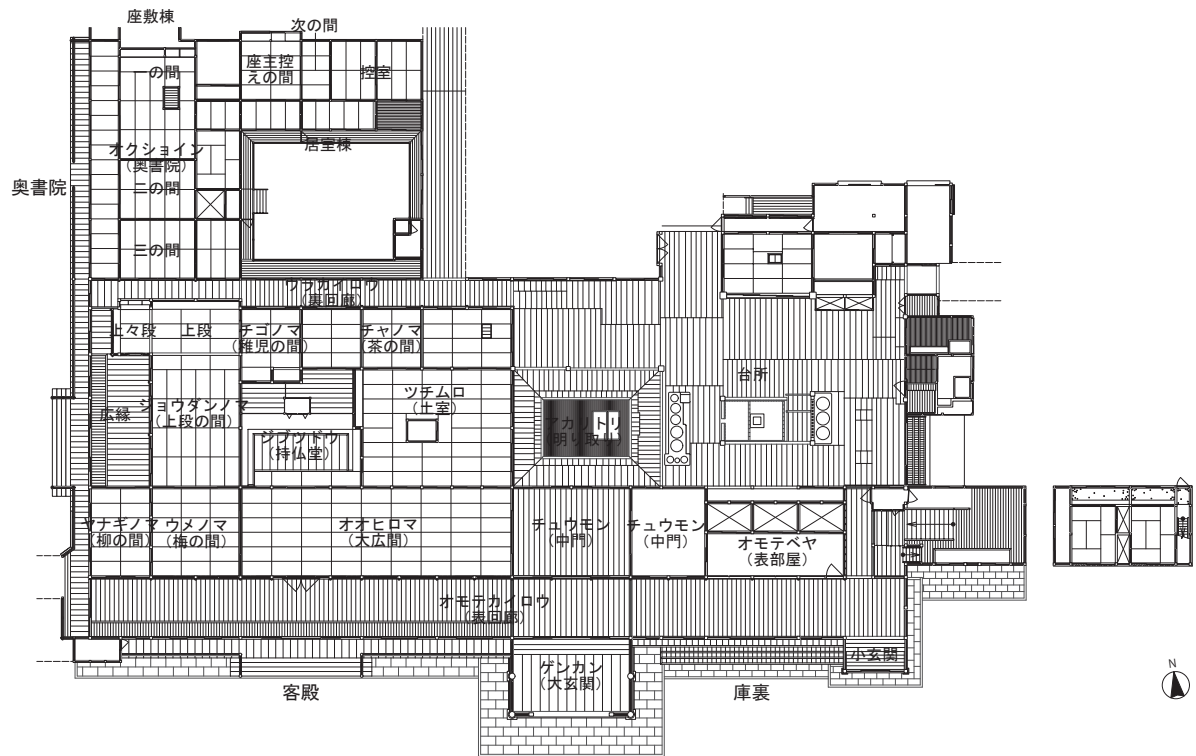


図 183 大主殿及び奥書院室名称

長押を設けず、絵様虹梁を渡して板臺股を置き、大斗絵様肘木を介して化粧棟木を受ける。化粧棟木からは垂木を天井長押までかける。天井中央には棟木から照明を1基吊り下げる。床は板敷とし、建具は正面側を腰付障子戸、その他3面は「松に鷹」の板戸とする。中門の北隣は庫裏の水飲み場である「明り取り」に至る。

大広間・梅の間・柳の間の造作 大広間は東西方向に長い54畳の大空間である。柱には内法長押と蟻壁長押をまわして、上部を蟻壁とする。持仏間正面側は内法高を一段上げる。梅の間境は間口が3間分あるが、間柱を立てず、柱間1間とする。その上部の欄間は下段を花鳥の透かし彫りの彫刻欄間、上段を七宝つなぎ組子欄間とする。北面及び西面の襖は、松と竹に鶴を描いた金碧障壁画の「群鶴図」で、斎藤等室(寛文8年(1688)没)の作品であるという。小壁や蟻壁は土壁漆喰塗とする。天井は東西方向に竿を通した竿縁天井とし、照明を3基吊る。

大広間西の梅の間は18畳の正方形平面とし、内部の造作は大広間と同様である。北隣の「上段の間」との境は、間柱を立てず、間口3間分を襖で仕切る。

襖絵は大広間と同じく斎藤等室の作といい、梅月流水の金碧障壁画である。天井は東西方向に竿を通した竿縁天井とし、照明を中央に1基吊り下げる。大広間と梅の間は間仕切りの襖を取り外すと、合計72畳の巨大な一室空間となる。

柳の間は梅の間の西隣にある12畳の和室で、内部は内法長押と蟻壁長押を四周にまわして天井までを蟻壁とし、大広間や梅の間と同様の軸部構成とする。西面の濡縁境は中敷居を設けて障子戸を入れる。天井は東西方向に竿を通す竿縁天井とし、照明を1基吊り下げる。梅の間境の襖及び南北両面の板戸は、



図 184 金剛峯寺大主殿柳の間

山本深齊筆の四季柳鷺図が描かれる。

大広間と梅の間、柳の間は客殿の南正面側を構成する室で、紺碧障壁画や板絵など、絵画意匠も煌びやかに設える。

土室の造作 土室は大広間の北、持仏堂の東に位置する40畳大の土室で、室名称は中央にある火袋に由来する。内部は内法長押と蟻壁長押を四周にまわし、天井までを蟻壁とし、小壁と蟻壁は土壁漆喰塗とする。西面北は腰の位置に框を設けて床を造る。この床は間口2間の大床で「真然床」と呼ばれる。『紀伊続風土記』によれば、この床の位置にかつて真然廟があったという言い伝えに由来する。土室の天井は東西方向に竿を通す竿縁天井とし、大小の照明を4基吊り下げる。

室中央の火袋は角柱4本を立てて、腰貫と蟻壁長押で軸部を固める。腰貫下は各面とも吹放ちとする。火袋の床には囲炉裏を設け、蓋板を張る。火袋は東側を正面とし、中敷居上に成の低い引違い板戸を設け、その掛楣上には弁財天を祀る厨子を納める。厨子の手前は柱より絵様繰形を施した持送りを出して小棚を設け、厨子の上部には柱間に絵様虹梁をかける。その他の壁面は3面とも土壁漆喰塗とし、蟻壁長押上は天井まで漆喰塗の蟻壁とする。なお、土室の襖や真然床の壁面には、近年製作された日本画家の千住博氏による「滝図」が納められている。

持仏堂の造作 持仏堂は、北面に須弥壇、左右の東西面に位牌棚を構える。須弥壇中央には本尊の御大師様を祀る厨子を設け、その左右には歴代天皇御尊儀及び歴代座主の位牌を祀る。内部は北面を除いた3面に内法長押を設け、天井長押をまわして、格



図 185 金剛峯寺大主殿持仏堂

天井を張る。南面の小壁は土壁漆喰塗とするが、その他の壁面は金箔押しで荘厳する。須弥壇上部には間口いっぱい絵様虹梁をかけ、この虹梁は渦絵様や袖切に金色塗装を施し、その他は煤けてやや判別が難しいが、漆塗に仕上げているとみられる。虹梁上の小壁には極彩色を施した飛天と雲の彫刻を設ける。床は、南面の半間幅を畳敷とし、他を板敷とする。天井からは吊灯籠2基と天蓋を1基吊り下げる。須弥壇及び東西の位牌棚の羽目板には地紋彫り紗綾形の桶狭間を設け、框には八双金具をあしらう。上段の棚は蓮華座反花の彫刻を施して段を造る。

厨子は正面の柱筋を持仏間北面と揃え、奥行の半間幅を北背面に張り出す。厨子の細部は土台上に円形礎板を置き、丸柱を立て、内法長押と頭貫で軸部を固める。柱上には台輪をのせ、出組の組物で軒桁を支持し、正面は一軒繁垂木、両側面は二軒繁垂木の扇垂木とする。屋根は入母屋造、妻入で、正面に軒唐破風を設ける。正面の柱間は方立に棧唐戸とし、内法長押上の小壁には龍と雲の彫刻を施す。頭貫には渦絵様の拳鼻、台輪も木鼻を突出する。台輪上の中備は出組の詰組を3組設け、軒唐破風部分では軒桁を絵様虹梁とし、破風妻壁には麒麟の彫刻、破風押みには鳳凰の彫刻懸魚を下げる。彩色では軸部は煤けているが、漆塗に仕上げているとみられ、礎板や屋根は朱色塗装とする。金具も多数設けられ、丸柱には巻金具、扉や長押、破風などには八双金具や紋金具を設け、垂木に木口金具が施される。正面の扉には八双金具及び紋金具と、鏡板に菊の紋金具を施す。なお、持仏間と稚児の間や茶の間の間にある2室は、現在、物入として使用される。



図 186 金剛峯寺大主殿持仏堂虹梁形内法貫

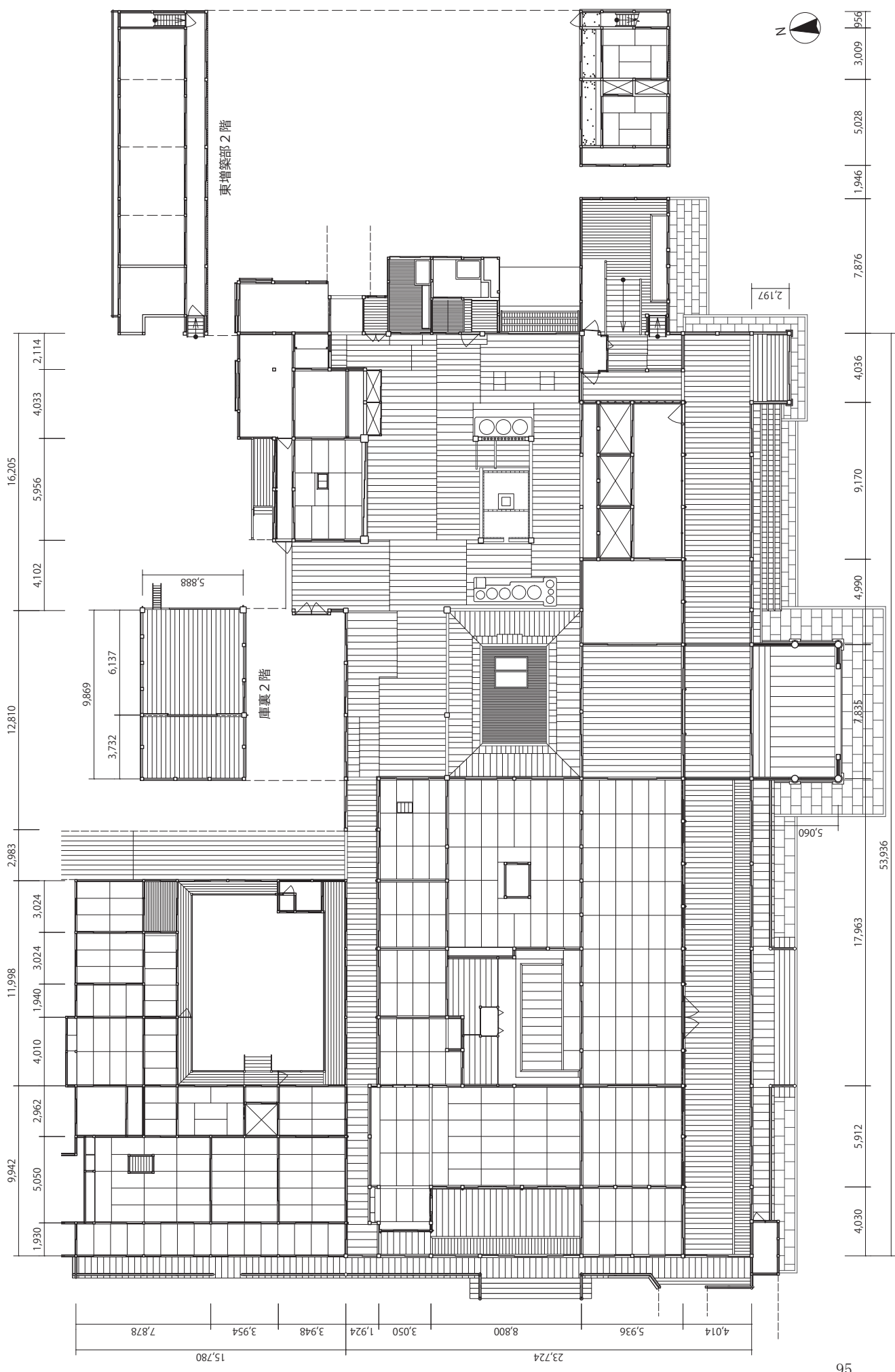


图 187 金剛峯寺大主殿・奥書院平面图 1 : 300

上段の間の造作 持仏堂の西には上段の間があり、北に上段を備え、さらにその西に張り出すように上々段の間（装束の間ともいう）が位置する。また上段の間の西は広縁及び落縁を設ける。上段の間は上段・上々段を含まないで27畳大で、天皇や上皇が登山された際に応接間として利用され、現在は高野山の重要な儀式などに使用される。軸部は角柱に内法長押と蟻壁長押を四周に回し、天井までを蟻壁とする。天井は折上格天井とし、天井板を格間から45度振って互い違いに配置し、さながら菱形に天井板が配されるようにみせる。天井からは照明を2基吊り下げる。後述の上段及び上々段の間も同様に、壁面や襖紙は金箔押しに仕上げ、輝かしく室内を装う。西面の広縁に面した柱間は腰付障子戸とし、腰板には草花図を描く。上段との境は小壁を鳳凰の彫刻欄間とする。

上段は9畳で、上段の間の床高から黒漆塗の框を入れて床面を一段上げる。北面に間口3間分の大床を設け、大床の地板は框と一材の一枚板とし、現在、御大師様御影の掛軸をかけて祀る。東面は框を入れて一段上げて帳台構えを設ける。武者隠しともいい、東隣の稚児の間と接続する。帳台構えは中央を両引きの襖とし、敷居と鴨居、その他の縦框は黒塗として八双金具を設ける。鴨居上に内法貫を入れてその上を小壁とし、小壁も黒塗の縁をまわして八双金具を取り付け、小壁上には長押を設ける。「上段」も柱上部に蟻壁長押をまわして蟻壁を造り、天井は折上小組格天井とする。

上々段の間は黒漆塗の框を入れて上段の床高よりもさらに一段高くした3畳の室で、西面を付書院、



図 188 金剛峯寺大主殿上段の間西広縁

北面は違い棚と天袋を設けて、上段の大床に対する床脇の意匠とする。北面床脇の地板は上段のそれと同じく、框も含めた一枚板である。違い棚や天袋地板の見付、天袋の襖定規縁には随所に飾金具が施される。西面の付書院は地板を一枚板とし、上段の間と同じく草花図を施した腰付障子戸、上部は角繫の組子欄間とする。広縁に面した南面には脚幅を狭めた火灯窓を設け、その内側には障子戸を入れる。装束の間の天井は折上格天井とし、各格間の天井板を四季草花の透かし彫りとする。

上段の間及び上段、上々段の間は、大主殿の中でも最も格式の高い意匠を随所に施す。書院造の様式を呈し、賓客の接客や儀礼儀式の空間として、意匠構成は古式を留めている。文久2年の再建時にも伝統的な形式を踏襲して造作されたといえるだろう。

茶の間・稚児の間の造作 土室及び持仏間の北背面には東から4室並び、東3室を茶の間、西の「上段」帳台構えを介して接続する1室を稚児の間とする。茶の間は内法長押と蟻壁長押を設け、天井までを蟻壁とする。天井は3室とも竿縁天井とする。建具は縁に面した北面及び庫裏に面した東面を腰付障子戸とし、その他は土室の襖絵と同じく、千住博氏製作の「断崖図」が納められている。

稚児の間は10畳大の和室で、東南隅の1畳分は床柱を立てて畳床とする。内法長押と蟻壁長押をまわして、天井まで蟻壁を造り、天井は竿縁天井とする。建具は縁に面した北面を腰付障子戸とするが、その他の襖及び内法下の壁面や床の間内部の壁面をすべて山水図の障壁画とする。この山水図は狩野探斎の筆と伝わる。現在、床の間には厨子が納められ、地



図 189 金剛峯寺大主殿上段の間西広縁見返し

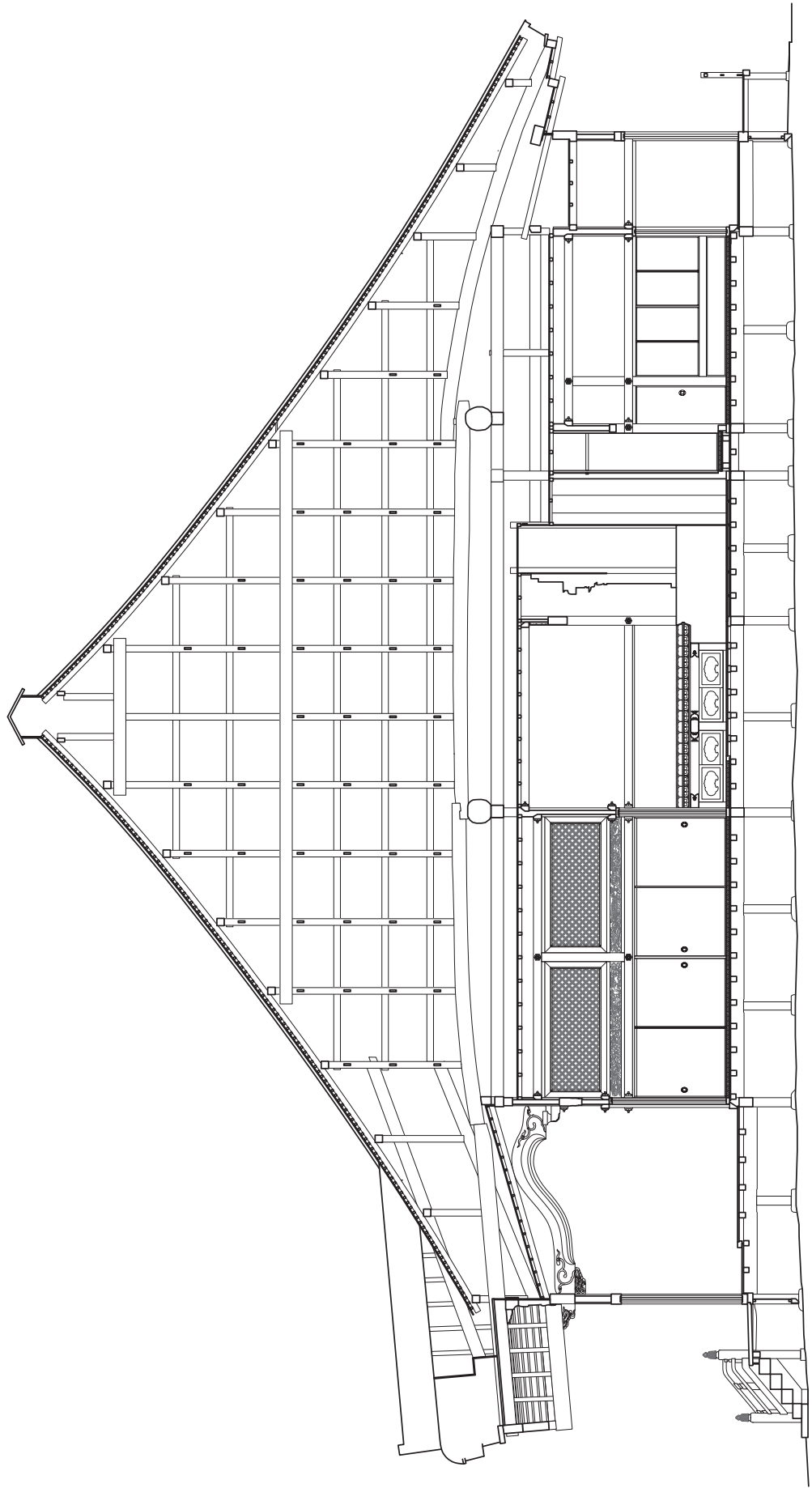


图 190 金刚峯寺大殿梁間断面图 1 : 125

蔵菩薩が安置される。この地藏菩薩は旧伯爵副島家に伝承されていたものという。

縁の造作 客殿は南面及び西面に広縁の入側縁と濡縁を設ける。南面広縁は南端の半間幅を落縁とし、ともに板敷とする。上段の広縁は幅広の板敷である。軸部は先述の通りで、入側柱から側柱に渡した海老虹梁が入側縁の空間をダイナミックに演出する。天井は化粧屋根とし、垂木は南面軒の地垂木と一材である。垂木上には化粧小舞を渡して化粧裏板を張る。南面の濡縁は幅広の板敷とし、擬宝珠高欄を設ける。持仏間に対応する柱筋で、濡縁から正面側に木階を設ける。木階上部には後述の軒唐破風が位置する。濡縁の西端には側柱から張り出す形で下屋がある。この下屋は、檜皮葺の片流れ屋根をかける。

西面の入側縁の広縁は上段の間の西に設けられ、南面の表回廊と同様に落縁をもつ。西面の濡縁も南面と同様に擬宝珠高欄を設け、上段の間西の間口3間分に木階を設ける。この木階上部にも南面と同様に軒唐破風屋根が位置する。客殿西南隅には先述の通り、別殿へとつながる昭和後期建築の渡り廊下が

ある。現在では、客殿南面の広縁からこの渡り廊下及び西面の濡縁へと、バリアフリー対応のスロープを設けている。

客殿の小屋組 客殿の小屋組は和小屋とし、各部屋境の柱筋で柱上に角材の化粧桁をまわして軸部を固める。この化粧桁のうち、正面入側柱筋と背面側柱筋では桁行方向にさらに角材の桁を重ね、中央列の部屋境となる東西柱筋では八角形断面の大梁をのせる。これら桁行方向の材に直交して、その上に梁間方向の柱筋間に、八角形断面の大梁が渡される。大梁は桁行一間毎に配置され、大梁同士は台持ち継ぎの継手で接合される。客殿正背面及び西側面の軒へは大梁上から桔木が出される。また西南隅と西北隅では柱直上の桁の上から隅木を出し、さらにその上に隅の桔木を置く。梁間方向に渡された大梁上には小屋束を立てるが、小屋組の中段ほどの位置で角材の梁を渡して、その上に再度小屋束を立てる。小屋束同士は桁行及び梁間方向に貫で固める。小屋組の各部材は斧や大鋸の加工痕跡が明瞭に残る。

客殿小屋組の架構は以上のような形式であるが、



図 191 金剛峯寺大主殿上段の間上段



図 192 金剛峯寺大主殿上段の間上々段



図 193 金剛峯寺大主殿上段の間上々段天井見上げ



図 194 金剛峯寺大主殿茶の間

土室の火袋及びその煙道が位置する部分のみ架構が変則的とある。火袋四隅の柱上には梁間方向に桁が渡され、この桁間も横架材でつなぎ軸部を固める。この上に新たに柱を立てて煙道を造るが、東西方向の柱間を火袋よりも狭めて正方形平面としている。これら煙道の柱は貫で繋ぎ、柱間を土壁で塞ぐ。先述の小屋組中段の梁と同高のところで、煙道部分も柱上に角材の梁を渡して周囲の小屋組と接続し、軸部を固めている。この梁上に再度柱を立てて屋根上部まで煙道をのぼしている。

先に述べたように、本調査で客殿小屋組内に棟札を確認した。棟札は持仏堂の仏壇上部の位置に東西方向に入れた貫に、棟札の天を東に向け、表面を客殿正面側に向けてくぎ打ちされていた。棟札の記載は金剛峯寺経蔵に収蔵されていたものと同一とみられる。また棟札の他に、御幣も2か所に祀られていた。御幣は土室西南隅の上部の位置で、小屋東の南側面に打ち付けられていた。本調査で御幣は取り外さなかったが、視認できた範囲では御幣に記銘等は確認できなかった。

庫裏の平面と室名称 庫裏は客殿の東に位置する南北棟建物で、入母屋造、檜皮葺の大屋根をかける。かつては多くの僧侶の食事を実際に賄った建物で、内部は往時の姿をよく伝える。客殿との間にはアカリトリ（以下、明り取りとする。）と呼ばれる中庭空間が位置し、その南は中門、北は庫裏と客殿をつなぐ板間の渡り廊下があり、それぞれ金属板葺の切妻屋根をかけて客殿と接続している。また庫裏南面には、後述のように、中門の南側に大玄関、庫裏東南隅に小玄関が取り付く。東南隅では東に後補の角屋が延



図 196 金剛峯寺大主殿客殿小屋組

びて、現在は拝観者用の出入口として利用している。

庫裏の平面は南北で大きく二分される。まず南半は大玄関や小玄関から入った先に、客殿からつづく表回廊が続き、その北には東にオモテベヤ（表部屋とする。22 畳半大）、西にジムシツ（以下、事務室とする。18 畳大）を設ける。表部屋はかつて寺務所として使用されたといい、4 畳半の居室3室とその北側に押入が各々付属していたようだが、現在は建具等を取り外して一室空間の拝観者用の受付として利用している。この表部屋北面の台所との間は半間幅の物置場とする。小玄関から上がった先の表部屋東には廊下があり、台所へとつづく。

庫裏北半は、台所や明り取りの大きな一室空間とし、台所中央には煙抜き巨大な煙突があり、その東西にかまどが据えられる。台所北側は東から6畳と12畳の和室が並び、ともに事務スペースや作業場として使用される。庫裏の東面には職員が使用する通用口があり、この通用口北には風呂などの水まわりの増築部分が建つ。庫裏の北面は、別棟の増築部分と接続する。水屋北の板間上部には2階を設け、



図 195 金剛峯寺大主殿稚児の間



図 197 金剛峯寺大主殿小屋組棟札打ち付け状況

東 18 畳と西 12 畳にわける。

庫裏の軸部 庫裏南半は基本的に客殿と同様の造りとし、角柱を立て、切目長押、内法長押、飛長押で軸部を固め、入側縁には海老虹梁をかける。この海老虹梁は表部屋東南隅の柱上では、梁間方向だけでなく、東面の側柱に向かって桁行方向にもかけて、小玄関の対面を飾る。柱上には舟肘木をのせ、海老虹梁下面には入側柱では斗拱で支持し、側柱では拳鼻状に造り出した持送りを入れる。

庫裏の南北境の柱筋かけ柱径は 180 mm 四方前後で客殿と同程度であるが、台所及び明り取りまわりの軸部は 300 ~ 400 mm 四方の木太い柱を使用し、特に台所北の 12 畳の居室南面の 2 本が柱上に梁間方向の大梁がのるため太い。庫裏北半の柱は成の高い胴差で繋ぎ、柱上には桁をのせ、この桁に後述のように梁を架けて小屋組を造る。台所中央の煙抜きでは東北隅を除いて約 300 mm 四方の角柱を立て、胴差で柱間をつなぎ、柱上には梁及び桁をのせる。北東隅は石柱を柱筋からやや北に出して、東面の胴差を受ける。この胴差は北端を鳥居の笠木様に、上面に反り増しを施し、この胴差上に東北隅の柱を立てる。この特徴的な架構は、煙抜き東面に台所の神様である三宝荒神を祀るためであろう。

明り取りまわりは胴差上に束を立てて貫で固め、周囲の屋根から長く出した軒先を支えるために、東から 1 本目と西から 1 本目の東に桁を渡して東西面の軒を支持し、さらにこの桁通しをつなぐ梁をかけて南北面の軒を支える。「明り取り」北の渡り廊下は差鴨居に半間毎に根太を渡し、中二階を造る。

庫裏各部の造作 庫裏南半では、広縁は先述の通

り客殿と同意匠とする。居室部分の表部屋や事務室は内法長押をまわして天井は竿縁天井とする。表部屋東側の廊下は内法長押をまわし、小壁は土壁漆喰塗、天井は竿縁天井とする。廊下に面した表部屋東壁は内法下を簞子下見の板壁とする。

庫裏北半では、台所の小壁を土壁漆喰塗とし、床は板敷、天井はなく吹抜けとする。東面の出入口は柱間を腰付障子戸とし、差鴨居上を欄間障子とする。台所中央の煙出しでは、東面に二石釜を 3 基据え、先述の胴差上には間柱から絵様線形を施した持送りを出して神棚を造る。この胴差下は虫籠状に縦格子の煙抜きをつけた漆喰壁とし、胴差上の小壁も土壁漆喰塗とする。煙抜き内部は炭起こしの場所で、現在は見切りに煉瓦をまわしたモルタル床の上に煉瓦を組んで炭起こし場を造る。小壁の内壁は柱が見えないように、漆喰を厚く塗っている。煙抜きは桁の上に規模を縮小して柱を立て煙道を造る。およそ方形平面で、柱間は土壁とする。炭起こし場の真上に位置し、大屋根まで立ち上げて屋根上に煙出しを突出させる。また、煙抜きと明り取りの間にも煉瓦基礎の竈を設け、その上部に排煙用の囲いが増設され、ダクトで煙道と接続させる。

明り取りは先述の通り、四方の建物の軒が集まった中庭のような吹抜け空間で、現在は透明素材の屋根がかけられているものの、文字通り光が差し込む明るい空間である。四方の軒下の床は見切縁のようにやや傾斜をつけた板敷とし、中央部分は、上面にやや丸みをつけて水捌けを良くした簞子状の板敷とする。またこの中央部分には高野槇で造られた水飲み用の水槽を据える。かつては湧き水をこの水槽に



図 198 金剛峯寺大主殿表部屋・表回廊境



図 199 金剛峯寺大主殿庫裏台所

貯め飲料にしていたという。この水槽脇には屋根に上るための梯子が設置されている。

煙抜きのすぐ北には小屋梁から吊るされた屋根付きの台がある。これは食物の保存用の台であるといひ、屋根から垂れるように貼られた紙はネズミの侵入を防ぐためのものという。台所北の12畳の居室の胴差には台所側に向けて神棚を設け、西南隅の柱には鐘が吊られている。また、客殿へとつづく渡り廊下上部には、梯子である中二階が設けられる。床は板敷で、壁は土壁漆喰塗、東西2室の間仕切りは両端を板壁とし、中央に板戸の建具を入れる。中二階東端には手すりが設けられる。東半部分は天井を設けず小屋組をみせるが、西半は竿縁天井とする。

庫裏の小屋組 庫裏の小屋組は巨木を使った大梁が縦横にかけられ、圧巻な構造美をみせる。先述の通り、柱上の桁から小屋組の大梁が渡される。台所北の12畳の居室南側の2本の柱から煙抜きの東西両端の柱筋上をまたぐように大梁をかけ、東側柱からこの大梁にかけては登梁が1間毎に渡される。西では台所と明り取り境の柱上の桁から煙抜き西端の大梁までこちらも1間毎に梁がかけられる。さらにこれらの桁行方向の梁上に、煙抜き北で2本、南で1本梁がかけられる。これら的大梁に小屋束を立て、束同士は縦横に通した束で固める。束上には母屋を渡して、垂木をかけ、野地板を葺いて檜皮葺の屋根を造る。小屋組の材はいずれも黒く煤けているが、庫裏北の野地板は一部取り替えられている。

大主殿の軒まわりと屋根 客殿と庫裏は先述の通り、入母屋造、檜皮葺の大屋根をかける。軒は二軒、疎垂木とし、垂木は下面に面取りを施す。地垂木は



図 201 金剛峯寺大主殿庫裏明り取り北

棒垂木だが、飛檐垂木は先端に反りと扱きをつける。大屋根の妻飾は妻壁を木連格子とし、前包部分を一間毎に束を立てて区切り、波の彫刻をはめる。破風拌みには六葉三花懸魚を下げ、その両側に草花彫つけ鱗をつける。

大屋根の大棟には箱棟を設け、天水桶といわれる雨水を貯める大きな桶が設置されている。これは消火設備として設置されたもので、かつては、屋根に天水桶を設置することは山内でも一般的であったというが、現在では大主殿の大屋根に設置されているものだけである。客殿と庫裏の大屋根にそれぞれ2カ所ずつ設置する。また庫裏の煙抜きと客殿の土室上部の屋根には煙道や火袋からつづく煙出しが設置される。ともに袴腰を設けて、壁は土壁漆喰塗とし、漆喰で塗り籠めた煙の吹出し口を桁行方向に突出させて切妻造、檜皮葺の屋根をかける。その他に、大屋根への昇降装置として3カ所の軒先に梯子が設置されている。一つ目は大玄関の西脇のもので、二つ目は、客殿北面にも奥書院との間に設けられた中庭のもの、三つ目は庫裏西面の通用口先に設置された



図 200 金剛峯寺大主殿庫裏明り取り



図 202 金剛峯寺大主殿煙抜き見上げ

ものである。さらに、客殿北面の屋根には、大棟まで登れるように、屋根面に張り付けるように梯子が設置されている。

客殿では南面及び西面の木階上部に軒唐破風を設ける。南面の唐破風の菖蒲桁は入側柱筋の軒桁から片持ちで出している。この菖蒲桁は渦絵様を施した拳鼻状の持送りが支持している。妻飾は笈形大瓶束で、笈形は鶴と波の彫刻とし、その他は板壁で閉じる。破風板には菊の紋金具と八双金具を取り付け、拌みには兎毛通懸魚を下げる。

西面の軒唐破風は南面と同様の形状ではあるが、細部意匠が若干異なる。まず、軒桁から出した菖蒲桁下に持送りは設けられておらず、その他、破風拌みの兎毛通懸魚や鬼板、笈形彫刻（西面は牡丹）などで意匠を変えている。

大玄関 大玄関は客殿と庫裏の間に位置し、客殿の広縁を介して中門の南に建つ。大玄関は、天皇や皇族、高野山の住職のみが出入りに使用する特別な玄関であり、日常的には使用されない。桁行（南北）2間、梁間（東西）は正面側で柱間を3間に割り、背面の客殿との取り付け部分は間柱を立てず柱間1間とする。大玄関は切石敷でやや高めた基壇上に、切石方形礎石及び切石の地覆石を置く。現在、切石敷の外縁部には立入禁止用の柵がめぐる。切石方形礎石上には石製の円形礎板をおいて丸柱を立てる。丸柱は径372mmで、頭部を粽とする。正面柱間は先述の通り3間とするが、中央間の2本の柱は地覆上に立てた几帳面取角柱の控柱である。背面は客殿側柱の角柱とする。

軸部は地覆、腰貫、虹梁形頭貫で固め、柱上には



図 203 金剛峯寺大主殿庫裏架構見上げ

角を留めする台輪を置き、絵様実肘木付きの組物を介して軒桁を支持する。虹梁は両側面では柱間毎にかけるが、正面は梁間いっぱい虹梁を渡し、先述の正面中央間の控柱はこの虹梁を受ける。木鼻は正面を阿吽の獅子、側面を猿の彫刻とする。柱間装置は正面中央間を開放とし、脇間及び両側面ともに腰貫下を板壁、上は透かし彫りの花七宝の組子をはめる。両側面のみ組子の棧と框の幅が広い。客殿広縁との境は中門の正面側と同様に間口3間分を無柱とし、引違いの舞良戸6枚を入れる。台輪上の小壁は正面を梅に虎、東側面は北半の柱間を麒麟、南半の柱間を鳳凰とし、西側面は同様に北半を龍、南半を玄武の彫刻とする。

組物は、各円柱上に置き、外側は平三斗とし、大斗上の肘木を渦絵様付きの拳鼻に造るが、内部は出三斗で一手出して、成の高い絵様付き実肘木を介して木太天井縁を受ける。中備は正面のみ一具設ける。客殿との取り付け部分のある組物は天井縁を受ける必要があり、客殿側柱よりもやや正面側に置かれる。

床は地覆と同面に南北方向の板敷とし、客殿へは間口いっぱい設けた木階で上がる。現在は、この木階の中央に擬宝珠高欄をもつ階段を増設している。天井は折上格天井とし、格間は東西13間、南北8間で、四周の格間のみ折り上げた支輪分だけ幅が狭い。先述の一手先にある天井縁と軒桁間の小天井は鏡天井とする。なお、天井の中央には照明を1基吊り下げる。

屋根は入母屋造、妻入、檜皮葺とする。軒は二軒疎垂木で、地垂木は棒垂木だが、飛檐垂木は先端に



図 204 金剛峯寺大主殿客殿南面軒唐破風

やや扱きと反りをつける。垂木上は小舞を渡して野地板を張る。妻壁は龍と波の彫刻とし、破風坪みには六葉猪目懸魚を下げ、牡丹彫刻を施した鰭をつける。破風板には菊御紋をつけた八双金具が打たれる。

大玄関は客殿よりも彫刻や組物で荘厳し、また入母屋破風の重厚な屋根を設けることで、高野山の中心寺院として威厳に満ちた意匠とする。

小玄関 小玄関は庫裏東南隅に南に向けて突出し、上綱職の僧侶が利用する専用の出入り口とされる。庫裏側柱からは南に1間分突出し、正面側は間口2間分とする。枝割は柱心揃えとするが、側面では垂木が客殿側柱の手前に置かれる。そのため側面の柱間では客殿側柱手前まで7枝、螻羽の出は3枝とする。正面側は小屋根から判断して13枝で小屋根の軒の出は4枝とする。したがって、一枝寸法は正側面とも約300mm(1尺)と判断できる。

切石敷上に方形礎石を据え、その上に石製の方形礎盤をおいて柱を立てる。柱は南正面の2本は几帳面取角柱で柱頭部を粽に造る。背面側は庫裏側柱の角柱とする。軸部は正側面に地覆と差鴨居を渡し、

両側面に腰貫と飛貫を入れる。正面柱間には虹梁形頭貫を入れ、両側面には正面側より成の低い頭貫を入れる。両側面の飛貫は両端の側面を拳鼻に造り出し、その上の頭貫との間に卷斗を入れる。頭貫上には台輪を置き、組物を置いて桁と正面の妻虹梁を支持する。

正面側の柱間は引違いの腰付障子戸4枚で、両側面は腰を豎板壁、その他を土壁漆喰仕上げとする。正面側の小壁は板壁とする。組物は絵様実肘木付きの平三斗とし、正面側の中備には板臺股を入れる。頭貫は正側面とも渦絵様を施した拳鼻を突出させ、台輪も隅を拳鼻に造り出す。

内部床は板敷で、庫裏南面の広縁に向かって木階3級を設ける。天井は、唐破風屋根をそのままみせた化粧屋根で、菖蒲棟から照明を1基吊り下げる。

屋根は、檜皮葺の向唐破風屋根で、垂木は一軒疎垂木で、茨垂木から一材で出す。先述の妻虹梁の上には大瓶束笈形を置き、大斗実肘木で棟木を受ける。破風は坪みに懸魚を下げ、破風板尻は拳鼻状に造る。この唐破風屋根とは別に、正面側と正面角柱より前



図 205 金剛峯寺大主殿西面軒唐破風



図 206 金剛峯寺大主殿大玄関



図 207 金剛峯寺大主殿大玄関虹梁形頭貫・組物



図 208 金剛峯寺大主殿小玄関

方の側面部分に檜皮葺の小屋根を差し出す。小屋根は一軒疎垂木とし、垂木は差鴨居と絵様虹梁頭貫の間に挿した垂木掛けより出すが、柱筋の垂木と隅木は正面角柱に直接挿している。唐破風屋根及び小屋根はともに垂木上に小舞を置いて野地板を張る。

ii 奥書院

奥書院の概要 奥書院は大主殿の北西隅に位置する。大主殿北面中廊下を介して、南北棟建物と東西棟建物が中庭を囲むようにL字形を呈して建つ。本項では、この両棟の建物を後述の史料にみえる建物名称と合わせて、便宜上、南北棟建物を「座敷棟」、東西棟建物を「居間棟」と仮称する。

座敷棟は桁行 15.8m、梁間 9.9m、入母屋造、檜皮葺とする。居間棟は桁行 12.0m、梁間 5.9m、切妻造、檜皮葺（北面は金属板葺）とし、東で庫裏背面の増築部に接続する。また座敷棟の北西隅にはさらに新しい増築棟が建つ。奥書院はかつては皇族の休憩所として使用された建物で、現在では座敷棟は儀式に使用され、居間棟は座主やその御供の控室として利用される。



図 209 金剛峯寺大主殿小玄関軒まわり見上げ

建築年代 奥書院の建立に関わる棟札は確認されていない。現在の主殿と比較しても部材の風食等に差は見られず、また主殿と柱筋を揃え、取り付け部にも改造等の痕跡は見受けられないことから、奥書院は主殿と一連で造営されたとみられる。

平面 座敷棟は東西2列の平面構成で、西半に3室の座敷を、東半に小部屋を並べる。西半の座敷は北から一の間（17畳半）、二の間（10畳）、三の間（10畳）と並び、一の間には床の間を構える。これら3室は、現在、オクショイン（奥書院）と総称される。座敷の西には、幅1間の広縁を桁行8間分通しで設ける。東半は北から6畳の居室と押入、居間棟広縁へとつづく3畳間の中廊下、その南に6畳の和室、3畳分の物入、6畳の和室と小部屋を並べる。広縁の西には濡縁が設けられ、主殿の西面濡縁と接続する。居間棟は南北2列に室を配置し、北列西から、床の間を構える座主控えの間（8畳）、次の間（4畳）、控室（6畳）が2室と並ぶ。南列は一間幅の広縁とし、西半（5畳）と東半（4畳と3畳）に分かれる。奥書院と主殿に囲まれた中庭は四周に濡縁



図 210 金剛峯寺大主殿小玄関内部



図 211 金剛峯寺大主殿奥書院座敷棟



図 212 金剛峯寺大主殿奥書院居間棟

をめぐらせ、東南隅に2畳半ほどの便所の下屋を建てる。

なお、枝割は大主殿と同様とし柱心揃えで、1間を4枝に等間で割る。一枝寸法は490mm前後で大主殿と同じく畳割の平面計画である。

軸部 建物周囲よりやや高めた土間に、自然石礎石上に130mm四方の面取り角柱(面内116mm)を立てる。奥書院の側柱の床下では地貫を入れて床下連子を設ける。床上には敷居、鴨居を入れ、成の高い化粧軒を柱上にのせる。座敷棟と大主殿境の中廊下では、切目長押、内法長押を設け、座敷内部は3室とも内法長押と蟻壁長押をまわす。内法長押は座敷と広縁境の広縁側や座敷棟東列の諸室にも設け、釘隠金具をつける。居間棟の広縁は内法長押を設けるが、釘隠金具はつけない。居間棟北列では東の6畳間2室は未調査であるが、その西の座主控えの間及び次の間は内法長押と天井長押を設け、釘隠金具をつける。

西側及び中庭に面する濡縁では、切石の見切石でやや高めた切石敷とし、切石礎石上に縁束を立てる。



図 213 金剛峯寺大主殿奥書院三の間

最南端の大主殿の濡縁との境では擬宝珠の親柱を共有し、大主殿の濡縁よりも一段床を高くする。

各室の造作 座敷棟西半は一間から三の間までの3室構成で、皇族の休憩所として利用された内向きの客殿であり、奥書院の中で最も格式が高い意匠をもつ。各室とも床は畳敷で蟻壁を設け、南北方向の棹縁天井とする。広縁境の建具は腰付障子戸とし、その他の建具は襖で、二の間及び三の間は水墨画の屏風絵を転用した襖を入れる。この水墨画は雲谷等益とその息子の等爾の筆の水墨画と伝えられる。二の間と三の間はいずれも天井から照明器具を1基吊り下げる。

最奥に位置する一の間は、広縁境の建具は二の間、三の間と同様であるが、その他は内法長押より下の壁面及び襖は金箔貼りとする。小壁と蟻壁は土壁漆喰塗に仕上げる。北面の床構えは、西を床の間、東を床脇とし、床柱は他の柱と同径の角柱とする。ともに地板と框を一材とした厚板で透漆塗とする。床脇は違い棚と天袋を備え、違い棚と天袋地板も透漆塗とし、見付には八双金具を付ける。床の間及び床



図 214 金剛峯寺大主殿奥書院二の間



図 215 金剛峯寺大主殿奥書院居間棟広縁

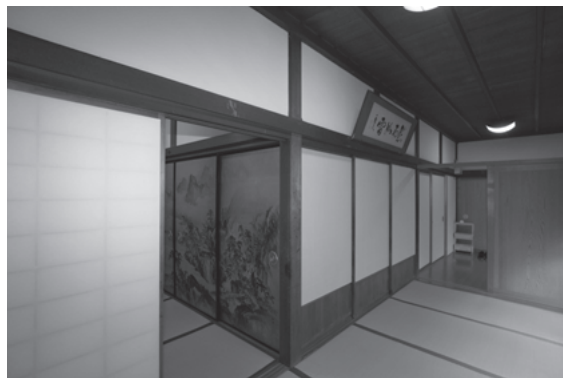


図 216 金剛峯寺大主殿奥書院居間棟広縁

脇の壁面と天袋襖も金箔で仕上げる。床構えは正統的で簡素な全体構成とするが、壁を金箔で荘厳し、地板の厚板や床脇の金具など、細部意匠にもこだわりをみせている。一の間中央やや北東寄りの位置には大主殿の土室と同様の火袋を設ける。炉の規模は台目程度で、四隅に118mm四方の面取り角柱（面内115mm）を立て、腰貫と蟻壁長押で軸部を固める。腰貫上の小壁と蟻壁は土壁漆喰塗とし、炉には蓋板を被せている。大主殿土室の火袋には厨子が収められているが、この火袋は蟻壁長押に釘隠金具を打つ程度で、装飾も少なく非常に簡素な造りとする。一の間天井には西寄りに南北2か所に照明器具を吊り下げている。

座敷棟東列はともに畳敷の個室を並べ、各室とも南北方向に棹を通す竿縁天井とするが、居間棟広縁からつづく3畳の中廊下は、居間棟と連続して東西方向の棹縁天井とする。建具は腰付障子戸を基本とし、先述の3畳の中廊下は居間棟との境を襖、北を後補の襖壁で閉ざす。東列最北の部屋は近年内装を改修している。

座敷棟西の広縁は桁行8間分の一室空間で、東西の両柱筋は腰付障子戸とする。南面と北面はともに引違いのスギ板戸とし、天井は南北に棹を通す棹縁天井で、中央に照明器具を1基吊り下げる。その西にある濡縁は、大主殿の濡縁高欄との接続部は擬宝珠の親柱を立てるが、その他は跳高欄とし、南端から4間目は途切れている。後述のように、この位置の東柱頭部にはホゾ穴が残り、当初は外部に木階が設けられていたことがわかる。中庭まわりの濡縁は簡素な高欄を設ける。座敷棟の南から2列目の柱筋



図 217 金剛峯寺大主殿奥書院居間棟座主控えの間

に板戸を設けて区切っており、敷板の向きも変えている。この東側は高欄が途切れており、中庭に降りる木階を設ける。

居間棟南列の広縁東半は当初8畳の一室空間で、近年東端の3畳を板戸で間仕切り、床をフローリングに改修している。座主控えの間の南に位置する広縁は、内法長押に主室と同じ後述の釘隠金具を用い、東の広縁境は後述の座主控えの間と一連の山水面の襖を入れる。座主控えの間次の間は広縁との境を腰付障子戸とするが、その他3面は山水面を描いた襖とし、内法長押を設けて釘隠金具を打つ。天井は東西に棹を通した棹縁天井とし、中央に照明器具を1基取り付け。座主控えの間は南面を腰付障子戸、その他は襖とし、先述の山水面と一連の襖絵を描く。内法長押には釘隠金具を打ち、北面には西に床の間、東に床脇を構え、床柱は絞り丸太とする。床の間の框と床板は一材で透漆塗とする。床の間の西・北壁は襖絵と一連の山水面を描き、床脇との境はチングリを設ける。床脇は上部に天袋、下部は東に寄せて地袋棚を設ける。床脇地板や地袋棚の壁板、天板、天袋の地板も透漆塗で仕上げ、天袋及び地袋棚の襖絵には草花が描かれる。床脇北背面はガラス窓とし、後述のように、壁貫の痕跡が残ることから、当初は壁で仕切られていたことがわかる。天井は東西方向に棹を通す棹縁天井で、中央に照明器具を1基吊り下げる。座主控えの間は大主殿上段や座敷棟一の間床の間構えとは異なり、絞り丸太の床柱など、嗜好に富んだ意匠をみせる。座敷棟の一の間よりもさらに内向きな空間としての意匠性がうかがえる。

軒まわり 座敷棟西面の軒は二軒疎垂木で、垂木



図 218 金剛峯寺大主殿奥書院居次の間

は棒垂木とする。垂木上には化粧木舞を渡して化粧裏板を張り、大主殿と同じ構成とするが、軒の出は大主殿よりもやや浅い。中庭に面した座敷棟東面や居間棟は一軒疎垂木とし、垂木は棒垂木とする。

座敷棟北面の妻飾は破風拝みに雲彫刻の鰭付懸魚を下げ、妻面は当初狐格子とするが、西半は改修されている。座敷棟一の間火袋直上部分には袴腰付で切妻造南北棟の越屋根を突出させる。大主殿と同様に、漆喰で塗り籠めた煙の吹き出し口を桁行方向に突出させ、その他の壁面は土壁漆喰塗とする。また奥書院の屋根面には大主殿と同様に、昇降用及び命綱ともなる鎖を設置し、屋根に上がるための梯子が中庭の西南隅に立てかけられている。

iii 指図・絵図

指 図 金剛峯寺大主殿の姿を伝える指図として、慶応元年（1865）の銘をもつ「青巖寺差図総図」（PL. 56）、万延元年の火災の後に作成された「青巖寺間取図」（PL. 57）、明治44年（1911）に製作された大主殿の家相図が残されている（PL. 58）。

青巖寺差図総図 「青巖寺差図総図」は青巖寺境内の建物全体の平面図を描いた指図である。大主殿及び奥書院は、庫裏背面側及び東方を除けば、概ね現在の姿と一致しており、文久2年再建後の姿を描いたものとみられる。後述する。明治44年（1911）の金剛峯寺建屋平面図の下図とも一致する。

青巖寺間取図 「青巖寺間取図」は裏書及び袋書に「故青巖寺間取図」とあり、加えて袋書には「萬延元年庚申年冬十月焼失後図之」とある。大主殿の間取りは、小玄関を設けない、西面の階段位置、庫裏の火袋の位置が異なるなどの相違点はあるものの、概ね現在の間取りと一致する。一方で、大主殿北面の「縁側」を挟んだ北方、つまり奥書院部分は大きく異なる。後ほど、『紀伊続風土記』の記述と照らし合わせ、本図の性格を検証したい。

金剛峯寺建屋平面図 金剛峯寺建屋平面図は、辻本彦兵衛により作成された大主殿及び奥書院の平面図に基づき、大和国生駒郡三郷村大字勢野の吉里田興道が、明治44年（1911）に作成した家相図である。辻本は、明治以降の高野山の諸建築の造営に携わった大工である。本図は、庫裏背面の増築を検討した

ものである。当該部が、この時の改修によることを示す。また小玄関より東方は1間分の軒下を利用したとみられる部屋が設けられており、現在1階に入口を設け、2階を居室とする増築部も描かれておらず、これ以降の増築であることが明らかになる。

また奥書院は座敷棟の北背面に広縁から廊下が延びて便所や風呂を備えた付属屋が描かれ、これら水まわりの付属屋が建替えられている。居間棟の北面にも便所や数室の部屋が描かれており、増改築が加えられている。現状に改修した時期は明らかでないが、昭和後期から平成に入ってから改造であろう。先述の通り、座主控えの間の床の間まわりの改変は、この背面側の増改築工事と同時期と考えられる。その他には居間棟広縁の一部フローリング敷への変更や間仕切りの新設などが挙げられるが、奥書院の軸部を改変するような大きな改造は見受けられない。

近年では、平成の大修理の一環で、平成9年（1997）に居間棟の北面屋根を檜皮葺から銅板葺に葺き替えている。先述の座敷棟妻面の改修もこの時であろう。

絵図にみる大主殿及び奥書院 また前述の通り、江戸時代の絵図から大主殿の描写が確認できる。

大主殿は一貫して、入母屋造の東西棟建物と南北棟建物が東西に配され、一連の建物として接続する。また南面には大玄関とみられる突出部が附属する。先に見た万治元年以前の絵図では、この突出部は唐破風屋根であり、南面に1カ所だけ描かれており、大玄関か客殿南面に別の玄関があったのか判然とはしない。しかしながら、元禄6年『高野山壇上并寺中絵図』では客殿南面の軒唐破風と大玄関の突出部が明瞭に確認でき、現在の大主殿の南面の建物構成はここまで遡ることができる。加えて、元禄6年の絵図からは客殿及び庫裏の南面に縁が描かれており、慶安3年の大火以前の建物とその後の再建の建物との違いかもしれない。慶安3年や万延元年の大火など度重なる火災により焼失したものの、少なくとも慶安3年大火後に再建された大主殿の配置構成や南面の意匠が、万延元年の焼失以後も継承されているといえる。ただし、江戸時代のいずれの絵図にも小玄関は描かれておらず、これは文久2年の再建時に新設された可能性も指摘できる。

一方、奥書院は宝永3年(1706)製作の『高野山壇上寺家絵図』(金剛峯寺蔵、図176)に、大主殿の北西隅に北に延びる南北棟建物が描かれ、これが奥書院を図示したものと考えられる。この絵図では入母屋造の屋根で、東面に濡縁をもつように描かれる。また江戸後期に製作された『高野山全山及び周辺の絵図』(海照寺蔵、図178)でも大主殿の北西隅に入母屋造の南北棟建物が描かれている。同じく江戸後期に製作された『高野山全山及び周辺の絵図』(持明院蔵、図179)でも同様の位置に別棟の建物を描く。

以上より、奥書院に相当する建物には、南北棟建物と東西棟建物の2種類が確認できる。史料の制約もあり明確ではないが、大主殿と奥書院の現在の位置関係は18世紀初頭頃まで遡る。

また、明治24年製作の『高野山寺院明細帳』によれば、奥書院のうち座敷棟は「座敷」と表記され、桁行9間半、梁間5間で現在と同規模である。居間棟は「居間」に該当するが、桁行5間、梁間6間と記され、現状とはやや規模が異なる。しかしながら

前述の明治44年作成の金剛峯寺建屋平面図では、居間棟の北面にさらに便所などが描かれ、この家相図では梁間6間であることが判明し、後世に増改築が加えられていることがわかる。つまり、現在のように入母屋造の屋根で、東面に濡縁をもつように描かれる。また江戸後期に製作された『高野山全山及び周辺の絵図』(海照寺蔵、図178)でも大主殿の北西隅に入母屋造の南北棟建物が描かれている。同じく江戸後期に製作された『高野山全山及び周辺の絵図』(持明院蔵、図179)でも同様の位置に別棟の建物を描く。

iv その他の改修履歴

大主殿では建具等の入れ替え修繕や壁漆喰の塗り直しなど部分的な修繕はあるものの、内部各室の改修は非常に少ない。

客殿西面縁のスロープは戦後(昭和後期か)に新設されている。近年では平成8~10年にかけて大規模な屋根葺替工事が4期にわたっておこなわれ、檜皮葺の葺替えや天水桶の新調などがなされた。

奥書院は先述の通り、座敷棟西面の濡縁にはかつて中央に木階が設けられていた。また中庭まわりの濡縁の高欄はすべて後世に取り替えられ、縁葛や縁束、木階も新材とみられる。

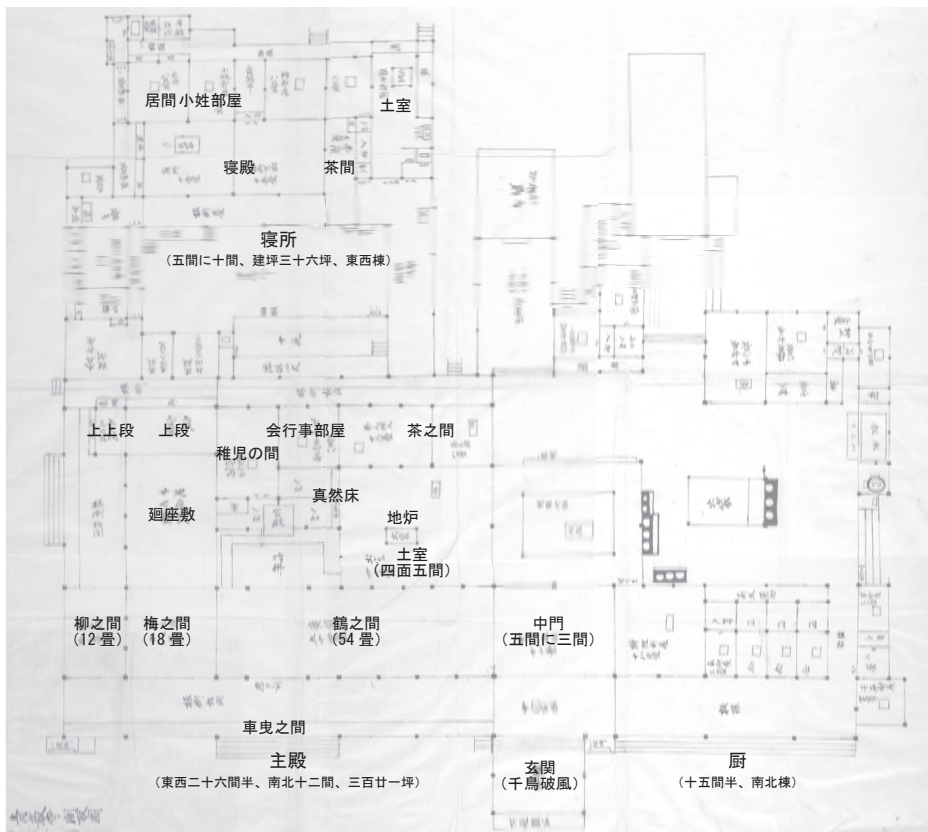


図 219 『紀伊続風土記』に記された前身建物の室名など(「青巖寺間取図」(金剛峯寺蔵)に加筆)

v 『紀伊続風土記』にみる前身建物

続いて、『紀伊続風土記』高野山之部から大主殿及び奥書院の間取りについて考察を加える。『紀伊続風土記』高野山之部は天保9年(1838)には脱稿しており、高野山内の建物については概ね19世紀初頭頃の状態を反映しているとみられる。また、『紀伊続風土記』には、「主殿」について以下のように記す。主殿は東西26間半、南北12間、建坪は321坪半で、「廻座敷」、「上段」、「上上段」があり、「柳之間」は12畳、「梅之間」は18畳、「鶴之間」は54畳、「土室」は「四間五間」で、土室の裏に「会行事部屋」、「御兒(ちご)部屋」、「茶之間」が並ぶ。客殿の正面縁の外に幅2間の木階があり、木階の底には唐破風がある。また杉縁は二重で正面側が2寸斗低く、この場所を「車曳の間」という。「玄関」は千鳥破風、「中門」は「五間に三間」、式台は「二間に三間」、「厨(庫裏)」は15間半の南北棟建物であるという。

土室には「地炉」つまり囲炉裏が設けられ、火袋の東側懸楣の上に弁財天を安置するという。土室の西にある2間の床は「真然床」と呼称され、常に愛染明王の尊影を描いた掛軸をかけていたとする。また古老の一伝として、この真然床の位置にかつて真然廟があったという。

奥書院に相当する建物として「寝所」があり、次のように記される。「五間に十間、建坪六十三坪。東西棟建物。外に二間に一間半の寺務の小斎あり」。また「家作」の記事では、当時の高野山内の主殿の様子を記すなかで、「寝殿」として「寝殿一宇南面。此中に寝殿。居間。土室。茶間。小姓部屋などあり」と記され、「寝所」及び「寝殿」は同じ建物を指すとみられる。

以上の記述は、前述した「青巖寺間取図」記載の間取りと一致する。万延元年の火災の後に作製されたと記される指図ではあるが、焼失以前の姿を示しているとみてよいだろう。つまりは延宝5年(1677)に再建された建物である。

現在の建物と比較すると、主殿及び厨が、現在の主殿と概ね一致するのに対して、寝所は建物規模ほぼ同等ながらも、棟の方向が異なっており、文久2年の再建にあたり改変されたものとみられる。

vi まとめ

金剛峯寺は豊臣秀吉によって創建された青巖寺の建物を引継ぎ、現在は高野山真言宗の総本山として山内を統括する中心的役割を担う。

山内の周辺寺院にも客殿と庫裏を並列する形式は見受けられる。間取りや、天水桶と煙出しの越屋根を備える高野山独自の風習を残す屋根形式、大玄関や小玄関、大規模な庫裏など、伝統的な高野山の本坊の形式を非常によく留める。万延元年(1860)の火災の後に、真先に造営され、文久2年に再建されたことが棟札からも明らかである。

客殿内部では後世の改変も少なく、中門から大広間、上段の間に上段、上々段と、格式高い正統的な書院造の形式を留め、文久2年の再建ではあるが、それ以前の建物規模や間取りを踏襲しているとみられる。庫裏内部は、巨木を用いた梁組や屋根までつづく煙抜けの大きな煙道は圧巻である。竈や天井から吊り下げられた食物保存用の台など、庫裏本来の機能や様式を残している。

奥書院は北背面の増改築を除いて、軸部や間取りに改修はなく残りもよい。座敷棟一の間には高野山独自の暖房施設である火袋を備え、装飾を抑えた簡素な意匠とする。皇族の休憩所として、派手さを抑えた洗練された構成美を造る。大主殿客殿の上段の間や上段、上々段が表向きの性格をもつものに対して、奥書院は内向きの性格をもつ。大主殿と一連の造営と考えられ、江戸初期の書院造の系譜を良く残す貴重な建物といえる。

大主殿及び奥書院は、高野山の寺院客殿に共通した間取りを有しながら、圧倒的に大規模で、かつ意匠性も極めて高い。学侶方の中心寺院であった青巖寺に相応しい大規模客殿であり、非常に高い価値を有している。
(福嶋啓人)

(4) 真然堂 (PL. 7・8)

構造形式 桁行3間、梁間3間、正面1間向拝付、宝形造、檜皮葺

建立年代 寛永17年(1640)(棟札)

概要 真然堂は、大主殿背面の山腹に南面して建つ。桁行3間、梁間3間、宝形造、檜皮葺、正面1間向拝付で、四周に縁を巡らす。高野山第2世の真然大徳坐像を祀る厨子を安置する。『高野春秋』寛永17年(1640)8月11日条に「青巖寺真然堂上棟、々札書面檢校法印弘翁、其下、[無量寿院阿闍梨澄栄、宝性院 入政算、] 裏書御修理奉行、[学侶方正龍院、行人方梅院、] 大工、[藤原朝臣藤左衛門家吉、]」とあり、ここに記された棟札と考えられるものが、棟東に打ち付けられていたことが、昭和63年・平成元年におこなわれた保存修理工事(以下、平成修理と呼ぶ)により明らかにされている(棟札・墨書等No.2)。

後述するように頭貫木鼻の拳鼻の形状は、17世紀中期の様相を示しており、寛永17年の建立と考えられる。

真然堂は昭和40年(1965)に和歌山県指定文化財とされ、上述した平成修理に際しては、設計監理をおこなった和歌山県文化財センターの編集により『和歌山県指定文化財 金剛峯寺真然堂修理工事報告書』が刊行されている。本稿では、現地調査により現況を述べ、あわせて修理工事報告書の記述に基づいて、変遷とその根拠について整理する。

平面 正側面ともに総間を16尺5寸、42枝(約5,000mm)とし、正面及び背面を中央間16枝、両脇間13枝、両側面を3間5尺5寸(約1,667mm)、14枝等間、割り付けており、1枝寸法は119mmである。方16尺5寸、両側面5尺5寸、14枝等間を定めた上で、正面及び背面の中央間を両脇間より3枝分広

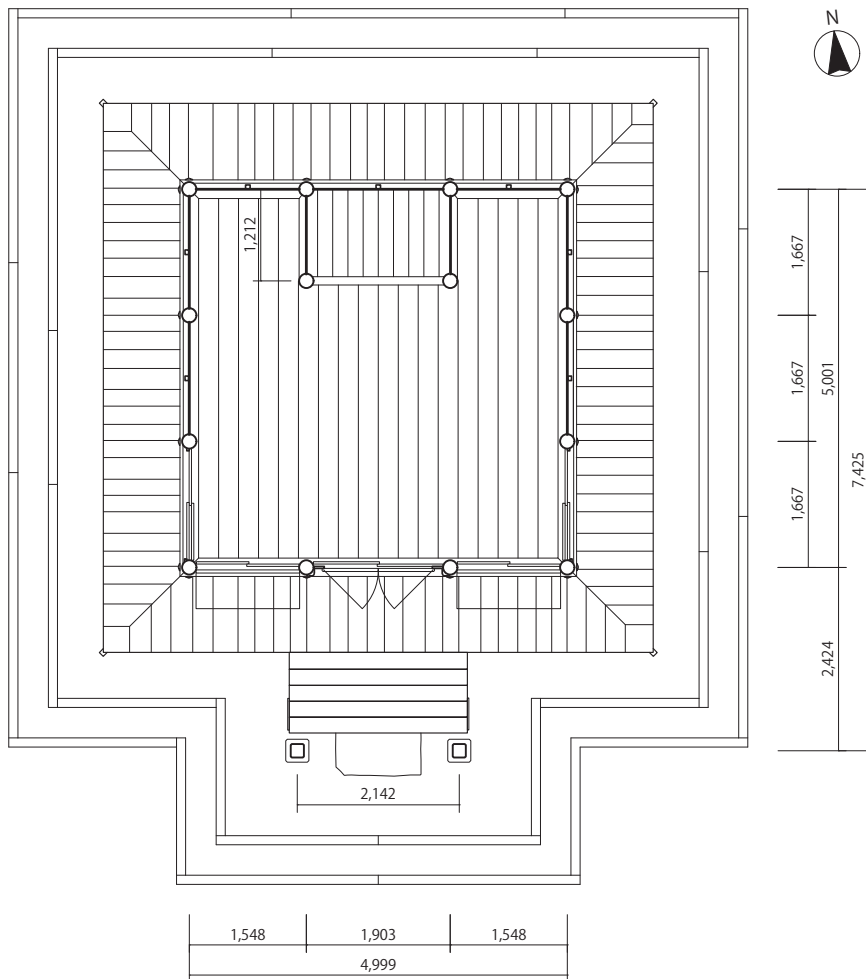


図 220 金剛峯寺真然堂平面図 1:100

く計画したとみられる。内部は背面中央間から正面側に4尺(1,212mm)の位置に柱を立て、仏壇の来迎柱とする。向拝柱間は18枝と、正面中央間よりさらに2枝分広くとる。正面柱筋から向拝柱の出は、8尺5分(2,439mm)である。正面中央には幅を向拝柱心にあわせた5級の木階を設ける。

側まわり 基壇は、一辺約6.2mの正方形平面をもち、高さは約25cmで、外装として長径約50cmの砂岩及び変成岩を積む。基壇上に、砂岩及び変成岩の自然石の礎石を据え、基壇の周囲に砂岩及び変成岩製の縁束礎石を据える。柱は、頂部に粽をもつ直径197mmの円柱である。床下は丸く造らず、八角とし、足固貫・内法貫・頭貫で固める。頭貫は、円形下巻の渦を彫刻した拳鼻をもつ。組物は、絵様繰形をもつ実肘木付の出三斗で、肘木には面取りを施す。中備は、絵様繰形をもつ実肘木付の間斗束で、束は撥束とする。

柱間装置は、正面中央間が幣軸付棧唐戸で、その内部を腰高の明障子とし、正面両脇間が藪戸で、その内部に子持ち障子の明障子をいれる。両側面の正



図 221 金剛峯寺真然堂基壇・縁まわり

面側脇間は横舞良戸の引違戸で、内部を片引の明障子とする。両側面中央間及び背面側脇間と背面は横板壁で、柱間の中央に間柱を入れる。

軒まわりは二軒半繁垂木で、地垂木は面取りを施し、反り増しが付き、飛檐垂木は糸面取りを施し、抜き・反りが付く。化粧隅木は、地隅木と飛檐隅木を別木とし、ともに面取りを施す。飛檐隅木は鼻先を大きくした高野山特有の形状とする。

縁は切目縁で、礎石の上に面取り角柱を立て、縁葛・隅叉首を組み、主屋の柱に縁板掛を取り付け、縁板を張る。

金具は、内法長押の釘隠しに六葉金具を、切目長押の釘隠しに唄金具を用いる。どちらも青铜製の金箔押し仕上げである。

向拝は、花崗岩製方形切石の礎石に、同じく花崗岩製方形切石の礎盤を据え、一辺178mm角(面内152mm)の柱を立て、円形下巻の絵様繰形をもつ拳鼻付の頭貫で繋ぐ。組物は、絵様肘木をもつ連三斗で、手挟みを介して、垂木を受ける。肘木には面取りを施し、手挟みにはやや偏平な波形の繰形を施す。こ



図 222 金剛峯寺真然堂組物



図 223 金剛峯寺真然堂向拝



図 224 金剛峯寺真然堂向拝組物

の手挟みは平成修理時に失われていたものを、東大寺行基堂・長岳寺大師堂、転法輪寺本堂、金剛峯寺山王院本殿をもとに、復元したものという。実肘木のうち、正面方向の繰形のみ拳鼻状に造り出しているのは特徴的である。

小屋組 来迎柱と背面側柱の奥行方向に繫梁を架け、来迎柱前面から正面側柱に大梁をかける。大梁と繫柱の上には、地垂木尻を受ける井桁、母屋束踏となる井桁をそれぞれ組む。

屋根 屋根は、宝形造、檜皮葺で、裏板付二重軒付けとし、青銅製露盤・伏鉢・宝珠をのせる。

内部 内部は一室とし、背面中央間に寄せて仏壇を構える。柱を地長押・内法長押・天井長押で固め、天井長押の上に折上小組格天井を張る。格子は猿頬面取りを施す。仏壇内部は小組格天井とする。床組は、奥行方向に大引きを各柱間に入れ、間口方向に根太を各間三分に入れ、床板は拭板敷で奥行方向に張る。

変遷 現状の背面中央間に寄せて仏壇を構える形式は、平成修理により、当初形式に復されたものである。平成修理では、本尊の真然坐像は万治3年(1660)に作成されており、おそらくこの頃、脇間も含めた3間の仏壇に改造し、漆塗・極彩色を施した欄間を嵌め、両脇間を花頭窓状にしたとみる。さらにこの後、軒より上部を解体し、部材を取り換えると同時に、向拝も組物及び縫破風板以外の部材も取り換えられている。さらに昭和13年には、背面中央間軒下を1尺分内部に取り込んだとする。

また平成修理に際しては、あわせて発掘調査もおこなわれ、現存する真然堂の基壇を含めてA～Dの4時期の遺構が確認された。A期は台状の墳墓で、1辺約3.6m、残存高さ約0.6mで、中央部墓坑を有する。蔵骨器である緑釉四足壺の様式から9世紀後半に築盛されたと考えられる墳墓で、寛平3年(891)に入寂した真然大徳の墓と考えられる。B期は、A期の基壇を掘削し、蔵骨器を取り出したうえで土盛りして、基壇としたものであり、天正元年(1131)に覚鑿が高野山復興のために建立した大伝法院の多宝塔基壇とみられる。この際には、A期の遺構の西半を削ぎり、位置を東方へとずらしている。C期はB期

の基壇の上にさらに土盛りを施したもので、14世紀後半頃に再建された塔の基壇とみられる。その後、D期の遺構、すなわち、現存する真然堂が建てられるに至った。

まとめ 真然堂は、方三間、宝形造、檜皮葺で内部を一室とした簡素な建物である。棟札により寛永17年に建立されたことがわかり、幾度も火災を繰り返してきた金剛峯寺にあって、現存する建立年代が明確な青巖寺の建物として、最も古い。向拝の組物及び縫破風板以外及び主屋の軒より上部は、後世の改修により部材が更新されているものの、当初の形式を伝えている。

金剛峯寺第2世の真然の墳墓、覚鑿建立の伝法堂院の多宝塔、青巖寺真然堂という真言宗総本山にとって極めて重要な位置づけを経た仏堂であり、これらの経緯を裏付ける地下遺構とともに、さらなる保護措置がとられるべき貴重な遺構である。(鈴木智大)

主要参考文献

『和歌山県指定文化財 金剛峯寺真然堂修理工事報告書』(総本山金剛峯寺、1990年)。

『金剛峯寺真然廟』(総本山金剛峯寺、1990年)。



図225 金剛峯寺真然堂中備墓股

(5) 護摩堂 (PL. 8・9)

構造形式 桁行3間、梁間3間、正面1間向拝付、宝形造、檜皮葺

建立年代 文久3年(1863)(棟札)

概要 護摩堂は、大主殿背面の山腹、真然堂の西隣に南面して建つ。桁行3間、梁間3間、宝形造、檜皮葺、正面1間向拝付で、正面及び両側面に縁を巡らす。背面は軒下を内部に取り込み仏壇とし、両側面奥寄り2間は縁の上に位牌壇を突出させる。仏壇中央には不動明王を祀り、室内では護摩法要が執り行われる。小屋梁の下面に打ち付けられた棟札及び壇上伽藍経蔵に納められた棟札により、文久3年(1863)6月に、第376世座主を務めおえた増應が寄付し、青巖寺護摩堂として再建されたことがわかる。正大工を伊都郡大野村の岡田元次郎光高が、助大工を若山(若山)住吉町の小田政右衛門重孝が務めた。

平面 正側面ともに総間が19尺7寸(5963mm)、48枝で、正面及び背面を中央間18枝、両脇間15枝、両側面を3間、16枝等間で、割り付けており、1枝

寸法は4尺1寸(124mm)である。1枝寸法を4尺1寸に定めた上で、方48枝、両側面を16枝等間とし、正面及び背面の中央間を両脇間より3枝分広く計画したものとみられる。内部には柱を立てない。向拝柱間は、正面中央間と柱筋を揃え、正面柱筋から向拝柱の出は、9尺(2,727mm)である。正面中央には幅を向拝柱心より広くとった5級の木階を設ける。**側まわり** 基壇は、縁下に納まる正方形平面で、高さは約50cmである。外装として長径約50cmの砂岩及び変成岩を積む。基壇上に、砂岩及び変成岩の自然石の礎石を据え、基壇の周囲に砂岩及び変成岩製の縁束礎石を据える。柱は、頂部に粽をもつ一辺179mm(面内163mm)の四面取り角柱で、足固長押(後補)・切目長押・内法長押・内法貫・頭貫・台輪で固める。頭貫は、円形上巻の渦を彫刻した拳鼻をもつ。組物は、絵様繰形をもつ実肘木付の平三斗で、中備は設けず、簡素である。

柱間装置は、正面中央間が幣軸付棧唐戸で、その内部を腰高の明障子とし、正面両脇間が半藪戸で、

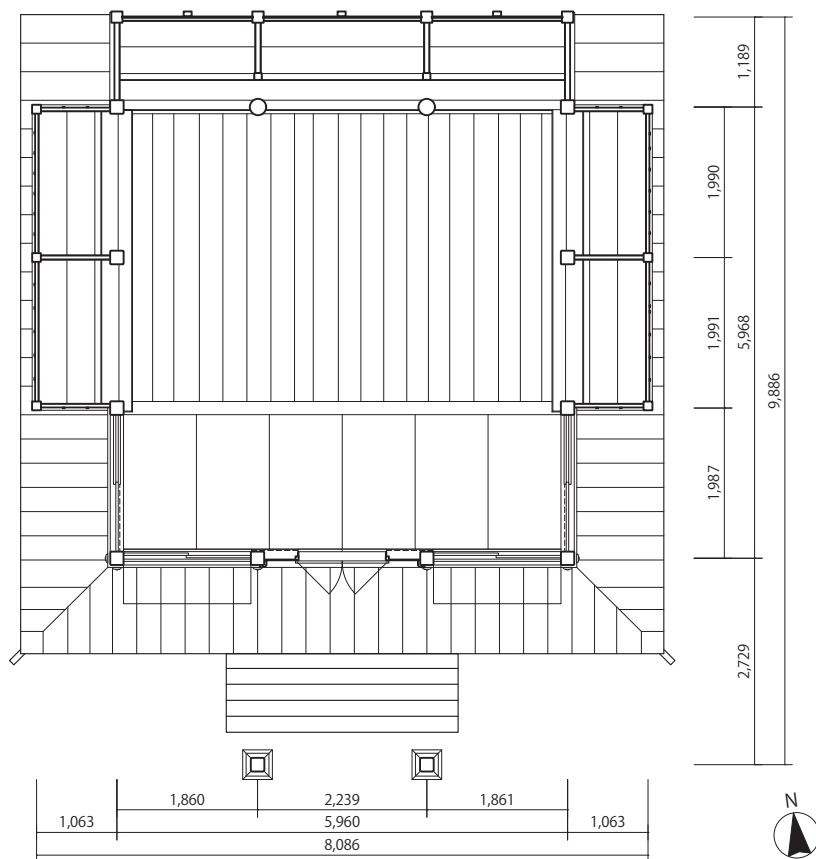


図 226 金剛峯寺護摩堂平面図 1:100

その内部を明障子とする。両側面の正面側脇間は横舞良戸の引違戸で、内部を片引の明障子とする。背面の仏壇は横板張りで、柱間の中央に間柱を入れ、一方、側面の位牌壇は縦板張りとする。

軒は二軒繁垂木で、反りをなく、飛檐垂木のみ抜きをもつ。化粧隅木は、地隅木と飛檐隅木を別木とし、ともに面取りを施す。飛檐隅木は鼻先を大きくした高野山特有の形状とする。

縁は切目縁で、礎石の上に面取り角柱を立て、縁葛・隅叉首を組み、主屋の柱に縁板掛を取り付け、縁板を張る。

金具は、内法長押の釘隠しに六葉金具を、切目長押の釘隠しに唄金具を用いる。どちらも青銅製で、内部の六葉金具には金箔押しが確認できる。

向拝は、花崗岩製方形切石の礎石に、同じく花崗岩製方形切石の礎盤を据え、一辺 180 mm 角（面内 152 mm）の几帳面取り角柱を立て、象鼻をもち、円形上巻の絵様線形を施す虹梁形頭貫で繋ぐ。組物は絵様肘木をもつ連三斗で、牡丹の彫刻を施した手挟みを介して、垂木を受ける。虹梁状頭貫上には、雲に鳳

凰の彫刻を据える。

小屋組 正背面の側柱間に大梁をかけ、さらに大梁間に梁を渡し、内転びをもつ四天束を立て、飛貫・台輪で固め、これらで母屋桁を受ける。

屋根 屋根は、宝形造、檜皮葺で、裏板付二重軒付けとし、青銅製露盤・伏鉢・宝珠をのせる。

内部 内部は一室とし、柱を立てない。背面の仏壇は、背面中央間の側柱 2 本を丸柱とし、金箔を張り、柱頂部に極彩色の置上彩色を施して、来迎柱とする。柱間には腰框と虹梁形頭貫を入れ、側柱筋の背面に、角柱を立て、切目長押で留めて、上壇とする。仏壇及び虹梁形頭貫は黒漆塗とし、面や絵様に赤漆をみせる。虹梁は上巻楕円形の渦の絵様を施す。側面の奥寄り 2 間は、背面の仏壇と同高で奥行の深い腰長押を巡らし、中央間に 2 段、奥寄りの脇間に 1 段の位牌壇を構える。ただし、側柱に残る痕跡から、位牌壇は後補によるもので、奥行の深い腰長押も現状よりも 243 mm 高い位置に取り付けていたことが明らかで、おそらく八祖棚を設けていたものと考えられる。組物は内部を出組とし、天井桁を受

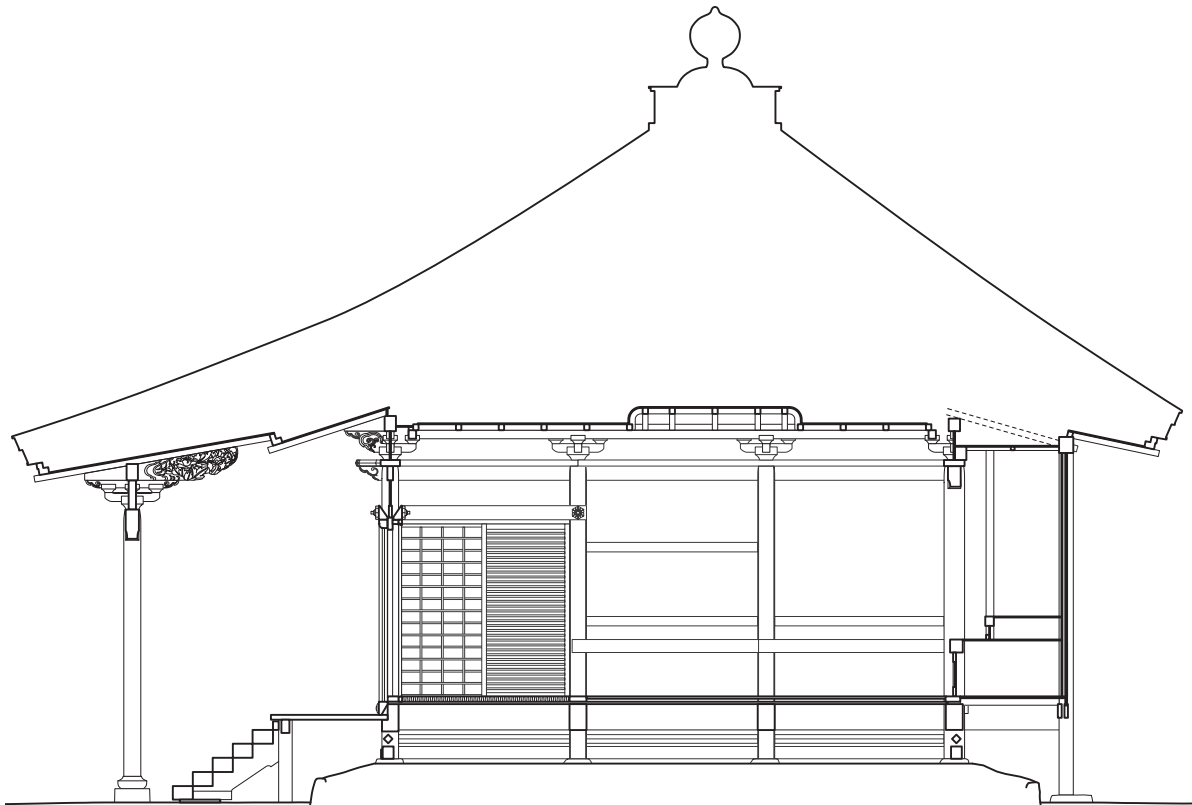


図 227 金剛峯寺護摩堂断面図 1:80

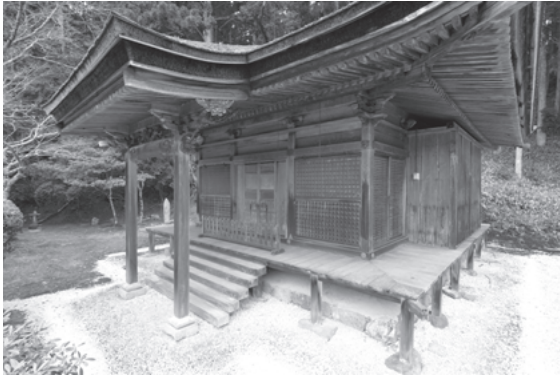


図 228 金剛峯寺護摩堂正側面側まわり



図 229 金剛峯寺護摩堂組物



図 230 金剛峯寺護摩堂向拝見上げ



図 231 金剛峯寺護摩堂向拝手挟み



図 232 金剛峯寺護摩堂虹梁形頭貫上彫刻



図 233 金剛峯寺護摩堂向拝組物



図 234 金剛峯寺護摩堂向拝虹梁形頭貫絵様



図 235 金剛峯寺護摩堂基壇と縁

ける。背面の仏壇上にのみ、中備の位置に彫刻を据える。中央間は「波にウサギ」、両脇間は「波に蓮」である。天井は折上げ格天井で、方12マスに区切った格天井の奥寄りに1マス寄せた位置の方4マスを折り上げる。床は奥寄り2間は拭板敷、手前1間は畳敷とし、間は側柱幅の無目敷居で区切る。

まとめ 護摩堂は方三間、宝形造、檜皮葺で内部を一室とした簡素な建物である。隣接する真然堂と同じく、一室の内部空間を持ちながらも、背面軒下を内部に取り込んだ仏壇を当初から計画する点や、



図 236 金剛峯寺護摩堂仏壇中央間見上げ



図 237 金剛峯寺護摩堂仏壇中央間虹梁形絵様

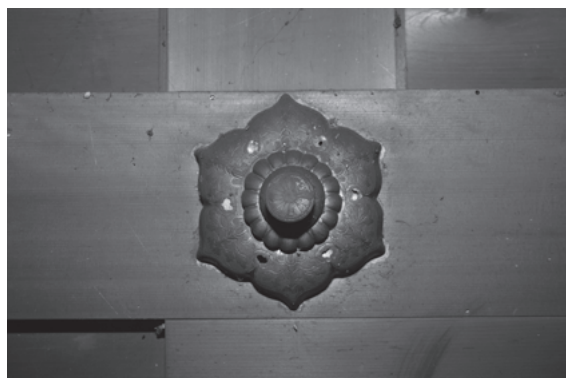


図 239 金剛峯寺護摩堂釘隠し六葉金具

後世の修理で変更されたものの八祖棚を両側面に構える点などは、時代的な特質といえるだろう。

文久3年(1863)と壇上伽藍及び青巖寺の幕末の一連の再建のなかでも比較的遅い時期に、座主を務めおえた増應が自ら寄付により再建したもので、ほかの多くの建物が徳川將軍家を願主としていたのと異なり、青巖寺の財政的基盤の変化を示唆する。

以上のように、護摩堂は、青巖寺ひいては高野山の方3間堂の特質を引き継ぎながら、時代的な特質を有する建物であり、青巖寺の幕末再建のあり方を示す仏堂として、高く評価できる。 (鈴木智大)



図 238 金剛峯寺護摩堂小屋組、棟札打ち付け状況

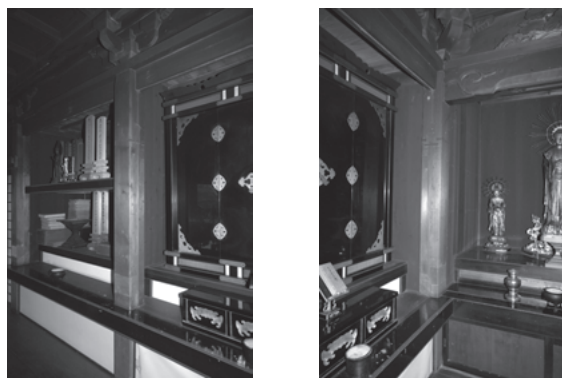


図 240 金剛峯寺護摩堂側柱痕跡

(6) 山門 (PL. 9・10)

構造形式 一間一戸四脚門、切妻造、檜皮葺

建立年代 延宝8年(1680)『高野春秋編年輯録』

立地と建立年代 山門は、大主殿の正面に南面して建つ、大型の四脚門である。一間一戸で、切妻造、檜皮葺の屋根を持ち、両脇にかご塀が接続する。現在の建物は、『高野春秋編年輯録』延宝8年(1680)11月条に「青巖寺上門落成矣」とあり、虹梁形頭貫の絵様繰形も17世紀後期の先進的な様相を示すことから、延宝8年の建立とみる。近社寺調査など従来は、大主殿など多くの建物を焼失した万延元年(1860)の火災で焼失したとみていたが、この際の表門の罹災は部分的なものと考えられる。『高野春秋編年輯録』には、慶安3年(1650)に五之室谷からの火災により青巖寺が焼失し、延宝5年(1677)に伏原村(現・橋本市)の平右衛門を棟梁として主殿・雑舎を上棟したことが記されており、山門の再建が遅れたことがわかる。

構造 葛石をめぐらし、ごく低い土壇を設ける。その内側に切石の礎石を置いて、径706mmの親柱を立て、唐居敷を付ける。その前後に切石の礎石、石製礎盤を置いて、方405mm(面内336mm)の、上下に

粽を付けた几帳面を取った角柱の控柱を立てる。親柱の間を冠木で繋ぎ、親柱と控柱の間は女梁を用いずに、端部に木鼻を突出させた男梁で結ぶ。控柱の間は木鼻を突出させた虹梁形頭貫で固めている。

虹梁形頭貫の絵様繰形は、木瓜形の渦に若葉を付けたもので、大主殿など幕末再建の建物と比べて、線が細く、さらに宝永2年(1705)建立の大門の絵様よりもさらに線が細い。17世紀後期の先進的な様相とみる。また背面、つまり大主殿側の虹梁絵様の渦のなかには、焦げが確認できる。これは万延元年の火災により類焼したもので、その後、材の表面を削ったものの、繰形のなかにも、焦げが残ったと考える。

親柱には実肘木付きの平三斗を、その上には板臺股を置く。板臺股の位置には棟と平行させて虹梁形の横材を入れて、端部は木鼻を突出させる。その横材下端を、親柱上の平三斗から肘木を一手分出し、斗を置いて受けている。その反対は肘木を延長し、拳鼻につくる。

臺股の上には大瓶束を立て、その上に大斗、棟の方向と平行に平三斗を置き、通肘木、斗を載せ、実肘木を介して、化粧棟木を受ける。控柱上にも大斗

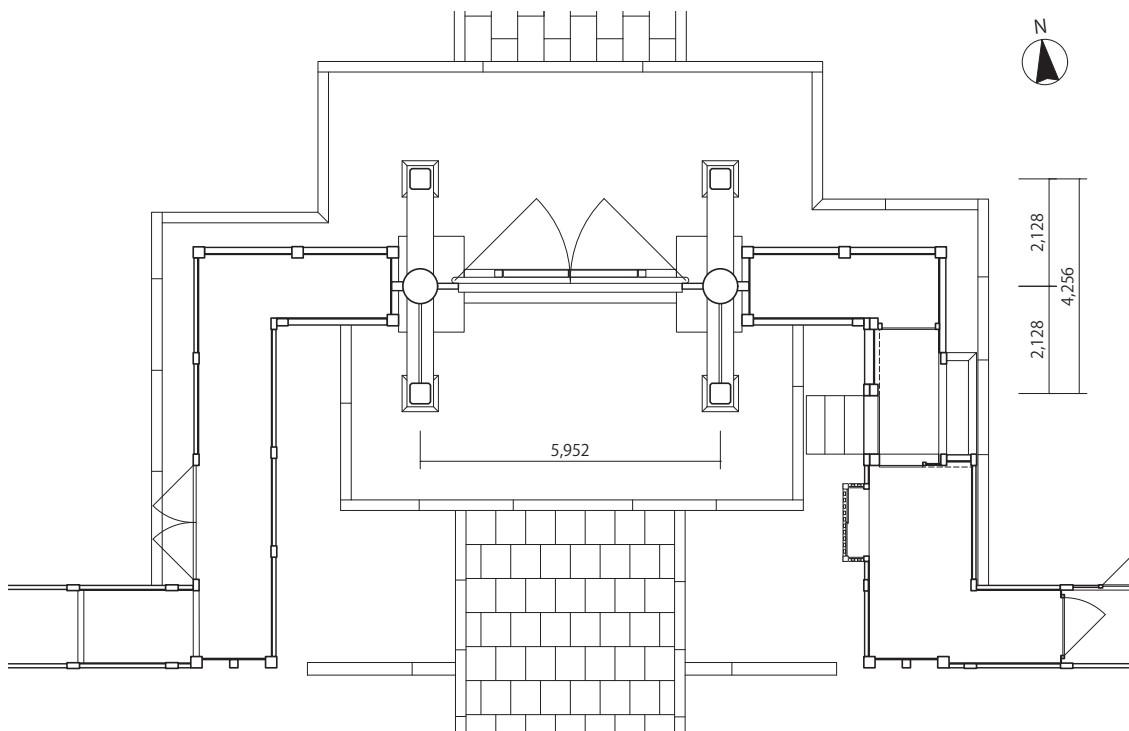


図 241 金剛峯寺山門平面図 1:150

と杵に組んだ連三斗を置く。その上には実肘木を置いて桁を受けるが、親柱側の海老虹梁の下部については、先端をのびし拳鼻につくる。親柱上の大瓶束から、象の形に彫刻した持ち送りを突出させ、その上から控柱上の桁に向かって海老虹梁を架ける。親柱筋と控柱筋の間、海老虹梁上に絵様肘木を載せ、中間桁を受ける。また、正背面ともに、控柱に半長押付きの腰長押状の部材を打ち付け、親柱に挿している。

中備は控柱間の虹梁形頭貫の上に実肘木付きの杵肘木を、親柱間の虹梁形の横材に、正背面に拳鼻を付けた平三斗を置く。これら、中備の上でも親柱や控柱の上部と同様の架構が組まれている。

軒は二軒繁垂木で地垂木が大きく反るが、飛檐垂木は直材である。屋根は檜皮葺で、大棟は箱棟とし、両端に鬼板を付ける。破風には三花懸魚を吊る。

扉は棧に金具を打ち付けた棧唐戸で、唐居敷上に

付けられた藁座と、冠木の間に吊りこまれる。唐居敷の間には蹴放を入れている。

彫刻と飾金具 山門には彫刻や金具が多数取り付けられている。正面の控柱間の虹梁形頭貫の下端には持ち送りが入れられ、頭貫から突出した木鼻と一体になって、狻猊とみられるが丸彫りされる。またその上に飛び出る男梁端部の木鼻には雲の浮彫が施される。背面側の男梁端部の木鼻は単に絵様が施されるだけであり、前後で装飾の程度に差異を付けている点が興味深い。さらに親柱筋と控柱筋を結ぶ海老虹梁の持ち送りに象の姿が彫刻される。また、冠木と親柱上の虹梁形の横材の間には波、雲、龍の彫刻が嵌め込まれる。その上の中備上の大瓶束の両側にも、正面側は鳳凰、背面側は松の彫刻が入り、その上部の木鼻と併せて笈形状を呈している。大棟には、正背面それぞれに、金箔が押された桐紋が2つ、巴紋が1つ入れられる。

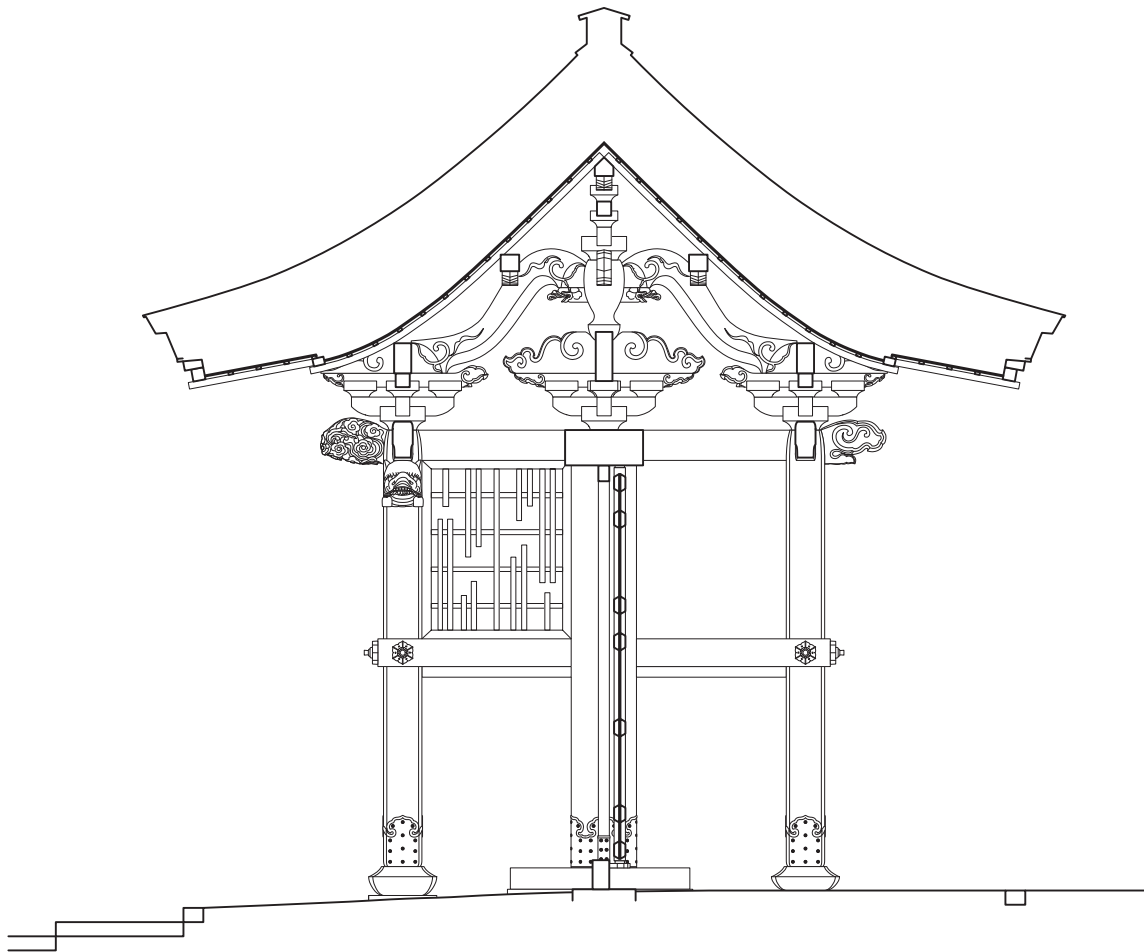


図 242 金剛峯寺山門断面図 1:80

金具も多く、親柱や控柱の足元の他、方立の基部などにみられる他、冠木の角や上下面の中央部に入っている。また、棧唐戸の縦棧と横棧の合わさる部分にも入る。その他、釘隠しの六葉が長押状の部材に打たれ、饅頭金物が棧唐戸縦棧のほぼ中央に入る。また、金具ではないものの、冠木の両端部分が、木材で金具形に造り出されている。

指 図 金剛峯寺には、「青巖寺表門廿歩一差図」(PL. 55) が所蔵されている。「慶應元年星次乙丑夏五月改之」と注記されている。親柱・控柱・方立・扉・唐居敷を描くのみの簡易な平面図で、各部には歩(分)単位の寸法を記す。現在の建物と概ね一致している。

本図を納める同じ箱には鐘楼堂の図面もおさめられており、こちらには再建奉行の寺院名が記されているが、表門の図には記されていない。また本図の描線はやや細く、柱断面も塗りつぶさず、簡略的である。これらの差異は、本図が計画図・設計図などとして描かれたものではなく、既存の建物として実測したことに起因する可能性が考えられる。

まとめ 金剛峯寺山門は、異形の臺股や、中間桁、大虹梁などを使用した、ほかの四脚門では見られない特異な架構を持ちながらも破綻なくまとめ、彫刻や飾金具を多く用いて飾り立てる。特に正面控柱の狻猊の彫刻は、木鼻と虹梁形頭貫下の持ち送りを一体化させており、例をみない。大主殿などを焼失した万延元年の火災では真然堂・経蔵などととも焼失を免れ、17世紀の青巖寺の表門としての威容を有する意欲的な造形をなした大規模四脚門として高い価値をもつ。(山崎有生)



図 243 金剛峯寺山門軒まわり見上げ



図 244 金剛峯寺山門妻面架構



図 245 金剛峯寺山門架構見上げ



図 246 金剛峯寺山門虹梁形頭貫虹梁絵様



図 247 金剛峯寺山門虹梁形頭貫・木鼻の焼損

(8) かご堀 (PL.10)

構造形式 東:総長 24 間、切妻造、檜皮葺、西:総長 32 間、切妻造、檜皮葺

建立年代 慶応元年 (1865) 頃 (金剛峯寺所蔵指図)

概要 かご堀は表門に袖堀状に取り付き、金剛峯寺の南面を区画する堀である。檜皮葺で、その外観は寄柱をもつ築地堀と同様であるが、版築構法で造られておらず、内部空間をもっている。現在は倉庫として利用されている。建立年代を示す明確な史料はないが、金剛峯寺所蔵指図に慶應元年 (1865) の年紀があることから、万延元年 (1860) の火災の後、慶應元年頃に再建されたものとみられる。

構造 かご堀は、表門の両脇から、それぞれ東西に約 4.8m 延び、ともに一度南に折れて南北に約 8.1m 延びる。ともに、その南端部では切妻の破風を見せ、壁面は貝形で納める。そこから、再び折れて、東に 52m、西に 39m 延びていく。区画外部は乱石積の石垣を設けて平場を確保し、区画内部では、表門に袖堀状に取り付く部分のみ切石の葛石を、それ以外は側石と石敷の底部をもつ雨落溝をめぐらす。東側の雨落溝の一部には敷地内部側の側石はない。そして、区画外部は石垣上部に、区画内側は自然石を連続させて基底部とし、その上に土台をめぐらせ、上に内転びを持つ柱を立てる。その上に桁を載せ、

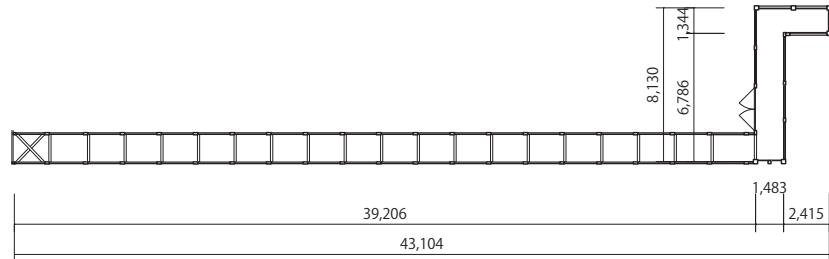


図 248 金剛峯寺かご堀平面図 1:400



図 249 金剛峯寺かご堀東部西端出窓



図 250 金剛峯寺かご堀東部西端部



図 251 金剛峯寺かご堀東部西半



図 252 金剛峯寺かご堀東部西半引戸

桁の間に梁を挿し、束を立てる。束は野棟木を受けるほか、化粧垂木の垂木掛となる貫を中間ほどに挿し込む。野棟木は野垂木を受け、その上には竹の木舞を渡し、檜皮を葺く。屋根は一軒疎垂木、大棟は箱棟で、端部を鬼板で納める。

外見からは、版築構法で築かれた筋塀にみえるものの、その内部は土で充填されているのではなく、内部空間を設けている。柱間は、木舞を入れて薄い土壁としている。

表門に向かって右側の南北に走る部分には、潜り門と板軒の庇付の出格子窓が設けられる。その内部は、棹縁天井や床が張られ、壁の内側に横板が入れ

られており、部屋として整えられており、門番がいたものと思われる。後述の「青巖寺差図総図」には「門長部屋」と記されている。なお部材の状態から、当初はこの部分以外土間であったと推測される。

装飾と飾金具 かご塀は表門の周辺、貝形の付近に装飾と飾金具が確認できる。貝形の上には本墓股が入られ、その中央には桐紋が彫刻される。墓股の上には斗、実肘木が置かれ化粧棟木を受けている。その外部、切妻破風にはかぶら懸魚を吊るす。貝形の土台部分にも八双金物を入れている。

改修 倉庫として利用されていることもあってか、後補材や取替材が多くみられる。例えば、寄柱

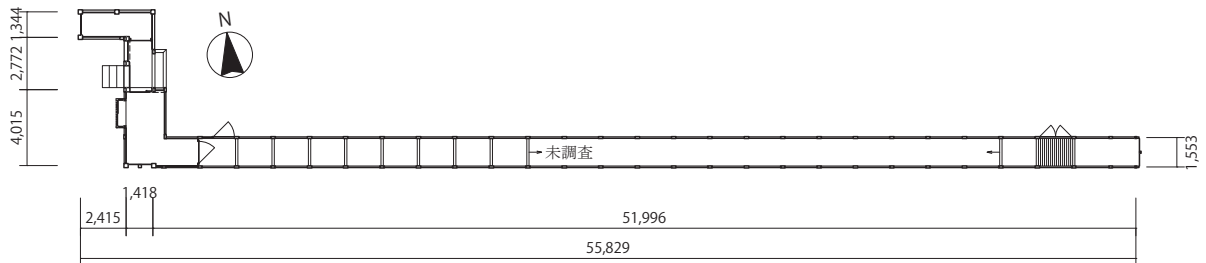


図 253 金剛峯寺かご塀東部床張部屋



図 254 金剛峯寺かご塀東部西寄り内部



図 255 金剛峯寺かご塀東部架構見上げ



図 256 金剛峯寺かご塀東部東半

筋の土台間に後補の横材を入れるほか、場所によりその横材と梁の間に新しい筋交いを入れている。また、床材も多くは後補であるが、出格子窓付近には当初材を残す。

指 図 金剛峯寺には、慶応元年（1865）の年紀をもつ「青巖寺差図」が伝わり、青巖寺境内の建物全体を描く。大奉行として学侶方智莊巖院、行人方・本王院が、再建奉行として、学侶方龍生院・行人方清浄院の寺名が記される。総長、山門との取り付き

方、矩折りの平面形状、押入・出窓を備えた「門長部屋」、柱間装置など、現存する建物と一致する。かご堀も、本図作成と前後して、再建されたものとみられる。

まとめ 金剛峯寺かご堀は、青巖寺境内の南面を区画する施設として建てられた。内部に空間を設けながら、外面を築地堀に見せた特徴的な構造は、金剛峯寺境内の景観に良好な景観を形成しており、貴重な建物といえる。（山崎有生）

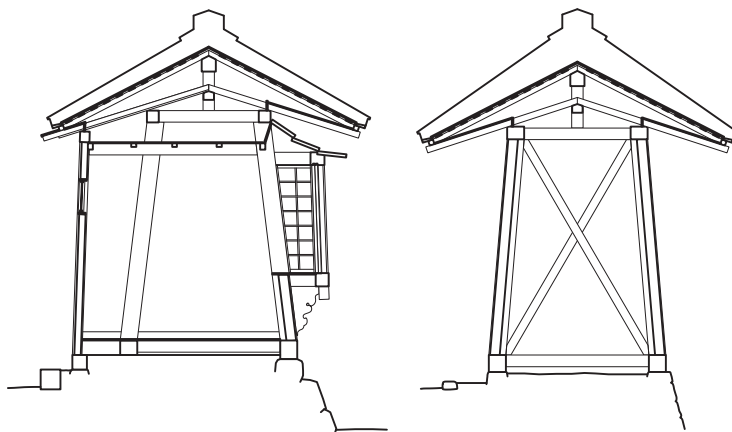


図 257 金剛峯寺かご堀断面図 1:80



図 258 金剛峯寺かご堀東部東端



図 259 金剛峯寺かご堀西部矩折部



図 260 金剛峯寺かご堀西部矩折部南妻面見上げ



図 261 金剛峯寺かご堀西部西端築地堀接続部

(9) 築地塀 (PL.11)

構造形式 北:桁行総長 25 間、切妻造、檜皮葺、南:桁行総長 22 間、切妻造、檜皮葺

建立年代 江戸時代初期 (技法・意匠)

概要 築地塀は金剛峯寺の大主殿と別殿の間付近に位置し、かつての青巖寺の寺域西面を南北に区画していたものである。明治以降に金剛峯寺となるまでは、現在の奥殿・別殿等が建つ敷地は行人方の興山寺があり、青巖寺との間には北に連なる阿弥陀ヶ峯を南北に通る「阿弥陀ヶ峯の道」といわれた道路が設けられていた。『紀州続風土記』によれば、青巖寺は東南西の三方を築地塀とし、各面に門を構えていたというが、現在は、西面のみを築地塀としている。

平面規模 現大主殿と別殿を結ぶ渡り廊下は、かつて存在した青巖寺西門の位置に建設されており、築地塀もここを境に北部と南部に大別できる。南北の築地塀は西門との取り付きで東側にクランクする。北部では金剛峯寺北背面の阿弥陀ヶ峯の山裾から、南へ 42.7m のところで 3.5m 東に折れ、さらに南

へ約 4.0m 進み、現在の渡りに至る。南部は北から 2.8m 進み、西へ折れて、さらに南へ 33.8m つづき、寺域南面に至る。かご塀は築地塀に直交して接続する。また北部北端には平成初頭頃に増補されたという木造の出入口が付属する。築地塀西面には雨落溝を設け、北部の雨落溝は西門部分の出隅の位置まで石組みとし、渡り廊下部分で一旦暗渠となって、南部では U 字溝に据え換えられている。なお、築地塀東面には雨落溝を設けていない。

軸部・造作 築地塀は石積みの基壇上に土台建とし、土台上に内転びさせた柱を立てる。基本的に、土台は柱間 2 間分を 1 材とするが、北部では東面の地面が西面土台よりも高く、一部で土台が残るものの、須柱が地面に埋没している状況である。築地の基底部幅は約 1.7m、高さは約 2.5m で、隅部の貝形柱は約 245 mm 四方、須柱は見附を約 230mm、見込を約 40mm とし、柱間は 1,750mm 前後とする。妻壁では貝形柱に成の高い楣を渡し、端部を留継ぎでつなぐ。貝形柱には板溝を設けて横板を落とし込み、一本の木太い押縁で押さえる。須柱上には桁をのせて梁を



図 262 金剛峯寺築地塀南部南端かご塀接続部



図 263 金剛峯寺築地塀南部南寄り東面



図 264 金剛峯寺築地塀北部北寄り東面



図 265 金剛峯寺築地塀南部西面

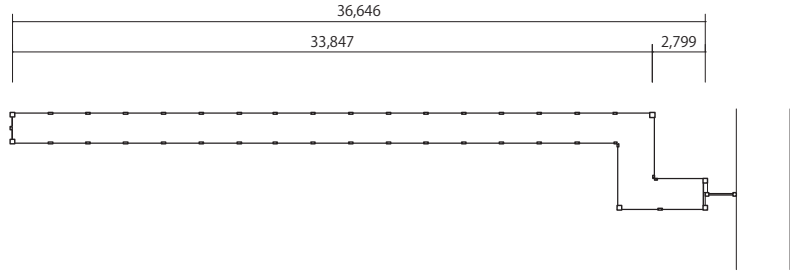


図 267 金剛峯寺築地塀平面図 1:400

かけ、梁の中央に束を立てて棟木を支持する。この棟束には貫を通して垂木掛とし、桁を支点にして軒を出す。

築地は約 50mm 毎に版築で突き固められ、西面は 5 本の定規筋を設けた、いわゆる筋塀である。皇室にゆかりのある寺院を示し、定規筋を 5 本とするものは最高格を表している。築地塀東面の一部には壁表面がやや黒く色づいており、これは築造時に枡板と壁土の剥離を目的として油が塗られているためという。南北両塀とも築地塀付近は巨木が多く立つこともあり、特に東面は痛みが激しく、壁面の一部は土壁や漆喰で補修されている。

屋根は切妻造、檜皮葺で、渡り廊下の屋根と接続するものの、築地塀の屋根は連続して通る。軒は一軒疎垂木で、垂木は棒垂木とする。南北両端の妻面は反りを付けて破風板を設ける。破風は 2 段で、渦絵様を施した拳鼻状に破風尻を造り出す。北部北端では破風押みに懸魚等は設けていないが、南部南端では押みに六葉蕪懸魚を下げ、妻壁には板臺股を設けて意匠的に造る。この臺股の脚内には五三の桐紋

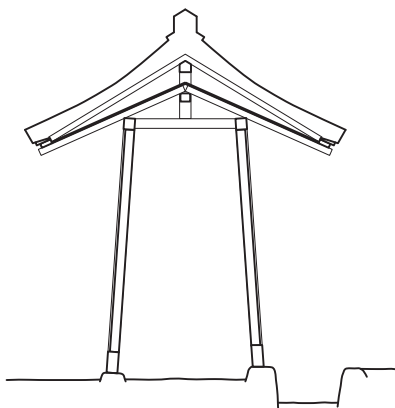


図 266 金剛峯寺築地塀断面図 1:80

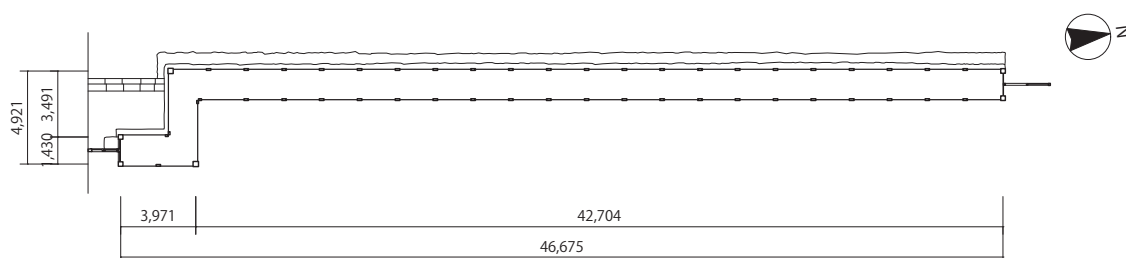
が彫刻される。

西門部分は門の柱礎石を残し、床を玉石敷に仕上げ。現在の渡り廊下と築地塀北部との間は土壁とし、下部に潜り戸を設ける。北部北端に取り付く出入口部分は、頬杖付きの角柱を立てて敷居と鴨居を築地塀につなげ、中間に間柱を立てて貫を通し、堅板壁を造る。開口部は上下に板しゃくりが確認でき、かつては引き戸が設けられていたようである。屋根は切妻造板葺で、北の各柱上部及び鴨居上にのせた束から腕木上の屋根板受けを出して 2 枚板をかける。

改修履歴 先述の通り、北部築地塀の東面は風食が激しく、多くの柱は腐朽により根継がおこなわれ、角材や切石、モルタルブロック等、現在に至る間に幾度も修繕がなされている。北部東面の北から 11 間目の須柱には笠木と貫のホゾ穴が残り、かつて板塀が取り付けいていた痕跡が残る。また昭和後期頃の渡り廊下の建設にあたり、西門付近では桁以上の部材が更新されている。近年では平成の大修理の一環で、平成 10～11 年に檜皮葺屋根の葺替えがおこなわれ、屋根まわりが修繕されている。

文献・絵画史料にみる築地塀 先述のように『紀州続風土記』の青巖寺の項目には、北面を除く敷地各面に「築地」と門が存在していた。また西門は「勅使門」と呼称され、「西側の周垣に添て一間内へ入。四間にして中一間二枚の引戸あり」と記され、現在残る築地塀と西門部分の形式と同様である。「勅使門」と呼称される由来は慶長 2 年 3 月の大塔供養の際に、勅使が西門から入場したことによるという。この周垣が西面の築地塀を指すと考えられる。

絵図では、青巖寺の寺域西面は現在とほぼ変化が



ない。築地塀が描かれる絵図の初出は宝永3年(1706)の「高野山壇上寺家絵図」(金剛峯寺蔵、図176)である。西門部分は築地塀より東へ引き込み、穴門の形式で、おおよそ現在の築地塀と同様のものと考えられる。また築地塀は石積基壇とし、石積脇に溝が南北に通っている。

次に寛政8年(1796)の「高野山古図」(金剛峯寺蔵、図177)では、先と同様に穴門の西門を築地塀より東へ引き込む。石積基礎や溝も同様である。青巖寺西南隅では南面の区画塀とは連続せず、現在のように築地塀とかご塀が直交して取り付くように描かれる。

以上、絵図や文献からは、18世紀初頭には区画塀として現在と同様の築地塀が存在している。しかしながら、創建当初から区画塀は存在していたことは想像に難しくなく、築地塀を造り替えたというような記録も見当たらない。「阿弥陀ヶ峯の道」を挟んで西隣にあった興山寺も天正18年の開基であり、興山寺と青巖寺の位置関係や規模に大きな変化もなく、したがって区画塀である築地塀の位置にも変化がないと考えられる。



図268 金剛峯寺築地塀南部北端東面

築造年代 文献・絵画史料からもうかがえるように、創建当時から青巖寺の西面を区画する塀は当然ながら存在したのであろうし、その位置に大きな改変もないことが想定できる。文献史料にも築地塀に関する記述が少なく、具体的な改造や建て替えについては判然としないものの、築造年代は青巖寺が創建された文禄2年と想定できる。現在の築地塀の石積み基礎も当初のものであろう。青巖寺は幾度となく大火によって焼失と再建を繰り返しており、築地塀も被災している可能性はある。それ以外にも、土台や柱などの木部は風食が激しいものも多く、後世に入れ替えられたものも多数あろうが、当初材も一部で残存しているとみられる。

まとめ 築地塀は青巖寺創建時に築造されたもので、その位置も当時のままと考えられる。大規模な建て替えや修理の記録は見当たらないが、腐朽や大火による被災等による修繕は加えられていると思われる。しかしながら、軸部の形式は当時のままとみられ、当初材も一部で残存しているとみられる。渡り廊下部分は、かつて「勅使門」や「御幸門」(PL.56「青巖寺差図総図」)とよばれた青巖寺の西門にあたる



図269 金剛峯寺築地塀北部南端渡廊下接続部

場所で、西門が築地塀よりも東へ引き込まれる当初の形式を現在も留めており、かつ礎石や石敷が遺存している。

建立年代を示す明確な史料はないものの、一部に桃山時代の築地が残る元禄期築造の法隆寺西院大垣や、室町時代の西宮神社築地塀、室町時代後期の慈尊院築地塀などに匹敵する、現存する版築築地の古例に位置づけられる。室町末期にみられる須柱を残した構造を有することからも、青巖寺の創建当初の築地塀とみてよいだろう。青巖寺創建当時の景観を

現在に伝える点において歴史的に重要であるとともに、金剛峯寺境内の良好な景観形成に寄与する点においても貴重な建物である。 (福嶋啓人)



図 270 金剛峯寺築地塀北部南端東面



図 271 金剛峯寺築地塀北部南端東面



図 272 金剛峯寺築地塀北部東面



図 273 金剛峯寺築地塀北部当面柱痕跡 (北から 11 間目)



図 274 金剛峯寺築地塀北部北端

(10) 経蔵 (PL.12・13)

構造形式 桁行 5.9 m、梁間 4.0 m、2階建、土蔵造、入母屋造、檜皮葺、正面前室付、桁行 1.5 m、梁間 3.5 m、妻入、向唐破風造、檜皮葺

建立年代 延宝 7 年 (1679) (額銘、『高野春秋』)

概要 金剛峯寺経蔵は、大主殿の西南方に東面して建つ。桁行 3 間、梁間 2 間、切妻造、2 階建の土蔵を、入母屋造、檜皮葺の屋根を受ける桁行 4 間、梁間 3 間の覆屋が取り巻き、正面に桁行 1 間、梁間 1 間、妻入、唐破風造、檜皮葺の前室が取り付く。

『高野春秋』延宝 7 年 (1679) 3 月条に、摂州・天満の伊川都光淨栄が一切経及び釈迦三尊像を寄付するのにあわせて落慶したとあり、前室に掛かる扁額の刻銘及び背面の墨書にも、同様の内容が記されている。金剛峯寺において、建立年代が明確なものとしては、真然堂に次いで古い。

基壇・基礎 経蔵は基壇や、周囲との見切りを持たず、泥岩の自然石を用いた礎石の上に、主体部となる土蔵と、覆屋の柱を建てる。

主体部の構造 土蔵造の主体部の柱間寸法は、桁行・梁間ともに約 1978 mm である。軸部は、方約 140 mm の角柱を礎石上に立て、各柱間に 3 本の方 95 mm の間柱を立てる。1 階の腰貫、2 階の床根太を掛ける大引貫、2 階の飛貫で、柱を固める。2 階床を受ける大引貫は、桁行の 2 条に大材を用い、内部柱筋に 2 条の大梁を架ける。小屋組は、京呂組の化粧屋根裏で、梁行の桁に立てた束がうける化粧棟木及び化粧垂木をみせる。

1 階・2 階ともに、間仕切りを設けず一室とする。1 階は正面中央間に漆喰塗込両開き土戸を設け、その内側に腰板縦格子戸を設ける。格子戸の格子は鉄製で、框は黒漆塗で箔押しした八双金具を打ち、意匠的にも優れている。1 階の北面中央北寄りの腰高の窓、2 階の北面及び南面中央北寄りの床高の窓を開き、鉄格子を嵌め、内側に片引きの舞良戸を設ける。床は、1 階・2 階ともに、拭板敷とする。主体部の外部は、礎石直上の柱、床まわり、壁、屋根、すべて土壁で塗り込め、漆喰で仕上げる。

仏壇及び棚 1 階中央背面寄りには来迎柱を立て、虹梁形頭貫で固め、仏壇を構える。正面下部に

は、格狭間を嵌め、透漆で仕上げる。虹梁形頭貫には、渦の絵様彫刻を施す。下巻の渦は、円形を呈し、彫りが比較的細く、浅く、17 世紀後期の様相を示す。来迎壁及び側壁は縦板張とし、来迎壁に阿弥陀衆生来迎図を、側壁に蓮を描く。1 階・2 階ともに、壁面に棚を設けるが、これらは近年の造作である。

覆屋の構造 覆屋の柱間寸法は、桁行総長 6,642 m、梁行総長 4,707 mm で、桁行各間 2 枝半、梁行中央間 4 枝、同脇間各 3 枝を配するが、隅 1 枝分は枝外垂木とともに 1 枝寸法を狭くしている。軸部は、方約 160 mm の角柱を立て、切目長押、腰長押、頭貫で固める。頭貫は下巻の渦の線形を施した拳鼻をもつ。柱上には大斗肘木を据え、丸桁を受ける。肘木は下巻円形を呈した渦の線形を施した絵様肘木である。外周には、切目長押・腰長押間に見板張の壁を設ける。各柱間に 4 本の簷子で建て込んだもので、西面中央南寄間及び南面中央間は、すでに取り外されている。

軒は一軒疎垂木で、反り・扱きをもたない。屋根は、入母屋造檜皮葺で、妻飾は虹梁大瓶束とする。

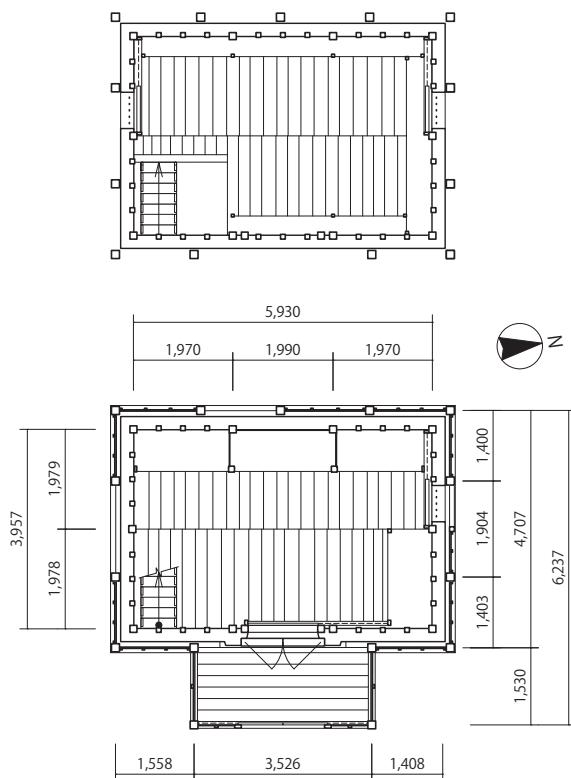


図 275 金剛峯寺経蔵平面図 1:150

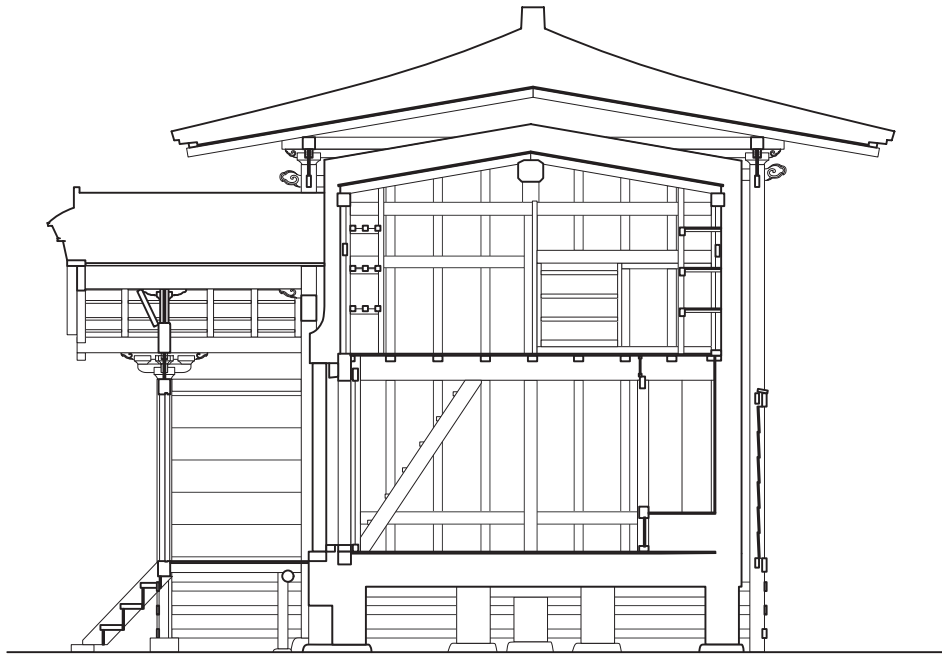


図 280 金剛峯寺経蔵断面図 1:80



図 276 金剛峯寺経蔵背側面



図 277 金剛峯寺経蔵組物



図 278 金剛峯寺経蔵妻飾



図 279 金剛峯寺経蔵1階

虹梁絵様は、下巻の渦で、若葉も波形となる。彫りは、浅めであるが、太く、仏壇の虹梁絵様に比較すれば、やや先進的ではあるが、17世紀後期の様式の範疇にあるものとみられる。

前室の構造 前室の梁行は1530mmで、4枝を配する。軸部は覆屋と同様、礎石上に方約160mmの角柱を立て、大引貫及び頭貫で固める。正面隅柱上には絵様肘木付の出三斗を据え、菖蒲梁及び菖蒲桁を受ける。菖蒲梁は虹梁で、下巻の木瓜形で、若葉が付く。前述の妻飾虹梁と同時期の様式とみる。唐破風造、檜皮葺の屋根の軒は一軒で、疎らに配した輪垂木の先端には繰形を施す。

前室を設ける土蔵は、壇上伽藍宝庫、西南院経蔵、円通寺土蔵など、高野山に多く所在する。

青巖寺差図総図 慶應元年(1865)の年紀をもつ「青巖寺差図総図」では、青巖寺境内の西南部に「宝蔵」を描く。土蔵と覆屋を区別せず描いた南北3間、東西2間の主体部に、南北3間、東西2間の「蔵前」が取り付く。現存する建物との相違は、本図の精度に起因するものとする。

まとめ 床束まで塗りこめた土蔵造の主体部に、入母屋造、檜皮葺の覆屋をかけ、唐破風造、檜皮葺の前室を持つ構造は、経蔵に求められた耐火と荘厳という、矛盾する課題に応えた工夫にあふれた構造といえるだろう。延宝年間頃に青巖寺経蔵として建てられ、その後、表門とともに江戸時代中後期の数度の大火を免れ、江戸時代前期の姿を今日に伝える点においても、非常に貴重である。(鈴木智大)



図 281 金剛峯寺経蔵 1階仏壇虹梁形頭貫絵様



図 282 金剛峯寺経蔵前室虹梁絵様



図 283 金剛峯寺経蔵蔵前

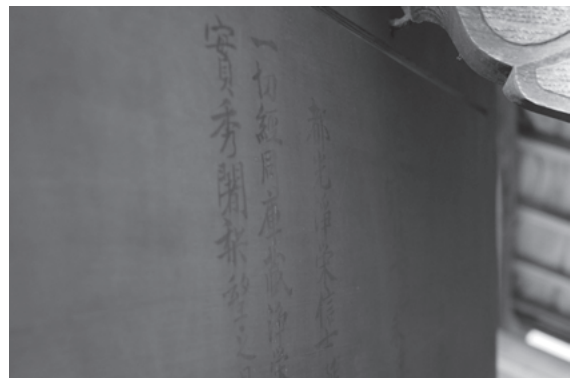


図 284 金剛峯寺経蔵扁額裏銘

(11) 鐘楼 (PL.13)

構造形式 2階建、桁行3間、梁間2間、入母屋造、檜皮葺、袴腰付

建立年代 元治元年(1864)(棟札)

概要 金剛峯寺鐘楼は、大主殿玄関の正面に北面して建つ東西棟の袴腰付鐘楼である。下層・上層とも、桁行3間、梁間2間で、入母屋造、檜皮葺である。下層北面中央に扉口をもつ。上層には跳高欄付の縁を廻らし、腰組で受けている。

化粧棟木に打たれた棟札から、元治元年(1864)に第378世座主の龍雄が徳川家茂を願主とし、青巖寺鐘楼堂として建立し、大工を能登国鹿嶋郡杵森邑住の藤田長五郎平直光が務めたことがわかる。同じ内容の棟札は金剛峯寺経蔵にも収蔵されていた。藤田は万延元年(1860)の壇上伽藍金堂再建に際して総肝煎を務めた一人で、東本願寺の文政度造営では京都大工平肝煎を務め、嘉永3年(1850)の城端別院善徳寺式台門の造営では棟梁を務めている。

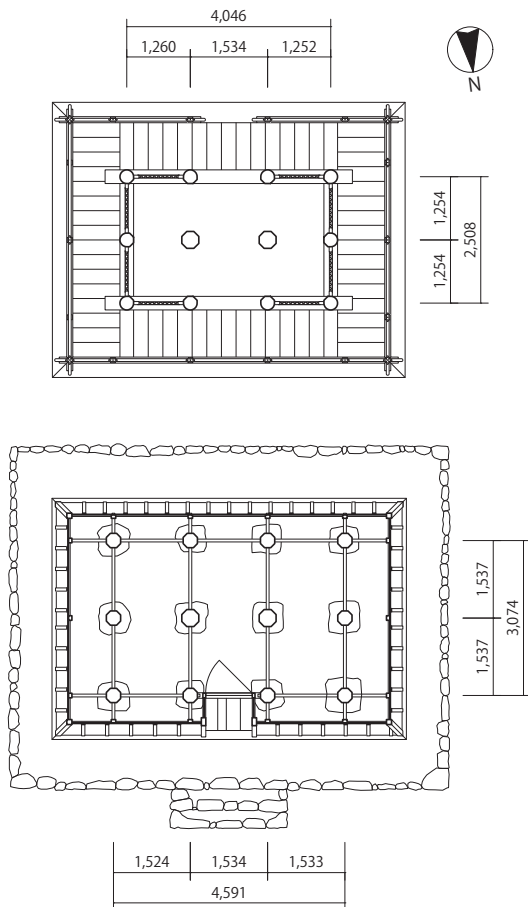


図 285 金剛峯寺鐘楼平面図 1:150

また、昭和36年の第二室戸台風による被害を受け、翌昭和37年に屋根の修理がなされた際の棟札も打たれている。

平面計画 上層は、桁行総長4,046mm、梁間総長2,508mmで、桁行中央間を1,534mm、11枝、それ以外の柱間を1,255mm前後、9枝とする。1枝寸法を約139mm(4寸6分)として、計画されたものと考えられる。一方、下層はすべての柱間を1,533mm前後とする。つまり、下層は11枝等間で計画され、棟通り中央間の内部柱が通柱として上層まで立ち上げ、上層の桁行両脇間及び梁間2間は、各柱間で2枝分ずつ通減させたと考えられる。

基礎 基礎は泥岩自然石による乱石積で、高さは約850mmである。正面に2級の石階を設ける。基壇上面は土間とし、礎石として径約60cmの泥岩自然石を据える。また袴腰の土台を受ける地覆石として同じく泥岩自然石を巡らす。

構造・柱間装置 軸部は、礎石上に八角柱を立ち上げる。側柱は管柱で径283mm、内部柱は通柱で径366mmと太い。下層部分は桁行・梁間とも各3段の貫で固め、側柱上には台輪を天乗せし、腰組を組む。腰組は、外部を三手先とし縁板を受け、内部には4段の通肘木を引き込み通柱と組んで、上面で柱盤を受ける。中備に、大きな渦の絵様を施した墓股を据える。縁は切目縁だが、外周のみ樽縁とし、切目縁とみえるように目地を入れる。縁上には跳高欄を巡らす。

上層は、柱盤に径270mmの丸柱を立て、内法貫・内法長押・頭貫・台輪で固める。柱の内部は八角形の面を残す。頭貫は木瓜形上巻の渦の絵様を陽刻した拳鼻をもつ。通柱間には、鐘釣梁を大入で納め、銅鐘を釣る。正面・背面とも中央間を開放とするほかは、連子窓を嵌める。

組物は、2本の尾垂木をもつ三手先で、実肘木を介して丸桁を受け、中備に蓑束を据える。軒支輪は、渦の彫刻を全面に施した板支輪である。隅木は地隅木と飛檐隅木を一木で作り、各先端を拳鼻状に造り出し、渦の絵様を施す。内部には3段の通肘木を引き込み、通柱と組む。

軒は、二軒繫垂木で、反りはなく、飛檐垂木が扱

きをもつ。入母屋造、檜皮葺の屋根は、大棟に箱棟を据え、両端に鬼板を据える。妻飾は虹梁大瓶束とする。虹梁は、上巻円形の渦の絵様を施し、大瓶束は笈形をもつ。破風板には燕懸魚をつける。

建立年代と改修 組物、拳鼻、妻飾に施された絵様は19世紀中期の様相を呈し、棟札にある元治元年の建立とみてよい。昭和36年の修理では、野垂木以上が改められているが、それ以外は当初の部材をいまに伝えている。

青巖寺鐘楼堂廿歩一差図 金剛峯寺には「慶應元年乙丑年夏五月図絵之」と記された「青巖寺鐘楼堂廿歩一差図」が伝わる(PL.55)。再建奉行として、龍生院・清浄院の寺名も記されている。柱配置および基壇を描き、各柱間及び柱の太さの寸法を記す。現在の建物と一致するもので、棟札の年紀よりも遅れることから、再建後に描いたものとみられる。

まとめ 金剛峯寺鐘楼は、三手先の腰組、尾垂木

付の組物を完備した鐘楼で、渦形の彫刻を全面に施した板支輪や随所に施した絵様彫刻など、非常に凝った造りとなっている。棟札からは能登の大工が棟梁を務めたことがわかり、幕末期の造営で遠隔地の職人が参画したことが判明する。陽刻された絵様彫刻や、隅木の絵様など、高野山の他の建物でみられない意匠は、大工の地方色を反映している可能性もある。学侶方中心寺院の旧青巖寺にふさわしい高い意匠性を備え、幕末再興の在り方を伝える点で非常に貴重な建物といえよう。(鈴木智大)

参考文献

- 『真宗本廟（東本願寺）造営史—本願を受け継ぐ人びと』（真宗大谷派宗務所、2011年）。
『城端別院善徳寺建造物等調査報告書』（南砺市、2013年）。
小山興誓「東本願寺大工の系譜」(『真宗本廟（東本願寺）飛地境内地建築群総合調査報告書』2022年、44～59頁)。

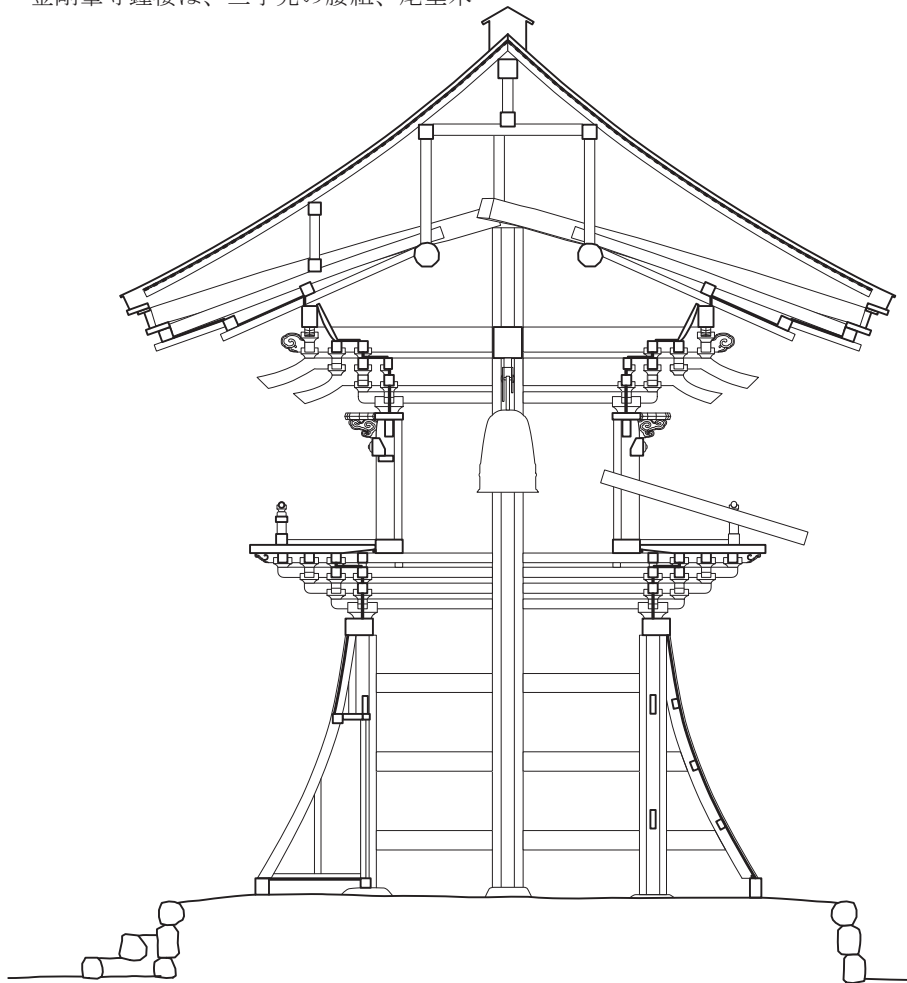


図 286 金剛峯寺鐘楼断面図 1:80



図 287 金剛峯寺鐘楼見上げ



図 288 金剛峯寺鐘楼上層側まわり



図 289 金剛峯寺鐘楼頭貫木鼻



図 290 金剛峯寺鐘楼中備葦束



図 291 金剛峯寺鐘楼下層内部



図 292 金剛峯寺鐘楼腰組高さ内部



図 293 金剛峯寺鐘楼上層内部



図 294 金剛峯寺鐘楼架構見上げ

(12) 会下門 (PL.14)

構造形式 桁行 19.2 m、梁間 5.1 m、入母屋造、檜皮葺

建立年代 慶應元年 (1865) 頃 (金剛峯寺所蔵指図)

概要 会下門は大主殿の南東に位置し東面する入母屋造、檜皮葺の長屋門である。桁行は約 19.2m、梁間は約 5.1m である。建立年代を示す直接的な資料はないが、慶應元年 (1865) の墨書をもつ木箱に納められた指図が金剛峯寺に所蔵され、また繰形絵様などは 19 世紀中期の様相を示すことから、大主殿などとともに万延元年 (1860) の火災ののちに再建されたものとする。

側まわり 正面となる東面は石垣を築いて、その上に建ち、敷地内部となる西面と南面には切石の見切石をめぐらす。土台をまわし、その上に角柱を立て、直接桁を載せる。中央間には、正背面共に側通りに虹梁形飛貫を入れ、その上には臺股状に兎・波・雲の彫刻を入れる。虹梁絵様の繰形絵様は、若葉にも芽が付されており、19 世紀中期の様相を示す。

棟通りには、唐居敷を付けた 598mm × 280mm (面内 535mm × 258mm) の脇柱を立て、楣を支える。門扉は

その柱に蝶番を用いて取り付ける。中央間の天井は根太天井で、虹梁形飛貫の下端あたりの高さに、楣の前後に入れる。また、脇柱と中央間の両脇の柱筋の間は閉塞され、正面向かって右側に通用口の扉が開かれる。唐居敷の間には蹴放を入れる。なお、中央間両脇には出窓が設けられている。

正面側や、中央間の壁面には、腰長押を打ちそこから土台までの間を見板張りとする。背面は腰長押より一段高い位置に飛貫を、その下に腰貫を入れ、両者の間を連子窓としている。腰貫と土台の間は正面と同様に見板張りとする。これら以外の柱間装置は漆喰壁としている。

軒は一軒疎垂木で、屋根は入母屋造、檜皮葺である。箱棟の大棟を載せ、両端は鬼板で納める。

平面と内部 会下門の内部は、現在、居室及び倉庫として利用され、改造が著しく旧状をほとんど留めていない。当初の状態を復原することが困難であるため、現状について報告する。

中央間より北の箇所は、柱筋で大きく 2 つに区分される。そのうち北側部分は、引違の戸でさらに 2



図 295 金剛峯寺会下門



図 296 金剛峯寺会下門東正面虹梁形内法貫見上げ



図 297 金剛峯寺会下門東正面虹梁形内法貫絵様



図 298 金剛峯寺会下門北部内部

室に区分されるが、両者ともに地面と変わらない高さに床板が入れられ、倉庫として使用される。南側部分も明障子で、居室と廊下に区分される。居室は6畳ほどの大きさだが、うち1畳分は収納として使用され、それ以外には畳を敷き詰めている。

中央間より南の箇所は、背面側に廊下を設け、明障子で仕切り、それ以外を柱筋の間仕切りで2つに区分する。ともに6畳ほどの居室で、北側部分は1畳を、南側部分は1畳半を収納に当てている。

彫刻・飾金具 会下門は要所に彫刻及び飾金具が入れられている。中央間の飛貫上方には、正背面共に、外形が墓股のようになった、兎・波・雲の彫刻が入れられる。楣の正面側には、菊花紋の彫刻が2箇所に入れられている。

金具は、土台や腰長押に八双金物が付けられるほか、門扉や脇柱にもみられる。中央の門扉には桐紋ないし巴紋が入った八双金物や、六葉状にした唄金物、桐紋や巴紋を打ち出した飾金具が打ち付けられる。通用口の門扉には八双金物と饅頭金物が、脇柱には足元に金具が入るほか、桐紋や巴紋を打ち出した飾金具が打たれている。

指図 金剛峯寺には、慶應元年（1865）の年紀をもち、「青巖寺絵図」と題された箱に納められた「青巖寺建図下門」と題する建地割図が所蔵されている（PL.57）。正立面図を基本としながら、南妻面をあわせて描いたもので、中央部の柱間装置、両脇の腰高の下見板壁張りの壁面、入母屋造の屋根が一致し、虹梁絵様の絵様まで一致する。異なるのは、虹梁絵様の上に彫刻を据えないこと、出窓を設けないこと、菊の御紋の位置が現状よりも外寄りにあることなど、限定的である。本指図は、現在の会下門の造営に指して作成された計画図と考えてよいだろう。つまり、翻って考えれば、現在の会下門は、箱書にある慶應元年（1865）の前後に建てられたものと考えられる。

まとめ 金剛峯寺会下門は内部が改造されているものの、主たる構造は当初材がよく残っている。高野山の寺院に多くみられる長屋門形式の会下門のなかでも規模が大きく、扉まわりに太い材を用い、要所に彫刻を入れて飾るなど意匠上の工夫もみられる建物である。学侶方の中心寺院であった青巖寺に相応しい、貴重な門建築といえよう。（山崎有生）

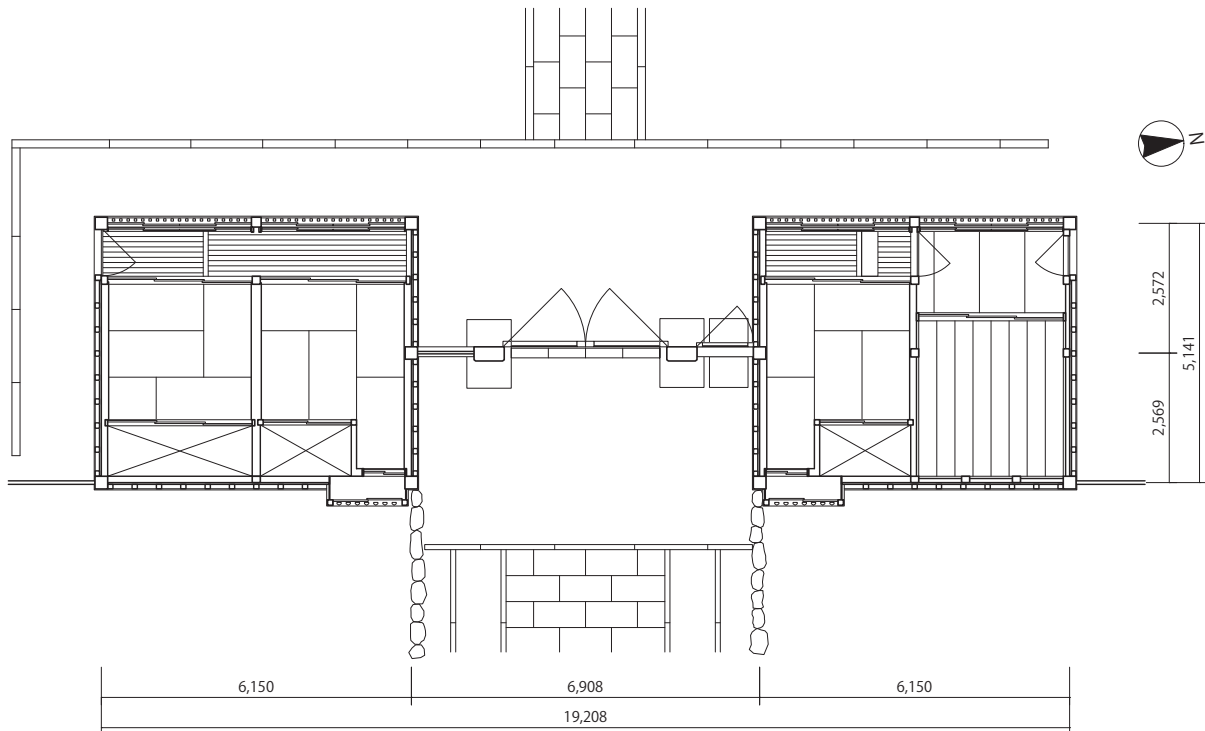


図 299 金剛峯寺会下門平面図 1:150



图 300 金剛峯寺会下門南部内部



图 301 金剛峯寺会下門小屋裏



图 302 金剛峯寺会下門小屋組

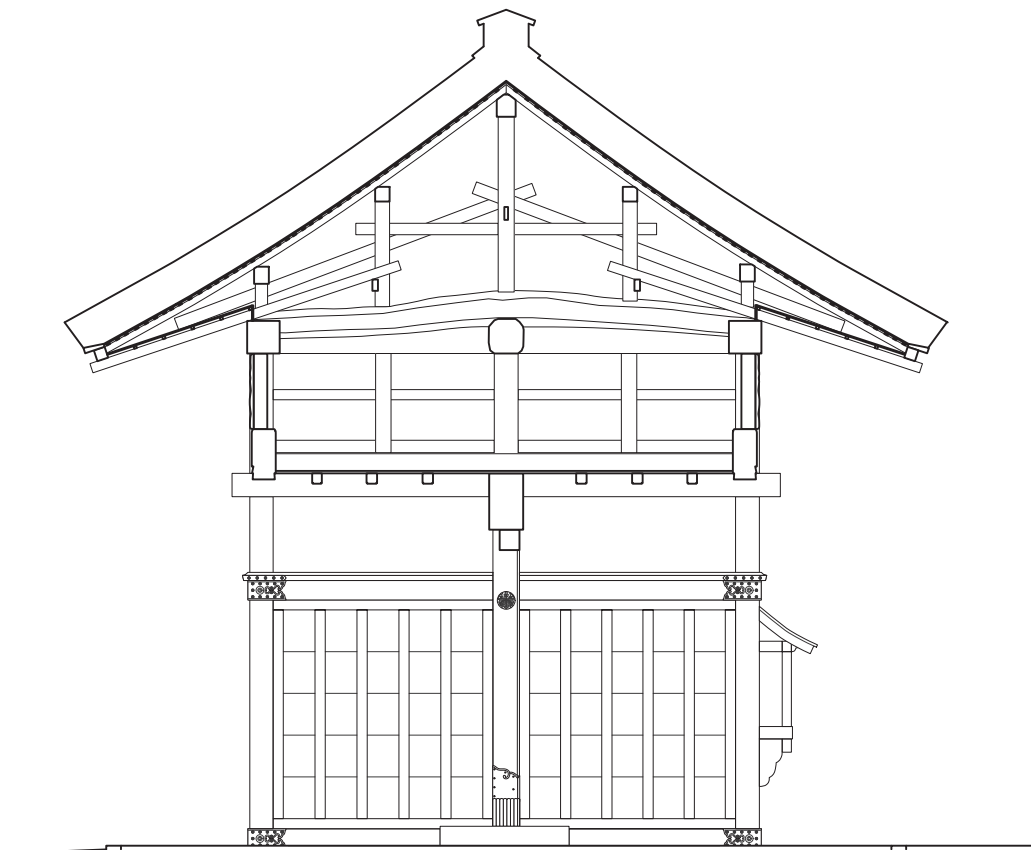


图 303 金剛峯寺会下門断面図 1:80

(13) 奥殿

構造形式 桁行 22.6 m、梁間 18.2 m、入母屋造、銅板葺、正面東寄り玄関突出、桁行 5.0 m、梁間 4.9 m、妻入、切妻造、銅板葺

建立年代 昭和8年（『弘法大師老千百年御遠忌紀要』）

概要 金剛峯寺奥殿は本山境内西半の旧興山寺敷地内の中央に南面して建つ。奥殿の南方には勅使門（旧中門）が建ち、その間に石庭の蟠龍庭が広がる。東に建つ別殿と渡り廊下で接続し、北背面には阿字観道場、西には新書院・真松庵が建つ。奥殿は昭和9年（1934）の弘法大師御入定1100年御遠忌事業の一環で建設された貴賓室の客殿であり、現在も内部は非公開とし、近年では文仁親王同妃両殿下が高野山開創1200年記念大法会結願法会にご臨席された際に、ご夕食会の会場として奥殿が使用された。

建築年と施工者 先述の通り、1100年御遠忌事業の一環として、別殿や勅使門、高塀等とともに奥殿も建設された。施工業者は入札の結果、西本組（西本健次郎）が落札して請け負った。監督技師は根本大塔等と同じく大浦徳太郎が務めている。奥殿ならび

に別殿等の工事は昭和8年1月23日に工事着手し、昭和9年2月に終了している。奥殿は別殿とともに、上棟式が昭和8年7月8日に執り行われ、昭和8年12月26日に西本組より竣工届が提出されている。奥殿の工事見積費は20,385円であった。飾金具は京都の磯村才治郎商店が請け負い、電灯工事は高野山の浦野商店がおこなった。床の間まわりの漆塗は能登輪島町の平田吉左衛門がおこなった。この工事では図面13葉と仕様書3冊の記載内容に則して施工がなされたようであるが、これら設計図書は残存せず、また設計者に関する資料も残されておらず具体は不詳であるが、大浦が大部分で設計に関与しているであろう。

西本組はかつて和歌山市に本社を構えた土木建設業者で、旧西本組本社ビル（岩井信一設計、昭和3年）は国登録有形文化財である。西本組の経営者であった西本健次郎は尾張国海西郡松島中島村の出身で、尾張藩士の普請奉行を務めた松永林三郎の息子として生まれた。明治18年（1885）に和歌山県で土木建築業を営んでいた西本用助の元で働き始め、明治26

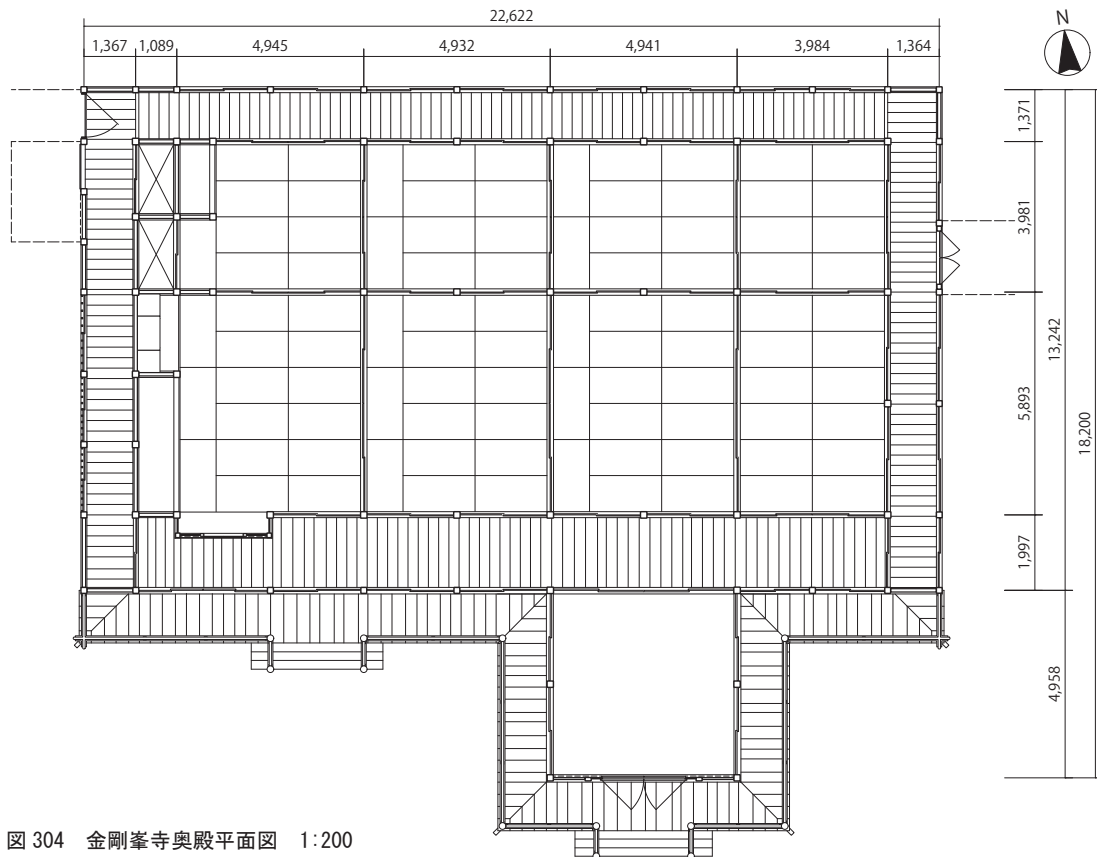


図 304 金剛峯寺奥殿平面図 1:200

年に西本家の入夫となり家督を相続した。西本組は戦前期から事業を拡大し、全国主要都市や京城、満州にも支店を設け、その後商号変更を経て、現在は三井住友建設となっている。西本健次郎は和歌山市商工会の重鎮であり、大正14年から昭和14年までは貴族院議員も務めた人物であった。

平面 奥殿の建物構成は主体部と南正面の玄関の突出部からなる。主体部は桁行19.9m、梁間13.2m、入母屋造、銅板葺で、正面の間口いっぱいに広縁を設け、その他各面には幅1,370mm前後の内縁を設ける。また西面北端には内縁の外側に便所の下屋を設ける。玄関は桁行5.0m、梁間4.9m、切妻造、銅板葺とする。この玄関をめぐるように奥殿南面には濡縁が配される。主体部は南面の前列と北面の後列にそれぞれ4室を配する。前列は上手(西)から雪嶺の間(15畳)、虹雉の間(15畳)、桜の間(15畳)、溪流の間(12畳)、後列は下手(東)から一の間(8畳)、二の間(10畳)、三の間(10畳)、四の間(9畳)と並ぶ。西端の雪嶺の間と四の間はともに西面に床の間を構える。南面の広縁を介した先にある玄関は約

6.3畳の正方形の一室空間とする。

畳長辺は約1,910mmで、別殿と同じく京間の平面设计とする。垂木は各面とも等間割で配される。

軸部と室内の造作 奥殿は切石敷でやや高めた基壇上に切石方形礎石を据える。礎石間には地覆石を置き、地覆を入れて床下連子を設ける。奥殿の軸部は塗装もなく素木造を基調とし、礎石上に155mm四方の面取り角柱(面内137mm)を立て、敷居、鴨居を入れ、内法長押をまわし、柱上に舟肘木の組物を置いて軒桁を受ける。背側面の側柱は身舎柱よりも柱高をやや低くし、舟肘木上に化粧軒桁を置いて垂木を受ける。広縁及び内縁では部屋境の柱筋において内法に無目を渡し、内法長押をまわして竹の節欄間を設ける。内縁ではさらに上部に身舎柱の柱頭や下から側柱の化粧軒に向かって虹梁を架けて軸部を固めている。内縁の南端では、広縁南面の欄間上框の高さで両側面の側柱に繫虹梁を架ける。玄関では柱筋に虹梁を渡して、透かし彫りの本臺股を置いて化粧棟木を受ける。天井を張らずに化粧屋根裏風に見せるが、後述の南妻面と比較すると棟高や垂木勾



図 305 金剛峯寺奥殿正面



図 306 金剛峯寺奥殿正側面



図 307 金剛峯寺奥殿玄関妻面



図 308 金剛峯寺奥殿玄関

配が異なり、さらに上部に野屋根があるものと考えられる。

側まわりの柱間装置は、主体部南面側柱筋では両端間を土壁漆喰塗とするが、その他は引違いの腰付ガラス障子戸とし、内法上に引違いガラス障子欄間を入れて外側に平格子を設ける。東面及び北面も同様に引違いのガラス障子戸を入れて、欄間も同意匠とする。西面は南端を土壁漆喰塗とし、その北3間分は中敷居を入れて引違いのガラス障子窓とし、外側に平格子を入れる。別殿へ通じる渡り廊下部分は、扉面に五三の桐と巴紋を陽刻した外開きの板唐戸を設ける。

主体部室内は内法長押と蟻壁長押をまわして天井との間に蟻壁を設ける。大主殿書院や別殿と同様の意匠として桃山様式の書院造を意識した設計である。南列の東西の部屋境は透かし彫りの彫刻組子欄間を入れ、北列では透かし彫りの板欄間を入れる。南北の部屋境の小壁は土壁漆喰塗とする。広縁及び内縁に面した柱間装置は引違いの腰付障子戸とし、内法上を引違いのガラス障子欄間とする。天井はい



図 309 金剛峯寺奥殿玄関内部蟻股

ずれも東西に棹を通す棹縁天井とし、各室とも照明を1基吊り下げる。南列の照明は新しいものに改められているが、北列のものは当初の照明器具を使用していると考えられる。この照明器具は大主殿の大広間や上段の間など、さらに奥書院の座敷に使用されているものと同意匠であり、これらの照明は昭和8年の奥殿の建築とほぼ同時期に取り付けられたことがわかる。

西南隅の雪嶺の間は付書院をもつ床の間に構える。床の間は2畳分の畳床の大床で、框は黒漆塗とする。床脇は框及び床板を黒漆塗とし、違い棚及び天袋を設ける。違い棚と天袋地板は透漆塗に仕上げる。付書院は地袋棚天板を透漆塗とし、中敷居上に花頭窓を造り、外側に腰付障子戸を入れる。その上部に透かし彫りを施した書院欄間を入れる。北列四間の床構えは西面北に1畳大の畳床を設け、床の東面及び南面に黒漆塗の床框をまわす。南面はチンクグリを設けて小壁は土壁漆喰塗とする。床脇はなく、畳を敷いて西端の物入に通じる。

各室部屋境の建具は障壁面を施した襖とし、室内



図 310 金剛峯寺奥殿雪嶺の間

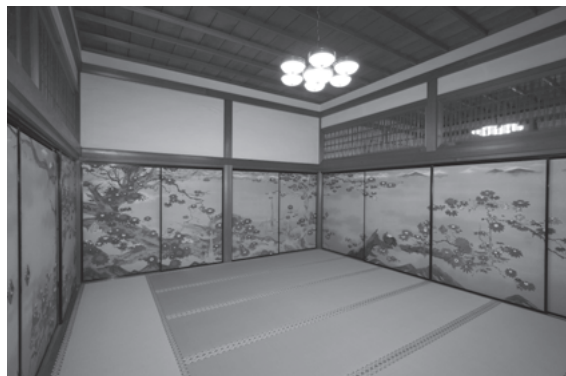


図 311 金剛峯寺奥殿虹雉の間

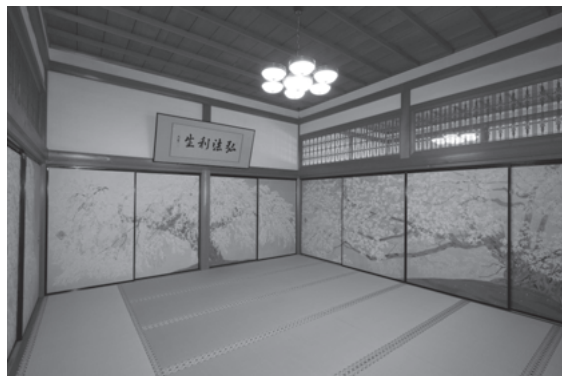


図 312 金剛峯寺奥殿南列三の間

を華やかにする。南列の襖絵は奥殿の新築に際して製作された石崎光瑠の作品「雪山花信」である。ヒマラヤ山脈とヒマラヤジャクナゲの風景が描かれる。石崎はこの襖絵の製作途中に逝去したため、未完成のままの遺作となってしまった。雪嶺の間や虹雛の間など室名はこの襖絵の題材に由来している。北列の襖絵は、平成の大修理の際（平成11年）に奉納されたもので、富山護国寺住職石田俊良により製作されたものである。「高野山御開創曼荼羅図絵」と題し、一の間から順に春夏秋冬の高野山の風景と建物が描かれている。また、襖の引手金具は唐草文を菱形に配置し、引手部分は中央に巴紋を付ける。

次に、主体部南面の広縁は先述のとおり、部屋境の柱筋で無目を渡して内法長押をまわす。内法上に設けた竹の節欄間は欄間を透かし彫りの板欄間とし、後述の内縁とは意匠を違えて正面側広縁空間の格式を高めている。床は板敷、天井は鏡天井とする。内縁は先述の通り、部屋境の柱筋で無目及び内法長押、竹の節欄間を設ける。襻をもつ竹の節欄間とすることで、広縁の意匠を引き立てている。床は板敷

とし、天井は垂木や化粧裏板をみせる化粧屋根裏とする。主体部南面に玄関をめぐるように配される滯縁は、東西両端の端部のみ跳高欄とし、その他は擬宝珠高欄とする。玄関南面に登高欄を備えた木階を3級設け、また雪嶺の間の南面の位置にも同様に木階を設ける。

玄関は南面中央間のみ内法長押を切り上げて外開きの両折板唐戸を入れ、両端間は土壁漆喰塗とする。扉上部の内法上にはガラスを挟み込んだ彫刻欄間を入れる。東西両側面は引違いのガラス障子戸とし、内法上は引違いのガラス障子欄間で、外側に平格子を設ける。主体部広縁との境は引違いのガラス障子欄間4枚とし、欄間も引違いガラス障子で、玄関側に平格子を設ける。床は後補の絨毯敷とし、当初は板敷とみられる。玄関は先述のとおり化粧屋根裏様に造ることで伝統的な構造美を取り入れつつも、ガラスを多用して採光が十分に採られたサンルームのような空間であり、伝統と近代化をうまく折衷した室内意匠といえる。先述の虹梁上の本蓼股は透かし彫り唐草文様を施し、桃山様式の伝統的な意匠を

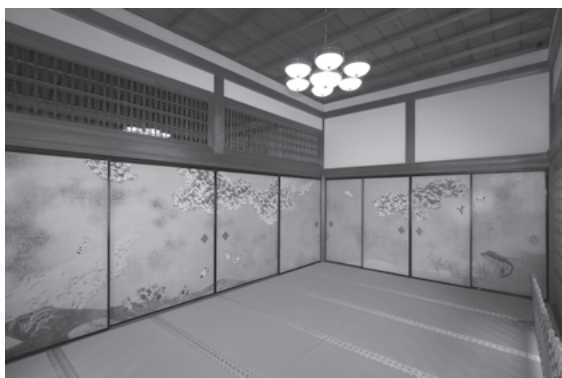


図 313 金剛峯寺奥殿南列四の間



図 314 金剛峯寺奥殿北列一の間



図 316 金剛峯寺奥殿北列二の間



図 315 金剛峯寺奥殿北列三の間

みせる。

軒まわり 奥殿の軒は一軒疎垂木とし、垂木は棒垂木とするが、面取りを施して古風に仕上げる。垂木上には化粧木舞を渡して化粧裏板を置く形式とし、金剛峯寺の各棟に共通する屋根仕様である。先述の通り、玄関では内部の化粧屋根裏と本来の小屋組と二重に屋根が組まれているとみられる。主体部の小屋組は木太いマツの梁を架けて小屋束を立てた和小屋とし、部分的にボルト留めされた筋違が挿入されている。

玄関の突出部は南正面の木階まで覆うように4枝分(約2m)と非常に深く切妻破風の虻羽を出す。主体部の妻飾は妻壁全面を狐格子とし、破風板は眉欠き2段、拝みには鱗付きの六葉猪目懸魚を下げる。玄関では梁上に透かし臺股を置き、破風は主体部と同意匠とする。妻面外部の臺股は先述の内部の臺股とは唐草文様の意匠を変える。ともに脚も細く、桃山様式でデザインされるが、図案的な彫刻はいかにも近代の復古的な意匠である。

改修履歴 主体部西北隅の便所は近年内装が更新



図 317 金剛峯寺奥殿北列四の間



図 318 金剛峯寺奥殿正面広縁

されている。また玄関内部にかかる虹梁は、中央の下面に照明器具が取り付けいていた痕跡が残る。先述の通り、北列の襖絵は平成11年に新たに奉納されたもので、同年南列の襖絵も亀裂修理や剥落止めがなされた。奥殿の後世の改修は少ない。奥殿は良材を用いて建設されたとみられ、各部材も傷みがなく、非常に良好な状態を保っている。

まとめ 奥殿は1100年御遠忌事業の一連の建物群のひとつに位置づけられ、根本大塔などにも携わった大浦徳太郎が現場監督を務めている。別殿や勅使門とともに西本組が施工をおこない、他の建設に関わった施工業者も記録として残る。良材を用いて建設され、保存状態も非常によい。内部空間は別殿と同じく天井高も高く、近代的でのびやかな空間が造られ、また玄関部分はサンルームのようなガラスを多用した近代的な和洋折衷の空間である。別殿とは平面形式や床構えなど共通点も多いものの、僧侶向けや一般信徒向けに建てられた別殿とは異なり、賓客を迎える施設である奥殿は、正面に突出した玄関部分や臺股の復古的意匠、舟肘木の組物を用いるなど、細部意匠がより洗練され、格式の高い意匠を呈する。奥殿は桃山様式を取り入れた復古的な近代和風建築であり、昭和初期の一連の造営の中でも重要な建物のひとつとして評価できよう。(福嶋啓人)

参考文献

金剛峯寺御遠忌事務局編『弘法大師老千年御遠忌紀要』、金剛峯寺、1943年。

高野山真言宗総本山金剛峯寺『高野山平成の大修理紀要』、2000年。



図 319 金剛峯寺奥殿東面広縁

(14) 別殿

構造形式 桁行 25.9 m、梁間 14.0 m、入母屋造、銅板葺

建立年代 昭和 8 年（『弘法大師老千百年御遠忌紀要』）

概要 別殿は旧興山寺の敷地である金剛峯寺西半の境内に位置し、渡り廊下で大主殿と接続する。別殿の東側面の廊下を南に進むと新別殿があり、また別殿西北の渡り廊下の先には奥殿や新書院、阿字観道場が建ち、別殿の北には別棟の売店が隣接する。別殿の西には石庭の蟠龍庭が広がる。当初は一山ならびに一宗の会議や一般信徒の休憩所として使用されていたといい、現在は一般拝観者向けの公開施設として利用される。

建築年と施工者 別殿は奥殿と同じく、昭和 9 年（1934）の弘法大師御入定 1100 年の御遠忌大法会に際して建設された客殿である。施工業者は奥殿と同じく、西本組（西本健次郎）が請け負った。別殿は奥殿とともに、昭和 8 年 7 月 8 日に上棟式、12 月 26 日に西本組より竣工届が提出されており、工事見積費は 20,250 円であった。また大浦徳太郎が監督技師を務めた。屋根葺工事は山中商会、電灯工事は高野山の浦野商店がおこなった。床の間の漆塗は能登輪島町平田吉兵衛がおこなっている。飾金具は京都の

磯村才治郎商店が請け負った。奥殿と同様に、設計者に関する資料は確認できないが、大浦が設計にも大きく関与していることが想像される。

平面 別殿は桁行 24.7 m、梁間 14.0 m、入母屋造、銅板葺の南北棟建物で、平面は東西 2 列南北 4 室の構成とする。身舎部分は西面に 1 間幅の広縁、東面に半間幅の入側縁を設け、身舎の外では北面に庇下の内縁、南・西面には濡縁を設ける。西列の間取りは最南端の第一室から第四室まで各 18 畳の室を並べ、東列は最南端の第五室は 13.5 畳、その他第六室から第八室までは 15 畳の室を並べる。南面の 2 室は座敷であり、第一室は南面に床の間と床脇を構え、西の広縁に面して付書院を備える。第五室は東南隅に床の間を構え、第五室と縁側との間に物入を造る。また広縁最南端にも物入を設けている。

畳長辺は約 1,910 mm で、奥殿と同じく京間の平面设计とする。垂木は四隅の身舎柱を心揃えとして桁行 40 枝、梁間 20 枝に等間で割りつけている。

軸部と造作 基礎は切石敷でやや高めた基壇に切石方形礎石を据えて身舎柱を立てる。礎石には一部モルタルの切石方形礎石も含まれる。身舎の礎石間には地覆石を置き、地覆を入れて床下連子を設ける。

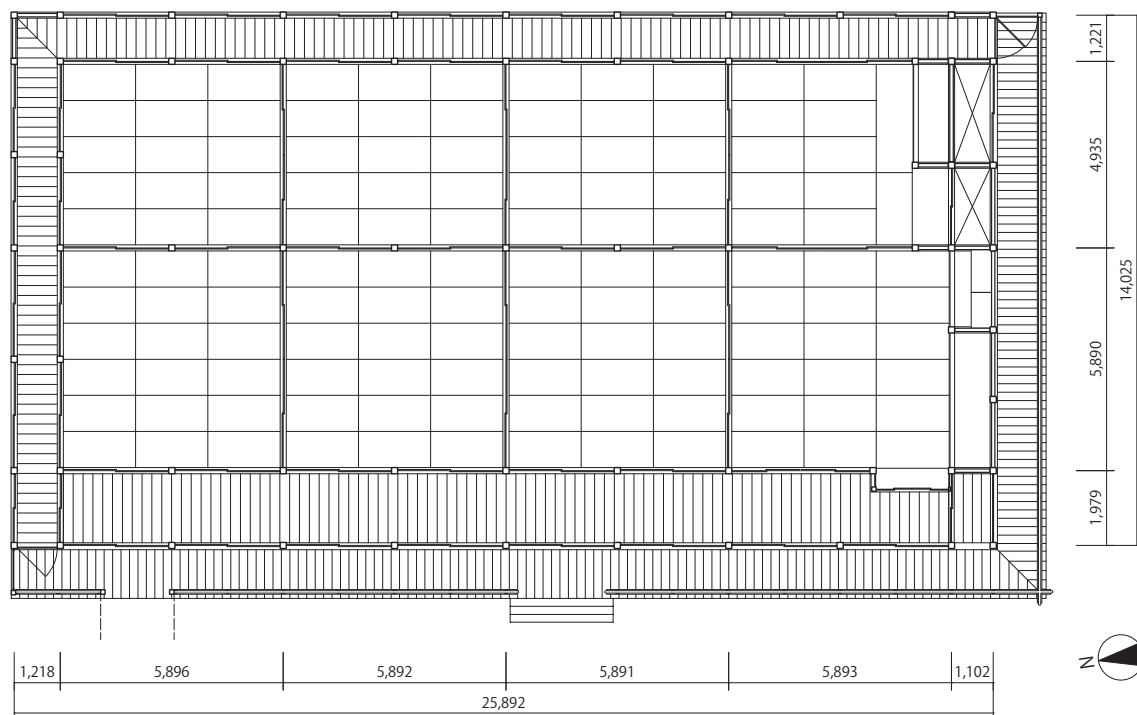


図 320 金剛峯寺別殿平面図 1:200

身舎柱は163mm四方の面取り角柱（面内145mm）で、敷居、鴨居、内法長押を設けて、柱上に軒桁をまわす。内法高は1,940mmである。軸部は素木造で、後述する第一室の床框や床板を除いて塗装もなく、非常に簡素な仕上げとする。側まわりの柱間装置は南面を除く各面に引違いの腰付ガラス障子戸を入れ、内法上には格子及び引違いのガラス障子欄を設ける。南面は東南隅の物入を引違いの舞良戸とし、その他は土壁漆喰塗とする。

室内では各室とも蟻壁長押をまわして蟻壁を設ける。室内と入側縁及び広縁の境は引違いの腰付障子戸とし、内法上は引違いのガラス障子欄間とする。西列の各部屋境では小壁に箴欄間を入れる。東西列境や東列の各部屋境はいずれの小壁も土壁漆喰塗とする。各室とも天井は南北方向に通した棹縁天井とし、現代の照明器具が設けられている。天井高は高く、大主殿書院と同様に室内は広々とした印象を与えている。

次に南面2室の床構えについて述べる。まず、第一室の床構えは床の間及び床脇、付書院を備え、別

殿の中でも最も格式が高い部屋である。床の間は面取り角柱の床柱を立てて幅2間弱の畳床とし、黒漆塗の床框にも面取りを施す。床壁はやや灰色味がかかる。床脇は黒漆塗の地板を入れ、その上に東に寄せて黒漆塗の地袋棚を設ける。さらに違棚と天袋を備える。付書院は天板を一枚板とした地袋棚を設け、その上に引違いの腰付障子戸と菱格子彫刻の書院欄間を設ける。第二室との境は内法上の小壁に箴欄間を入れる。

次に、第五室の床構えは1畳半の床の間で、床脇や付書院はなく、第一室の次格に位置付けられる。床柱は165mm四方の面取り角柱（面内145mm）とし、無目の落掛を渡す。床框及び床板に塗装はなく、第一室とは異なり、素木を基調とした意匠とする。床の間西は半間南へ引き込んだ畳敷とし、南面に設けた物入へと通じる。蟻壁長押と蟻壁は床の間及びこの引き込んだ半間分も含めて室内四周にめぐっている。

また各室の襖絵は1150年御遠忌記念事業の一環として、愛知県立芸術大学教授を勤めた守屋多々志



図 321 金剛峯寺別殿西面



図 322 金剛峯寺別殿西面



図 323 金剛峯寺別殿第一室

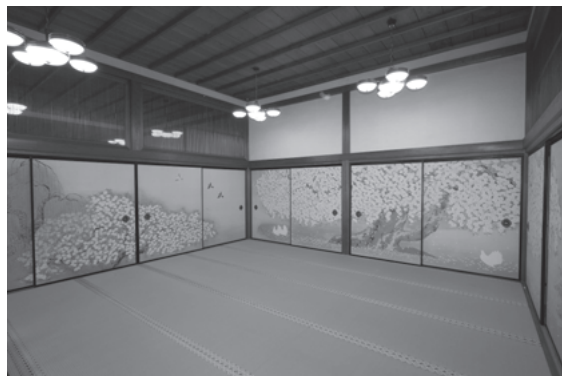


図 324 金剛峯寺別殿第二室

によって製作されたもので、昭和54年5月17日に完成、披露された。襖絵は四季の花鳥を題材に、弘法大師入唐から高野山草創までの風景を描いている。襖引手金具には牡丹唐草や五三の桐紋の装飾を施す。

西面広縁は幅広の板敷間で、各室境の柱筋で無目を渡し内法長押を設ける。内法長押上は竹の節欄間とし、化粧軒桁よりもやや下の位置に繫虹梁を渡す。南端の物入との境は引違い板戸で間仕切り、内法長押上に竹の節欄間を設けるが、小壁は土壁漆喰塗とする。広縁の天井は化粧天井とし、垂木上に化粧木舞を渡して化粧裏板を張る。広縁最南端の物入の縁に面した西側は建具を入れず開放とする。内法上に竹の節欄間を入れており、また改造等の痕跡も確認できないため、当初より開放であったと考えられる。

北面の内縁及び東面の入側縁は広縁と同様に部屋境の柱筋で内法に無目を渡し、竹の節欄間を設ける。さらに上部にも繫虹梁を渡す。濡縁との境である北面内縁の西端及び東面入側縁の南端には板開き戸を入れる。南面及び西面の濡縁は切石方形礎石上に縁

束を立て、縁葛を設けて縁板を敷く。縁上には跳高欄を設けて、西面中央に庭へ降りる木階を設ける。西面縁の北端には脇障子を設けている。

軒まわり 別殿の軒は一軒疎垂木で、垂木は面取りを施した棒垂木とする。妻飾は妻面に狐格子を入れ、拝みに六葉緒付きの猪目懸魚を下げる。

改修履歴 別殿は東面の廊下との取り付けを除いて大きな改変は見受けられない。東面廊下は昭和59年(1984)の新別殿の建設にともなって付加されたものとみられ、現在の北面と同様に、当初は入側縁のみで濡縁を設けていなかったと考えられる。廊下の建設では別殿東面側柱の内法やや上部に繫梁を挿入し、一部で側柱外面に廊下の柱が面付されている。

まとめ 別殿は昭和9年(1934)の弘法大師1100年御遠忌に向けた一連の造営で昭和8年に建設された。西本組をはじめとした建設に関わった施工業者も記録に残り、監督技師として大浦徳太郎も名を連ねる。同時に建てられた奥殿と比較すると細部意匠も少なく簡素な造りとし、来賓向けに荘厳した奥殿に対して、僧侶や一般信徒向けの客殿として落ち着



図 325 金剛峯寺別殿第三室

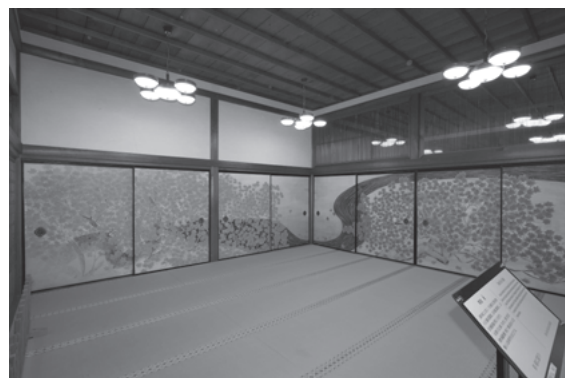


図 326 金剛峯寺別殿第四室

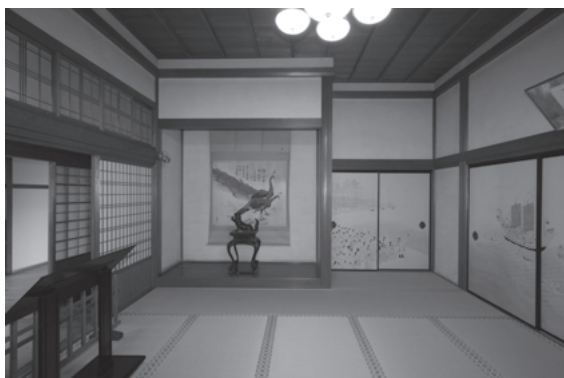


図 327 金剛峯寺別殿第五室



図 328 金剛峯寺別殿第六室

いた意匠といえる。しかしながら、伝統的な意匠や構造を用いて建設され、大主殿書院と同様に蟻壁を設けるなど、桃山様式を意識して建築されており、旧青巖寺の建造物を継承した、金剛峯寺にあって既存の境内に、うまく溶け込んだ近代和風建築と評価できよう。(福嶋啓人)

参考文献

金剛峯寺御遠忌事務局編『弘法大師壱千百年御遠忌紀要』、金剛峯寺、1943年。

弘法大師御入定千百五十年御遠忌大法会紀要編纂局『弘法大師御入定千百五十年御遠忌大法会紀要〈記録編〉』、金剛峯寺、1987年。

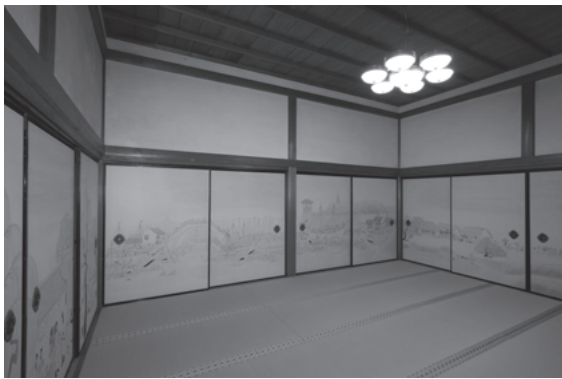


図 329 金剛峯寺別殿第七室

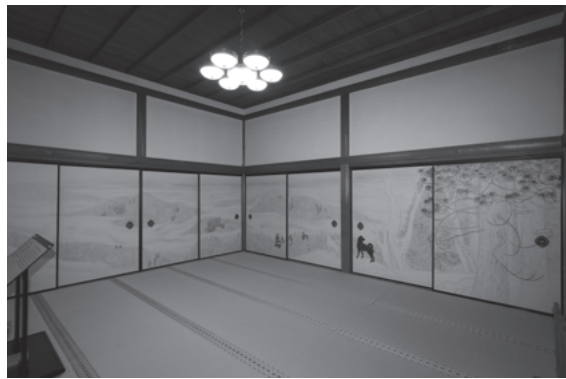


図 330 金剛峯寺別殿第八室



図 331 金剛峯寺別殿西面広縁



図 332 金剛峯寺別殿西面広縁



図 333 金剛峯寺別殿襖引手金具

3 六時鐘楼 (PL.15)

構造形式 方1間、入母屋造、檜皮葺

建立年代 慶応元年（1865）『高野山寺院明細帳』

概要 六時鐘楼は金剛峯寺の境内南面に位置し、県道63号（高野天川線）に面して建つ。「六時の鐘」とも呼ばれ、現在も午前6時から午後10時まで、偶数時刻に時を知らせている。

『高野春秋輯録』ならびに『紀伊続風土記』によれば、六時鐘楼は、豊臣秀吉に仕えた福島正則が父母の追福菩提を祈り、元和4年（1618）に建立されたことに始まる。創建地は現在と同位置とみられ、ここはかつて「中尾鼻」という小字であった。寛永7年（1630）の大火により焼失し、寛永12年（1635）に福島正則の息子正利によって再建され、このとき梵鐘も再鑄造されたという。この梵鐘が現在まで残されている。その後、文化6年（1809）にも類焼し、20年余り仮堂であったが、天保6年（1835）に旧制に復して再建した。さらに『高野山寺院明細帳』によれば、元治元年（1864）にも再度焼失し、現在の建物は慶応元年（1865）に再建されたものである。なお『紀伊続風土記』によれば、六時鐘楼に要する月々の夜燈料等費用は学侶方と行人方とで月替えて工面していたという。

六時鐘楼の北には木造、平屋、切妻造、銅板葺の宿舎が建ち、宿舎から六時鐘楼の建つ基壇上までは登り廊の渡り廊下が接続する。六時鐘楼基壇の西南隅には「四町」と記された町石が建つ。

平面と軸部 六時鐘楼は桁行3間、梁間3間、入母屋造、檜皮葺の東西棟建物である。各面とも中央間を広くとり、枝割は隅柱上のみ垂木を心揃えとし、全体で16枝とする。1枝寸法は246mmで、8寸～8寸1分となる。後述の間柱の柱径はこの1枝寸法に合致し、垂木心間に間柱が収まることとなる。したがって、隅柱心から間柱までは4枝、間柱は1枝分、間柱間の中央間は6枝となる。

軸部は石垣の上に、さらに床下に納まるの乱石積基壇を築く。基壇上面は土間仕上げとする。石垣は東面裾に張り出しをもち、後述のように、かつては立札の設置場所であったとみられる。鐘楼の軸部は、

基壇周囲に自然石の礎石を据えて、礎石にひかり付けた柱を立てる。隅柱は約280mm四方の面取り角柱（面内245mm）、間柱は約250mm四方の面取り角柱（面内210mm）とし、足固貫、内法貫、内法長押、頭貫で軸部を固める。柱は内転びせず、また内法長押は内外両面に設ける。鐘付棒は東面中央間の位置に吊り下げられ、この柱間のみ内法貫及び内法長押を設けていない。柱上には台輪を置き、大斗絵様肘木の組物を介して化粧桁を支持する。また間柱上部に南北方向に梁を架ける。後述のとおり、天井を張るため小屋組は確認できないが、この梁上にさらに、梵鐘を吊るための鐘吊梁を渡すと考えられる。なお、各隅柱の傾倒を防ぐために、現状では隅柱に八角形断面の類杖を設け、さらに、西面の入り口開口部を除いて、各面の隅柱どうしを襷掛けで固定するように

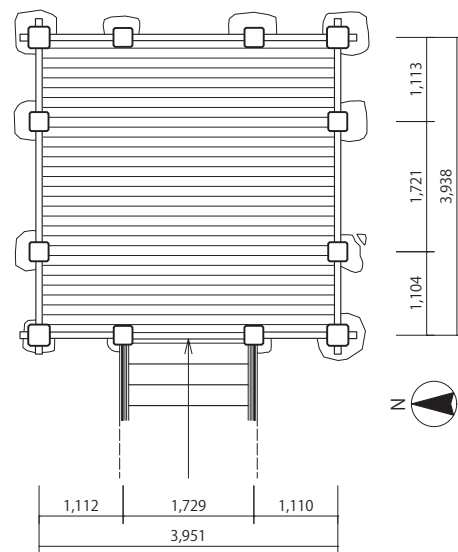


図 334 六時鐘楼平面図 1:100



図 335 六時鐘楼石垣

筋違をボルト留めしている。これは後述のように、この頬杖や筋違は大正の高野山開創 1100 年記念大法会の際に補強として追加されたものとみられる。

床は、基壇上に転ばし根太を配し、その上に床板を張る。天井は先述の間柱上部の梁下面を化粧とし、その他は南北方向に棹を通す棹縁天井とする。柱間装置は足固貫から腰高まで豎板壁とし、その他は吹放ちとする。

軒まわり 軒は一軒、繁垂木とし、垂木は棒垂木である。一軒ではあるが、軒の出が非常に深く、六時鐘楼のタチの高さも相まって、雄大な外観意匠を印象づけている。妻飾は妻壁に絵様付き虹梁を架けて、その他は豎板壁とする。破風拌みには鱗付きの六葉猪目懸魚を下げる。

彫刻・金具 彫刻は主に絵様で、頭貫木鼻や肘木、妻虹梁に渦絵様を施す。金具は内法長押に釘隠し金具を設ける。梵鐘は先述の通り、寛永 12 年再建時のものとされ、青銅製で、口径は 795 mm、厚みは 90 mm

である。その他木部に塗装はなく素木造とし、全体的に装飾を控えた簡素な造りとする。

改造等 六時鐘楼が建つ石垣は、地上から高さ約 3.5m の位置を境に、上下で石材の特徴が異なる。上半の石積は下半に比して表面を平滑に仕上げ、下半は野面に近い。また下半の石材は全体的にやや赤味がかかったチャート系の石材を用いている。『紀伊続風土記』によれば、建物が傾いたために宝暦 3 年 (1753) に修繕を加え、このときに石壇 (石垣) も 3 尺高くしたという。上半の石積は高さ 3 尺程度であり、文献の記述と合致する。下半の石積は、宝暦 3 年以前、おそらくは元和 4 年創建当初の石積基壇である可能性が高い。

そのほかにも記録上確認できる修繕は 2 時期ある。ひとつ目は高野山開創 1100 年記念大法会の際で具体的な修繕内容は不明である。ふたつ目は平成の大修理 (平成 9 年) のもので、六時鐘楼及び鐘楼堂へ通じる登り廊の屋根葺替えがおこなわれ、銅板葺に

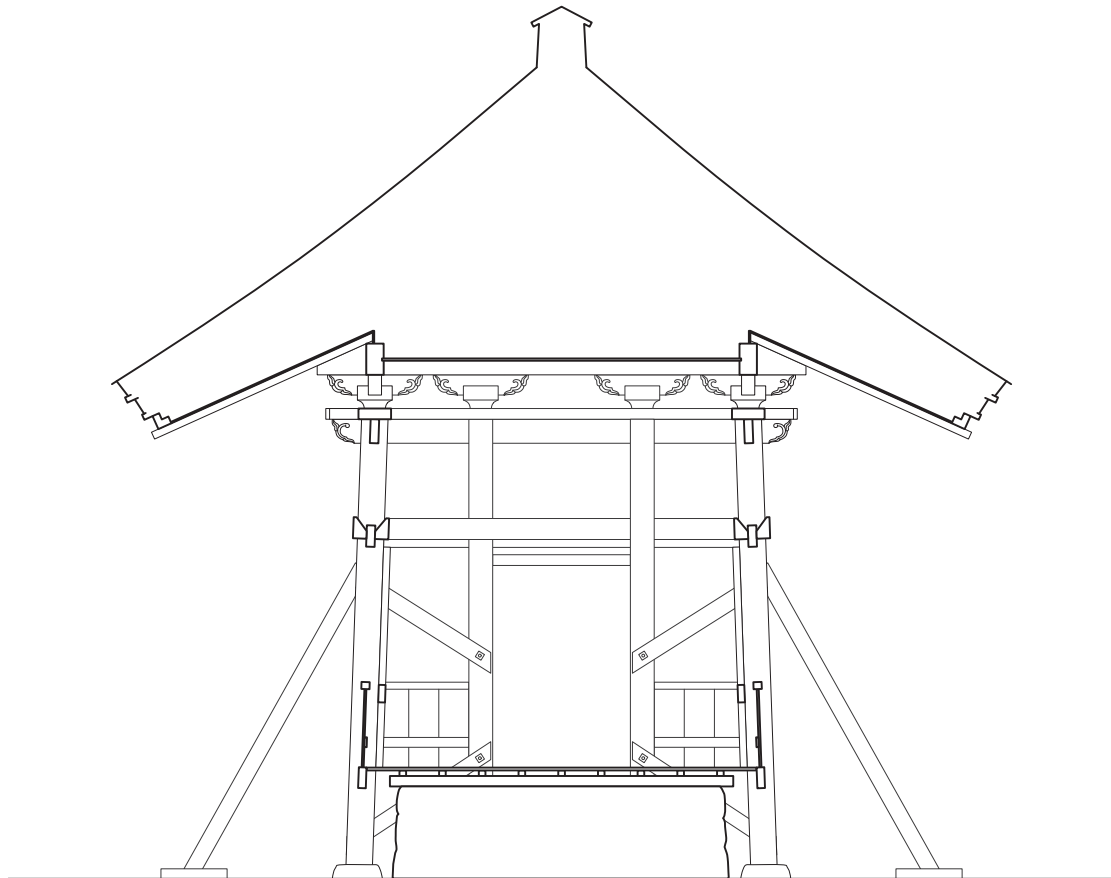


図 336 六時鐘楼断面図 1:80

葺き替えられた。現在確認できる木部の改造は、ひとつめに東面中央間の内法長押上部の貫穴である。鐘釣棒を避けて通した胴差の痕跡とみられ、また鐘釣棒を吊る鎖は垂木から吊り下げるが、東面の垂木で一部近年に修繕した形跡がある。鐘釣棒の更新に際して、吊り下げ位置の変更や胴差の撤去がなされたと考えられる。これらの修理は平成9年のものとみる。また、隅柱の頬杖及び筋違は材の風食具合から、開創1100年記念大法会に際した修理とみられる。そのほか、一部の頬杖の根継や床板の新調、天



図 337 六時鐘楼側まわり



図 338 六時鐘楼軒まわり見上げ



図 339 六時鐘楼隅木



図 340 六時鐘楼内部



図 341 六時鐘楼天井見上げ



図 342 六時鐘楼妻飾



図 343 六時鐘楼側柱内法長押上の胴差痕跡

井まわりは平成9年の修繕と考えられる。

絵図にみる六時鐘楼 次に、絵画史料に描かれた六時鐘楼について、以下12点の史料から六時鐘楼の変遷をみていきたい。

絵画史料としての初出は、正保3年(1646)の「御公儀上一山図」(金剛峯寺蔵、図172)で、現在と同じ位置に、石垣に入母屋造の堂宇が描かれ、屋根は瓦葺ではないため檜皮葺とみられる。東西棟建物で、桁行1~2間、梁間1間とし、南面の柱間には格子の描写が確認できる。史料の年代からも寛永7年の大火後に再建された建物であろう。

2点目は、承応2年(1653)製作の「高野山絵図」(金剛峯寺蔵、図173)で、「御公儀上一山図」と同様に石垣に入母屋造の堂宇が描かれている。東西棟建物で具体的な柱間数は不明である。六時鐘楼の東には「惣分制札」と記された付箋が貼り付けられている。

3点目は、万治元年(1658)に製作された「高野山絵図」(金剛峯寺蔵、図174)で、石積基壇上に入母屋造、檜皮葺、東西棟建物の堂宇が建つ。桁行2間、梁間1間で描かれている。

4点目は、元禄6年(1693)「高野山壇上并寺中絵図」(金剛峯寺蔵、図175)で、同様に石積基壇上に入母屋造東西棟建物の堂宇が描かれる。この史料では梵鐘も描かれ、また基壇上には塀がめぐり、堂宇西面には渡り廊下であろうか、別の建物も描かれている。加えて、六時鐘楼東には石積が延び、「制札」と書かれた札所も描かれる。

5点目は宝永3年(1706)「高野山壇上寺家絵図」(金剛峯寺蔵、図176)で、石積基壇上に入母屋造の六時鐘楼が描かれ、梵鐘も確認できる。石垣上には塀がめぐり、六時鐘楼西には「鐘楼庵」として入母屋造で縁を備えた宿舎とみられる堂宇が描かれており、六時鐘楼とは登り廊で接続している。この絵図にも石垣東に小段の石積が描かれ、「札場」と記される。

6点目は、寛政8年(1796)『高野山古図』(西室院蔵、図177)で、石垣に切妻造東西棟建物の六時鐘楼が描かれる。桁行3間、梁間3間とし、基壇上には塀がめぐり、六時鐘楼西にも石垣が描かれ、この上

に寄棟造、桁行3間、梁間1間、東西棟建物の宿舎とみられる堂宇が描かれる。『高野山壇上寺家絵図』の宿舎と同じく縁を備える。また宿舎の建つ基壇上には西・南面にも塀が設けられている。この絵図にも「制札」の石積が描かれる。

7点目は江戸中期製作と考えられる「高野全山及び周辺の絵図」(西南院蔵、図345)で、石垣上に六時鐘楼及びその西に宿舎が描かれる。六時鐘楼は桁行3間、梁間3間、切妻造、檜皮葺、東西棟建物で、周囲に塀がめぐり、宿舎は桁行3間、梁間1間以上、入母屋造、檜皮葺の東西棟建物として描かれる。両棟の間には檜皮葺の渡り廊下が建つ。また石垣の東には囲いがあり、立札が描かれる。

8点目は江戸後期製作とみられる「高野全山及び周辺の絵図」(海照寺蔵、図178)で、石垣上に入母屋造、東西棟建物の六時鐘楼が描かれる。基壇上の周囲には塀らしき描写もあるが、六時鐘楼の柱間は1間四方である。西には一段低い基壇上に宿舎が描かれ、塀がめぐり、宿舎の規模や形式は不明であるが、六時鐘楼とは渡り廊下で接続する。また石垣の東には石垣に沿って札所のような描写もある。

9点目は江戸後期製作の「高野全山及び周辺の絵図」(持明院蔵、図179)で、石垣に入母屋造、檜皮葺、一間四方の六時鐘楼が描かれる。柱は内転びし、石垣上には塀がめぐり、六時鐘楼西には、やや低い石垣上に塀をめぐらし、その中に宿舎が2棟建つ。東の1棟は入母屋造、檜皮葺の南北棟建物で、西の1棟は東西棟建物のようなものである。また、石垣には白色に塗られた切石基壇の札所が描かれる。

10点目は文化10年(1813)の「高野山細見絵図」(図180)である。六時鐘楼は石積基壇上に建つ切妻造の東西棟建物で、基壇上には塀がめぐり、その西にはやや低い石垣上に塀をめぐらし、切妻造、東西棟建物の宿舎が描かれる。また、これまでと同様に石垣の東に囲いが設けられ「制札」とある。

11点目は、明治17年(1884)の「高野山一覽全図」で(図345)、個別に名所や主要建物が描かれる。六時鐘楼は石積基壇上に桁行3間、梁間3間、入母屋造、檜皮葺の東西棟建物として描かれる。軸部には長押のような横架材を設けており、筋違はない。石

垣上には塀がめぐり、六時鐘楼西には宿舎らしき建物も小さく描かれている。石垣の東の裾には現在と同様に別の石積基壇があり、囲いを設けて石垣の手前と上の2か所に札所が設置されている。

最後に明治29年(1896)の「高野山全図」(持明院蔵、図346)では、石垣上に建つ六時鐘楼が描かれるが、屋根形式は不明である。西隣の宿舎や石垣上の塀、東面の札所も描かれていない。

以上、12点の絵図から六時鐘楼の変遷をみてきた。史料の制約から創建当初の姿は不明であるが、正保3年の『御公儀上一山図』に描かれた寛永7年大火後の六時鐘楼は現在地に建ち、場所は創建時から変化がないと考えられる。屋根は、江戸中期頃には切妻造に描かれているものもあるが、それ以外は入母屋造である。元禄以後の絵図では六時鐘楼西の宿舎(鐘楼庵)や渡り廊下も描かれるようになる。本体の石垣東裾の札所は承応2年の『高野山絵図』にも付箋が貼られるが、現行と同様の石垣の張り出しはこれも元禄頃から描写される。また、宿舎や渡り廊下などの付属施設は元禄頃から描かれており、元

禄期以前に存在していたことが指摘できる。

まとめ 六時鐘楼は元和4年の創建時からその位置を変えず、かつ本体の石垣下半部分は創建当時のものが引き継がれている可能性が高い。創建後から幾度も火災と再建を繰り返し、現在の六時鐘楼は慶応元年に再建されたもので、幕末の一連の造営の中に位置づけられる。建物は近代に付加された補強材もあるが、装飾は控えめで簡素な造りとし、当初材を良く残す。柱は木太く、古式に則るためか面取りも広い。創建時から連綿と山内に時を知らせ、山内の中心街路に面して、シンボリックな存在としても重要な建物であると評価できる。(福嶋啓人)



図 344 六時鐘楼銅鐘



図 345 「高野山全図及び周辺の絵図」(江戸中期、西南院蔵、『高野山古絵図集成』225頁)



図 346 「高野山一覽全図」(明治17年=1884)『高野山古絵図集成』288頁)

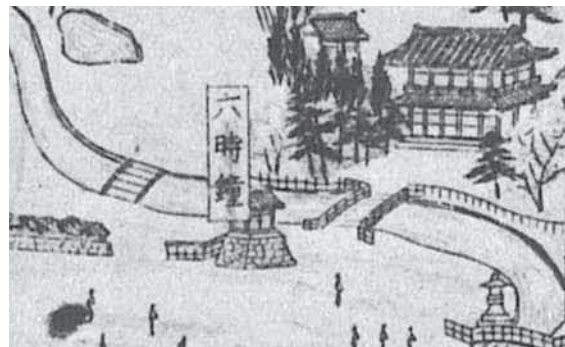


図 347 「高野山全図」(明治29年=1896、『高野山古絵図集成』295頁)

4 壇上加藍

(1) 概要

壇上加藍の沿革と配置の概要については、第4章において述べた。本項では、江戸時代の絵図に描かれた壇上加藍の姿を概観した上で、古代以来の壇上加藍の変遷の概要を示す。

絵 図 壇上加藍は、弘仁7年(816)に嵯峨天皇から高野山を賜った空海が建立に着手して以来、営々と築き上げられてきた(図348)。とくに根本大塔への落雷や失火による火災の度に、復興を遂げてきたことは、特筆すべきことである。

本章金剛峯寺の節でとりあげた江戸時代の絵図で(図350～357)、壇上加藍をみると詳細に建物が描かれ、規模や屋根形式などの特徴を捉えている。

正保3年(1646)の「御公儀一山図」に描かれた建物は、山王院本殿の丹生明神社・高野明神社・総社を除けば、いずれもその後焼失しているものの、現在の建物と比較すると、細部は個別の検討を要する

ものの、配置・規模・屋根形式は概ね一致する。また特筆すべきは、その時に建っていた建物のみならず、罹災焼失した建物として、金堂、西塔、東塔、経蔵、文殊堂の跡地を描く。承応2年(1653)の「高野山絵図」、万治元年(1658)の「高野山総図」も同様である。宝永3年(1706)の「高野山壇上寺家絵図」では、焼失した金堂の基壇上に、仮堂を描く。

伽藍の変遷 個別建物の変遷は、煩になるため、各項に譲ることとして、現存する建物を中心に、創建・罹災・再建の年代を示しておく(図349、『史跡金剛峯寺境内伽藍地区・本山地区環境整備基本計画書』高野山真言宗総本山金剛峯寺、2009年、58頁掲載年表を参考に作成した)。(鈴木智大)

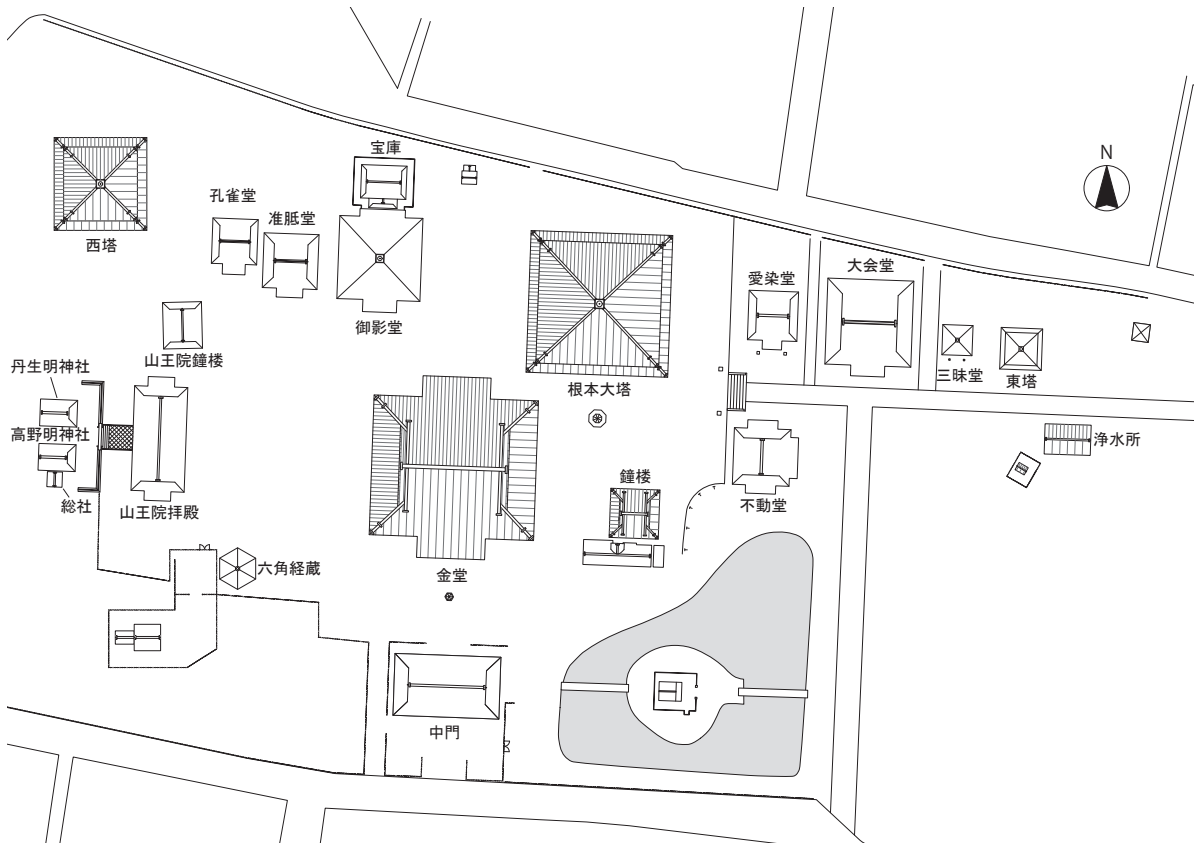


図 348 壇上加藍配置図 1:2000

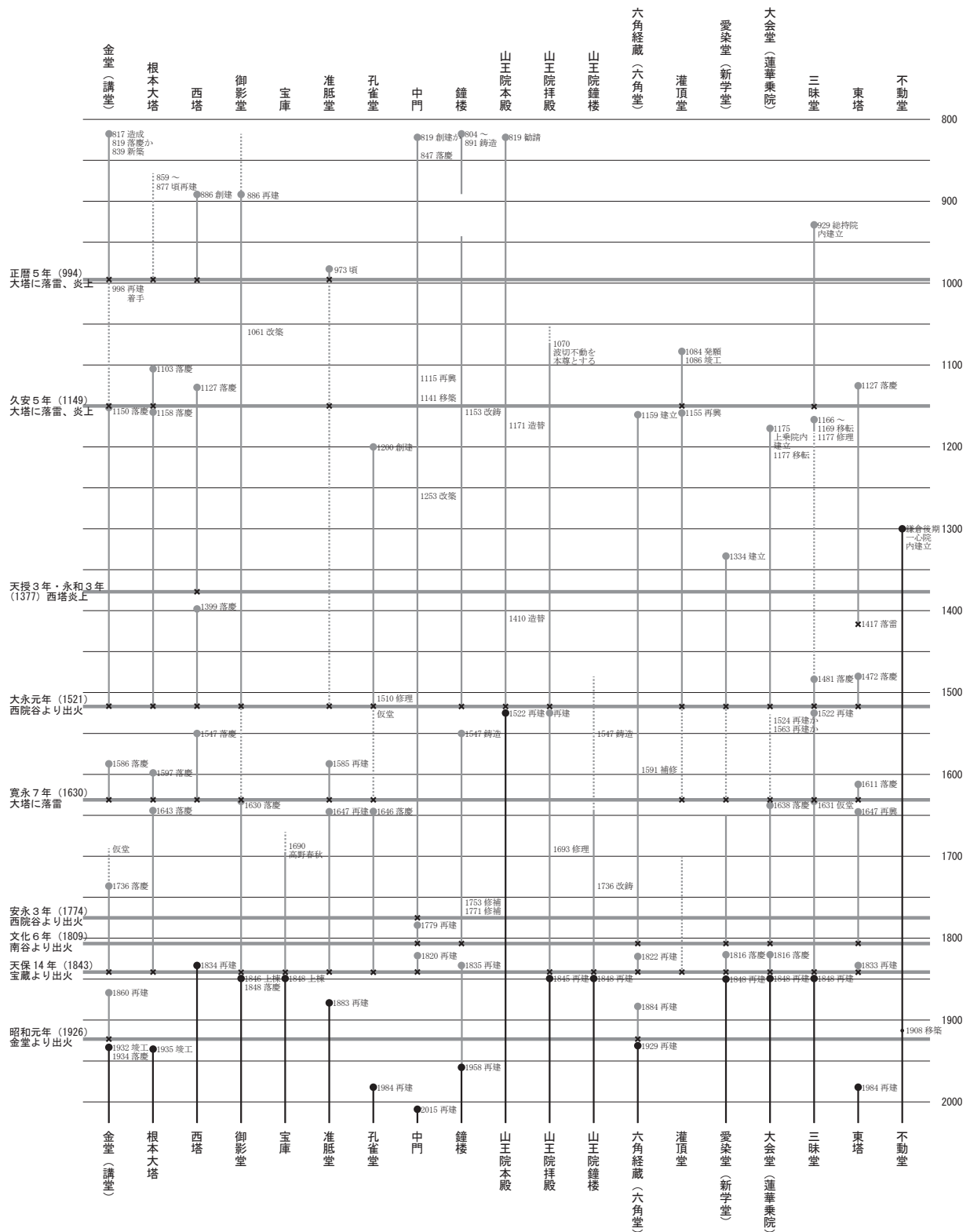


図 349 壇上加藍の変遷

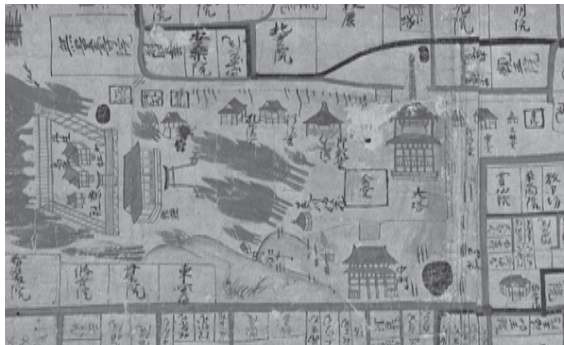


図 350 御公儀上一山図（正保3年＝1646、『高野山古絵図集成』65頁）

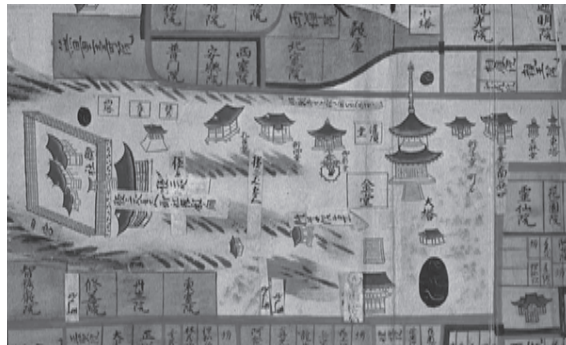


図 351 「高野山絵図」（承応2年＝1653、『高野山古絵図集成』94頁）

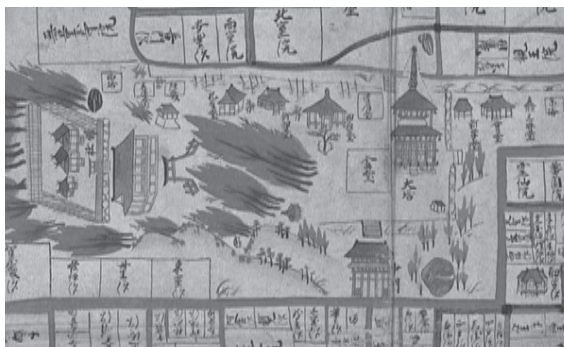


図 352 「高野山総図」（万治元年＝1658、『高野山古絵図集成』106頁）

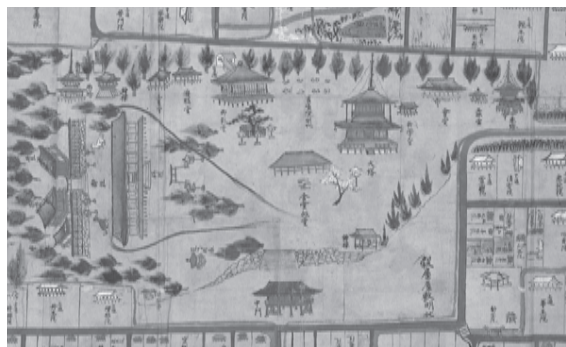


図 353 「高野山壇上并寺中絵図」（元禄6年＝1693、『高野山古絵図集成』120頁）



図 354 「高野山壇上寺家絵図」（宝永3年＝1706、『高野山古絵図集成』131・132頁）

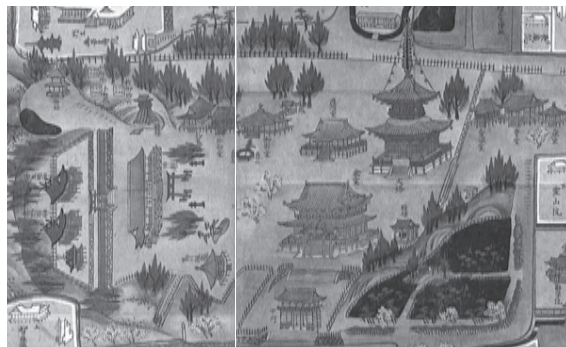


図 355 「高野山古図」（寛政8年＝1796、『高野山古絵図集成』182・183頁）



図 356 「高野山全山及び周辺の絵図」（江戸後期、『高野山古絵図集成』238頁）



図 357 「高野山細見絵図」（文化10年＝1693、『高野山古絵図集成』271頁）

(2) 金堂 (PL.16・17)

構造形式 鉄骨鉄筋コンクリート造・木造混構造、桁行9間、梁間7間、入母屋造、銅瓦葺、正背面3間向拝付

建立年代 昭和9年(1934)『弘法大師老千百年御遠忌紀要』

概要 金堂は、中門をくぐった壇上加藍の中央で、南面して建つ。構造形式は、桁行9間、梁間7間、入母屋造、本瓦型銅瓦葺で、正背面に3間の向拝をかける。四周に縁を巡らし、四方に木階を設ける。平面は、四周の側を外陣として、桁行5間、梁行4間の内陣を取り囲む。外陣の幅は、正面面が2間、背面が1間で、内陣は後方寄りに位置する。側まわりの柱間装置は、各面の端間が盲連子窓で、それ以外は外開板扉とする。主体構造は鉄骨鉄筋コンクリート造で、組物、軒まわりの化粧材は高野檜を用いてつくられている。一山の総本堂として利用さ

れ、高野山の主な行事はここで催される。本尊として高村光雲作の薬師如来を祀り、両部曼荼羅は血曼荼羅である。

弘仁10年(819)の創建とされ、以来焼失と再建を繰り返す。現在の建物は8代目に相当する。昭和元年(1926)に前身の金堂が焼失し、根本大塔の再建に先駆けて金堂の再建へと方針転換がおこなわれ、翌年御遠忌局により臨時宗会召集されて金堂再建方針の附議承認を得て、予算や工程の立案、建築様式などの研究を重ねられ、昭和3年(1928)に起工、同7年(1932)に竣工、同9年(1934)に落慶法要がおこなわれた。鉄骨鉄筋コンクリート造の主体構造部分は武田五一が設計し、大林組が施工した。木造部分は天沼俊一が設計し、魚津弘吉が棟梁を務め施工した。

基壇と礎石 基壇は花崗岩を張り付けた壇正積基

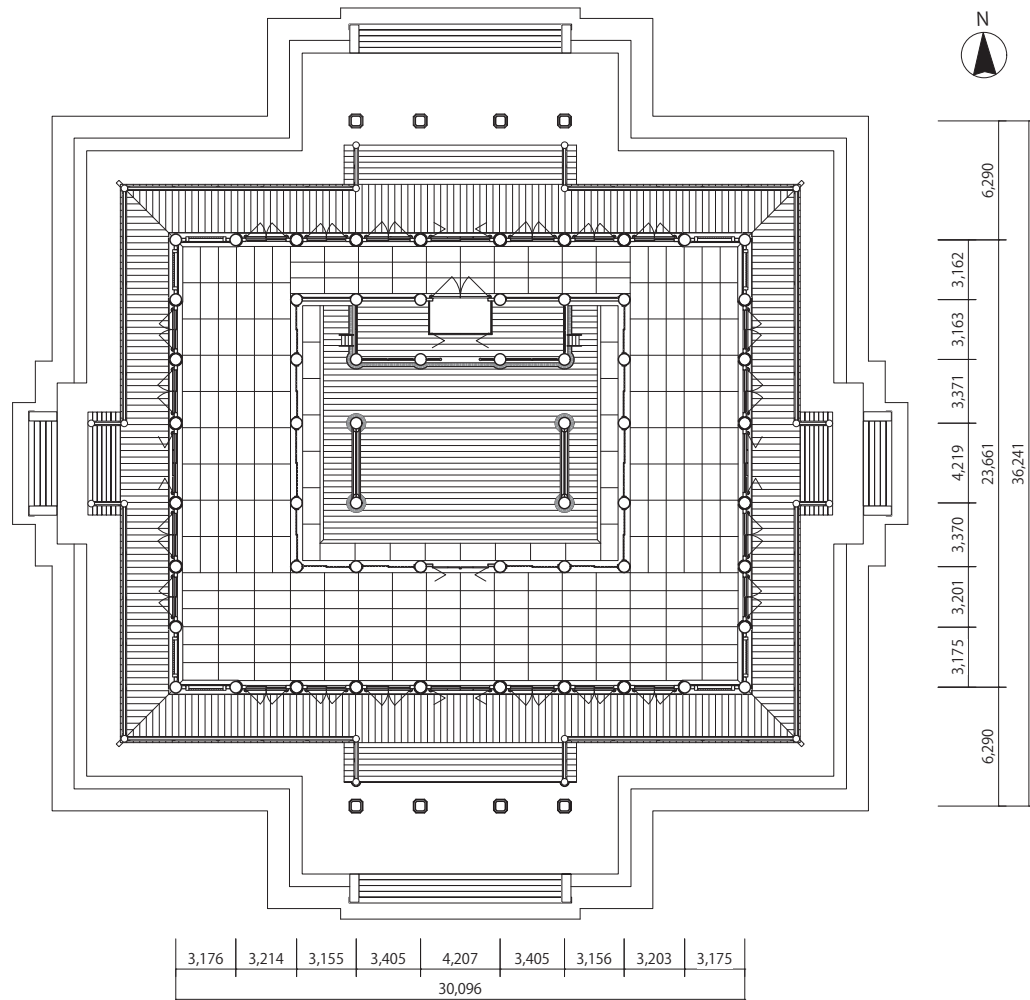


図 358 壇上加藍金堂平面図 1:400

壇で、基壇の上面は花崗岩の布敷とする。基壇の四方は、正背面の向拝と両側面の木階に沿って突出させ、各面に4級の石階を設ける。基壇の上面では、縁束の内側に亀腹を立ち上げ、その上に円座造り出しの花崗岩礎石を据える。

軸部 軸部は、径610mmの円柱を切目長押、半長押、内法長押、頭貫で固める。円柱に粽はない。盲連子窓とする端間では、内法長押の下に、さらに腰長押と飛貫を入れる。

組物 組物は、軒小天井と軒支輪を備えた和様三手先組物で、実肘木を介して円形断面の丸桁を支持する。壁付には、二の肘木と四の肘木として、壁付通肘木を2本入れる。中備は、間斗束を上下に2段立てる。肘木には笹繰を施し、軒支輪は勾配が比較的緩やかで、これらは奈良時代末頃に建立した唐招提寺金堂などの形式を想起させる。ただし、軒小天井の直下で挺出方向に四の肘木を出す点は、これより発展した当麻寺東塔の形式を採る。そのため、尾垂木の下面は四の挺出肘木と二手目の秤肘木で支持される。また、各手先間隔は均等のように、三手目の秤肘木を平と隅とで繋いで斗を等間隔に並べ、二手目の秤肘木を交差させてこれを受けることで、平等院鳳凰堂のように隅の納まりが整然とする。なお、隅行の一の肘木を、巻斗や盃面戸との一木造り出しにするような工夫はない。

軒まわり 軒は、二軒平行繁垂木で、地垂木を円形断面、飛檐垂木を角形断面とする。飛檐垂木に反り・扱きを備える。飛檐垂木の出は大きく、茅負の上に切裏甲をのせる。大規模であるものの、地隅木と二の隅尾垂木との間には束や隅鬼などを立てな



図359 壇上加藍金堂組物・軒まわり

い。なお、飛檐隅木の鼻先に造り出しはない。

側まわりの柱間装置 柱間装置は、前述の通り各面の端間が盲連子窓で、それ以外は外開板扉とする。内法長押と頭貫との間には、いずれも小壁が入る。板扉は端喰で、中央間では双折とする。扉口には幣軸を回し、方立と蹴放を入れる。幣軸と半長押に軸摺を彫り、板扉を吊る。蹴放を敷居として、引違内障子戸を入れる。盲連子窓は、腰長押と飛貫との間に杵を組んで立て込む。盲連子窓の脇には、小脇壁が現れる。腰長押の下は壁で、飛貫と内法長押との間に小壁が入る。

縁と階段 縁は四方切目縁で、四隅に擬宝珠親柱を立てた擬宝珠高欄を巡らす。縁は、縁束を立ててこれを縁葛で繋ぎ、縁板を張る。縁束は幅330mmの面取角束で、面取は大きく面内230mmを測る。縁束の下には、面取角束の平面形状に沿わせた八角形の造り出しを持つ花崗岩礎石を基壇上面に据える。縁は、正背面では中央3間分、両側面では中央間と対応するように木階を設ける。木階は、正背面では7級とするが、両側面では6級としてその下に沓石を置く。縁高欄は、木階と対応するように四方に昇高欄を設けて開放する。昇高欄の擬宝珠親柱は、正背面では基壇上面に円形柱座造り出しの花崗岩礎石を据えて立てるが、両側面では沓石上に立てる。

金具 金具類としては、各長押に六葉の釘隠金具を打つ。四隅の飛檐隅木に、風鐸を垂下する。四面の石階と対応させて各面に堅樋を2本立て、軒先の雨樋から雨水を雨落溝に注ぐ。板扉は端喰であるが、外側に乳金具と入八双金具で荘厳する。半長押と幣軸の受座には、軸摺金物を付す。縁高欄には、擬宝



図360 壇上加藍金堂向拝見上げ

珠金具のほか、架木に六葉の釘隠金具を打つ。

向 拝 正背面には、中央3間分と対応するように向拝をかける。向拝柱は幅515mmの面取角柱で、面取は大きく面内320mmを測る。向拝柱の下には、柱の平面形状に沿わせた八角形の造り出しを持つ花崗岩礎石を基壇上面に据える。向拝柱は、面取の大きな虹梁形の頭貫で繋ぎ、大仏様木鼻を突出させる。この虹梁に錫杖彫はない。

向拝組物は出組で、大斗、杵肘木と三斗を組んだ上に繫虹梁をのせ、側柱の頭貫高に渡す。側柱には一手先の挿肘木を入れ、繫虹梁の下端を支持する。向拝組物の手先には秤肘木を組み、秤肘木からは虹梁鼻を突出させる。向拝柱筋では実肘木を介して角形断面の向拝桁を受けるが、手先では実肘木がなく、三斗で円形断面の丸桁を支持する。向拝柱筋の内側では、一手目に揃えて円形断面の母屋を入れる。そのため、向拝では3本の桁を渡して軒を支持する。この内側一手目の母屋は、繫虹梁の鯖尻を欠いて巻斗を据え、その上に平三斗を組みで支持する特異な納まりである。各間の中備は、二の通肘木の上を間斗実肘木、下を間斗人字形割束とする。人字形割束は、雲岡石窟のような直線形状で、古式である。

軒は平行繫垂木で、角形断面の打越垂木を用い、飛檐垂木を重ねる。縫破風には猪目の降懸魚を1つつけ、桁3本を覆う。

外 陣 外陣の幅は、前述の通り正側面が2間、背面が1間である。内外陣境には円柱を立て、これを内法長押と頭貫とで固める。背面の両脇間、両端間には、さらに腰貫を入れる。正側面の側柱筋と内外陣境には、繫虹梁を渡して固める。正側面の隅では、



図 361 壇上加藍金堂向拝軒下

隅行に繫虹梁を架け、入側柱筋には架からない。背側面の隅では、側面の入側柱筋に繫虹梁を架け、隅行と背面には架からない。

側柱と内外陣境の柱とでは高さを変え、側柱の上に大斗、杵肘木と三斗を組み、その上に繫虹梁をのせ、これを内外陣境の柱の頭貫の下の高さに挿して架け渡す。内外陣境の柱には一手先の挿肘木を入れ、繫虹梁の下端を支持する。内法長押は、この挿肘木の下端と接して打たれる。隅行にも、同様の虹梁を架け渡す。なお、側柱筋の内側の組物は外側と異なり、壁付の三の肘木を通肘木とする。そのため、中備の間斗束は二の壁付通肘木の下に入り、その上には間斗を置く。また、内側では一手先とするが、これは繫虹梁の鯖尻から巻斗形を造り出し、この巻斗で通肘木を繋いだ特異なものである。壁付通肘木と手先の通肘木との間に三の肘木を入れてこれらを繋ぐが、木鼻を出さない。繫虹梁を受けない柱の上では、出組としてこの通肘木を支持する。壁付通肘木と手先の秤肘木との間に笹繰付の二の肘木を入れてこれらを繋ぐが、同じく木鼻を出さない。

内外陣境の柱の上には、出三斗を組み、中備として間斗束を入れる。繫虹梁の中央に板墓股を置き、この上にも出三斗を組む。これらの出三斗に通肘木を十字に渡し、これを天井桁として入側1間に組入天井を張る。側1間は、側通りの一手目の通肘木から虹梁墓股上の天井桁に化粧垂木を掛け、勾配天井とする。

内外陣境の柱間装置は、正側面の各間を引違格子戸とし、背面の中央間を外開板扉、背面の両脇間、両端間を壁とする。引違格子戸は、敷居、鴨居、辺付

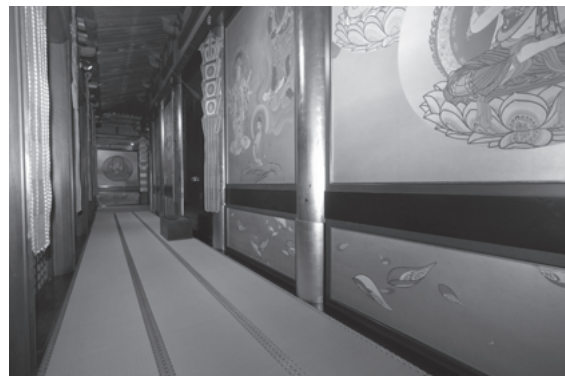


図 362 壇上加藍金堂外陣背面側

で立て込む。鴨居と内法長押の間には、枿を組んで菱形格子の欄間を嵌め込む。外陣の床は畳敷とする。

内外陣境の円柱は、内法長押以下でコンクリート表面に金箔箔押しとし、内法長押以上では素木の表現とする。内法長押、背面の腰貫と扉口まわりは黒色塗装、菱形格子窓は緑青色塗装とする。側通りの盲連子窓の内側と内外陣境背面の壁には、真言八祖像の仏面を描き、腰長押の下にも彩色を施す。内法長押には、六葉の釘隠を打つ。

内陣 内陣は、前述の通り桁行5間、梁行4間である。内陣背面から手前1間の柱筋には円柱を4本立て、側面1間、正面3間の仏壇を構える。この柱筋の円柱は、内外陣境の円柱を含め内法貫と頭貫とで固める。仏壇まわりの円柱の下部と仏壇地覆には、蓮華座を展開させる。仏壇の手前では、内陣両側面から1間内側の柱筋に円柱を前後に2本立て、両部曼荼羅を掛ける。これらの円柱にも、下部に蓮華座を添える。この柱筋は、内陣の正面から仏壇の隅柱までを内法貫と頭貫とで固める。両部曼荼羅を掛ける柱間には、さらに腰貫と楣を入れ、枿を組ん

で壁を入れる。また、正面側両隅の円柱間も内法貫と頭貫で固める。これらの内法貫と頭貫との間には小壁を入れる。なお、内外陣境の軸部は基本的には外陣側と同じだが、背面の内外陣境は外陣側が内法長押を打つのに対し、内陣側にはなく内法貫を渡す。

内陣の外周1間は、柱上に出組を組んで組入天井を張る。小壁には、中備として間斗束を立てる。外周1間に囲まれた内側は、柱上から二手先組物を出して小天井を張り、手先の通肘木から支輪を立ち上げ折上組入天井を張る。組物間には、中備として間斗束を上下に2段立てる。天井からは天蓋を吊り荘厳する。床は拭板敷で、正側面は畳を追いまわし敷きとする。

仏壇には高欄を据え、羽目板に格狭間を施す。高欄は中央間に擬宝珠親柱を立てて開放する。格狭間には盲連子と猪目の装飾を入れる。仏壇と高欄は黒色塗装を貴重とし、盲連子を緑色塗装、架木などを赤色塗装とする。円柱と背面の壁は金箔箔押しとし、内法長押、内法貫、腰貫、頭貫、板床などは黒色塗装とする。組物以上の部材は、素木の表現とする。



図 363 壇上加藍金堂外陣架構見上げ

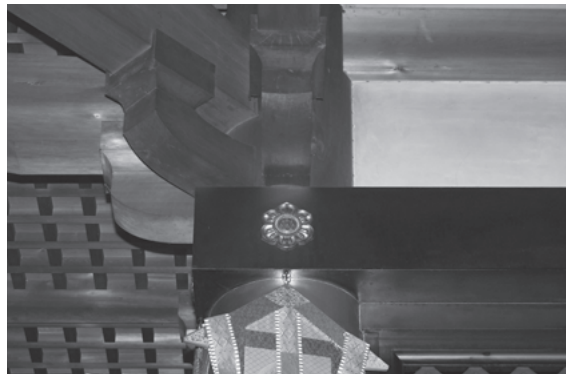


図 364 壇上加藍金堂外陣内法長押釘隠し



図 365 壇上加藍金堂内陣



図 366 壇上加藍金堂内陣天井見上げ

内外陣境の内法長押には、外陣側と同様に六葉の釘隠を打つ。高欄の親柱には擬宝珠金具を付す。

厨子 仏壇上に厨子を安置する。厨子は台座上に建ち、方1間で寄棟造風の屋根とする。台座は地覆、束、框、羽目板からなり、羽目板に格狭間を施す。この台座上に面取の大きな角柱を立て、これを地長押、内法長押、台輪で固める。組物は三斗組で、中備に本臺股を入れる。垂木はないが隅木1本が取り付くことから、一軒である。肘木、丸桁、隅木の面取も大きい。

柱間装置は、正面が外開の双折戸で、両側面は壁である。内法長押と台輪との間は束を2本立て、3間に割って各間に杵を組み、盲横連子窓の欄間を入れる。彩色は黒色塗装を基調とし、扉口の幣軸や欄間の杵などに一部、赤色塗装を施す。

屋根・妻飾 屋根は、前述の通り本瓦型銅瓦葺の入母屋造で、正背面に3間の向拝をかける。向拝の留蓋の位置には火炎宝珠をのせる。妻飾は冢叉首形式で、回り棟の台輪の上に出三斗を置いて母屋桁と冢叉首梁を支持し、中備として板臺股を入れる。破風

には猪目の拝懸魚と降懸魚を吊る。各懸魚の上部に破風金具を飾り、さらに拝懸魚に飾金具をつける。

まとめ この建物は、前身建物の焼失を受け、耐震・耐火のために鉄骨鉄筋コンクリート造を主体として、木造風に仕上げた先駆的な建物と評することができる。伝統木造建築の外観を呈するが、建築史学の発達を牽引した天沼俊一が設計したこともあり、様々な時代の意匠の折衷でまとめられた点も面白い。例えば、向拝の人字形割束は雲岡石窟などのように直線的で、法隆寺西院の堂塔よりも古式である一方で、これがのる虹梁形頭貫の木鼻は大仏様線形を持つ。組物には笹線がつき、軒は地円飛角である。上述のような特徴は、建築史に関する深い造詣の持ち主にこそ構想可能であり、戦前の建築史学史の発展を体現した建築作品として意義深い。(目黒新悟)

参考文献

下津健太郎「金剛峯寺金堂」(『和歌山県の近代和風建築』、和歌山県教育委員会、2010年、132～133頁)。

天沼俊一『日本古建築行脚』(白井書房、1942年、38～41頁)。
『弘法大師老千年御遠忌紀要』(総本山金剛峯寺、1943年、37～51頁)。



図 367 壇上加藍金堂内陣仏壇上天井



図 368 壇上加藍金堂厨子軒まわり見上げ



図 369 壇上加藍金堂妻飾



図 370 壇上加藍金堂向拝火炎宝珠

(3) 根本大塔 (PL.18)

構造形式 鉄骨鉄筋コンクリート造・木造混構造、方5間、大塔、宝形造、銅板葺

建立年代 昭和11年(1936)(棟札)

沿革 空海は、承和元年(834)の「勸進奉造仏知識書」において、東西2基の「毘盧遮那法界体性塔」の構想を述べる。大塔は東塔にあたり、創建期の塔は9世紀中葉に建立した。多宝塔形式の建物として、国内最初期のものと言われている。康保5年(968)の「金剛峯寺建立修行縁起」には「高十六丈」とあり、また大塔に胎蔵界五仏を、西塔に金剛界五仏を安置したことが伝わる。創建期の塔は、正暦5年(994)の雷火で焼失した。その後、再建は1世紀以上が経った康和5年(1103)におこなわれ、規模や形式などは創建期の塔を踏襲したと考えられている。その後も、4回の焼失と再建を繰り返した。直近では、天保14年(1843)に焼失した後、しばらく乱石積基壇と礎石などが遺存していた塔跡に、昭和11年

(1936)に6代目の塔が再建された。これが現在の塔である。根本大塔の復元に関する主要な先行研究として、天沼1927、足立1941、清水1983、藤井1986、富島2007などが挙げられる。

現在の塔は、もとは弘法大師耆千百年御遠忌報恩事業の一つとして再建することとなり、大正13年(1924)に、建築史学者の天沼俊一に設計の依頼があった。天沼は、醍醐寺三宝院の修理工事に従事していた大浦徳太郎を推薦し、大浦は礎石などが遺存する塔跡を実測し、復元図を作成した。しかしその後、昭和元年(1926)に金堂が焼失したため、先に金堂の再建に着手し、塔の建設は順延したものの昭和7年(1932)に着手した。当初、塔は木造で再建される予定であったが、金堂の焼失を経て、その方針は一転した。防火性、耐震性、構造や費用などを考慮した結果、鉄骨鉄筋コンクリート造を主体として部材の周囲に木材を被覆し、伝統木造建築の外観として建設する方針となった。当初、天沼と大浦が作成した

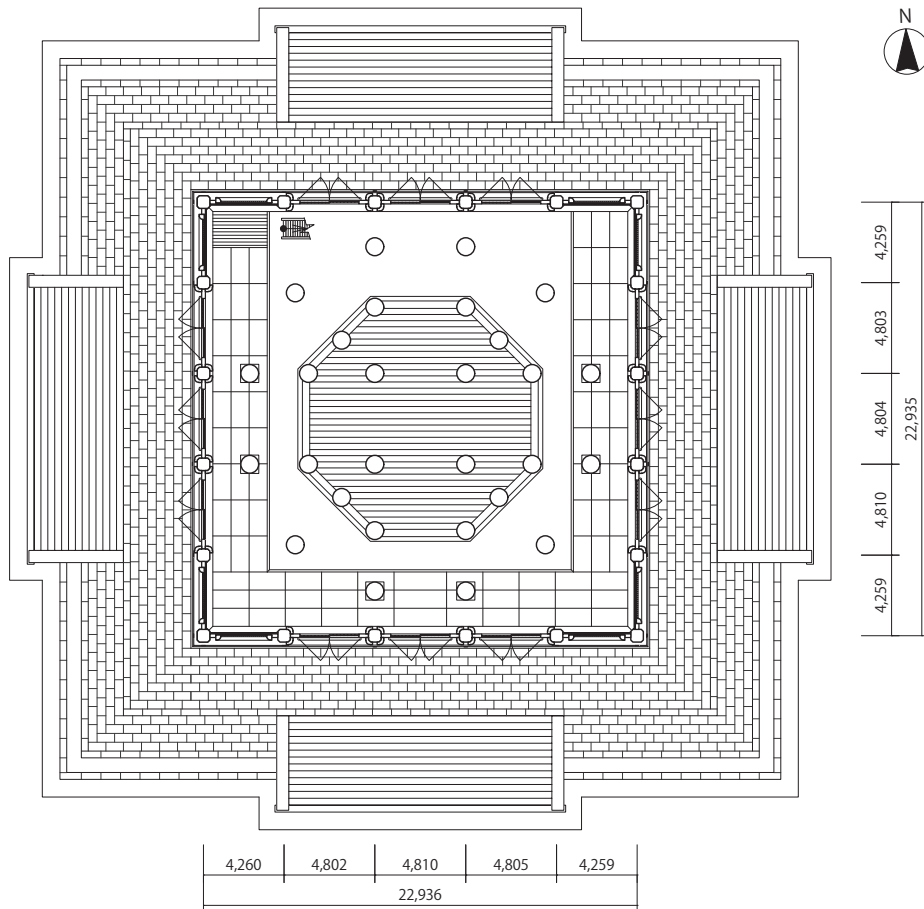


図 371 壇上加藍根本大塔平面図 1:400

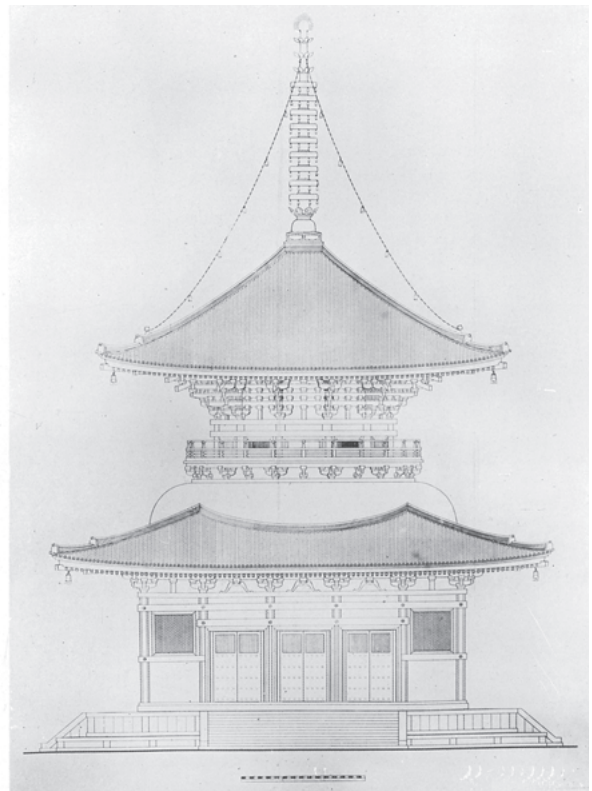
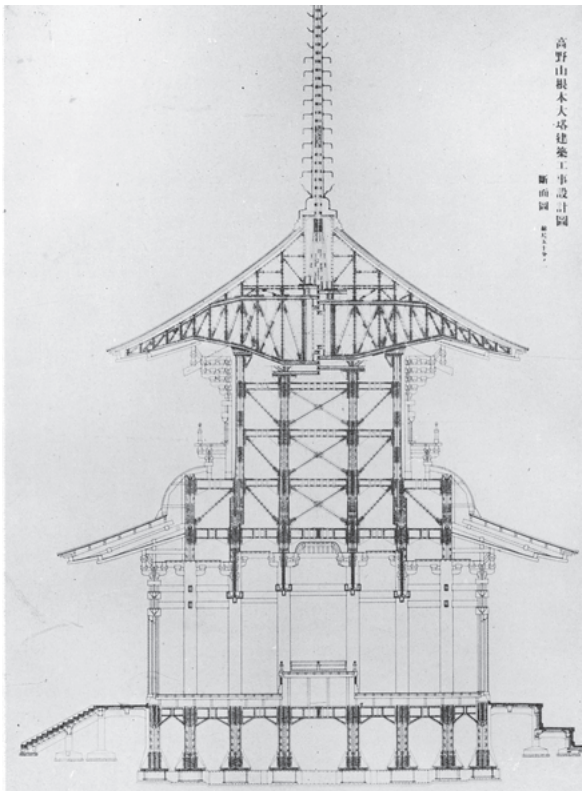
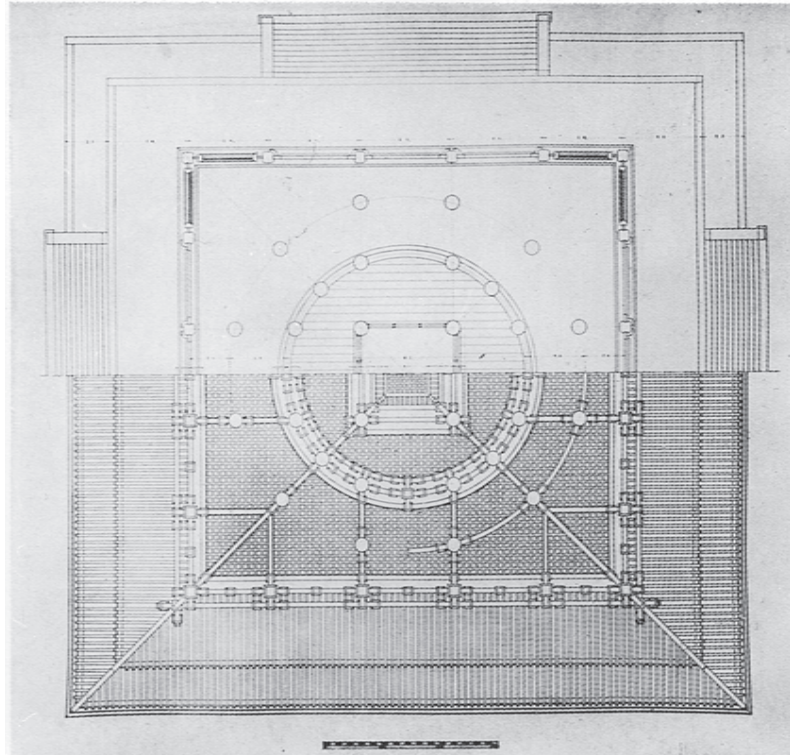


図 372 壇上伽藍根本大塔建築工事設計図 (『高野山根本大塔の研究』)

木造の復元図は、伊東忠太も加わって協議され、混構造に変更されたようだ。先に、実験的に金堂で同様の方針を採り実現したため、大塔でもこの方針が踏襲された。木造部分の棟梁は、東本願寺頭大工の家系をもつ稲垣啓二が務めた。

『高野山根本大塔の研究』（御遠忌大法会事務局、1934年）には、建築工事設計図として、平面図・見上図・断面図・立面図が収録されており、現在の建物と一致する。

構造形式と平面 根本大塔は、壇上伽藍の金堂の北東で南面して建つ多宝塔で、屋根は銅瓦葺、全高は16丈（48.5m）である。初重は方5間の裳階を設け、中央3間を扉口、両端間を盲連子窓とし、屋根上に亀腹をみせる。二重は円形平面で、円柱を12本立ててそれぞれに組物を置き、屋根上に相輪を頂く。初重・二重に共通して、木部を表現する材は赤色塗装を基本として、連子は緑色塗装、垂木・隅木・丸桁・切目縁の木口は黄色塗装、亀腹・壁・軒小天井裏板・軒支輪裏板・垂木化粧裏板・裏甲は白色塗装とする。この建物は、外観上は伝統木造建築の形



図 373 壇上伽藍根本大塔初重側まわり



図 374 壇上伽藍根本大塔初重軒まわり

式を採るが、木造と鉄骨鉄筋コンクリート造の混構造である。主体部分、床、天井組子などは鉄骨鉄筋コンクリート造であるが、天沼の意見により、外部に現れる軸部・組物・軒などは木造とした。

初重内部は拭板敷表現とした一室空間で、正側面には畳を追い回し敷きし、中央に八角形仏壇を構えて中心に胎藏界大日如来を祀り、その四角に金剛界四仏を安置する。内部には側柱12本を立て、仏壇上に入側柱12本と四天柱を立てる。初重に心柱はない。初重の裳階の総間は22,936mm（76尺）で、中央3間を各4,810mm（16尺）、両端間を各4,260mm（14尺）とする。

基壇 基壇は花崗岩壇正積の二重基壇で、上面を花崗岩切石布敷とし、四方に中央3間と幅を合わせた石階14級を設ける。石階は、耳石を両脇に設けるのみで、仕切石はない。基壇上面の裳階柱筋に花崗岩の切石延石を一系列に並べ、その上に軸部を立ち上げる。南正面の前には、昭和40年（1965）に八角灯籠が据えられる。

初重裳階 裳階の軸部は、方655mm（面内415mm）の大面取角柱を立て、これを地長押、半長押、内法長押、台輪で固める。壁の散りからみて、頭貫は入れないようだ。これに加え、扉口とする中央3間では冠木長押を打ち、盲連子窓とする両端間には腰長押を打つ。

組物は軒支輪を備えた出組で、実肘木を用いず三斗で円形断面の丸桁を受ける。肘木には笹繰を施す。中備は、中央3間が実肘木付の板幕股で、両端間に間斗束を立てる。

軒は、地円飛角の二軒平行繁垂木で、垂木は丸桁



図 375 壇上伽藍根本大塔初重組物・中備幕股

を手挟むように割り付け、丸桁間を60枝とする。飛檐垂木は扱きを備える。軒は野小屋を造り、野物材も木造とする。野小屋には、木負・茅負をそれぞれ跳ね上げる桔木を二段入れる。木負を支持する下段の桔木は、鉄骨鉄筋コンクリート造の主体構造まで尻を引き込んで、尻と鉄骨鉄筋コンクリート造の梁との間に束を立てて尻を押さえる。茅負を支持する上段の桔木は、銚などで下段の桔木と繋ぐほか、尻に束を立てて亀腹を受ける土居桁を支持する。そのため、亀腹は大きく、平面的に裳階柱筋付近まで拡がる。亀腹は、木製下地で漆喰仕上げとする。丸桁は、組物のほか丸桁桔でも支持し、これも鉄骨鉄筋コンクリート造の主体構造まで尻を引き込んで、尻と鉄骨鉄筋コンクリート造の梁との間に束を立てて尻を押さえる。屋根は本瓦型銅瓦葺で稚児棟をもつ。反りは少なく、屋根は直線的である。

柱間装置は、中央3間の各間には幣軸・方立・蹴放・楣を回し、幣軸と半長押に軸摺を彫って盲連子窓付の外開板扉を吊る。蹴放に2本溝を通して敷居とし、方立間に鴨居を渡して内法に引違内障子戸を



図 376 壇上加藍根本大塔初重小屋組丸桁桔尻手納まり



図 378 壇上加藍根本大塔隅行架構見上げ

入れる。鴨居の上には、杵を組んで菱格子障子欄間を入れる。両端間は、腰長押と内法長押の間に幣軸を回して盲連子窓を入れる。全ての柱間では頭貫がない分、内法長押と台輪との間に小壁を造る。中央3間では、内法長押と冠木長押との間にも小壁を造る。両端間は、幣軸と裳階柱との間に小脇壁を造る。

金物類としては、飛檐隅木先に風鐸を垂下し、各長押の柱との取り付け部分に、内外共に六葉の釘隠金物を打つ。扉まわりには、扉板に八葉の唄金物を打って、半長押と幣軸に軸摺金物を入れる。

初重内部 初重内部には、前述の通り四天柱、入側柱、側柱を立てる。このうち四天柱と入側柱は、平面的に仏壇の内部から立ち上がる。これらの柱は、いずれも天井上まで高く立ち上げる。側柱は径944mmの円柱で、裳階の中央間と柱間寸法を揃えて四方に8本、さらに各隅行に1本、計12本を立てる。内部の柱は正確な位置を実測し難かったが、以下では寸尺谷のおよその寸法から、柱配置の計画について考察したい。中央間脇の側柱は、入側柱から10.5尺(3,182mm)、裳階柱から8.0尺(2,424mm)の位置にあ



図 377 壇上加藍根本大塔初重側通り



図 379 壇上加藍根本大塔釘隠し

たる。隅行の側柱は、入側柱から隅行で3,527mmの位置となる。側柱筋は正12角形平面をなして、対辺間は57尺(17,271mm)となる。各柱は、正12角形平面の各頂点に放射状に配置される。側柱の配置は、対辺間を尺の完数値とするから、中心からの距離ではなく、対辺間の距離で設計されたものと思われる。入側柱は径910mmの円柱で、四天柱から11.5尺(3,485)のところまで裳階の中央間と柱間寸法を揃えて四方に8本、さらに各隅行に1本、計12本を立てる。隅行の柱は、両隣の中央間脇の柱の中間に立てる。入側柱筋は、仏壇平面と対応した正八角形平面をなして、対辺間は39尺(11,817mm)となる。四天柱は径900mmの円柱で、裳階の中央間と柱間寸法を揃えて立てる。以上のように、入側柱の配置は、対辺間を尺の完数値とするから、中心からの距離ではなく、対辺間の距離で設計されたものと思われる。今後修理などの機会を捉え、より正確な測量をおこない、改めて柱配置計画を検討されることを望む。

側柱筋では、内法貫と飛貫を回して側柱を固める。入側柱筋では、床上に仏壇の框となる長押を外側に回す。この上部には楣と内法長押を回し、さらにその上部に天井桁となる貫を回して入側柱を固める。天井桁となる貫と内法長押の間には小壁を造り、内外陣を区分する。四天柱筋では、楣と内法長押を回し、さらにその上部に天井桁と同高で貫を回して四天柱を固める。貫と内法長押の間には小壁を造り、内陣と内々陣とを区分する。

さらに、裳階柱筋、側柱筋、入側柱筋は、中央間両脇と隅行に貫などを通して各柱筋を繋ぐ。裳階柱の内法長押の上下から、それぞれ飛貫と内法貫を伸

ばし、これらを側柱と入側柱に挿して繋ぐが、裳階柱筋・側柱筋間の隅行のみ、飛貫に代えて繫虹梁を渡す。これは、隅行で長尺となるための工夫と思われる。飛貫の上部では、裳階柱上の二の肘木を天井桁として挺出方向に伸ばし、これを側柱と入側柱に貫状に挿して繋ぐ。裳階の端間・脇間境の柱上から伸びる天井桁は、隅行の天井桁まで伸びる。入側柱筋・四天柱筋間は、中央間両脇と隅行に貫状の天井桁を渡して繋ぐ。

組物は、裳階柱筋の内側では一手先組物をみせ、前述の通り挺出方向に二の肘木を伸ばして天井桁とする。この肘木と同高では、一手先に直交した通肘木を入れて組物を横に繋ぎ、天井桁とする。壁付通肘木と手先の通肘木との間には、鏡天井を張る。側柱では、天井桁を受けるように挿肘木組物を入れる。入側柱では、外陣側でこれと同様の挿肘木組物を入れるが、内陣側では外陣側の天井桁の鼻を挿肘木とした組物を挺出し、内陣の一段高い天井桁を受ける。但し、隅行では柱間隔が狭いため、内陣側に挿肘木を挺出しない。四天柱では、内陣の天井桁を受けるように挿肘木の一手先組物を入れる。この組物は、内外の一手目で、壁付と平行の天井桁を受ける。

天井は組入天井とする。裳階柱筋から入側柱筋までは、床上から約9.5mの高さで張る。西北隅に、維持管理用の木階33級を設け、この天井裏への昇降を可能とする。内陣は、前述の通り外陣天井桁の鼻を挿肘木組物として天井を1段上げる。さらに内々陣は、天井を支輪で折り上げる。

仏壇は、前述の通り床上に框となる成540mmの長押を打ち、その上に成150mmの無目敷居を渡して、



図380 壇上加藍根本大塔四天柱・天井納まり



図381 壇上加藍根本大塔内陣見上げ

これと天端を揃えて板を張る。仏壇高欄はない。

彩色は、外側と同様に、木部を表現する軸部、組物、床、天井組子などの材は赤色塗装を施す。天井化粧裏板や壁は白色塗装、仏壇の長押、無目敷居、板は黒色塗装とする。四天柱と入側柱は、内法貫の下及び仏壇上から1.5mの位置にそれぞれ鉄帯を巻き、その間に十六大菩薩を描く。側柱は、床上から1.6mの位置に鉄帯を巻くのみである。裳階の各端間の盲連子窓の裏には、真言八祖を描く。内部では、裳階の腰長押の下に腰貫を入れ、腰長押と腰貫との間にも花鳥などの彩色を施す。これらの仏画は、いずれも堂本印象の作による。腰貫の下には豎板壁を立て、これらは素木とする。四天柱間の小壁には、内法長押と手先の通肘木との間に「弘法」の扁額を掲げる。仏壇上の胎蔵界大日如来と金剛界四仏、柱の十六大菩薩、壁の真言八祖などにより、内部空間全体で立体曼荼羅を表現する。

二重側まわり 図面によれば、二重の側柱は鉄骨鉄筋コンクリート造の梁に柱盤を置き、その上に12本の円柱を放射状に立てるようだ。二重側まわりの木部は、鉄骨鉄筋コンクリート造の躯体から離れて独立して立ち上がる。側柱は、半長押、内法長押、台輪で固める。初重裳階と同様、二重でも、壁の蹴りからみて頭貫は入れないようだ。

組物は多宝塔の四手先組物で、実肘木は用いずに三斗で円形断面の丸桁を受ける。三手目に秤肘木を置いて通肘木を受け、この通肘木と丸桁との間に支輪を備える。肘木には笹線を施す。隅の組物は、三手目と四手目の秤肘木をそれぞれ隣と繋ぎ、巻斗を整然と並べる。壁付では、二の肘木、四の肘木、五



図 383 壇上加藍根本大塔鉄骨鉄筋コンクリート造躯体

の肘木の高さで壁付通肘木を通す。中備は、各間の二の肘木の上下に2段の間斗束を立てる。四の肘木の上には間斗を置き、五の肘木を受ける。

軒は、地円飛角の二軒平行繁垂木で、垂木は丸桁を手挟むように割り付け、丸桁間を42枝とする。飛檐垂木は扱きを備える。軒は野小屋を造るが、初重と異なりその中に鉄骨鉄筋コンクリート造の構造体を造り込む。図面によれば、二重の化粧垂木は鉄骨鉄筋コンクリート造の構造体から垂下するのみで、構造的な働きはなさそうだ。野垂木は木材とし、鉄骨鉄筋コンクリート造の躯体の上に木製の束と母屋を置いて支持する。屋根は本瓦型銅瓦葺で稚児棟をもつ。反りは少なく、屋根は直線的である。

柱間装置は、初重の各面に合わせて四面に外開板扉を、他の8面に盲連子窓を設ける。外開板扉は、柱盤と内法長押に軸摺を彫り、蹴放、楣、方立を立てて納める。盲連子窓とする柱間には腰貫を通し、その上に幣軸を回して盲連子窓を入れる。初重と同様、二重でも、全ての柱間では頭貫がない分、内法長押と台輪との間に小壁を造り、幣軸と円柱との間



図 382 壇上加藍根本大塔上重見上げ



図 384 壇上加藍根本大塔二重小屋組軒まわり

に小脇壁を造る。

初重の屋根の亀腹上には、台輪を回して一手先組物の腰組を置く。腰組の肘木には、笹繰を施す。手先には、縁葛となる通肘木を、壁付では縁桁となる壁付通肘木を回し、これに切目縁の縁板を張る。中備は詰組とするが、この組物は挺出方向にのみ伸びて、壁付には肘木を置かない。縁には縁高欄を回し、組物と中備の位置に揃えて斗束と通栴を立てる。込栴は用いない。栴束の間には、横連子子を2本入れる。斗束は撥束状で、架木は円形断面とする。

相輪は全高に占める割合が大きく、下から露盤、覆鉢、平頭を組んで擦管を立ち上げ九輪を重ねる。花卉の請花はない。その上に四葉、六葉、八葉を3段重ね、傘蓋を頂く宝瓶をのせる。この傘蓋は、平安時代初頭に建立された室生寺五重塔に似た意匠とする。

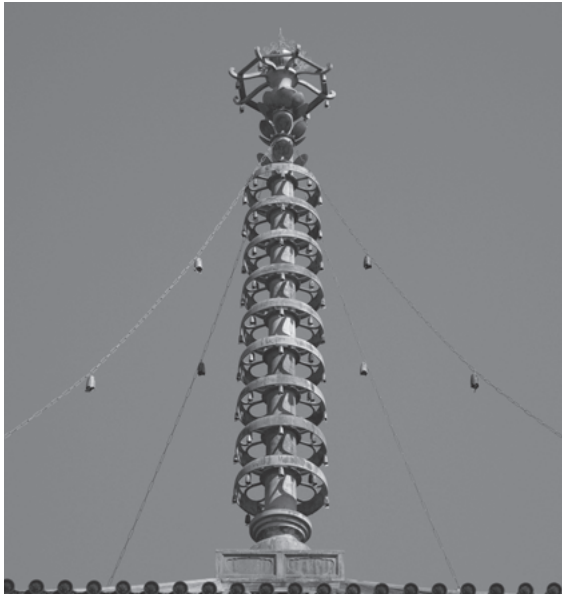


図 385 壇上加藍根本大塔相輪



図 387 壇上加藍根本大塔上重縁まわり

する。相輪の頂部には、火炎宝珠を頂く。六葉の下擦管から、二重の稚児棟の先端に置いた火炎宝珠までを、宝鎖で結ぶ。これらの火炎部分は、法隆寺五重塔や当麻寺西塔などの古式の水煙に似た意匠とする。各九輪と傘蓋に8つ、各宝鎖に3つの風鐸を吊る。露盤は、各面を2区に分けて格狭間を施す。相輪を支持する心柱は、まず二重の中程から、四天王柱円筒形の鉄骨鉄筋コンクリート造で立ち上げる。二重の組物の高さ付近にスラブを張り、スラブの上では心柱を鉄骨組立材のモルタル被覆として立ち上げ、相輪を支持する。金物類としては、飛檐隅木先に風鐸を垂下し、扉板に出八双の巻金物を打って、半長押と内法長押に軸摺金物を入れる。

棟札・墨書など 初重内々陣の天井裏には箱入りの当初棟札が安置され、工程や工事関係者の名前を知れる（巻末棟札・墨書等 No. 11）。初重外陣天井裏には、「奉修復根本大塔塗替為」、「維時平成八年十月十一日」とある修理棟札が安置され、平成8年（1996）に彩色が塗り替えられたことを知れる。亀腹付近の高さに張られるスラブには、中央に「般若心経壺千



図 386 壇上加藍根本大塔露盤



図 388 壇上加藍根本大塔心柱と露盤の納まり

卷」の箱を安置する。

八角灯籠 南正面に据えられる八角灯籠は、基壇、竿、中台、火袋、笠、火炎宝珠からなる。竿には「昭和九年大塔再建工成鑄造大灯笼壺基建之」、「昭和四十乙巳年四月吉祥日」と陽刻され、根本大塔の建立後にしばらく経ってから建てられたと分かる。基壇は壇正積で、各面に格狭間を施す。この八角灯籠は、東大寺大仏殿前の国宝八角灯籠を模したものと思われる。笠の降棟の先端は蕨手とし、下面に風鐸を垂下させる。東大寺の八角灯籠には風鐸がなく、降棟の先端の下面に風鐸の取り付け痕が遺る。そのほか、火袋の欄間に盲横連子を入れるなど、東大寺のものと共通する。

まとめ この建物は、発掘調査こそしていないものの、塔跡に遺存する礎石などの実測調査や、文献史料にみられる高さの記述などといった根拠にもとづいて構想・設計された点で、現代の遺跡整備での建物復元に通ずる萌芽の事例として貴重である。16丈という高さは、多宝塔としては破格の規模である。この建物で特筆すべきは、主体構造を鉄骨鉄筋コンクリート造、外観上を木造とした混構造で実現したことだろう。当初は木造で建設する予定であったが、金堂の焼失を目前として、木造で再建する気運はなかったようだ。建築史学者による鉄骨鉄筋コンクリート造という選択は、時代性や場所性の文脈の中でおこなわれたものだった。復元の対象は外観が重視され、伝統木造建築の造形が木造で表現される。内部では、組物に挿肘木を用いるなど、創建期の塔の形式としては矛盾する点も多い。これは、主体構造を鉄骨鉄筋コンクリート造とするにあたって、地下



図 389 壇上加藍根本大塔小屋組内般若心経

から亀腹内や二重まで通し柱を立てる必要があり、組物を挿肘木にせざるを得なかったためと思われる。防災性に配慮しながら伝統木造建築の造形を追求したこの建物は、隣接する金堂と共に、その先例として評価できる。また、建築史学者が設計に携わり、戦前の建築史学史の発展を体現した建築作品として意義深い。なお、創建期の根本大塔の復元案は、その後様々な研究者によって、複数の学説が提示されている。(目黒新悟)

参考文献

下津健太郎「金剛峯寺根本大塔」『和歌山県の近代和風建築』和歌山県教育委員会、2010年、137～138頁。

『弘法大師壺千百年御遠忌紀要』(総本山金剛峯寺、1943年、51～63頁)。

天沼俊一『日本古建築行脚』(一條書房、1942年)。

F・M・トラウト、河野清晃『高野山根本大塔の研究』(御遠忌大法会事務局、1934年)。

天沼俊一『日本建築史要』(飛鳥園、1927年、158～165頁、)。

足立康「高野山根本大塔とその本尊」『建築史』3-1、1941年、1～18頁。後に同『塔婆建築の研究』中央公論美術出版、1987年に再録)。

清水擴「多宝塔についての史的考察」『建築史学』1、1983年、60～81頁。後に同『平安時代仏教建築史の研究 浄土教建築を中心に』中央公論美術出版、1992年に再録)。

藤井恵介『密教建築空間論』(中央公論美術出版、1998年)。

富島義幸「塔における両界曼荼羅空間の展開 平安時代の層塔を中心に」(『仏教芸術』238、毎日新聞、1998年、54～97頁。後に同『密教空間史論』法蔵館、2007年、に再録)。

(4) 西塔 (PL.19・20)

構造形式 方5間、大塔、宝形造、銅板葺

建立年代 天保5年(1834)(棟札)

概要 西塔は、壇上加藍の北西部、山王院拝殿や鐘楼の北方に位置し、南面して建つ方5間の多宝塔、つまり大塔である。仁和3年(887)真然大徳によって創建されたと伝える。現在の建物は、棟札から、天保5年(1834)に、徳川家斉を願主、藤原朝臣西山金輔を正大工として、再建されたことがわかる。導師として、360世座主の増源が、再建願主として正智院乗如・金光院眞尊、奉行として聖善院道猷・寶瓶院龍華の名が挙がる。

平面構成 下層は方5間で、側柱、入側柱、四天王柱は、柱筋を揃え、四周には縁をめぐらし、南面に5級の木階を設ける。上層は円形平面をもち、下層は方5間の平面をもつという点は、根来寺大塔と類似する。一方で、根来寺大塔の下層が、矩形に配された側柱の内部に、12本の柱からなる円形柱列をもつのに対し、西塔は方5間の総柱建物と同様の平面

をもつ。享保4年(1719)成立の『高野春秋編年輯録』所載の西塔の指図には、内部に円形柱列をもたず、矩形の柱列が3重に配置された平面で描かれており、すくなくともこの頃には現在の平面形式が成立していたと考えられる。

基壇・礎石 基壇は、縁下に納まる切石積基壇で、上面に礎石を据え、周囲に切石の縁束礎石を据える。高野山の縁下に納まる基壇の多くが乱石積であるのに対して、後述する御影堂と同じく切石積とするのは、西塔の格の高さを示すものといえる。

縁束礎石の外周、初重軒先位置に、切石の石組溝をめぐらして雨落溝とする。階段は、この雨落溝より内側に納まる。廂柱のすぐ外に地長押状の横材と、連子を入れ、床下をふさぐ。

下層側まわり 下層の廂柱は大面取を施した角柱で、木鼻付きの頭貫で固め、その上に繰形を付けた台輪を載せる。加えて、半長押付きの切目長押、腰長押、半長押付きの内法長押をめぐらす。四周の縁は、切目縁で、擬宝珠高欄をめぐらす。正面中央間

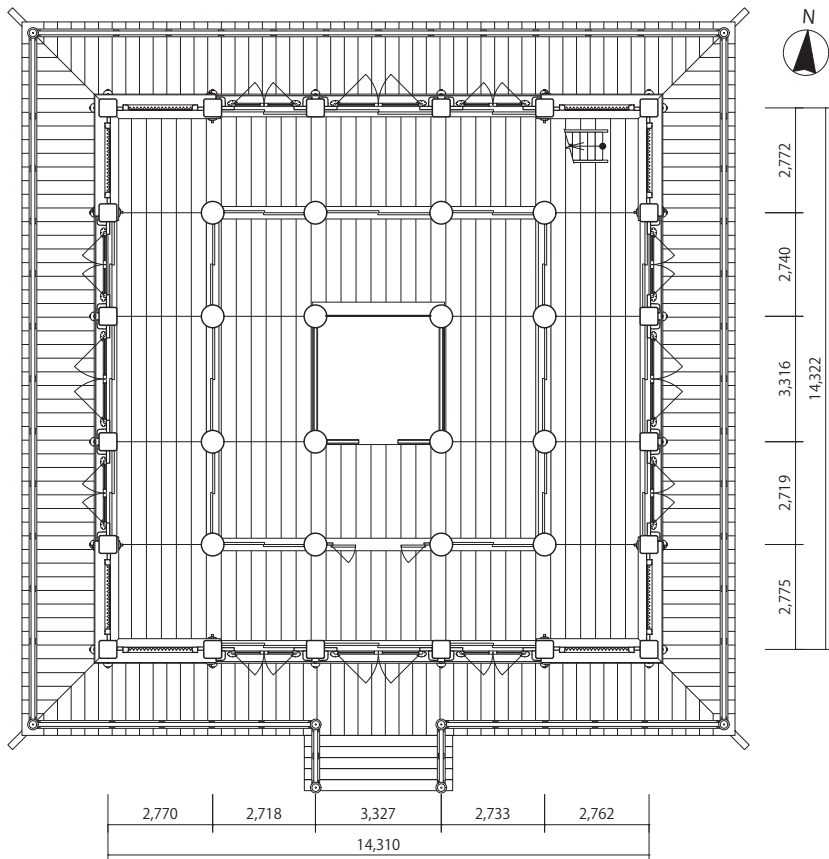


図 390 壇上加藍西塔平面図 1:200

には、5級の木階を設け、登高欄を付ける。組物は出組で、繰形絵様をもつ実肘木を介して、丸桁を受ける。丸桁・側桁間には支輪を設ける。中備は簀束である。柱間装置は各面とも、中央3間を幣軸付きの棧唐戸とし、内部に引違の明障子とし、端間には盲連子を入れる。

上層側まわり 上層は12本の円柱を立て、地長押、腰長押、内法長押、頭貫、台輪で固める。組物は、四手先で、実肘木を介して丸桁を受け、支輪、小組天井を設ける。三手目の手先に載る肘木が隅で交わる部分は、隅木上に立てた八角の支柱で支える。周囲に高欄付きの縁をめぐらし、拳鼻付の平三斗の腰組で受ける。腰組の中備は簀束とする。

上層の柱間装置は、正背面及び両側面中央を、幣軸付板扉とし、それ以外には盲連子を入れる。

軒まわり・屋根 軒は上層、下層ともに二軒繁垂木で、反り・増しはない。屋根は、宝形造、銅瓦葺で、頂部には、相輪を立てる。上下層ともに隅棟には稚児棟が付き、上層では相輪と宝珠の間に風鐸付きの鎖を掛ける。



図 392 壇上加藍西塔初重組物



図 394 壇上加藍西塔相輪

内部 入側柱と四天柱は円柱で、側柱間の頭貫高さに、太い繫虹梁が入れるほか、一手内側に引き込んだ肘木上の2段の通肘木で入側柱と連結する。入側柱・四天柱とも、建登せ柱とし、繫虹梁と同じ高さに虹梁形飛貫入れて、身舎柱には半長押付きの内法長押を打つ身舎柱と四天柱の間にも、通し肘木を2段めぐらし、両者ともに根肘木で受けている。四天柱間では、それに加えて内部に一手分引き込んだ位置にも2重に通肘木をめぐらし、折上格天井の天井縁を受ける。



図 391 壇上加藍西塔初重側まわり



図 393 壇上加藍西塔上重見上げ



図 395 壇上加藍西塔側通り

廂の床は拭板敷で、側まわりの壁面に沿って畳を敷きまわす。天井は格天井である。また、北東隅には上層へ上る階段を掛け、その付近には厨子を置いている。内側にある身舎柱の間にはそれぞれ敷居が敷かれ、内法長押下部の鴨居との間に正面中央間には観音開の格子戸を、それ以外の柱間には引違格子戸を入れ、身舎と廂を区分する。また、内法長押と虹梁形飛貫の間の欄間には格子を入れている。なお、廂は素木であるのに対し、身舎より内側には彩色を施しており、両者の扱いは異なる。

身舎内部は拭板敷で、背面、両側面、正面両脇間に、敷居に接するように畳を敷きまわす。身舎中央、四天柱の背後には来迎壁を設け、内側に須弥壇を造り付ける。須弥壇は、下部から地覆をめぐらし、束を立て2間に割り、それぞれに格狭間を入れる。框を配した上には、三方に高欄をめぐらし、正面を開いて蕨手につくる。この須弥壇上には中央に金剛界大日如来を安置し、その周囲に無量寿如来、天鼓雷音如来、宝幢如来、開敷華王如来の胎藏界四仏を配する。その前には法具を載せた壇を置き、さらに礼

盤、脇机、磬を置く。身舎の天井は彩色を施した格天井、四天柱の内側を折上格天井とする。

彩色 側まわりと内部の廂部分を素木とし、身舎柱より内部を中心に彩色を施す。身舎柱は内法長押より下は金箔押しとし、その上から天井直下までを極彩色とする。虹梁形頭貫にも極彩色が施され、廂側に向かっては鳳凰が描かれる。その上部の小壁にも天女が描かれている。そのほか、内法長押は朱塗、半長押、鴨居、敷居、格子戸は黒漆塗である。

身舎柱筋の上部の飛貫には、正背面には龍が、両側面には、中央間に龍、脇間に飛龍が描かれる。その上の小壁には、中央間には花、脇間には天女が描かれている。正背面の身舎柱から四天柱にかかるすべての頭貫には飛龍が、両側面のものには、正背面側には龍、内側には飛龍が入れられる。四天柱筋の飛貫には内面外面ともに龍を、その上部の小壁には、天女や花を描く。

身舎の格天井は、天井縁・格縁を黒漆塗とし朱で縁取りする。天井板には、円形に図案化された草花の絵を描く。なお、四天柱内の折上格天井は天井縁・



図 396 壇上加藍西塔内陣



図 397 壇上加藍西塔内陣架構見上げ



図 398 壇上加藍西塔縁まわり



図 399 壇上加藍西塔目長押釘隠し

格縁を除いて、素木としている。身舎柱筋や四天柱筋の肘木や斗には纏網彩色が施されている。

金具 側まわりでは、切目縁や隅又首に青銅製木口金具を付け、切目長押・腰長押・内法長押の隅や木口に八双金物を打つ。また、切目長押とその半長押、内法長押の半長押には唄金物を、それ以外には六葉の金物を打つ。これら釘隠しは八双金物の上からも打たれている。軒まわりには、飛檐垂木・飛檐隅木に木口金具を付け、茅負・裏甲・裏板の隅と中央に八双金物を取り付ける。

上層は亀腹や縁の木口を銅板で包み、高欄の平桁の斗束の位置に唄金物を入れる。下層と同様に、飛檐垂木・飛檐隅木に木口金物、茅負・裏甲・裏板の隅に八双金物を取り付ける。また、隅の組物の下に入れている支柱の足元にも金具を張り付けている。なお、上下層ともに飛檐隅木の先に風鐸を吊る。

内部は、地長押と内法長押に六葉の釘隠しを打つ。
墨書 天井裏の心柱と四天柱の添木には墨書がある。心柱の墨書には天保3年(1832)の年紀があり、このころに造営がなされていたことがわかる。

また四天柱添木の墨書には、彩色師として、京都四条高倉の八幡屋嘉兵衛と五之室谷大佛庄の喜三郎の名前が記されている。

まとめ 西塔は、壇上加藍造営当初から計画された歴史的に重要な建物である。現存事例の少ない大塔形式で、外観は根来寺大塔と、初層平面は切幡寺大塔と類似するという特異な構成をもつ。側まわりを素木とし、飾金具も限られ、落ち着いた印象を与える一方で、内部は極彩色で荘厳するなど、豊富な装飾をもつ。建築年代も明らかであり、江戸時代後期における復興を示す建物としても重要である。

(山崎有生)



図 400 壇上加藍西塔下重柱天



図 401 壇上加藍西塔上重架構



図 402 壇上加藍西塔上重内部

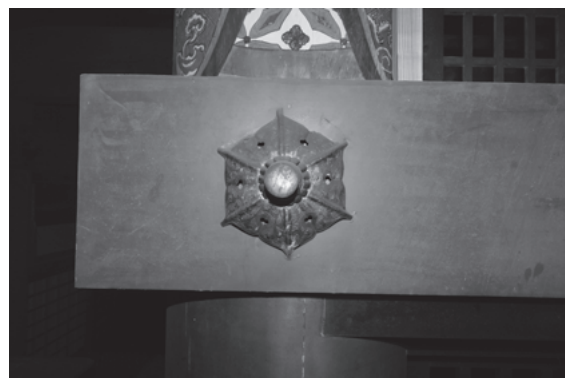


図 403 壇上加藍西塔釘隠し

(5) 御影堂 (PL.21 ~ 23)

構造形式 桁行5間、梁間5間、正面1間向拝付、宝形造、檜皮葺

建立年代 弘化3年(1846)上棟(琵琶板墨書)、弘化5年(1848)

落慶(寺蔵指図)

概要 御影堂は、金堂の西北に南面して建つ、弘法大師の御影を祀る仏堂である。もとは空海の持仏堂として建てられたことにはじまるとされる。現在の建物は、方5間、宝形造、檜皮葺、正面1間向拝付で、四周に縁を巡らし、背面中央3間部分を突出させる。天保14年(1843)の火災で前身堂が焼失し、その後再建されたもので、琵琶板に残る墨書から、伏原村(現・橋本市)の林右衛門が棟梁を務め、弘化3年6月に上棟されたことが明らかになる(棟札・墨書等No.16)。伏原村の林右衛門の名は、文政8年

(1825)の金剛三昧院楼門(山門)建立の正大工、天保14年(1843)の金剛三昧院四所神社の上葺・及び彩色の大工棟梁を務めたことが確認できる。

柱配置と平面計画 間口3間、奥行4間で柱を割り付けた方形平面をもつ中央部の四周に廂がとりついたような構成をもつが、側柱と入側柱は柱筋を揃えない。また廂に相当する部分は、東西面に比して、手前側の柱間を広く、背面側を狭くする。中央部は、手前2間半と奥1間半に仕切り、内部に弘法大師の御影を祀る厨子を納める。現在は、中央部の奥寄りをナイナイジン(以下、内々陣とする。)、手前をナイジン(以下、内陣とする。)、廂相当部分をゲジン(以下、外陣と総称する。また便宜上、正面側を正面外陣、側面側を脇陣、背面側を後陣とする。)と呼び、背面突出

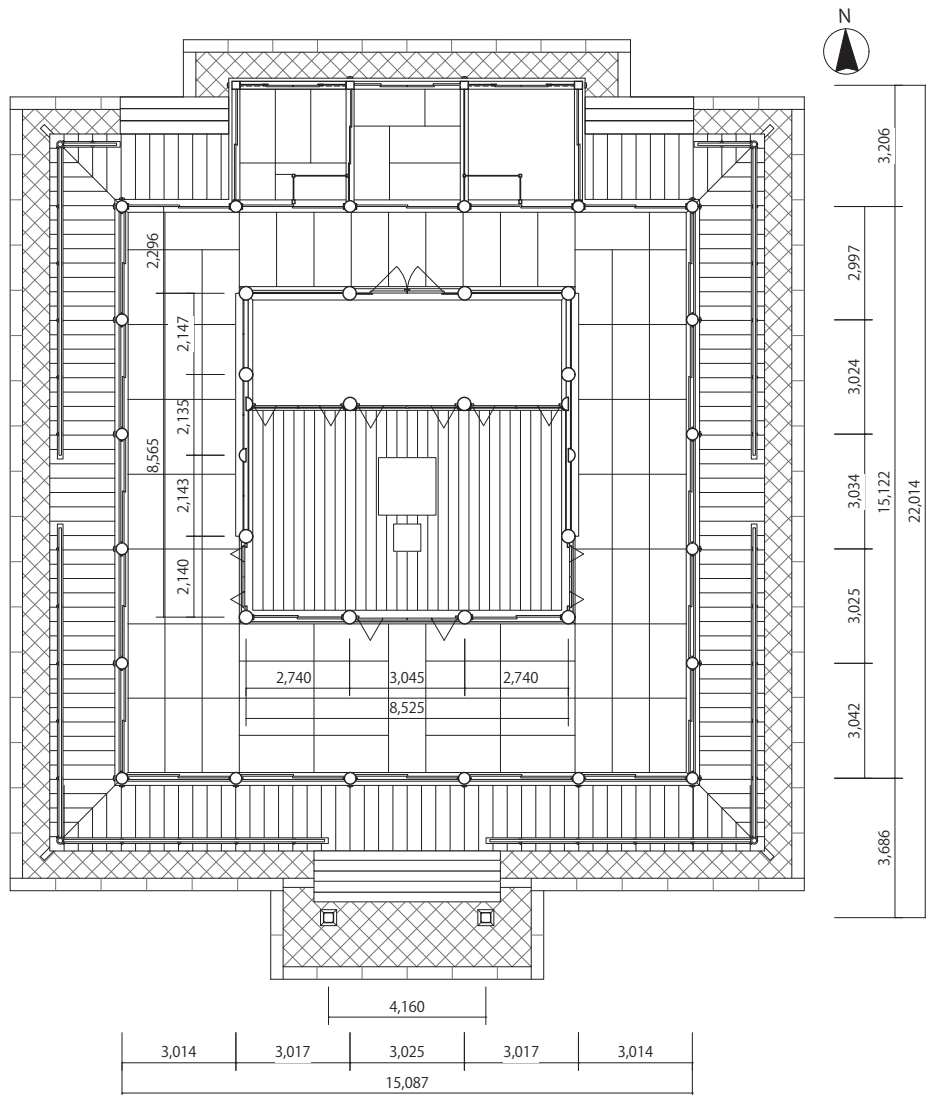


図 404 壇上加藍御影堂平面図 1:200

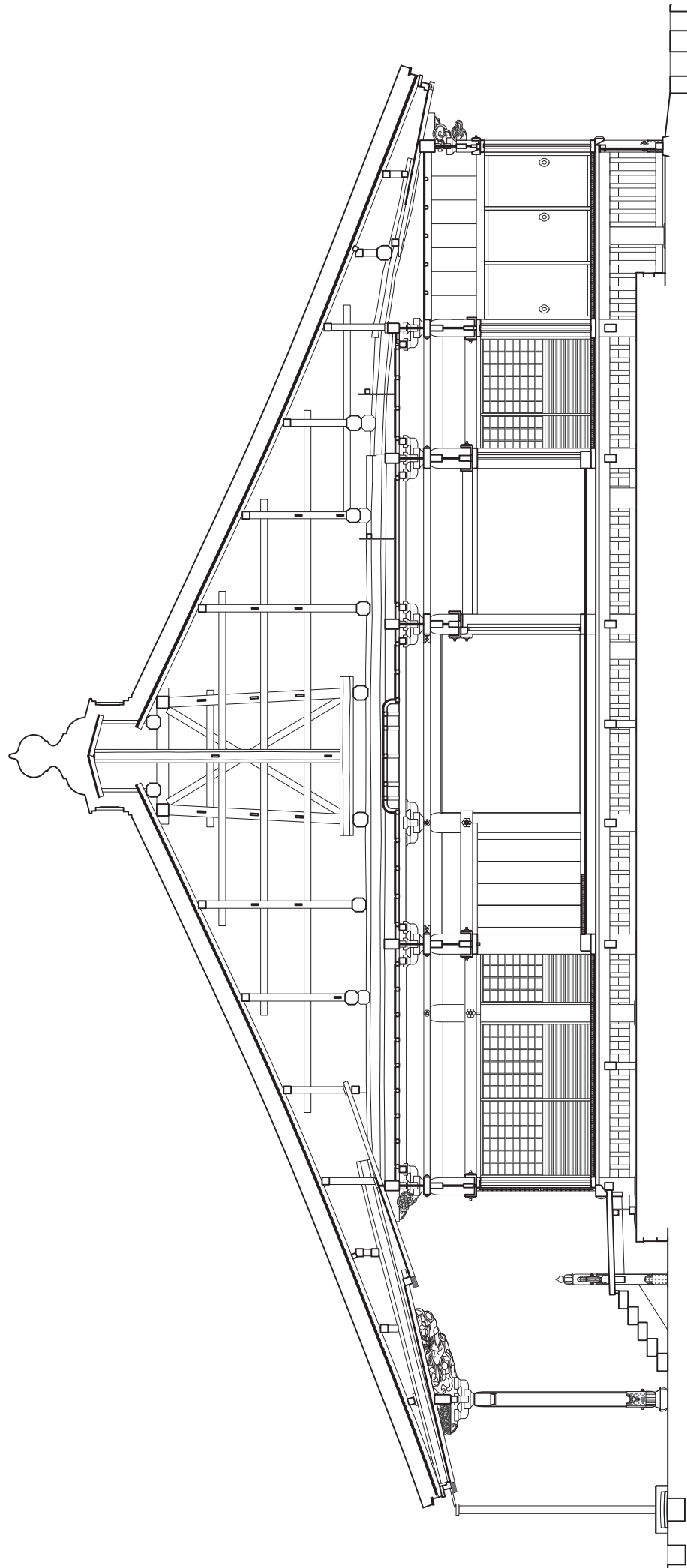


图 405 壇上加藍御影堂断面图 1:100

部の3部屋のうち、東の1室をコウケバ（以下、香花場とする。）、中央及び西の2室をモノオキ（以下、物置とする。）と呼ぶ。

側まわりは、間口・奥行とも総間50尺（約1,5150mm）、105枝とし、柱間10尺（約3030mm）、21枝等間で割り付けており、1枝寸法は144mmである。向拝柱間は29枝で、正面中央間より8枝広くとる。正面側柱筋から向拝柱の出は3,686mmで、12尺（3,636mm）で計画されたものかもしれない。背面突出部の出は3,207mmで、側柱間より若干広い。

正面中央には、向拝柱よりも若干広くとった5級の木階を設け、背面は両端間、つまり突出部の両脇に、外端を側柱心に3級の石階を設ける。

側まわり 基壇は、縁下に納まる正方形平面をもち、高さは約55cmで、花崗岩切石積の外装をもち、周囲に花崗岩切石の縁束礎石を据える。さらに外側に、花崗岩切石を側石とする雨落溝を巡らし、これより内側を花崗岩切石の四半敷とする。基壇上に泥岩とみられる自然石の礎石を据える。

軸部は、礎石上に、頂部に粽をもつ径約375mmの



図 406 壇上加藍御影堂側まわり

円柱を立て、足固貫・切目長押・内法長押・頭貫・台輪で固める。頭貫は菊の籠彫りの木鼻をもつ。組物は、絵様線形を施した実肘木の平三斗で植物の籠彫りを施した拳鼻をもつ。中備は、絵様線形を施した実肘木をもつ本墓股で、それぞれ異なる彫刻をもつ。正面は東から、「松に鷹」、「波に獅子」、「牡丹に獅子」、「牡丹に獅子」、「牡丹に鳳凰」、「檜に鷹」、東面は北から、「水仙に鴛鴦」、「梅に小鳥」、「竹に虎」、「梅に小鳥」、「枝に小鳥」、西面は南から、「楓に鳥」、「松に鳥」、「雲に麒麟」、「松に鶴」、「波」、北面は東端間が「波に亀」、西端間が「波に兎」である。彫刻の随所にわずかながら彩色が残る。

柱間装置は、正面及び側面は半葺戸で内部に腰障子を入れ、背面両端間は舞良戸で、同東端間は内部に明障子を入れる。背面突出部の背面中央間及び両側面は舞良戸とする。背面両脇間は花頭窓として舞良戸を入れる。引戸は背面中央間が4枚建、ほかが2枚建である。

縁は切目縁で、縁束礎石の上に面取り角柱を立て、縁葛・隅叉首を組み、主屋の柱に縁板掛を取り付け、



図 407 壇上加藍御影堂背面側まわり



図 408 壇上加藍御影堂主体部組物

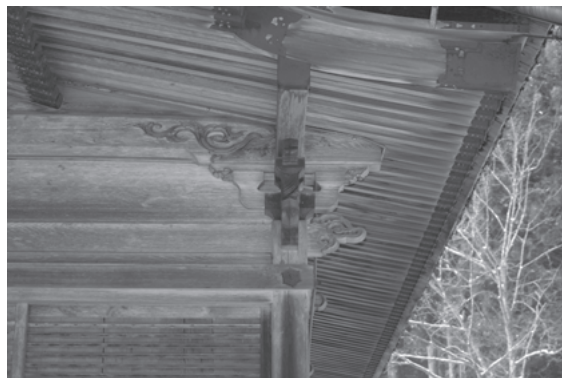


図 409 壇上加藍御影堂背面突出部組物



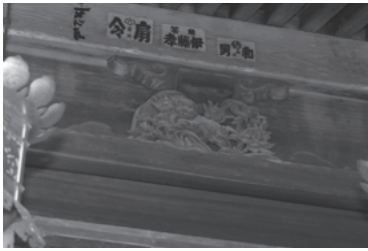
正面東から 1



正面東から 2



正面東から 3



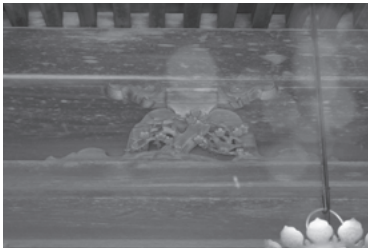
正面東から 4



正面東から 5



東面北から 1



東面北から 2



東面北から 3



東面北から 4



東面北から 5



背面東端間



背面西端間



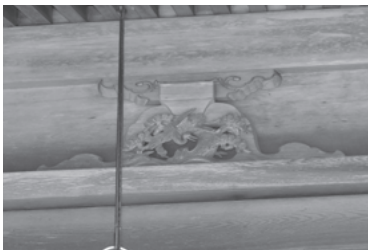
西面南から 1



西面南から 2



西面南から 3



西面南から 4



西面東から 5

図 410 壇上加藍御影堂中備墓股

縁板を張る。高欄は擬宝珠高欄とするが、正・側面の中央と背面両脇間に開口を設け、植物をかたどった架木を用いて納める。

内部 内部は前述の通り、内陣・内々陣を外陣が取り囲む。両者の境界を構成する入側柱は、頂部に粽をもつ径約350mmの円柱で、内法貫・内法長押・頭貫・台輪で固め、組物は実肘木付の出三斗する。柱間装置は、正面各間を両折棧唐戸、側面は手前1間を両折板戸とする。両折棧唐戸は朱漆塗で、両折板戸は黒漆塗とする。奥3間は檜材による奥行の深い腰長押を打

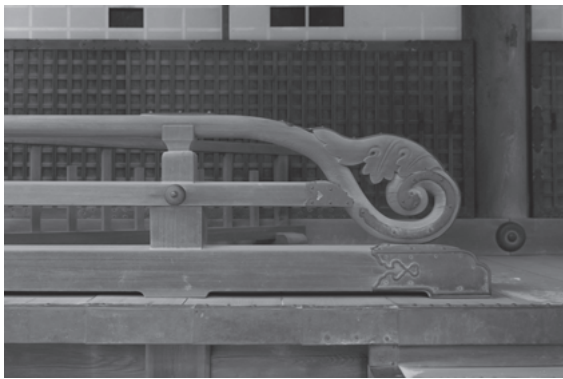


図411 壇上加藍御影堂高欄端部

ち、棚とし、壁には各柱間に2名、計12名の高僧像を描く。西面の奥から、真然、智泉、杲隣、圓明、真濟、實恵、東面の奥から持経、忠延、泰範、真如、道雄、真雅である。十大弟子に、真然と持経(定誉)を加えた12名である。背面は中央間を板扉、両脇間を豎板壁とする。板扉は火災など有事に際し、御影を救うために設けたと伝わる。外陣は、格天井を出三斗の手先で天井桁を受ける。桁行・梁間とも総間を28区で割り付け、正面外陣奥行7区、脇陣間口5区、後陣奥行3区とする。内陣・内々陣を囲む入側柱筋位置は、天井の割付に従い定めたと考える。床は畳敷とする。

内陣は、小組折上格天井で、間口16区、奥行10区で割り付け、中心から手前に1区寄せた位置の方4区を折上げる。床は、朱漆塗の拭板敷で、正面及び側面に畳を敷きまわす。内々陣境は、外陣側の柱位置とは異なる位置に定めており、外陣側・内陣側ともに半柱とみる。柱位置は、やはり天井割に従ったと考えられる。各柱間は内法貫・内法長押・台輪で固め、側柱筋と同様の出三斗を組む。内法長押は中央のみ1段高い位置に打ち、各間に幣軸付の両折板



図412 壇上加藍御影堂外陣(西脇陣)



図413 壇上加藍御影堂外陣(東脇陣)



図414 壇上加藍御影堂外陣組物

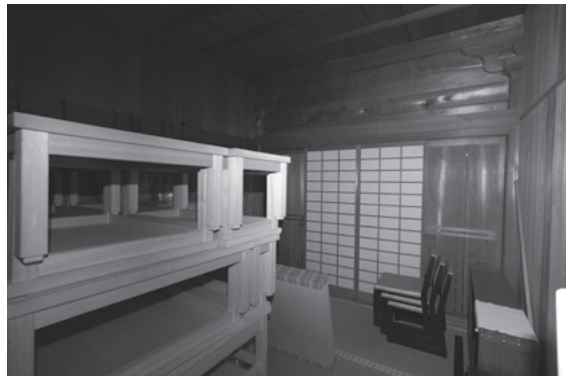


図415 壇上加藍御影堂背面突出部中央間物置

戸を嵌める。板戸は、透漆塗とする。両側面は板壁とし、西面に金剛界曼荼羅、東面に胎蔵界曼荼羅を描いた障子を嵌める。内陣中央には大壇を据え、天井から折り上げ天井から天蓋を吊る。内々陣は都合により調査をおこなっていないが、中央奥よりに須弥壇を構え、弘法大師の御影を納めた厨子を安置するという。小屋裏の観察から天井は鏡天井とみる。

後陣の背面突出部は、後陣境に引違板戸を、各柱間境に3枚建ての引戸を嵌める。天井は竿縁天井で、床は畳敷とする。現在は物置として利用されている。

軒まわり 軒は二軒繁垂木で、飛檐垂木のみ扱きをもち、地垂木・飛檐垂木ともに反りをもち、糸面取りを施す。化粧隅木は、地隅木と飛檐隅木を別木とし、ともに面取りを施す。飛檐隅木は鼻先を大きくした高野山特有の形状とする。

向 拝 花崗岩切石の上に、同じく花崗岩切石の礎盤を据え、一辺 265 mm 角（面内 210 mm）の粽付几帳面取角柱を立て、虹梁形頭貫で繋ぐ。頭貫には、波形の絵様繰形を施し、波の籠彫りを施した拳鼻が付く。組物は、絵様繰形を施した実肘木付の連三斗で、



図 416 壇上加藍御影堂背面突出部西脇間物置

中備位置に、「雲に鳳凰」の彫刻を据える。手挟みは、「蓮に鶴」の籠彫りとする。軒は、打越垂木のみの一軒である。

小屋組 小屋組は、正面側桁から背面側桁に2条の大梁を架け、大梁の上に間口方向の梁を架け、さらにこのうち中央2本の梁の中央に梁を架け、宝珠受けの柱を立てる。この柱の周囲には、梁上に四天束を立てて、露盤を受ける。大梁・梁の上には、母屋桁を受ける束を立て、背違貫で固める。母屋桁は、側桁間を間口・奥行ともに9間で割り付ける。

屋根・宝珠 屋根は、宝形造、檜皮葺で、裏板付二重軒付けとし、青銅製露盤・伏鉢・宝珠をのせる。露盤には、「當国粉河住／福井石見大掾良房」の刻銘をもち、江戸時代初めから明治時代中期頃まで、代々この名で活躍した福井良房が铸造したことが明らかである。これとは別に「平成五年十一月吉日」の刻銘をもち、修理に際して補刻されたものとする。

金具・彩色 金具は、台輪に八双金具、内法長押の釘隠しに六葉金具、切目長押の釘隠しに唄金具、内部では祖師壇とする腰長押に八双金具、隅木・垂



図 417 壇上加藍御影堂隅木



図 418 壇上加藍御影堂向拝見上げ

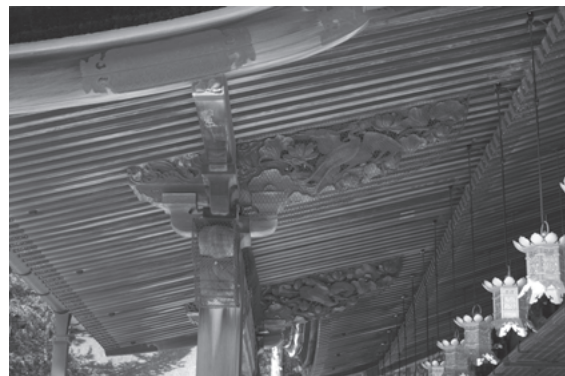


図 419 壇上加藍御影堂向拝手挟み

木に木口金具を用い、飛檐隅木には風鐸を釣る。隅木木口金具は、「弘化三年歳／重兵衛／工師若山鋸屋善吉／十二月吉日」の銘をもつ。いずれも青銅製で、内部の金具には金箔押しがのこる。

指 図 金剛峯寺には、弘化5年(1848)の年紀をもつ「御影堂再建十分之一図」(PL.58)が所蔵されている。側立面図・向拝立面図・小屋組図を組み合わせて描いたもので、再建掛として、学侶方の浄眼院・心南院、行人方の増福院・光明院が名を連ねている。現状との相違は、虹梁絵様や虹梁頭貫木鼻など細部意匠



図 420 壇上加藍御影堂小屋組



図 421 壇上加藍御影堂小屋組宝珠束見上げ



図 423 壇上加藍御影堂内々陣天井裏内々陣天井裏

に限られ、造営に際して作成された計画図とみる。

まとめ 御影堂は、壇上加藍の金堂背面に建ち、真言宗の法灯を今日に伝える重要な建物である。方5間の大規模仏堂で、緩い勾配で深い軒をつくる宝形造檜皮葺の屋根、手先を出さない組物、側まわりの半蔀戸など、簡素ながらもいわゆる和様を基調とした落ち着いた外観を持つ。内々陣・内陣を外陣・脇陣・後陣が取り囲む平面形式は、古代に成立し、中・近世の拡張を経たものであり、高野山以外の真言宗の御影堂建築にも多大な影響を与えた壇上加藍御影堂の到達点と位置付けられる(第6章4)。また、屋根葺替など、適切な修理がなされており、保存状態は極めて良い。地元大工を棟梁として建立された本建築は、高野山真言宗総本山の御影堂建築に相応しい規模、意匠を有し、高野山のみならず、真言宗の建築を語る上で極めて重要な建物である。(鈴木智大)

主要参考文献

『重要文化財金剛三昧院客殿及び台所四所明神社本殿多宝塔修理工事報告書』抜粋(高野山文化財保存会、1969年)。
『粉河町史』(粉河町、2003年)。

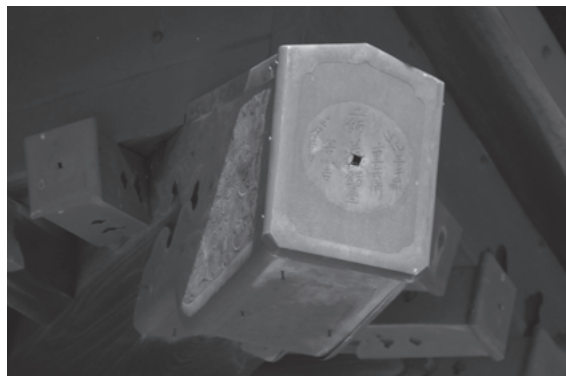


図 422 壇上加藍御影堂隅木木口金具



図 424 壇上加藍御影堂露盤・覆鉢

(6) 宝庫 (PL.23・24)

構造形式 桁行 8.6 m、梁間 5.9 m、2階建、土蔵造、入母屋造、銅板葺、正面前室付、桁行 1.8 m、梁間 4.3 m、妻入、入母屋造、銅板葺

建立年代 弘化5年(1848)『高野山名所図会』

概要 宝庫は、御影堂の背面に中軸を揃え、南面する土蔵である。『高野山名所図会』には、弘化5年(1848)に再建されたと記される。

御影堂に納めていた文書を、納めるために建立されたようで、『高野春秋編年輯録』から元禄3年(1690)には、御影堂と別棟の御蔵が確認できる。

現在の建物は、桁行 8.6m、梁間 5.9m、2階建ての土蔵造、入母屋造、銅板葺である。正面に、入母屋銅板葺、妻入の前室をもつ。周囲は垣で区画されている。以下では玄関部分以外のことを主体部と呼ぶ。

側まわり 宝庫は北に向かって傾斜する土地に、乱石積の石垣で平場を設け基壇としている。内側には玉石が敷かれ、高さ 10cm 程度の花崗岩切石を見切石としてめぐらす。主体部の礎石は自然石で、その上に土台を敷く。土台の上には、桁行方向を4間に、梁間方向を3間に割るように角柱を立てる。この柱は玄関部分の鴨居あたりで留まり、その位置と、敷居よりやや低い位置に長押をめぐらしている。この2箇所の長押の間には幅約 30cm の縦板を入れ、主体部の漆喰壁を保護している。

主体部の壁面は、この縦板の内側より立ち上がる。背面2箇所にのみ窓があるほかに窓はなく、鉢巻などもない。屋根は置屋根で、壁体の上端から腕木・地隅木を出して出桁を受ける。軒は一軒疎垂木で、屋根は入母屋造銅板葺である。破風にはかぶら懸魚を吊り、妻壁には狐格子を嵌める。

平面と内部 1階は拭板敷で、壁内面に約 30cm の横板を組み、天井は根太天井とする。2階も床、壁面は1階と同様である。2階は、側桁と概ね下端を揃えて大梁を3箇所に渡し、その上に束を置き、地棟木を受ける。端部にある2箇所の梁の上において、地棟木から隅へ地隅木を出す。天井には化粧垂木などは現さず、天井板のみを張っており、全体の形状は寄棟造状を呈す。

1階は1室とし、2階は中間の梁の位置で横板の

間仕切りを設けている。この梁は中央に位置せず、西に寄るため、西の部屋の方が狭くなる。間仕切りの中央には、床の上に敷居状の部材を、梁に長押状の部材入れて、板扉を吊っている。

前室 宝蔵には前室が突出して取り付く。これは、花崗岩切石の礎石に角柱を立て、地長押、敷居、鴨居をめぐらし、上部で桁を受ける。軒は一軒疎垂木で、屋根は入母屋造銅板葺、妻入りである。破風には懸魚を吊り、妻壁には狐格子を入れる。内部には棹を南北方向に打入れた棹縁天井を張る。地長押と敷居の間には連子、鴨居と桁の間には小壁を入れる。敷居と鴨居の間は、正面中央にのみ引違格子戸を入れ、それ以外には狐格子を嵌める。

まとめ 宝庫は御影堂の背面に建ち、重要な文書など高野山の重要な宝物を納めてきた経緯をもつ。

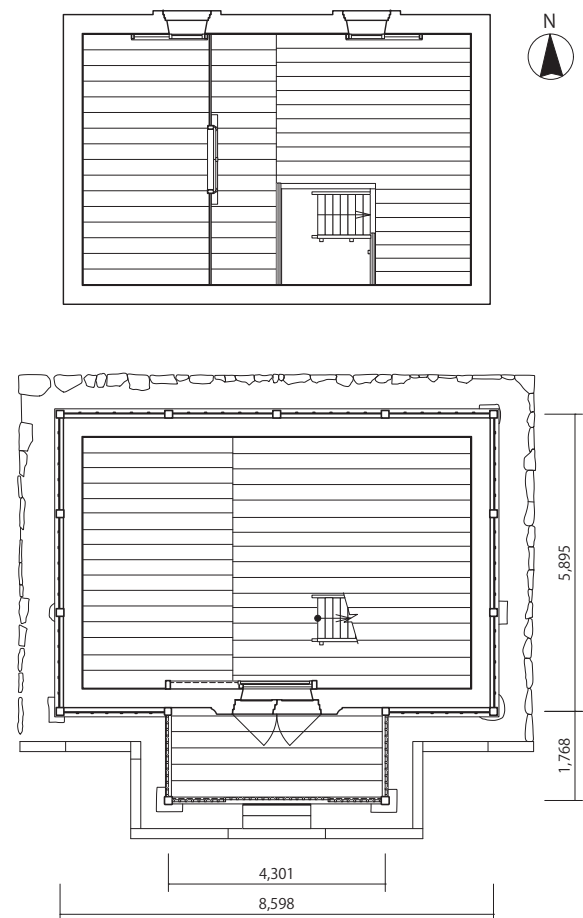


図 425 壇上加藍宝庫平面図 1:150



図 426 壇上加藍宝庫前室



図 427 壇上加藍宝庫蔵前



図 428 壇上加藍宝庫2階

内部2階に板扉を建て込む厳重な造りや、寄棟造状に納める2階の天井は、そのような特異な位置づけを反映したものとみられ、壇上加藍に欠かすことができない重要な建物といえる。(山崎有生)

参考文献

山岸常人「仏堂納置文書考」(『国立歴史民俗博物館研究報告』45、1992年、161～193頁)。

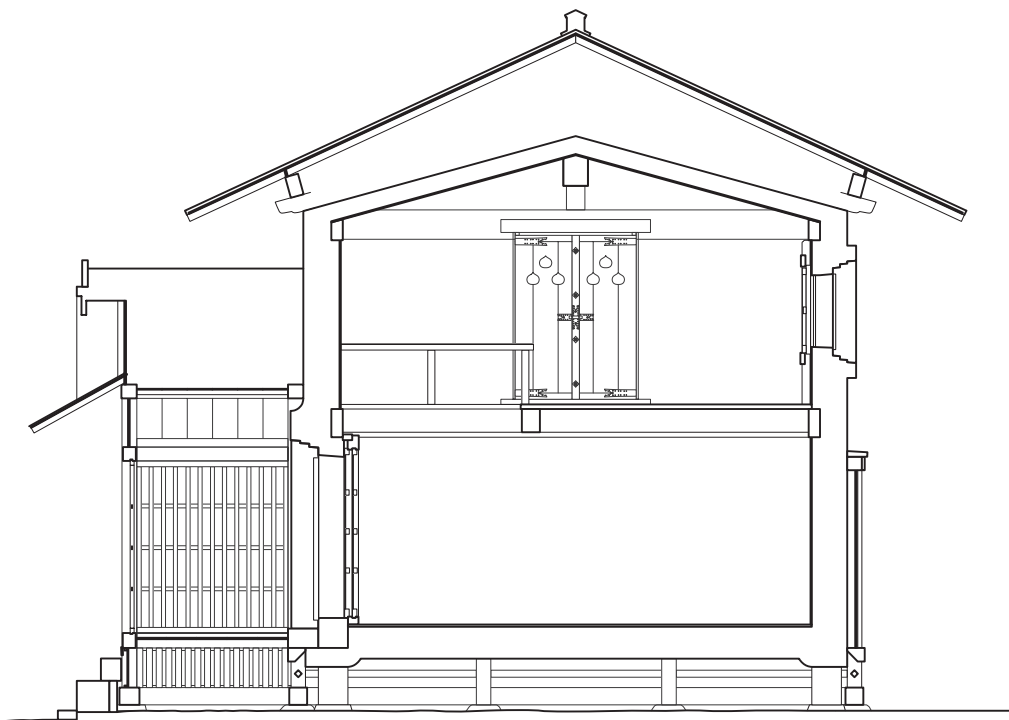


図 429 壇上加藍宝庫断面図 1:80

(7) 准胝堂 (PL.25・26)

構造形式 桁行3間、梁間3間、入母屋造、檜皮葺、向拝1間

建立年代 明治16年(1883)『高野山名所図会』

概要 准胝堂は、壇上加藍西部、金堂の西北方に位置し、東の御影堂、西の孔雀堂とともに南面に建つ。出家得度の本尊として、准胝観音を本尊とする。桁行3間、梁間3間、入母屋造、檜皮葺で、正面中央間に向拝を設け、四面に切目縁を回した方3間堂である。

創建は天禄年間小松天皇の御願と伝えるが、正暦、久安、大永、寛永、天保の度重なる火災でいずれも類焼し、再建を繰り返してきた。現在の建物は、『高野山名所図会』より、明治16年(1883)に、堺の豪商・河盛仁平により再建されたことがわかる。

平面計画 桁行梁行とも、中央間を、約2,750mm、脇間を約2,490mmとする。垂木割は、中央間を22枝、脇間を20枝とし、1枝は約125mmとなる。向拝

柱間は24枝とする。

側まわり 准胝堂は、割石を見切石として、周囲よりやや高くした上で、縁に納まる乱石積基壇を築き、礎石を据える。軸部は礎石上に、径約260mmの粽付の円柱を立て、切目長押、腰長押、内法長押、頭貫、台輪で固める。頭貫と台輪は禅宗様の木鼻を造る。柱上の組物は出組で、各柱間に中備に出組の組物を置く。組物は、柱筋では実肘木を設けないが、手先では実肘木を介して出桁を受ける。そのため、通し肘木と出桁の間には波紋の彫刻を施した板支輪を入れる。隅部の組物は肘木をもう一手伸ばし送斗を入れ、出桁を支持するが、隅行方向の肘木は一手目のみ設けている。縁は、切石の束石上に縁束を立て、縁葛を通し、縁板を載せる。

向拝は、切石の低い礎石上に礎盤石を載せ、上下端に粽を設けた几帳面取各柱を立てる。柱上部を虹梁形頭貫で繋ぎ、頭貫は木鼻を突出させる。組物は、

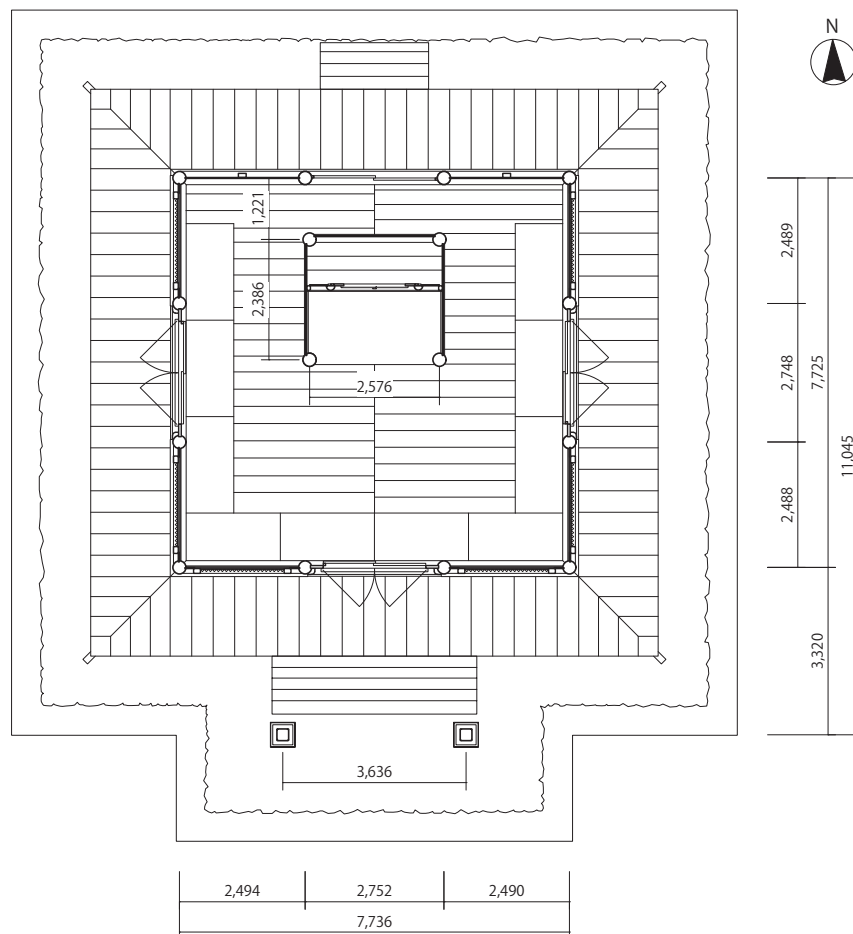


図 430 壇上加藍准胝堂平面図 1:150

送斗付の三斗組で実肘木付きとし、大斗と送斗は皿斗が付く。中備には、二体の竜が向き合う彫刻を置き、向拝桁を受ける。柱筋には鳳凰の彫刻を施した手挟みを入れる。

軒まわり・小屋組・屋根 軒は二軒繁垂木で、向拝は垂木を打ち超し、飛檐垂木を打ち二軒とする。隅木は、地隅木鼻に線形を施し、飛檐隅木鼻に造り出しはない。

小屋組は、東西方向の柱筋に2条の大梁を架け、正背面から大梁に繫梁を架ける。繫梁上にさらに奥行方向の梁を架け、繫梁上に束を立て、背違い貫で固める。屋根は、入母屋造、檜皮葺で、妻飾は、三斗組と墓股で虹梁を受け、大瓶束を載せる。懸魚は鏝懸魚とし、身舎桁は破風板で隠れるため降懸魚はない。

柱間装置 正面及び側面の中央間に、幣軸を回し、金具の藁座をうち、棧唐戸を入れる。棧唐戸の内側には引き分けの腰高障子を入れる。正面及び側面脇間は、腰長押を打ち、幣軸を入れ連子窓を嵌める。腰長押下には間柱を立て、横板を落とし込む。背面



図 431 壇上加藍准胝堂正側面側まわり

は、中央間を引き違い板戸とし、脇間は間柱を立てた横板壁とする。

内部 内部は一室で、中央間後方に柱を4本立てて仏壇を構える。床は拭板敷で、背面以外の壁際に畳を並べる。仏壇の前面に護摩壇を設置する。仏壇の正面側の2本の柱は上部に粽を付けた丸柱で、上部に木鼻付きの虹梁型頭貫を入れ、柱上に三斗を組み、中備に墓股を置き、天井桁を載せる。後方の柱も丸柱とするが、組物等は入れずに正面以外の3面に天井長押を入れる。虹梁型頭貫や実肘木には、絵様線形が施されているが、これは正面側のみで、背面には彫刻は施されていない。仏壇は、正面側の柱の腰高に貫を入れ、腰高の棚を造り、後方を造り付けの厨子として両開きの板戸を入れ、内部に仏像を安置する。この仏壇の柱位置は、桁行方向は身舎の中央間に揃えるが、梁間方向は柱筋と異なり、室の後方に寄せている。室内の組物及び中備は出三斗とし、手先で天井桁を受け、天井は格天井とする。

まとめ 准胝堂は、密教寺院内の三間仏堂として伝統的な形式を踏襲する建物である。壇上加藍東の



図 432 壇上加藍准胝堂組物



図 433 壇上加藍准胝堂隅木



図 434 壇上加藍准胝堂向拝軒下

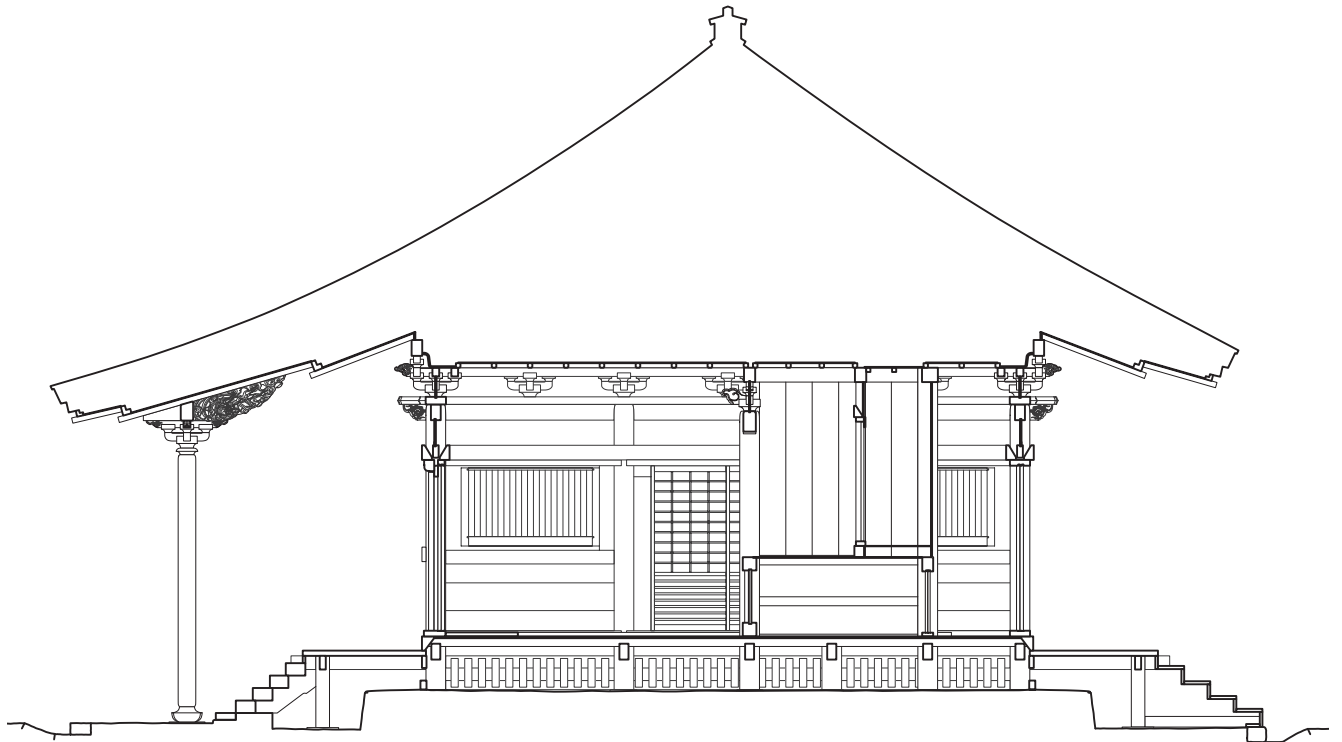


図 435 壇上加藍准胝堂断面図 1:100

愛染堂とよく似た建築で、規模もほぼ同じである。彫刻などの装飾要素も非常に似ているが、中備を出組とし、釘隠等の飾り金具を使用していないなどの違いも認められる。細部意匠をみると、木鼻の彫刻

を透かし彫りにするといった、幕末頃から近代にかけての特徴も見られるが、全体としてよく伝統的な形式を踏襲し、壇上加藍にふさわしい建築といえる。

(大林 潤)



図 436 壇上加藍准胝堂向拝手挟み



図 437 壇上加藍准胝堂妻飾



図 438 壇上加藍准胝堂来迎柱虹梁形頭貫絵様



図 439 壇上加藍准胝堂小屋組

(8) 山王院拝殿 (PL.26・27)

構造形式 桁行9間、梁間3間、入母屋造、檜皮葺、両側面1間向拝付

建立年代 弘化2年(1845) (『高野山名所図会』・寺蔵指図)

概要 山王院拝殿は壇上伽藍の西隅に位置する鎮守社三社の東方に東面して建つ。鎮守社三社は春日造の丹生都比売明神社・高野明神社と流造の総社の三社で、いずれも大永2年(1522)の建立である。拝殿は、桁行9間、梁間3間で、入母屋造、檜皮葺で、

両側面に1間の向拝を付けた建物である。

『高野山名所図会』によると、現在の建物は天保14年(1843)の大火で類焼した後、弘化2年(1845)に再建されたといい、後述するように、様式的にみても整合的である。

内部は一室で、入側に4本の柱を立て、その後方を拭板敷とし、それ以外に畳を敷き詰めて、空間を区分している。板敷部分は、桁行中央間の奥の方に厨子を置き、その前方に案や壇、礼盤を並べる。また、壇と礼盤を挟んで、一对の高座を置く。外部は、四周に跳高欄を付けた切目縁をめぐらし、正面、両側面、背面に木階を設ける。

平面 平面は、桁行9間、梁間3間で、ともに中央間のみ広くとる。柱間寸法は桁行中央間がもっとも大きく3,640mm(約12尺)で、次いで梁間中央間の3,385mm(約11.2尺)が大きい。それ以外の柱間の寸法は概ね同じで、桁行では2,194mm(約7.2尺)前後の値を取る。枝数は正面中央間で11枝、側面中央間で10枝、その他の柱間で7枝である。四周には跳高欄付きの切目縁をめぐらし、正面中央間に木階7級、両側面中央間に木階5級、背面5間に木階段3級を設ける。各場所により、級数が異なるのは、山王院は拝殿が西(背面)に向かって高くなる傾斜地に建てられているためである。木階は四方にあるものの、正背面には向拝はない。以下では、向拝以外の建物の主体部を主屋と呼ぶ。

側まわり 基壇は乱石積で、その上に亀腹をつくり、その上に主屋の柱を立てる。傾斜地に位置するため、基壇の正面側が高く、背面側が低くなっている。主屋の柱の足元には地長押をまわし、縁との間に連子でふさぐ。基壇の周囲には礎石をめぐらし、縁束を載せる。さらに縁束の外周には、側石を

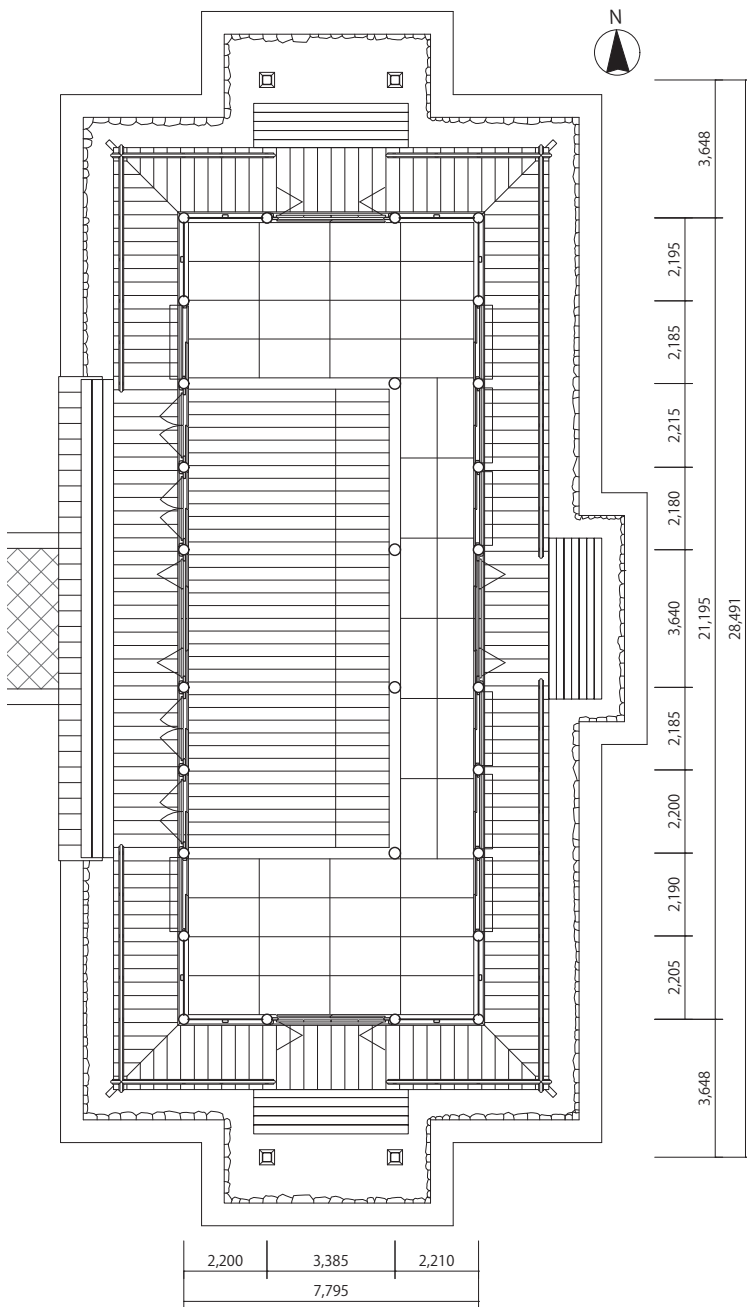


図 440 山王院拝殿平面図 1:200

2列めぐらし雨落溝とする。この雨落溝は正面と両側面の3方向で木階にあわせて突出するが、背面では突出していない。

主屋の柱は径260mmの円柱で、地長押、切目長押、内法長押、頭貫をまわす。平・妻の端間には間柱150mm（面内126mm）また、それぞれの中央間では、ともに頭貫を虹梁形につくり、中備に実肘木付きの簀束を置く。四隅の柱上には、頭貫の木鼻を突出させる。平の柱上では、大斗に絵様を施した杵肘木を乗せ、その上の桁や化粧の梁の鼻を受ける。妻面でも同様で、組物で梁と桁を受けている。中備は桁行・梁間とも中央間のみ簀束を据え、他はもたない。

柱間装置は、正面中央間は内部に明障子、外部に折棧唐戸、正面端間を板壁、それ以外の柱間には、内部に明障子を入れて、外部に半葎を吊る。背面には、中央間と端間は同様だが、中央間の両脇2間ずつ、合計4間分には、内に明障子を入れ、外に板戸を吊る。両側面は、端間を板壁、中央間では内を明障子、外を折棧唐戸とする。

軒は二軒疎垂木で、垂木に反り・増しは見られな

い。屋根は檜皮葺で、大棟を箱棟とし、その両端に鬼板を置く。入母屋の破風には巴紋と花・波の彫刻を施した三花懸魚を吊り、奥には狐格子を貼る。

四周の切目縁には跳高欄を付す。親柱などはなく、正背面や両側面の木階の位置にあわせて高欄を切るが、木階には登高欄などを付けない。

向 拝 両側面の正面に1間の向拝を設ける。礎石の上に石製礎盤を置き、上下に粽の付いた几帳面取りの角柱（236mm面内190mm）を立て、木鼻を突出させた虹梁形頭貫で固める。柱上には大斗の上に実肘木付きの連三斗を置き、虹梁形頭貫の中央に中備として、宝珠と波の彫刻を持つ本墓股を置く。連三斗の肘木は、わずかに面が取られている。向拝と主屋の間には繫材はなく、繰形を施した手挟で処理する。垂木は一軒の疎垂木で、主屋の飛檐垂木を延ばして打越垂木としている。

内 部 内部は正面入側柱筋に4本の粽の付いた柱を立てる。うち2本は中央間両端の柱と筋を揃え、残りの2本は南北妻から2つ目の柱筋に揃える。この内部柱は黒漆塗で、同じく黒漆塗に朱漆の絵様を



図 441 壇上加藍山王院拝殿基壇・縁まわり



図 442 壇上加藍山王院拝殿正面中央間虹梁形頭貫



図 443 壇上加藍山王院拝殿隅木



図 444 壇上加藍山王院拝殿妻飾

入れた虹梁形頭貫で固め、両端には木鼻を突出させる。柱上には大斗を置き、実肘木付きの出三斗を受ける。内部柱上の実肘木は化粧の桁を受けており、内部柱と柱筋を揃える正面側柱上でも絵様入りの杵肘木でこれを受ける。それ以外は秤肘木としている。内部柱の背面では、桁の端部を拳鼻につくり、内部柱の外側両端で、桁を留めている。つまり、この桁は、内部柱から正面側柱の位置にのみめぐらされる。組物間には小壁を入れ、正背面ともに中備の本墓股を入れる。墓股内部には、中央間で波と宝珠、その両端で波を彫刻する。天井は南北方向に棹を渡す棹縁天井で、正面側柱と内部柱間の桁と直交する。

内部は、内部柱により後ろの間口5間分、奥行2間分の空間と、それ以外の空間に区分される。前者には、朱漆塗の拭板が敷かれ、後者には高麗縁の畳を敷き詰める。作り付けの仏壇のようなものはないが、拭板敷の部分、桁行中軸線上に台を置き、厨子を安置する。厨子は屋蓋部、軸部、基壇部からなる春日厨子で、屋蓋部下内法長押を内、間に横連子を入れる。基壇部には格狭間を設ける。その前方には案を置き、さらに前方には壇、礼盤を置く。この中軸線付近に置かれる調度の両脇に、高座を向かい合うように置いて上に天蓋を吊る。

建立年代と改修 確認できる限りの改修は少ない。縁束に根継ぎを施し、高欄の一部や、正背面の階段を新材に替えている。特に正背面の木階段は全面的に交換されており、両側面の木階段と形式が異なる。主屋正面の虹梁形頭貫の絵様繰形の若葉に芽が付されていることは、19世紀中期の様相を示しており、冒頭で述べた『高野山名所図会』にある弘化2年



図 446 壇上加藍山王院拝殿内部正面見返し

(1845) 再建の記事と整合的する。

指 図 金剛峯寺には、山王院拝殿を描いた指図として、弘化2年(1845)の年紀をもつ「山王院地引絵図」「山王院廿分一絵図」と年紀をもたない「御社拝殿地割図」(PL.60)などが所蔵されている。

「山王院地引絵図」は、主屋の柱を丸、向拝柱及び束柱を四角であらわし、床上にあらわれるものを、塗りつぶし、床下に留まるもの、あるいは内法より上にあるものを、白抜きであらわした平面図で、柱間寸法を記入する。桁行9間、梁間3間で、各中央間を広くとり、南北両面に1間向拝がつき、内部の正面入側柱が4本立つなど、現在の建物と一致しており、造営に際して作製された図とみられる。

「山王院廿分一絵図」は、桁行(西面)と梁間(北面)をあわせて描いた建地割図で、桁より下を立面図、桁より上を断面図として描く。桁行の中央から3間目を扉とせず、板戸とする点や、中央間の頭貫を虹梁形としない点など、わずかな相違はあるものの、向拝の虹梁形頭貫、組物、手挟みなどは繰形に至るまで一致する。裏書には、学侶方再建掛として



図 445 壇上加藍山王院拝殿向拝手挟み



図 447 壇上加藍山王院拝殿入側柱頭貫木鼻・組物

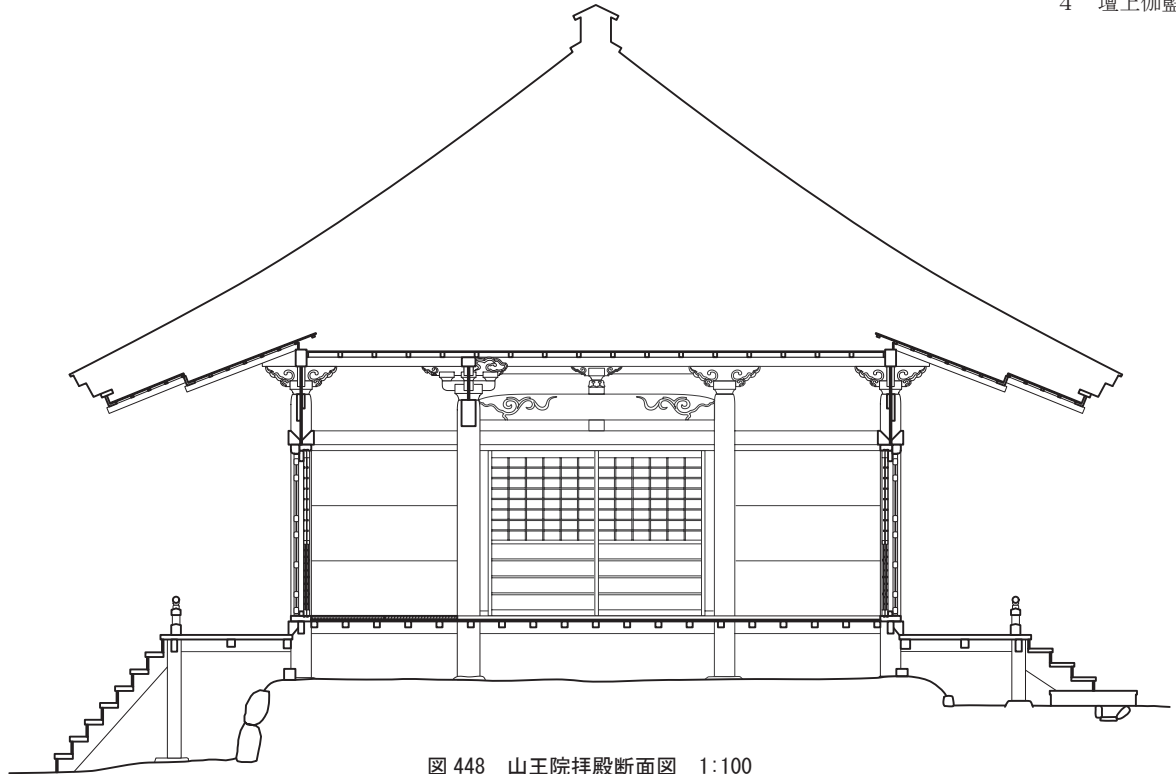


図 448 山王院拝殿断面図 1:100

弥勒院・西室院が、行人方再建係として延寿院・東善院が名を連ね、「大奉行所控」とあり、再建に際して作成されたものとみてよいだろう。

「御社拝殿地割図」は、天保14年(1843)の火災で焼失した前身建物を描いた平面図とみられ、第6章において詳述したい。

評 価 山王院拝殿は、横長平面をもつ大型拝殿で、当初材をよく残す。また、棹縁天井、半蔀戸、

疎垂木、大斗肘木といった住宅風の要素が多い。一報で内部柱やその虹梁形頭貫を黒漆とし、拭板敷にも朱漆を塗り、中央間の頭貫を虹梁形にし、側まわりの組物に絵様肘木を用いるなど、要所に装飾を入れる。さらに、両側面にのみ向拝を設ける点は特異である。このように山王院拝殿は、住宅風の整った意匠を持ち、珍しい平面形式をもつ重要な遺構といえるだろう。(山崎有生)



図 449 壇上加藍山王院拝殿入側柱中央間虹梁形頭貫絵様



図 450 壇上加藍山王院拝殿南側面中央間虹梁絵様

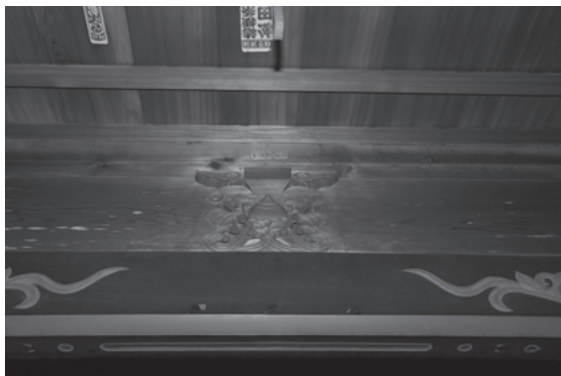


図 451 壇上加藍山王院拝殿入側柱中央間中備藪股



図 452 壇上加藍山王院拝殿厨子

(9) 山王院鐘楼 (PL.28)

構造形式 桁行3間、梁間2間、袴腰付、入母屋造、檜皮葺

建立年代 弘化5年(1848)『高野山名所図会』

概要 山王院鐘楼は壇上加藍西部、山王院拝殿のすぐ北にある、南北棟の袴腰付き鐘楼である。

『高野山名所図会』によると、天保14年(1843)の火災に遭い、弘化5年(1848)に再建されたという。下層は桁行3間、梁間2間で、扉口を西面に設ける。上層は桁行3間、梁間2間で、入母屋造、檜皮葺の屋根をもつ。上層には跳高欄付きの縁をめぐらし、腰組で受ける。

平面と計画 上層は、桁行中央間で1,627mm、両脇間と梁行柱間で1360mm前後である。枝数は、桁行中央間で12枝、それ以外で10枝となる。1枝0.45尺

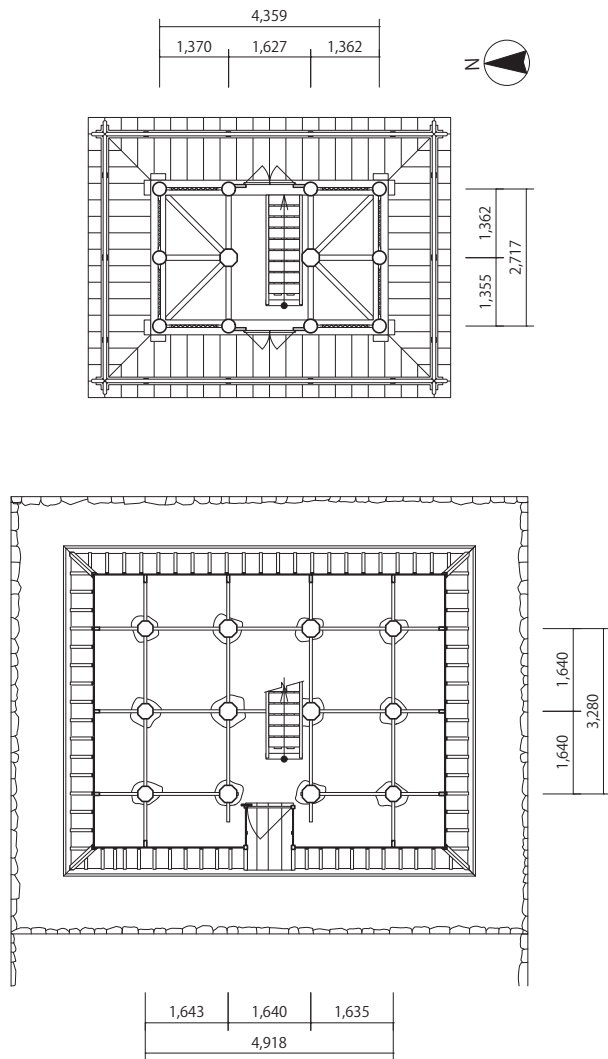


図 453 壇上加藍山王院鐘楼平面図 1:150

(約136mm)で計画され、中央間以外は2枝減じている。

一方、下層は、桁行・梁行ともにすべての柱間で概ね1,640mmとなる。上層の桁行中央間の寸法がこの値に近似するのは、下層の棟通り中央間の内部柱が通柱として上層まで立ち上がり、この柱と上層桁行中央間の側柱が、筋を揃えたためである。後述のように、上層の柱盤を一手分内側に引き込んで通減させたため、上層では、桁行両脇間・梁行柱間に2枝分の寸法を減じている。

側まわり 鐘楼は、北西に向かって高くなる地形に、平場を造成して基壇とする。東・南・北面には乱石積の石垣を設けるが、西面には見切石を2段敷くのみである。

下層は、袴腰地覆石はめぐらさず、土台を地面に直接置き、縦板張りの袴腰を立ちあげる。袴腰上部には頭長押をめぐらす。この部材は外部では台輪のように見えるが、内部では上端を柱頂部と合わせて頭貫状に納まっている。頭長押上部には、上層の縁を受ける三手先の腰組を置き、壁付の通肘木は3段とする。その最上部の通肘木と直交させて肘木をのばし、三手目の巻斗の上で受け、その先端を拳鼻につくる。なお、腰組の中備は簀束で、その上部の通肘木上に斗を2段重ねる。

上層は、縁の上に柱盤を井桁に組んで置き、粽をもつ円柱を立てる。円柱は頭貫で固められるほか、地長押、半長押付きの内法長押、繰形付きの台輪がめぐらされる。頭貫の先端には、雲・波の浮彫を施した木鼻を突出させている。その上には尾垂木付き三手先組物を柱位置に置く。中備は下層同様、簀束で、やはり上に斗を2段重ねる。三手先組物は軒小天井と、波・雲を彫刻した板支輪を持つ。隅の二の尾垂木上には繰形を施した飼い物を入れ、飛檐隅木の先端は木鼻状に整形する。なお、地隅木・飛檐隅木、地垂木・飛檐垂木のほか、上下層の秤肘木に、わずかに面取りを施している。

上層の柱間装置は、桁行中央間以外はすべて連子窓とし、中央間には扉を吊りこむ。東面中央間の扉は開放し、撞木を突出させている。

軒は二軒繁垂木で反り・増しはない直材である。

屋根は檜皮葺で、箱棟の大棟を載せ、両端に鬼板を置く。妻飾は虹梁大瓶束で、手前に巴紋と雲の彫刻を施した三花懸魚を吊る。虹梁には雲の絵様が施され、その下部は大斗と実肘木で受ける。大瓶束の上部、両脇には木鼻を付けている。

また、飾金具として内法長押に六葉の釘隠しを用いている。

内部の構造 側まわりの見えがかりから推察される構造と、内部の構造は異なっている。下層は内部柱をもつ総柱建物状になっており、自然石の礎石の上に八角柱を立て、腰貫と、高さの異なる2段の飛貫で固める。腰貫は桁行に平行な方向を上木とし、背違いに入れられる。この腰貫は、扉口の両脇の2箇所を除き、袴腰近くまで延びて、袴腰の骨組みとなる縦縁に突き付けられている。下段の飛貫は、腰貫と同様に処理される。なお、上層には床が張られておらず、この飛貫の上端の位置に渡された厚板が、鐘を撞く際の足場となる。上段の飛貫は頭長押の直下にあり、扱いは頭貫に近い。

下層の棟通り中央間の位置の内部柱は、そのまま上層まで延びる通柱となる。この通柱は上層組物の最上段の通肘木上端で留まり、桁を受ける。その直上に通柱と同様の形状の束柱が置かれ、小屋組を支える。この束柱も八角形で、地隅木や隅の尾垂木が挿されている。また、桁行方向に貫が渡され、化粧垂木の垂木掛となっている。そして、壁付通肘木最上段の上端にある側桁と、通肘木上端で受けた桁の間に、柱と筋を違えて、梁を架ける。

通柱以外の下層側柱は、頭長押上端で留まる。柱上に組物が据え、通肘木を平・隅ともに内部に引き込んで、通柱に挿す。内部の通肘木上、壁面から内側に一手分入った位置には、斗を2段重ね、最上段の通肘木上端で上層の柱盤を受け、その上に柱を置く。通肘木最下段の下端は、外部の腰組から引き込んだ大斗上の肘木と斗によって支える。これらの部材含め、

中備の簀束以外は内部にも組物が現れる。

なお上層の柱の外部は円形であるが、内部は多角形である。おそらく断面を16角形に製材したものを化粧となる部分のみ円形に整形したものであろう。

改修 扉まわりを新材に置き換えるほか、袴腰内部や小屋裏に新補とみられる補強材が入る。下層から鐘を撞くための足場に至る階段も新補である。

まとめ 山王院鐘楼は、下層の袴腰内部では貫を多用して軸部を固め、内部柱を通柱として上下層の軸部を緊結するという、内部を完全に野物とした構法をもつ。少ないながらも要所に装飾を施しており、整った意匠を持つ近世の袴腰鐘楼として高い価値を有する。

(山崎有生)

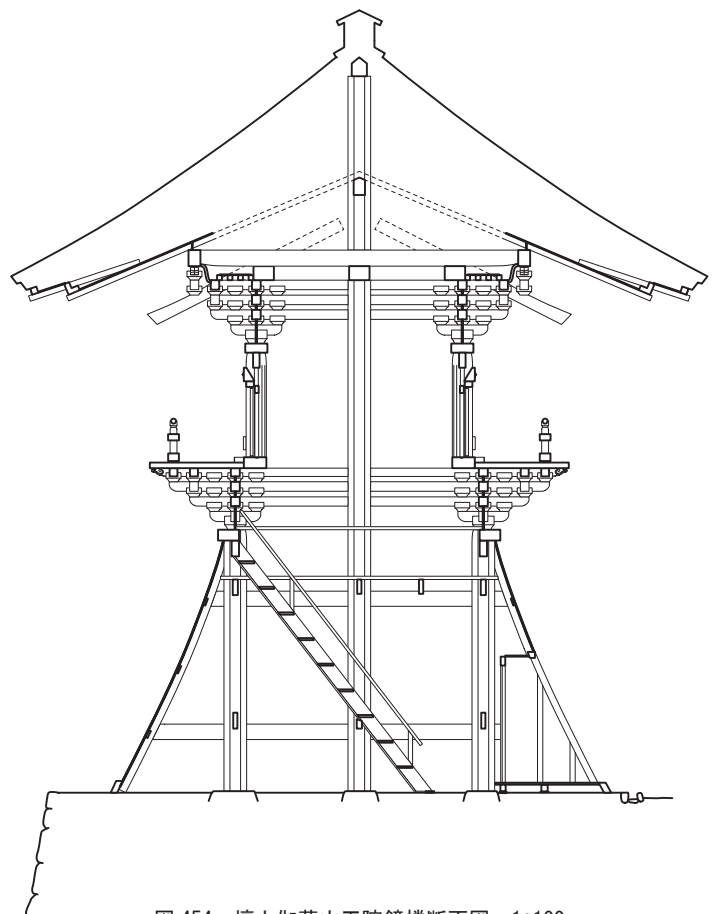


図 454 壇上加藍山王院鐘楼断面図 1:100



図 455 壇上加藍山王院鐘楼見上げ



図 456 壇上加藍山王院鐘楼上層頭貫木鼻



図 457 壇上加藍山王院鐘楼上層側まわり



図 458 壇上加藍山王院鐘楼隅木



図 459 壇上加藍山王院鐘楼妻飾



図 460 壇上加藍山王院鐘楼下層内部



図 461 壇上加藍山王院鐘楼上層内部



図 462 壇上加藍山王院鐘楼上層架構見上げ

(10) 六角経蔵 (PL.28・29)

構造形式 2階建、六角円堂、鉄筋コンクリート造、宝形造、銅板葺

建立年代 昭和4年(1929)(基壇銘)

沿革と配置 六角経蔵は、鳥羽法皇の菩提を弔うため、皇后の美福門院が平治元年(1159)に建立したことに始まる。その後、天正19年(1591)に建て替えられるが、文化6年(1809)の大火で類焼する。その後、文政5年(1822)に再建されるが、天保14年(1843)に再び焼失し、明治17年(1884)に再建されるも昭和元年(1926)に再び焼失した。現在の建物は、昭和4年(1929)に大阪の大和屋主人、坂口祐三郎によって再建されたものである。

中門を通った西手に建ち、東面する。建物は六角二重、銅板葺の2階建、鉄筋コンクリート造で、二重の屋根上に相輪を頂く。

基壇・基礎 基壇は二重基壇で、下成を乱石積、上成を低い切石積とする。東側には、3級の段を設ける。基壇上には、切石で加工した円形平面の布基礎を築く。この基礎の形状は、後述する初重の縁の平

面に対応する。基礎の最下部には、亀腹状に加工した地覆を置き、その上に6本の東石を立て、東石間を羽目石で閉塞する。東石は、羽目石から円形断面の形状を造り出す。東石と羽目石の上には、葛石をのせる。

平面寸尺と軸部 初重の側まわりは、壁厚約135mmの躯体を正六角形平面で立ち上げた壁式構造とし、その壁に副わせて外周に木製の校木を組み、校倉造風とする。壁は内側で一辺2.6m、対角線の内法寸法5.2mである。校木は、初重の縁にのる最下段のみを正方形断面の部材で組み、その上に五角形断面の校木10本を平組で組む。その上には、方形断面の台輪状の部材を置く。この部材は、隅で留めとする。初重の内部には、6本の円柱(径360mm)を放射状に並べる。一辺の柱間隔は1.38m、対角線上の柱間隔は2.76mである。

二重の側まわりはラーメン構造とし、初重内部の円柱と平面位置を同じくして、強い粽を付けた円柱を6本立てる。外観上はそれらを頭貫で繋ぐように造り出す。内部には、鉄筋コンクリート造の壁から

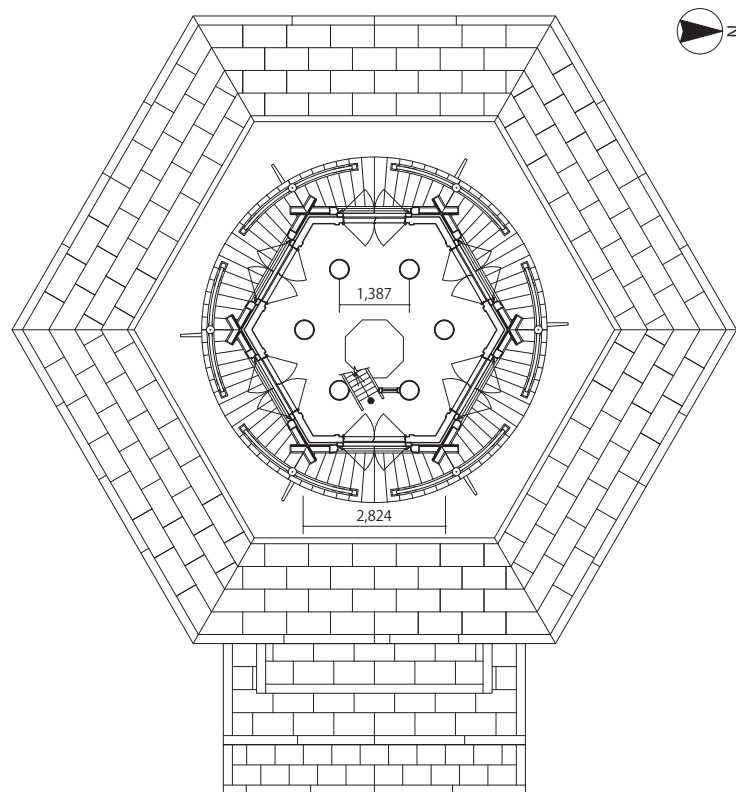


図 463 壇上加藍六角経蔵平面図 1:150

柱形のみ現れる。重層建築であるが、台輪はない。二重は側まわりで固め、内部には柱を立てず、広い空間を確保する。なお、初重、二重ともに心柱はない。初重に対する二重の通減率は53%で、大きな通減をとる。

組物 初重の組物は木製の三斗組で、台輪状の部材の隅にのみ置く。この組物は、外側3方向に一手出して出三斗風とする。肘木には、笹繰がつく。三斗組には、絵様繰形を持つ木製の実肘木を重ねる。中備は木製の本臺股で、絵様繰形を持つ木製の実肘木を置く。この本臺股は一木から削り抜いた刳抜臺股で、股間に彫刻はない。臺股の形状としては平安時代末頃のもので、中尊寺金色堂（1124）などに類似する。

二重の組物は二手先組物で、軒小天井と蛇腹支輪を張るが、尾垂木はない。肘木に笹繰はなく、組物には絵様繰形を持つ実肘木を重ねる。軒支輪と軒小天井の組子は、一辺に13本入れる。組子間の内法寸法は組子幅1本分で、巻斗幅は組子幅3本分である。中備は間斗束である。

軒と屋根 初重の軒は一軒平行角繁垂木で、一辺の心々は18枝である。また、配付垂木を含めて一辺に28本の地垂木を入れ、建物の中央で手挟む。この地垂木に反りと増しはなさそうが、扱きがつく。地垂木と地隅木は木製である。地垂木と地隅木より上の茅負、裏甲、化粧裏板などは、鉄筋コンクリート

造とする。

二重の軒は二軒扇角垂木で、地垂木の延長線上に飛檐垂木を置く。それぞれ、一辺に21本の垂木を入れ、建物の中央で垂木心と揃える。これらの垂木に反りと増しはなさそうが、扱きがつく。

初重が手先の出ない組物で一軒であるのに対し、二重では二手先組物で二軒とするため、茅負は二重の方が外に出る。屋根は、初重・二重ともに銅板葺である。初重の屋根勾配は緩く、隅での反りが強い。

柱間装置 初重の柱間装置は、各辺の中央に二重扉を設ける。外側は外開きの棧唐戸で、盲連子窓が付く。この扉口は、上方と左右には弊軸を、下方には最下段の校木の上に闕を回し、方立と蹴放を入れる。棧唐戸は、上方の弊軸と下方の闕に受座を直接彫り、扉軸を吊る。内側は、内開きの鉄製扉で、肘壺で吊る。これらの扉口のうち、正背2面以外は内部が壁で閉塞され、扉口としての機能はない。

二重の柱間装置は、外観上は各辺の中央に外開きの鉄製扉を設ける。二重の扉口でも、正背2面以外は内部が壁で閉塞され、扉口としての機能はないようだ。この鉄製扉は、上方は頭貫で直接押さえ、左右は辺付を立てるように造り出す。

外部の造作 初重・二重ともに縁と縁高欄を設ける。初重の縁は円形平面で、扇形状の木製の縁板を放射状に並べ切目縁状にする。初重の縁高欄は木製の擬宝珠高欄で、縁の形状に沿った円形平面である。

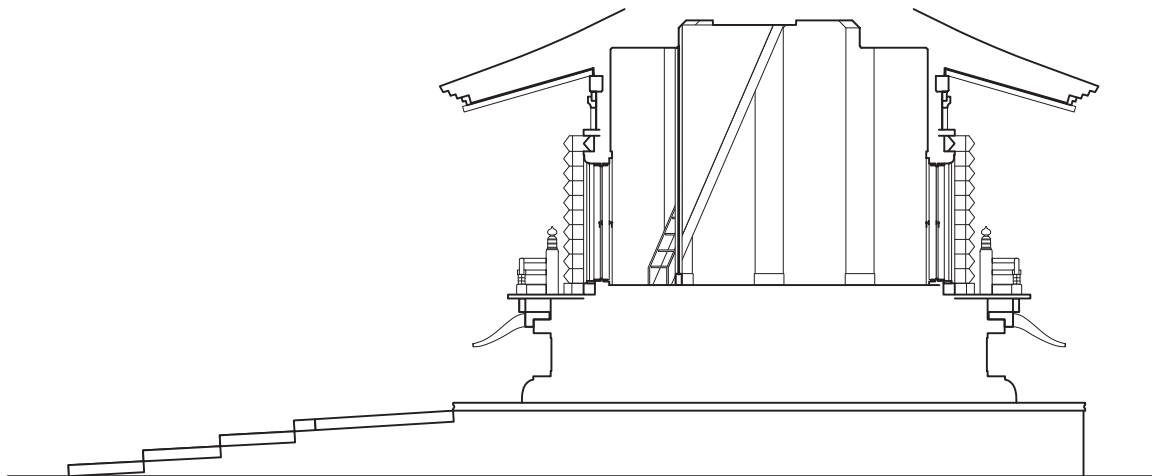


図 464 壇上加藍六角経蔵初層断面図 1:100

縁高欄は、6本の擬宝珠親柱を放射状に立て、扉口と対応する6か所で開放する。水平材は水繰り付きの地覆、平桁、架木からなり、架木は開放部分で逆の蕨手型とする。垂直材は通榑、込榑束、斗束からなる。この縁の下には、6本の象鼻状の把手をつけて回転可能な造りとする。ただし、現在は把手のついた部分のみが回転する構造である。

二重の縁は12角平面で、初重の屋根の上から繰形を施した腕木14本を放射状に水平に差し出して、縁葛で繋ぎ、これらの上に縁板を張る。これらは、すべてRC造で造り出す。この上のにる縁高欄は木製の擬宝珠高欄で、縁と同様に12角平面である。縁高欄は、12本の擬宝珠親柱を放射状に立て、扉口の前で開放しない。水平材は水繰り付きの地覆、平桁、架木からなり、いずれも直線形状である。垂直材は通榑、込榑束、斗束からなる。

内部の造作 初重・二重ともに、床はモザイクタイルの布敷とする。モザイクタイルは一辺18mmで、目地幅は3mmである。初重・二重ともに、天井は鉄筋コンクリート造スラブの化粧鏡天井である。初重



図 465 壇上加藍六角経蔵上層

内部の円柱で囲まれた六角平面の上部は、側まわりより一段高くスラブを張って内陣とする。初重には、八角平面で黒漆塗りの台座の上に蓮華座を据え、本尊釈迦如来座像1軀を安置する。背面となる西側の円柱間には、木製の階段と来迎壁とを造り付ける。

相輪・金具・彩色 相輪は層塔の形式で、下から露盤、覆鉢、花卉系請花、九輪、水煙、龍舎、宝珠からなる通例のものである。露盤と露盤蓋板は六角平面で、露盤蓋板は薬師寺東塔のように大きく特徴がある。九輪や水煙に風鐸はなく、過去に垂下した痕跡もなさそうだ。宝珠には、蓮華座と思われる残欠が遺存する。現状で龍舎に蓮華座はないが、かつては宝珠と同様に付いていたのではなかろうか。水煙の意匠は、法隆寺五重塔や当麻寺西塔に類似したもので、古式を表す。相輪高（露盤下端～宝珠天端）は、約20mの全高（基壇上面～宝珠天端）の3分の1ほどを占める。

二重の飛檐隅木先には、風鐸を垂下する。初重の大斗下の台輪状の部材には、乳金具を打つ。その他の金具類としては、初重の棧唐戸まわり、輪蔵風と



図 466 壇上加藍六角経蔵下層軒まわり



図 467 壇上加藍六角経蔵2階見上げ

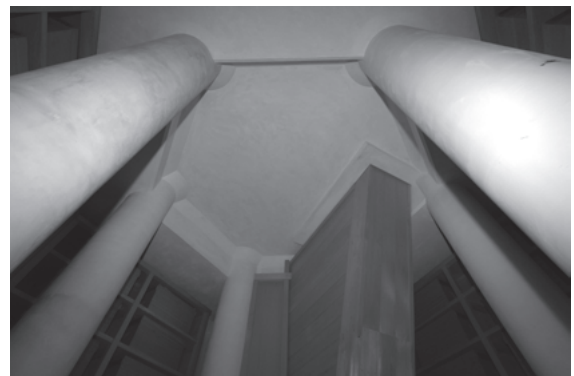


図 468 壇上加藍六角経蔵1階天井見上げ

する把手まわり、初重・二重の縁高欄の擬宝珠の金具などがある。

初重の外部は、組物間の小壁、軒まわりでは地隅木と地垂木の木口、茅負、裏甲、化粧裏板を白色塗装とする。木部は原則として素木とする。二重の外部は、軸部、組物、軒などをすべて白色塗装とする。二重の外部は、そのほか壁、辺付、縁まわりの腕木・縁葛・縁板を白色塗装とする。木製の縁高欄は素木とする。建物の内部は、初重・二重ともに、壁、円柱、天井を白色塗装とする。

基礎の東面の羽目石には、「大阪市南区 願主 坂口祐三郎 同きみ」と陰刻する。

まとめ 六角経蔵は、定期的なメンテナンスにより、木部などは良好に保たれている。彩色なども塗り直され、あざやかさを保っている。この建物の主体構造は鉄筋コンクリート造であり、これは同時期の金堂や根本大塔などと同様に、防火性に配慮したものである。ただし、初重の側まわりには木製の校木を巡らして、校倉風の外観とする。これは、前身建物の形式に倣うと共に、経蔵という用途を意識した表現であろう。近代の材料を用いて防災性に配慮しつつ、構造とは無関係の校木などを装飾として用い伝統を表現する点は、金堂や根本大塔とともに評価に値する、先駆的な試みであろう。

この建物の固有の特徴としては、六角二重という特異な構造形式とする点で、他になく希少な建物である。前身建物と同様に二重で大きな通減をとり、さらに二重の茅負が初重より外に出るため、深い軒と細い塔身とが対比をなす点でも特徴的である。初重の組物と軒を二重より簡素にして、二重の茅負を



図 469 壇上加藍六角経蔵相輪

初重より外に出す形式は、一般的な塔婆とは異なり、単層裳階付きの仏堂の形式に類似する。これは、他の伝統木造建築にはみられない特異な形態で、鉄筋コンクリート造によって実現し得た近代的な形態であろう。構造計画に際して深い思慮があったことはもちろんだが、意匠面においても、相輪に古式な意匠を用いる点など、設計者の歴史認識の深さが垣間見える。把手をつけ回転可能とする点も、輪蔵に着想を得て取り入れられたものだろう。六角経蔵は、上述の特徴にみられるように、伝統と近代性が包含された、良質な近代の建築であると言えよう。

(目黒新悟)

参考文献

結城啓司「金剛峯寺六角経蔵」(『和歌山県の近代和風建築』和歌山県教育委員会、2010年、136頁)。

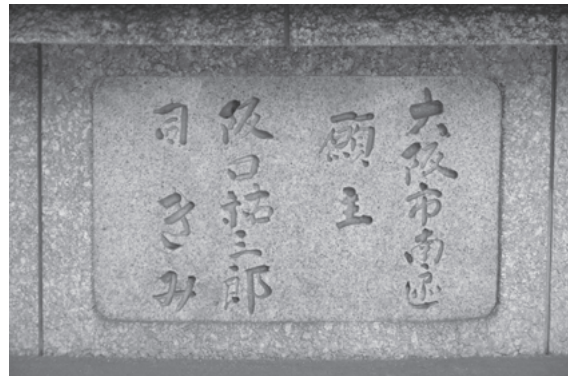


図 470 壇上加藍六角経蔵基壇銘

(11) 三昧堂 (PL.29・30)

構造形式 桁行3間、梁間3間、宝形造、檜皮葺

建立年代 嘉永元年(1848)(棟札)

沿革・配置 三昧堂は壇上加藍の東側に位置し、大会堂と東塔に挟まれて南面して建つ。高野山第6代座主・濟高が延長7年(929)に総持院境内に建立した堂であると伝わり、仁安年間(1166～1169)に壇上加藍の真然堂跡に移され、その後、数度の焼失と再建を繰り返した。この建物で西行法師が修行したとも伝え、この堂の前の桜を西行桜と呼ぶ。

現在の建物は、天保14年(1843)の焼失後に建てられたもので、金剛峯寺経蔵所蔵の棟札から嘉永元年(1848)の建立とわかる。もとは、正智院の経蔵として、当時の正智院住職の先代となる秀傳が建立したもので、これを移したという。

構造形式・平面 建物は方3間、宝形造、檜皮葺で、屋根上に露盤宝珠を置いた小規模な三間堂である。建物内部は拭板敷とした一室空間で、角柱を4本立てて仏壇を設け、本尊の金剛界大日如来座像を祀る。四周には縁をめぐらせ、正面には3級の木階を設ける。

正側面ともに、総間は13.2尺(4,000mm)で32枝に割り付ける。一枝寸法は125mm程度を測り、4.125寸と思われる。正面では中央間を14枝(5.775尺)、脇間を9枝(3.7125尺)に割り付け、側面では中央間を12枝(4.95尺)、脇間を10枝(4.125尺)に割り付ける。六枝掛が成立しており、一手の間隔は2枝分で、丸桁間は36枝(14.85尺)である。柱間寸法は枝割によって計画されたものと思われる。

側まわり 基壇は縁の外側を自然石による見切り石で一段高く造り、縁の自然石礎石の内側に乱石積亀腹を築いてその上に自然石礎石を据える。側柱は幅175mm(面内140mm)の面取角柱で、切目長押、内法長押、木鼻付頭貫、木鼻付台輪で固める。正面両脇間と両側面中央間には、腰貫を入れる。主要な軸部は、ほとんどが当初材を保っている。風食差などから、腰貫と切目長押は後補材とみられる。側柱の面取は大きく、古めかしさを残す。

組物は出組で、実肘木と蛇腹の軒支輪を入れる。軒支輪は、支輪板から支輪子を一木で造り出す。秤

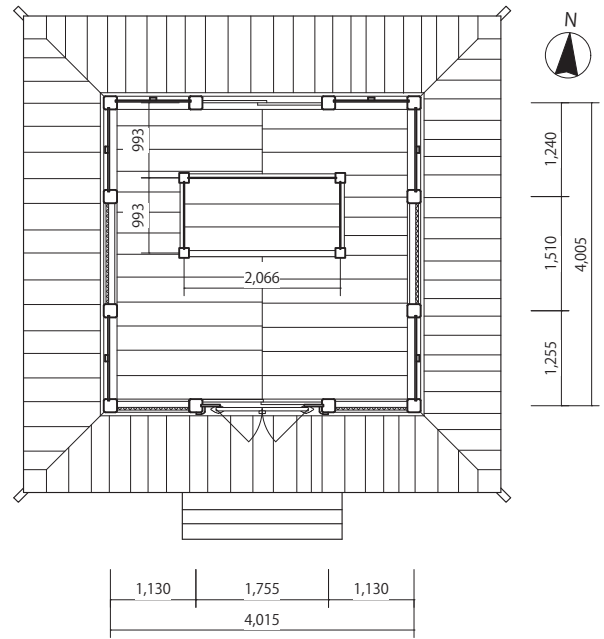


図 471 壇上加藍三昧堂平面図 1:100

肘木や枳肘木に笹線はない。肘木には、大きな面取があるものとなないものが併用されている。壁付通肘木と手先の秤肘木との間に二の肘木を入れてこれらを繋ぐが、木鼻を出さない。中備はない。

軒は二軒平行角繁垂木で、論治垂木に納める。垂木は、各柱筋と丸桁とを手挟むように割り付ける。飛檐隅木の鼻は増しをつける。木負、飛檐垂木、茅負、布裏甲はいずれも木肌が新しく、後補材である。ただし、飛檐隅木は他と風食差を同じくするから、垂木配置などは踏襲したものと思われる。

柱間装置は、正面中央間が外開き棧唐戸で、これは弊軸、闕、方立を備え、弊軸と闕に軸摺を彫って吊る。正面両脇間は腰貫の上部を連子窓とし、下部を横板壁とする。三角形断面の連子窓は、上部では楣を入れて押さえるが、下部では腰貫に直接孔を彫って押さえる。両側面の中央間も、これと同様に腰貫の上部を連子窓とし、両脇間は横板壁とする。背面の中央間は引違板戸とし、両脇間は横板壁とする。棧唐戸と連子窓には、内障子を入れる。内障子は、棧唐戸と側面の連子窓で引違戸とし、正面両脇間の連子窓で嵌め殺しとする。引違板戸と内障子は、いずれも後補である。横板壁は、外側に間柱や束を1本立て、上下に枳を置いて横板を押さえる。ただし、腰貫の下には枳を入れず、横板を腰貫に直接納める。また、両側面中央間の連子窓の下は、柱間寸法が広いから、間柱状の束を2本立てる。横板壁を構成す

る横板、間柱、杵はいずれも後補材で、横板は間柱に洋釘で留める。内法長押と頭貫との間には、板の小壁が入る。

縁は四方切目縁で、自然石礎石に角断面の縁束を立て、縁葛で繋いで縁板を張る。縁束も側柱と同様に大きな面取をとる。縁高欄はない。縁束、縁葛、縁板は後補材で、縁束はさらに根継ぎされる。

内部 先述のように、拭板敷の一室空間とする。板床は和釘で留める。天井は格天井で、東西を9格間、南北を8格間に割る。天井は、格縁を台輪のせて一面に張るため、内部に組物は現れない。天井裏では、一の肘木と二の肘木を内側に引き込み、その間に巻斗を挟む。

仏壇 内部には、板床の上に幅130mmの面取のない角柱を4本立て、その中に板を張って仏壇を設ける。これらの角柱は、床上から天井の格縁の直下まで立ち上げ(2.5m)、建物の構造には関係しない。そのため、仏壇の角柱は側まわりの柱筋に揃わず、仏壇は背面側にやや後退する。仏壇の角柱は四周を頭貫で繋ぎ、正面にのみ絵様のついた虹梁と框を渡す。背側3面は和釘で豎板壁を張って閉塞し、正面は虹梁と框との間を開放する。正面の頭貫と虹梁と

の間は板で小壁を張り、框の下を地袋として引違板戸で塞ぐ。仏壇の背面は、頭貫と天井裏板との間に面戸板を入れる。この仏壇は、板床の上に柱を立てる変則的な形式で、天井との納まりも姑息的であり、中古と思われる。ただし、角柱には柄孔痕や埋木があり、これ以前も類似の仏壇があったものと想像される。角柱と側柱の内側面は、状態としては同程度で、どちらも風食が少ない。仏壇背面裏の天井格縁には2か所に埋木があり、これは旧仏壇の背面の角柱2本と対応すると思われる。

彩色・金具 外部の彩色はほとんどが剥がれ落ちてしまっているが、組物の一部に赤色塗装が残る。内部では、側まわりは側柱、内法長押、頭貫、台輪に、仏壇まわりは角柱、頭貫に赤色塗装が施される。天井の格縁は、黒色塗装が施される。

屋根は檜皮葺の宝形造で、露盤宝珠を頂く。露盤は中央に束を立て各面を2格間に分けるが、格狭間はない。飛檐隅木には木口金具をつけ、風鐸を垂下させる。飛檐隅木には、旧風鐸取り付け痕跡が残り、風鐸は吊り直したものである。その他の金具類としては、棧唐戸まわりの金具や、切目長押・内法長押の長押金具がある。

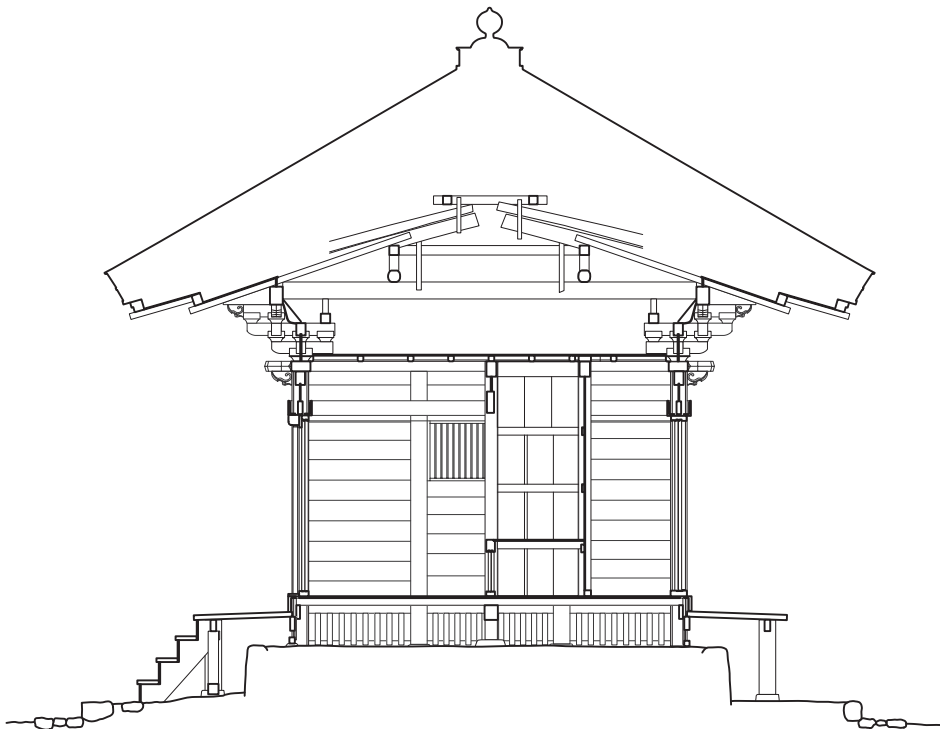


図 472 壇上加藍三昧堂断面図 1:80

指 図 金剛峯寺には、裏書に「三昧堂十分一之絵図」とある建地割図が所蔵されている(PL. 60)。文化10年(1813)に調べられたと記されており、天保14年(1843)の火災で焼失した前身堂を描いたものとみられる。『紀伊続風土記』によれば、文化6年(1809)の火災後、同13年(1830)に落慶供養がなされている。

描かれた建物と現在の建物を比較すると、方3間、宝形造で宝珠を頂き、正面中央間を扉、両脇間を連子窓とする構成を踏襲しながらも、台輪の追加、組物を平三斗あるいは出三斗を出組にするなどの違いも大きい。正智院経蔵を移築したという造営の経緯とあわせて、壇上加藍の建物における旧規の継承のあり方を考える上で興味深い。

まとめ 三昧堂は、小規模でありながら、出組に軒支輪を備えた本格的な造りをもつ三間堂と評することができるだろう。この建物は、棟札から嘉永元年(1848)の建立であることが伝わり、愛染堂や大会堂と同時期である。仏壇の虹梁絵様や、軒支輪の支輪子を一木造り出しとする技法は時代相応である。

愛染堂や大会堂などが軒支輪を彫刻板支輪とするのに比べて略式である。また、実肘木と頭貫木鼻の絵様は円弧状で渦の巻込が浅く、19世紀中期にしては古式と思われ、同時期に建立された愛染堂や大会堂などとも異なる。側柱の面取が大きい点も、古式である。肘木には、大きな面取りのあるものとないものが併用されている。これらは、冒頭で触れた正智院経蔵を移築したとする棟札の記述を裏付けるものであり、壇上加藍の幕末の再興の在り方を知る上でも、貴重な建物である。(目黒新悟)



図 473 壇上加藍三昧堂軒まわり



図 474 壇上加藍三昧堂隅木



図 475 壇上加藍三昧堂仏壇虹梁形内法貫



図 476 壇上加藍三昧堂小屋組



図 477 壇上加藍三昧堂宝珠・露盤

(12) 大会堂 (PL.31・32)

構造形式 桁行5間、梁間5間、宝形造、檜皮葺、向拝1間

建立年代 嘉永元年(1848)(棟札)

概要 大会堂は、壇上加藍の東部、不動堂の北東方に位置し、東の三昧堂、西の愛染堂とともに南面して建つ、桁行5間、梁間5間、入母屋造、檜皮葺の仏堂である。正面中央間に向拝を設け、四面に切目縁をめぐる。大会堂は、正式には蓮華乗院と称する。『高野山名所図会』によれば、安元元年(1175)、鳥羽法皇御追善のため、皇女五辻齋院の発願により東別所上乘院内に建てられた後、治承元年(1177)、西行法師により壇上に移された。その後、大永、寛永、文化、天保の火災で焼失し、棟札から現在の建物は、嘉永元年(1848)に、再建されたことがわかる。棟札から、願主は徳川家慶で、再建願主は阿州・大瀧寺一世如戒、再建係は学侶方・一乗院と五坊寂静院と行人方・福智院・真乗院、供養導師が368世座主来應で、正大工を三棟梁が、脇棟梁を祝上元右衛門が務めたことが明らかになる。

平面計画 柱間は、中央間から、3,333mm、3,302mm、2,678mmとなり、それぞれ垂木割は、20枝、18枝、16枝を数え、1枝は約167mmとする。向拝は、中央間より4枝広くとる。

側まわり 建物は、乱石積の基壇上に、大振りの割石を並べ上面を漆喰仕上げとし、礎石を据え、周囲には縁束礎石を据える。軸部は、礎石上に粽付の円柱を立て、地長押、切目長押、半長押、腰長押、頭貫、台輪で固める。半長押を各面の端間に、腰長押を正面及び側面の端間に打つ。長押には釘隠の六葉金具を打つ。頭貫と台輪は禅宗様木鼻を備える。



図 478 壇上加藍大会堂正側面側まわり

組物は、拳鼻付の出組とし、手先のみ実肘木を入れ、波板の支輪板を挿入する。隅の組物はさらに一手延ばし軒桁を支持する。なお、隅行方向の肘木は一手目のみ挿入し、二手目は拳鼻のみを付加する。中備は、各柱間に唐獅子や植物などの彫刻を嵌めた墓股を備える。

軒まわり・屋根 軒は二軒繁垂木で、隅木は飛檐隅木の鼻先に拳鼻状の繰形を造り出す。妻飾は墓股及び三斗組状に虹梁を打ち、虹梁上の中央に鶴の丸彫を備えた墓股と、その左右に大瓶束を置いてさらに大瓶束を乗せた虹梁を受け、棟木を受ける。

向拝 向拝は切石礎石上に礎盤石の乗せ、向拝柱は上下端粽付きの几帳面取角柱とし、虹梁型頭貫繋ぎ、獏の丸彫りの木鼻を備える。組物は送斗付連三斗で、皿斗は用いず、実肘木を入れ、中備の龍の彫刻と共に向拝桁を支持し、雲文を施した手挟みを入れる。軒は身舎の飛檐垂木を打ち越し、さらに飛檐垂木を入れ二軒とする。

柱間装置 身舎の柱間装置は、正面及び両側面は同じ構えとする。すなわち、中央間三間に幣軸を回し、中央間は双折棧唐戸、その脇間は両開きの棧唐戸を吊る。棧唐戸の内側は、中央三間ともに引き違いの腰高障子を入れる。端間は腰長押を打ち、幣軸を入れ連子窓を嵌める。腰長押の下は間柱を立て、横板を落とし込み板壁とする。背面は、中央三間を引き違いの板戸とし、端間は間柱を立てて、横板壁とする。縁は、切目縁で高欄は備えない。階段は正面中央間と西側面正面側に設けるが、後者は後補である。

内部 内部は、中央後方寄りに内陣及び仏壇を



図 479 壇上加藍大会堂組物

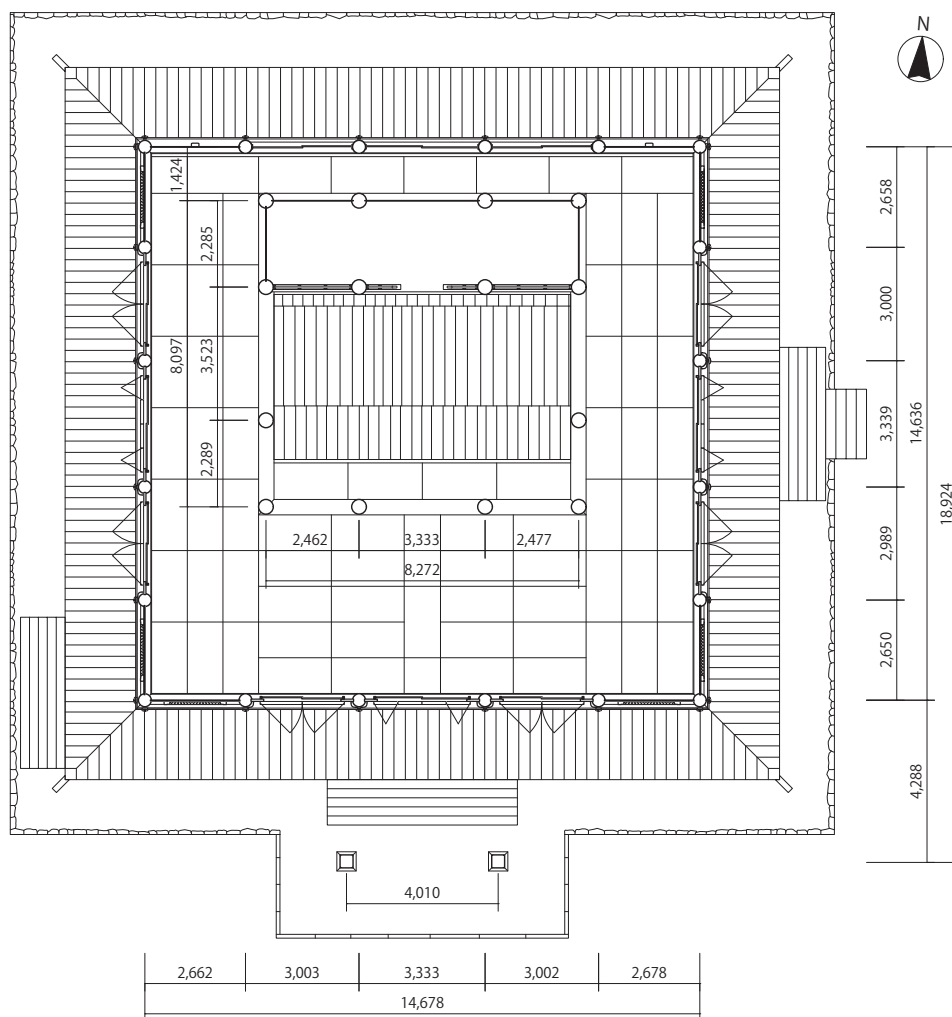


図 480 壇上加藍大会堂平面図 1:200

設け、それ以外は畳敷きとする。畳割は桁行7間半、梁間7間半に割り付けられる。内陣は桁行3間、梁間2間で、桁行の中央1間は身舎の柱筋と柱間を揃えるが、脇間は身舎よりも柱間寸法を狭くする。一方梁間方向は身舎柱筋、柱間寸法、畳割とも寸法を揃えていないが、これは格天井の割り付けに合わせて計画されたためと考えられる。

内陣柱はすべて丸柱で、木鼻型の持ち送りを備えた虹梁型飛貫と頭貫を廻し、半長押付きの天井長押を打つ。天井は格天井とする。内外陣境は無目敷居とし、内陣の床は外陣側のみ畳を敷く以外は拭板敷として、内陣中央に壇を構える。内陣の後方1間は仏壇で、中央間に本尊、その左右に脇侍を安置する。仏壇の柱間には持ち送りを礎慣れた虹梁を入れ荘厳とする。内陣柱、仏壇まわりは漆塗り及び金泥で塗装されており、仏壇高欄には飾り金具を多用する。

指 図 金剛峯寺には、嘉永元年(1848)の年紀を

もつ「会堂十分一絵図」(PL. 60)と題された建地割図が所蔵されている。裏書には、学侶方大奉行・定光院、行人方大奉行・上蔵院と、学侶方再建掛の一乗院・五坊寂静院、行人方再建掛の福智院・真乗院が名を連ねている。棟札の記述とも一致する。正立面図と向拝の側面図などを組み合わせたもので、軸部・柱間装置・組物・妻飾など、現存する建物と一致しており、再建に際して作成されたものとみられる。本図のほかにも「会堂十分一図地差図」と題した平面図も伝わる。

まとめ 大会堂は、側まわりの柱間装置などの構えは、愛染堂などの三間堂を共通する部分が多いが、内部は内陣部分と柱筋を変え柱高も高くし、虹梁や塗装等で荘厳化し、内外陣の意匠を明確に区分する。全体的にも、愛染堂よりも彫刻が豊富で、装飾性が高い建築である。壇上加藍の中でも重要な堂宇としてふさわしい意匠の建築である。(大林 潤)



正面西から 1



正面西から 2



正面西から 3



正面西から 4



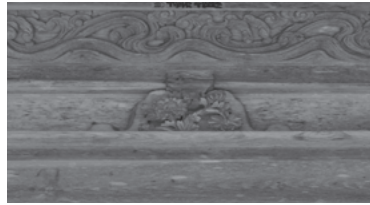
正面西から 5



東側面南から 1



東側面南から 2



東側面南から 3



東側面南から 4



東側面南から 5



背面東から 1



背面東から 2



背面東から 3



背面東から 4



背面東から 5



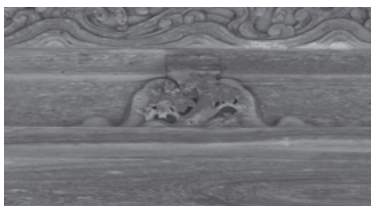
西側面北から 1



西側面北から 2



西側面北から 3



西側面北から 4



西側面北から 5

図 481 壇上加藍大会堂中備墓股

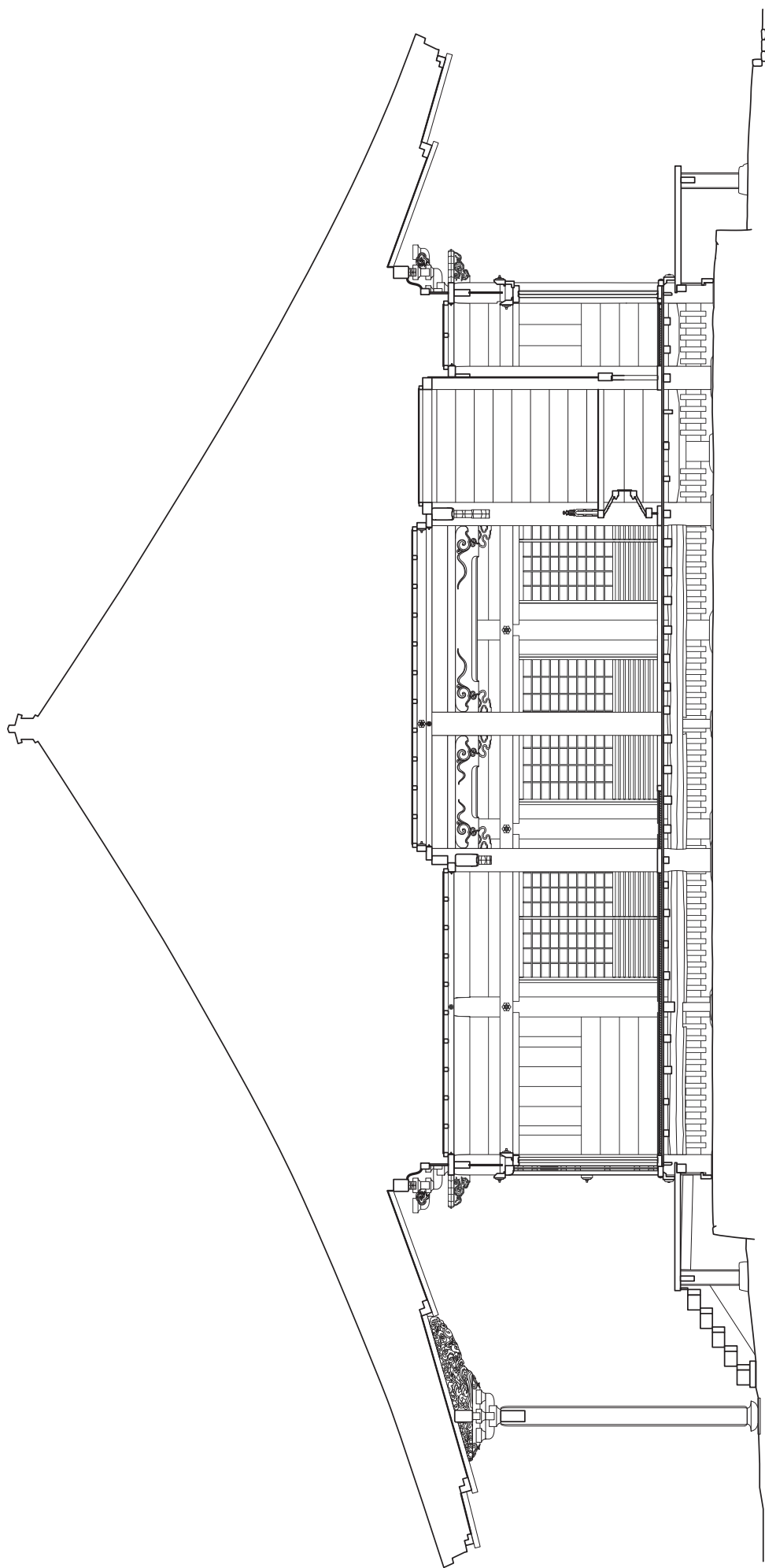


图 482 坛上伽蓝大会堂断面图 1:100



図 483 壇上加藍大会堂隅木



図 484 壇上加藍大会堂妻飾



図 485 壇上加藍大会堂向拝軒下見上げ



図 486 壇上加藍大会堂向拝手挟み



図 487 壇上加藍大会堂内陣



図 488 壇上加藍大会堂後陣



図 489 壇上加藍大会堂須弥壇



図 490 壇上加藍大会堂入側柱虹梁形頭貫絵様

(13) 愛染堂 (PL.32・33)

構造形式 桁行3間、梁間3間、入母屋造、檜皮葺、向拝1間

建立年代 嘉永元年(1848)(棟札)

概要 愛染堂は、壇上加藍東部、大会堂の西に南面して建つ。桁行3間、梁間3間、入母屋造、檜皮葺の建物で、正面中央間に向拝1間を設け、四周に切目縁をまわす。建武元年(1334)、後醍醐天皇の綸命により建立され、愛染明王を祀る。創建以来、永正18年(1521)、寛永7年(1630)、文化6年(1809)、天保14年(1843)の4度、焼失しており、現在の建物は、棟札から嘉永元年(1848)に再建されたことがわかる。棟札から、願主は徳川家慶で、再建願主は西院谷・地藏院妙範と播州船越山・瑠璃寺有智恵運房、再建係は学侶方・中蔵院蓮阿と行人方・正塔院了範、供養導師が368世座主来應とわかる。

平面計画 愛染堂は、准胝堂とほぼ同じ平面構成・構造形式をもつ。桁行・梁間は、ほぼ同規模で、中

央間は2,840mm前後、脇間を2,265mm前後とし、中央間を21枝、脇間を17枝で割り付け、1枝は約134mmとなる。向拝は正面中央間と柱筋を揃える。

側まわり 建物は、低い乱石積み基壇上に建ち、さらに縁に納まる乱石積の基壇を築き、上面を漆喰塗として、礎石を据える。柱は上端粽付きの円柱で、下から、切目長押、腰長押、内法長押を打ち、六曜金具の釘隠を打つ。柱上端は頭貫で固め台輪を載せ、禅宗様の木鼻を設ける。組物は出組で、中備は内部に彫刻を施した墓股を置く。柱筋の組物と墓股は実肘木を設けず、一手目に実肘木を入れ桁を受ける。隅部は柱上は隅方向にも肘木を入れる。通し肘木上には波文を施した支輪板を入れる。

縁は、東石上に縁束を立て、縁葛を載せ、切目縁の縁板を受ける。高欄は設けていない。

向拝 向拝は、方形の礎石上に礎盤石を乗せ、向拝柱は上端に粽を付けた几帳面取角柱で、虹梁形頭

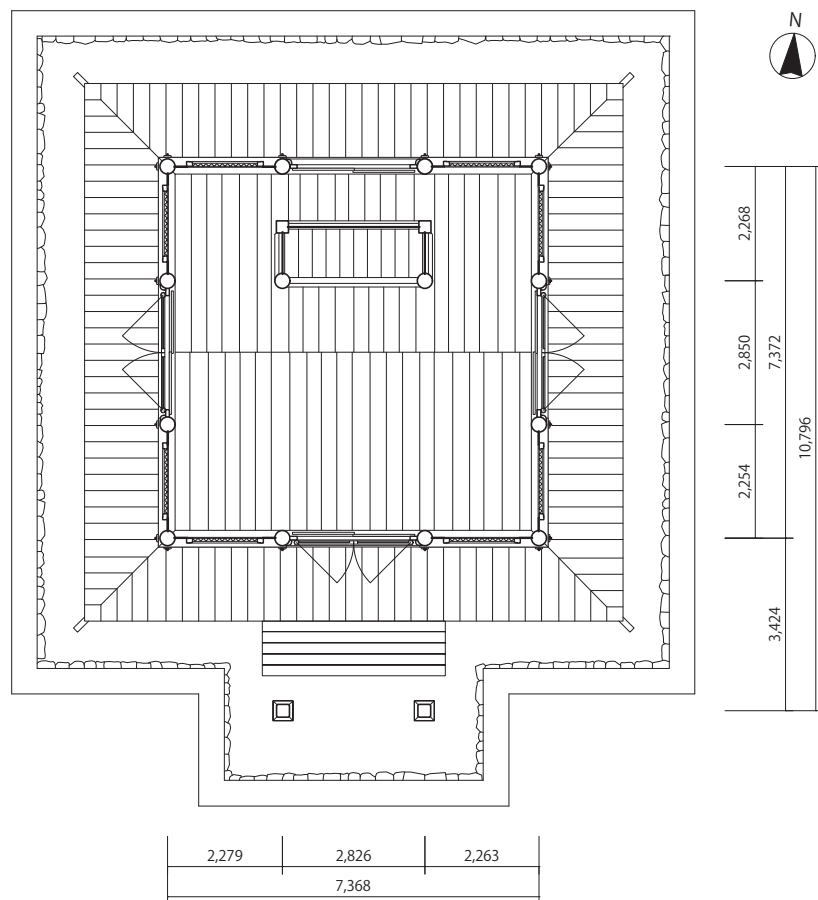


図 491 壇上加藍愛染堂平面図 1:150



図 492 壇上加藍愛染堂正側面側まわり

貫で繋ぐ。組物は三斗組で連三斗とし、頭貫中央には飛竜型に彫刻された墓股を乗せ、向拝桁を受ける。軒は、身舎の飛檐垂木を打ち越し、波文を施した手挟みを設ける。

軒まわり・小屋組・屋根 軒は二軒繁垂木で、隅木は飛檐隅木の鼻先を大きく造り出す。

小屋組は、梁間方向の柱筋に2条の大梁を架け、大梁間には桁行方向の梁を架け、さらにその梁の上に梁間方向の梁を架ける。これらの上に束を立て、背違い貫で固める。

屋根は入母屋造、檜皮葺で、妻飾は三斗組と墓股



図 493 壇上加藍愛染堂組物

で虹梁を受け、大瓶束を載せ棟木を受ける。懸魚は鱗付の三花懸魚とする。

柱間装置 正面及び側面では、中央間に幣軸を回し藁座を打ち、棧唐戸とする。棧唐戸の内側には引き違いの腰高障子を入れる。脇間は腰長押を打ち、幣軸を入れ連子窓とし、腰長押下は束を立て、横板壁とする。背面は、中央間を引き違い板戸とし、脇間は腰長押のみを打ち横板壁とする。

内部 内部は一室とし、中央間後方に柱を立て仏壇を設ける。床は拭板敷で、壁側に畳を敷き並べ、部屋の中央に護摩壇を設置する。天井は出組で天井

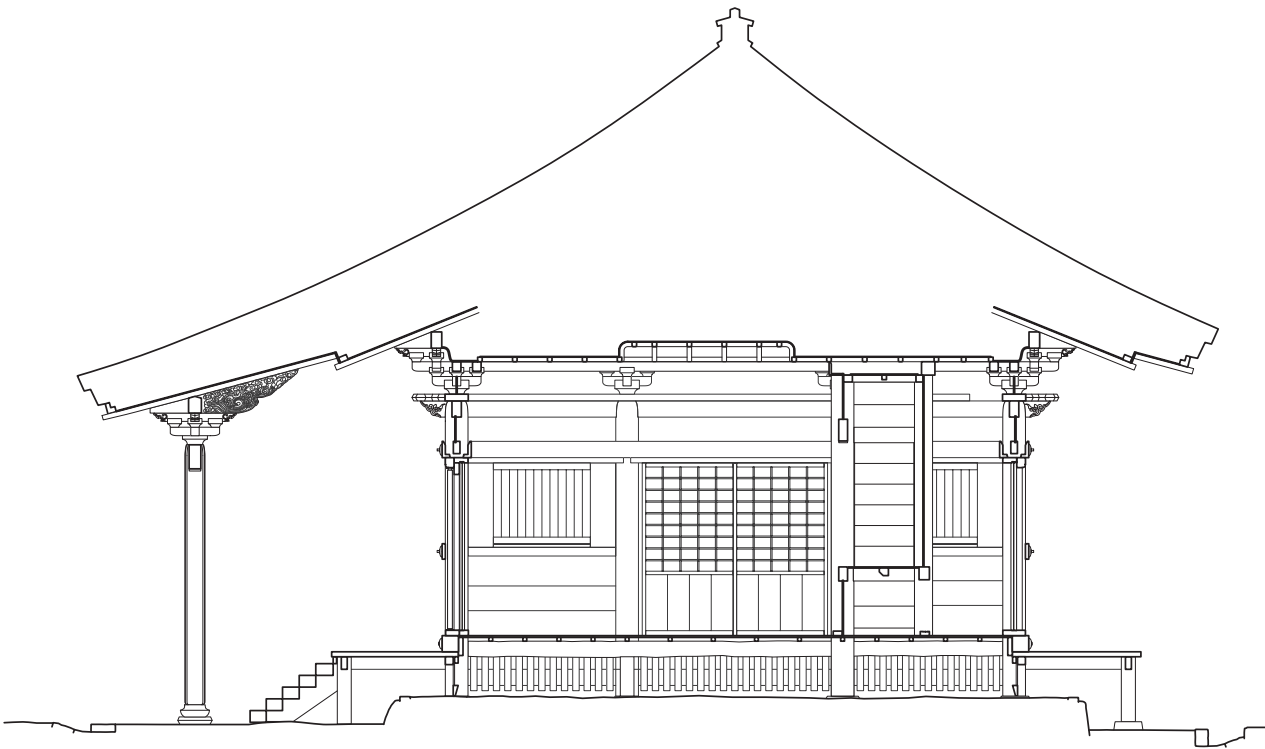


図 494 壇上加藍愛染堂断面図 1:100

桁を受け、格天井とする。仏壇は前面柱は身舎の柱筋に揃え丸柱を立て、後方は角柱を立てる。腰高の壇を作り内部に仏像を安置する。柱上部の前面側には虹梁形の貫を差し木鼻を設け、天井際には天井長押を回して荘厳とする。

まとめ 愛染堂は、伝統的な三間堂建築の形式を持つ建築である。壇上伽藍東部にある准胝堂と形式・規模ともに非常に似る。棟札により、嘉永元年(1848)の建立であることが明らかで、絵様などもこの頃の様相を示す。壇上伽藍における天保14年(1843)の火災からの復興を物語る貴重な建物の一つである。

方3間と規模は大きくないものの、中備や軒支輪などに彫刻が満ちた優品であり、良質な三間堂建築の事例としても評価できる。
(大林 潤)



正面西脇間



正面中央間



正面東脇間



東側面南脇間



東側面中央間



東側面北脇間



背面東脇間



背面中央間



背面西脇間



西側面北脇間



西側面中央間



西側面南脇間

図 495 壇上伽藍愛染堂中備墓股



図 496 壇上加藍愛染堂後陣



図 497 壇上加藍愛染堂内部組物



図 498 壇上加藍愛染堂仏壇虹梁形内法貫絵様



図 499 壇上加藍愛染堂小屋組



図 500 壇上加藍愛染堂妻飾



図 501 壇上加藍愛染堂向拝見上げ



図 502 壇上加藍愛染堂向拝手挟み



図 503 壇上加藍愛染堂小屋組棟札打ち付け状況

5 勸学院

(1) 概要

勸学院は、壇上加藍南部の東隣に位置する。『紀伊続風土記』によれば、弘安4年(1281)に北条時宗が、安達泰盛を奉行として創建し、学修勸学練行の道場としたという。当初は、金剛三昧院にあったようである。文保2年(1318)に後宇多法皇の院宣によって、金剛三昧院から独立し、現在地に移転したという。

その後、大永元年(1521)焼失、同年仮堂建立、寛永3年(1626)再建、寛永7年(1630)焼失、同8年(1631)再建、慶安3年(1650)焼失、同4年(1651)再建、と幾度も焼失・再建を繰り返し、文化6年(1809)焼失のち、文化10年(1813)に建てられたのが、現在の建物である。

配置 境内の南面中央に表門が開き、表門を潜った正面に本堂が南面して建つ。敷地の南東隅部には袴腰付の鐘楼が建つ。本堂の裏手には、明治期以降に立てられた土蔵や寮舎が建つ。

勸学会 毎年8～9月に、勸学会が執りおこなわれる。宝性院を中心とする宝門流と、無量寿院を中心とする寿門流の学衆が勸学院に集まり、講讃論議をおこなう。その後、金剛峯寺の奥書院において、同様の論議をおこない、再び、勸学院において本会に入り、論議がおこなわれるという。

『紀伊続風土記』によれば、先にみた寛永7年焼失の後には山王院拝殿が、慶安3年焼失後は大会堂が、仮の会場とされており、勸学院が壇上加藍と一体的な運用がなされていたことを物語る。



図 505 「御公儀上一山図」(正保3年=1646、『高野山古絵図集成』63頁)

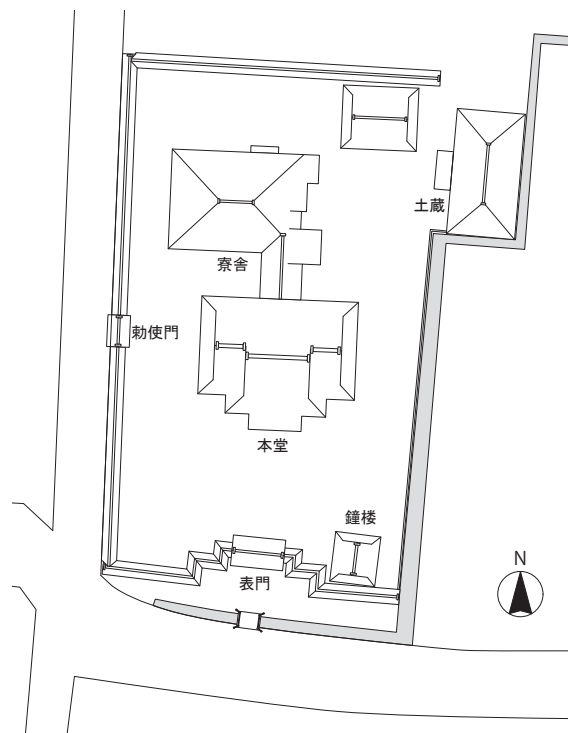


図 504 勸学院配置図 1:2000

絵図に描かれた勸学院 正保3年(1646)の「御公儀上一山図」には(図505)、勸学院の敷地中央に、向唐破風の向拝をもつ主体部の東西両脇に建物が付属する本堂とみられる建物を描く。寛永8年再建の本堂である。

寛政8年(1796)の「高野山絵図」では(図506)、敷地の中央部に現在の本堂同様、入母屋造、正面1間向拝付の主体部の東西両脇に入母屋造の建物が付属する本堂が建ち、その背面には屋根付の廊下を介して、寄棟造で縁をめぐる「庵」が建つ。敷地の正面には築地塀がめぐり切妻造の四脚門となる表門が開く。さらに表門の北東方には、南に妻面を向

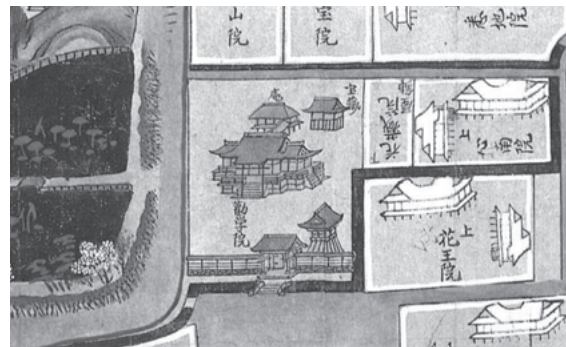


図 506 「高野山古図」(寛政8年=1796、『高野山古絵図集成』188頁)

けた入母屋造、袴腰付の鐘楼を描く。また庵の北東方には入母屋造の「宝蔵」が建つ。宝蔵の屋根形式と方位こそ異なるものの、他は現在の建物配置と一致する。

また金剛峯寺には、文化8年(1811)の年紀をもつ「勸学院本堂再建絵図」が所蔵されており、現本堂の再建に際して作成されたものとみられる。学侶方奉行・慈光院、行人方奉行・西門院、修理奉行・正親院・義辨が名を連ねる。現本堂との比較については、後述したい。

(2) 本堂 (PL.34・35)

構造形式 中央部：桁行3間、梁間4間、入母屋造、檜皮葺、
両翼部：桁行2間、梁間3間、入母屋造

建立年代 文化10年(1813)『高野山名所図会』

概要 勸学院本堂は勸学院の中央やや南寄りに、南面して建つ。桁行3間、梁間4間の入母屋造の堂を中央に配置し、その東西両側面に背面の柱筋を合わせて、桁行2間、梁間3間の入母屋造の建物を付しており、南に突出部をもつ凸形の平面となる。以下では中央の堂を中央部、東西側面の建物を翼部と呼称する。また、中央部、両翼部からなる主体部を主屋と呼ぶ。中央部正面には1間の向拝が付く。

後述する通り、向拝の虹梁絵様なども19世紀前期の様相を示し、『高野山名所図会』にある文化10年(1813)の再建による建物とみてよい。

平面計画 中央部の桁行柱間と、両翼部梁間柱間は約2,300mmで、16枝である。両翼部の桁行柱間は約2,010mmで、14枝となる。1枝=0.47尺(約144mm)で計画されている。中央部の突出部は柱間寸法1,907mm、13枝とする。



図 507 勸学院本堂中央部組物

側まわり 縁下に納まる乱石積基壇で、上面に礎石を据え、周囲を漆喰で塗り込め、礎石の上に粽付きの面取角柱を立てる。主屋の足元には地長押をまわし、縁との間を連子でふさぐ。縁上は切目長押、内法長押、木鼻付の頭貫で固め、柱上には繰形付の台輪を載せ、実肘木付の出三斗を受ける。この実肘木上では虹梁鼻を造り出す。中備は用いない。半長押は舞良戸が入る箇所と板壁の部分にのみ入れる。

柱間装置は中央部正面3間には半葺、中央部南端1間と背面中央間は両開き中折れの板戸を入れる。両翼部正側面には舞良戸を、両翼部背面と中央部背面脇間には横板壁を入れている。

軒は二軒繁垂木で反り増しはない。地隅木・飛檐隅木の両方に繰形を入れて飛檐隅木に風鐸を吊る。中央部の妻飾は両翼部の屋根と重複し、化粧とならない。両翼部の妻飾は実肘木付三斗の上に虹梁大瓶束を載せ、中備に実肘木付きの簀束を据え、破風に三花懸魚を吊る。

基壇の周囲には自然石の縁束礎石を据え、縁束を立てる。主屋の周囲には縁をめぐらし、擬宝珠高欄を取り付ける。中央部正面中央及び両翼部側面中央にそれぞれ5級の木階を、背面中央に2級の木階を設ける。

向拝 向拝は切石の礎石の上に石製礎盤を据え、上下に粽を付けた几帳面取角柱を立てる。柱上部で獅子鼻付の虹梁形頭貫で軸部を固め、柱上には皿斗・実肘木付きの連三斗を置き、桁を受ける。垂木を手挟みで受け、主屋との間には繫材はない。主屋の飛檐垂木を打越垂木のみの一軒とする。

虹梁形頭貫の絵様は、文政8年(1825)建立の金剛



図 508 勸学院本堂隅木鼻

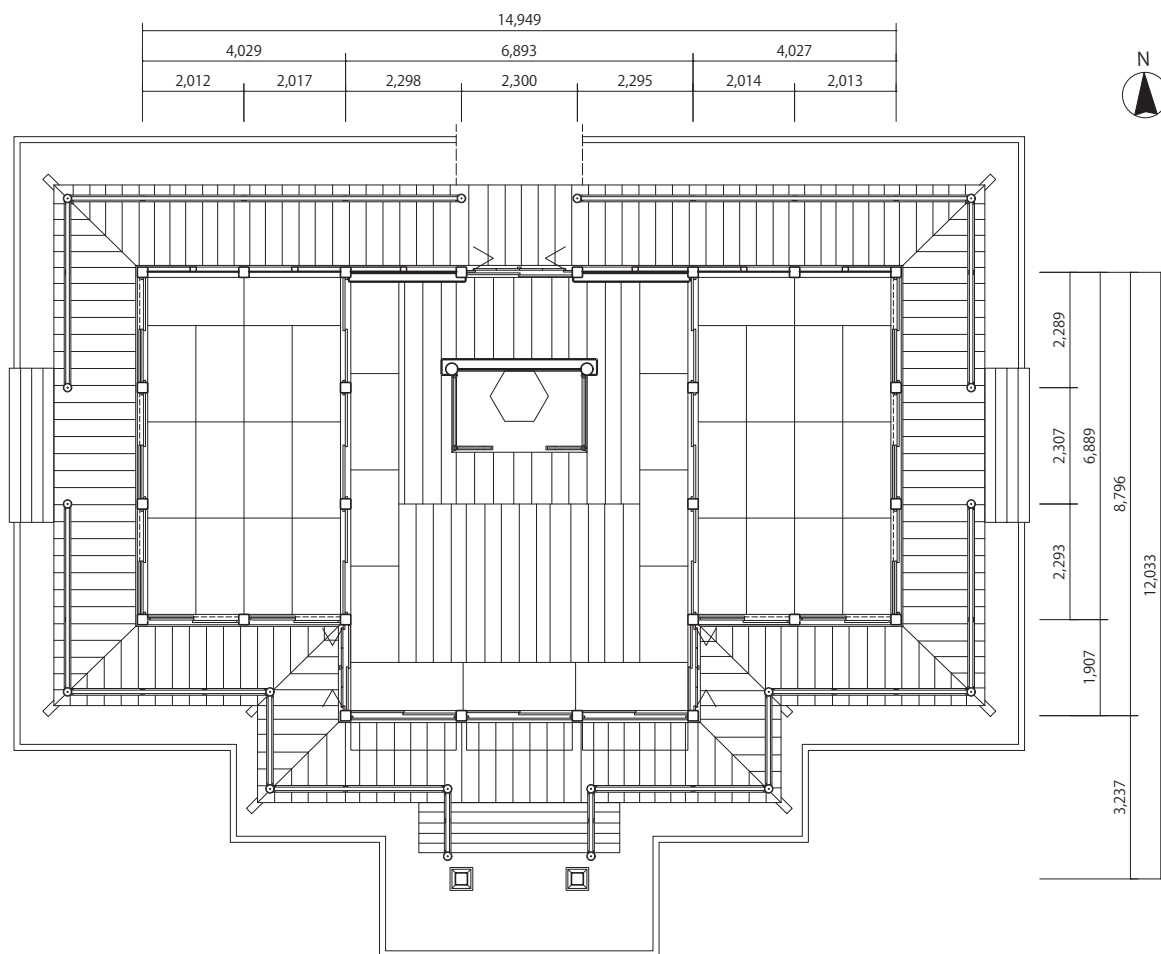


図 509 勸学院本堂平面図 1:150

三昧院表門の絵様と類似し、19世紀初期の様相とみられる。

平面及び内部 本堂が入母屋造の中央部に、さらに入母屋造の両翼部を追加した外形であることは先述した通りだが、その内部も中央部と両翼部で区分され、3室に大別できる。

中央部は拭板敷で東西南の三方に畳を追い廻しに敷く。中央やや後方には禅宗様須弥壇を置き、金剛界大日如来と向かって左に高野四所明神、向かって右に弘法大師空海の絵像を祀る。須弥壇後方には、側まわりと柱筋を違えて、粽付きの円柱を来迎柱として立て、地覆、腰長押、木鼻付きの虹梁形頭貫で固める。柱上には繰形付きの台輪を載せ、実肘木付きの平三斗を載せ、天井組子を桁のように受ける。この部分の柱間は縦板で閉塞し、来迎壁とする。また、内部の軸部は外部とやや異なっており、柱は台輪も組物も載せず、直接桁を受ける。なお内法長押はみな半長押を付けている。桁上には天井桁をまわ

し、二重折上格小組天井とする。背面両脇間には、幅広の腰長押を打ち、八祖棚とし、横板壁に真言八祖の絵像を祀る。なお、来迎柱にも幅広の腰長押を打ち、背面側には仏具を据えている。

両翼部は、畳を敷き詰めた14畳の一室で、天井は格天井とする。内部の軸部は中央部と同様であるが、天井が格天井である点が中央部と異なる。桁行方向中央の柱にて、内法長押の位置に長大な横材を南北方向に入れる。後補材とみられるが、現状ではその使用法は確定できない。なお、『高野山名所図会』によればこの両翼部は「聴聞所」ないし「勅使の間」と呼称し、かつて勅使が聴聞をおこなった場所であるという。平安・鎌倉時代における俗人の聴聞の場が、仏堂の側面にあることを原則とすることと共通する(山岸常人「聴聞の場」『中世寺院社会と仏堂』塙書房、1990年、170～212頁)。内部には鍍金した六葉の釘隠を内法長押・桁に打つ。

改修 建物は当初部材をよく残し、化粧となる

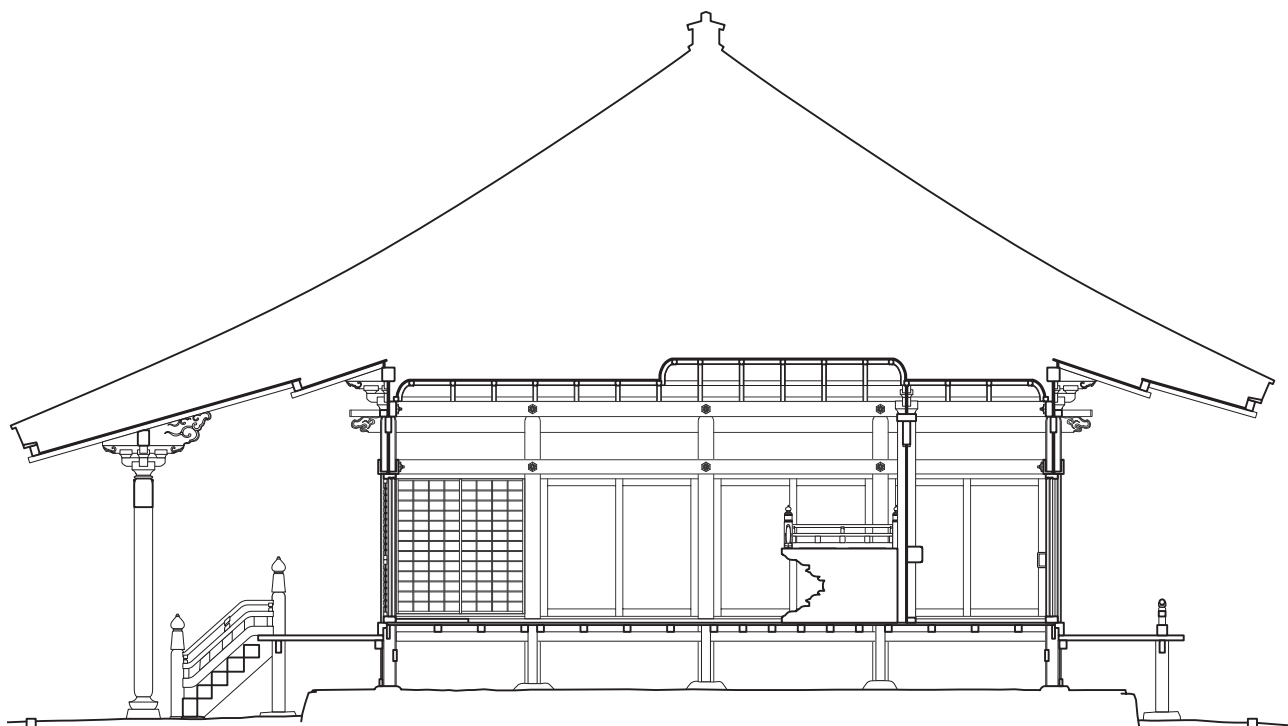


図 513 勸学院本堂断面図 1:100

部分で後補であることが明らかなのは側面・背面の木階程度である。背面は、昭和後期に付加されたであろう軒廊によって、背後の坊舎と連結している。現在の軒廊まわりは新しいが、背面の木階の周辺は高欄を切って親柱で納めており、当初から木階があったものとみてよいだろう。

指 図 文化8年(1811)の「勸学院本堂再建絵図」には、略平面図と西面の立面図を中心とした建地割図を描く。柱・縁束の配置、平面形式、階段の取り付き方、柱間装置など、基本的な構成は、現存する建物と一致する。一方で、現本堂の来迎柱は入側柱筋より背面寄りに立つのと異なり、正面に寄ること、側面中央間に臺股を据えること、頭貫拳鼻の形状が異なること、現本堂の妻飾虹梁下の束がないことなど、細部を中心に相違点がみられる。現本堂の造営に際した計画図とみてよいだろう。

まとめ 勸学院本堂は、勸学会の会場となる、真言教学上、歴史的にも重要な建物である。中央部に両翼部の付く、特徴的な外形・平面をもち、その形式は正保3年(1646)に描かれた寛永8年(1631)再建の建物に遡り、古代中世における俗人聴聞の場のあり方を引き継いだものともみられる。

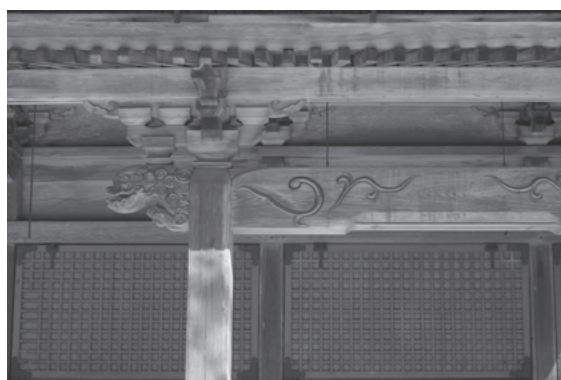


図 510 勸学院本堂向拝虹梁形頭貫



図 511 勸学院本堂向拝手挟み



図 512 勸学院本堂妻飾

(3) 鐘楼 (PL.36)

構造形式 上層：桁行3間、梁間2間、入母屋造 下層：桁行3間、梁間2間

建立年代 文化10年(1813)『高野山名所図会』

概要 勸学院鐘楼は勸学院の東南隅部にある、南北棟、入母屋造、檜皮葺の袴腰付鐘楼である。下層は桁行3間、梁間2間で、扉口を西面に設け、上層は桁行3間、梁間2間とする。下層上端にて腰組を組んで、その上に跳高欄付きの縁をめぐらす。

『紀伊続風土記』によると寛永5年(1628)にはすでに前身となる建物があつたようであるが、勸学院は、同7年(1630)、慶安3年(1650)、文化6年(1809)に火災に遭い、文化10年(1813)に再建されたとされる。勸学院鐘楼は風食の程度や絵様からこの時の再建とみられる。また、寛政7年(1797)の「高野山古図」に、現在の位置に南北棟の袴腰鐘楼が描かれ、現在の建物が前身建物の基本形式をよく受け継いでいるとみられる。

平面と計画 上層は、桁行中央間で1,263mm、両脇間と梁行柱間で1,020mm前後である。桁行中央間で10

枝、それ以外で8枝となる。1枝=0.42尺(約126mm)で計画され、中央間以外は2枝減じている。

一方、下層は、桁行・梁行ともにすべての柱間で概ね1,270mmとなる。上層の桁行中央間の寸法がこの値に近似するのは、下層の棟通り中央間の内部柱が通柱として上層まで立ち上がり、この柱と上層桁行中央間の側柱が、筋を揃えたためである。前述のように、上層の柱盤を一手分内側に引き込んで通減させたため、上層では、桁行両脇間・梁行柱間に2枝分の寸法を減じている。

側まわり 鐘楼は、平坦な地形の上に、乱石積の石垣をもうけて基壇とする。下層は、袴腰地覆石はめぐらさず、土台を基壇上に直接置き、縦板張りの袴腰を立ちあげる。袴腰上部には外部に突出するように台輪をめぐらす。台輪上部には、上層の縁を受ける三手先の腰組を置き、壁付の通肘木は3段とする。その最上部の通肘木と直交させて肘木をのぼし、これを三手目の巻斗の上で受け、その先端を拳鼻につくる。なお、腰組の中備は簀束で、その上部の通肘木上に斗を2段重ねて置く。

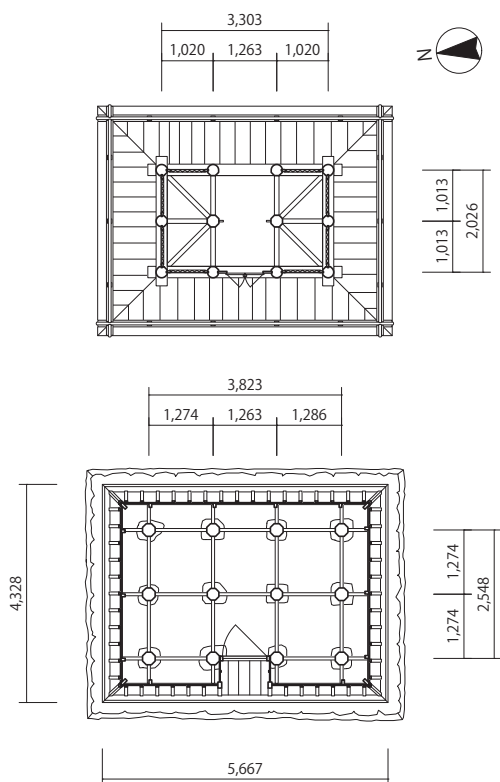


図 514 勸学院鐘楼平面図 1:150



図 515 勸学院鐘楼見上げ



図 516 勸学院鐘楼上層側まわり

上層は、縁の上に柱盤を井桁に組んで据えて、円柱を立てる。円柱は、木鼻付きの頭貫・内法長押・台輪で固める。その上には尾垂木付きの三手先組物を柱位置に置く。中備は下層同様、簀束で、やはり上に斗を2段重ねる。三手先組物は軒小天井と、支輪を持つ。隅の二の尾垂木上には線形を施した飼い物を入れる。

上層の柱間装置は、桁行中央間以外はすべて盲連子とし、西面中央間には扉を吊りこむ。東面中央間には扉を入れず、撞木を突出させている。

軒は二軒繁垂木で反り増しはない直材である。屋根は檜皮葺で、箱棟の大棟を載せ、両端に鬼板を置く。妻飾は虹梁大瓶束で、虹梁は大斗実肘木で支える。手前には、やや形状の特殊な蕪懸魚を吊る。

内部の構造 側まわりの見えがかりから推察される構造と、内部の構造は異なっている。下層は内部柱をもつ総柱建物状になっており、自然石の礎石の上に八角柱を立て、腰貫と飛貫で固める。

腰貫・飛貫は桁行方向を上木とし、背違いに入れられる。これら腰貫・飛貫は、袴腰近くまで延びて、袴腰の骨組みとなる縦縁と組み合わされる。

下層の棟通り中央間の位置の内部柱は、そのまま上層まで延びる通柱となる。この通柱は上層組物の最上段の通肘木上端で留まり、桁を受ける。その直上に通柱と同様の形状の束柱が置かれ、小屋組を支える。この束柱も八角形で、側まわりから伸びた3段の通肘木が挿されるほか、尾垂木が挿されている。また、桁行方向に貫が渡され、化粧垂木の垂木掛となっている。通肘木最下段の下端は、外部の腰組から引き込んだ大斗上の肘木と斗によって支える。

下層の通柱以外の側柱は、台輪下端で留まる。上には組物が置かれ、その通肘木は、平・隅ともに内部に引き込まれ、通柱に挿される。内部の通肘木上、壁面から内側に一手分入った位置には、斗が2段重ねられ、最上段の通肘木上端で上層の柱盤を受け、その上に柱が置かれる。通肘木最下段の下端は、上層と同様な納まりになる。なお上下層はともに中備

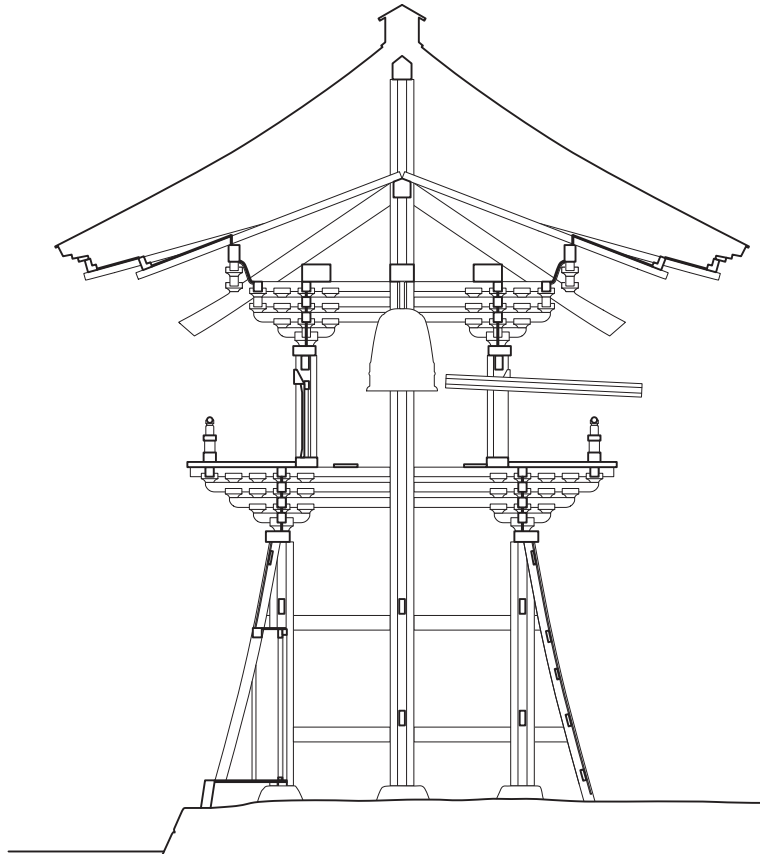


図 517 勸学院鐘楼断面図 1:80

の簀束以外は、内部にも組物が現れてくる。

なお上層の柱の外部は円形であるが、内部は8角形である。化粧となる部分のみ円形に整形したものである。

改修 小屋裏に新材が確認できるが軸部の大半は当初材をよく残し、屋根部分以外は大きな改修がなされていないものとみられる。

まとめ 勸学院鐘楼は、下層の袴腰内部では貫を多用して軸部を固め、内部柱を通柱として上下層の軸部を緊結するという、内部を完全に野物とした構

法をもつが、腰組にも上層組物にも三手先組物を用いる本格的な袴腰鐘楼である。また、軸部の残存状況も良好である。簡素ながらも整った意匠を持つ近世の袴腰鐘楼として高い価値を有する。



図 518 勸学院鐘楼下層内部



図 519 勸学院鐘楼腰組高さ架構



図 520 勸学院鐘楼上層内部



図 521 勸学院鐘楼上層架構見上げ



図 522 勸学院鐘楼上層頭貫拳鼻



図 523 勸学院鐘楼妻飾虹梁絵様

(4) 表門 (PL.37・38)

構造形式 一間一戸 四脚門 切妻造 檜皮葺

建立年代 文化10年(1813)『高野山名所図会』

概要 勸学院表門は勸学院の南正面に位置する切妻造檜皮葺の一間一戸四脚門である。『高野山名所図会』によると、勸学院は文化6年(1809)の火災に遭い、文化10年(1813)に再建されたとされる。表門も風食の程度や絵様からこの時の再建とみられる。寛政8年(1796)の『高野山古図』には現在の建物の前身建物とみられる切妻造の四脚門が描かれ、基本的な形式を踏襲していることがわかる。

構造 基壇はなく、正面の東西南の3方に葛石をめぐらす。モルタルの礎石の上に円柱の親柱を立て、柱上に冠木を渡し、平三斗と絵様付きの実肘木を載せ、梁を受ける。また石製礎盤を直に地面に据え、上下に粽を付した几帳面取角柱の控柱を立て、親柱との間を獅子鼻付きの男梁(頭貫)と腰長押で固める。控柱どうしは虹梁形頭貫で繋ぎ、端部に獅子鼻を取り付ける。柱上には絵様付きの実肘木を付けた杵肘木を載せ、梁・桁を受ける。控柱の中備は本墓股とする。

扉口は、方立、鼠走、蹴放を入れ、棧唐戸を吊る。

梁の上、親柱の位置には木鼻付の大瓶束を入れ、大斗・絵様実肘木を載せる。中央には間斗束・絵様実肘木を載せる。間斗束には笈形を付す。これらの上に棟木が渡される。軒は二軒疎垂木で地垂木には大きな反り増しを付ける。一方飛檐垂木には反り増しはなく、地垂木よりも勾配が急になる。これら垂

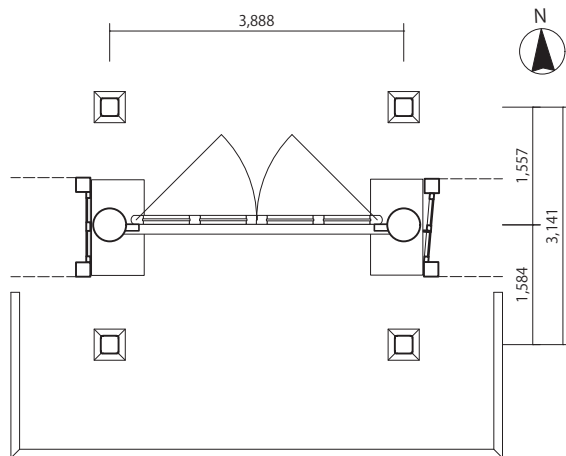


図 524 勸学院表門平面図 1:100

木上には化粧木舞を渡す。大棟は箱棟で、両端に鬼板を付す。懸魚は鱗を菊の彫刻とした三花懸魚と吊るほか、鳳凰の彫刻を桁隠に用いる。建物両端には檜皮葺の筋塀の形式の袖塀をともなっている。

彫刻など 勸学院表門は正面虹梁形頭貫・木鼻・墓股・懸魚や桁隠・笈形に彫刻が施されている。正面の虹梁形頭貫には鳥の彫刻を付け、木鼻はみな獅子鼻とする。正面の墓股には飛龍と波の彫刻を入れ、背面墓股には麒麟と雲の彫刻を入れる。懸魚の鱗は菊の彫刻が、桁隠しには鳳凰の彫刻がほどこされる。笈形には獅子と草花の彫刻が入れられる。彫刻のほかに六葉の釘隠が腰長押に、出八双金具が棧唐戸に、入八双金具が方立に打たれ、柱も沓巻金具が施される。このように表門は勸学院の建物の中では特ににぎやかに飾られている。

まとめ 勸学院表門は、地垂木に大きな反り増しを持ち、古風な要素を持つ。また、建物の軸部は当初材をよく残し、大きな改修がなされていないものとみられる。高野山において古式な細部意匠を残す近世後期の建物として高い評価を有する。(山崎有生)



図 525 勸学院表門見上げ



図 526 勸学院本堂表面架構

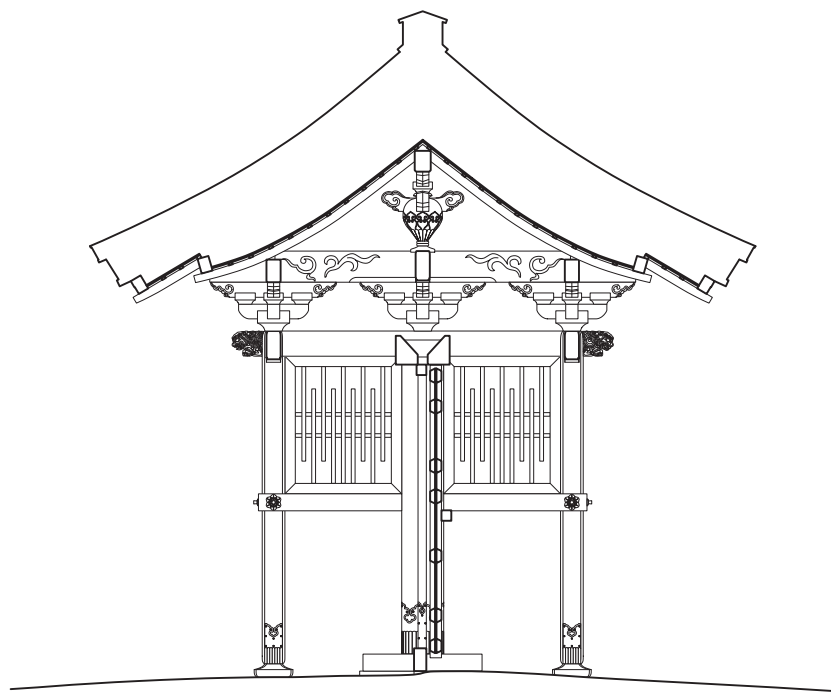


图 527 勸学院表門断面図 1:80



图 528 勸学院表門組物



图 529 勸学院表門正面虹梁形頭貫上中備墓股



图 530 勸学院背面虹梁形頭貫上中備墓股



图 531 勸学院表門虹梁形頭貫繪様・彫刻

6 徳川家霊台

(1) 概要

沿革 徳川家霊台家康霊屋及び秀忠霊屋は、四脚門の背後の小高い乱石積の壇上に建つ。『紀伊続風土記』によれば、「寛永二十年東照宮（家康霊屋）・御霊屋（秀忠霊屋）・尊牌堂（明治21年焼失）等、造営成す」とあり、聖方によって創建されたと伝えられる。境内にある4基の石灯籠には、それぞれ「寛永十九年」と陰刻される。唐門・瑞垣ともに、絵様線形などは17世紀中期の様相を示しており、霊屋とともに寛永20年（1643）頃に建立されたものと考えられる。

配置 2棟は東西に並んで共に南面し、東は家康霊屋、西は秀忠霊屋である。家康霊屋の南東には位牌堂跡が位置する。この壇には、2棟間の中心軸に揃えて石階10級を設け、東には位牌堂跡に向かう石階を設ける。両霊屋は、規模と構造形式を同じくする唐門と透塀をそれぞれ配して院を形成する。

(2) 秀忠霊屋唐門・瑞垣、家康霊屋唐門・瑞垣（PL.38～40）

構造形式 秀忠霊屋唐門：1間1戸平唐門、銅瓦葺、秀忠霊屋瑞垣：総31間、腕木造、銅板葺、家康霊屋唐門：1間1戸平唐門、銅瓦葺、家康霊屋瑞垣：総31間、腕木造、銅板葺

建立年代 17世紀中期（技法・意匠）

唐門と瑞垣は、両霊屋の修理工事にあわせて復原された^{註1}。唐門は明治末頃に解体され、金剛峯寺本坊の床下に2棟分保存されていたが、失われていた材（桁、頭貫、貫、頭貫下化粧肘木、唐居敷、扉、兔の毛通し、箱棟、鬼、銅瓦）については痕跡や類例（霊屋、



図532 徳川家霊台秀忠霊屋唐門

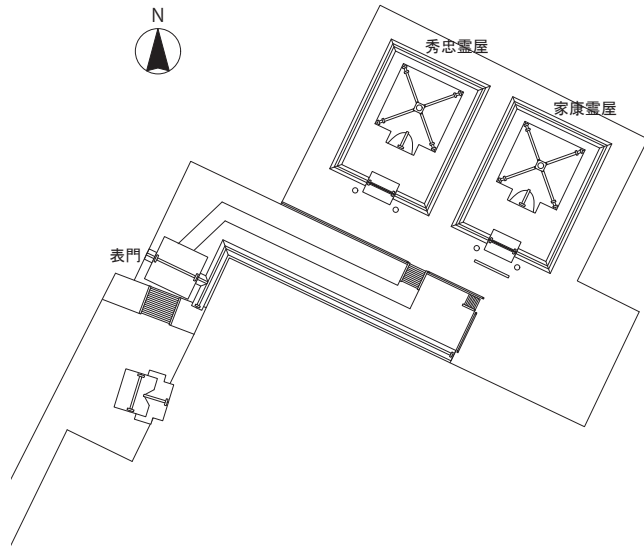


図534 徳川家霊台配置図 1:1000



図535 「御公儀上一山図」（正保3年＝1646、『高野山古絵図集成』67頁）

普賢院裏門）などから復原された。透塀は解体されなかったが、修理前は腰長押下の欄間が皆無の状況であった。

唐門 唐門は、桁行1間、梁行1間、銅瓦葺の四脚平唐門である。透塀と共に、壇上の切石積基壇の上に建ち、正面に石階4級を設ける。基壇上面は布敷である。

軸部は、径300mmの円柱の親柱を2本立て、それらの前後に幅152mmの几帳面取角柱の控柱を4本立てる。親柱には唐居敷を据える。控柱は粽を持ち、



図533 徳川家霊台秀忠霊屋唐門軒下見上げ

切石礎石上の石製礎盤にのる。柱間寸法は、桁行 2,270 mm、梁行（控柱間）1,515 mmである。親柱間は、親柱の上に冠木を渡して繋ぐ。控柱間の桁行は頭貫で繋ぎ、拳鼻を突出させる。梁行は、両妻面を男梁、女梁、腰貫で固める。男梁と女梁は、直交方向の冠木を挟むようにのり、男梁は控柱に頭貫として繋がる。控柱では、男梁も拳鼻を突出させる。

組物は、親柱の上方に大斗絵様肘木を置き、梁行の虹梁を受ける。控柱上にも大斗絵様肘木を置き、先の虹梁と桁行の丸桁とを受ける。肘木の絵様は、円弧形状の浅くて細い渦で鏝を付ける。虹梁の絵様は、若葉のない木瓜形状の浅くて細い渦で鏝を付け、袖切は4筆とする。虹梁の木鼻にも絵様線形を施す。中備はない。親柱の上方では、大斗は男梁にのるが、男梁の幅は大斗の斗尻幅より狭いため、大斗はやや不安定な納まりとなる。妻飾は虹梁板臺股で、板臺股は外面に葵紋彫を施す。この板臺股に斗と絵様実肘木を組んで棟木を支持する。虹梁絵様は、霊屋向拝の虹梁絵様と類似し、17世紀中期頃と認めることができる。

軒は茨垂木で、茅負と布裏甲をのせる。桁行寸法を16枝に割り付け、垂木心と柱筋を揃える。1枝寸法は142 mm前後を測り、これは4寸7分程である。柱間寸法は7.5尺であるから、柱間寸法を先に決め、これを16分割したものと思われる。妻は、唐破風に兎の毛通しを飾る。屋根は、前述の通り銅瓦葺で、銅製の鬼にも外側に葵紋を施す。

扉口は両内開きの棧唐戸で、蹴放、方立、楣を立て込み、唐居敷と冠木に軸摺を彫って扉を吊る。棧唐戸には、吹寄菱小組格子窓を設ける。唐居敷と蹴放の下には、平面形状をこれらに対応させた切石を敷く。

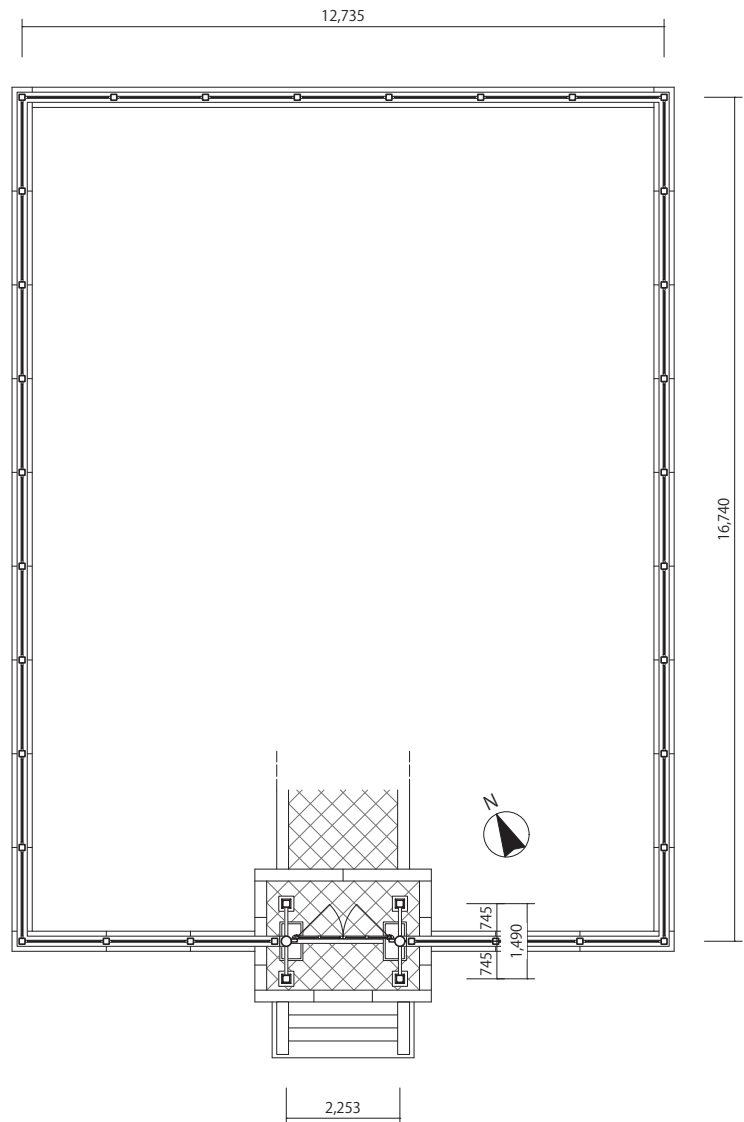


図 536 徳川家霊台秀忠霊屋唐門・瑞垣平面図 1:150

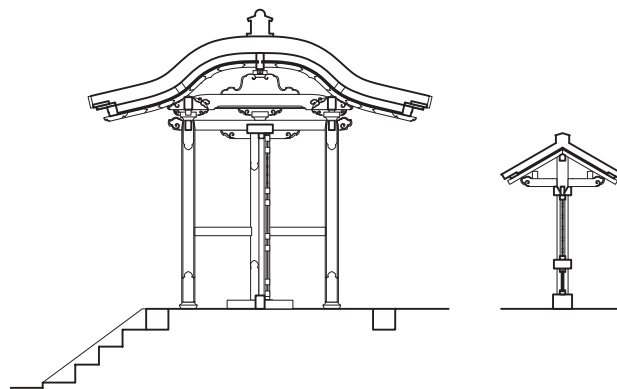


図 537 徳川家霊台秀忠霊屋唐門・瑞垣断面図 1:80

彩色は、棧唐戸の吹寄菱小組格子窓を黒漆塗とする以外は素木とする。金具類には、柱の元口・末口の巻金具、冠木の金具、扉まわりの金具、茨垂木の金具、破風金具、兎の毛通しの金具がある。茨垂木の鼻先の金具は、繰形を付けた形状とする。軒丸銅瓦や冠木など、各所の金具には、葵紋を刻んで荘厳する。なお、北側の頭貫の北面には、修理銘文を掲げる。

瑞垣 瑞垣は、唐門の両脇から伸びて霊屋を圍繞する。正面は唐門の両脇に各3間、側面は9間、背面は7間で、総長31間、銅板葺である。軸部は、切石積基壇の切石布敷の上面に土台を据え、面取角柱を立て、腰貫、腰長押、内法貫、内法長押で固め、柱天に棟木をのせる。内法長押上に絵様繰形を付けた腕木をのせ、その鼻先で軒桁を支持する。隅の腕木は隅行方向にのみ伸びる。腕木の絵様は古式で、唐門と同じ17世紀中期とみても矛盾しない。

軒は一軒平行半繁垂木で、広小舞を置き、銅板葺で屋根を包む。唐門との取り付け部は、絵振板で妻面を塞ぐ。

柱間装置は吹寄菱格子欄間で、腰長押下は盲板欄間とする。腰長押下の欄間は、当初は檜材の彫刻入りとみられが、資料不足によりヒノキの盲板とされた。各欄間は、枳を回して立て込む。彩色は、吹寄菱格子欄間を黒漆塗とするほかは素木とする。金具類は、腰長押と内法長押に釘隠金物を打ち、上下の欄間の枳に額縁金具を回して荘厳する。隅木と垂木に木口金物を付す。

まとめ 唐門及び瑞垣は明治末頃に解体されたものの、保存古材や痕跡にもとづき建立当初の姿に復原され、透塀も痕跡から復原されたものである。吹寄菱格子の黒漆塗は剥がれ落ちているが、木部は良好に保たれている。これらは、各所に葵紋や金具で飾り立て、徳川家霊台の霊屋を囲うに相応しい構えをなしており、霊屋と一体で空間を形成する点で貴重である。



図 538 徳川家霊台秀忠霊屋瑞垣腕木



図 539 徳川家霊台家康霊屋唐門正側面



図 540 徳川家霊台家康霊屋唐門架構



図 541 徳川家霊台家康霊屋瑞垣腕木

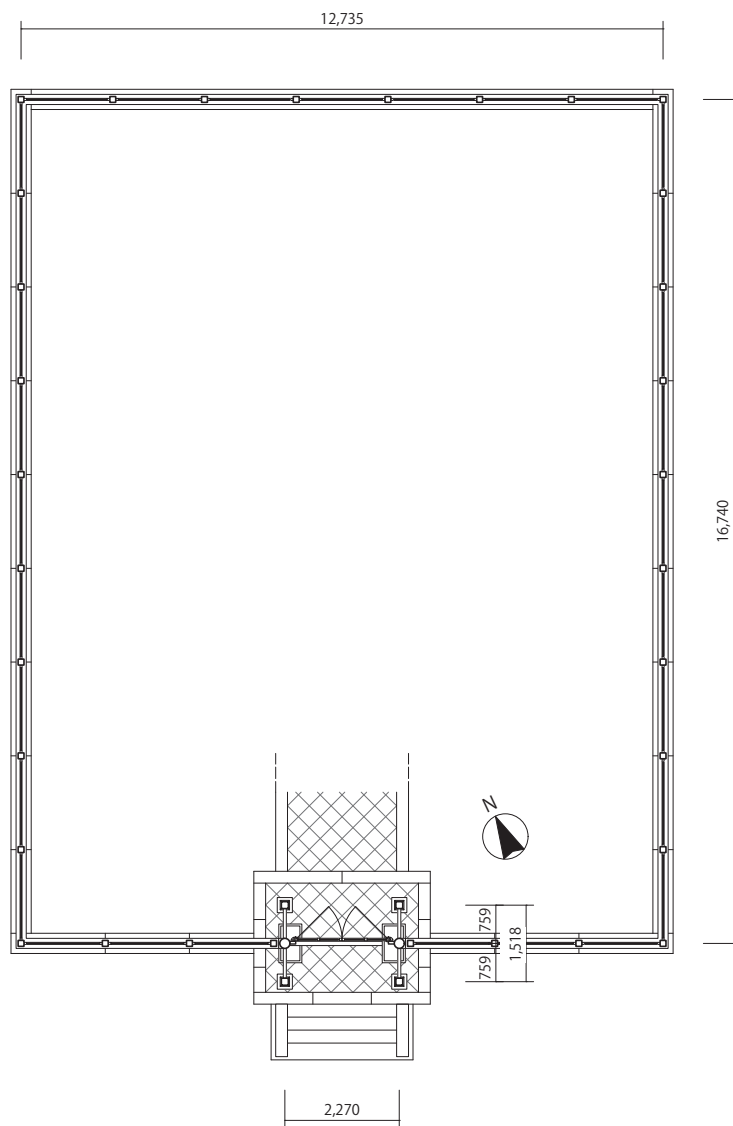


图 542 徳川家霊台家康霊屋唐門・瑞垣平面図 1:150

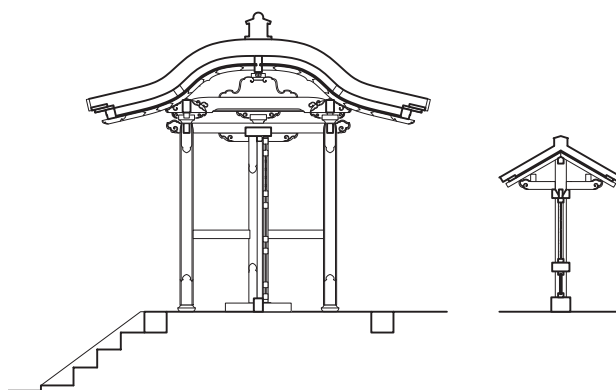


图 543 徳川家霊台家康霊屋唐門・瑞垣断面図 1:100

(3) 表門 (PL.37・38)

構造形式 桁行5間、梁間5間、正面1間向拝付、宝形造、檜皮葺

建立年代 17世紀中期 (技法・意匠)

配置・構造形式 表門は、霊台の南西で南面して建ち、切妻造、銅板葺の屋根を上げる四脚門である。四脚門は参道の中腹に位置し、15級の石階を登った壇上に建ち、両脇に袖壁がつく。基壇は切石の見切石を四周に回して一段高くしたもので、棟通より南側を砂利敷、北側を切石の布敷とする。棟札など、建立年代を示す資料はないが、細部装飾は17世紀中期の様相を示し、家康・秀忠両霊屋と同時期の建立とみられる。

軸部 この門は、定型的な四脚門の形式である。径390mmの円柱の親柱を2本立て、それらの前後に幅250mm、面内寸法225mmの面取角柱の控柱を計4本立てる。柱間寸法は、桁行3,418mm、梁行(控柱間)2,672mmである。親柱は木製の唐居敷上に立ち、控柱は方形切石礎石にのる石製礎盤上に立つ。親柱間は、親柱の上に冠木をのせて繋ぐ。控柱間の桁行は、虹梁形頭貫を渡して繋ぎ、木鼻を籠彫の掛鼻として突出させる。この虹梁には絵様と錫杖彫を施す。虹梁絵様は、若葉のない木瓜形状の浅くて細い渦で、袖切は4筆とする。梁行は、両妻面を男梁、女梁、腰長押、腰貫で固める。男梁と女梁は、直交方向の

冠木を挟むようにのり、男梁は控柱に頭貫として繋がる。控柱では、男梁の木鼻も籠彫の掛鼻として突出させる。

組物・軒まわり 組物は、親柱上に大斗花肘木を置き、梁行の虹梁を受ける。控柱上に出三斗を置き、先の虹梁と桁行の丸桁とを受ける。親柱の上では、大斗は男梁にのるが、男梁の幅は大斗の斗尻幅より狭いため、大斗はやや不安定な納まりとなる。控柱上に出三斗は、桁行方向に実肘木を入れて丸桁を受けるが、梁行方向には実肘木を入れず、三斗で成の高い虹梁を直接受ける。控柱間の中備は実肘木付の透かし臺股で、股間に獅子と植物の彫刻を入れる。臺股の形状は、寛永20年(1643)に建立された霊屋の臺股よりも脚が開きであることから、表門が霊屋に引き続いて建立されたと考えられる。

軒は二軒平行角繁垂木で、地垂木には強い反り・増しを、飛檐垂木には鼻扱きを備える。丸桁にも反り反り・増しを備える。平面は、桁行柱間を22枝に割り、柱筋を手挟む。蟻羽では傍垂木を地垂木、飛檐垂木ともに各5本入れ、その外側に破風板を入れ、拝みに猪目懸魚を吊り、鱭に植物の彫刻を施す。降懸魚はなく、丸桁の木口面は破風板の側面に面を揃える。軒先では茅負に切裏甲を置き、檜皮を重ねて銅板を葺く。六枝掛が成立しており、一枝寸法は155mm程度を測り、これは5寸と思われる。妻飾は虹梁

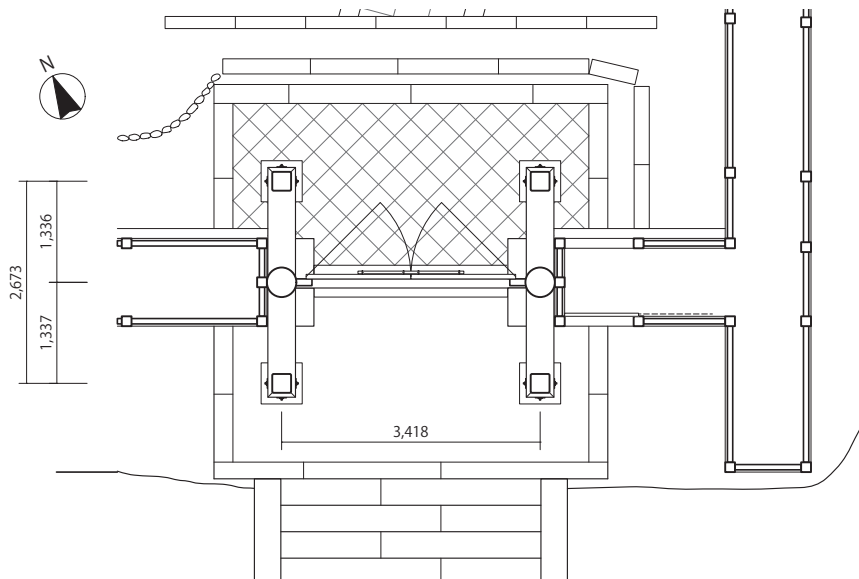


図 544 徳川家霊台表門平面図 1:100

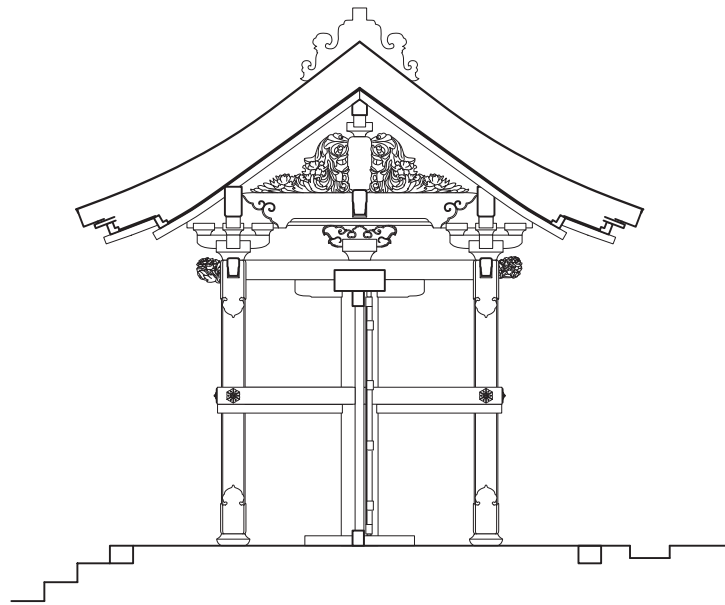


図 545 徳川家霊台表門断面図 1:80

笈形付大瓶束で、この妻面の虹梁に直交して棟通に虹梁を架け、これに中備の笈形付大瓶束を立てる。笈形は植物の彫刻として手を凝らす。これらの大瓶束には大斗を置き、実肘木を介して棟木を支持する。妻飾の大瓶束には棟通にも笈形をつけるが、西側では欠失しており、大瓶束に笈形の当たり痕を残す。これらの虹梁には絵様を施すが、錫杖彫はない。妻飾の虹梁絵様は、若葉のない円弧形状の浅くて細い渦で、袖切は4筆とする。棟通の虹梁絵様は、若葉を持つ円弧形状の浅くて細い渦で、袖切は4筆とする。控柱間の虹梁形頭貫を含め、各虹梁で絵様に若干の変化を持たせるが、いずれも古風である。

造作 扉口は両内開きの片面張り板棧戸で、冠木と唐居敷に軸摺を彫り、楣、方立、蹴放で立て込む。妻面は吹き放ちである。金具類には、柱の元口・末口の巻金具、腰長押の釘隠金具、冠木の巻金具、

地垂木・飛檐垂木の木口先金具、破風飾金具、扉まわりの軸摺金具、入八双金具、釘隠金具、門金具などがある。金具を多用して荘厳する。大棟には箱棟を置き、木製の鬼板で塞ぐ。

まとめ 四脚門は、控柱の面取が大きく、地垂木に強い反りを、飛檐垂木に鼻扱きを施すなどの中世の技法を残し、中規模ながら堂々とした建物と評することができる。その堂々とした中に、木鼻、笈形、臺股や懸魚の鱗などに手の込んだ彫刻を施し、各部に飾金具を多用して飾り立てる。各部を飾金具で保護するため、部材は概ね遺存しており、状態もよい。細部に至っても格式の高さがみられ、家康・秀忠霊屋と一連の造営による聖方東照宮の表門に相応しい貴重な建物といえる。

(目黒新悟)



図 546 徳川家霊台表門軒下見上げ



図 547 徳川家霊台表門虹梁形頭貫

7 金輪塔 (PL.41・42)

構造形式 方3間多宝塔、檜皮葺

建立年代 天保5年(1834)『紀伊続風土記』

立地と建立年代 金輪塔は、一心院西室院の前で東面して建つ檜皮葺の多宝塔である。

『紀伊続風土記』によれば、高野山を中興し、中院流を開いた明算(1021～1106)が自らの廟所として建立したという。同書には、「近来一心院焼亡の時の此塔類焼し、今塔は天保五年甲子二月十二日御修理料を以て構ありけらし」とあり、後述するように絵様繰形の様式や軒支輪の技法からみて、天保5年(1834)に再建されたものと考えられる。前面道路の付け替えにともない、不動堂が明治41年(1908)に壇上伽藍へと移築されるまで、金輪塔と不動堂が並び立ち、一心院谷の景観を形成していた。

柱配置と平面計画 初重は、方3間として四周に縁をめぐらせ、屋根上に銅板張りの亀腹をみせる。二重は、12本の円柱を立てて組物を置き、屋根上に相輪を頂いた定型的な多宝塔である。初重内部は拭板敷とした一室空間で、四天柱を置いて来迎壁を立て、その前面に仏壇を設けて本尊の一字金剛仏頂尊座像を祀る。

初重の総間は16.4尺(4,970mm)で、中央間を6.15尺(1,864mm)、両脇間を5.125尺(1,553mm)とする。中央間を12枝、両脇間を10枝に割り付けており、一枝寸法は155mmほどを測り、5.125寸とみられる。六枝掛が成立しており、柱間寸法は枝割で計画したものと思われる。

側まわり 縁下に乱石積の外装をもつ基壇を築き、その上に割石礎石を据え、基壇の周囲に縁束として自然石礎石を据える。建物の周囲は、東正面側のみ自然石の見切石で一段高く造り、その外側の四周にU字溝を回して雨落とする。U字溝の内側に菱形金網フェンスを立てて囲う。

初重の側柱は、幅300mm(面内260mm)の面取角柱で、切目長押、内法長押、頭貫で繋ぐ。台輪はなく、頭貫は木鼻を突出させ

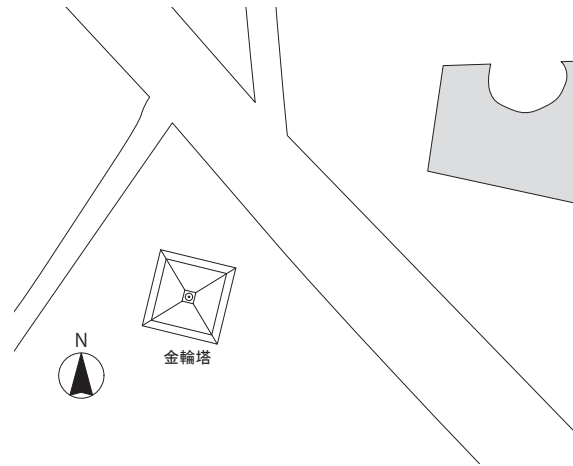


図 548 金輪塔配置図 1:1000



図 549 「御公儀上一山図」(正保3年=1646、『高野山古絵図集成』63頁)

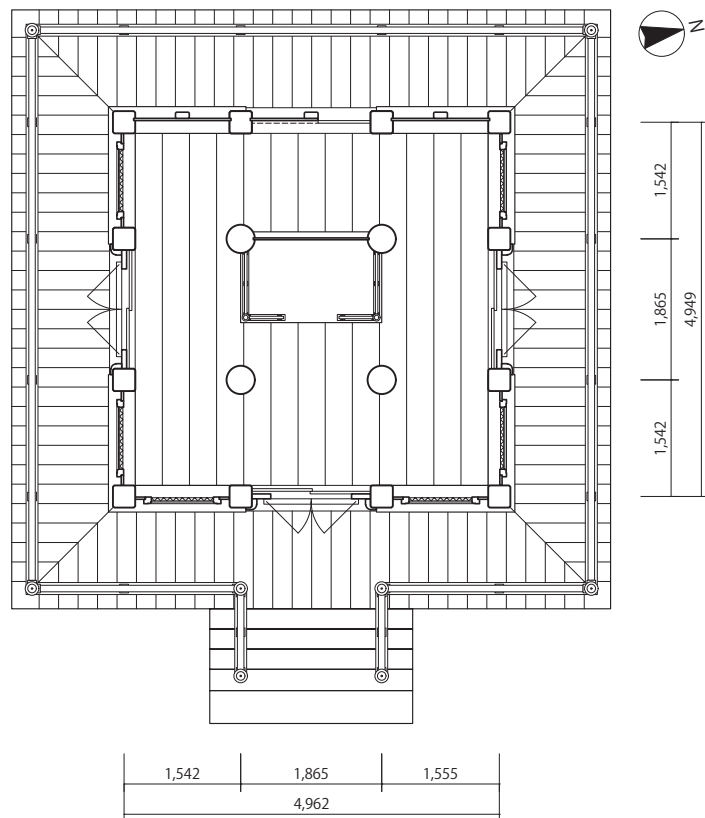


図 550 金輪塔平面図 1:100

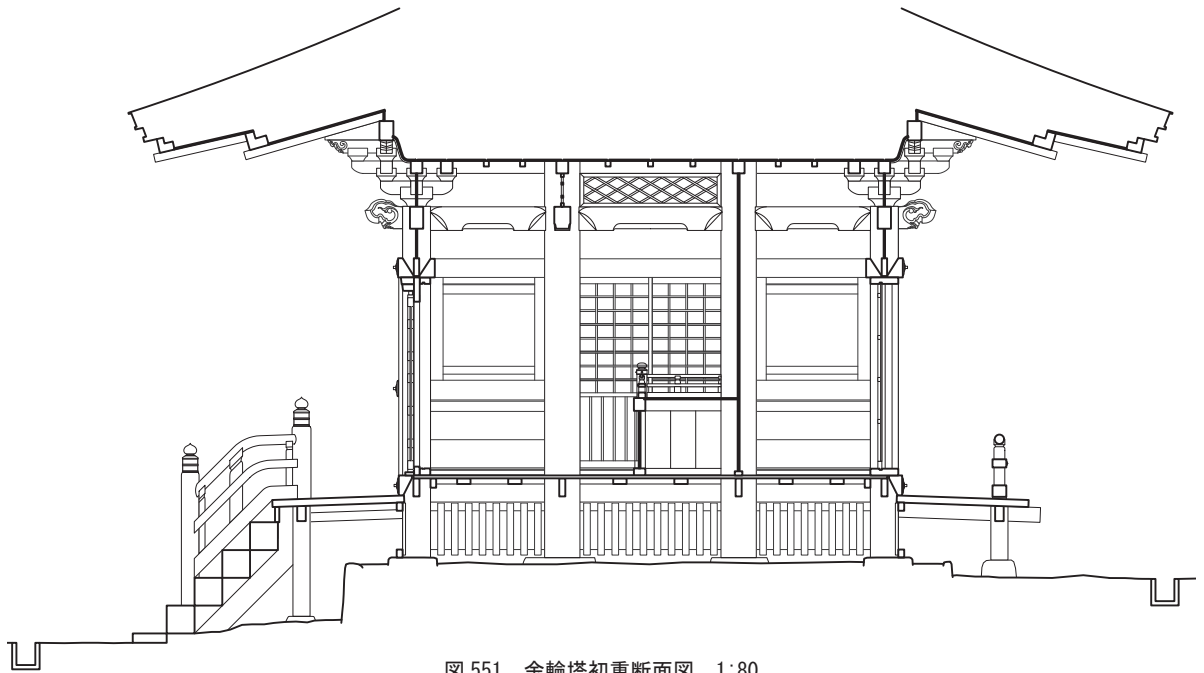


図 551 金輪塔初重断面図 1:80

る。頭貫木鼻の絵様線形は、19世紀中期とみても矛盾はない。背面以外の両脇間は、さらに腰貫と腰長押で固める。

柱間装置は、背面以外は中央間を外開き棧唐戸、両脇間を盲連子窓とし、これらには中央間に引違戸、両脇間に嵌め殺しの内障子を入れる。棧唐戸は弊軸

を回し、闕、蹴放、方立で立て込み、弊軸の上部と闕に軸摺を彫って吊る。これらの中央間の鴨居、敷居は洋釘で固定されており、さらに楣、方立は納まりが特異なことから、これらは改修を受けたとわかる。なお、両側面の棧唐戸は、外側をボルトで固定されており、開閉しない。盲連子窓は、腰長押の上



図 552 金輪塔正面遠景



図 553 金輪塔初重正側面側まわり



図 554 金輪塔初重背側面側まわり



図 555 金輪塔初重軒下見上げ

に弊軸を回して立て込む。盲連子窓の上部には、内法長押との間に無目を入れ、両脇には、側柱との間に小脇壁の板を入れる。腰長押の下は横板壁とし、束を立てる。腰貫は、この束に対して頭貫状に納まる。背面の柱間装置は、中央間を片引戸、両脇間を横板壁とする。中央間の鴨居には2本溝が残っており、もとは引違戸であったことが知れる。横板壁には間柱を立て、上下に杵を入れて横板を押さえる。ただし、横板壁はいずれも洋釘で固定されており、後補である。また、全ての面で、内法長押と頭貫との間に板で小壁を張る。

縁は四方切目縁で、東正面には4級の木階を設ける。縁は、割石礎石上にひかりつけた角束を各辺に6本立て、縁葛で繋いで縁板を張る。四隅に擬宝珠親柱を立てた高欄を設け、東正面では昇高欄として開放する。

組物は蛇腹の軒支輪を備えた出組で、実肘木を介して角断面の丸桁を支持する。軒支輪は、支輪板から支輪子を一木で造り出す。秤肘木や杵肘木に笹繰はない。壁付通肘木と手先の秤肘木との間に二の肘



図 556 金輪塔初重隅木

木を入れてこれらを繋ぐが、木鼻を出さない。中備はない。軒は二軒平行繁垂木で、論治垂木に納める。垂木は、各柱筋と丸桁とを手挟むように割り付ける。飛檐隅木の鼻には特異な造り出しがある。飛檐垂木の出は大きく、垂木に反り、増し、扱きはない。

二重は円形平面で12本の円柱を立て、内法長押、頭貫、台輪で固める。柱間装置は、初重の各面に合わせて四面に外開きの板扉を、他の8面に盲連子窓を設ける。初重の屋根の亀腹上には、台輪を回して平三斗の腰組を置き、縁葛を介して切目縁を受ける。腰組は、平三斗から木鼻を出し、中備として蓑束の間斗束を立てる。縁には縁高欄を回す。

組物は四手先で、三手目に秤肘木を置いて尾垂木を受け、四手目は実肘木を介して丸桁を支持する。三手目まで軒小天井とし、三手目と四手目の間に蛇腹の軒支輪を渡す。軒支輪は、初重と同様、支輪板から支輪子を一木で造り出す。軒は、初重と同様、二軒平行繁垂木で、垂木に反り、増し、扱きはない。

初重の長押には、柱筋ごとに釘隠金具が付されており、初重・二重とも飛檐隅木に風鐸を吊る。初重



図 557 金輪塔上重軒まわり見上げ



図 558 金輪塔初重架構・天井見上げ



図 559 金輪塔小屋組四天柱納まり

の縁高欄には親柱に擬宝珠金具、平桁に唄金物、架木に笹金物が付されている。二重の縁高欄には、平桁に唄金具が付される。このほか初重の東正面には、内法上に「金輪塔」の題字が書かれた板額を掲げている。

初重内部 床は、赤色塗装を施した拭板敷の一室空間とし、四天柱を立てて来迎壁を設け、その前面に仏壇を構える。四天柱は径 374 mm の円柱で、天井裏まで高く立ち上げる。内部に一手先の組物をみせ、二の繫肘木を天井桁とし、格天井を張る。この繫肘木と直交して、一手先に通肘木を入れて組物を横に繋ぎ、天井桁とする。壁付通肘木と手先の通肘木との間には、鏡天井を張る。天井は、四天柱内で折り上げず一面に張り、四天柱内に天蓋を吊って荘厳する。側柱と四天柱との間には、繫虹梁を架ける。繫虹梁は、側柱で頭貫高に納め、これを四天柱に挿す。この虹梁に絵様はなく、錫杖彫を施す。四天柱間には、来迎壁以外の 3 面に同様の虹梁を同高で渡し、これと天井桁との間に菱欄間を入れる。四天柱と四天柱間の天井桁、虹梁、そして来迎壁は黒色塗装とする。ただし、来迎壁の背面は素木とする。四天柱間の虹梁の錫杖彫と眉欠には、赤色塗装を施す。

仏壇は、来迎柱の前で、板床の上に土台を 3 方に回して隅に面取角束を立て、角束の間に板を張る。面取した框を 3 方に回して、上面に板を張る。土台、角束、框、上面の板は黒色塗装とし、側面の板、角束と框の面取には赤色塗装とする。仏壇には、黒色塗装した擬宝珠高欄を回す。仏壇高欄は、正面でも開放しない。親柱には擬宝珠金具を被せ、平桁に唄金具を打つ。



図 560 金輪塔相輪

相輪 相輪は、下から、露盤、伏鉢、請花、九輪を重ね、その上に請花を 3 段重ねて頂部に火炎宝珠をのせる。頂部の 3 段の請花は、花卉を下から四葉、六葉、八葉に造り、徐々に小さくする。各九輪には大きめの風鐸を 4 個吊るが、これに対して九輪間の間隔が狭く、風招が下の九輪に当たる。頂部中段の請花付近から、二重の各隅棟先端に置いた火炎宝珠までを、宝鎖で結ぶ。各宝鎖にも風鐸を 2 個吊る。露盤には格狭間を施す。露盤の束には「紀州粉河住／佛具屋喜兵衛作」と刻銘があり、作者が判明する。粉河の鋳物師は、弘化 3 年上棟の壇上伽藍御影堂の露盤に福井良房の名が見え、この時期に高野山に粉河の鋳物師が活動していたことが知られる。

まとめ 建立後 200 年近く経つものの、軸部に及ぶ改造などはない。部分的な木部の虫害、四天柱の塗装の剥落、柱間装置の改修、金具類の錆などがみられるが、木部は驚くほど良好に保たれている。特に、内部の素木材は、利用頻度の少なかったとみられ、建立当初からの輝きを今も放っている。初重総間 16.4 尺 (4,970 mm) という規模は、近隣の金剛三昧院多宝塔 (5,561 mm) に近く、比較的規模の大きな多宝塔と言える。二重では大きな遞減をとりつつ、檜皮葺の軽快な屋根で深い軒を出すため、深い軒と細い塔身とが対比をなす特徴的な塔と評することができる。かつて不動堂とともに一心院谷の景観を形成していた重要な建物である。

また空海を祀る奥之院御廟、真然を祀る金剛峯寺真然堂、覚鑿を祀る奥之院密厳堂とともに、高野山の高僧の菩提を弔う建物としても高い歴史的な価値を有する。
(目黒新悟)



図 561 金輪塔露盤

8 女人堂 (PL.42・43)

構造形式 桁行 12.0 m、梁間 7.9 m、入母屋造、銅板葺

建立年代 江戸時代前期 (技法・意匠)

概要 女人堂は、高野山の西北の入口となる不動坂口に西面して建つ桁行 12.0 m、梁間 7.9 m、入母屋造、銅板葺の簡素な堂宇である。高野山への入口は7口あり、各口に女人の参籠所である女人堂があった。現在残っている女人堂は、高野山の西北の入口である当堂のみで、他は現存しない。現在の建物は、他の場所から移築したと伝わる。明確な建立年代を示す史料がないが、小屋組に転用された部材には、延宝期や元禄期など江戸時代の前期に遡る墨書が残り、それ以前の建築とみられる。

正保3年(1646)に作成された「御公儀上一山図」では、「門之不動」と並んで入母屋造の「女人堂」が描かれている。

平面構成と計画 柱間数は正面3間、側面4間で、背面では軒下にさらに1間分が増築される。東北隅では、主屋の屋根とは別に底を出した突出部が増築

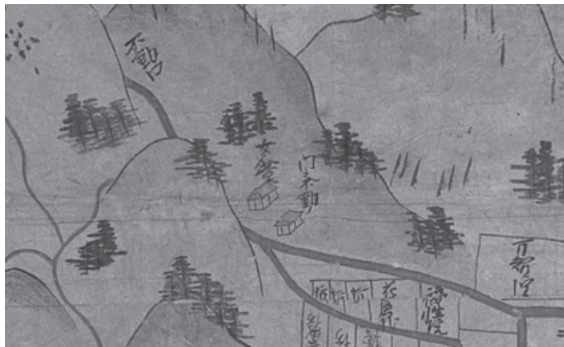


図 563 「御公儀上一山図」(正保3年=1646、『高野山古絵図集成』63頁)



図 565 女人堂北側面・背面

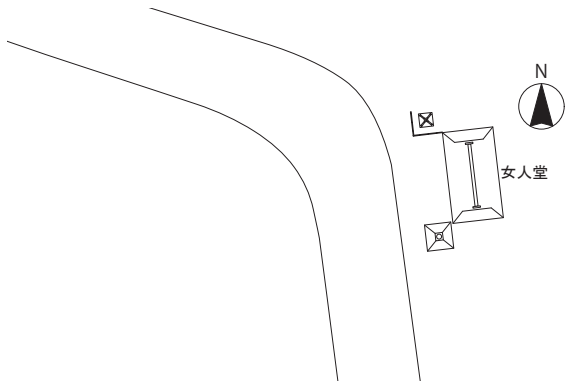


図 562 女人堂配置図 1:1000

される。内部の正面側は土間床である。内部の後方には板床を張り、中央間は1室の仏壇とし、両脇間は柱筋に揃えてそれぞれ前後2室に分節する。

正面の桁行寸法 11,986 mmは40尺とみられ、これを24枝に割り付ける。側面の梁行寸法 7,064 mmは23.3尺(前方の1間が3.3尺、後方の3間が合わせて20尺)とみられる。側面は、前方の1間を2枝、後方の3間を各間4枝、計14枝に割り付ける。1枝寸法は、正面では499 mm、側面では505 mm程度で、1.67尺とみられる。



図 564 女人堂南側面・背面



図 566 女人堂正面軒まわり見上げ

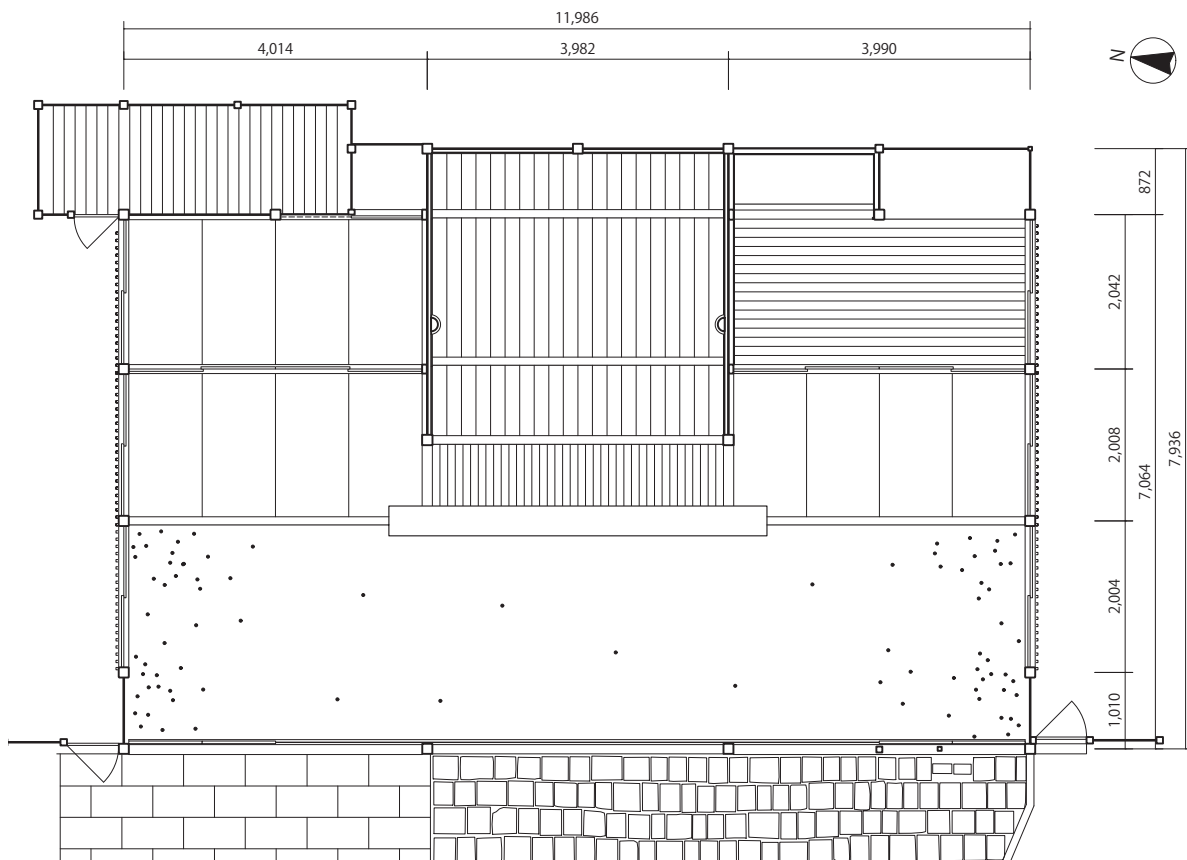


图 567 女人堂平面图 1:100

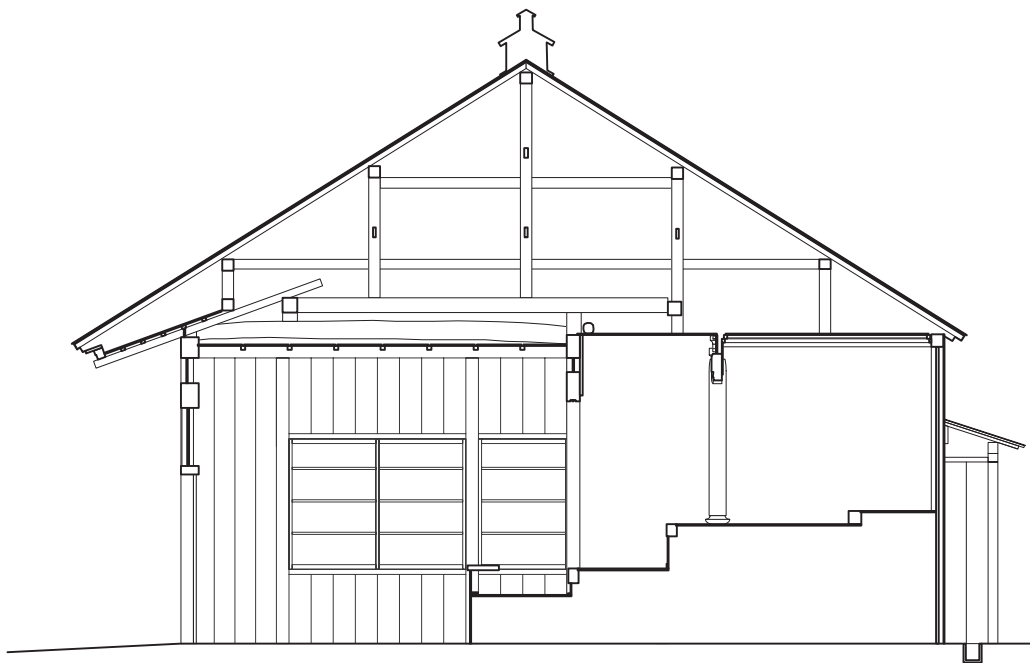


图 568 女人堂断面图 1:80

側まわり 正面は幅 132 mm の糸面角柱を立て、これを無目敷居、無目鴨居、差鴨居で固め、丸桁を柱天のせとする。内法は吹放ちとし、無目鴨居と差鴨居との間の欄間にガラス吹寄菱格子を組み込む。差鴨居と丸桁との間の小壁には、琵琶板を嵌める。この柱の内側に別に枠を組み、上下に 2 本溝を通して雨戸仕舞とする。側背面は幅 134 mm、面内 120 mm の面取角柱を立て、柱天に舟肘木を置いて丸桁を据える。舟肘木と丸桁にもそれぞれ大きな面取がなされ、古式である。両側面は、前方の 1 間を板壁、後方の 3 間を引違ガラス戸とし、ガラス戸の外側には堅格子を打ち付ける。背面は、板壁で閉塞される。

組物は正面が柱天のせ、側背面が舟肘木で手先は出ず、四面の丸桁は柱筋に揃う。

軒は一軒平行角疎垂木で、垂木の上に広小舞と横棧を置いて垂木相互を繋ぎ、化粧裏板と布裏甲をのせる。垂木と隅木には、それぞれ大きな面取を施す。垂木は、それぞれの柱筋と心を揃えて納める。舟肘木の全長は、垂木間隔 2 枝分となる。屋根は銅板葺で、東北隅の突出部の屋根も銅板葺である。昭和 58

年(1983)に檜皮葺から銅板葺に改められたという。妻飾は木連格子で、懸魚はない。

角柱、舟肘木、隅木などは面取が大きく、江戸時代前期以前まで遡ると考えられる。

内 部 正面から奥行方向に 6 枝分の柱筋までを土間床とする。この柱筋から後方は板床を張って 1 段上げ、この土間境の中央では、床上に細長い棚を造り付ける。中央間ではフローリング敷とし洋釘で留め、両脇間ではこれに箆を敷く。

中央間では、土間境の柱筋の後方 2 枝分に幅 138 mm、面内 125 mm の面取角柱を 2 本立て、框と差鴨居で繋ぎ、仏壇の正面とする。差鴨居には 2 本溝が彫られるが、框にはこれに対応する溝がなく、内法は吹放である。これらの柱の奥行方向には、それぞれ洋釘で外側から堅板壁を張り、背面も含む内側 3 面を金箔押しとする。仏壇は、正面の框と天端を合わせて板を張り、床面から 1 段上げる。さらに、この背後の 2 通りの柱筋でそれぞれ框を渡して段を上げ、仏壇は計 3 段の構えとする。仏壇の板は、手前の段と中段は和釘で留めるが、最奥の段は洋釘で留



図 569 女人堂北側面軒まわり見上げ



図 570 女人堂妻飾



図 571 女人堂土間



図 572 女人堂中央間

める。

仏壇の中段には、両脇の壁に沿わせて径 180 mm の粽付円柱を立てる。この柱は片蓋式の半柱で、床上に径 257 mm の片蓋の木製礎盤を据えて立て、これらの柱を虹梁形頭貫で繋ぐ。柱上には平三斗組物を置き、その上に絵様繰形付の実肘木を置く。虹梁の中央には、中備として実肘木付の板臺股を据える。これらの組物と中備は、正面側のみ張り付けた片蓋形式で、背面側には現れない。正面側の虹梁より上の小壁には、琵琶板を嵌める。これらの礎盤、柱、組物、虹梁、中備、琵琶板は黒漆塗とする。背面側の小壁は、虹梁の側面に金箔押し板を打ち付ける。仏壇の正面から半柱までは、実肘木の高さで金箔押し鏡天井を張る。半柱から背面までは、鏡天井と同高で竿縁天井を張る。

両脇間の床上では、それぞれ引違の舞良戸で前後 2 室に分節する。それぞれの正面側の部屋は土間と一室空間で、竿縁天井を一連に張る。竿縁も大きな面取をとる。背面側の部屋は、北側では絨毯敷、ベニヤ板の鏡天井で、南側ではフローリング敷、竿縁

天井である。これらの背面側の部屋の背後には、1 間分の収納を設ける。

小屋 小屋組は和小屋で、棟木に「女人堂 家根替工事 昭和式拾七年」の銘を持つ屋根修理の棟札を打ち付ける（棟札・墨書 No. 34）。転用材が多く、小屋束には旧柱材、筋違や振れ止めには旧長押材、貫には決りが施された旧板壁枋材などが用いられる。現状の側柱にも、長押首切痕や貫穴痕をもつものがある。筋違や振れ止めは、洋釘で小屋束に打ち付けられる。これらの転用材や梁・桁・貫のほとんどには、多数の墨書が書かれ、年紀も散見する。最古の年紀として、「延宝四年辰ノ一月」（1676）がある。最新の年紀として、旧長押材を振れ止めとして転用したものに張り付けられた、「十四年十一月」の大阪毎日新聞がある。大阪毎日新聞は明治 21 年（1888）の創刊であるから、年号は大正か昭和となる。このほか、貫に「元禄八年」（1695）、旧長押材を振れ止めとして転用したものに「文政七申口八月」（1824）とあり、これらはいずれも落書きと思われる。これらの年紀からは、少なくとも延宝年間から戦前



図 573 女人堂仏壇



図 574 女人堂仏壇構え虹梁形頭貫



図 575 女人堂北脇間



図 576 女人堂南脇間

までは、これらの部材が小屋に転用される以前の状態で使われていたことが窺える。転用された小屋束は旧柱材とみられ、仏壇2段目中央の真上に立つ束は幅135mm、面内102mmで、現状の側柱より面取が大きく古式である。このほか、北辺など4本の小屋束も面取が大きい。

まとめ この建物は後世に数度の改造を受け、当初復原は困難であるものの、既報にて復原平面図が提示される（『和歌山県の中世未指定社寺建築』37～39頁）。中央には当初から仏壇を構えていたと思われるが、現在の仏壇は虹梁の形式から明治以降の改造と思われる。側背面の側柱は当初材が残るが、いずれも根継されるため床高などは不明である。柱痕跡から復原すると、側背面は横板壁で閉じ、中央間の後方に正側面を引違戸で間仕切る仏壇を設けたと思われる。正面の柱はいずれも後補であるが、正面に当初隅木が残るため、現状の正面側柱筋の位置は当初形式を踏襲したものである。

古写真からは、旧状を窺い知れる。明治初期頃の写真によれば、現状の土間床部分に板床が張られ、

正面の両脇間に腰板壁が張られる。中央間に腰壁はないが、この床上にも低い束を立て、横材を渡して高欄状の納まりをとる。明治中期頃の写真によれば、正面の腰壁が撤去されるも、板床や高欄状の部材は残され、中央の仏壇の正面には格子戸がみえる。大正4年（1915）の高野山開創1100年記念大法会に際して板床が撤去したらしく、この前後に撮影された写真によってそれを確認できる。改造が多いものの、現存する唯一の女人堂として、また江戸時代前期に遡る建物として貴重である。（目黒新悟）



図 577 女人堂小屋組



図 578 女人堂小屋組、襟輪欠き・釘彫りを施した長押転用材



図 579 女人堂小屋組、面取り・板決りを施した柱転用材



図 580 女人堂小屋組、貫に延宝四年の年紀をもつ落書き



図 581 女人堂小屋組、貫に元禄八年の年紀をもつ落書き

9 奥之院

(1) 沿革・配置

高野山地区の東部に位置する奥之院は、承和2年(835)に入定した空海の廟を中心とした一帯で、多数の廟墓などが建ち並ぶ。今回の調査では、建立が近世以前に遡る木造建築のうち、天正13年(1585)建立の御廟と同時の建立とみられる丹生明神社、高野明神社を除く、国指定を受けていない木造建築として、護摩堂、密厳堂、井伊直政霊屋について詳細調査をおこなった。(鈴木智大)

(2) 護摩堂 (PL.44・45)

構造形式 桁行5間、梁間5間、入母屋造、金属板葺、背面軒下を内部に取り込む。

建立年代 文化9年(1812)(棟札)

概要 護摩堂は、御廟橋の手前の、参道東脇に西面して建つ、桁行5間、梁間6間、入母屋造、金属板葺の建物である。背面の軒下を内部に取り込み、正面及び両側面に縁を巡らす。

『紀伊続風土記』によれば、性信親王(1005～1085)が参籠し、800日の護摩を修したことは始まり、その後、成賢(1162～1231)が奥之院で護摩を修したという。天文13年(1544)、天正6年(1578)に作事がおこなわれていたようである。

現在の建物は、小屋裏に保管されていた棟札から、25代住職の快昌と弟子の快圓が平野屋宇兵衛を大坂世話人として、文化9年(1812)に再建したことがわかる(棟札・墨書等No.36)。

側まわり 基礎部分は、布基礎状の低いコンクリート基礎を内外にめぐらし、外側を縁束の、内側を主屋側柱の礎石とする。主屋側柱筋より内側は自然石を礎石とする。

主屋は、円柱(粽付)を立て、切目長押(半長押付)・内法長押(半長押付)・頭貫(木鼻付)・台輪(繰形付)で固める。柱位置の台輪上には出三斗(絵様実肘木付)を載せ、丸桁を支承する。中備は入れない。足元には地覆を入れ、

床下を格子で閉塞する。

背面軒下部は角柱を立て、南北両側面は内法長押の一段上に飛貫を、北側面は地長押高さに腰貫を入れ、南側面は主屋の切目長押と一連の長押で固める。

縁は切目縁で、北側面は正面から4間目で、南側面は正面側から5間目までで止まる。

軒は二軒繁垂木だが、背面の拡張部では垂木を間引いて疎垂木としている。垂木に反り増しはなく、木口金物なども用いないが、地隅木には繰形を施し、正面側の飛檐隅木先端には風鐸を吊る。屋根は、柿葺状に金属板を葺き、背面に千鳥破風をもうけて煙出しとする。

主屋の柱間装置は正面の5間と側面の正面から1間目を半葺、側面の正面から2間目を格子戸引違、それ以外を横板壁とする。背面軒下部は、南側面と

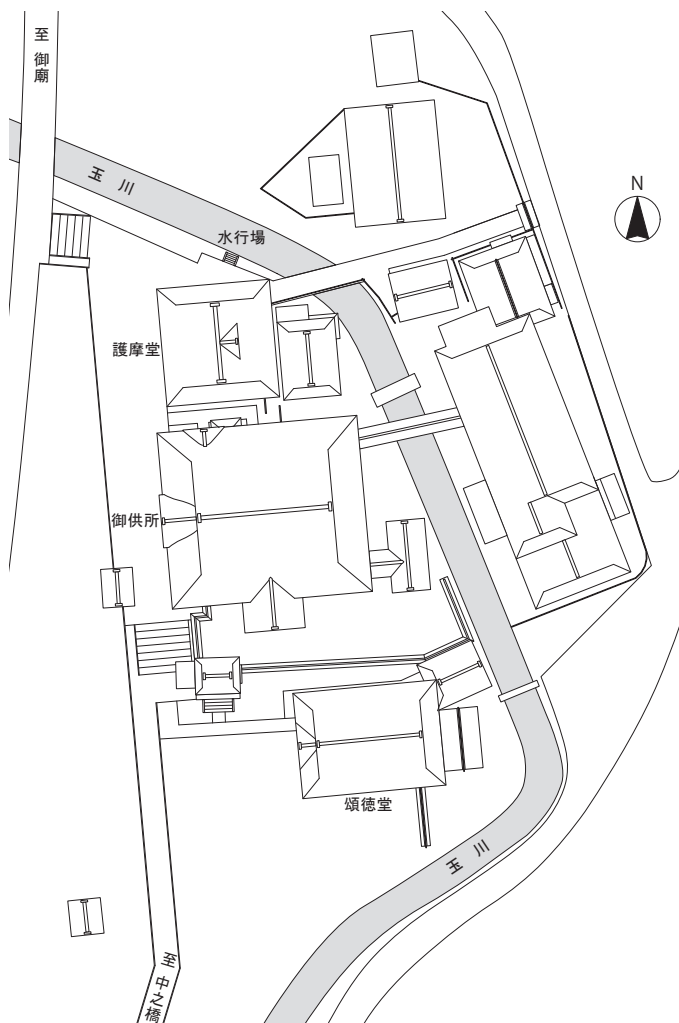


図 582 奥之院護摩堂周辺配置図 1:1000

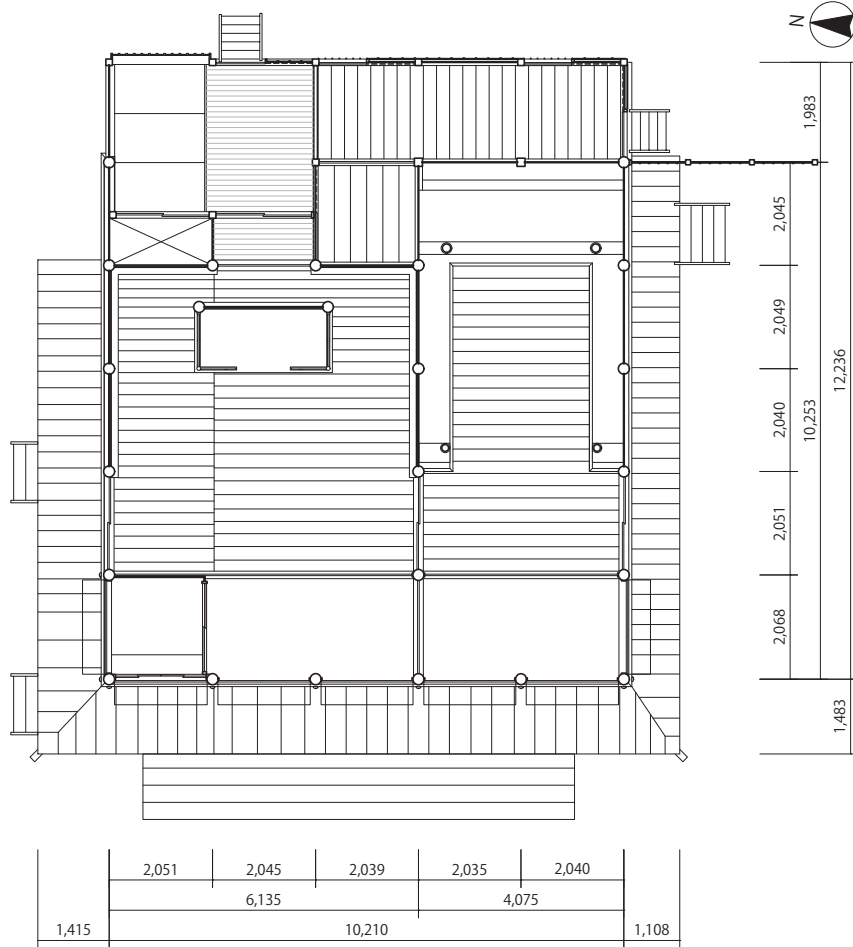


図 583 奥之院護摩堂平面図 1:150

背面と縦板壁、北側面を横板壁とし、南側面には舞良戸を開く。

妻飾は虹梁大瓶束で、虹梁は平三斗・出三斗（ともに絵様実肘木付）で支え、大瓶束には笈形・木鼻と取り付ける。破風拵みには、蕪懸魚を吊る。

間取り 外観は通常の方五間の仏堂の形式を示すのに対して、平面は特殊な構成をとる。正面側1間を外陣とし、向かって左から3間分を不動堂とし、右の2間分を大師堂とする。

不動堂 不動堂は間口3間、奥行3間の規模で、背面中央間は開放、側面は正面側1間に引違戸を入れ、それ以外を板壁とする。板壁には真言八祖と十二天を描いた襖を嵌め込み、奥行のある腰長押を打って、いわゆる八祖棚とする。八祖棚の下にも花鳥を描く。中央やや後方には、来迎柱・来迎壁を側柱と筋を違えて立てて、禅宗様須弥壇を置き、本尊の不動明王を安置する。その正面には護摩壇と礼盤を置き、礼盤上には天蓋を吊る。天井は格天井で、護摩壇上に



図 584 奥之院護摩堂北側面・背面



図 585 奥之院護摩堂南側面・背面

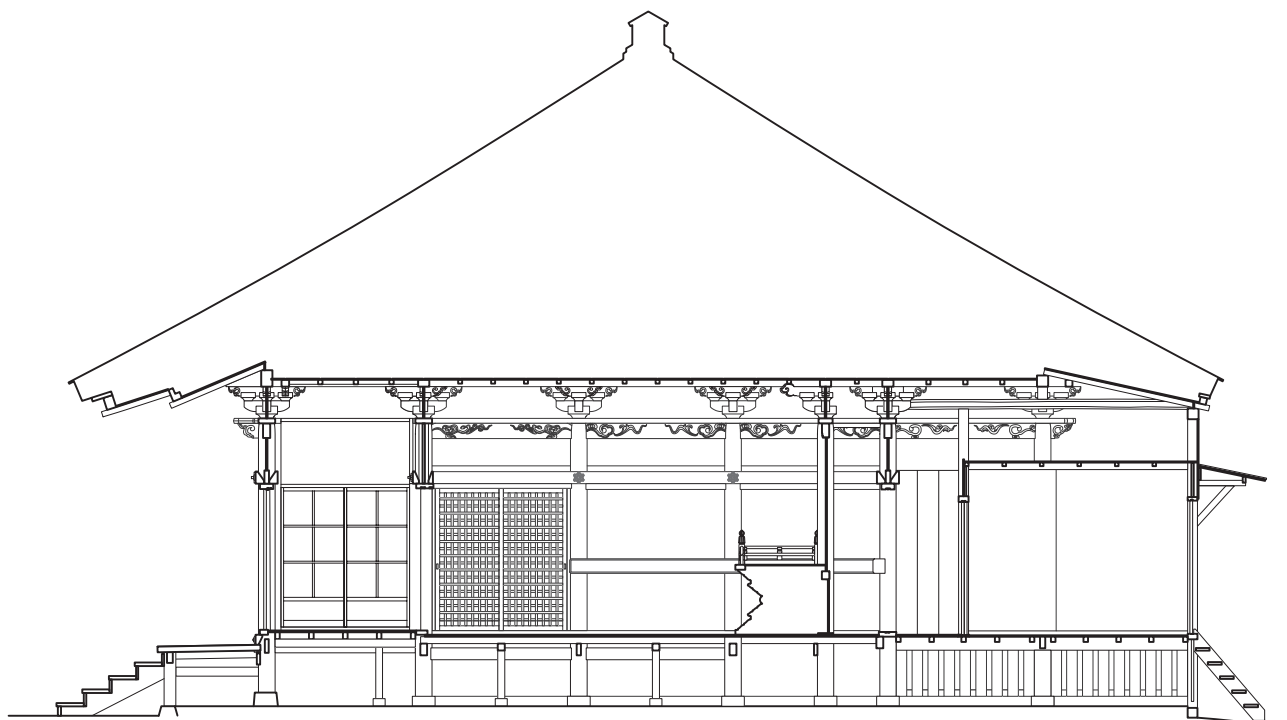


図 586 奥之院護摩堂断面図 1:100

煙出しを開く。床は拭板敷である。側まわりの虹梁形頭貫には絵様線形が施され、19世紀初期の様相を示す。

大師堂 大師堂は間口2間、奥行4間の規模で、コ

の字状に仏壇をもうけ、位牌や阿弥陀如来をはじめとする諸仏を安置する。この仏壇上には、木製礎盤が付いた細い円柱を虹梁形頭貫で固め、出三斗（実肘木付）を載せて桁を受ける。しかしこの構えは軀



図 587 奥之院護摩堂組物



図 588 奥之院護摩堂隅木



図 589 奥之院護摩堂妻飾



図 590 奥之院護摩堂不動堂須弥壇

体から独立しており、一体で計画されていないことは明らかである。護摩堂は基本的に素木だが、これらの部材には彩色が施されており、虹梁形頭貫の絵様は高野山大門の虹梁形頭貫の絵様に似る。高野山大門が宝永2年（1705）の建立であることから、この構えも18世紀前期頃とみられ、現在の護摩堂の再建より先行する。この仏壇の他にも、中央やや後方に仏壇をもうけて空海の座像を安置し、その前には壇と礼盤を置く。天井は格天井で、床は拭板敷である。

外陣 外陣は、不動堂・大師堂境の柱は省略され、敷居・鴨居が入れられるが、現在建具は取り払われている。護摩堂内は仏堂とその外陣、背面の空間からなる北側の空間と、位牌堂とその外陣からなる南側の空間に区分されていたことがわかる。鴨居上の小壁には獅子の彫刻を嵌める。

外陣北側1間に間仕切を入れて小部屋をつくり、授与所とするがこれは後の改造である。天井は格天井で、床には絨毯を敷く。

背面軒下部 不動堂の背面中央間は八祖棚の長押が切られ、開口部となる。この位置に敷居が入れら

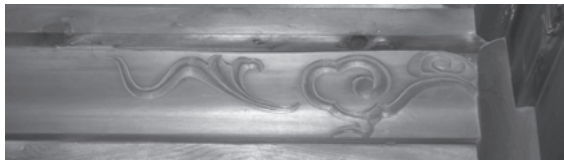


図 591 奥之院護摩堂不動堂内陣虹梁形頭貫絵様（奥寄り）

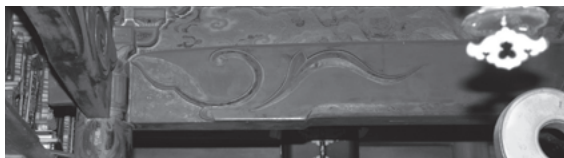


図 593 奥之院護摩堂大師堂位牌棚正面虹梁絵様



図 595 奥之院護摩堂大師堂位牌棚

れているが建具は取り払われている。本来はこの位置で仏堂とその背面の間口3間・奥行1間の空間とは区分されていたことがわかる。再建当初は物置として用いられたのであろうか。現在この空間は背面の円柱が撤去され、軒下を内部に取り込んだ部分と一体になる。そして北から2間目の位置で南北に区切られ、北は居室、南は物置として使われる。軸部は主屋よりも新しく、造作はさらに新しい。居室部分の天井は中古の棹縁天井で、床は新しいフローリングで、3枚の畳が敷かれている。

絵図に描かれた護摩堂と改修 現在、護摩堂は南北方向に走る参道に向くように西面し、南北に棟を通すが、再建間もない文化10年（1813）の「高野山細見絵図」では、護摩堂は参道に対して垂直に棟を通しており、南面する入母屋造の建物として表現し、明治33年（1900）の「高野山真景大全図」でも同様に表現される。これらの絵図が実態を反映しているかはにはわかには判断できないが、護摩堂は創建当初から明治時代後半にかけて、南面していた可能性がある。



図 592 奥之院護摩堂不動堂内陣虹梁絵様（手前寄り）



図 594 奥之院護摩堂大師堂位牌棚側面虹梁絵様



図 596 奥之院護摩堂大師堂組物彩色・板決り

護摩堂の位牌堂の仏壇上に置かれる、円柱や虹梁形頭貫・出三斗・桁の構えは納まりが悪く、絵様からしても現堂の建立の際に制作されたものではないことは明らかである。建立が先行する別の堂宇や前身堂より転用されたものとみられるが、現堂の建立当初から位牌壇の構えに組み込まれていたとしても問題はない。前身堂の部材の一部が残存し、現堂に転用されたとみるのが穏当であろう。この前身堂であるが、宝永4年(1707)の年紀のある「奥院絵図」にも現堂の位置に「護摩堂」と注記されていること



図 597 奥之院護摩堂大師堂外陣

から、少なくとも18世紀初頭には現在の位置に建てられていたとみられる。

再建当初の規模は、五間四面という棟札銘から現堂の拡張部を除いた方5間であったことがわかる。その後、背面両端を除く部分の円柱が撤去され、後方に角柱が立てられて背面が1間分拡張される。位牌堂背面の柱筋には、新たに角柱が3本補われる。仏堂背面の居室部には間柱が立てられ、収納と仏堂との間仕切がもうけられた。

授与所まわりの部材は後補であることは先述した



図 598 奥之院護摩堂背面部屋



図 599 奥之院護摩堂小屋組



図 600 「高野山細見絵図」(文化10年=1813、『高野山古絵図集成』270頁)



図 601 「高野山真景大全図」(明治33年=1900、『高野山古絵図集成』296頁)



図 602 「奥院絵図」(宝永4年=1707、『高野山古絵図集成』150頁)

が、近世社寺建築緊急調査が実施された時点では、すでに、南側にも間口1間・奥行1間の同規模の小部屋があることが確認でき、この時すでに仏堂・位牌堂と外陣を仕切る建具が撤去されている。外陣南北端の小部屋の増設にともない、手狭になった外陣まわりの建具が撤去されたと考えられる。

その後、来迎壁の背面には平成16年の年紀をもつ「全面修復」の寄進者名を記した木札が確認できる。平成3年の時点では、背面拡張部の南北は仕切られず1室であったため、2室に分割されたのはこの修理の際であろう。小屋裏の部材にも極めて新しい材が入っており、屋根まわりも大改修を受けていることがわかる。半葺の取替、内装や設備の新設、背面の千鳥破風状の煙出しの増設もこの時期とみられる。南側の小部屋の撤去の時期は不明であるが、この改修の際に同時に行われているかもしれない。

このように奥之院護摩堂は、遅くとも18世紀初頭には前身堂の存在が確認できる。この堂は何からの理由で失われ、仏壇まわりの構えのみが残された。そして、文化9年(1812)にその古材を用いて再建された後、使用の便宜のため概ね3回の改修を受けていると考えられる。

まとめ 奥之院護摩堂は、外見は方5間の通常の仏堂であるが、その内部は特徴的であり、南北2つに区分される。北側の間口3間分は不動明王を祀る仏堂とその外陣・倉庫からなり、南側の間口2間分は位牌堂とその外陣で構成される。高野山では奥之院護摩堂のほかにも、2棟の仏堂を連結させたような平面をとるものや、本堂に位牌堂を連結するものが見られるが、護摩堂は比較的早い先駆的な存在といえよう。仏堂内部に八祖棚をもうけ真言八祖・十二天を祀るのも、他の高野山の仏堂に共通する点である。また位牌堂の仏壇まわりの構えは現護摩堂よりも古く、前身堂のものを転用した可能性も考えられる。

特徴的な平面を5間堂の規模に納めている点や、2つの堂から構成される建物の早い例である点、古い堂の一部を内包している点で、奥之院護摩堂は高い価値をもつ建築と評価できるだろう。(山崎有生)

(3) 密厳堂 (PL.45・46)

構造形式 正面3間、両側面・背面2間、宝形造、檜皮葺(銅板仮葺)

建立年代 寛文11年(1671)(棟札)

沿革・配置 奥之院密厳堂は、高野山に大伝法院と密厳院を創立し、金剛峯寺の座主にもなった後、高野山を追われ、根来寺を開いた興教大師覚鑊(1095～1143)を祀る堂宇で、「覚鑊堂」とも呼ばれる。奥之院中之橋を渡り御廟へと向かう参道の南側に位置し、石垣で築いた平坦地に北面して建つ。建物は、方2間、宝形造、檜皮葺(銅板仮葺)で、露盤宝珠を頂く小規模な堂宇である。石垣前の参道は43段の石段になっており、この坂は「覚鑊坂」と呼ばれる。覚鑊坂から石垣上の平坦地までは石階8級を設ける。平坦地では、建物の正面に植わる杉をよけながら、石階から基壇までを切石布敷で舗装する。現在の建物は、小屋組隅木に打ち付けられた棟札から寛文11年(1671)の建立とわかる。

宝永4年(1707)作成の「奥院絵図」では、入母屋造、妻入で、北面する「覚鑊堂」が描かれているが、他の建物の描写からみて、必ずしも実際の建物の形状をあらわしてはいない。

基壇・基礎 基壇は低い切石積で、平坦地より1段上げる。基壇の上面は切石布敷で、四周には、切石の側石と自然石の底石からなる雨落溝を巡らし、正面の扉口前には、雨落溝上に蓋石を渡す。基壇上面には、扉口の前に低い沓脱石と香炉を置く。礎石は切石で、地長押の下にも切石の地覆石を並べる。

平面 方2間の堂宇であるが、正面では中央に柱が立たず扉口を設け、扉口の両脇に角柱を立てる。



図603 「奥院絵図」(宝永4年=1707、『高野山古絵図集成153頁])

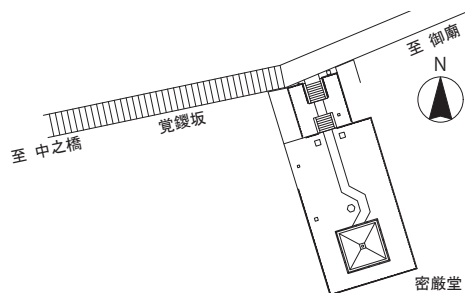


図 604 奥之院密厳堂配置図 1:1000

建物内部は一室空間で、後方側に4本の円柱を立てた厨子を設け、本尊として覚鑊大師を祀る。

総間は、正面が2,730 mm、側面が2,720 mmで、各面ともに9.0尺と思われる。各面ともに、総間を28枝に割り付け、一枝寸法は約97mmとなるが、寸尺単位の丸まった寸法とならない。総間を尺の完数に設定した後、従属的に垂木割を決めたものと思われる。

軸部 軸部は、径222 mmの粽付をもつ円柱を立て、地長押、半長押、腰貫、内法長押、木鼻付頭貫、木鼻付台輪で固める。正面のみ、頭貫を虹梁形とする。虹梁形頭貫の絵様は、3筆の袖切で木瓜形の渦を描き、3葉の若葉が付く。彫りには鏝をつけ、幅は広い。棟札にある17世紀後期においては、先進的な様相と考える。

組物 組物は出三斗で、絵様繰形付の実肘木を介して丸桁を支持する。各円柱上のほかに、正面の中央2箇所にも置かれ、正面は3区に分けられる。中央2箇所の組物は、角柱心より内側に置かれる。これは、隣接する隅の実肘木との干渉を避けるためと思われる。丸桁と同高の隅行方向には、絵様繰形付の木鼻が出て地隅木を支える。ここに実肘木はなく、巻斗よりひとまわり大きい延斗が木鼻を受ける。丸桁は隅で組んで木鼻が出るが、隅以外の組物でも、丸桁と同高で木鼻が出る。これらの木鼻の側面には、



図 607 奥之院密厳堂隅木

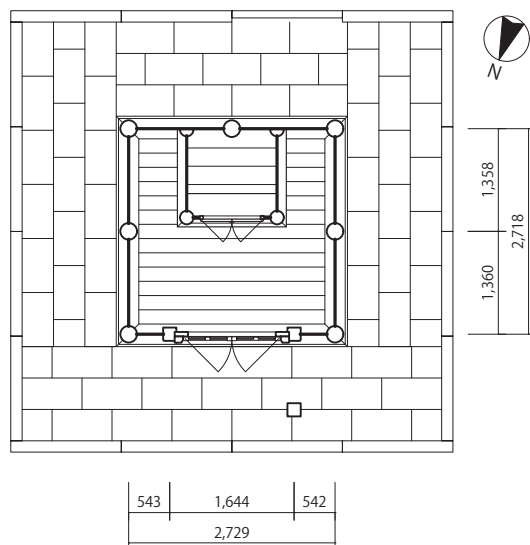


図 605 奥之院密厳堂平面図 1:100

板彫刻を張る。組物間は、彫刻で埋める。

建物の内部では、内側に引き込んだ巻斗に通肘木を渡して、組物相互を繋ぐ。隅では、この巻斗を鬼斗にして、通肘木を受ける。側柱筋の実肘木と手先の通肘木の間には、小天井板を張る。両側面中央の組物は、双方の二の肘木を繋肘木にして、対辺間を結ぶ。通肘木と繋肘木が、天井桁となる。

軒まわり 軒は二軒繁垂木、茅負、布裏甲である。



図 606 奥之院密厳堂背側面



図 608 奥之院密厳堂軒下見上げ

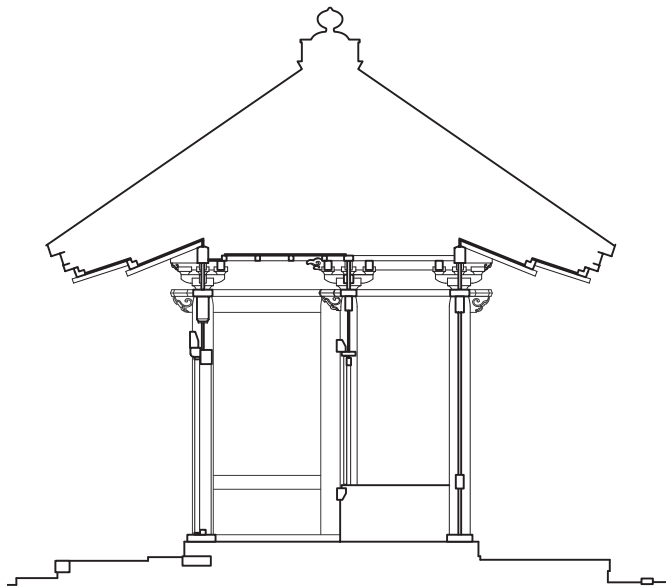


図 609 奥之院密厳堂断面図 1:80

茅負には眉が付く。正面の組物の中央間は11枝、その両脇間は各8枝半で割り付けられる。正面では、垂木は側柱筋を手挟むように配置され、中央2箇所組物とは心揃えて納まる。正面以外の各面では、各柱間が14枝で割り付けられ、垂木は各柱上を手挟むように配置される。六枝掛が成立している。隅では、側柱筋から7枝半で論治垂木に納まる。

小屋 繫肘木と筋を揃えて、丸桁に両側面の対辺間を結ぶように梁を架ける。梁の上の中央には、隅行方向に正対するように棟束を立てて、棟束に地隅木尻を挿して押さえる。隅木間には、各面と平行に垂木掛を渡して地垂木尻を納める。西南地隅木の東側面には、棟札が上下2箇所の和釘で留められ、打ち替えの痕跡はない。棟札には、「奉再興密厳堂一字」「寛文十一年」と記される（棟札・墨書等 No. 35）。

造作 床は拭板敷で、天井は格縁天井である。天井は、天井桁に唐戸面の格縁を渡し、繫肘木の手前では東西が6区、南北が3区に割られる。ただし、繫肘木の奥では、厨子両脇の見付が狭くなるため、各区の見込は見付にあわせて縮小され、南北が4区に割られる。なお、厨子東脇は、現状で天井が滅失しているが、天井当たり痕から、もとはここにも天井が張られていたことがわかる。

柱間装置は、正面の中央間が扉口、両脇間の内法の腰貫上が竪板壁、腰貫下が横板壁である。正面以

外の各面の内法及び全面の内法長押と頭貫間の小壁は、いずれも横板壁である。内法の板壁は、上部に楣をまわしておさえる。正面の扉口は、両外開きの連子窓付棧唐戸である。扉口には、角柱の内側に幣軸と蹴放をまわし、扉軸の上部は幣軸で、下部は半長押で吊る。

正面の中央には、「密厳堂」銘の縦の扁額を内法長押に架け、上部を地垂木から金物で吊る。前面には、地垂木から金具で鰐口を吊る。

厨子 軸部は、径180mmの粽付をもつ円柱を立て、腰長押状の框、内法長押、木鼻付頭貫、木鼻付台輪で固める。背面側の2本の円柱は片蓋状の半柱で、背面の板壁に沿う。

組物は出三斗風の一手先で、手先に通肘木を渡して組物相互を繋ぐ。本宇の両側面の対辺間組物を繋ぐ繫肘木が、厨子正面の手先の通肘木となる。厨子正面の壁付通肘木及び厨子両側面の壁付通肘木と手先の通肘木は隅で組んで納め、木鼻に絵様繰形を施す。中備は板臺股である。

柱間装置は、正面が扉口で、それ以外の各面が横板壁である。扉口には、闕、鼠走、蹴放、楣、方立をまわし、端喰を用いた両外開き板唐戸を設ける。扉軸は、闕と鼠走に軸摺穴を彫って吊る。板唐戸の内側では、方立の上部に花頭枠をのせ、花頭口とする。框下の全面及び内法長押上の両側面の小壁には、横板壁を張って閉塞する。正面の内法長押上には、彫刻欄間を嵌める。

床は、框上に拭板敷で張られる。この上に和様仏壇が設けられ、興教大師像を安置する。厨子内には天井を張らず、本宇の格縁天井が現れる。

厨子の下は、床の一部を張らずに、地面に石槨を据える。石槨は、近年の修理によると思われる比較的新しい石材を用いているものの、金剛峯寺真然堂の前身が陵墓であったことを想起させる。

彩色 外部では、頭貫木鼻・台輪木鼻・組物・丸桁の木口面や、頭貫形虹梁の絵様、眉、袖切に赤色塗装を確認できる。このほか、丸桁と同高の木鼻側面の板彫刻当たり面にも、赤色塗装を確認できる。もと、外部の主要木部には赤色塗装が施されていたと考えられる。地垂木と飛檐垂木の木口面と布裏甲

には、白色塗装を確認できる。また、地垂木と飛檐垂木の側面や底面の一部でも、白色を部分的に確認できる。これは絵具の変色によるものと思われる、もとは赤色塗装が施されていたと考えられる。

堂内は建物自体は素木で、厨子は全体に黒色塗装を施す。黒色塗装は、正面側は塗り直しているが、両側面や正面から見え隠れ部分には塗り直しがなく、痕跡が残るのみである。木鼻・臺股・花頭枠の絵様や面取などには、赤色塗装を施す。彫刻欄間は、赤・緑・白色塗装などを題材にあわせて塗布する。

改 造 側まわりの円柱腰貫下には、建物内側の横板壁に沿って埋木を施す。埋木はビスないし洋釘で固定されており、腰貫下に入る横板壁の取り替えにともなうものと考えられる。この横板壁は、他の板壁や腰貫と風食が同程度であるから、板壁と腰貫はいずれも後補材と考えられる。

正面西側の角柱の東面と南面、正面西脇間の半長押と正面西側の棧唐戸軸摺部に、火災痕跡が残る。正面中央間の半長押、幣軸、蹴放は、焼損後に交換された。



図 610 奥之院密厳堂厨子

棧唐戸は、幣軸と半長押に洋釘で藁座を取り付けるが、当初は幣軸と半長押それぞれに軸摺穴を彫ったと思われる。棧唐戸には火災痕跡が残るが、風食からみて後補材と思われる。

軒まわりは、地垂木から上はいずれも新しく、隅木間に渡される東面の地垂木掛の南端には、Southを意味すると思われる「S」の墨書があり、近代以降の修理とみられる。丸桁や隅木との納まりから、垂木割は当初の形式を踏襲していると考えられる。
まとめ 密厳堂は、小規模な二間堂でありながら、建物、厨子ともに出三斗をもつ本格的な造りの霊屋である。本宇と厨子とが一体的に造られた事例として興味深い。

精巧な全体の構造をもち、組物間を彫刻で埋め、丸桁木鼻の側面に板彫刻を張る珍しい技法で、華やかさを備える点が特徴的である。立地条件からか、主要な軸部や組物を良好に保ち、当初材をよく残し、全体的な傷みや改造も少ない。棟札から建立年もあきらかで、高野山における絵様の年代指標になりうる点でも貴重である。
(目黒新悟)



図 611 奥之院密厳堂厨子見上げ



図 612 奥之院密厳堂小屋組、隅木棟札打ち付け



図 613 奥之院密厳堂正面内側焼損痕跡、隅柱埋木

(4) 井伊直政霊屋 (PL.46)

構造形式 正面3間、両側面・背面1間、入母屋造、銅板葺

建立年代 17世紀後期(技法・意匠)

概要・構造形式 井伊直政霊屋は、奥之院参道の中之橋を御廟に向かって進んだ、北側斜面地中腹に南面して建つ、初代彦根藩主・井伊直政をまつる宝篋印塔をおさめる霊廟である。宝篋印塔には「井伊待従政直」と「慶長七年」の刻銘をもつ。ただし、これは井伊直政の没年であり、宝篋印塔の建立年代を示したものとは限らない。建物の建立年代を判断する材料が極めて限られているが、頭貫木鼻の絵様などの様式や部材の風食などから17世紀後期の建立とみる。

桁行3間、梁間1間、切妻造、銅板葺、正面軒唐破風の小規模な霊廟建築である。背面は桁行1間で、扉口を設けない。正面及び側面の三方に切目縁をめぐらし、正面中央に3級の木階を設ける。

宝永4年(1707)の「奥院絵図」では、入母屋造、平入で正面に向拝をもつ建物2棟が描かれ、近くに「井伊掃部頭」の注記がなされており、現在の形状と



図 615 「奥院絵図」(宝永4年=1707、『高野山古絵図集成 153頁])



図 616 奥之院井伊直政霊屋背側面



井伊直政霊屋

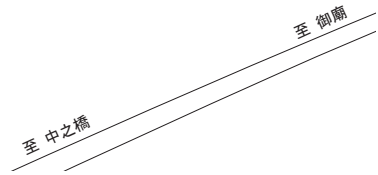


図 614 奥之院井伊直政霊屋配置図 1:1000

大きく異なる。密厳堂と同じく絵図に描かれた建物の精度はそれほど高くはないと考えられる。

柱間寸法と計画 総間は桁行総間3,134mm、25枝、梁間2,039mmである。正面中央間は軒唐破風だが13枝相当、正面両脇間を各6枝で割り付けており、1枝寸法は約125mmである。

基壇・基礎 建物の周囲に切石の見切石を廻らし、周囲より高くする。建物の土台の下には地覆石をめぐらす。多くが自然石であるが、一部に切石を使う。

軸部 軸部は、径239mmの粽付きの円柱を土台の上を立て、切目長押、内法長押、木鼻付の頭貫、台輪で固める。軸部の樹種はヒノキとみられる。頭貫の木鼻は下巻円形の繰形を施し、17世紀後期頃の様相を示す。正面中央間と側面の虹梁には、袖切、鯖尻、眉欠の装飾を施す。正面中央の柱に取付く木鼻は象の丸彫で、唐破風を支える菖蒲桁の先端を下げて、垂木の先端下端と高さを合わせる。



図 617 奥之院井伊直政霊屋正面軒下

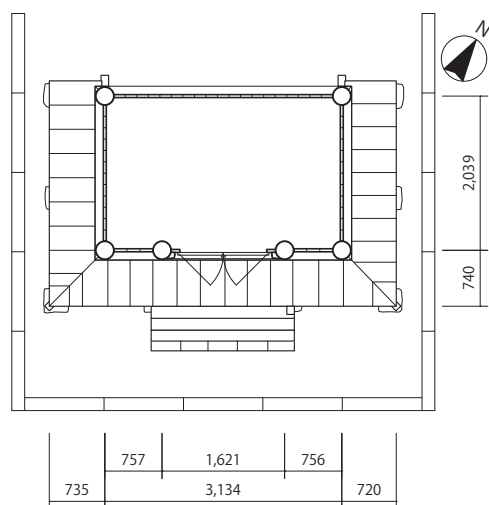


図 618 奥之院井伊直政霊屋平面図 1:100

組物・中備 組物は出三斗で実肘木を介して桁梁を受ける。中備は、各面中央に臺股を1つずつ据え、巻斗、実肘木を載せる。臺股の彫刻は、正面が「牡丹と獅子」、側面が「牡丹と鳥」、背面が井伊家の家紋である橘の紋である。

軒・屋根 軒は一軒、繁垂木で、垂木の断面は角形である。垂木は、正背面の桁位置で勾配を変え、軒反りを強くする。

妻飾 妻虹梁の上に大瓶束を載せ、東頂部では3方向に木鼻を出し、大斗と実肘木を介して棟木を受ける。正面の唐破風には鱗のある猪目懸魚を吊り、側面の破風板には拝懸魚・降懸魚ともに鱗をもつ三花懸魚を吊る。

柱間装置と内部 柱間装置は、正面中央間が幣軸付の両開き棧唐戸、面両脇間と側背面が、五輪塔を模した卒塔婆形の豎板張とする。五輪塔の空輪から



図 621 奥之院井伊直政霊屋組物

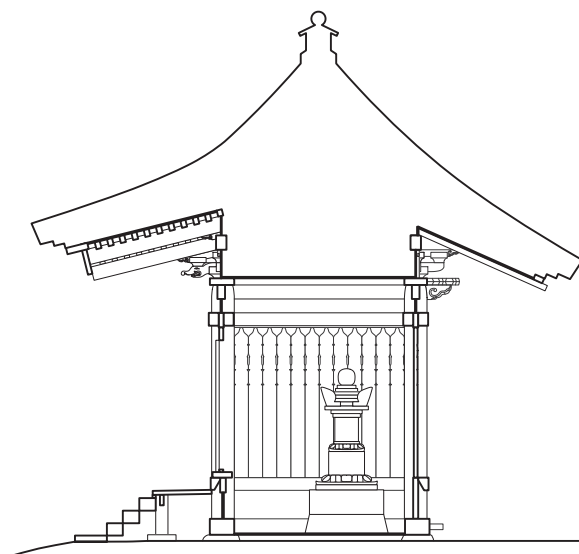


図 619 奥之院井伊直政霊屋断面図 1:80

水輪にあたる箇所には梵字を、地輪にあたる箇所に「為泰安大居士」と井伊直政の戒名を記す。床は、幅約95mm、長さ約855mmの切石を布敷とする。天井は板張りとする。

塗装・彩色 柱の外部は赤色塗装を施し、柱上部のみ青色塗装が確認できる。板壁も赤色の塗装を施



図 620 奥之院井伊直政霊屋妻面見上げ



図 622 奥之院井伊直政霊屋卒塔婆型壁面（西・東脇間）

すが、五輪塔の風輪・水輪に該当する部分には白色の塗装が認められる。組物は、大斗・卷斗の斗線に花卉模様の彩色を施し、斗の上部に白色と青色を用いた纏綯彩色を施す。垂木には赤色塗装を施し、長押には花菱文様、頭貫には波模様を描く。内部は、腰貫、堅板壁、琵琶板、天井板を白色塗装し、板壁には蓮の花、天井中央には大きく橘紋を描く。内法貫、頭貫は赤色塗装を施す。

改造 柱に根継がみられ、正面の野地板は昭和期以降に修理されている。

破損状況 建物全体に著しい破損がみられる。軸部では背面柱の足元及び土台が腐朽しており、正面の軒唐破風の銅板葺は一部が剥がれ落ちている。縁の崩壊も甚だしく、一部の束は浮いている。特に、西南隅の縁束を失うなど、西面の縁はほとんど崩壊している。正面木階の1段目も崩壊している。さらに周囲の見切石も散乱している。

まとめ 宝篋印塔の覆屋として建てられたであろう小規模な建築であるが、堅板壁を卒塔婆形とする特異な意匠や、各面で異なった彫刻を施す臺股など、丁寧に仕事になされ、纏綯模様の彩色や、内部の蓮、橘紋の模様からは、往時の華やかさが窺える。建立年代は明確でないものの、様式的に17世紀後期の建立とみられ、奥之院の既指定の靈廟と並ぶ貴重な靈廟建築といえるだろう。軸部や屋根を含め崩壊が甚だしく、早急な修理が求められる。(高野 麗)

主要参考文献

公益財団法人元興寺文化財研究所『高野町文化財報告書 第8集 史跡金剛峯寺境内(奥院地区)大名墓総合調査報告書1』(高野町教育委員会、2019年)。



図 623 奥之院井伊直政靈屋内部

10 円通寺

(1) 沿革と配置

沿革 円通寺は、蓮花谷の熊谷寺から南方へ約600 m山道を進んだ先に位置する。『紀伊続風土記』では、開基を智泉とし、重源が中興したとする。

『高野春秋』によれば、慶長17年(1612)9月に、嘉禎年間(1235～1238)以降には訪れる人もおらず、廃墟となっていたところ、山口重政が玄俊律師と再興を図り、元和5年(1619)9月に大成し、俊賢房良永を住職にしたという。

文化10年(1813)刊行の木版画「高野山細見絵図」では、宝形造で正面に向拝をもつ仏堂、矩手に折れる坊舎、入母屋造の竜宮門形式の表門が描かれ、天保9年(1838)に刊行された『紀伊国名所図会』の「別所円通寺」の項に収録される鳥瞰図には、宝形造、正面に向唐破風の1間向拝付の仏堂、入母屋造の坊舎、両者を連結する廊下、初重を塗り籠めた、むくりをもつ寄棟造の楼門、仏堂背面の小山上に宝形造の小堂、坊舎の背面には寄棟造もしくは切妻造の小堂が描かれている。境内の主たる建物の構成は、現在と同じだが、屋根形式などの描写には違いがみられる。これが各時代の建物の違いをあらわしているのか、あるいは各図の描写の精度に起因するか、判断はし難い。また『続風土記』(1839年)の「円通寺」の項は、本堂・坊舎・鐘楼門・宝庫・鎮守社・所化寮が建つとする。

伽藍配置 境内は西面から北面に山を背負い、南面には、川が東流する。境内の東面に袖塀の付いた山門が開く。山門をくぐった正面奥に本堂が東面して建つ。本堂の北東方に庫裏が南面し、本堂の南東方には土蔵が北面して建つ。本堂の背面南寄りには廊下を介して、瑜伽道場が接続する。本堂の北方、客殿の西方には園池がある。この園池は山裾の集水を兼ねたものと思われる。本堂背面の山の中腹には求聞持堂が東面して建つ。(鈴木智大)

(2) 本堂 (PL.47～49)

構造形式 方5間、宝形造、銅板葺、正面3間向拝付

建立年代 19世紀前期(技法・意匠)

概要 円通寺本堂は山門を潜った正面の奥に東

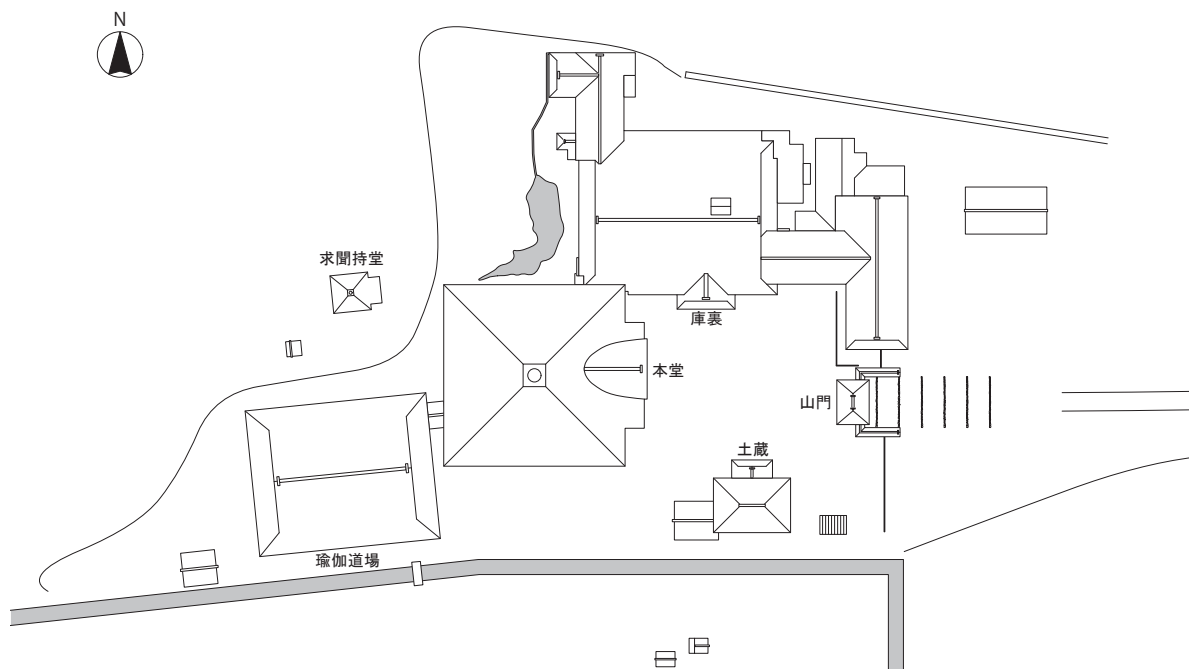


図 624 円通寺配置図 1:1000

面して建つ正面5間・側面5間の宝形造銅板葺で、正面に3間の軒唐破風付の向拝をもつ大型仏堂である。四周には切目縁をめぐらし、北側面は下屋を設けて内部に取り込む。背面にのみ後補の高欄をつける。背面南寄りには、本堂の南西方に建つ瑜伽道場



図 625 「高野山細見絵図」(『高野山古絵図集成』270頁)

へと繋がる廊下が接続する。北側面の下屋の内部は関伽棚とする。

建立年代 本堂の建立年代を示す史料はなく、小屋裏では棟札や建立年代を示す墨書も確認できなかった。円通寺本堂の虹梁形頭貫の絵様は、若葉に芽

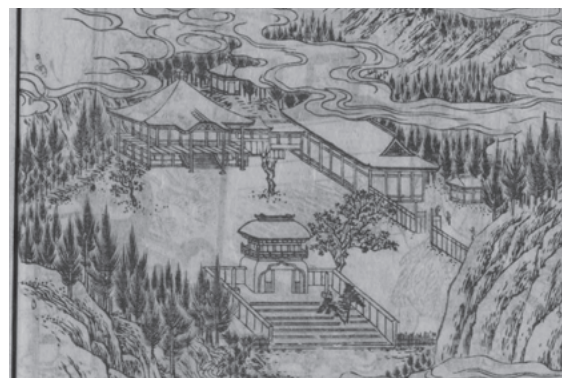


図 626 「別所円通寺」(『紀伊国名所図会 三編六之巻 高野山』国立国会図書館蔵)



図 627 円通寺本堂正側面側まわり



図 628 円通寺本堂北側面

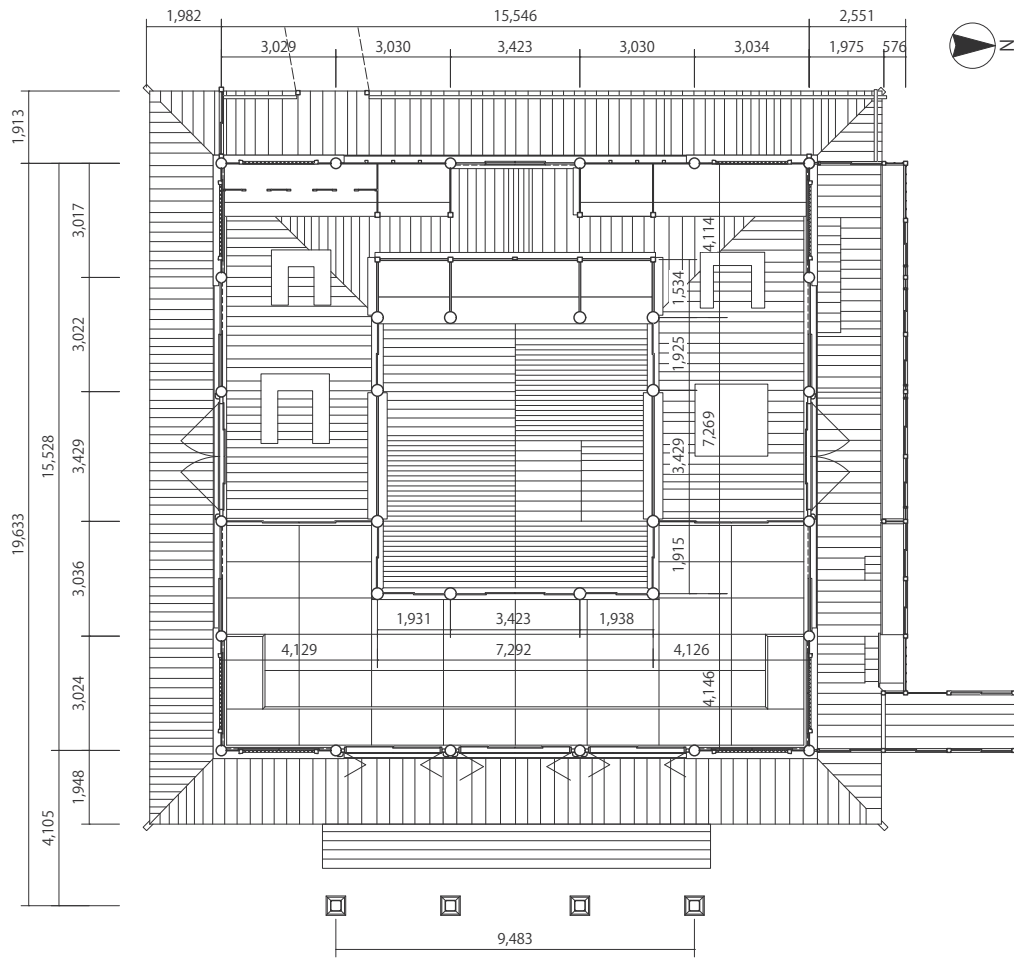


図 629 円通寺本堂平面図 1:200

が付けられ、渦の下部に小さな渦がみられるのが特徴である。この芽・小渦は勸学院本堂、壇上伽藍山王院拝殿や愛染堂など、19世紀前～中期建立の建物にみられる。よって、本堂の建立年代は、後述する山門と同時期の19世紀前期とみておきたい。

側まわり 緩やかに土を盛った上に自然石の礎石を据える。礎石の上に、粽付の円柱を立て、地覆長押・切目長押（半長押付）・腰長押・内法長押（半長押付）・頭貫（木鼻付）・台輪（繰形付）で固める。地覆

長押と床組の間には格子を入れて閉塞する。

組物は絵様実肘木付の出三斗で、中備は絵様実肘木付の簀束である。軒は二軒繁垂木で、反り増しはない。飛檐隅木には風鐸の吊金具が付くが、風鐸自体は欠失している。屋根の頂部には露盤・宝珠を上げる。銅板の下には檜皮が確認でき、檜皮葺の屋根の上に銅板を葺き重ねたか、葺下地に檜皮を使っている可能性がある。

柱間装置は、正面中央3間を中折れの板扉（幣軸



図 630 円通寺本堂背面



図 631 円通寺本堂隅木

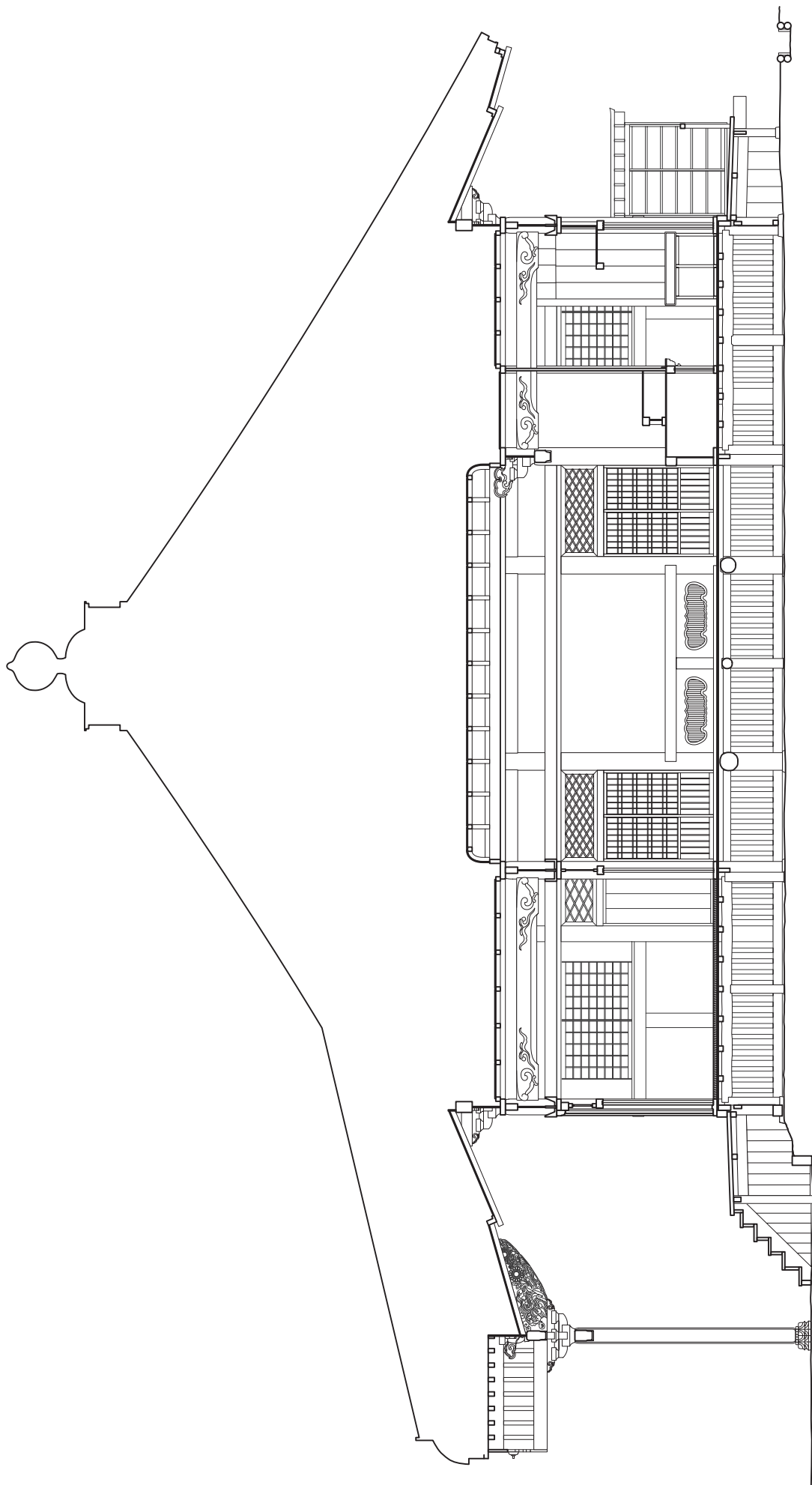


图 632 円通寺本堂断面图 1:100

付)とし、両端間を連子窓とする。板扉の内側は明障子で、鴨居上に菱格子を入れる。両側面は、中央間を幣軸付の板扉とし、両脇間を引違い板戸と菱格子とし、両端間を連子窓とする。両側面の内側には、明障子を中央間で4枚、脇間では1枚入れる。背面は、中央間を引違いの板戸、両脇間を縦棧を入れた横板壁、両端間を連子窓とする。中央の板戸内側には明障子を4枚入れる。

向 拝 向拝は3間で、切石礎石の上に木製礎盤を据え、上下に粽を付けた几帳面取角柱を立て、木鼻付の虹梁形頭貫で固める。柱筋は主屋正面中央3間と揃う。柱上の組物は絵様実肘木付の出三斗で、両端は連三斗につくる。主屋と向拝柱を直接繋ぐ材はなく、手挟みで納めている。軒は主屋の飛檐垂木を打越垂木として、二軒繁垂木とする。屋根は主屋から縄破風で葺き下ろし、中央間に軒唐破風を付ける。唐破風直下の桁のみ虹梁形につくり、木鼻付の大瓶束を載せ、菖蒲棟をうける。虹梁形の桁の下面と中央間両端の出三斗には小壁を入れる溝があり、当初は彫刻などが入れられていた可能性がある。両

端間にはこのような痕跡はない。

彫刻は向拝部分に集中している。木製礎盤には逆蓮の彫刻を施し、虹梁形頭貫の端部の木鼻は獅子の丸彫りとする。手挟みは波を基調として、菊・牡丹・蓮・岩などを彫る。軒唐破風には、波・菊を彫った鱗を持つ兎の毛通しを懸けている。そのほか、虹梁形の桁、虹梁形頭貫・木鼻・台輪・実肘木・大瓶束に線形を施し、向拝の虹梁形頭貫の下部には錫杖彫を施す。

柱配置と平面構成 円通寺本堂の平面は、側柱を方5間、入側柱を方3間で配置する。各面の中央間は側柱筋と入側柱筋を揃えるが、他の柱筋は揃わない特異な柱配置となる。円通寺では、方3間の空間をナイジン（以下、内陣とする）と呼ぶ。内陣は背面寄りに仏壇を構え、柱筋から突出する。

側通りは側面中央間東の柱筋に、明障子を建て込み、前後に2分割し、背面寄りの空間は両脇間に仏壇を構え、北には不動明王を、南には阿弥陀如来を祀る。内陣仏壇の背面にあたる空間も、両脇間から端間の背面側に位牌壇を設けている。円通寺では、



図 633 円通寺本堂向拝見上げ



図 634 円通寺本堂向拝手挟み



図 635 円通寺本堂向拝虹梁形頭貫絵様



図 636 円通寺本堂内陣虹梁形頭貫絵様

外周部のうち正面寄りの空間をゲジン（以下、外陣とする）、背面寄りの空間、北側をフドウドウ、あるいはオフドウサンノマエ（以下、不動堂とする）、南側をアマダドウ、あるいはアマダドウノマエ（以下、阿弥陀堂とする）、内陣仏壇背面の空間をウラドウ（以下、裏堂とする）と呼称する。

内陣を取り巻く外周部は、通常の方3面の堂の四面に廂をもうけた場合に比べ、内陣の外周部を広くとる。中央間以外の、側柱と入側柱の柱筋が合わなため、中央間の柱筋と隅に、側柱と入側柱を繋ぐ虹梁形飛貫を入れて固めている。

寸法計画 側まわりの柱間寸法は中央間がやや広く、3463mm（約11.4尺）、それ以外が約3036mm（約10尺）ほどである。枝数は中央間が14枝、それ以外が12枝で、それぞれの1枝寸法は247mm、253mmとなり、中央間の1枝寸法が他の柱間と異なる。側まわり総間は51.4尺となる。

内陣は中央間が3463mm（約11.4尺）、両端間が約1915mm（約6.3尺）で、端間の寸法を1とすると、中央間の寸法は1.8である。内陣総間は24尺となる。



図 637 円通寺本堂向拝柱礎石・礎盤

内陣 内陣は方3間の規模で、正面・両側面では、円柱を内法長押（半長押付）・頭貫・台輪で固め、台輪の上に直接天井桁を載せる。天井は折上格天井とする。正面の柱間装置はすべて引違の明障子とし、側面は端間を引違の明障子、中央間を壁とする。側面中央間は奥行の深い腰長押を打ち、いわゆる八祖棚とし、腰長押上の壁面に真言八祖像を描く。床は朱塗りの拭板敷で、側面中央間から正面にかけて、正面中央を除いて畳を追いまわしに敷く。

内陣背面寄りには仏壇をもうけ、その正面となる箇所は内陣柱を仏壇の框を兼ねた腰長押と虹梁形頭貫で固め、柱上には絵様実肘木付の出三斗を載せて天井桁をうける。仏壇は柱位置で3間に割り、円柱の柱筋よりも奥にさらに框を打って2段とし、中央に釈迦如来・文殊菩薩・地藏菩薩・聖観音を、向かって左に薬師如来と五大虚空蔵菩薩を、向かって右に弘法大師を安置する。仏壇背面には角柱を立てる。

内陣仏壇まわりでは、虹梁形頭貫・框・束・格狭間などを黒漆・朱漆・金箔などで塗装する。内陣中央には壇・礼盤・脇机。馨を置き、壇の上には天井



図 638 円通寺本堂内陣仏壇構え



図 639 円通寺本堂裏堂

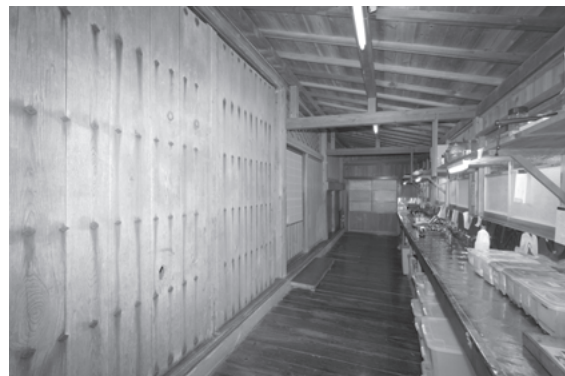


図 640 円通寺本堂北側面下屋

から天蓋を吊るす。

外陣 外陣の天井は不動堂及び阿弥陀堂と一連で格天井とし、床には畳を敷き詰める。しかし、現在は不要な框がめぐっており、その位置から、かつては拭板敷の一部に畳を追いまわしに敷いていたものとみられる。安置仏や絵像などはなく、中央に天蓋が吊られる。また、内陣正面中央間の外陣側には「常寂光」と書かれた扁額を配置している。

阿弥陀堂及び不動堂 阿弥陀堂及び不動堂は、拭板敷で、背面側柱筋の手前で角柱を立て、框を打ち、内陣のような2段の仏壇をもうける。

阿弥陀堂の仏壇では、上段の壇の奥に片蓋の角柱を立て、縦板壁を入れ、阿弥陀如来・重源大徳・山口重政の像を安置し、これらの前面を華頭窓風の開口部につくる。仏壇の框・束・下段の羽目板・段上の柱・華頭窓の窓枠・飛貫などを黒漆・朱漆塗とし、上段の羽目板や下段の羽目板の格狭間に金箔を押す。南脇陣の内陣側は、明障子以外の位置で幅広の長押を打ち、八祖棚と同様の構えとし、十二天のうちの6尊と金剛薩多菩薩の絵像を祀る。阿弥陀堂の中央奥には壇・礼盤・脇机・馨を、中央手前には壇・礼盤・脇机を置く。

不動堂の仏壇まわりの構えは基本的に南脇陣と同様であるが、縦板壁や華頭窓はない。上段の壇に不動明王を祀る厨子と虚空蔵菩薩を祀る厨子、愛染明王を祀る厨子を安置する。側面は南脇陣と同様に八祖棚の構えとし、十二天のうちの6尊と地藏菩薩を祀る。内陣中央奥には、壇と礼盤・脇机2基を置き、その手前には護摩壇を置く。

裏堂の中央間は扉口だが、その上に棚を備え付け



図 641 円通寺本堂小屋組

て四面を開放した宮殿を置く。それ以外は2段の仏壇の上に棚を備え付け、位牌壇の構えとする。仏壇の背面にあたる壁面には8幅の僧侶の絵像を祀る。

近年の改修 平成期には大規模な修理をおこなっており、小屋組の補強、天井板や天井板の取替え、床や正面木階などの補強が施されている。

重源の別所建築 円通寺は重源によって中興された別所である。同じく重源によって建設された別所の建築である浄土寺浄土堂は方3間で柱間寸法が20尺で、総間は60尺となる(『国宝浄土寺浄土堂修理工事報告書』1959年)。また新大仏寺では伊賀別所の阿弥陀堂とみられる方3間の堂の遺構が確認され、柱間寸法は中央間が20尺で脇間が15尺、すなわち総間は50尺と推定されている(荒木伸介・田中淡・樋口徹『伊賀新大仏寺発掘調査報告書』新大仏寺、1979年)。いずれも、総間の規模が、円通寺本堂の規模に近似する。さらに、円通寺の内陣の総間(24尺)は、浄土寺浄土堂の入側柱間長さ(20尺)や伊賀別所阿弥陀堂の入側柱間長さ(20尺)に近似する。

重源の著した『南無阿弥陀仏作善集』には高野新別所の建物として、「一面(衍)間四面小堂一字」を挙げている。現在の本堂の前身となる仏堂と捉えても矛盾はない。その仏堂の規模は不明であるが、浄土寺浄土堂、伊賀別所の阿弥陀堂とほぼ同規模であったとすると、現在の円通寺本堂の内陣の総間や堂そのものの総間と規模が類似する。

円通寺は重源によって鎌倉期に、中央間24尺程度、脇間14尺程度の方3間の規模をもつ宝形造の仏堂が立てられていた可能性が考えられる。そして、平面規模を踏襲しながら、内陣を3間に、側まわりを5間に割り付けて再構成したのが現在の本堂と考えられよう。

まとめ 円通寺本堂は大型の方5間堂で、簡素ながらも、整った意匠を備える。中央間以外は側柱と入側柱とで柱筋が一致しておらず、通常的身舎・廂の構成に比べ、内陣の周囲にめぐらされた外周部を大きくとる構成は特異で、重源によって建立された鎌倉時代の一間四面堂の形式が起源となった可能性がある。19世紀前期の大型仏堂として、また現存する別所建築として高い価値を有する。

(3) 庫裏及び会下 (PL.49～51)

構造形式 桁行 24.6 m、梁間 16.5 m、入母屋造、檜皮葺、東面に会下接続。会下南北棟：桁行 18.0 m、梁間 6.3 m、南面入母屋造、北面切妻造、銅板葺

建立年代 19世紀前期 (技法・意匠)

概要 円通寺庫裏は、円通寺境内の北部に位置し、南面する東西棟の大型の建物である。建立年代を示す明確な資料はないが、後述する通り、『紀伊名所図会』に現在とほぼ同じ姿が描かれることから、本堂とほぼ同時期の19世紀前期に建立されたものと考えられる。

側まわり 縁下に納まる規模の乱石積 (一部コンクリート) の基壇をもち、自然石の礎石ないしコンクリート製の基礎の上に土台を巡らし、角柱を立て、成の高い丸桁を受ける。軸部は、柱を敷居・鴨居を兼ねた半長押付きの縁長押・内法長押で固め、引違の明障子を入れる。土台と縁長押の間は縦格子もしくは横格子で閉塞する。屋根は入母屋造で現在は銅板葺だが、軒先に柿板が確認でき、かつては柿葺であったものの上に銅板を葺きかぶせているか、銅板

の葺下地に柿板を用いている可能性が考えられる。入母屋屋根の西妻壁を下見板張とし、東妻壁には狐格子を入れて蕪懸魚を吊る。軒は一軒半疎垂木である。

南面には東方に寄せて入母屋造の玄関を付設するが後補のものである。玄関は正面1間、側面2間で、切石礎石に唐戸面取角柱を立て、舟肘木を介して丸桁を受ける。正面と側面前方1間には地覆、半長押付きの内法長押で固め、小壁に連子窓を入れる。柱間装置は、正面に引違のガラス戸を入れ、側面は正面側1間は腰貫上を連子窓とし、その他は土壁とする。またこの玄関の東脇には旧玄関とみられる脇玄関が付けられている。

また、東面・北面には拡張部や増築部が取り付けられている。特に北面は下屋状に空間を拡張し、屋根は建物主体部の軒先をそのまま葺き下ろしている。

建立年代 建立年代を明確に示す資料はないが、虹梁形飛貫の絵様の様式や、天保9年(1838)の『紀伊国名所図会』に現在とほぼ同規模の姿が描かれることから、本堂とほぼ同時期、すなわち19世紀前期に建



図 642 円通寺庫裏西側面



図 643 円通寺庫裏背面

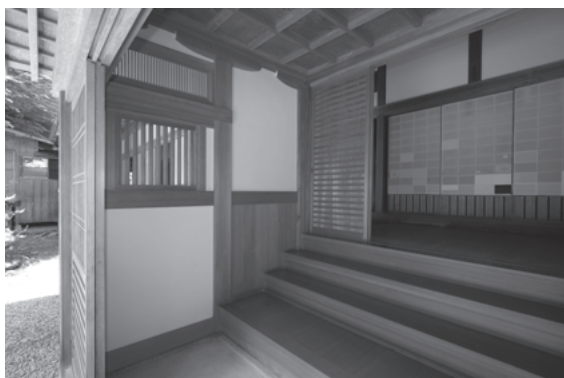


図 644 円通寺庫裏玄関



図 645 円通寺庫裏広縁

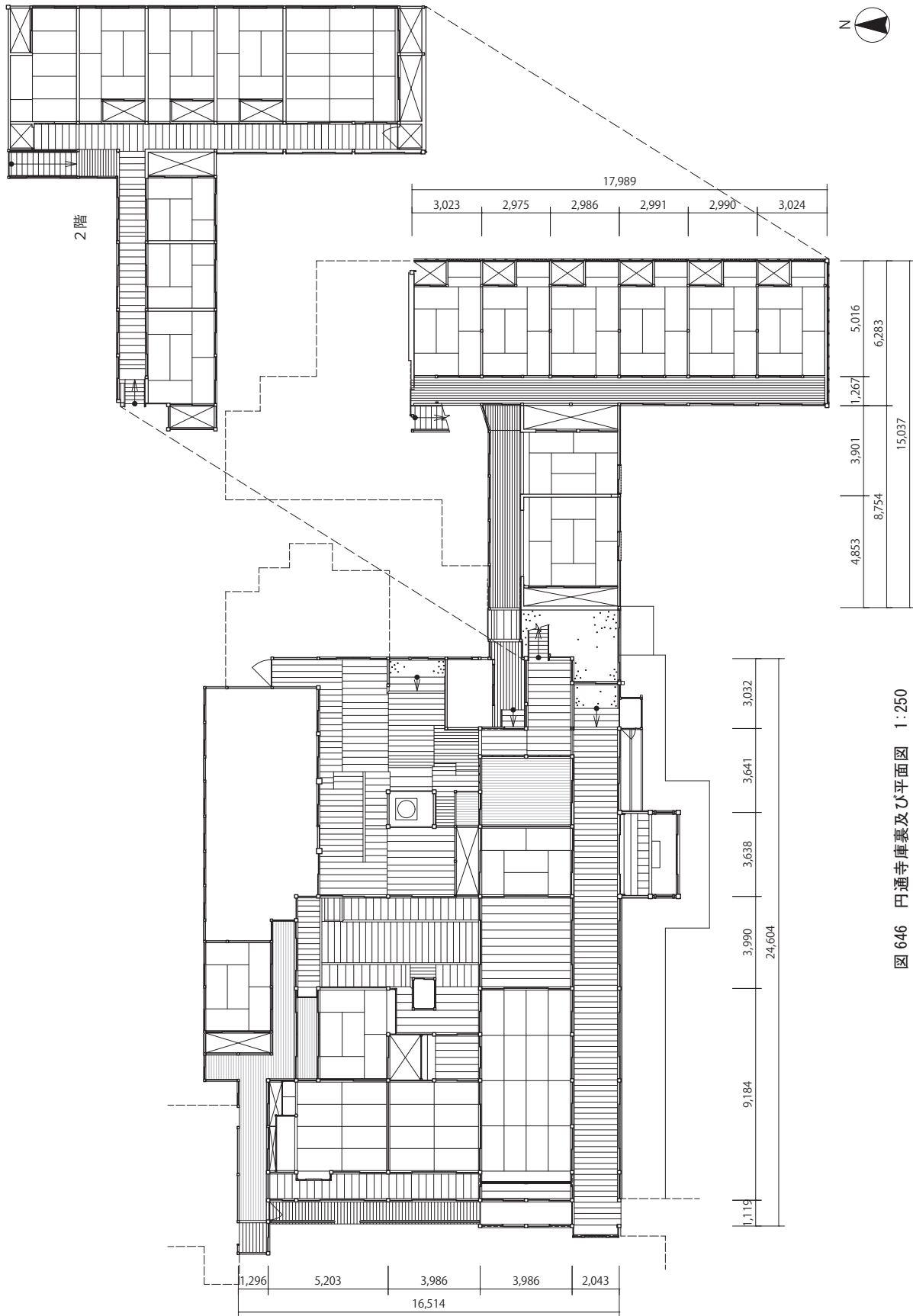


図 646 円通寺庫裏及びひ平面図 1:250



図 648 円通寺庫裏客殿部持仏間



図 649 円通寺庫裏庫裏部架構見上げ

立されたとみられる。文化10年(1813)成立の『高野山細見絵図』では、庫裏の位置に異なる配置の小建築を描かれており、この図が描かれた時期よりも建立年代が降る可能性がある。

平面と内部 円通寺庫裏の平面は、南に広縁をとり、西半を客殿、東半を台所とする構成をとる。以下では、便宜上それぞれを客殿部・庫裏部と呼称し、平面をみていきたい。

客殿部は、西南部に16畳敷の「デンジュシツ」(以下、伝授室とする)を配し、その東隣に「チュウモン」(以下、中門とする)とよばれる8畳の板間を配置する。伝授室の西端には押板をもうける。西寄りの北隣は二間続きの「シュエシヨ」(以下、集会所とする)がつづく。集会所は敷居・鴨居で上手と下手に区分



図 650 円通寺庫裏庫裏部

され、上手の北端に床と違棚、西北部に付書院を配する。鴨居上には菊花紋の欄間彫刻を入れるが、後補のものとみられる。伝授室及び集会所には畳を敷き詰め、天井は棹縁天井とする。集会所の西には広

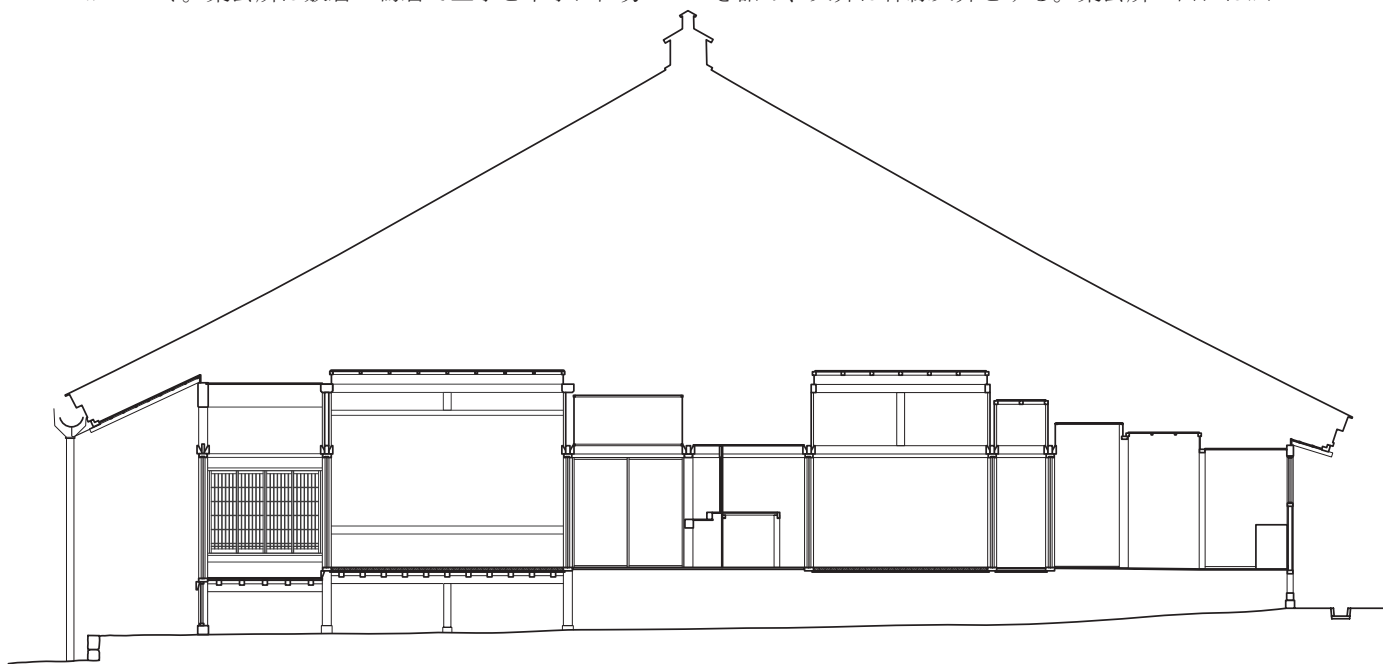


図 647 円通寺庫裏断面図 1:125

縁を配している。

集会所の下手の東隣、伝授室の北部には仏壇をもうけた「ジブツマ」（以下、持仏間）と呼ばれる板敷の仏間を配置し、その奥は眠蔵とする。その北には6畳の畳を敷き、棹縁天井を張った「ウラドウ」（以下、裏堂とする）あるいは「チゴノマ」と呼ばれ、受戒などに用いられる部屋をもうける。これらの部屋の東隣には、「ジキドウ」（以下、食堂とする）と呼ばれる大規模な板間をもうける。食堂の床は一部框を入れてその成の分高くする。現在その場所に円座・筵を敷いていることから、この場所是一種の座席とみていいだろう。その正面には座卓を配置している。また、食堂には土室を設ける。土室には、炉が切っており、上に煙道を設ける。東面を宮殿として大黒天を祀る。庫裏部に隣接し、食厨神でもある大黒天を祀り、複数人が並んで座る室礼がなされている。天井は棹縁天井。ほぼ中央に鴨居を入れるが、対応する敷居は確認できない。床も鴨居も当初の部材とみられるが、この状態では建具を入れることができず、この位置に鴨居がある理由は不明である。



図 651 円通寺庫裏客殿部集会所

食堂の南は先述した中門に通じている。その正面には虹梁形飛貫を入れる。

庫裏部はおもに南の6畳の部屋2室と、北の大規模な台所に区分できる。前者2室は事務所として使用される。台所は板張で天井を張らず、梁・桁をみせる。その中央やや西寄りに竈をもうけ、その上部には煙道を設けている。台所の西側は襖が入れられ、食堂に直接アプローチができるようになっている。

そのほか北部と東部には、数室の部屋を配するが、先述のようにこれらは近年後補されたものである。

庫裏の小屋はいずれも当初材とみとめられ、後補のものは認められない。

会下 会下は境内の東端、表門の北側に位置する。南北棟の建物に、庫裏に連絡する東西棟の建物を連結する（前者を南北棟、後者を東西棟と仮称する）。

南北棟は2階建の建物で、南は入母屋造、北は切妻造の金属板葺の屋根をもつ。軒は一軒疎垂木。コンクリート製基礎の上に土台を巡らして、角柱を立てる。ただし西面はコンクリート製の礎石に直接角柱を載せる。東面と南面は、1階部分を下見板張と



図 652 円通寺庫裏客殿部裏堂



図 653 円通寺庫裏虹梁形飛貫絵様



図 654 円通寺会下正側面

し2階の部分を実壁の漆喰壁とする。そして、1階の窓の外部には格子を入れ、上部に差し掛けの屋根を付ける。2階はそのままガラス窓を開ける。西面は全面に縦板を張り、1階にはガラスの引戸を、2階には腰壁を入れて、ガラス窓を開ける。北面1階には近年に建て増した増築部が下屋として取り付け、2階壁面には縦板を入れる。

東西棟も2階建の建物で、庫裏と南北棟を連結する。軒は一軒疎垂木で、屋根は金属板葺である。南面は自然石の礎石の上に角柱を立て、地覆長押で固める。柱上には成の高い桁を載せ、2階の柱を受ける。また壁面には縦板を入れ、ガラス窓を開き、1階にのみ窓外部に格子を入れる。

会下の平面と内部 南北棟の1階の平面は南北約3.0m、東西約5.0mの部屋を南北に6つ連ね、その西側に廊下を付した片廊下型の平面をもつ。各部屋には押入（後補）を設ける。2階は、基本的な構成は同じであるものの、各部屋の規模がやや異なる。南の2部屋が連結されて1部屋となり、南端は押入（後補）を設ける。その他の部屋の規模は基本的に同

じだが、1階と比べると押入の配置が異なっている（いずれも後補）。なお南北棟の北西隅には1階から2階に登る階段が付される。南北棟の天井・壁面・建具はいずれも後補のものである。

東西棟の2階は建物南に西から東西約4.0m×南北約3.0m、東西約3.0m×南北約3.0m、東西約4.0m×南北約3.0mの部屋西からこの順に連ね、その北側には廊下を付した片廊下型の平面をもつ。東端の部屋は押入（後補）が設けられる。西端には庫裏と連結する階段をもうける。1階は2階の平面を基本に改造されたものとみられ、2階と大幅に異なる。まず、西端を土間とし、南北方向に抜ける通路とし、庫裏に上がる勝手口をもうける。その東に東西約5.0m×南北約4.0mと東西約4.0m×南北約4.0mの部屋を西からこの順に配置し、さらに押入（後補）をもうける。その北側には廊下をもうけるが、南北棟との連結部は姑息な納まりとなる。西端部はそのまま庫裏と連結する。

当初平面の復原 会下は生活空間であるため、後世の改変が著しい。部材の痕跡や建物の平面の状況が



図 655 円通寺会下背側面



図 656 円通寺会下南北棟1階



図 657 円通寺会下1階庫裏接続部



図 658 円通寺会下南北棟1階

ら、かつての平面を復原してみたい。

まず南北棟は、1階の平面構成が基本となっていたとみられる。ただし、1階の西側柱と入側柱には風食差がみられ、廊下の床板は新しい。2階廊下の床板・側柱は当初材とみられることから、居室の西に廊下を配するという構成を当初から踏襲して、1階の西側柱と廊下床板を取り替えたものだろう。2階は1階の平面を基本として南端の2室を連結し、大部屋とした。また西北部に見られる階段まわりにはかつての南北棟の外壁とみられる縦板壁や窓の敷居が一部残るため、北側の下屋を増設した際の後補と考えられる。建立当初このような階段が設置されていた位置は不明であるが、現在、庫裏から東西棟の1階、2階のそれぞれに直接アプローチすることができる状態になっている。2階は旧状を留め、1階は現在の廊下を付した際の後補で、かつて土間から直接廊下に上がっていたと考えられる。つまり西北部の階段がなかったとしても問題はない。

東西棟は2階平面が比較的旧状を残し、廊下床板も当初材と認められる。1階は、2階の部屋と廊下



図 659 円通寺会下南北棟2階階段・廊下



図 660 円通寺会下東西棟2階廊下

に相当する空間を新たに2室の部屋として、北側に新たな廊下を下屋状に付したものとみられる。

よって当初の坊舎は、同形の部屋を南北に連れ、その西に廊下を付した2階建ての南北棟と、東西に複数の部屋を連結した北側に、廊下を付した東西棟を連結した、比較的単純なT字型の平面をとっていたと考えられる。そして、東西棟の1階・2階はそれぞれ直接庫裏に連結されていた可能性がある。

会下の建立年代 会下の建立年代を明確にする資料はないが、同規格の部屋が連続し、2階も居住空間として使うなど、近代和風建築の特徴が見られる。ここで、天保9年(1838)の『紀伊国名所図会』と明治28年(1895)頃成立の『高野山名刹誌』を見ると、前者では会下は描かれず、後者には表門の北側に会下が描かれ「寮舎」と注記される。この「寮舎」という記載は、明治24年(1891)の『高野山寺院明細帳』にも確認できる。よって、明治24年以前、明治前期に建てられていたものとみられる。

まとめ 円通寺庫裏は大規模な客殿建築であり、伝授室・集会所を中心とする客殿部と、台所を中心とする庫裏部に大別される構成をとる。玄関や拡張部などに後世の改変がみられるものの、小屋組の部材がほとんど取り換えられていないなど、保存状態も極めてよい。絵様や絵画資料から建築年代も推測され、19世紀前期と認められる。このように円通寺庫裏は保存状態の良い高野山の客殿建築として高い価値を有している。会下は後世の改変が著しいものの、近代和風建築の要素がみとめられ、絵画資料などからその建立年代がうかがえる。修行道場を構成する建築として、高い価値を有する。



図 661 円通寺会下東西棟2階

(4) 求聞持堂 (PL.52)

構造形式 間口 2.9 m、奥行 2.9 m、宝形造、銅板葺、正面 1 間向拝付

建立年代 19 世紀前期 (技法・意匠)

概要 求聞持堂は境内の西奥、本堂裏手の高台に、東面して建つ、宝形造、銅板葺で、正面向拝付の土蔵造の小規模な建物である。堂内では、虚空蔵求聞持法を修する。建立年代を示す明確な資料はないが、後述する通り『紀伊名所図会』に、現在の建物と同様の姿で描かれていることなどから、本堂などと同じく 19 世紀前期に建立されたものとする。

側まわり 基壇外装のない土壇の上に礎石を据えて角柱を立て、高床の小堂をつくり、柱と床上を漆喰で塗り籠める。側面中央の角柱には大梁を、それ以外には側桁を載せ、露盤・宝珠を上げた宝形造、銅板葺の屋根を支える。

主体部の外周に礎石を据えて土台を巡らし、2 段の貫で固めた角柱の軒支柱を立て、出桁を支える。出桁は主体部の側桁に近接し、一見すると構造上必要なようには見られない。あるいは、主体部の角柱上に載せられる側桁が荷重を負担しない化粧材で、軒先の荷重は主に出桁で受けているとも考えられる。同様の構造は金剛峯寺経蔵にも認められる。軒は一軒疎垂木である。

正面には 1 間の向拝をもうけ、3 級の木階をつける。木階の両脇には床高と同高に棚を付ける。

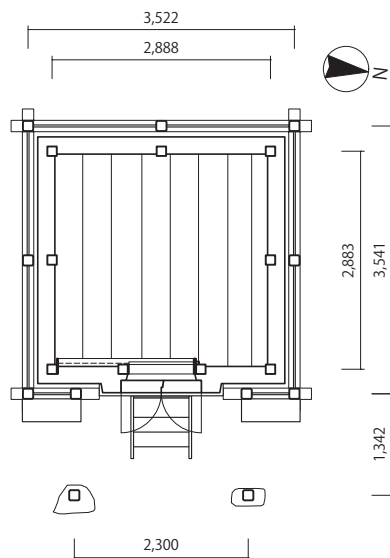


図 662 円通寺求聞持堂平面図 1:100

内部 高く張られた床は、拭板敷とする。壁には一面に縦板を張るが、南側面の上方にのみ、西に寄せて小さな窓を開き、引戸を入れる。狭い堂宇な上に、開口部がほとんどないため非常に閉鎖的な印象を受ける。造り付けの仏壇もなく、机案を置いた上に虚空蔵菩薩の絵像を安置する。そのほかには行灯や経机、礼盤、最小限の密教法具があるのみで荘厳具などは見受けられない。

天井は棹縁天井であり、大梁の上に張られるがその納まりは特徴的である。大梁の中央から 4 隅に向かって、隅木状の部材が伸び、その部材と側桁の間に棹縁が渡される。宝形造の屋根裏を意識したものであろうか。

堂内部には本尊の絵像のほか、求聞持法をおこなうための必要最低限の仏具のみを置く。加えて狭く、閉鎖的で、開口部は正面の扉を除いては 1 箇所小さい窓しかない。このことは、この堂が虚空蔵求聞持法という修法に特化した修行のための空間であることを窺わせる。

建立年代 求聞持堂の建立年代に関する直接の資料はなく、絵様や彫刻もなく建立年代を特定するのは難しい。しかし、天保 9 年 (1838) に成立した『紀伊国名所図会』には、現在の姿とほぼ変わらない形状で描かれていることから、この頃までは建立されていたとみられる。山門が 19 世紀前期の建立であることから、求聞持堂もこの頃に建てられたと考えて

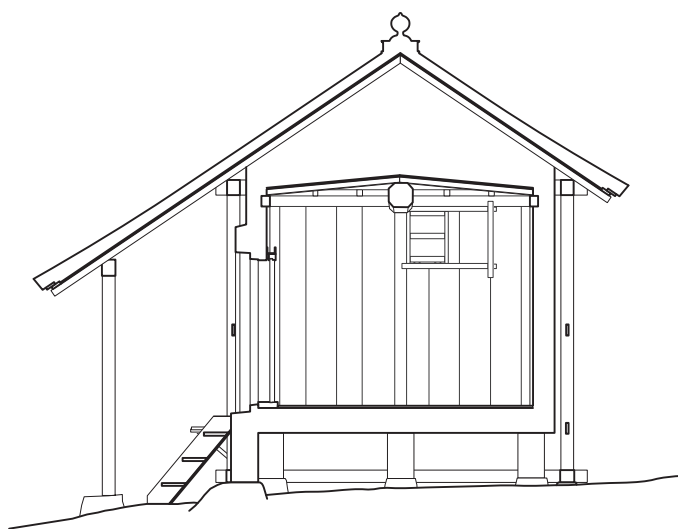


図 663 円通寺求聞持堂断面図 1:80

も技法・意匠の面で矛盾はない。

まとめ 求聞持堂は、閉鎖的な小堂で、虚空蔵求聞持法という真言密教に独特な修法に特化した空間といえる。このような堂宇は、高野山では他に確認できない。修行道場とされる円通寺の性格を象徴する貴重な建造物ということができよう。



図 664 円通寺求聞持堂背側面



図 665 円通寺求聞持堂軒見上げ



図 666 円通寺求聞持堂架構・天井見上げ

(5) 土蔵 (PL.53)

構造形式 桁行 7.9 m、梁間 4.9 m、寄棟造、銅板葺、正面前室付、桁行 2.5 m、梁間 3.3 m、妻入、入母屋造、銅板葺

建立年代 弘化4年(1847)(棟札)

概要と構造形式 土蔵は境内東南部に北面し、東西に棟を向けて建つ。寄棟造、銅板葺で置屋根形式の屋根を持ち、2階建、土蔵造で、正面には入母屋造の屋根をもつ前室をもうける。軒は一軒疎垂木。自然石を巡らした上に、コンクリートをかぶせた基壇上に建つ。軒は前室部も含め、一軒疎垂木である。

軸部は、南北面に9本、東西面に6本の角柱を2階まで立ちあげ、南北面の3・5・7本目の柱の上に、合計3本の大梁を直接載せる。大梁の上には短い束を立て、化粧棟木を受ける。化粧棟木には化粧隅木・化粧垂木が載せられ、傾斜の緩い寄棟造状に納まる。屋根形式を意識した納まりであろうか。同様に寄棟造状に納まる天井は、壇上伽藍御影堂宝庫に認められるが、宝庫の屋根形式は入母屋造である。なお、円通寺の求聞持堂の化粧屋根裏も屋根形式を意識した納まりとなっている。1階の天井は、柱に大入にした2階床を支える根太をそのまま化粧にして、根太天井とする。

前室は、土台を巡らして、6本の角柱を立て、側桁を受ける。柱同士は4箇所を貫で固める。正面には差鴨居を入れ、扉口としている。

内部・造作 1階の床は板敷床とし、壁面には縦板を打ち付ける。開口は、前室からの入口のほか、東西両側面に窓もうけ、内側に引戸と明障子を入れる。入口の正面には階段をもうけて2階に至る開口を開くが、この部分には引戸が入れられ、開口部を閉塞することができるようになっている。2階の開口部周辺には欄干が巡らされるが、新補である。

2階も1階と同様に、板敷床で、壁には縦板を張る。東西面以外に、正面の北面に2つの窓をもうけ、引戸・明障子を入れる。ちなみにこれらの窓には、土蔵造の建物によくみられる密閉できる漆喰塗の扉は付いておらず、もっぱら内側の板戸で閉塞する。これは主体部の入口も同様で、引戸と防火扉のみで閉塞する構造となっている。防火扉の新補で入口まわりは改修されているものの、当初から漆喰塗の扉

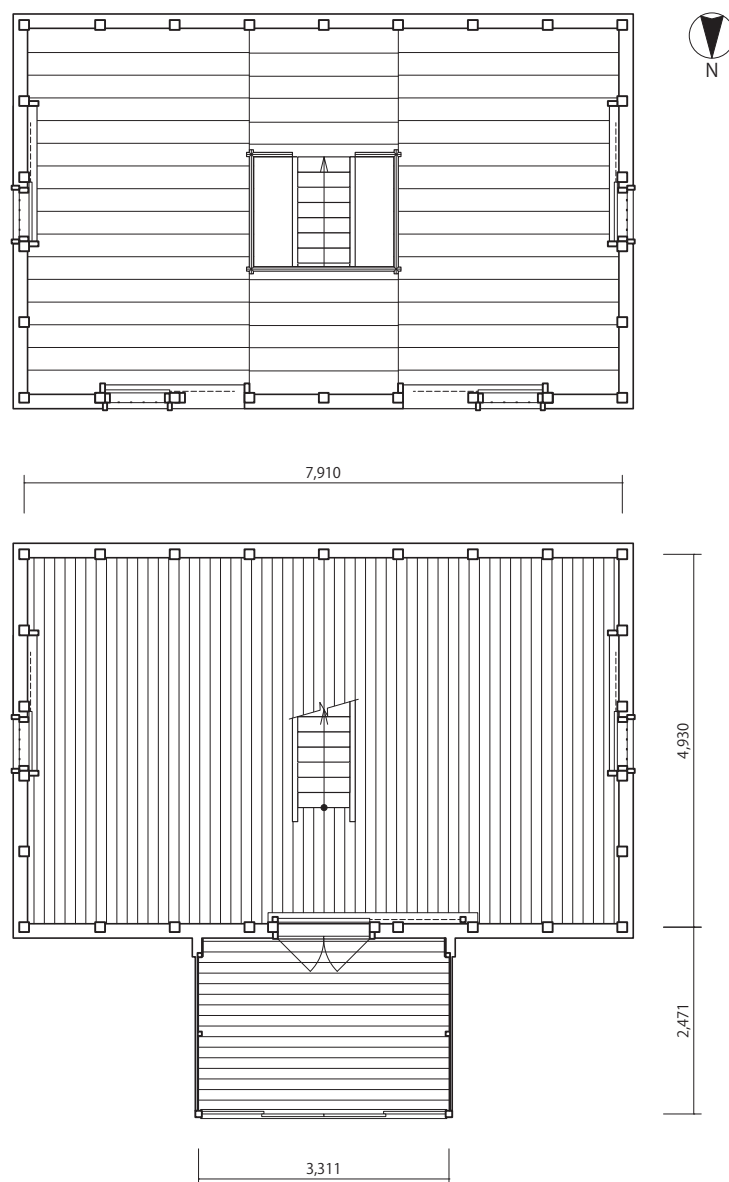


图 667 円通寺土蔵平面图 1:100



图 668 円通寺土蔵背側面



图 669 円通寺土蔵前室



図 670 円通寺土蔵断面図 1:80

はなかったとみられる。

前室も板敷床で、壁面には縦板を張る。天井は棹縁天井で、南北方向に棹縁を入れる。前室正面の扉口には4枚の板戸を引違とする。

建立年代・改修 2階中央の大梁に弘化4年(1847)の建立棟札が打ち付けられているのを確認した。絵画資料を確認すると、土蔵は、天保9年(1838)に成立した『紀伊国名所図会』には描かれていないが、明治28年(1895)頃成立の『高野山名刹誌』には描かれており(「上蔵」と注記される)棟札の年紀と矛盾はない。修理棟札は確認していないが、基壇外装にコンクリートが使われ、壁面基部には洗い出し仕上となることから、近年に外構の修理をおこなっていることは明らかである。また、前室まわりにも新材

が認められ、耐火扉が入れられている。

まとめ 円通寺土蔵は、シンプルな土蔵造の建物であるが、寄棟造の置屋根や、寄棟造状の化粧屋根裏、漆喰塗の扉を用いない開口部など、特徴的な要素が認められる。またその建立年代は棟札より明らかである。年代の明らかな高野山の土蔵建築として貴重な建造物である。



図 671 円通寺土蔵1階



図 672 円通寺土蔵2階

(6) 山門 (PL.54)

構造形式 上層 桁行3間、梁間2間、寄棟造、銅板葺

下層 桁行4.5m、梁間3.6m

建立年代 天保4年(1833)(棟札)

概要・構造形式 山門は境内の東に位置し、東面する寄棟造の楼門である。下層を漆喰で袴腰風に塗り籠めており、いわゆる竜宮造の形状をもつ。低い自然石の基壇の上に、土台をめぐらしその上に下層を建てる。棟通りに4本の柱を切石の礎石の上に立て、その柱間3間のうち中央間に棧唐戸、北端間に片開戸を吊り、扉口とする。中央間の礎石は唐居敷を兼ね、蹴放を入れている。

上層は桁行3間・梁行2間。円柱を木鼻付の頭貫で固め、繰形を施した台輪をめぐらし、その上に絵様実肘木付の出三斗を載せる。軒は一軒繁垂木。屋根はむくりの大きい寄棟造で、銅板を葺く。柱間装置は桁行中央間のみ端食付の板戸を吊り、それ以外は盲連子とする。4周には縁を巡らし、擬宝珠高欄をもうけ、桁行中央間の扉口の位置で切る。なお、上層正面中央間には「大乘円通律寺」と書かれた扁額を掛け、南北両脇には矩手に折れた袖塀を付す。

上層内部とその構造 山門上層には床が張られ、中央に梵鐘が吊られており、鐘楼として利用されたとみられる。同時に上層内部は化粧とならないため、外部と異なる納まりとなる。まず、内部の棟通りには側柱と筋を違えて2本の角柱を立て化粧棟木をうける。4隅を除く出三斗の位置には、内部では単に束が立てられ、直接側桁をうける。この側桁に化粧垂木を掛け、その尻や化粧隅木の尻は化粧棟木に納めている。

この化粧垂木・化粧隅木・化粧棟木の上に、小屋組が組まれる。側桁の上には束を載せ、その束と化粧棟木の上に野梁を渡す。野梁の上には

側桁の通りと、棟木・側桁の中間に、合計4本の枕木を渡し、束を立て、母屋を支える。また野梁の先端は側通りよりも外に出ており、その先端付近で出桁を支える。棟通りは、野梁に直接束を立てて野棟木を支える。小屋組はその間には貫を入れて固めている。

建立年代・改修 内部に天保4年(1833)の建立棟札と平成元年の修理棟札を確認した。よって、天保4年に現在の表門が創建され、平成元年に修理を受けたと考えられる。このことは天保9年(1838)に成立した『紀伊国名所図会』には現在の姿とほぼ変わらない形状で表門が描かれることとも整合する。一方で、文化10年(1813)の年紀がある「高野山細見絵図」にも、いわゆる竜宮造の形式の門が描かれる。現在の表門の建立年代は天保4年と考えられるか

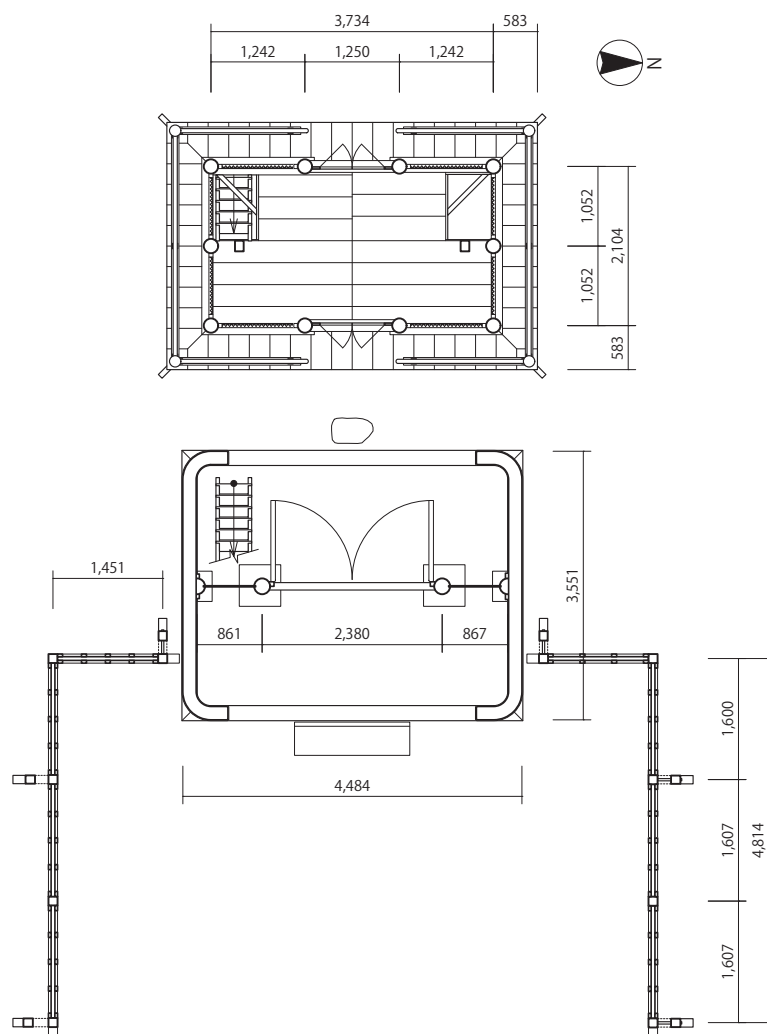


図 673 円通寺山門平面図 1:100

ら、「高野山細見絵図」に描かれる門は現在の山門の前身建物と考えられ、形式を踏襲していることがうかがえる。

また、袴腰風の下層の壁面下部には洗い出しがみられ、塗り直されたものとみられる。化粧垂木や小屋組の部材には取替材が認められる。屋根葺材も新しいものである。よって、平成元年の改修の内容は、下層の漆喰壁の塗り直しならびに屋根葺き替えであったとみられる。

まとめ 円通寺山門は、袴腰風の下層をもち、竜宮造とよばれる形状をもつ。また、棟札によってその建立年代は明らかで、絵画資料から前身建物の形式を踏襲したことがうかがえる。特徴的な外見をもつ年代の明らかな歴史的建造物として高い評価を有する。
(山崎有生)

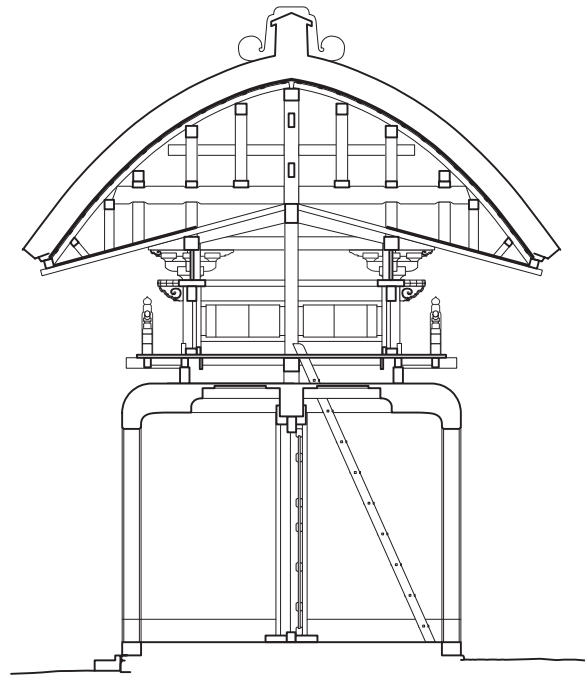


図 678 円通寺山門断面図 1:80



図 674 円通寺山門見上げ



図 675 円通寺山門上層



図 676 円通寺山門上層組物



図 677 円通寺山門頭貫木鼻